千葉県教育振興財団調査報告第751集

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書29

― 市原市久保堰ノ台遺跡１・２ ―

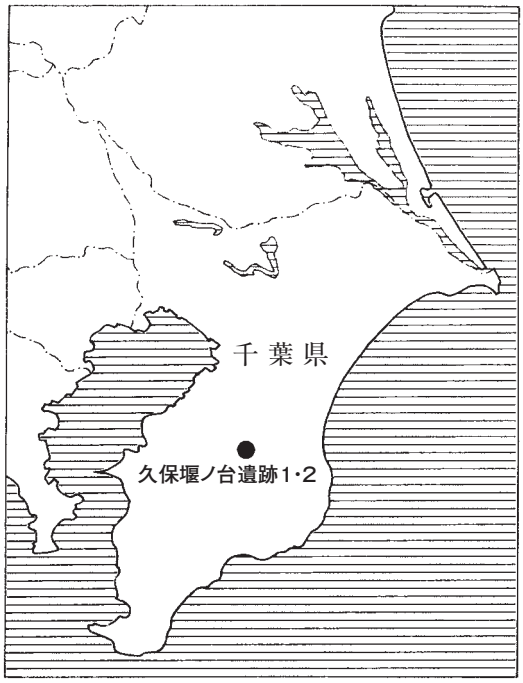
平成 28 年 3 月

国土交通省　関東地方整備局

公益財団法人　千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書29

―市原市久保堰ノ台遺跡１・２―



序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として、昭和49年に設立されて、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第751集として、国土交通省関東地方整備局の首都圏中央連絡自動車道建設事業関連に伴って実施した市原市久保堰ノ台遺跡１と久保堰ノ台遺跡２の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代中期から後期にかけての遺構・遺物が多量に検出され、この地域に暮らした人びとの歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成28年３月

公益財団法人　千葉県教育振興財団

理　事　長　堀　田　弘　文

凡　　例

1　本書は、国土交通省関東地方整備局による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県市原市久保字馬頭台48-1ほかに所在する久保堰ノ台遺跡１（遺跡コード219-094-1)、久保堰ノ台遺跡２（遺跡コード219-094-2）である。

3　発掘から報告書刊行に至る業務は、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆･編集は上席文化財主事古内茂が担当した。また、黒曜石の産地同定分析を株式会社パレオ･ラボに委託し、その結果を付章に掲載した。

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、国土交通省関東地方整備局及び市原市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地図は、下記のとおりである。

　　第１図　国土地理院発行　1/25,000

　　第２図　市原市発行　1/2,500

8　周辺地形の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和53年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。座標値は世界測地系による。

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の経緯と経過……1
　第２節　遺跡の位置と環境……2
第２章　調査の方法と概要……5
　第１節　調査の方法……5
　第２節　調査の概要……5
　第３節　基本層序……6
第３章　久保堰ノ台遺跡１……9
　第１節　住居跡……9
　第２節　小竪穴……15
　第３節　土坑……24
　第４節　溝状遺構……30
　第５節　遺構外出土遺物……35
第４章　久保堰ノ台遺跡２……37
　第１節　住居跡……37
　第２節　小竪穴……93
　第３節　土坑……114
　第４節　溝状遺構……140
　第５節　遺構外出土遺物……155
　　１　土器……155
　　２　土製品……162
　　３　石器……162
　　４　石製品……173
　第６節　遺構・遺物からみた久保堰ノ台遺跡……174
　　１　集落と土器群……174
　　２　石器群とその組成……174
　　３　石器製作跡と黒曜石……182
第５章　結語……183
付　章　黒曜石製石器の産地推定……184
報告書抄録……巻末

挿 図 目 次

第１図　久保堰ノ台遺跡と周辺の遺跡……３
第２図　久保堰ノ台遺跡の周辺地形……７
第３図　基本土層柱状図……８
第４図　久保堰ノ台遺跡１全体図……８
第５図　SI-001・002、SK-034……10
第６図　SI-001・002・007出土遺物……12
第７図　SI-006……14
第８図　SI-006出土遺物……15
第９図　SI-007、SK-028 ……16
第10図　SK-002・003・004・011・015・016・017-1・017-2・018……17
第11図　SK-021・029・033・036・045 ……18
第12図　SK-019・020・039・040・041・042・043・044・046・051・077……19
第13図　SK-010・026・027・030・031・032・035・037・050・058 ……20
第14図　SK-001・005・006・007・008・023・024・068・069・074・076……26
第15図　SK-049・052・053・054・055・056・060・061-1・061-2・062・063・067・075・078・085・086・089 ……27
第16図　SK-046・051・091・092・093・094・095……28
第17図　SK-087・097・100、SD-002・003 ……31
第18図　SK-001・002・003・005・006・011・015・016・018・019出土遺物 ……32
第19図　SK-020・022・027・028・029・031・032出土遺物……33
第20図　SK-033・036・037・039・040・042・044・045・049・054・055・058出土遺物……34
第21図　SK-062・067・070・071・074・077・085・086・087・091・095、遺構外出土遺物……36
第22図　久保堰ノ台遺跡２全体図(1)……38
第23図　久保堰ノ台遺跡２全体図(2)……39
第24図　SI-002・010 ……40
第25図　SI-002出土土器(1)……41
第26図　SI-002出土土器(2)……42
第27図　SI-002出土石器(1)……43
第28図　SI-002出土石器(2)……44
第29図　SI-003・出土遺物……46
第30図　SI-004……47
第31図　SI-004出土土器……49
第32図　SI-004出土石器(1)……50
第33図　SI-004出土石器(2)……51
第34図　SI-005・006・008・009・011・014(1) ……52
第35図　SI-005・006・008・009・011・014(2) ……53
第36図　SI-005出土土器(1)……55
第37図　SI-005出土土器(2)……56
第38図　SI-005出土石器……57
第39図　SI-006出土土器……59
第40図　SI-006出土遺物……60
第41図　SI-008出土土器(1)……62
第42図　SI-008出土土器(2)……63
第43図　SI-008出土土器(3)……64
第44図　SI-008出土石器(1)……65
第45図　SI-008出土石器(2)……66
第46図　SI-009出土遺物……68
第47図　SI-009出土石器……69
第48図　SI-010出土遺物……70
第49図　SI-011出土土器(1)……70
第50図　SI-011出土土器(2)……72
第51図　SI-011出土石器……73
第52図　SI-014出土土器(1)……75
第53図　SI-014出土土器(2)……76
第54図　SI-014出土石器(1)……77

第55図　SI-014出土石器(2)……78
第56図　SI-015・017 ……79
第57図　SI-015出土遺物……82
第58図　SI-015出土石器……83
第59図　SI-016・出土土器……84
第60図　SI-016出土遺物……85
第61図　SI-017出土遺物……86
第62図　SI-018……87
第63図　SI-018出土遺物……89
第64図　SI-019……90
第65図　SI-019出土遺物……91
第66図　SI-025・出土土器……92
第67図　SK-001・009・010・025・075 ……94
第68図　SK-001・010・025・075出土遺物……96
第69図　SK-025出土遺物 ……97
第70図　SK-115・120・121・210……98
第71図　SK-120・121出土遺物……99
第72図　SK-003・004・006・012・020・042・046・047・116・117・202・205…… 101
第73図　SK-116・117・202・205出土遺物…… 102
第74図　SK-221・231・275・307・308 …… 103
第75図　SK-221出土遺物 …… 104
第76図　SK-231出土遺物 …… 105
第77図　SK-275・308出土遺物…… 107
第78図　SK-307出土土器 …… 108
第79図　SK-307出土遺物 …… 109
第80図　SK-002・008・013・017・018・019・021・028・030・031・032 …… 110
第81図　SK-022-1・022-2・024・035・038・057・062・072・079・082・083・089・102・119 …… 111
第82図　SK-008・017・022・089出土遺物…… 112
第83図　SK-072・079・102・119出土遺物…… 115
第84図　SK-122・123・125・126・127・128・129・131・133・134・200・201…… 117
第85図　SK-203・204・206-1・206-2・207・208・209-1・209-2・211・212-1・212-2・212-3…… 118
第86図　SK-123・126・200・201・203・204・206-1・207・208・211出土遺物…… 119
第87図　SK-219・223-1・223-2・229・237・242・247・248・249・252・255・256・257・258 …… 121
第88図　SK-223・229・237・242・247・249出土遺物…… 122
第89図　SK-246・248出土遺物 …… 123
第90図　SK-244・246・259・262・264・265・266・269・270・271・273-1・273-2・273-3 …… 124
第91図　SK-276・277・278・280-1・280-2・282-1・282-2・282-3・282-4・282-5・283・285・286・288・299…… 126
第92図　SK-289-1・289-2・295-1・295-2・295-3・300-1・300-2・304・306・309・312・313・314・319・321 …… 127
第93図　SK-259・262・269・278・295・299・306出土遺物 …… 128
第94図　SK-309出土土器 …… 131
第95図　SK-309出土石器、SK-314出土遺物 … 132
第96図　SK-268・033・074・076・251・254・311、SH-128・129・508、SK-268出土土器 …… 134
第97図　SK-033・074・076・251・254・311、SH-128・508出土土器…… 135
第98図　SK-293出土遺物 …… 136
第99図　SD-002・004・005・006・007出土土器…… 141
第100図　SD-002・003出土石器、SD-004出土石器(1)…… 142
第101図　SD-004出土石器(2)…… 143

第102図　SD-005出土石器(1)…… 144
第103図　SD-005出土石器(2)、
　　SD-006出土石器…… 146
第104図　近世陶磁器 …… 154
第105図　遺構外出土土器（西地区１）…… 156
第106図　遺構外出土土器（西地区２）…… 157
第107図　遺構外出土土器（西地区３）…… 158
第108図　遺構外出土土器（東地区１）…… 159
第109図　遺構外出土土器（東地区２）…… 160
第110図　遺構外出土土器（東地区３）…… 161
第111図　遺構外出土土器（東地区４）、土製品… 163
第112図　遺構外出土石器(1) …… 164
第113図　遺構外出土石器(2) …… 165
第114図　遺構外出土石器(3) …… 166
第115図　遺構外出土石器(4) …… 167
第116図　遺構外出土石器(5) …… 168
第117図　遺構外出土石器(6) …… 169
第118図　遺構外出土石器(7) …… 170
第119図　遺構外出土石器(8) …… 171
第120図　遺構外出土石器(9) …… 172
第121図　遺構外出土石器(10) …… 173
第122図　石器集成図(1) …… 175
第123図　石器集成図(2) …… 177
第124図　石器集成図(3) …… 178
第125図　石器集成図(4) …… 180
第126図　石器集成図(5) …… 181

表　目　次

第１表　久保堰ノ台遺跡１発掘調査・
　　整理作業概要……1
第２表　久保堰ノ台遺跡２発掘調査・
　　整理作業概要……1
第３表　久保堰ノ台遺跡１小竪穴計測表……23
第４表　久保堰ノ台遺跡１土坑計測表……29
第５表　久保堰ノ台遺跡１出土石器一覧表……35
第６表　久保堰ノ台遺跡２小竪穴計測表…… 113
第７表　久保堰ノ台遺跡２土坑計測表…… 137
第８表　久保堰ノ台遺跡２出土石器一覧表…… 147
第９表　久保堰ノ台遺跡２出土陶磁器一覧表… 154

図 版 目 次

図版１　久保堰ノ台遺跡周辺の航空写真
図版２　１　調査前近景
　　２　３C-00グリッド周辺調査状況
　　３　４D区上層確認
　　４　４C区上層確認
図版３　１　SI-001・002調査状況
　　２　SI-002全景
　　３　４D-34・35グリッド周辺調査状況
図版４　１　４C・D区調査状況
　　２　SI-007全景
　　３　SI-002炉跡
　　４　SI-007炉跡
図版５　１　SK-015・017・018・019・020全景
　　２　SK-021全景
　　３　SK-029全景
　　４　SK-029遺物出土状況
　　５　SK-033遺物出土状況
　　６　SK-040遺物出土状況
　　７　SK-045遺物出土状況
　　８　SI-006埋設土器（炉跡）
　　９　SK-087遺物出土状況
　　10　SK-097全景
図版６　１　空撮１（遺跡西部全景）
　　２　空撮２（遺跡全景・西方から）

3　空撮３（４Ｊ区遺構検出状況）
図版７　1　基本土層（６P-64グリッド）
2　基本土層（５M-91グリッド）
3　ピット群検出状況（４R-42～46グリッド周辺）
図版８　1　SI-002全景
2　SI-002遺物出土状況
3　SI-003全景
図版９　1　SI-004遺物出土状況
2　SI-004炉跡
3　SI-004全景
図版10　1　SI-005遺物出土状況
2　SI-005埋設土器（炉跡）１
3　SI-005埋設土器（炉跡）２
4　SI-005埋設土器（炉跡）３
5　SI-006遺物出土状況
図版11　1　SI-008遺物出土状況
2　SI-008炉跡（配石）
3　SI-008全景
図版12　1　SI-006全景
2　SI-014遺物出土状況
3　SI-015遺物出土状況
4　SI-010全景、SI-002（右）
図版13　1　SI-016全景
2　SI-018全景
3　SI-019遺物出土状況
4　SI-025遺物出土状況
図版14　1　SK-001遺物出土状況
2　SK-012遺物出土状況
3　SK-022遺物出土状況
4　SK-022遺物出土状況
5　SK-022全景
6　SK-025遺物出土状況
7　SK-033遺物出土状況
8　SK-074遺物出土状況
図版15　1　SK-076遺物出土状況
2　SK-119遺物出土状況
3　SK-221全景
4　SK-231全景
5　SK-242全景
6　SK-248全景
7　SK-275調査状況
8　SK-275全景
図版16　1　SK-268遺物出土状況
2　SK-280全景
3　SK-307調査状況
4　SK-307遺物出土状況
5　SK-293調査状況
6　SK-308調査状況
7　SK-309遺物出土状況
8　SK-309全景
図版17　遺構出土土器（１）
図版18　遺構出土土器（２）
図版19　遺構出土土器（３）
図版20　遺構出土土器（４）
図版21　遺構出土石器（１）
図版22　久保堰ノ台遺跡１遺構外出土石器
久保堰ノ台遺跡２遺構出土土器（１）
図版23　遺構出土土器（２）
図版24　遺構出土土器（３）
図版25　遺構出土土器（４）
図版26　遺構出土土器（５）
図版27　遺構出土土器（６）
図版28　遺構出土土器（７）
図版29　遺構出土土器（８）
図版30　遺構出土土器（９）
図版31　遺構出土土器（10）
図版32　遺構出土土器（11）
図版33　遺構出土土器（12）
図版34　遺構出土土器（13）
図版35　遺構出土土器（14）
図版36　遺構出土土器（15）
図版37　遺構出土土器（16）
図版38　遺構出土土器（17）

図版39　遺構出土土器（18）
図版40　遺構出土土器（19）
図版41　遺構出土土器（20）、遺構外出土土器
図版42　遺構出土土器（21）
図版43　遺構出土土器（22）
図版44　遺構出土土器（23）
図版45　遺構出土土器（24）
図版46　遺構出土土器（25）
図版47　遺構出土土器（26）
図版48　遺構出土土器（27）
図版49　遺構出土土器（28）
図版50　遺構出土土器（29）
図版51　遺構出土土器（30）
図版52　遺構出土土器（31）
図版53　遺構出土土器（32）
図版54　遺構出土土器（33）
図版55　遺構出土土器（34）
図版56　遺構外出土土器（西地区１）
図版57　遺構外出土土器（西地区２）
図版58　遺構外出土土器（西地区３）
図版59　遺構外出土土器（東地区１）
図版60　遺構外出土土器（東地区２）
図版61　遺構外出土土器（東地区３）
図版62　遺構外出土土器（東地区４）
　　遺構外出土土製品
図版63　近世陶磁器
　　遺構出土石器（１）
図版64　遺構出土石器（２）
図版65　遺構出土石器（３）
図版66　遺構出土石器（４）
図版67　遺構出土石器（５）
図版68　遺構出土石器（６）
図版69　遺構出土石器（７）
図版70　遺構出土石器（８）
図版71　遺構出土石器（９）
図版72　遺構出土石器（10）
図版73　遺構出土石器（11）
図版74　遺構出土石器（12）
図版75　遺構外出土石器（１）－表
　　遺構外出土石器（１）－裏
図版76　遺構外出土石器（２）－表
　　遺構外出土石器（２）－裏
図版77　遺構外出土石器（３）－表
　　遺構外出土石器（３）－裏
図版78　遺構外出土石器（４）－表
　　遺構外出土石器（４）－裏
図版79　遺構外出土石器（５）
図版80　遺構外出土石器（６）
図版81　遺構外出土石器（７）
図版82　遺構外出土石器（８）、石製品

付　　章

久保堰ノ台遺跡１
図１　黒曜石産地分布図（東日本）…… 185
図２　黒曜石産地推定判別図（１）…… 187
図３　黒曜石産地推定判別図（２）…… 187
久保堰ノ台遺跡２
図４　黒曜石産地分布図（東日本）…… 189
図５　黒曜石産地推定判別図（１）…… 192
図６　黒曜石産地推定判別図（２）…… 192
久保堰ノ台遺跡１
表１　分析対象…… 184
表２　黒曜石産地（東日本）の判別群名称… 184
表３　測定値および産地推定結果…… 185
久保堰ノ台遺跡２
表４　分析対象…… 188
表５　黒曜石産地（東日本）の判別群名称… 189
表６　測定値および産地推定結果…… 190

表７　石器種類別の産地推定結果…… 191
表８　出土遺構別の産地推定結果…… 191

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯と経過

公益財団法人千葉県教育振興財団は、首都圏中央連絡自動車道建設事業関連に伴う埋蔵文化財調査を平成19年度から継続して実施してきており、既に本事業に関する調査報告書も28冊を刊行している。このたび報告する遺跡は、市原市久保字馬頭台に所在する久保堰ノ台遺跡となる。なお、本遺跡は小湊鉄道の敷設により分断されているため、便宜的に年度当初に調査した鉄道部分から西側を久保堰ノ台遺跡１とし、次いで調査した東側部分を久保堰ノ台遺跡２と命名して調査を実施してきた。そのため本報告では調査に基づいて久保堰ノ台遺跡を分離し、久保堰ノ台遺跡１、久保堰ノ台遺跡２として報告することとした。

以下、第１表及び第２表に発掘調査の開始から報告書刊行に至るまでの経緯と各年度の調査内容及び担当者を明記した。

第１表　久保堰ノ台遺跡１発掘調査・整理作業概要

調査年度	遺跡名・所在地	発掘調査・整理内容	期　間	調査（研究）部長	課　長（所長・班長）	担当者
平成23年	久保堰ノ台遺跡１ 市原市久保字馬頭台48-1 ほか	確認調査 上層　395/4,000㎡ 確認調査 下層　28/4,000㎡ 本調査 上層　1,250㎡	4/11～6/22	及川淳一	白井久美子	相京邦彦
平成26年		水洗・注記～実測・拓本・トレースの一部 トレースの一部～原稿執筆・編集	4/1～5/16 10/1～11/28	伊藤智樹	今泉　潔	古内　茂
平成27年		編集の一部・印刷・刊行		－	岸本雅人	井上哲朗

第２表　久保堰ノ台遺跡２発掘調査・整理作業概要

調査年度	遺跡名・所在地	発掘調査・整理内容	期　間	調査（研究）部長	課　長（所長・班長）	担当者
平成23年	久保堰ノ台遺跡２ 市原市久保字馬頭台46-1 ほか	確認調査 上層　950/9,500㎡ 本調査 上層　6,500㎡	7/20～12/12	及川淳一	白井久美子	相京邦彦 加藤正信 鵜沢正則 加納　実 宮　重行
平成24年		水洗･注記～ 実測･拓本の一部	4/6～3/21	関口達彦	高田　博	森本和男 山口典子
平成25年		接合・実測の一部～ 原稿執筆・編集の一部	6/1～3/31	伊藤智樹	白井久美子	古内　茂 小高春雄
平成26年		挿図・図版作成の一部～ 原稿執筆・編集の一部	5/19～9/30	伊藤智樹	今泉　潔	古内　茂
平成27年		編集の一部・印刷・刊行		－	岸本雅人	井上哲朗

第２節　遺跡の位置と環境

今回報告する久保堰ノ台遺跡は古くから知られていた遺跡[1)]である。房総半島のほぼ中央部に位置し清澄山の東北部にあたる麻綿原高原（夷隅郡大多喜町）に水源が認められる養老川によって形成された標高55m～56mの段丘部分に営まれた縄文時代の遺跡である。遺跡の所在する養老川中流域では山間部を蛇行しながら東京湾に向かって流れているため、河川によって形成された河岸段丘面では古くから人びとの生活した痕跡が遺跡として多数残されてきた。また、本遺跡から南を遠望すると高滝ダムによって堰き止められた養老川は、人造湖である「高滝湖」を出現させた。そのため高滝湖を中心に周辺の自然環境は一変し、いまでは風光明媚な景観へと変貌を遂げている。

次に報告する久保堰ノ台遺跡を含めて周辺に所在する遺跡を概観してみたい。

まず、本事業関連で調査された縄文時代の遺跡についてみると、隣接する緑岡古墳群（３）では古墳の封土下や周囲から中期から後期にかけての住居跡や貯蔵穴、土坑といった遺構が検出されている。さらに東に位置する大和田横穴群（４）では、台地部分から早期末葉の土器群が出土し、山小川（やまこがわ）遺跡（白井ほか2009、森本2012）では後期の集落跡が調査されている。また遺跡分布地図[2)]によると、林遺跡（15）、大口遺跡（16）、愛宕遺跡（17）や中ノ台遺跡（19）などでも縄文時代の遺物散布がみられるという。なお、本遺跡では過去に土偶も発見[3)]され、宍倉昭一郎氏によって地元の『南総郷土文化研究会誌』に紹介されている。

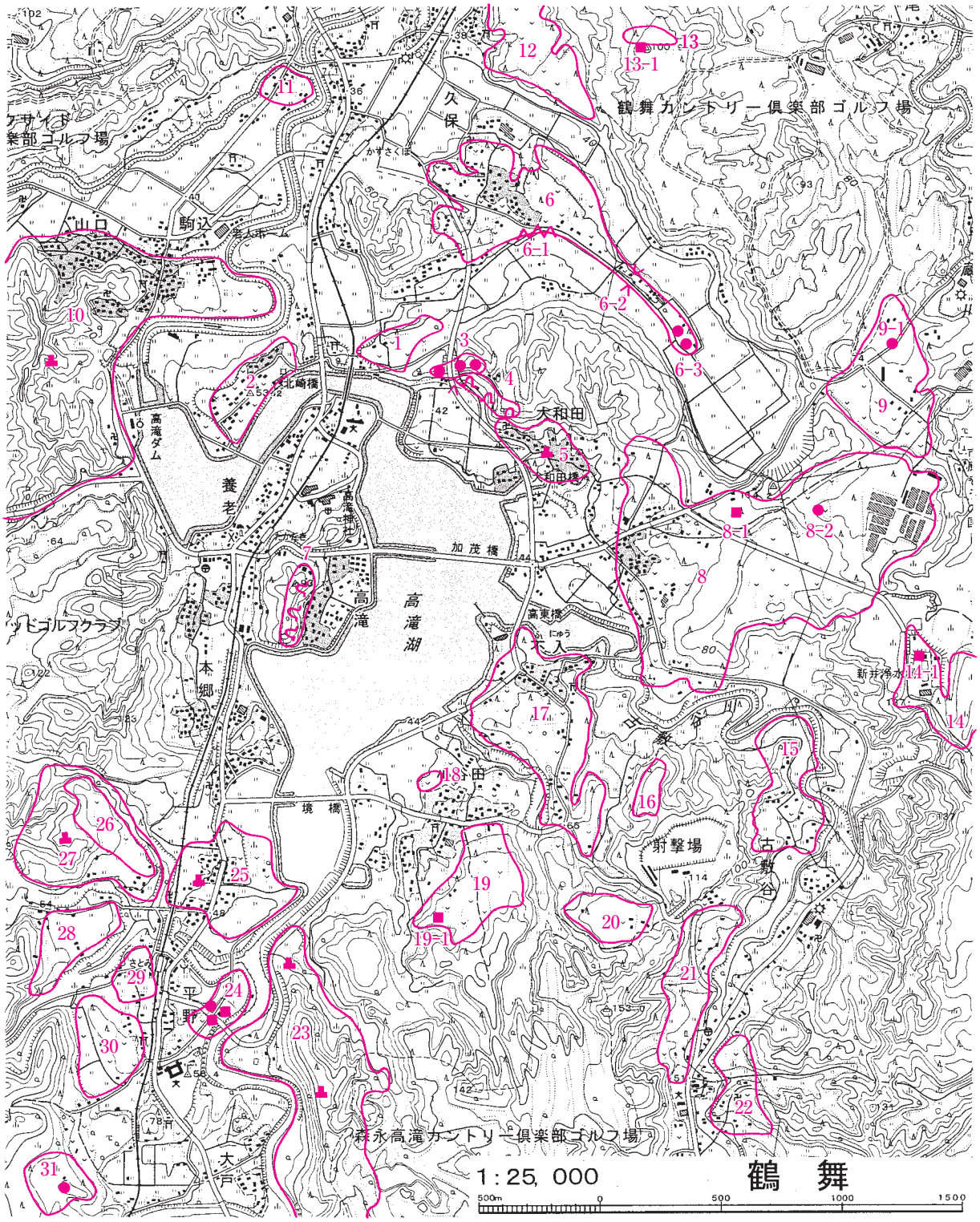
弥生時代では本事業でもその一部が調査（森本2013）された番後台遺跡（２）は、既に昭和54・55年に調査（藤崎1982）され、中期の集落跡、当時としては貴重な鉄製品（鉄斧）が出土し注目を浴びた。また小谷田八木遺跡（18）も同時期の遺跡として知られている。さらに図示はできなかったが江子田古墳群の一部である江子田上原台遺跡(南総中遺跡)（南総中遺跡調査団1978）も古墳群とともに中期に出現する方形周溝墓群の存在が確認された著名な遺跡である。

古墳時代では本事業関連で調査された緑岡古墳群（３）や柏野１号墳（白井ほか2014)、山小川1号墳（白井2009）などの円墳がある。さらに東へ1.2kmには大和田新谷古墳群（6-3）が存在する。また南に2.7kmの地点には皿郷田茂古墳群（24）がみられる。一方、山間部の傾斜地を利用した横穴墓群では大和田横穴群（４)、宮原横穴群（７）などが知られている。

次いで奈良・平安時代に入ると、各地で窯を構築して須恵器等の日常什器の生産が活発となる。周辺では本遺跡から数百m北に位置する永田（6-1）・不入（ふにゅう）（6-2）窯跡群は房総を代表する須恵器生産窯として評価されている。不入遺跡（６）は須恵器生産に携わる工人たちの生活の場であったものと思われる。

中世になると、険しい山間部やその傾斜地を巧みに利用して小規模な城館が出現する。北へ２kmに御園生館跡や明光寺館跡、陣馬台砦跡、南には大羽根城跡（23)、本郷堀ノ内館跡（25)、本郷明金城跡（27)、西には本事業で調査された山口城跡（10）と高滝湖を取り囲むように城館跡が構築されている。

このように時代を追って遺跡の変遷をみてくると、縄文時代から各時代を通して人びとは養老川によって形成された河岸段丘に居を構えてきたことが理解できる。ただ居住空間を限られた段丘上に求めたためか集落が継続しつつその規模を拡大していくといったような集落構成までには至らなかったものと考えられる。



1．久保堰ノ台遺跡１・２　2．番後台遺跡　3．緑岡古墳群　4．大和田横穴群　5．高滝陣屋跡
6．不入遺跡（6-1 永田窯跡、6-2 不入窯跡、6-3 大和田新谷古墳群）　7．宮原横穴群　8．柏野遺跡（8-1 神山塚、8-2 柏野１号墳）
9．山小川遺跡(9-1 山小川１号墳)　10. 山口城跡　11. 下駒込遺跡　12. 久保北新畑遺跡　13. 田尻久保台遺跡(13-1 長塚台三山塚)
14. 花和田遺跡（14-1 花和田三山塚）　15. 林遺跡　16. 大口遺跡　17. 愛宕遺跡　18. 小谷田八木遺跡
19. 中ノ台遺跡（19-1 中ノ台行人塚）　20. 作尻遺跡　21. 下根遺跡　22. 新井代遺跡　23. 大羽根遺跡　24. 皿郷田茂古墳群
25. 本郷堀ノ内館跡　26. 沢ノ上遺跡　27. 本郷明金城跡　28. 田野々遺跡　29. 堂ノ前遺跡　30. 上平野遺跡　31. 高野遺跡

第１図　久保堰ノ台遺跡と周辺の遺跡

注１　本遺跡は昭和39年に藤原文夫氏によって『南総郷土文化研究会誌』第３号で「永田雑記」として記載された中で「古代の遺跡と遺物」の項にみられる。そこには遺跡の時期として加曽利Ｅ式・堀之内式の型式名が記されている。

２　千葉県教育委員会1999『千葉県埋蔵文化財分布地図⑶－千葉市・市原市・長生地区（改訂版）－』による。

３　宍倉昭一郎氏は『南総郷土文化研究会誌』第６号に「養老川中流域発見の土偶」というタイトルの中で本遺跡から採集した土偶を紹介している。

参考文献

藤原文夫1964「永田雑記」『南総郷土文化研究会誌』第３号　南総郷土文化研究会

宍倉昭一郎1968「養老川中流域発見の土偶」『南総郷土文化研究会誌』第６号　南総郷土文化研究会

南総中学遺跡調査団編1978『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会

藤崎芳樹1982『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』㈶千葉県文化財センター

白井久美子ほか2009『市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡』㈶千葉県教育振興財団

森本和男ほか2012『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書15　－市原市竹ノ下遺跡・関尻遺跡・山小川遺跡、長南町田宿川間遺跡－』㈶千葉県教育振興財団

森本和男2013『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書21　－市原市番後台遺跡・山口城跡・大和田遺跡群－』（公財）千葉県教育振興財団

白井久美子ほか2014『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書22　－市原市柏野遺跡－』（公財）千葉県教育振興財団

第２章　調査の方法と概要

第１節　調査の方法

遺跡の発掘調査に当たり、対象範囲を覆う方眼網からグリッドを設定した。方眼網は世界測地系に基づいて設定し、基点をＸ＝－70.900、Ｙ＝29.020とした。そこから東に向かって20mごとにアルファベットでＡ・Ｂ・Ｃ・・と付し、南へは算用数字で１・２・３・・とし、これを組合せ大グリッド名として、さらに大グリッドの中を２ｍ方眼の小グリッドで100分割した。基点は北西隅が１A-00となり、各大グリッドの南東隅が99になる。

本遺跡は現存する地形から尾根状に東西へ延びた台地に形成されていたものである。だが、小湊鉄道の敷設時に南北に分断されてしまった。このため調査は線路を境界として１次、２次と二回にわたって実施されることになった。その１次分が久保堰ノ台遺跡１であり、２次分が久保堰ノ台遺跡２として今回報告することとなった。

前述したように遺跡は道路建設事業に先行して調査したものであり、工事に伴う掘削幅は約30m～60mとなり、その間を調査対象としたものである。遺跡の内容については前述の報告や分布調査等の記載から縄文時代中期から後期に属する遺構･遺物が主体となることが予想された。また本事業の関連で久保堰ノ台遺跡１の道路を挟んだ西には平成17・18年度に調査された番後台遺跡があり、ここでも若干ながら縄文時代中期の土器片と小竪穴・土坑等が検出されている。そのため当該時期の遺構・遺物の出土を念頭において調査を進捗させていくことにした。

以下、簡単に調査の方法を記載しておきたい。

調査は事業者からの要請により、久保堰ノ台遺跡１から開始された。線状の調査となるため、まず遺跡の概要を把握することを目的として事業地内に幅２ｍ、長さ10mのトレンチを設定し、重機により表土層を排土した。その後、遺物の出土量や遺構の存在が想定される部分については、本調査に切り替えて作業を進めていくことにした。そして遺物の出土地点を正確に把握するためにトレンチ方式からグリッド方式に変えて記録するような調査方法を採用した。上層(縄文時代以降）の調査が終了すると、下層の調査に移行した。しかし、周辺一帯での堆積土を観察すると下総台地とは異なる堆積土となり明確な関東ローム層が確認できない堆積状況であった。しかも表土層と縄文土器包含層において旧石器時代に属する石器群が検出されることはなかった。そのため下層については28㎡の確認調査をもって終了とした。

次いで久保堰ノ台遺跡２についてみると、基本的には久保堰ノ台遺跡１と同様な手順を踏襲して調査を進捗させていった。しかも住居跡等の遺構が多数検出されたため慎重に調査を継続することとなった。ただ、下層の調査については、久保堰ノ台遺跡１と同様であったためため省略した。

第２節　調査の概要

久保堰ノ台遺跡１・久保堰ノ台遺跡２の両遺跡は個別に調査したものであるが、前述したように現況からは小湊鉄道の敷設により分断されたもので、第３章以下は遺跡を調査の手順通り分割したが、ここでは同一遺跡としての視点で記載しておきたい。

遺跡は、まずトレンチ方式により調査がすすめられ、遺構が密に分布することが判明した久保堰ノ台遺跡１と久保堰ノ台遺跡２の中央部分を除きグリッド方式に切り替えて調査を進捗させていった。久保堰ノ台遺跡１は大グリッドの３D区から住居跡が検出され、周辺では小竪穴や土坑等がみられた。だが東よりの小湊鉄道に接した部分での遺構分布は疎らなものとなっている。住居跡からは縄文中期の加曽利Ｅ式土器が出土しているが、総体的に遺物の出土量は少なかった。一方、久保堰ノ台遺跡２は４Ｊ区を中心とした調査区西側で住居跡が集中的に検出され、中央部分は空白地帯となり、東側では若干の小竪穴と多数の土坑が検出された。空白地帯となった４・５Ｌ～Ｎ区では遺物包含層となっている第Ⅱ層でも遺物出土量は明らかに僅少であったため当初から遺構は存在していなかったものと思われた。なお、４D区から５D区にかけて試掘状に４ｍ×４ｍを排土し記録したが、周囲の地盤は軟弱であったため傾斜にかかる部分は無理に調査はしなかった。

また、本事業での関連遺跡として調査された番後台遺跡は道路を挟んで西に近接して位置する。だが調査報告をみると、縄文時代では中期の土器片と数点の石器が出土しているのみである。調査結果から本遺跡でみられた縄文中期の集落はそれほど大きなものではなかったと理解できよう。

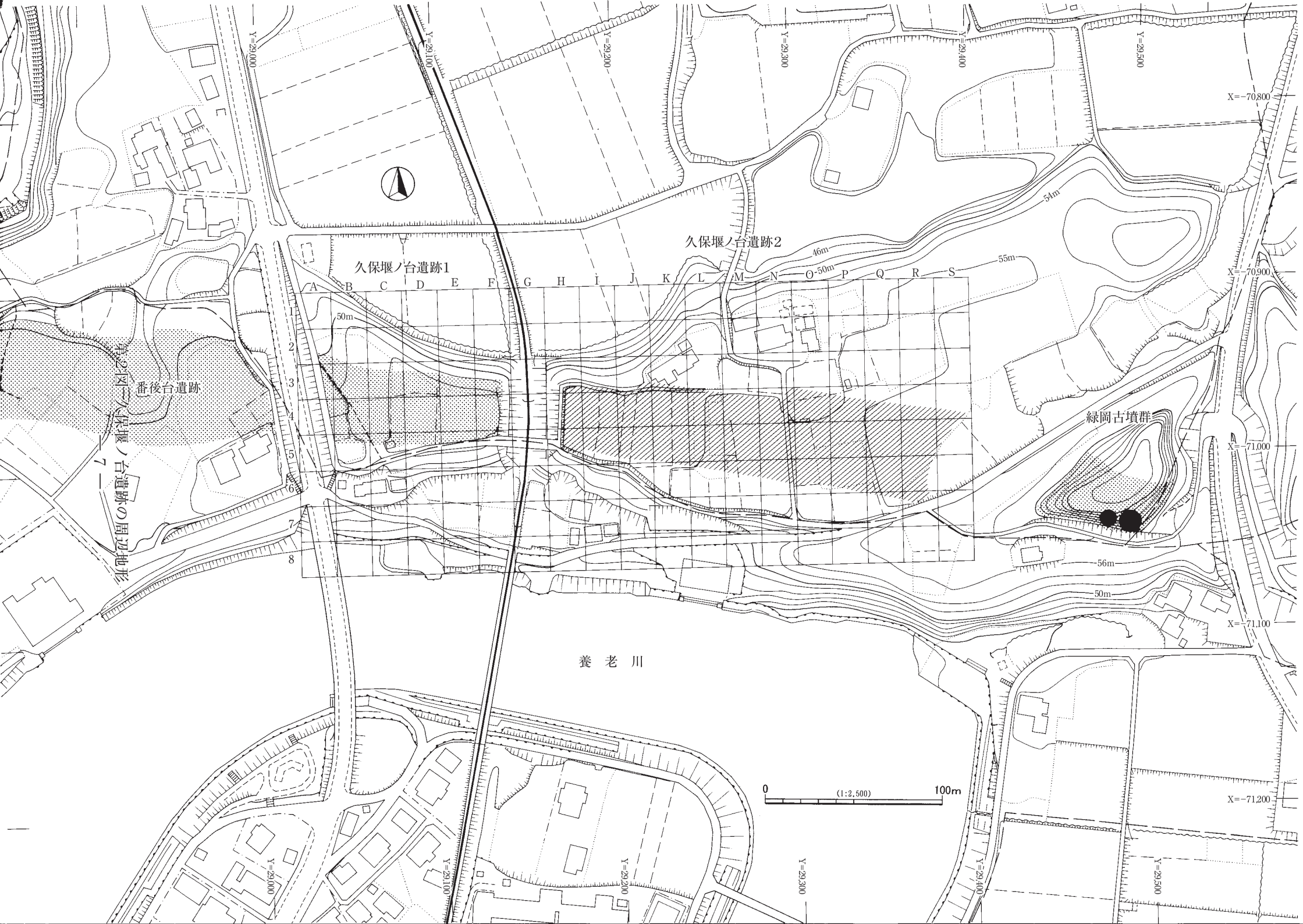
次に、検出された遺構・遺物の概要について触れておきたい。住居跡についてみると、その掘り込みは浅く、後述するように炉跡の検出をもって住居跡の存在を把握するといったような事例が認められた。その点小竪穴は掘り込みがより深いため住居跡よりも容易に検出できたものの、後世の開墾等でかなり深くまで人為的な削平が及んでいた。

遺物についてみると、住居跡の重複した４Ｊ区では土器・石器ともに豊富な出土量を示した。土器は中期の加曽利E式以降の時期で占められており、後期の加曽利B式まで確実に継続していたようである。その後、安行Ｉ式以降の土器はほとんどみることができないため、人びとの活動は急速に衰退していったものと考えられる。石器についてみると、４Ｊ区を中心に多くみられた。これを器種別にみると、とりわけ印象的な事例として破損した石鏃の多さを指摘できる。微細な剥片は観察できなかったが４Ｊ区周辺では石鏃等の石器製作が行われていたものであろう。加えて目立つ器種が楔形石器である。楔形石器は旧石器時代に普遍的にみられる器種であるが、本遺跡では旧石器時代の遺物が集中的に出土している場所がないため、縄文時代中期以後の所産と考えることが妥当といえよう。この楔形石器は製作途中の半成品なども出土しているため遺跡内で製作していたことは容易に想像できる。さらに打製石斧の側面を剥離したような剥片も出土しており、日常的に使用する石器はこの地で作られていたと考えてよさそうである。

さて、ここで遺構・遺物以外での特筆できる事例として土器表面の剥落をあげることができる。一般的に台地上から出土した土器の表裏面は鮮明な形で文様を残しているものである。だが、本遺跡での出土土器は表裏面の剥落が著しく、文様としての縄文等は痕跡を残すほどで図示不可能な大型片がしばしばみられた。これらの土器の表面を観察すると粘性に富む土がこびり付くように付着している。この粘性に富む土は後述する第Ⅱ層（土器包含層）である黒褐色土に起因している。また溝が数か所にみられ、溝に伴うとみられる中・近世陶磁器も出土している。しかし溝以外から出土した陶磁器も存在していたため、これらの陶磁器類は溝状遺構の関連遺物として扱うことにした。

第３節　基本層序

本遺跡における基本層序として久保堰ノ台遺跡２でみられた３か所の層位を図示しておきたい。図では西から５K-80、５M-91、６P-64グリッドの順に配置した。前述したように、ここでの堆積土には県内



第2図 久保堰ノ台遺跡の周辺地形

の台地で広範にみられる立川ローム層を明確に確認することはできなかった。遺物包含層は第Ⅱ層となるが、次の第Ⅲ層では下末吉ロームが混入した層へと変化する。

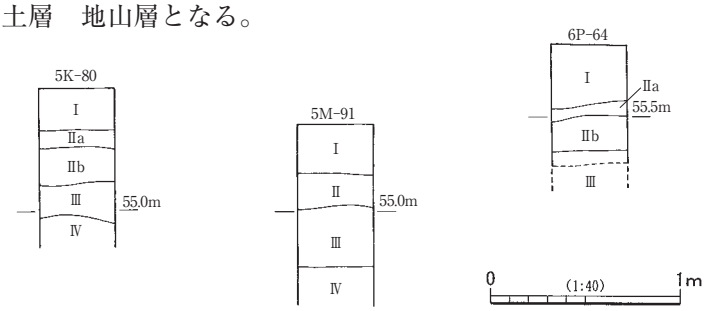
本遺跡の堆積土を大きく分離すると以下のとおりとなる。

第Ⅰ層　暗褐色土　表土（耕作土）。30cm～50cmの層厚である。

第Ⅱ層　黒褐色土　粘性が強く、よく締まっている。遺物包含層となっている。場所によっては色調から暗褐色と黒褐色に分離できる場所もみられた。30cm～40cmの層厚である。本層は縄文時代の遺物包含層となっているが、粘性の強さという点を考えると自然な堆積ではなく人為的な堆積土とも考えられる。

第Ⅲ層　褐色土　場所によっては白色や黄褐色の粘土層を混入する。20cm～30cmの層厚を維持している。白色粘土層の堆積も部分的にみられる。全体としてはいわゆる下末吉ロームと立川ロームの混入層と考えられる。

第Ⅳ層　黄褐色砂質土層　地山層となる。



第３図　基本土層柱状図

第４図　久保堰ノ台遺跡１全体図

第３章　久保堰ノ台遺跡１

本遺跡は尾根状を呈した台地に立地していることと既設の道路や鉄道によって分断されているため発掘調査の可能な台地部分4,000㎡を調査対称として遺構確認のための調査を実施した。その結果、遺構の存在が想定できる1,250㎡について本調査を実施することとした。前節でも触れたとおり遺跡を覆う表土層は粘性土を含んでおり排土には予想以上の労力を費やした。表土層を除去すると各所で人為的な落ち込みが認められ３Ｃ区と３Ｄ区では円形を呈した住居跡の痕跡が確認できた。さらに、その周囲を囲むように小竪穴状の遺構や土坑が多数存在していることが判明した。遺構の分布についてみると、住居跡の存在する西側に多くみられ、東へ移行するに従って希薄となるような傾向を示していた。また４Ｆ区では植物根等の痕跡はみられても明らかに遺構としての掘り込み等を確認することはできなかった。

表土を除去した後、随時各遺構の調査にあたることとした。その結果、本遺跡では住居跡４軒、小竪穴32基、土坑約100基、溝状遺構を数条検出することができた。また、本遺跡では遺構の覆土が薄いことや整理作業の段階で堆積土や遺物の出土量、炉跡や柱穴の存在等を検討した結果、遺構としての根拠を保持していないものについては欠番として取り扱った。以下において001から順次説明を加えていくが、番号が飛んでいる遺構を、検討結果から欠番にしている。久保堰ノ台遺跡１の住居跡では、SI-003・004・005の説明が欠落するが、これが欠番として取り扱った遺構である。これは後述する久保堰ノ台遺跡２についても同様となる。

以下、住居跡、小竪穴、土坑、溝状遺構の順にその成果を記述していく。

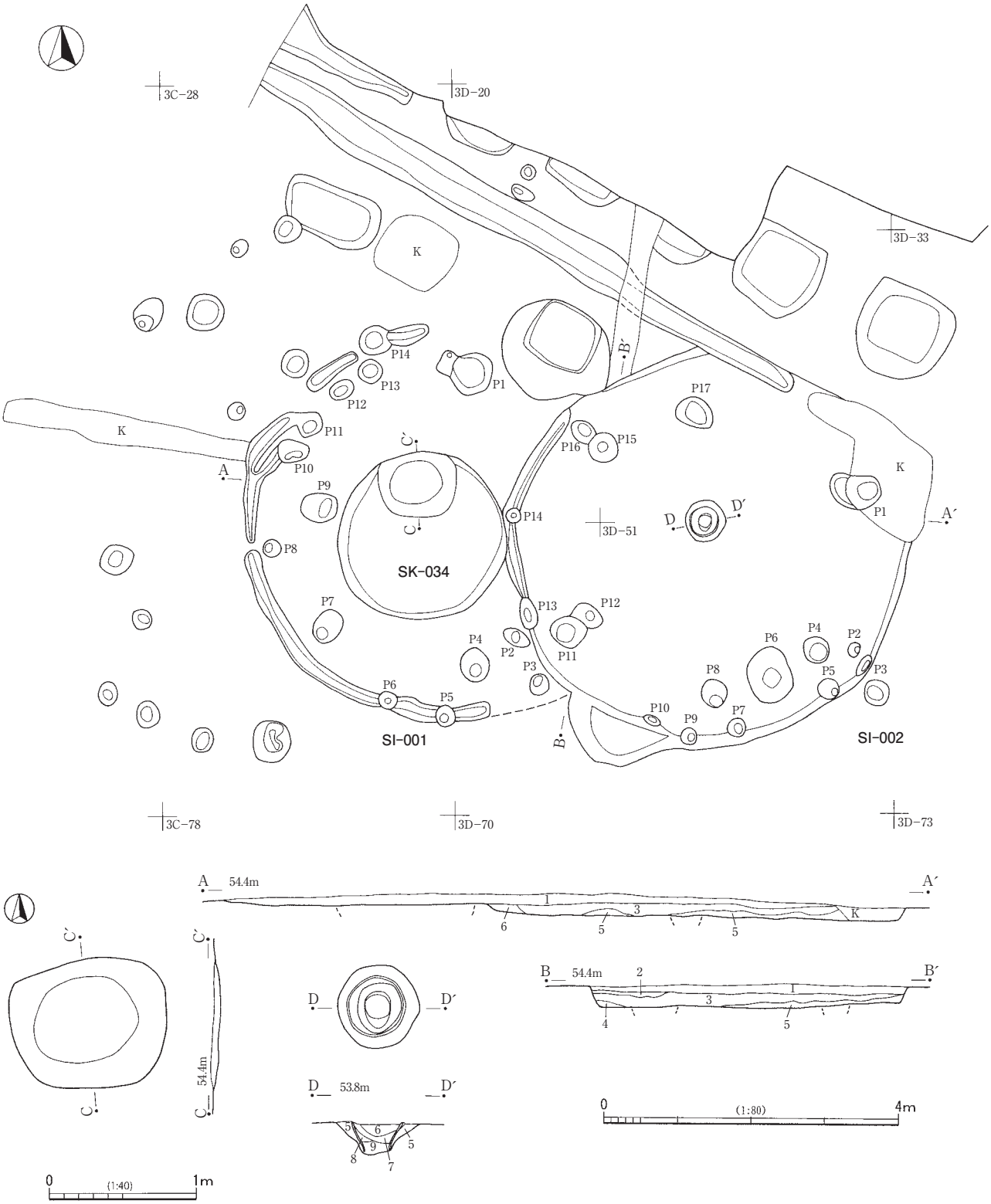
第１節　住居跡

SI-001（第５・６図、図版３・17・18・21）

本跡は３Ｃ区と３Ｄ区を跨ぐような形で検出された。形状は遺存する周溝の痕跡から径が約5.4mの円形を呈した住居跡と推測される。また図示から理解できるように壁面はほとんど存在していないような状態であった。床面の一部は重複するSI-002の西側で確認されたためSI-002→SI-001という新旧関係が成立する。また本跡の中央部に位置するSK-034の小竪穴は、その上面にSI-001の炉跡が認められたため、より古い時期に設置されたものであることが判明した。ピットは周溝内で14か所に認められたが、本跡に伴う柱穴はＰ４やＰ７、Ｐ９などが考えられる。Ｐ５、Ｐ６、Ｐ８、P11～P13などは壁に沿って穿たれた壁柱穴と考えられる。炉跡はほぼ中央に設置されており、SK-034と重複し約５㎝の堆積土（焼土混入の黒褐色土）が認められた。

覆土は６層に分類できた。第１層は黒褐色土（ローム粒を少量混入）、第２層は黒褐色土（ローム粒を少量混入、SI-001の床面）、第３層は黒色土（ロームブロックとローム粒混入）、第４層は黒褐色土（ローム粒を多く混入）、第５層は黒褐色土（ロームブロックとローム粒混入）、第６層は褐色土（流出したローム層）という構成になる。なお、堆積土は後述するSI-002と共通である。

遺物の出土状況についてみると、土器の出土量は少なく、接合した胴部の大型片と底部が主な出土土器となる。石器では石鏃･楔形石器･スクレイパー･打製石斧が出土している。図示した１・２はＰ２・Ｐ３・Ｐ４に囲まれるような位置で出土している。このことから本跡の時期は加曽利ＥⅡ式期となろう。



第５図　SI-001・002、SK-034

SI-001　ピット一覧（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

Ｐ１－20	Ｐ２－65	Ｐ３－19	Ｐ４－52	Ｐ５－25	Ｐ６－13	Ｐ７－66	Ｐ８－25
Ｐ９－14	Ｐ10－54	Ｐ11－８	Ｐ12－９	Ｐ13－８	Ｐ14－11		

遺物

土器　１は胴部が1/2程度遺存したもので縄文は複節のRLを用いている。沈線間は磨り消され器面調整を施しているような丁寧な仕上げとなっている。２は底部で胎土には若干の雲母や小石、石英粒が混入されており１とは異なる個体と思われる。３は有孔鍔付土器の口辺部片である。内外面には赤彩の痕跡が認められる。４の縄文は複節となる。１と同一個体という可能性も否定できない。

石器　５は脚部の欠損した石鏃である。６・８は楔形石器で、６は薄手の剥片を用いたもので、下端部は折断している。裏面でも小さな剥離を加えているため楔として分類した。８は小礫の上下両面に剥離を施している。７は掻器のような形態を呈したもので、裏面の剥離は整形のためのものであろう。右側縁では両面から剥離されているため石器とした。９は打製石斧の頭部であり、表裏に自然面が認められるため扁平な礫の側面を簡単に剥離し石斧にしたものと思われる。

SI-002（第５・６図、図版３・４・17・21）

本跡は西側部分がSI-001と重複しており、そこで周溝の一部が約３m検出できたため形状はほぼ把握できた。径は5.5mほどで北東部分が溝や撹乱により損壊を受けており、壁面は状態の良好な部分で15cmを計測する。床面は平坦で、柱穴状のピットは17か所を数える。その深さや位置からＰ４、Ｐ８、Ｐ12、Ｐ15、Ｐ17などが主柱穴と考えられた。一方、Ｐ３、Ｐ５、Ｐ７、Ｐ９、Ｐ10などは壁柱穴になるものであろう。また炉跡は中央部に位置し、底部の欠損した深鉢が設置されていた。いわゆる土器埋設炉である。このタイプの炉跡は後述する久保堰ノ台遺跡２でも複数基が確認されている。埋設部分での堆積土は４層に分離できた。第６層は黒褐色土（砂粒混入）、第７層は黒褐色土（焼土･砂粒混入）、第８層は黄褐色土（黄白色砂粒混入）、第９層は黄褐色土（硬い粘土質）となり、焼土層の形成はみられなかった。

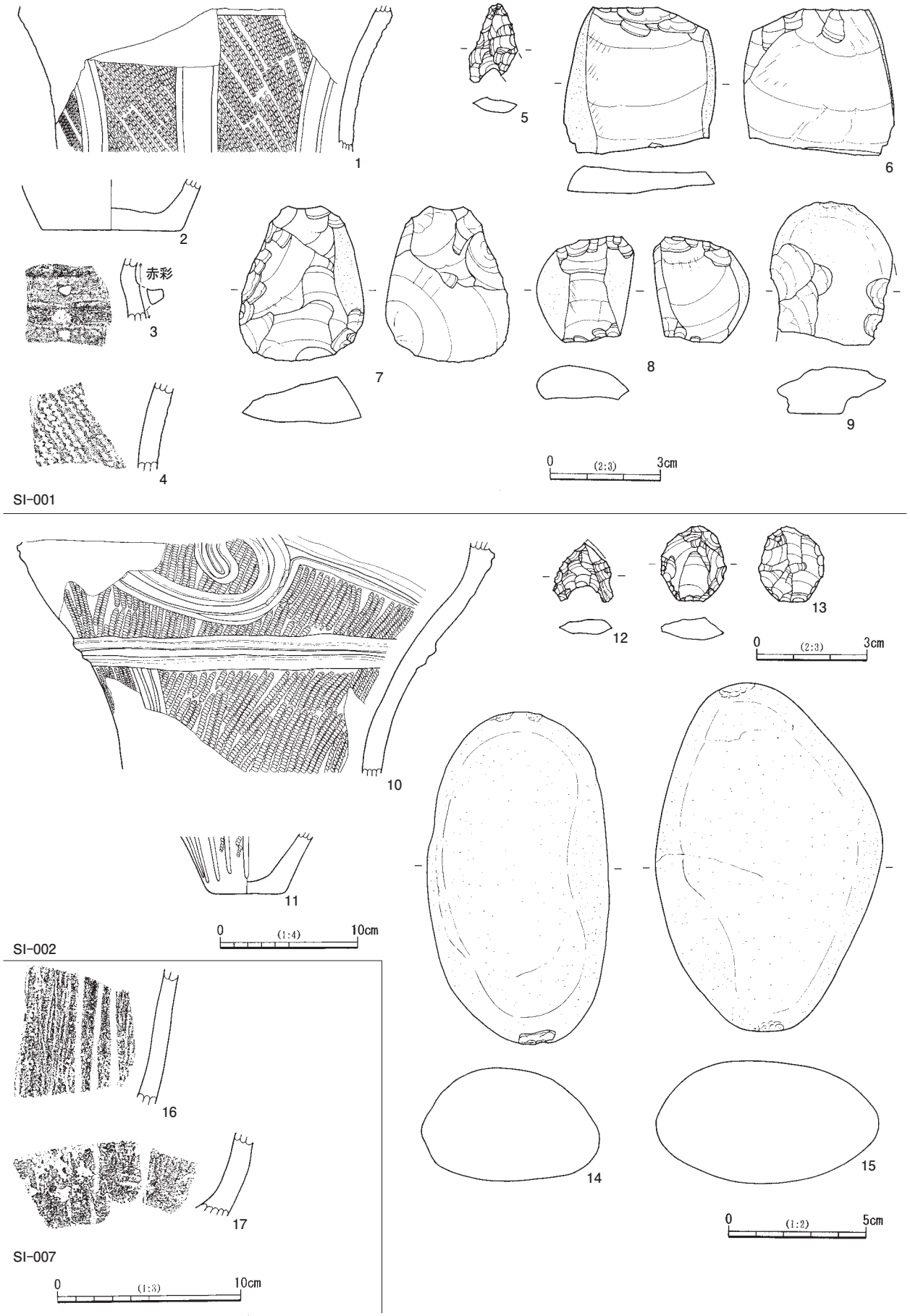
本跡内での遺物出土量はSI-001よりも多かったが、土器は小片がほとんどで図示することができなかったため図示は２点のみとなった。石器では黒曜石製の石鏃、楔形石器のほかに敲石の出土があった。住居跡の時期は炉跡に埋設された深鉢から加曽利ＥＩ式期となろう。なお、堆積土は前述したSI-001と重複しているため共通となる。

SI-002　ピット一覧（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

Ｐ１－39	Ｐ２－13	Ｐ３－12	Ｐ４－92	Ｐ５－83	Ｐ６－14	Ｐ７－50	Ｐ８－92
Ｐ９－53	Ｐ10－25	Ｐ11－82	Ｐ12－55	Ｐ13－21	Ｐ14－11	Ｐ15－61	Ｐ16－63
Ｐ17－53							

遺物

土器　ここでは時期決定を可能にした10の深鉢に注目したい。大きく開いた口辺部を炉跡に転用したものであり、縦横に貼付された隆帯と縄文で装飾されており、磨り消し部分は認められない。器面は被熱のためか剥落が著しい。11は底部片で器面には数条の沈線と僅かに遺存した縄文が観察できる。時期的には



第６図　SI-001・002・007出土遺物

SI-001で出土している大型片と同時期となろう。

石器　石器として図示できるものは敲石を含めて４点となる。12の石鏃は製作時に先端右部分の剥離に失敗したようである。13は掻器状に整形された楔形石器である。刃部では両面から剥離が施されている。14・15は縦長の敲石でともに上下端に打痕がみられる。

SI-006（第７・８図、図版５・17・18・21）

本跡は３Ｄ区のほぼ中央部に位置し、住居の北側は斜面になっており遺構の一部は失われていた。さらに南には後世の貯蔵穴らしき隅丸方形の深い掘り込みが存在し、総体的に遺構の遺存状況は良好とはいえなかった。壁も東西部分で確認されてはいるが、壁高は状態のよい部分で10cmほどしか残されていなかった。床面は平坦ながらも柱穴状のピットが多数（一覧表）みられるため状態としてはよくなかった。ただ炉跡は土器埋設炉であったためはっきりと確認できた。SI-002と同様に深鉢の上半部を使用した炉跡であった。しかも埋設された土器も類似した深鉢であった。

覆土は上下２層に分類できた。第１層は表土、第２層は黒色土（ローム粒を少量混入）、第３層は黒褐色土（ローム粒とロームブロックを混入）となる。また第４層は黒褐色土（ローム粒を混入し乾燥するとサラサラの状態となる）、第５層は黄褐色土（ローム粒とローム粒混入）で第２・３層と異なる色調と性質の堆積土となる。このことから隅丸方形の掘り込みは後世の貯蔵穴と考えられた。

遺物の出土は他の住居跡と比較すれば多いといえよう。図示した２点は炉として使用されたもの１と近接して出土した深鉢の胴部である。また、土器片錘が４点出土したことも注目できる。石器では敲石が２点出土した。炉に使用された深鉢から本跡の時期は加曽利ＥⅠ式期となろう。

SI-006　ピット一覧（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

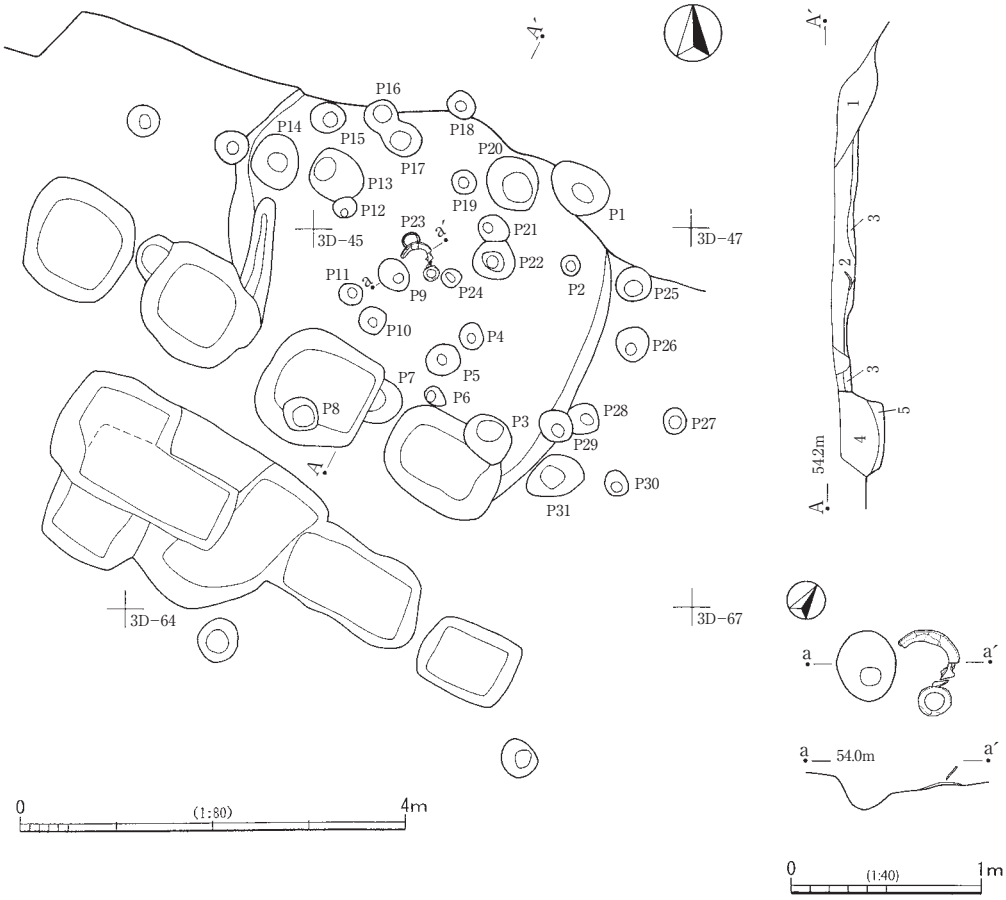
Ｐ１－43	Ｐ２－20	Ｐ３－84	Ｐ４－36	Ｐ５－30	Ｐ６－60	Ｐ７－26	Ｐ８－48
Ｐ９－20	Ｐ10－27	Ｐ11－19	Ｐ12－52	Ｐ13－80	Ｐ14－87	Ｐ15－32	Ｐ16－19
Ｐ17－21	Ｐ18－38	Ｐ19－55	Ｐ20－70	Ｐ21－34	Ｐ22－35	Ｐ23－８	Ｐ24－25
Ｐ25－49	Ｐ26－39	Ｐ27－17	Ｐ28－21	Ｐ29－42	Ｐ30－20	Ｐ31－33	

遺物

土器　１は炉に使用された深鉢で口辺部から頸部にかけて遺存したものである。縄文地に隆帯を貼付した装飾で縄文の撚りは密であり３本撚りと思われる。被熱のため器内外面は脆くなっている。２も地文には複節の縄文を用い、垂下する粘土紐に刻目を施している。その後、沈線による区画がみられる。３～５は口縁部で縄文地に隆帯を貼付している。６は口唇部を丸く整形しており内面の作りも丁寧で若干調整を加えているようである。８は細い原体を組み合わせ異方向に回転させることにより羽状の効果を描出している。９・10は胴部片で縦方向に２～３本の沈線がみられる。これらはおおむね加曽利ＥⅠ式となろう。

土製品　11～14は土器片錘で、12には縄文地に施された沈線がみられる。14は約1/2を欠損するもので、左側が口唇部となる。

石器　敲石が２点出土した。15は上下端に僅かな打痕が認められる。裏面には磨耗痕があるため磨石としても使用されたようである。16は上下と両側面に打痕が観察できる。



第７図　SI-006

SI-007（第６・９図、図版４・18）

本跡は４C-27・28グリッドにかけて焼土混入層が認められたため土坑（SK-025）という認識で調査を進捗させていった。しかし掘り込みは浅く８cmほどで地山層に変化したため精査の範囲を拡大し住居跡の存在も想定してつつ調査を継続した。その結果、前述したように明確な住居跡の痕跡は確認できなかったが周囲には柱穴と考えられるようなピット（Ｐ４、Ｐ９、P13、P18）が認められるため整理作業の段階で住居跡として認識した。土器等の遺物は少なく図示した２点は、炉跡と想定される落ち込み（焼土混入の黒褐色土）から出土したものである。

SI-007　ピット一覧（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

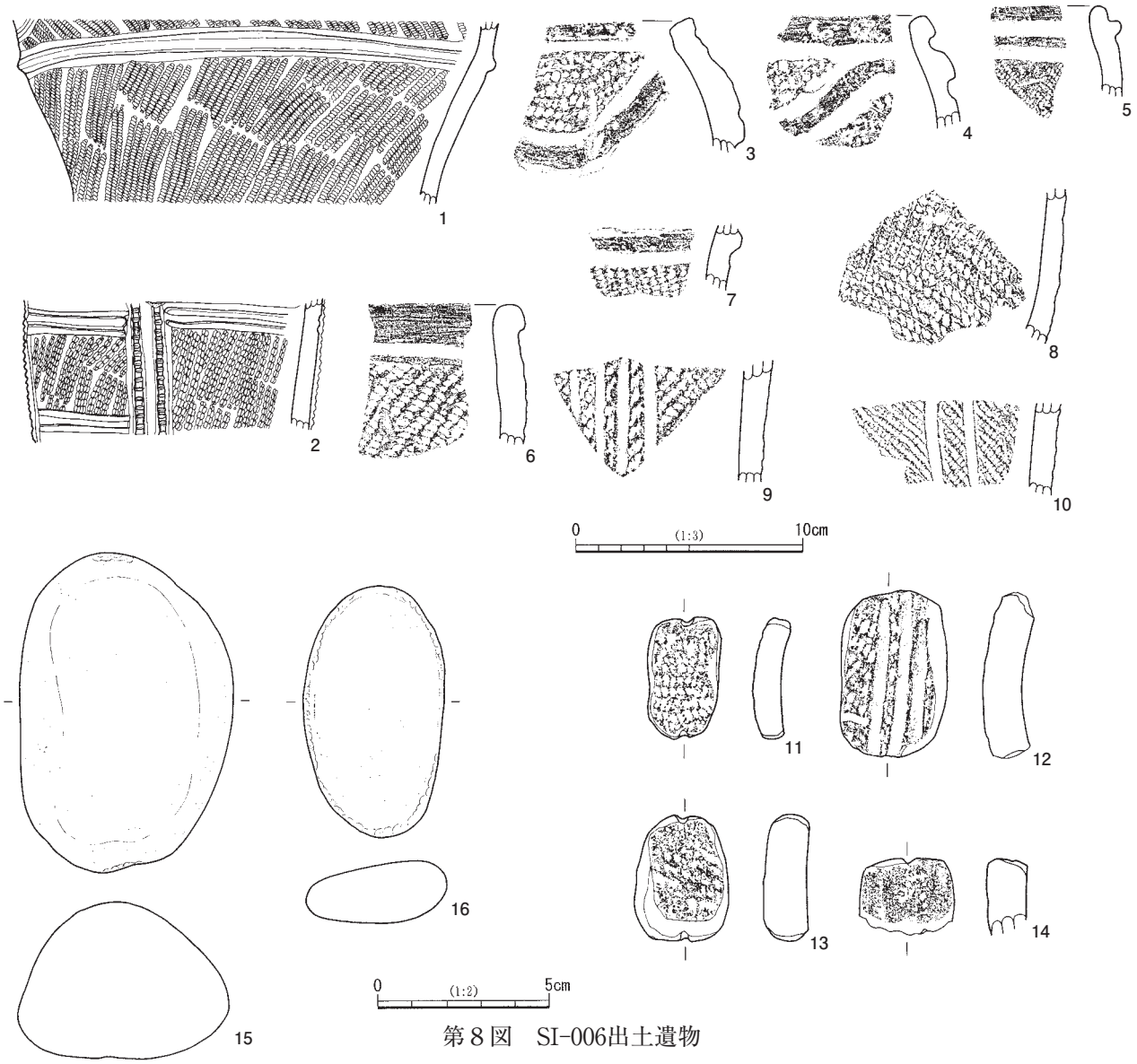
Ｐ１－17	Ｐ２－16	Ｐ３－15	Ｐ４－51	Ｐ５－20	Ｐ６－36	Ｐ７－24	Ｐ８－27
Ｐ９－52	P10－５	P11－54	P12－25	P13－56	P14－28	P15－24	P16－25
P17－24	P18－35	P19－22	P20－８	P21－23	P22－31	P23－18	P24－19
P25－27	P26－23	P27－22	P28－21	P29－36	P30－48	P31－17	P32－61

遺物

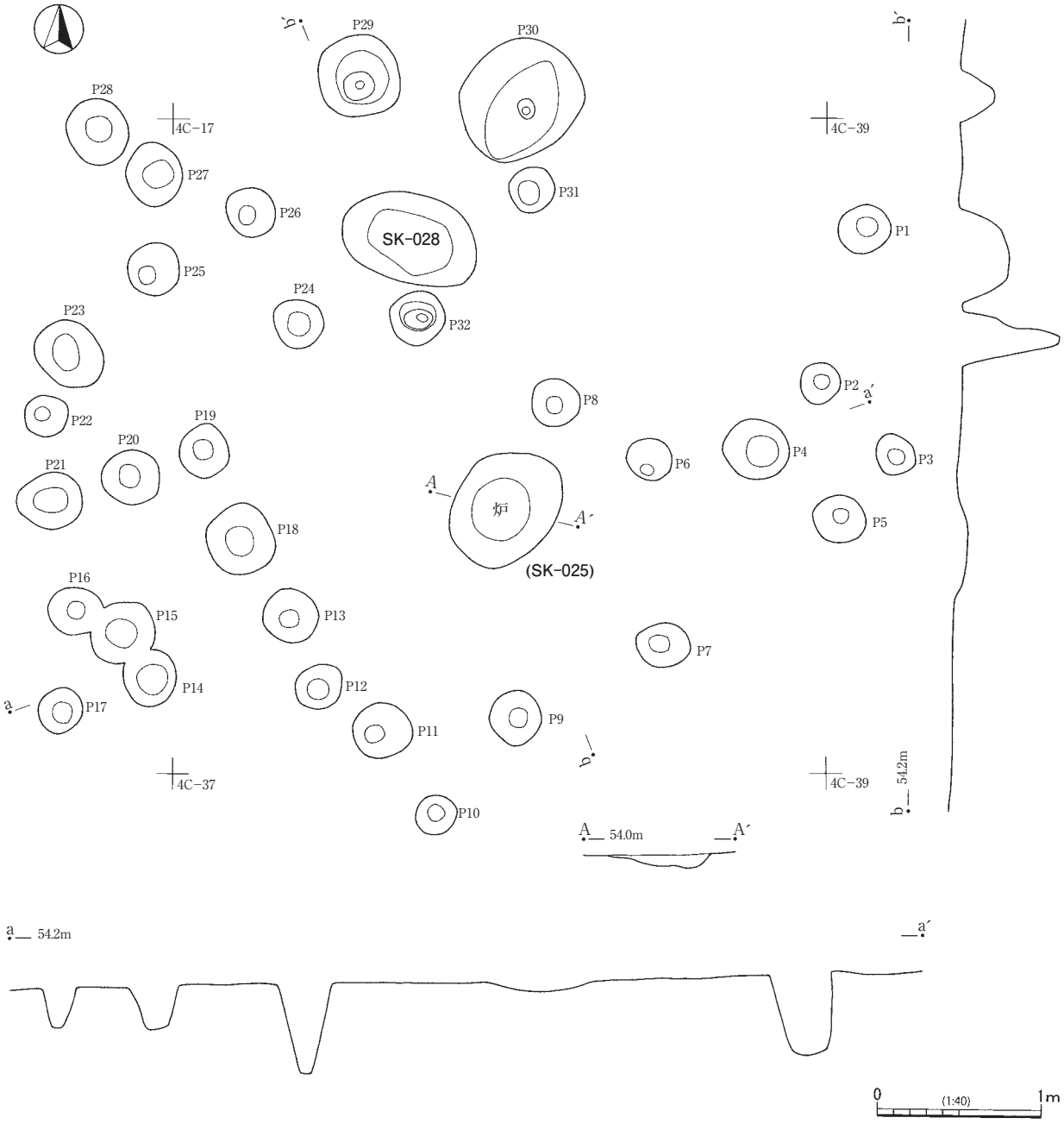
土器　16・17は同一個体と考えられる。16は胴部片で器面には集合条線を施し垂下する沈線を加えている。時期的には加曽利EⅡ式となろう。同様な施文を有するものがSK-027とSK-036からも出土している。

第２節　小竪穴

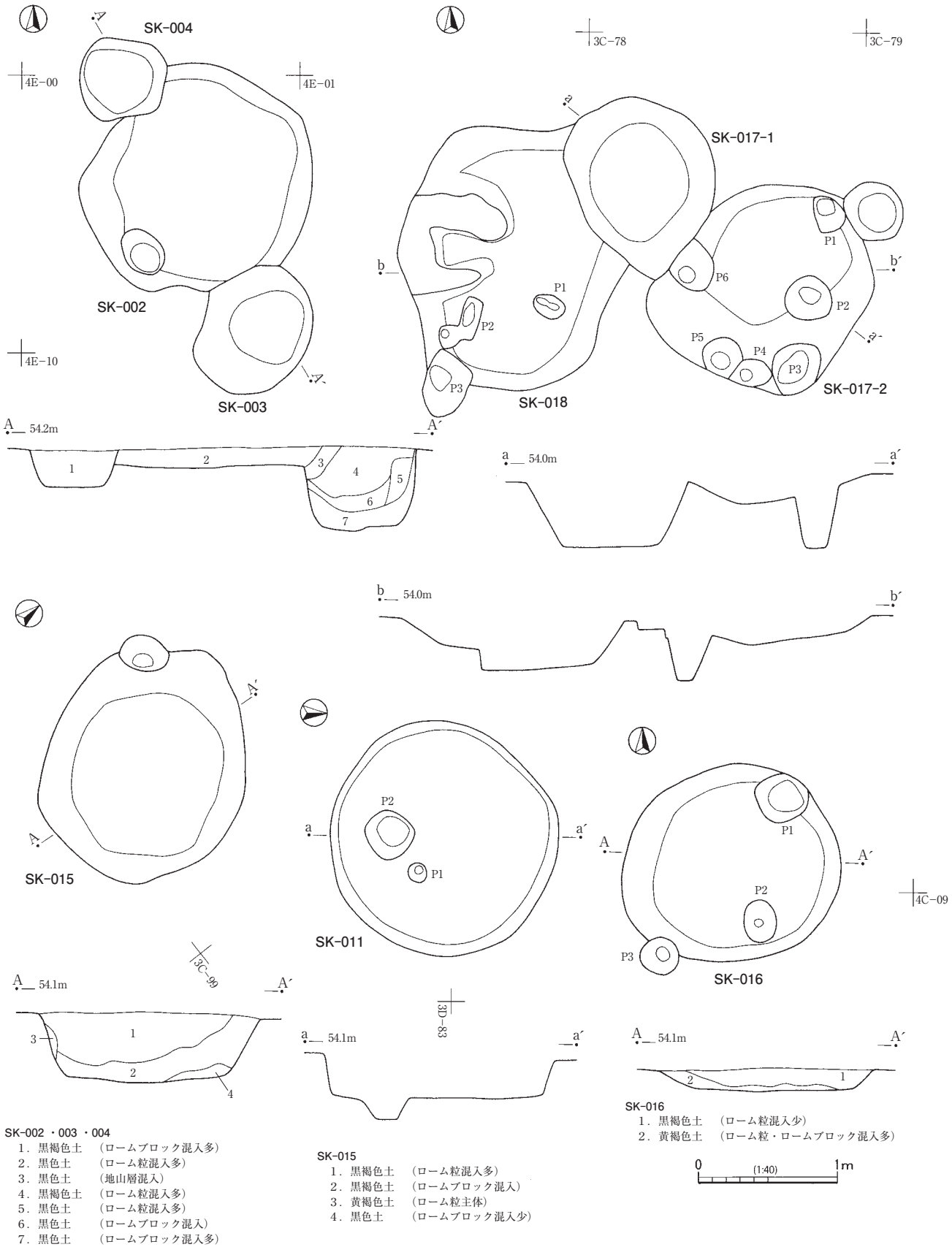
本遺跡では縄文時代中期集落の特徴ともいえる小竪穴が、住居跡周辺で十数基が検出されている。その形態についてみると、径が１ｍ～２ｍ、深さは住居跡の床面を掘り込んでいることもあり開口部から20㎝～40㎝ほどを計測する。平面形は概して円形に近いタイプとなる。そこで、ここでは径が1.5mを基準にして大きいものをAタイプ、小さいものをBタイプとして分類した。その結果、Aタイプの小竪穴は18基、Bタイプは14基となり、ややAタイプが多いようである。また小竪穴に伴うピットについてみると大きめのAタイプには18基中の14基にみられた。一方、Bタイプでは14基中で５基にしかみられなかった。ピットの深さは底面からの計測とした。なお、本節では小竪穴の形態等については別途一覧の計測表としてまとめた。本節では遺物を出土した遺構を中心に記載する。



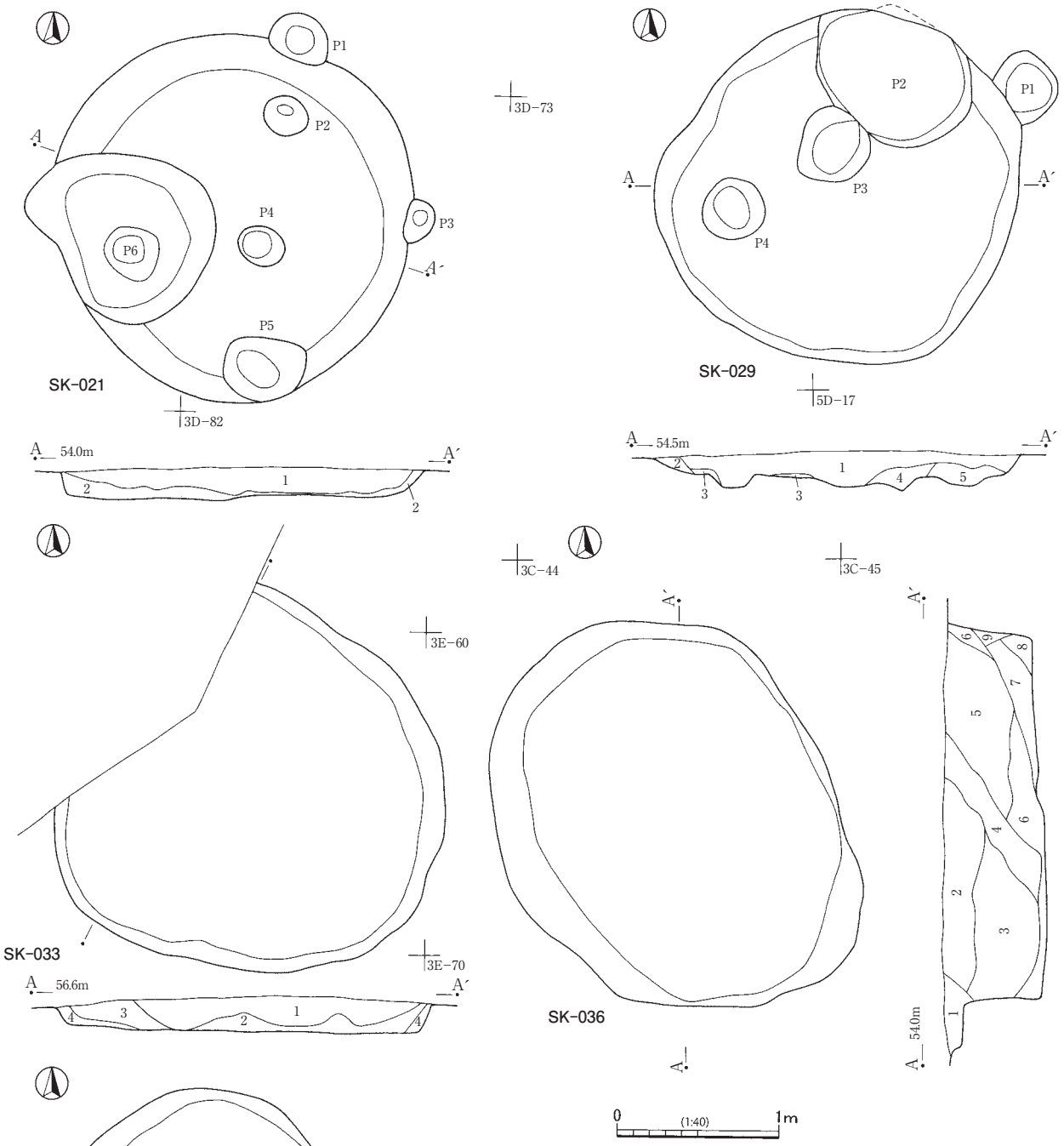
第８図　SI-006出土遺物

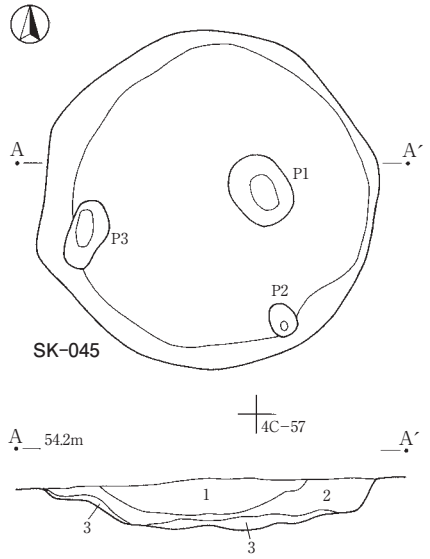


第９図　SI−007、SK−028



第10図　SK-002・003・004・011・015・016・017-1・017-2・018





SK-021
1．黒褐色土　（ローム粒混入少）
2．褐色土　（黄色砂層混入多）

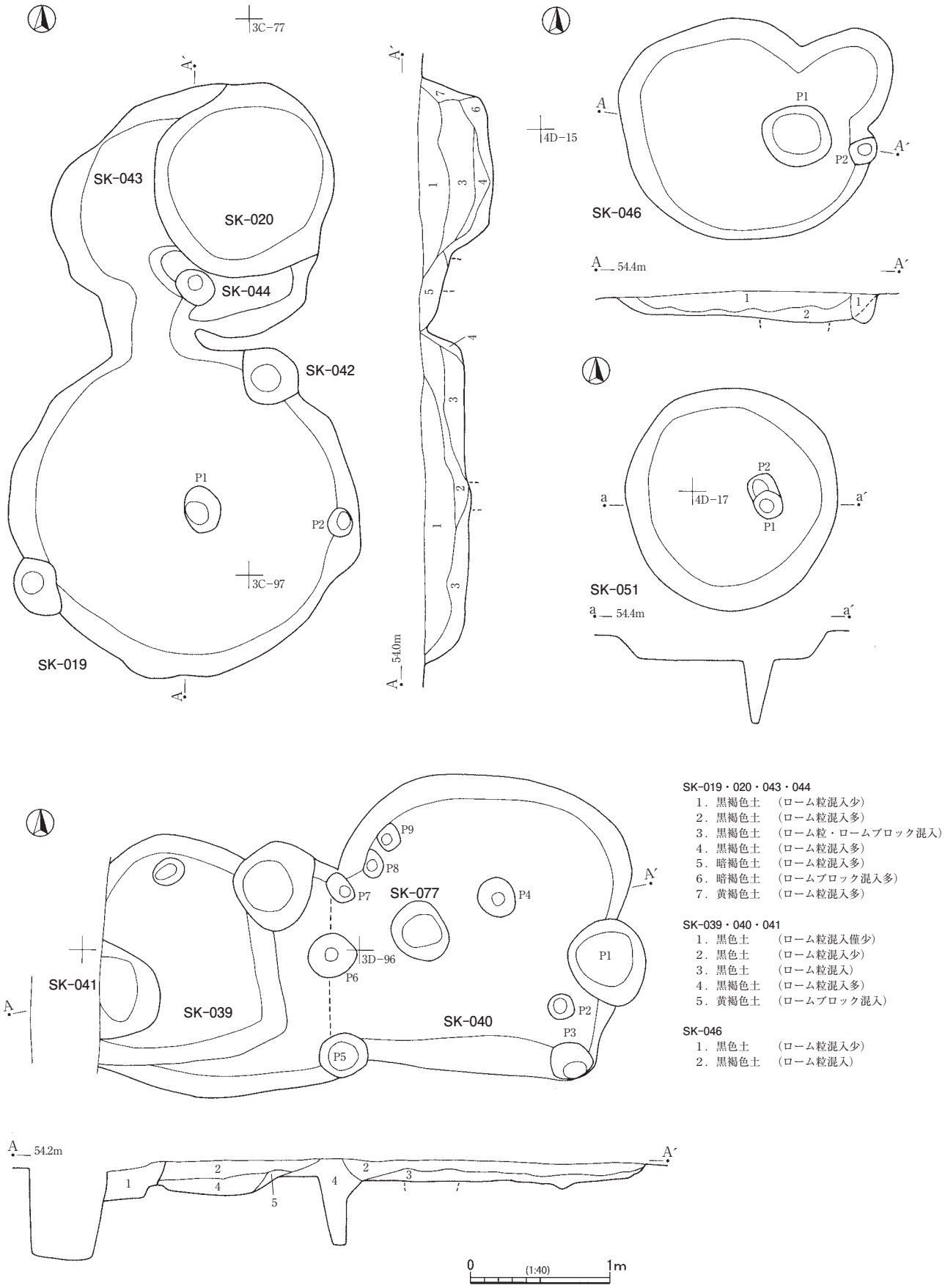
SK-029
1．黒褐色土　（ローム粒混入多）
2．褐色土　（黄色砂層混入多）
3．褐色土　（ローム粒主体）
4．褐色土　（ロームブロック・黄色砂層混入）
5．黄褐色土　（黄色砂層混入多）

SK-033
1．黒褐色土　（ローム粒混入少）
2．黒褐色土　（ロームブロック混入）
3．黄褐色土　（ローム粒混入多）
4．黒褐色土　（ロームブロック・ローム粒混入）

SK-036
1．黒褐色土　（ローム粒混入）
2．黒色土　（ローム粒混入少）
3．黒褐色土　（ローム粒混入）
4．黒褐色土　（ロームブロック・ローム粒混入）
5．黒褐色土　（ローム粒混入）
6．黄褐色土　（黒色土・ロームブロック混入）
7．黄褐色土　（黒色土・ローム粒・ロームブロック混入）
8．黒色土　（黄色砂層混入）
9．黄褐色土　（ローム粒混入多）

SK-045
1．黒褐色土　（ローム粒混入少）
2．暗褐色土　（ローム粒混入多）
3．褐色土　（黄色砂層混入）

第11図　SK-021・029・033・036・045

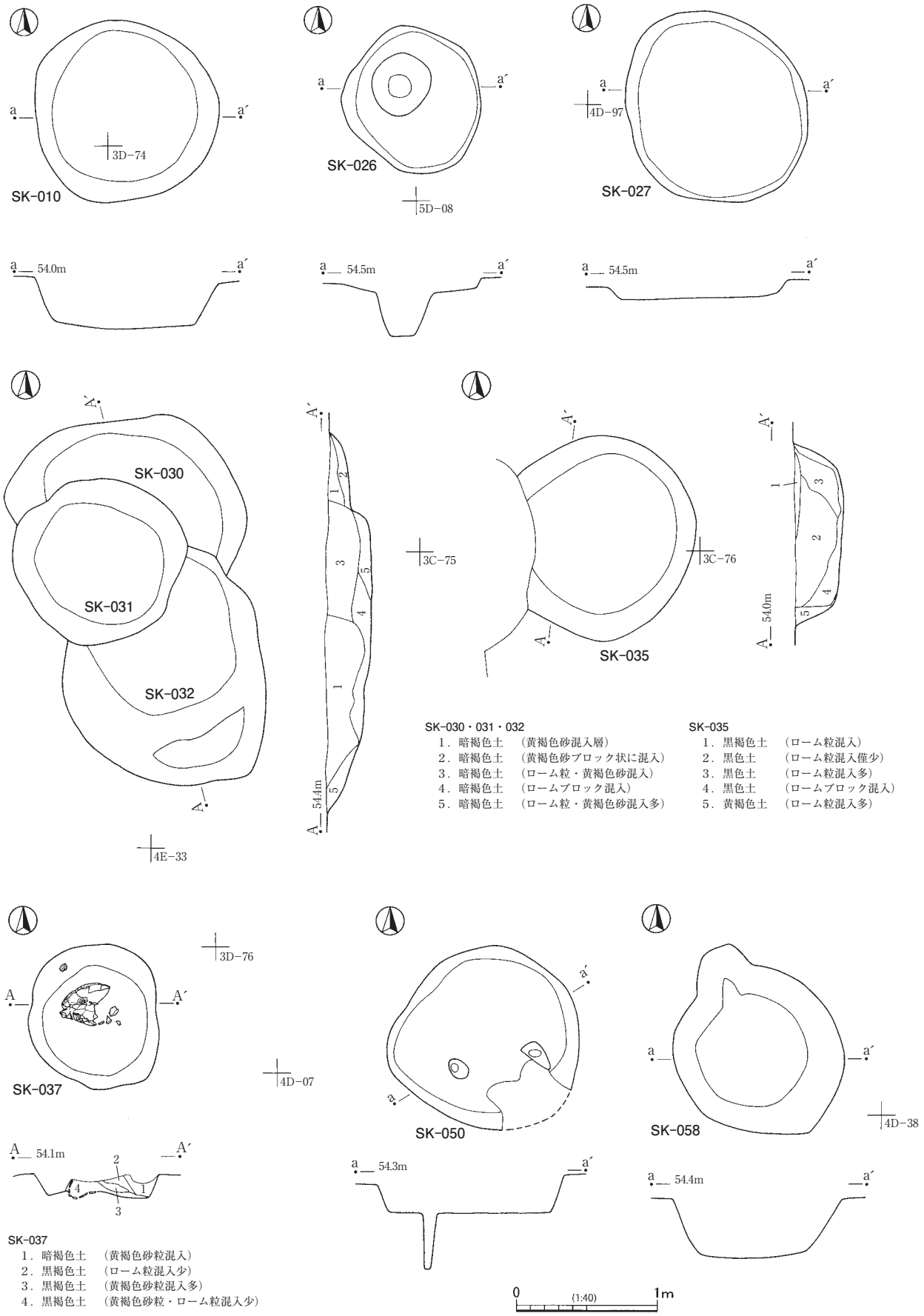


SK-019・020・043・044
1．黒褐色土　（ローム粒混入少）
2．黒褐色土　（ローム粒混入多）
3．黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック混入）
4．黒褐色土　（ローム粒混入多）
5．暗褐色土　（ローム粒混入多）
6．暗褐色土　（ロームブロック混入多）
7．黄褐色土　（ローム粒混入多）

SK-039・040・041
1．黒色土　（ローム粒混入僅少）
2．黒色土　（ローム粒混入少）
3．黒色土　（ローム粒混入）
4．黒褐色土　（ローム粒混入多）
5．黄褐色土　（ロームブロック混入）

SK-046
1．黒色土　（ローム粒混入少）
2．黒褐色土　（ローム粒混入）

第12図　SK-019・020・039・040・041・042・043・044・046・051・077



第13図　SK-010・026・027・030・031・032・035・037・050・058

Aタイプ

SK-002（第10・18図、図版18）

本跡は土坑２基と重複していた。重複部分は限定的であったため形状を損なうことはなかった。堆積土から推測すると土坑よりも古い時期と考えられる。遺物は少なく図示は胴部片の１点のみとなる。緻密な縄文地に５㎜幅の半截竹管状の工具で縦方向に沈線を施している。時期は加曽利ＥⅠ式期と思われる。

SK-011（第10・18図、図版18）

本跡は底面からの立ち上がりも垂直に近く円形を呈した典型的な小竪穴といえよう。ただ遺物の出土は少なく図示できたものは底部に近い破片のみであった。器面には密に撚られた縄文がみられる。

SK-015（第10・18図、図版5・21）

本跡の東壁に接してピットが穿たれているが浅いものであり、付帯するピットではなかろう。遺物は若干の土器片と破損した石鏃が出土している。破損石鏃には左側縁にきれいな剥離が施されており製作途中で廃棄されたものであろう。

SK-016（第10・18図、図版18）

本跡の壁は皿状を呈したものであり、地山が崩壊したものと思われる。またP１は、その深さから主柱穴的なピットとなろう。遺物は土器片が数点みられたが、器面の状態が良好な口縁部２点を図示した。17は口縁の無文部に調整痕がみられる。18は波状口縁であり内外面ともに丁寧に仕上げられている。時期的には加曽利EⅡ式となろう。

SK-019（第12・18図、図版５・19・21）

本跡は北に位置するSK-043・044と接近しているため壁部分が崩壊したものと考えられる。その形状から典型的な小竪穴となろう。Ｐ１は深く柱穴とみて間違いあるまい。一方、北壁（SK-042）と東西壁に接しているピットは本跡に伴うものとするには疑問が残る。遺物の出土量は多く、時期的には加曽利ＥⅡ式が主体となる。本跡の構築された時期も加曽利ＥⅡ式としてよいであろう。24・25は口縁部にみられる刺突文が特徴的なものであり、25と28は地文に撚糸文を使用しており同一個体とも思われる。石器も小型の磨製石斧が出土しており、研磨は刃部のみにみられる。石材はチャート製で類例は少ない。

SK-021（第11図、図版５）

本跡も整った円形を呈しており中央に位置するＰ４は柱穴となろう。西に大きく段上に開口した落ち込みは本跡とは別の土坑と思われる。本跡の底面より数㎝低い。遺物は小片が若干出土しているが図示できるような土器はみられなかった。

SK-029（第11・19図、図版５・17・19）

本跡にみられるピットはＰ２を除くとすべて20㎝未満と浅い。底面では若干凹凸が認められた。Ｐ２は60㎝を越える深さとなり遺物も集中的に出土している。おそらく小竪穴とは異なる性格を有した遺構と思われる。遺物10・13～15は覆土上層から出土しておりＰ２の窪みに投棄されたものと考えられる。10は口縁部が約1/3遺存する連弧文系の深鉢である。13は同一個体である。11は底部で撚糸文を地文とし２本一組の沈線が垂下する。12も撚糸文を地文に用いている。棒状工具による刺突は左から右へ移動している。18・19は曽利系の深鉢である。ともに胴部片で18は大きく弯曲する胴部となる。いずれにしても本跡では連弧文系の土器群が主体となっており、おそらく小竪穴とＰ２も土器形式からみれば同一型式の中に収まるものといえる。

SK-033（第11・20図、図版５・20）

本跡は北側部分の傾斜地が損壊していたため、その一部は調査できなかった。形状や壁面等も整ったものとは言いがたい。遺物は多く出土したが、小片や器面が磨耗していたため３点だけを図示した。１・２は口縁部片で口縁と平行に隆帯がみられる。３は口辺部片で枠内に縄文を充填したキャリパータイプの深鉢となろう。時期的には加曽利ＥⅡ式期とみなされる。

SK-036（第11・20図、図版20・21）

本跡は不整形を呈している。掘り込みはしっかりしたもので65㎝と深い。出土遺物も多く土器片は100点を超えるが図示のできるものは少なかった。４は口縁部で隆帯が縦方向に貼付されている。５も口縁部片で条線による器面整形がみられる。時期的には加曽利ＥⅡ式の終末からⅢ式となろう。６・７は垂下する隆帯が特徴的である。SK-029で出土した曽利系に分類できる深鉢である。８は打点部に整形のための二次剥離が認められる。残された形状から石鏃の素材とも思われる。

SK-039・040（第12・20図、図版５。17、20）

本跡は土坑も含めて複雑な重複関係にあり、個別の形態も正確には把握できなかった。平面形も他とは異なるが一定の大きさであったためここに含めた。遺物の出土も少なく、SK-040では小片が９点だけであった。一方、SK-039では数十点を出土し、図示できる底部もみられた。図示した底部は、器面に条線のみが残されるものであり、この条線から推測すると曽利系の範疇に入るものと思われる。

Bタイプ

SK-020（第12・19図、図版５・19）

本跡は前述したSK-043・044と重複して検出されたものであり、SK-043と比較すると約20㎝ほど深い掘り込みとなっている。おそらく本跡のほうが新しく構築されたものであろう。遺物は土器片が約30点出土しており、１はSK-044出土の20と、２は同様にSK-044出土の21と同一個体となる。３は縄文のみが施文されている胴部片である。時期的には加曽利ＥⅠ式期となろう。

SK-027（第13・19図、図版19・21）

本跡は掘り込みが浅く、壁も崩れるように傾斜したものであった。出土遺物も少ないが土器片と石器が出土している。６は縦方向に直線状に施された沈線間に刷毛目状の器面整形が観察できる。７は地文に縄文が施されている。時期としては加曽利ＥⅡ式となろう。８は刃部の失われた磨製石斧の頭部を敲石として再利用したものである。きれいな楕円形を呈した断面から磨製石斧の一端を垣間見ることができる。下端は敲打により著しく磨耗している。

SK-030・031・032（第13・19図、図版17・20・21）

３基が重複したものであり、中央に位置するSK-031の掘り込みが最も深い。次いでSK-032となるが、南側には底面より約10㎝の段差が設けられている。出土遺物は、SK-030では僅少で、SK-031・032では各20点ほどの遺物が検出された。そのうちSK-031では５点を図示した。20・21はキャリパータイプの口縁部で、口縁直下に隆帯が貼付された深鉢である。22は底部片で僅かに縄文が遺存する。23は薄手の剥片を用いた石鏃で、先端部を欠損する。24は磨石の欠損品であり、表面は研磨されたように滑らかである。側面では若干の打痕も観察できる。SK-032では４点を図示した。25は縦方向に複数の沈線が施される。26は口縁部で直下に浅く幅広の沈線がみられる。27は条線により器面が整形されている。いずれも加曽利

ＥⅡ式に属するものである。28は左右対称とはいえないが欠損のみられない石鏃である。

SK-037（第13・20図、図版17）

本跡はＢタイプの中でも小規模なものである。遺物は口縁部を欠損した大型の深鉢が横たわるような形で出土した。地文には縄文が施され、垂下する沈線間は磨り消される典型的な加曽利ＥⅡ式に位置づけられる土器である。

SK-058（第13・20図、図版20）

本跡には不整形な一部がみられるものの40cm余りの掘り込みであった。出土遺物は数点と少なかったが、図示できる破片が２点みられた。30は波状口縁を呈する部分で、口唇部は丸く整形されている。周囲にも沈線の一部が認められるため枠状に区画されたものであろう。31には口縁直下に浅いがはっきりとした沈線が横走する。時期的にはいずれも加曽利ＥⅡ式となろう。

SK-074（第14・21図、図版20）

本跡ではピットが２か所で検出されたが、Ｐ２は底面下85cmを計測する深いピットであった。遺物は少なく図示できるものは１点のみであった。キャリパータイプの深鉢と思われる。口縁と平行に貼付された隆帯の上下には沈線が施される。

第３表　久保堰ノ台遺跡１小竪穴計測表　（数値単位＝cm）

	遺構番号	位置	形状	タイプ	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備考
1	SK-002	4E-00	不整円形	A	167	155	14	1	1	32	
2	SK-011	3D-83	円形	A	170	165	30	2	1	42	
									2	13	
3	SK-015	3C-88	楕円形	A	160	145	50	1	1	26	
4	SK-016	4C-08	円形	A	155	143	16	3	1	38	
									2	18	
									3	12	
5	SK-017-2	3C-78	楕円形	A	155	132	38	6	1	12	
									2	39	
									3	19	
									4	10	
									5	20	
									6	32	
6	SK-019	3C-86	円形	A	250	235	32	3	1	50	
									2	8	
									3	7	
7	SK-021	3D-72	円形	A	277	226	20	6	1	11	
									2	12	
									3	49	
									4	70	
									5	10	
									6	12	
8	SK-029	5D-17	不整円形	A	224	208	22	4	1	11	
									2	66	
									3	18	
									4	11	
9	SK-033	3D-69	不整円形	A	233	232	22	0			
10	SK-034	3C-59	円形	A	230	230	35	0			第５図参照
11	SK-036	3C-44	楕円形	A	265	208	65	0			
12	SK-039	3D-95	不整形	A	165	－	25	1	1	7	
13	SK-040	3D-96	不整形	A	214	－	15	9	1	43	
									2	10	
									3	18	
									4	35	

	遺構番号	位置	形状	タイプ	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備考
13									5 6 7 8 9	21 56 17 15 14	
14	SK-043	3C-76	円形	A	−	−	−		−		
15	SK-044	3C-77	−	A	−	−	20	1	1	32	
16	SK-045	4C-46	円形	A	178	177	28	3	1 2 3	16 7 26	
17	SK-046	4D-05	不整形	A	165	105	19	1	1 2	5 10	
18	SK-051	4D-17	円形	A	160	153	18	2	1 2	45 27	
19	SK-010	3D-64	円形	B	130	127	42	0			
20	SK-020	3C-77	円形	B	132	130	52	0			
21	SK-026	4D-98	楕円形	B	107	100	10	1	1	−	
22	SK-027	4D-97	楕円形	B	145	128	10	0			
23	SK-030	4E-13	楕円形	B	175	−	16	0			
24	SK-031	4E-04	不整円形	B	125	115	33	0			
25	SK-032	4E-23	楕円形	B	−	143	27	0			
26	SK-035	3C-97	円形	B	126	−	35	0			
27	SK-037	3D-75	楕円形	B	103	93	18	0			加曽利ＥⅡ式口縁部
28	SK-050	3D-97	円形	B	136	130	27	2		−	一部撹乱
29	SK-058	4D-27	不整円形	B	123	116	42	0			ピットとの重複か
30	SK-068	4E-52	円形	B	125	119	5	1	1	10	
31	SK-074	4E-09	円形	B	133	122	22	2	1 2	7 85	
32	SK-076	3D-87	隅丸方形	B	130	126	33	1	1	10	

第３節　土坑

土坑は、前出の小竪穴と比較してより小規模なタイプを主体として、平面形が楕円形や不整形といったものや掘り込まれた基底面の立ち上がりが緩やかな作りとなっている遺構を「土坑」として分類した。遺構番号には前出の小竪穴と同様に「SK」を用いたため遺構番号が継続していない点については、遺構番号は付けたものの植物根や後世の掘削等による落ち込みであったり、皿状の浅い落ち込みにも番号を付したため整理の過程において欠番が生じていることを付記しておきたい。また、柱穴状のピットでは「SH」として遺構番号をつけてみたが、図示できるような遺構や遺物はみられなかったため掲載に際しては省略した。なお、本節でも遺物を出土した土坑を中心に記述していくこととし、土坑個々の詳細については計測表としてまとめた。ピットは底面からの深さとした。

SK-001・069（第14・18図、図版17・18）

本跡は、形状についてみれば前述したBタイプの小竪穴に加えることもできるが、大きく傾斜する壁面となっているため土坑とした。遺物は10点ほど出土したが、いずれも覆土上層から検出されている。１は底部が約1/2遺存したものである。縄文は複節の原体を使用しており、沈線間での磨り消しは認められない。２は1/2ほどが遺存した手捏土器で、僅かに口縁部を欠損する。器内外面では凹凸が著しい。３・４は同一個体であり、口辺部に貼付された隆帯が特徴的といえる。４は胴部片で沈線による懸垂文がみられる。これらは時期的におおむね加曽利ＥⅠ式となろう。なお、SK-069では土器の細片数点が出土したのみであった。

SK-003（第10・18図、図版18・21）

本跡はSK-002と一部が接して掘り込みは60㎝の深さを計測している。覆土上層から図示できる大型の破片が数点出土した。7・8は波状口縁で隆帯の貼付が確認できる。9の隆帯の下には渦巻文が想定できる。10は平縁で内彎するような作りである。幅広の沈線が垂下し沈線間はきれいに磨り消されている。11・12も同様な磨り消しを有する。時期的には加曽利ＥⅡ式でも新しいタイプか一部はＥⅢ式となろう。

SK-005（第14・18図、図版18）

本跡もSK-003同様に掘り込みが深く堆積土も近似している。出土遺物は少なく図示できる土器は１点のみであった。口縁部片で縄文施文の痕跡が認められるところから加曽利ＥⅡ式と考えられる。

SK-006（第14・18図、図版18）

本跡は北側に柱穴状のピットが検出できた。しかし、その深さと規模から推定し本跡に伴うものではないようである。覆土中から若干の土器片が出土したが、図示できる土器は１点のみであった。口辺部で器面には縄文が施文されているが、右隅の剥落部分にも縄文の痕跡が観察できる。つまり、幅広の隆帯部分を貼付する以前に縄文施文を実施していた証左となろう。時期的には加曽利EⅡ式でも新しいものと思われる。

SK-018（第10・18図、図版５・18）

本跡は西側の覆土上面において砂質粘土の層がみられたため粘土部分を追っていくとカマド状の輪郭を呈したため、奈良・平安時代の住居跡を想定して調査をすすめた。だが、当該期の遺物は見出せなかったため土坑として本節で取り扱うことにした。出土遺物は20点ほどみられたが、図示できるものは掲載した口縁部１点のみである。時期は加曽利ＥⅡ式かＥⅢ式となろう。

SK-022（第19図、図版19）

本跡はSK-010の南に隣接して検出された土坑で掘り込みは浅く、平面形は整った円形となる。図示できた土器片は２点あり、4は口縁部の小片で、5は底部となる。底部の上部に２本一組の沈線が認められる。

SK-028（第９・19図、図版19）

本跡はSK-016の南2.5mに位置し、鶏卵状を呈した土坑となる。図示できる口縁部片が出土している。波状口縁下には沈線によって描かれた楕円文の中を縄文で充填する。時期は加曽利EⅢ式期と捉えてよいものであろう。

SK-042（第12・20図、図版20）

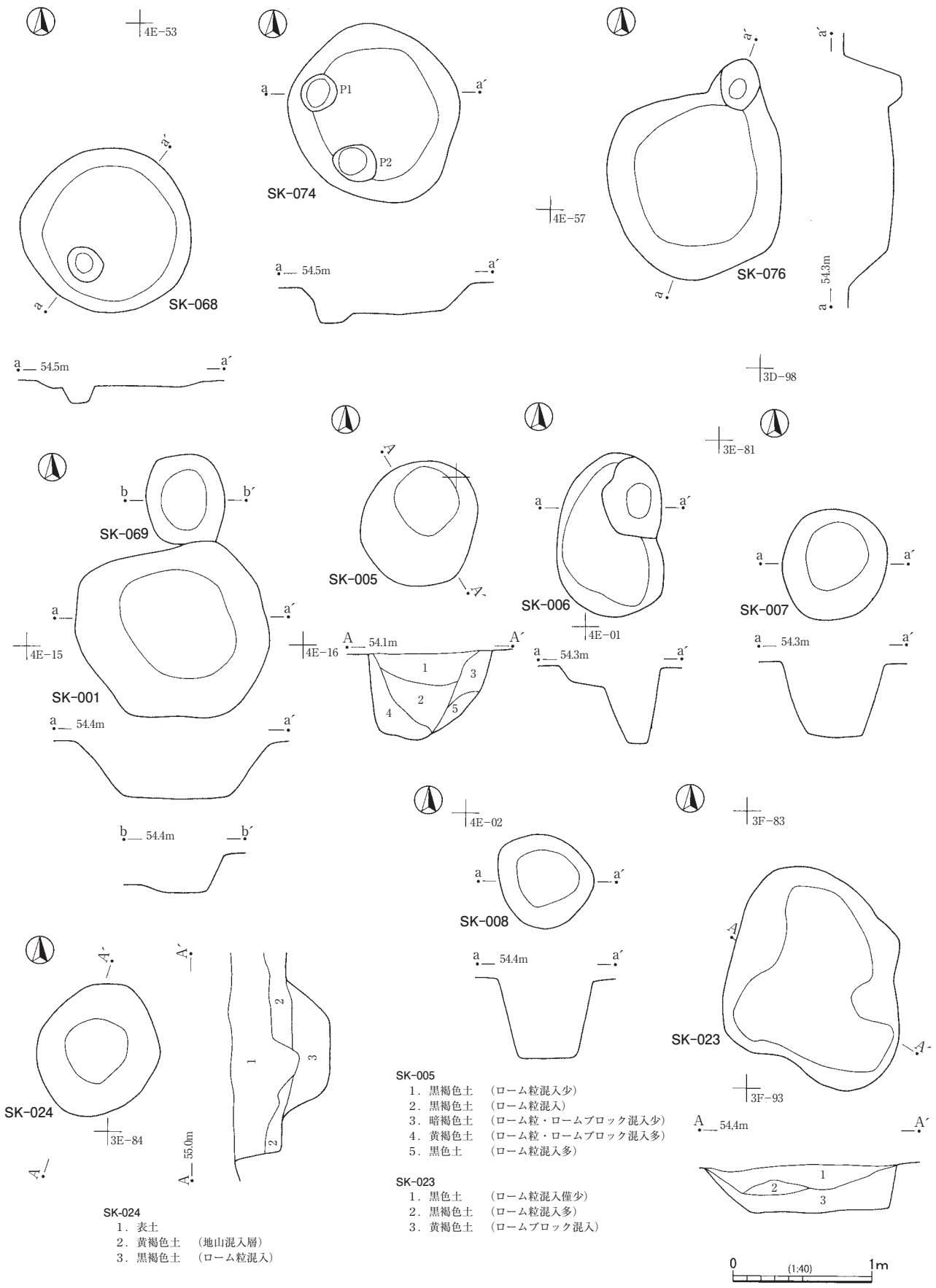
本跡はSK-019の壁面に穿たれた柱穴状の遺構である。遺物は図示したように小規模な遺構としてみれば多いといえよう。SK-019との関連は把握できなかった。図示した土器はおおむね加曽利ＥⅡ式の範疇に入るものである。19は無文の浅鉢と考えられる。

SK-049（第15・20図、図版20・21）

本跡は整った掘り込みとはいえないが長楕円形を呈している。出土遺物には土器と石器がみられ、胴部片の２点と石鏃片を図示した。25は左端に沈線がみられる。27は有茎鏃を製作中に破損したものと考えられる。有茎部の表裏面にはきれいに押圧剥離が施されている。

SK-054（第15・20図、図版21）

本跡は集中して検出された土坑群中の１基で形態的に整ったものとはいえず掘り込みも浅い。若干の土器片も出土したが図示できるものはなかったが、石鏃の未成品が出土している。一部には自然面もみられ

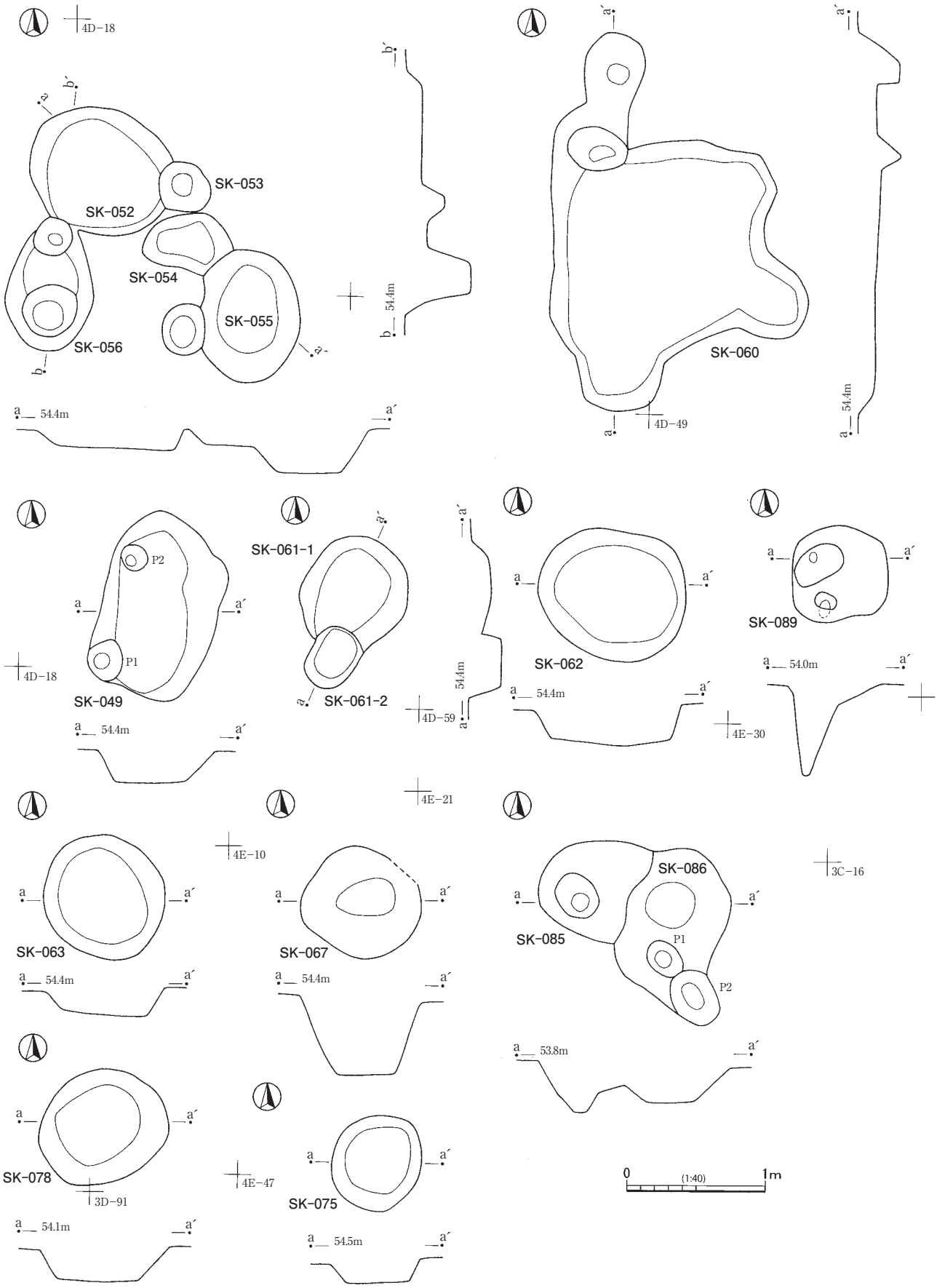


SK-005
1．黒褐色土　（ローム粒混入少）
2．黒褐色土　（ローム粒混入）
3．暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック混入少）
4．黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック混入多）
5．黒色土　（ローム粒混入多）

SK-023
1．黒色土　（ローム粒混入僅少）
2．黒褐色土　（ローム粒混入多）
3．黄褐色土　（ロームブロック混入）

SK-024
1．表土
2．黄褐色土　（地山混入層）
3．黒褐色土　（ローム粒混入）

第14図　SK-001・005・006・007・008・023・024・068・069・074・076



第15図　SK-049・052・053・054・055・056・060・061-1・061-2・062・063・067・075・078・085・086・089

るところから扁平な小礫を剥離し石鏃の素材としたものである。

SK-055（第15・20図、図版20）

本跡はSK-054と接して検出されたものであり、きれいな楕円形を呈している。図示できる胴部片が出土した。３本一組の沈線が垂下する。磨り消しが認められないため加曽利ＥⅠ式となろう。

SK-062（第15・21図、図版20）

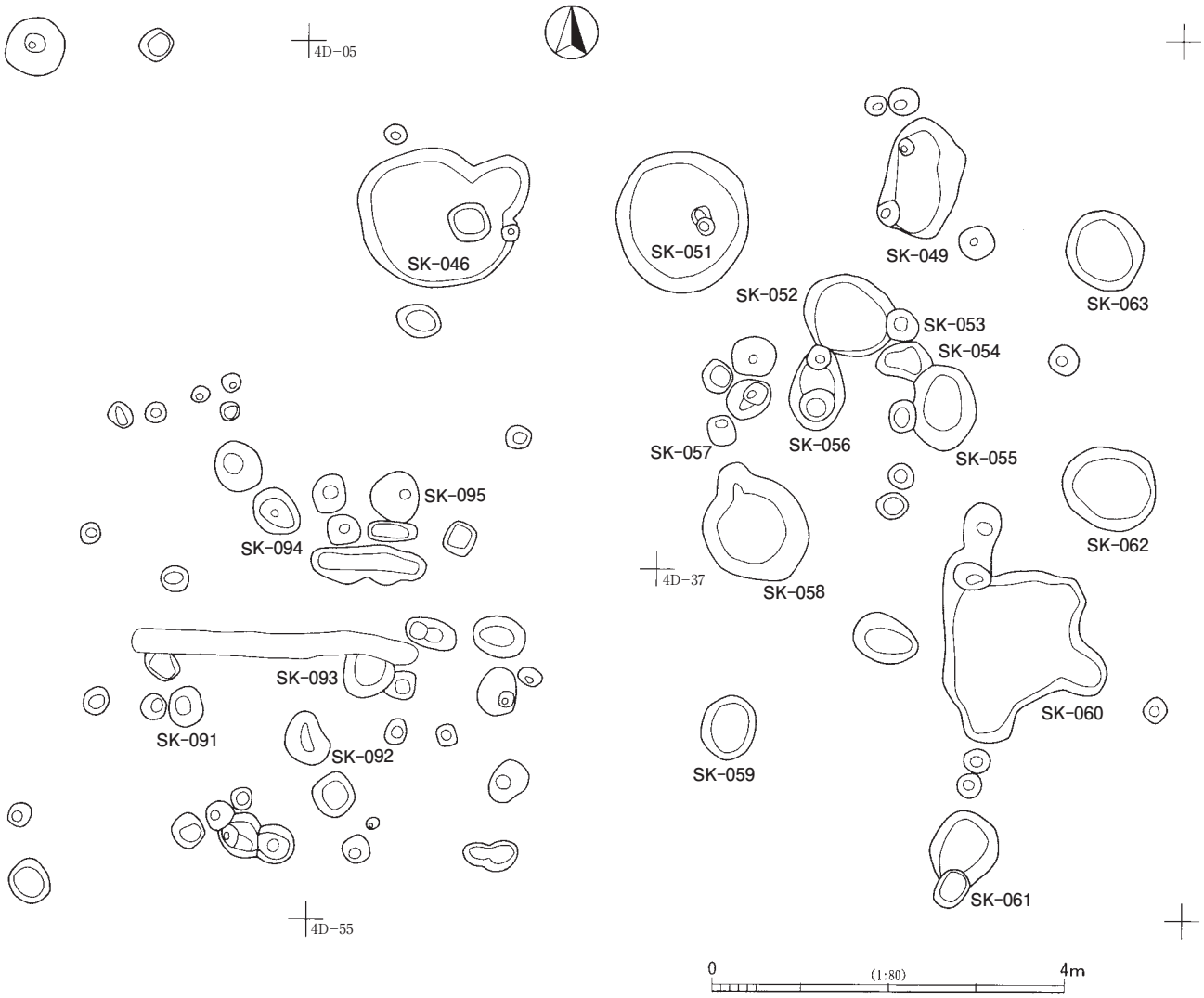
本跡は東西に長軸をもち壁面もしっかりした土坑となっている。出土遺物は土器のみであるが、図示できるものが３点みられた。１・２は口縁部片で、口縁直下には楕円によって区画された縄文がみられる。３は磨消帯の幅は広くなっている。いずれも加曽利ＥⅡ式とみてよいであろう。

SK-067（第15・21図、図版21）

本跡は北東の一部が陥穴状の遺構と重複していた。底面の形は楕円形となるが、掘り込みも深く壁面もしっかりしたものであった。出土した石器は敲石で表面には広範囲に打痕の痕跡が認められる。裏面でも中央部に打痕が残る。

SK-070（第21図、図版21）

本跡は楕円形を呈した小規模なピットで覆土中から先端の一部が欠損した石鏃が出土している。表裏両面には石鏃らしい丁寧な整形が施されている。



第16図　SK-046・051・091・092・093・094・095

SK-071（第21図、図版21）

本跡も小規模なものでSK-070から南東へ1.5mほど離れて検出されたものである。ここでも石鏃が出土している。形状は不整形で先端部と左側を大きく欠損している。

SK-077（第12・21図、図版20）

SK-040内で検出されたピットで小竪穴に伴うものかどうか即断できなかったため土坑として取り扱った。出土土器は口縁部片で口縁直下に３条の沈線が横走する。沈線以下は竹管状工具による縦方向の沈線で充填される。時期的には加曽利EⅡ式でも新しいタイプとなろう。

SK-085・086（第15・21図、図版20）

本跡は東西に接したような形で検出されたものである。若干の土器片が出土したが図示できるものは少なかった。いずれも胴部で沈線間に磨り消しが認められる。

SK-087（第17・21図、図版５・17）

３C-06と３C-16の間に深鉢の底部が単独で出土したものをSK-087とした。周辺は図示したように柱穴状のピットは認められるが、炉跡を想定できるような痕跡は認められなかったため、単独の土坑として扱った。このような検出例の状況から埋甕とも考えられる。出土した土器は胴下半部から、底部が遺存するもので縄文地に３本一組の沈線が認められる。沈線間は狭いが磨り消されているようである。時期的には加曽利EⅡ式期となろう。

SK-091（第16・21図、図版21）

本跡は柱穴状のピットで掘り込みも深く、周辺では多数のピットが確認されている。住居跡の存在も考えられるためSK-093を中心に精査を継続したが、焼土の痕跡や一括土器等を発見することはできなかった。出土した石器は敲石で表面の中央部には凹みが認められ、長期にわたって使用されていたものと思われる。

SK-095（第16・21図、図版21）

本跡もSK-091と同様のピットで敲石が１点出土した。下端部には明確な打痕が認められる。

第４表　久保堰ノ台遺跡１土坑計測表　（数値単位＝cm）

	遺構番号	位置	形状	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備　考
1	SK-001	4E-05	不整円形	145	134	38	0			
2	SK-003	4E-00	楕円形	98	77	60	0			
3	SK-004	4E-00	不整円形	62	55	26	0			
4	SK-005	3D-99	楕円形	90	81	60	0			
5	SK-006	3E-91	楕円形	119	77	15	1	1	40	P１本跡に伴うものではない
6	SK-007	3E-81	円形	80	76	55	0			
7	SK-008	4E-02	楕円形	70	63	60	0			
8	SK-017-1	3C-78	楕円形	130	105	46	0			
9	SK-018	3C-77	不整方形	188	165	50	3	1 2 3	34 23 31	
10	SK-022	3D-74	円形	55	52	7	0			SK-010に隣接
11	SK-023	3F-83	不整形	168	140	35	0			
12	SK-024	3E-73	楕円形	100	86	30	0			
13	SK-025	4C-28	楕円形	77	60	8	0			SI-007炉跡（第９図参照）
14	SK-028	4C-17	楕円形	86	55	24	0			第９図参照
15	SK-038	3D-75	円形	57	50	5	0			図省略
16	SK-041	3D-95	不整形	－	－	25	0			撹乱有り
17	SK-042	3C-87	円形	40	40	35	0			

	遺構番号	位置	形状	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備　考
18	SK-049	4D-08	長楕円形	136	85	25	2	1	13	P２－記録なし
19	SK-052	4D-18	楕円形	108	90	13	0			
20	SK-053	4D-18	円形	40	36	－	0			
21	SK-054	4D-18	不整形	65	45	10	0			
22	SK-055	4D-28	楕円形	95	70	30	0			
23	SK-056	4D-17	楕円形	95	65	25	2	1 2	10 30	
24	SK-057	4D-27	楕円形	35	22	29	0			
25	SK-059	4D-37	楕円形	255	235	35	0			
26	SK-060	4D-39	不整形	220	190	20	2	1 2	18 16	
27	SK-061-1	4D-48	楕円形	－	75	14	0			
28	SK-061-2	4D-48	楕円形	45	35	23	0			
29	SK-062	4D-38	楕円形	107	94	26	0			
30	SK-063	4D-19	楕円形	94	86	20	0			
31	SK-067	4D-29	隅丸方形	82	76	57	0			
32	SK-069	4E-05	楕円形	65	57	25	0			
33	SK-070	4E-14	楕円形	35	24	12	0			
34	SK-071	4E-25	円形	40	38	8	0			
35	SK-072	4E-24	円形	52	50	64	0			
36	SK-073	4E-34	円形	36	35	41	0			
37	SK-075	4E-37	円形	69	65	15	0			
38	SK-077	3D-86	楕円形	43	38	－	0			SK-040に伴うピットか
39	SK-078	3D-81	楕円形	93	81	24	0			
40	SK-079	3D-83	円形	36	35	65	0			
41	SK-084	4D-02	円形	50	47	63	0			
42	SK-085	3C-15	(楕円形)	－	75	41	0			
43	SK-086	3C-15	楕円形	105	75	25	2	1 2	3 11	
44	SK-087	3C-16		－	－	－	0			土器のみ単独出土
45	SK-088	3C-87	楕円形	55	35	52	0			
46	SK-089	3C-77	隅丸方形	80	68	14	2	1 2	65 11	
47	SK-090	3C-76	円形	60	58	40	0			
48	SK-091	4D-34	円形	45	40	65	0			
49	SK-092	4D-34	不整形	61	45	44	0			
50	SK-093	4D-35	（円形）	62	(50)	17	0			一部が溝により削平
51	SK-094	4D-25	円形	40	35	38	0			
52	SK-095	4D-25	円形	57	56	87	0			
53	SK-100	3C-38	円形	54	53	12	0			

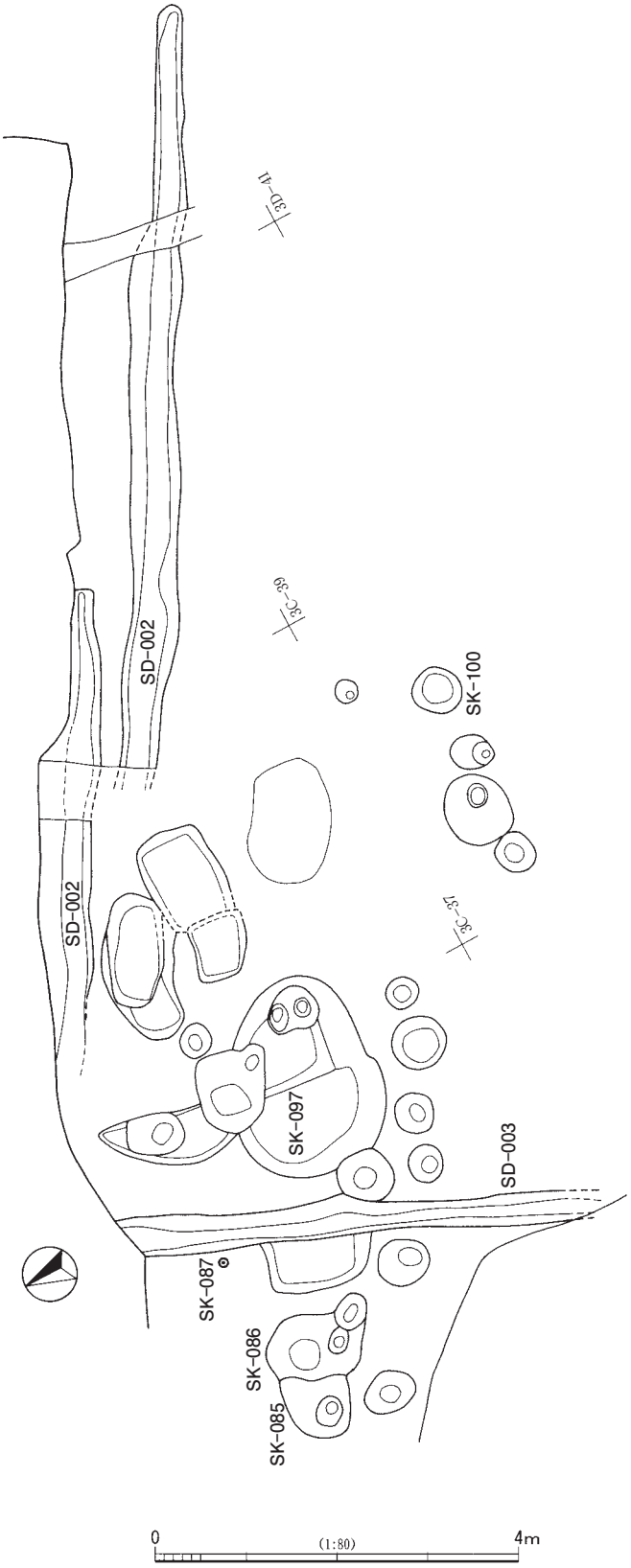
第４節　溝状遺構

今回の調査で３Ｃ・４Ｃ区と３Ｄ区の北側に溝状の落ち込みが認められた。それぞれSD-001からSD-003として調査を進捗させていったが出土遺物は少なく遺構の時期を決定づけるまでには至らなかった。SD-001は４C-30・40グリッドから南に向かう形の溝状遺構であるが、調査区ぎりぎりで検出されたため２ｍほどの調査で終わった。SD-002-1は３D区から３C区へと続くようであり、一部はSD-002-2と平行しつつ北西に進んでいくようであった。

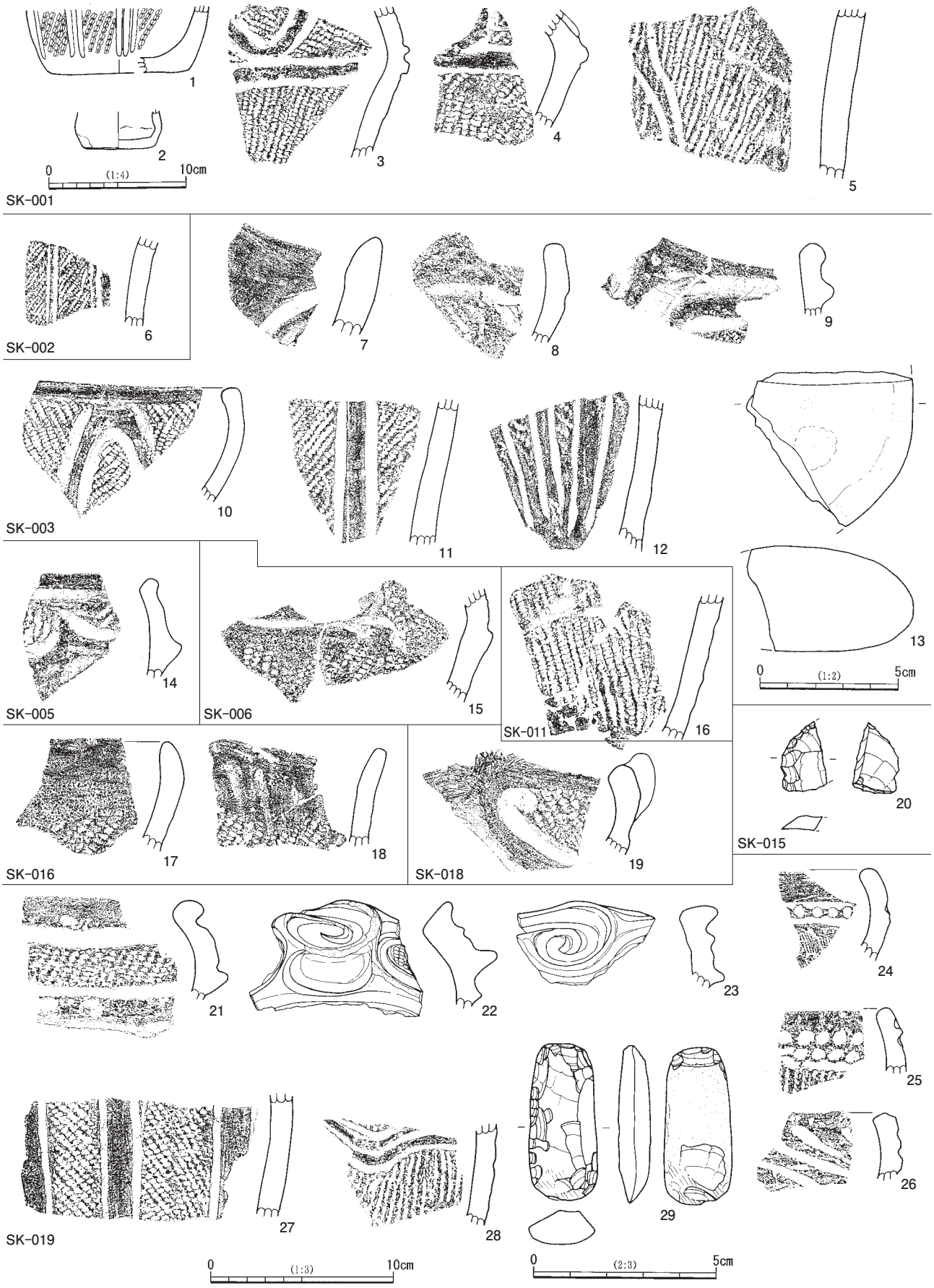
SD-003は両端が調査区外へ向かっているため、５ｍほどの調査で終了せざる得なかった。こうした溝状遺構は後述する久保堰ノ台遺跡２でも検出されており、本遺跡よりも規模が大きく遺存状態も良好であった。

出土遺物も少数ながら良好な近世陶磁器が出土している。そして第２章でも触れたが、久保堰ノ台遺跡１と久保堰ノ台遺跡２は同一台地上に存在している遺跡であるためここで検出された溝状遺構も近世に属

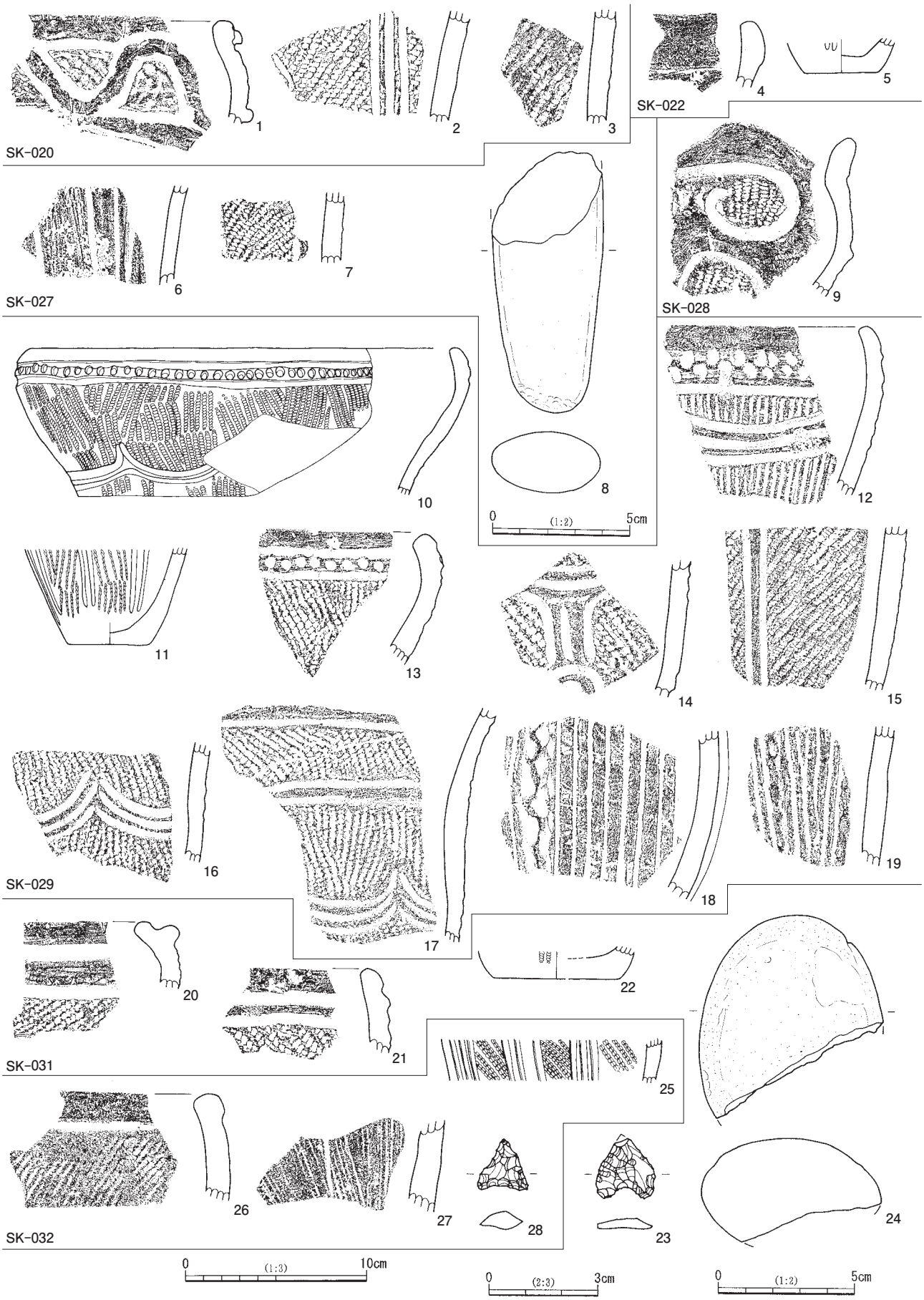
するものと考えても間違いないであろう。ただ、遺物は近世陶磁器や縄文土器の小片と若干の石器が出土したものの、図示できる遺物は石器だけであったため陶磁器については久保堰ノ台遺跡２で触れることにしたい。



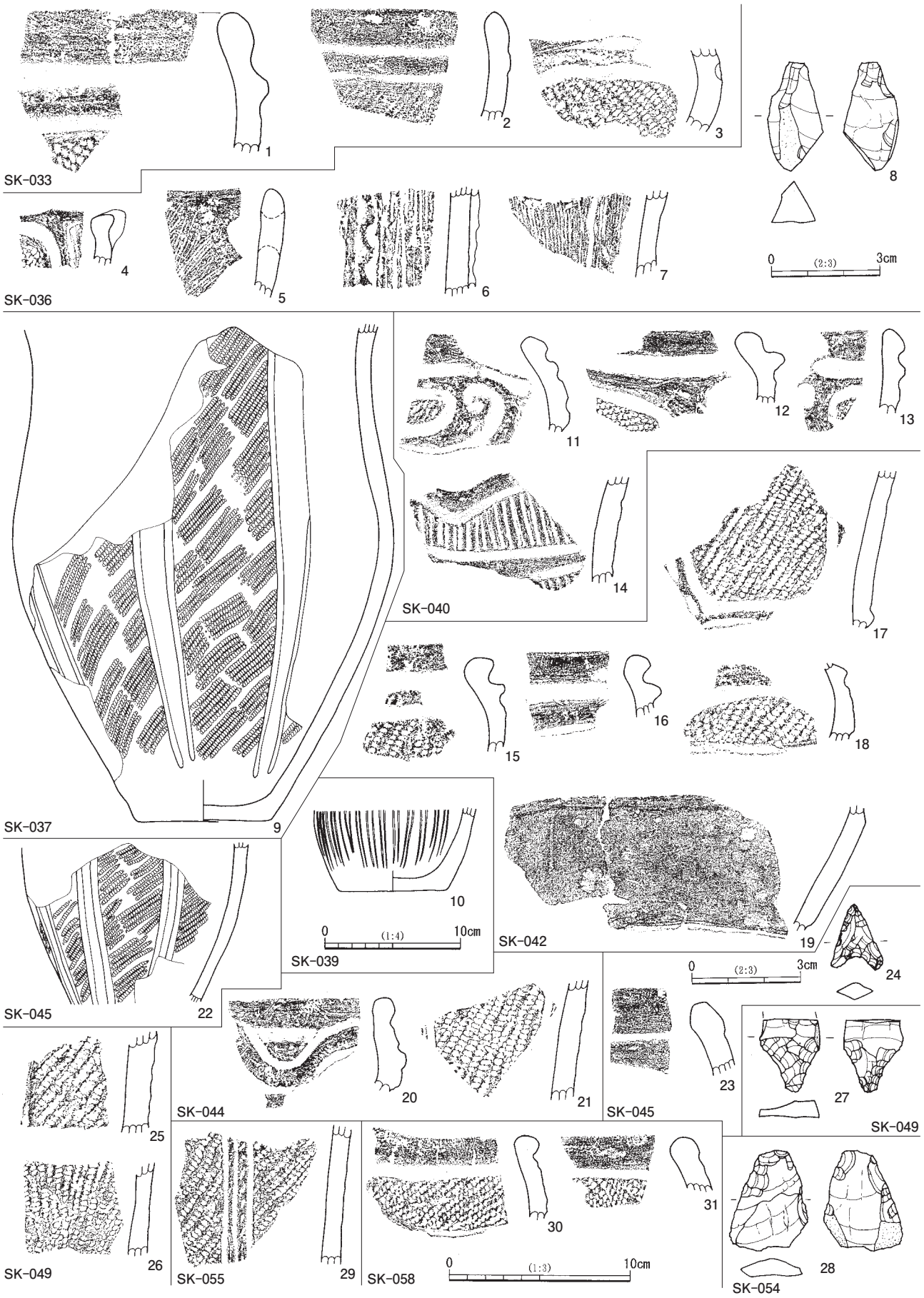
第17図　SK-087・097・100、SD-002・003



第18図　SK-001・002・003・005・006・011・015・016・018・019出土遺物



第19図　SK-020・022・027・028・029・031・032出土遺物



第20図　SK-033・036・037・039・040・042・044・045・049・054・055・058出土遺物

第５節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物についてみると、縄文土器は出土はしているが、小片あるいは器面が磨耗しており図示に適さないものが多かった。そのため本節では石器群についてのみ掲載することとした。

14・15は石鏃であるが、２点とも未成品である。14は欠損部がみられないため成品とも思われるが、基部の作りや側縁の整形から未成品とした。15は側縁の表裏に加工がみられる。製作途中で破損したものであろう。

17は楔形石器である。扁平な小礫の一端に両面から加撃しているため楔形石器とした。刃部は４回～５回の剥離によって簡単に作り出されている。

18は打製石斧である。頭部が欠損した打製石斧で表裏面に自然面がみられるため扁平な礫を利用し刃部や側縁を作出したものである。刃部には打痕のような痕跡もみられる。

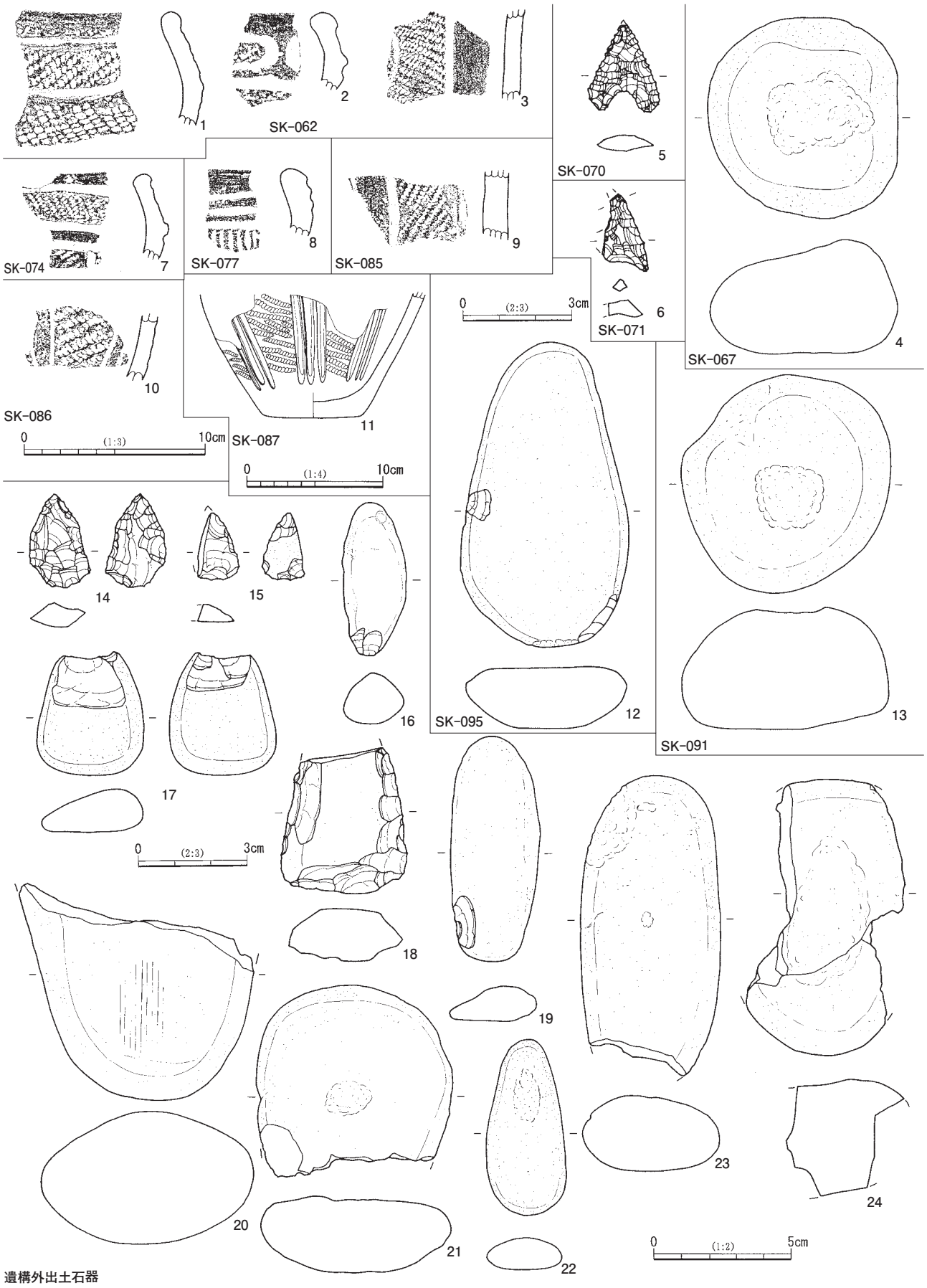
20は大きく欠損した磨石であり表面の斜線部では研磨したような滑らかな面が観察できる。

21・23・24は敲石で、いずれも欠損している。21・24は磨石を兼用したものである。中央部には敲打による凹みが認められる。23は左上部側面に著しい打痕がみられ、欠損部にも若干の打痕が認められる。

16・19・22は石器素材である。16は下端部に２回の剥離が試みられている。19・22には剥離と軽い打痕がみられる。19や22は小型磨製石斧の素材ともなり得る扁平な礫である。

第５表　久保堰ノ台遺跡１出土石器一覧表

挿図No.	出土地点	遺物番号	器　種	石　材	長（㎜）	幅（㎜）	厚（㎜）	重量（ｇ）	備　考
第６図　5	SI001	23	石鏃	黒曜石	22.21	(15.55)	4.42	(1.0)	
第６図　6	SI001	6	楔形石器	黒色頁岩	38.47	40.45	6.6	16.5	
第６図　7	SI001	20	スクレイパー	ガラス質デイサイト	43.34	34.28	13.38	18.7	
第６図　8	SI001	7	楔形石器	頁岩	30.37	28.16	7.88	8.9	
第６図　9	SI001	31	打製石斧	石英斑岩	(51.98)	(44.29)	(19.43)	(58.9)	
第６図　12	SI002	20	石鏃	黒曜石	15.69	16.41	4.4	0.9	
第６図　13	SI002	37	楔形石器	黒曜石	20.9	18.15	7.06	2.7	
第６図　14	SI002	－	敲石	石英斑岩	121.25	66.33	40.82	456.8	
第６図　15	SI002	33	敲石	ホルンフェルス	127.76	81.57	43.74	593.6	
第８図　15	SI006	7	敲石	石英斑岩	93.42	62.56	47.45	398.6	
第８図　16	SI006	3	敲石	砂岩	73.84	40.85	17.85	85.6	
第18図　13	SK003	2	磨石	石英斑岩	(54.27)	(60.4)	37.77	(160.3)	
第18図　20	SK015	－	石鏃	チャート	18.98	(12.28)	4.15	(1.3)	
第18図　29	SK019	7	磨製石斧	チャート	43.17	19.11	9.38	10.8	
第19図　8	SK027	1	敲石	砂岩	(96.66)	41.11	23.39	(118.8)	
第19図　23	SK031	3	石鏃	黒曜石	(16.76)	16.23	2.88	(0.8)	
第19図　24	SK031	2	磨石	砂岩	(77.47)	66.7	(22.72)	(206)	
第19図　28	SK032	1	石鏃	チャート	14.45	14.1	4.36	0.7	
第20図　8	SK036	3	剥片	チャート	30.04	15.64	11.24	4.5	
第20図　24	SK045	8	石鏃	チャート	18.75	14.09	5.04	0.8	
第20図　27	SK049	2	石鏃	チャート	(19.83)	16.73	5.26	(1.8)	
第20図　28	SK054	1	石鏃	頁岩	28.06	21.4	4.06	2.6	
第21図　4	SK067	2	敲石	石英斑点	75.51	69.57	41.9	287.5	
第21図　5	SK070	2	石鏃	黒曜石	24.19	19.84	4.06	1.2	
第21図　6	SK071	1	石鏃	黒曜石	(23.14)	(13.48)	5.29	(1.2)	
第21図　13	SK091	1	敲石	チャート	78.12	77.67	(49.31)	(427.7)	
第21図　12	SK095	1	敲石	石英斑点	112.09	62.23	23.32	232.0	
第21図　22	SK102	1	敲石	ホルンフェルス	64.61	29.15	12.92	33.1	
第21図　23	SH002	2	敲石	砂岩	11.06	51.43	27.84	236.5	
第21図　19	SH003	1	礫	角閃岩	82.76	33.18	13	52.1	
第21図　15	SD002	1	石鏃	チャート	(36.76)	(11.2)	4.48	(1.1)	
第21図　14	トレンチ	47	石鏃	チャート	25.82	16.82	6.21	2.7	
第21図　16	トレンチ	17	礫	流紋岩	56.4	23.1	19.57	32.6	
第21図　17	トレンチ	35	楔形石器	砂岩	(34.14)	30.08	11.79	(16.1)	
第21図　18	トレンチ	42	打製石斧	砂岩	(53.88)	46.16	21.68	(73.1)	
第21図　20	トレンチ	34	磨石	砂岩	(75.64)	77.12	48.12	(362.5)	
第21図　21	トレンチ	17	敲石	石英斑点	(66.77)	72.37	29.39	(207.7)	
第21図　24	トレンチ	32	敲石	砂岩	102.03	(44.05)	46.28	(321.6)	



第21図　SK-062・067・070・071・074・077・085・086・087・091・095、遺構外出土遺物

第４章　久保堰ノ台遺跡２

本遺跡は上層6,500㎡を調査した結果、住居跡16軒、小竪穴26基、土坑118基と数条の溝を検出できた。住居跡は４Ｊ区とその周辺で12軒以上が集中的に検出された。とりわけ中期の加曽利ＥⅡ式期では一定規模の集落を構成していたものであろう。小竪穴は住居跡周辺で18基と東側で８基が検出されている。また土坑の分布は中央部の空白部を除き希薄ながらも全面にみられた。そのほかに調査区東側の５Ｏ区や５Ｐ区を中心としてピット多数が認められた。しかし、これらのピットの大半は遺構との関連を正確に把握することができなかった。

なお、住居跡については調査時点で遺物の出土状況から、その存在を想定して番号を付していったものである。しかし、整理作業を進捗させていく中で堆積土や遺物の出土量、炉跡や柱穴の存在等を検討した結果、遺構としての根拠を見い出せないものについてはすべて欠番として取り扱った。そのため遺構･遺物の記載については多々欠番が生じたことを付記しておきたい。

第１節　住居跡

SI-002（第24図、図版８）

本跡は遺跡北側の４Ｉ区と５Ｉ区に跨がるような形で検出されたものである。形状は北壁部分をSI-010によって破壊されているが、径はほぼ5.3mの円形を呈していたものと思われる。掘り込みは15㎝～20㎝と浅く、覆土は分離できなかった。覆土の色調は粘土混入の黒褐色土であった。壁面は状態の良好な部分で20㎝ほど遺存しており、周溝は一周していたようである。さらに壁際に沿って柱穴が検出されており、深いものでは床面下20㎝を超えるものもみられた。床面についてみると、南側から北方向に緩やかに傾斜しており、その差は15㎝ほどとなる。なお、床面下の堆積土は粘土を含む黄褐色土となっている。柱穴らしきピットは、壁に接したものを除くと12か所に認められる。主柱穴といえるピットは、その深さからＰ２、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ７、Ｐ９、Ｐ12などが該当するものと思われる。炉跡は周囲を礫で囲んで作られており、大小の礫を合わせて25点が使用されていた。いわゆる石囲い炉としてよいであろう。図示したように、完形品ではないが明らかに石器として使用された痕跡を残す剥片なども出土している。また炉跡の中心部では床面下20㎝以上を掘り込んでいた。

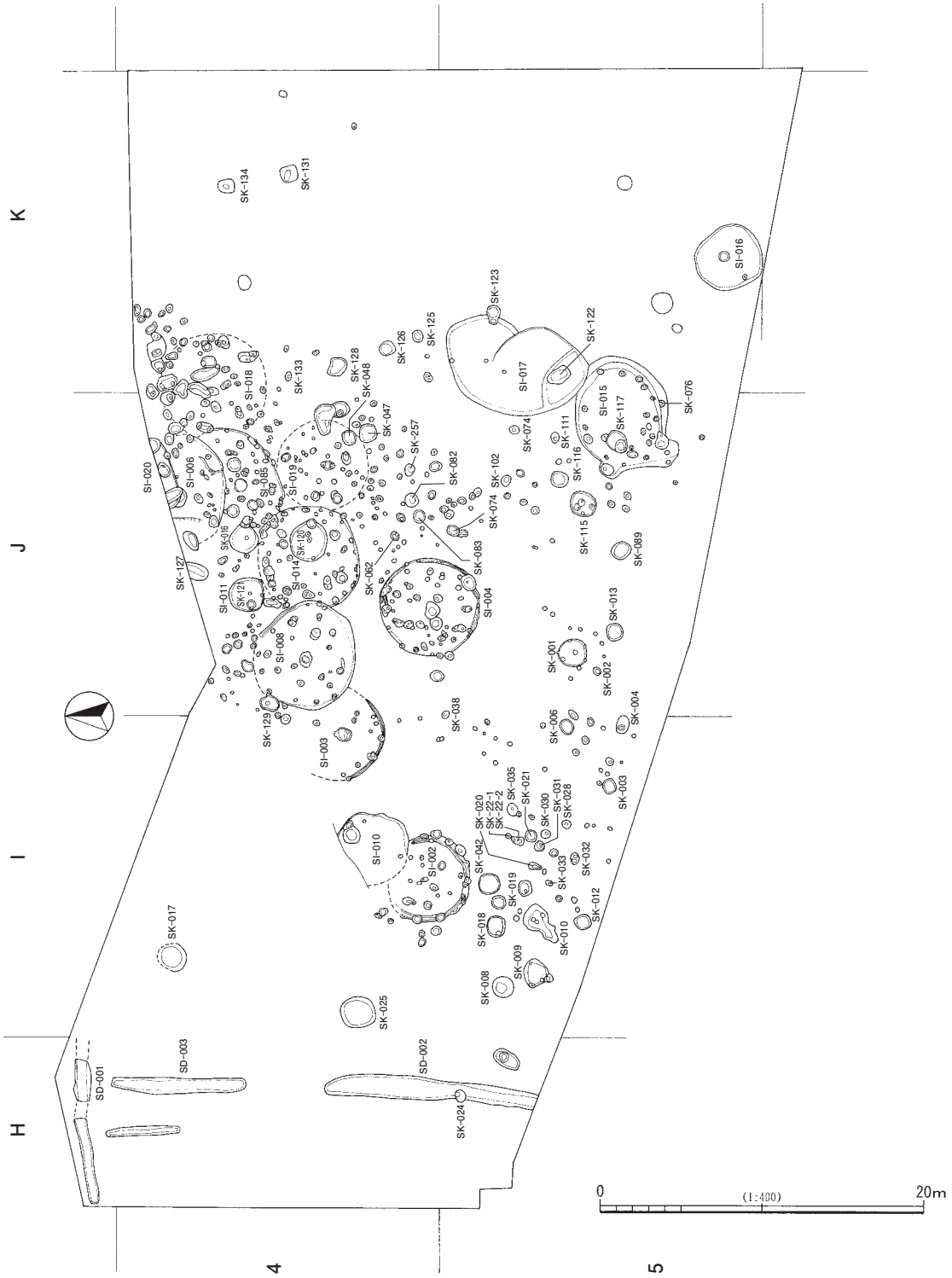
堆積土は、覆土が黒褐色土で覆われ、炉跡内は若干白色粘土が混入された黒色土であった。

遺物の出土状況についてみると、特に炉跡周辺では多量の土器・石器が出土している。さらに中央やや北寄りに一括土器（２点）が出土し、１点は底部が上となり倒立した形であった。石器では炉跡の周囲から磨石・敲石・石皿、覆土中から尖頭器・石鏃などが出土している。石器以外の礫の石材はほとんどが粒子の粗い軟質砂岩であった。

本跡の時期は多数出土した一括土器から加曽利EⅡ式期となろう。

SI-002　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

P 1 －9	P 2 －20	P 3 －9	P 4 －49	P 5 －21	P 6 －15	P 7 －48	P 8 －14
P 9 －37	P 10－9	P 11－12	P 12－24	P 13－26	P 14－10	P 15－26	P 16－107
P 17－19	P 18－18	P 19－22	P 20－22	P 21－16	P 22－14	P 23－27	P 24－15

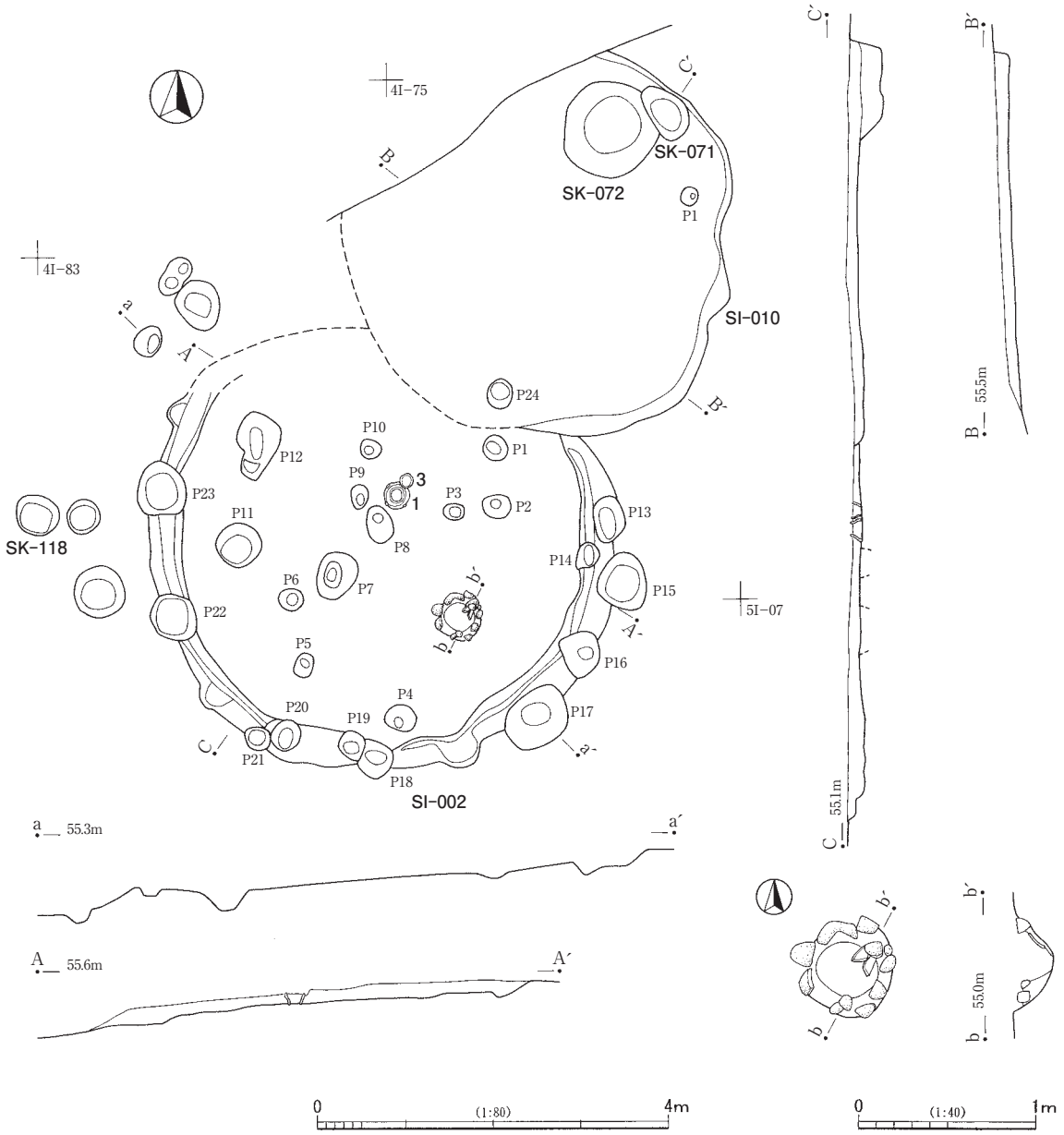


第22図　久保堰ノ台遺跡２全体図(1)

第23図　久保堰ノ台遺跡２全体図(2)

遺物（第25～27・28図、図版22～24・63・64）

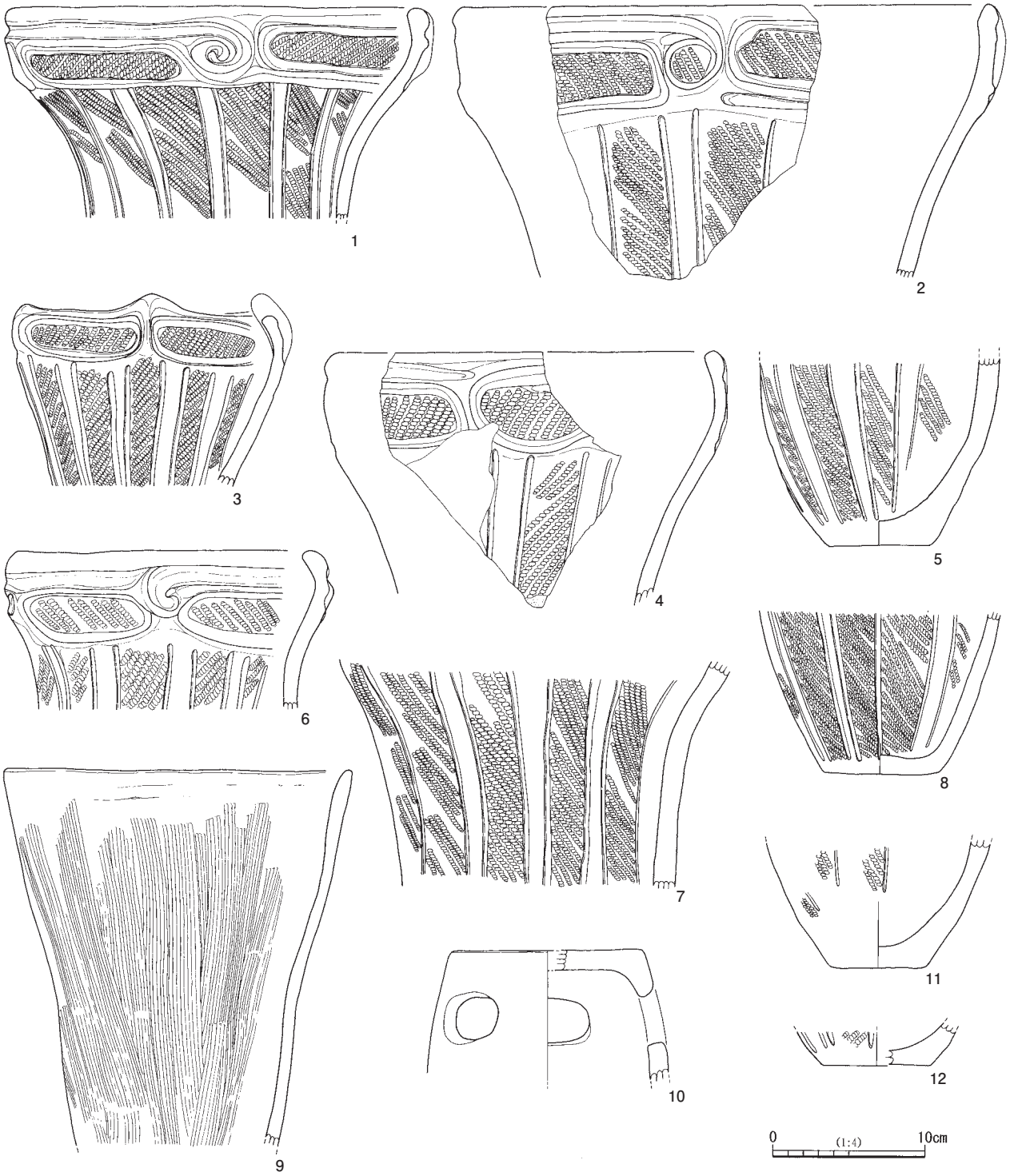
土器　ここでは実測可能な一括土器が多く出土した。１～８は同様な文様構成となる。１・２・６の口辺部には渦巻文がみられるが、２や６は簡略化されている。胴部は垂下する沈線間の縄文を磨り消している。１は、住居跡のほぼ中央に穿たれたＰ８とＰ９に隣接する位置で３と接して検出されたものである。いずれも底部が欠損しており、口縁部が被熱しているため一時的に炉跡として使用されたものであろう。２・４は大型の剥片であったため、径は推定による。13・14・16～21も同様なタイプとなろう。９はＰ７とＰ11の間で出土したものであり時期的にも近いものとなろう。器形は緩やかに外反するタイプで、器面は縦方向に櫛歯状工具で整形されている。他の一括土器と比較すると、器厚は7.5㎜前後と薄い。８はＰ４の北で出土している。また10はＰ19の上部から出土した器台のような土器で、上面と側面及び内面はきれい



第24図　SI-002・010

に整形され、一部には磨き状の調整も認められる。15・23～25は半截竹管状の工具により縦方向や斜行する沈線と貼付した粘土帯により装飾が施されている。これらは曽利系の土器となろう。22は撚糸文が施文されたものであり、いわゆる連弧文系の土器である。26・27には口縁直下に円形の刺突文が施される。22とほぼ同時期のものといえよう。なお、これらの土器群は大半が石囲い炉の周囲から出土したものである。

石器　本跡では土器と同様に石器の出土量も他の住居跡を凌駕していた。器種も豊富で石鏃･楔形石器・



第25図　SI-002出土土器(1)

磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・石皿の７種がみられた。また11・14・15・17～20は石囲い炉の一部となっていた。破損品を再利用したものと考えられ、被熱により一部赤化している部分もみられた。なお、石材や計測値については遺構外出土遺物の項で一覧表としてまとめてある。

１は尖頭器である。完形品であり、左右は非対称といえる。その形状や石材から旧石器時代に属するものとなろう。旧石器時代に属する唯一の製品である。

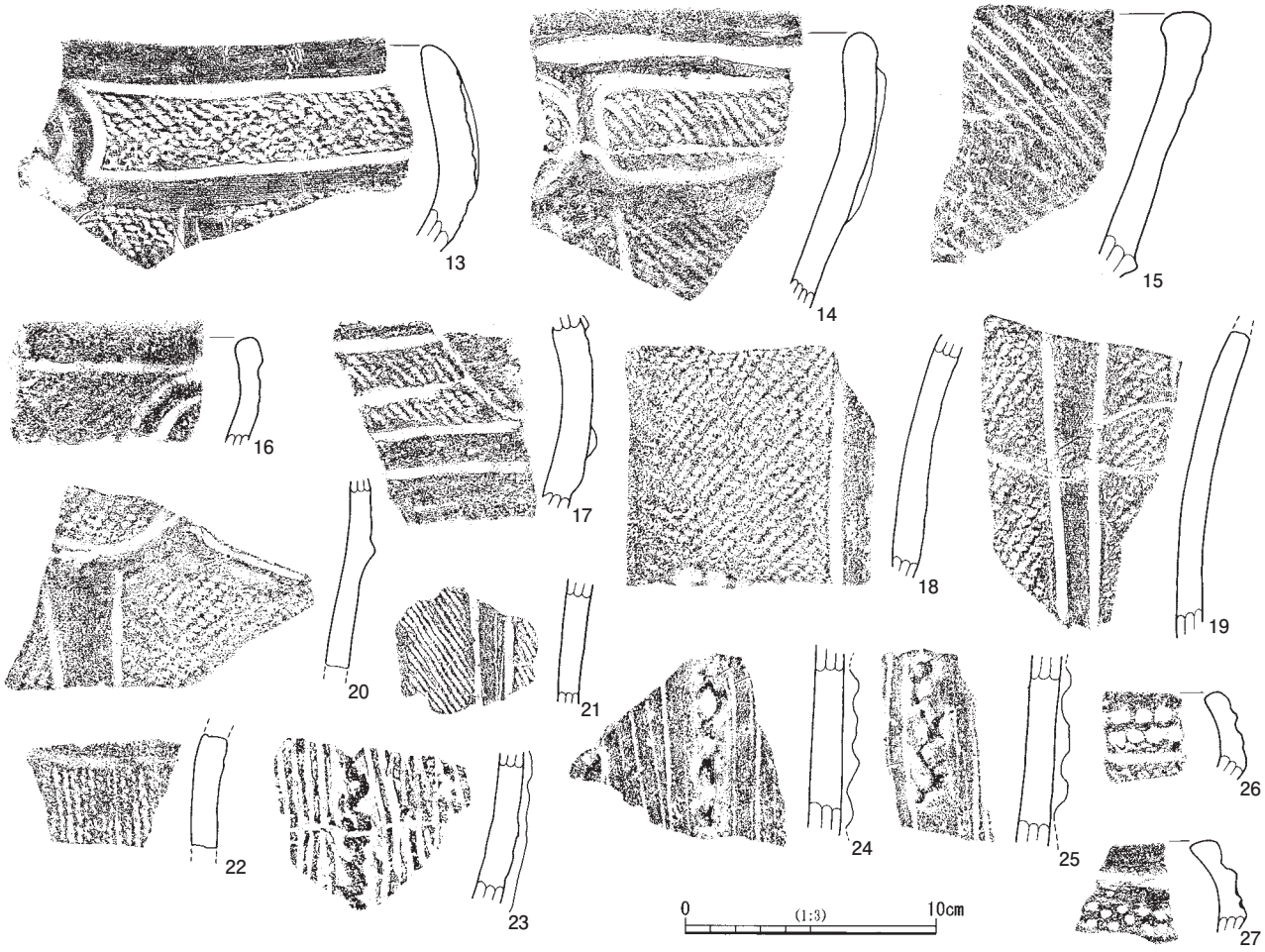
２・３は石鏃である。２点はともに欠損品である。３のように抉りをもたない幅広の大型品は概して作りが粗雑である。

４は楔形石器である。上部では両面からの剥離が観察できるため楔形石器とした。下部でも整形のための剥離が数回施されている。

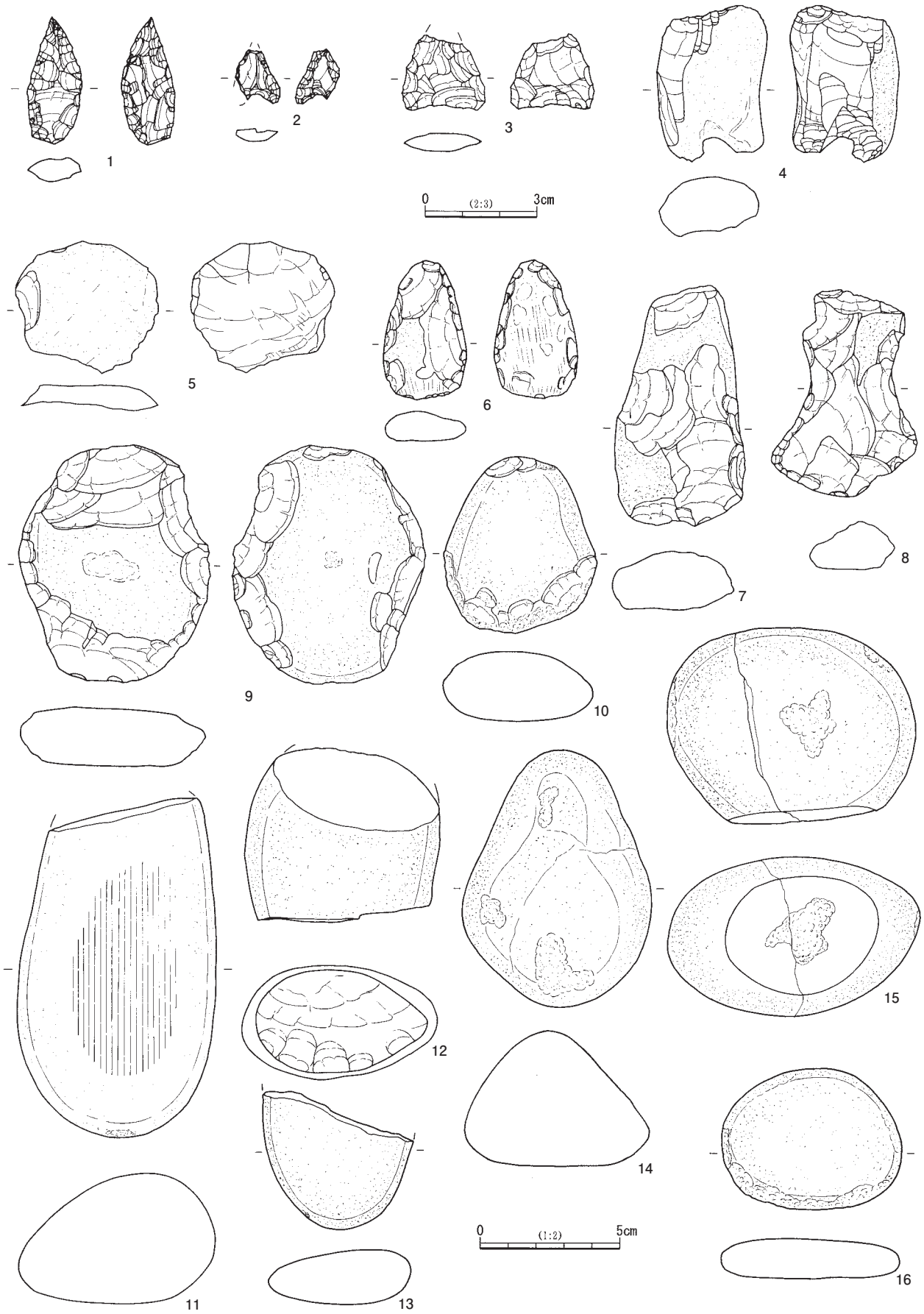
５は剥片である。石器に加工されてはいないが、一部に小さな剥離が施されている。石器として使用されたか、あるいは素材として剥離されたものであろう。

６は磨製石斧である。小型品で研磨部分は一部にしか認められない。刃部での研磨が明確に認められたため磨製石斧とした。周囲の剥離から打製石斧として再利用された可能性も否定できない。

７～９は打製石斧である。３点出土しており、大きな欠損は認められない。ただ、いずれも作りは粗雑であり、９は表裏面に打痕が認められる。また両側面を剥離し、上下を大きく剥離することによって刃部を作出している。簡単な作りであるが石斧としての条件は満たしているものといえる。



第26図　SI-002出土土器(2)

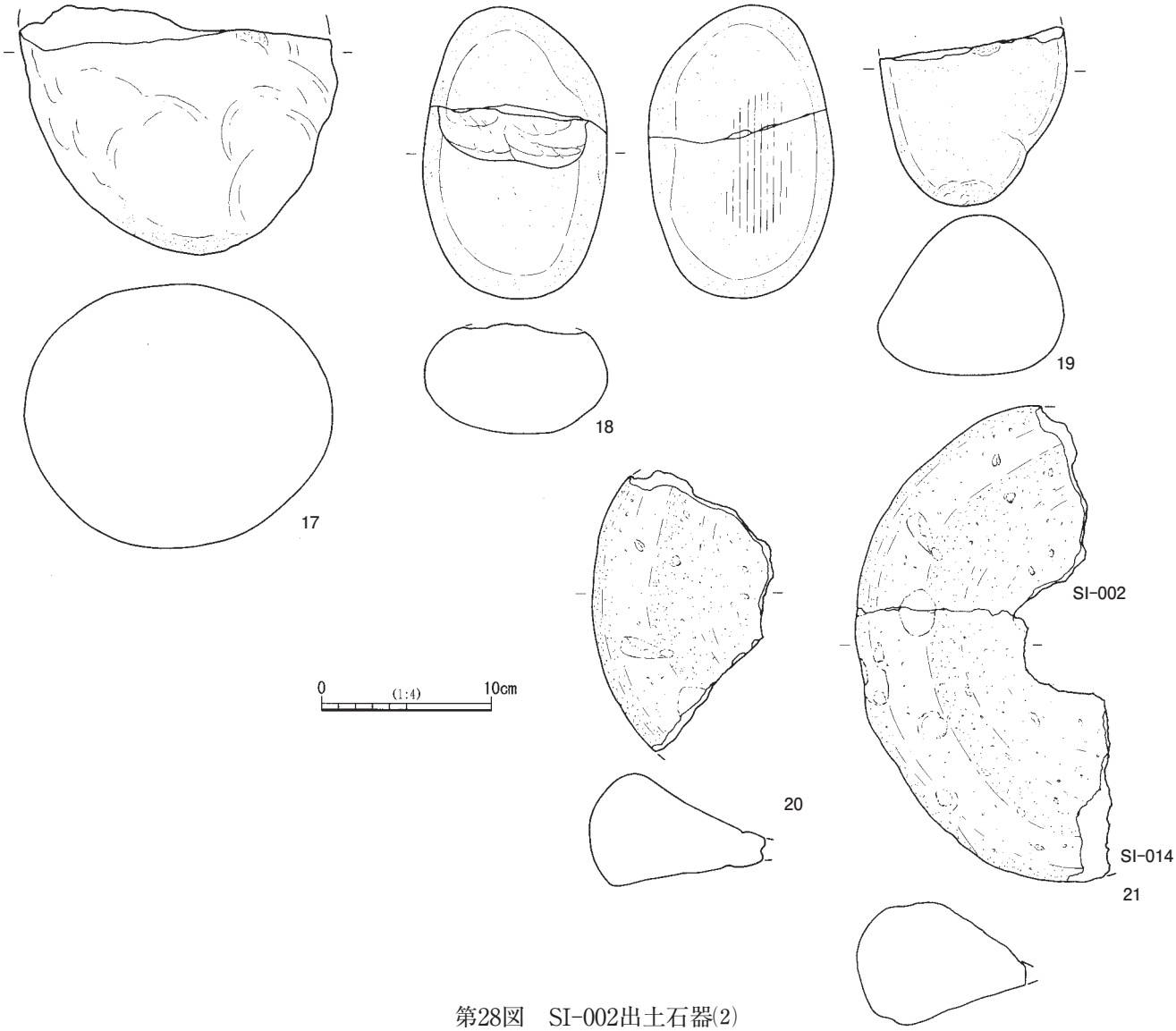


第27図　SI-002出土石器(1)

11～13・18は磨石である。11の下端には僅かではあるが打痕が確認できる。表裏面は側面と比較して滑らかな面がみられたため線描で表現した。12・13ではそれほど顕著な使用痕は認められない。18も11のようなタイプで表面の赤化は破損部でも確認できるため打割した後、炉に設置されたものであろう。

10・14～17・19は敲石である。10の上下端には顕著な打痕が観察できる。剥離はその時に生じたものであろう。また、表面の一部には滑らかな面もみられるため磨石としても利用されたものであろう。14では表面や側面だけでなく平坦な破砕面にも打痕が認められる。17は特異な存在といえよう。これも炉の周辺から出土しており、遺存する形状から約40％は欠損していると考えられる。遺存重量は4.75kgを計測するところから本来は９kgほどの重さであったろう。表面は被熱によるものか著しく剥落している。そのため使用痕等は確認できないが、球形で住居跡内出土という点を考慮すると道具として使用していたと考えることが妥当であろう。このため敲石として分類した。19も遺存部の重量が1.26kgで1/2以上は欠失している。打痕は下端部に明確に残っている。

20は石皿である。約1/4が遺存したもので中心部にむかって大きく凹んでおり長期間使用されたものであろう。21はSI-014と接合する石皿である。約1/2遺在している。



第28図　SI-002出土石器(2)

SI-003（第29図、図版８）

本跡は前述したSI-002の北東約５ｍに位置し、４I-68グリッドで検出されたものである。ここでも地山は北方向に傾斜しており、本跡の約3/5の壁面は消失していた。遺存状態の良好な南壁部分でも覆土の厚みは２㎝～３㎝と薄く、周溝が存在していたため辛うじて住居跡との境界を確認することができた。遺存した周溝部分から本跡の形状は円形で、その径は６ｍ前後であったと考えられる。柱穴は、ピットが11か所に残されており、Ｐ１、Ｐ３～Ｐ５などは床面下の深さ（26㎝～61㎝）やその位置から柱穴の可能性が強い。そのほか、壁面に接したピットは壁柱穴と考えられる。床面の遺存部は比較的平坦であった。炉跡はしっかりとした姿で残されていた。南壁から２ｍほど離れて、長径90㎝、短径80㎝の楕円形を呈していた。

堆積土は粘性のある黒褐色土であった。炉跡部分では３層に分離できた。第１層は黒褐色土（若干の土器片がみられ、焼土ブロックと炭化物を含む）。第２層は黒褐色土（焼土と炭化物を少量含む）。第３層は黄褐色土（黒色土と焼土、砂粒を少量含む）となり、焼土や炭化物を含有するところから炉跡とみて間違いないであろう。

出土遺物の出土状況についてみると、覆土中から土器片10数点出土したが一括品は認められなかった。石器は磨石や打製石斧、石鏃片などが出土している。

本跡の時期は出土土器からみて加曽利ＥⅡ式期でも新段階の時期となろう。

SI-003　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝㎝）

Ｐ１－61	Ｐ２－８	Ｐ３－26	Ｐ４－33	Ｐ５－38	Ｐ６－31	Ｐ７－19	Ｐ８－20
Ｐ９－32	P10－50・31	P11－10					

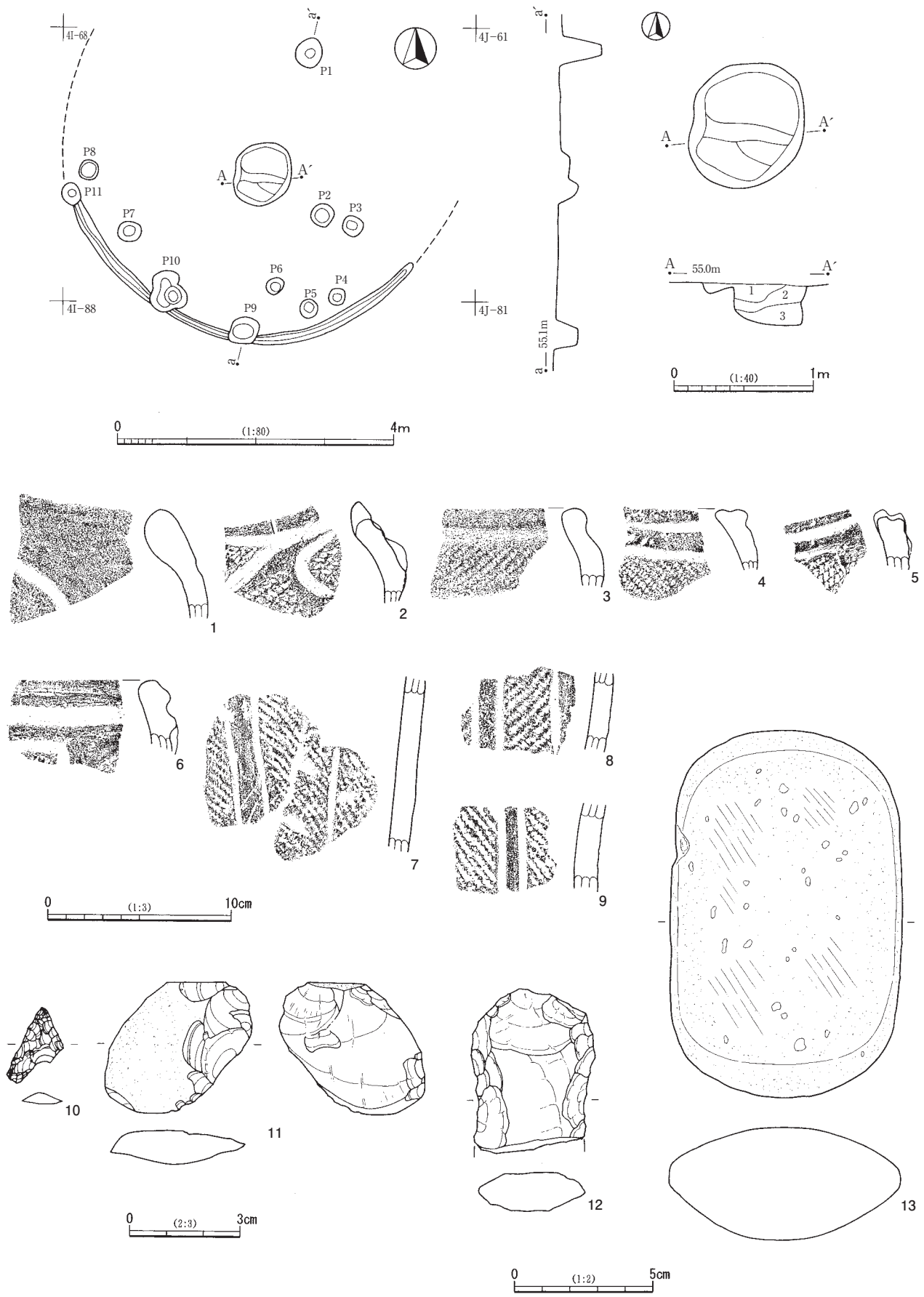
遺物（第29図、図版24・64）

土器　ここでは実測できるような一括土器はみられなかったため、図示できるような口縁部の大型破片を中心に羅列した。１は大きく内彎する波状口縁部であるが、磨耗により縄文の有無がはっきりしない。３は辛うじて単節のLRと判別できる。７～９は沈線間を磨り消した胴部片である。

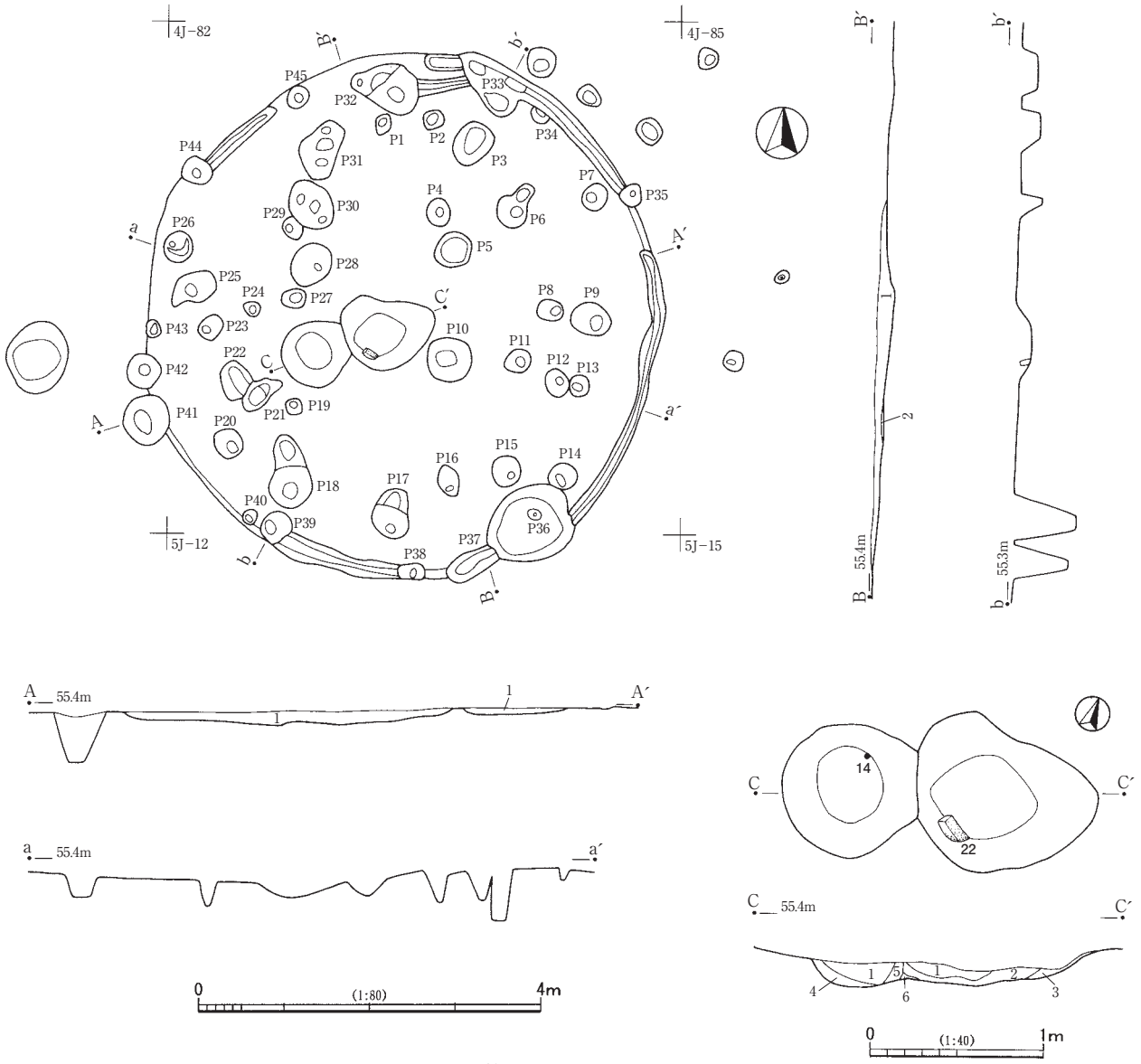
石器　石器の出土量も少なかった。10は脚部の一方が欠損している。しかし作りは均整のとれた形状に仕上げている。11は自然面を多く残す剥片で打点部を削除している。表裏両面で整形剥離が施されており、右側縁を刃部としたスクレイパーとなろう。12は下部の約1/3が欠損した短冊タイプの打製石斧といえる。本遺跡での打製石斧としては丁寧に整形された類となろう。13はP１の西１ｍほどの地点で出土した磨石である。その形状と石材から石皿とともに使用した典型的な磨石といえる。表裏両面は磨耗により丸味を帯びる。周囲には若干の打痕を残す。

SI-004（第30図、図版９）

本跡は４Ｊ区と５Ｊ区にかけて位置しており、検出された住居跡群の中心に位置する。平面形は円形で、その径は6.2mを計測する。遺存状態は概して良好といえよう。西側壁面の一部は確認できなかったが、ほぼ全景を検出できた貴重な事例である。ただ、ここでも壁面の高さは数㎝、低い部分では床面と同レベルとなり、周溝の存在により漸く全体を把握できたところである。覆土の堆積は厚い部分で15㎝ほどであった。床面では若干の凹凸が認められた。炉の痕跡は隣接する２か所で認められた。おそらく住居跡中央部に設置された炉跡が住居跡廃棄時まで使用されていた炉跡と考えられる。ピットは壁柱穴をふくめて45か所で検出できたが、小さく浅いものは植物根の可能性もある。P36は、その大きさと平坦な底面から土坑



第29図　SI-003・出土遺物



第30図　SI-004

と考えられる。

堆積土は第１層が粘性を有する黒褐色土、第２層は若干焼土を混入した黒褐色土である。炉跡では色調、含有物質などから６層に分離できた。第１層は黒色土（焼土粒、炭化粒を含む）、第２層は黒色土（炭化粒を多く含む）、第３層は暗黄褐色土（黄褐色砂層と焼土粒を含む）、第４層は黒色土（黄褐色砂層を含む）、第５層は黒色土（黄褐色砂層と白色粘土を含む）、第６層は黒色土（焼土粒を多く含む）となる。なお、22は炉跡上面から出土した板状の砂質凝灰岩は被熱しているところから、炉跡で使用されていたものとも思われる。

遺物の出土状況についてみると、本跡では炉跡の周囲を中心として土器・石器が広範に分布していた。とりわけ石器では石鏃など剥片石器の出土が多かった。ただ、Ｐ45からＰ20に向かって幅70㎝前後の浅い撹乱が帯状にみられたため西側での遺物は希薄であった。

本跡の時期は接合した一括土器などから加曽利ＥⅡ式期後半からＥⅢ式期にかけてのものとなろう。

SI-004　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

Ｐ１－６	Ｐ２－12	Ｐ３－23	Ｐ４－28	Ｐ５－20	Ｐ６－60	Ｐ７－62	Ｐ８－48
Ｐ９－63	Ｐ10－21	Ｐ11－32	Ｐ12－37	Ｐ13－59	Ｐ14－9	Ｐ15－61	Ｐ16－62
Ｐ17－46	Ｐ18－74	Ｐ19－12	Ｐ20－56	Ｐ21－37	Ｐ22－18	Ｐ23－46	Ｐ24－24
Ｐ25－73	Ｐ26－55	Ｐ27－30	Ｐ28－35	Ｐ29－26	Ｐ30－22	Ｐ31－30	Ｐ32－81・30
Ｐ33－19	Ｐ34－14	Ｐ35－24	Ｐ36－31（土坑）	Ｐ37－15	Ｐ38－23	Ｐ39－64	Ｐ40－33
Ｐ41－56	Ｐ42－54	Ｐ43－24	Ｐ44－52	Ｐ45－９			

遺物（第31～33図、図版23・25・65）

土器　本跡では全体の形が認識できる土器は１のみであった。しかも出土地点はＰ８～炉跡の間で11点の破片が接合したものである。接合しなかった部分は拓本（1-2、1-3）として掲載した。推定口径は45cmとなり、かなり大型の深鉢といえよう。口辺の楕円枠によって区画された縄文は横方向、胴部では縦方向に縄文原体を回転させている。２は小型品で口縁部から胴上半部の1/3が遺存したもので、胴部では沈線間に磨り消しがみられる。３も1/4程度が遺存した口縁部片を復元したものである。器厚は４㎜～５㎜と薄い。４・５は隆帯間に沈線を施し、６の波頂部には退化した渦巻が認められる。７～９はしっかりした隆帯で文様が表現されており、10では３本一組の沈線が特徴的である。これらは加曽利ＥⅢ式として捉えられよう。15の地文では撚糸文が採用され、16はSI-002の９にみられるような胴部が条線によって覆われるものとなろう。

石器　本跡にみられる石器の出土は土器と比較すると豊富な内容を示している。剥片石器類についてはチャートが多用され、黒曜石は５の石鏃の１点のみであった。さらに石器として剥片類を使用していることも特徴的である。

１～５は石鏃である。１は形態的にみれば旧石器時代の尖頭器ともいえるがチャートを採用し、自然面を残している。縄文中期以降の所産とみて間違いあるまい。２は脚部が広く、全体の形は正三角形に近い。３・４は脚部を欠損している。５は先端部が欠損し左右非対称の成品である。

６～８は楔形石器である。６は断面三角形の縦長剥片を用いたものであり、下端部を簡単に加工しただけである。７は薄い剥片を素材とし、下端部を丁寧に剥離し成品に仕上げている。８も粗雑ながらも下部での表裏両面からの剥離が施されている。

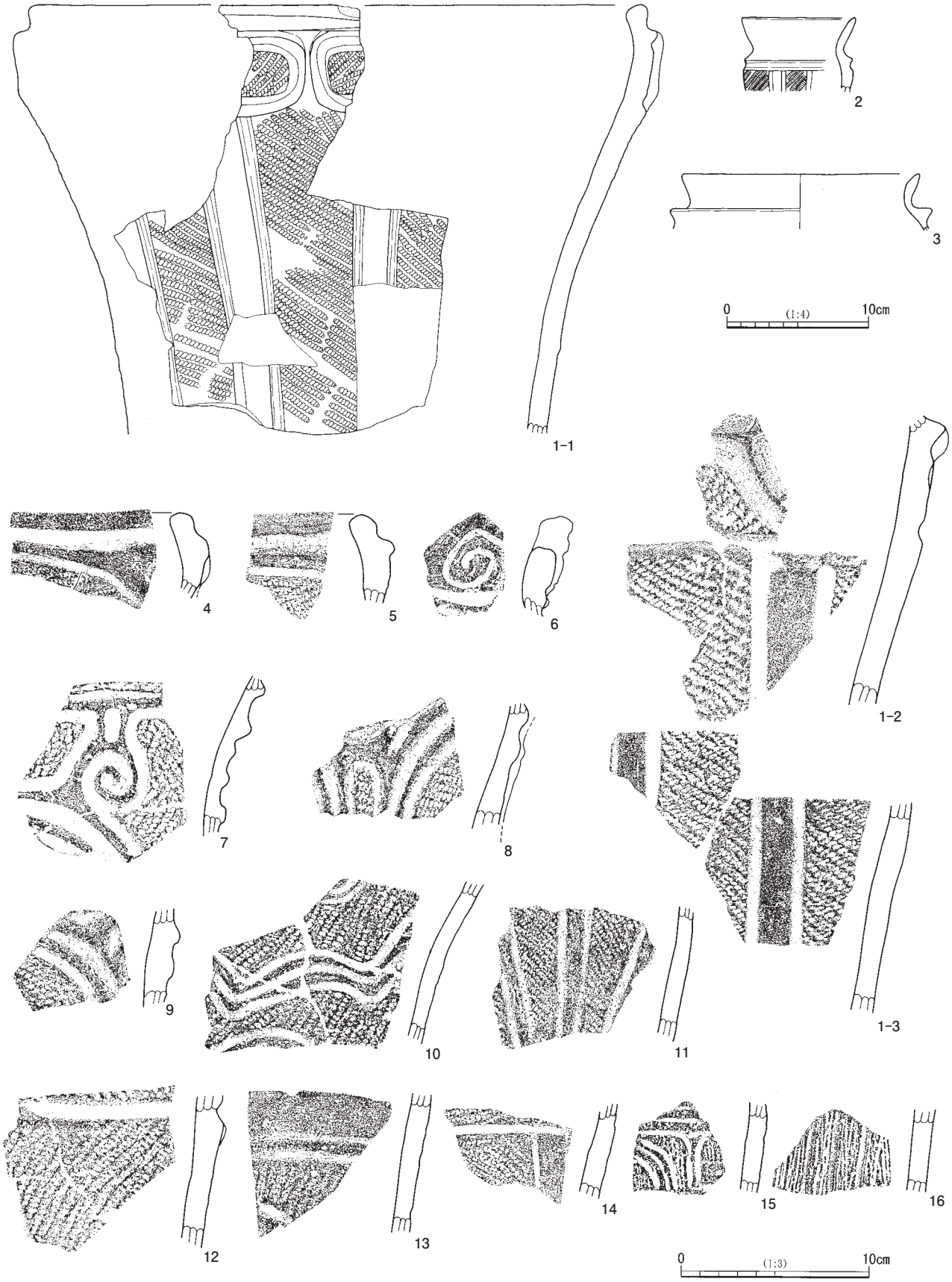
９～12は剥片である。９は石鏃か楔形石器の製作過程で廃棄されたものであろう。10～12では明確な使用痕が観察できる。12の右側縁には使用による微細な剥離痕が著しい。

13は磨製石斧である。下半部の欠損したものが１点のみ出土した。残された表裏面はきれいに研磨されている。側面も均等に研磨されており精巧に製作された磨製石斧であったものと思われる。

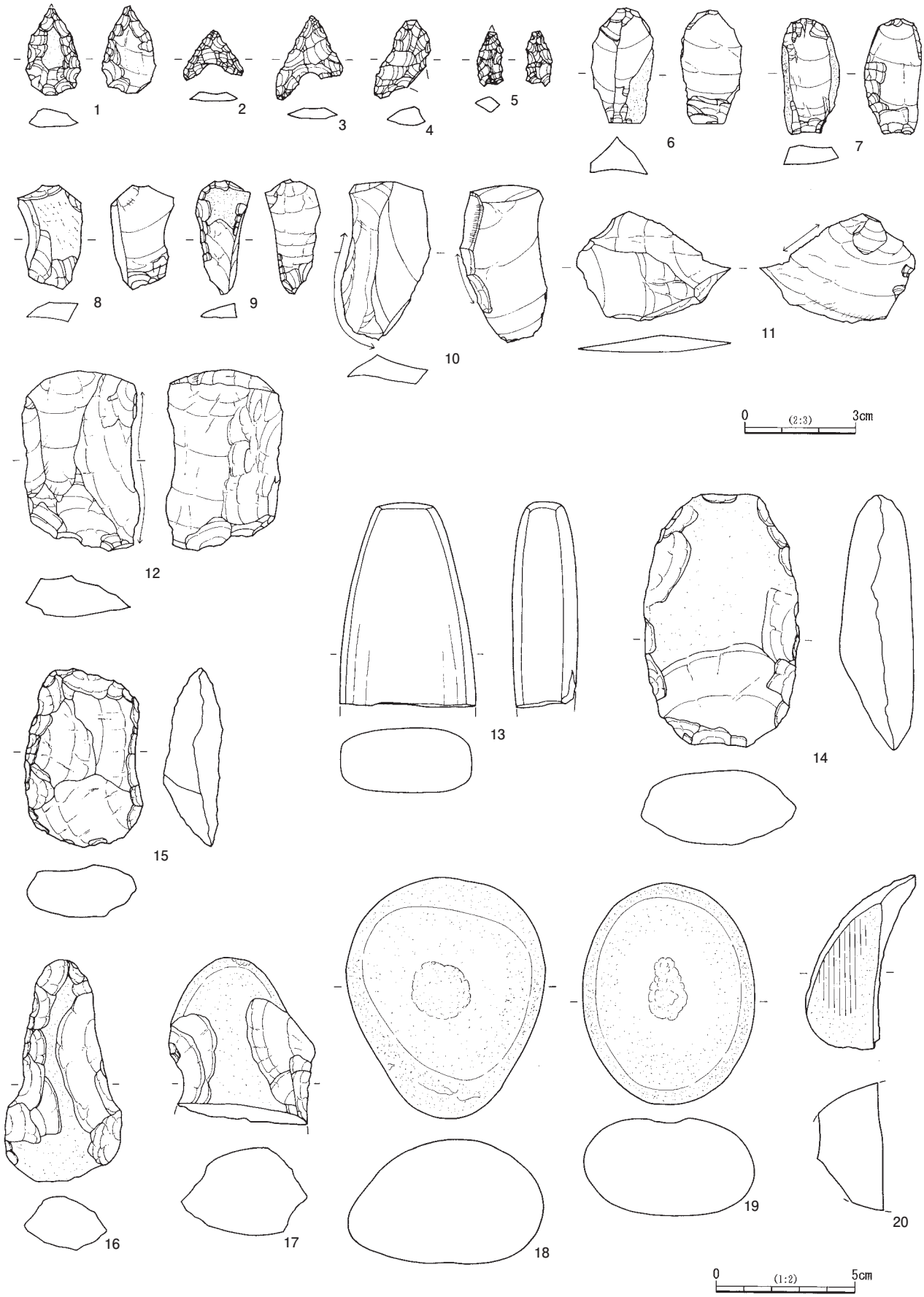
14～17は打製石斧である。破損品１点を含めて４点が出土した。14は西側の炉跡から出土したものである。扁平な河原石で製作されたらしく表裏の中央部に自然面が残されている。15はやや小さめの石斧で、周囲は左右の側縁は簡単な剥離で整形されている。16は頭部の作りから嵌め込みタイプの石斧であろう。17は頭部のみの遺存である。

18～21は磨石である。４点が出土し、18・19は表裏面に打痕が認められる。20・21の表面の一部は研磨を施したように滑らかなものである。また21の裏面は打割により平坦に整形されている。

22・23は台石である。22は東側の炉跡から出土したもので、３cmほどの厚みを有する板状の原石を長方



第31図　SI-004出土土器



第32図　SI-004出土石器(1)

形に整形している。炉周辺で台などに使用されたものと考えられる。23も台石と思われる。本来は円形を呈していたものと考えると、約1/3の遺存となる。中央部分にあたる右隅では使用によりやや凹みが認められる。

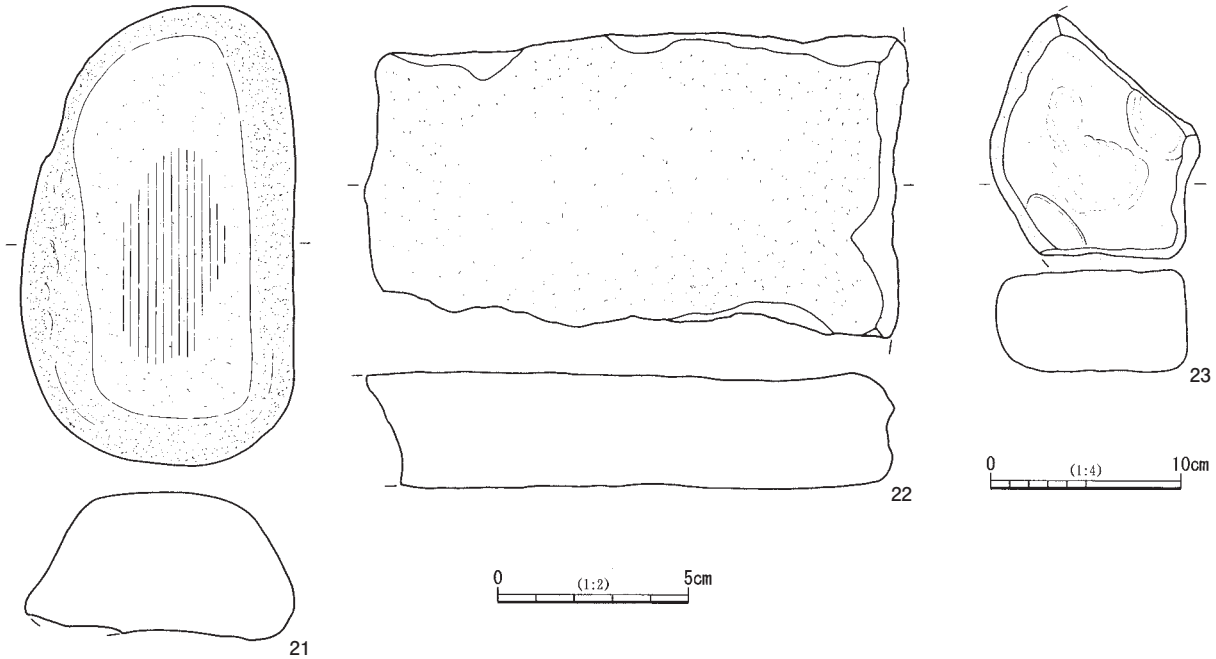
SI-005（第34・35図、図版10）

本跡は４Ｊ区で北半分がSI-006と南壁の一部がSI-014と重複し正確な平面形を把握することはできなかった。周辺にみられる住居跡からおおむね円形ないしは楕円形を呈していたものと推測できる。南側で確認できた壁面は３㎝～５㎝と僅かに残されたもので、床面は北から南に向かって傾斜しており良好な状態とはいえない。床面の遺存部からは37か所でピットが検出されているが、床面からの深さが30㎝以上ではＰ１、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ８など十数か所となり、これらのピットは柱穴となる可能性を否定できない。次に炉跡についてみると、ここでは珍しい類例といえる炉跡の検出となった。平面・断面の詳細は別図とした。炉跡は床面下を１ｍほど掘り下げ、小型の深鉢を設置した後に底部欠損の大型品を設置し炉としている。いわゆる土器埋設炉である。大型品は口縁部まで遺存しており、被熱し赤褐色に変色しているため長期間の使用を思わせた。

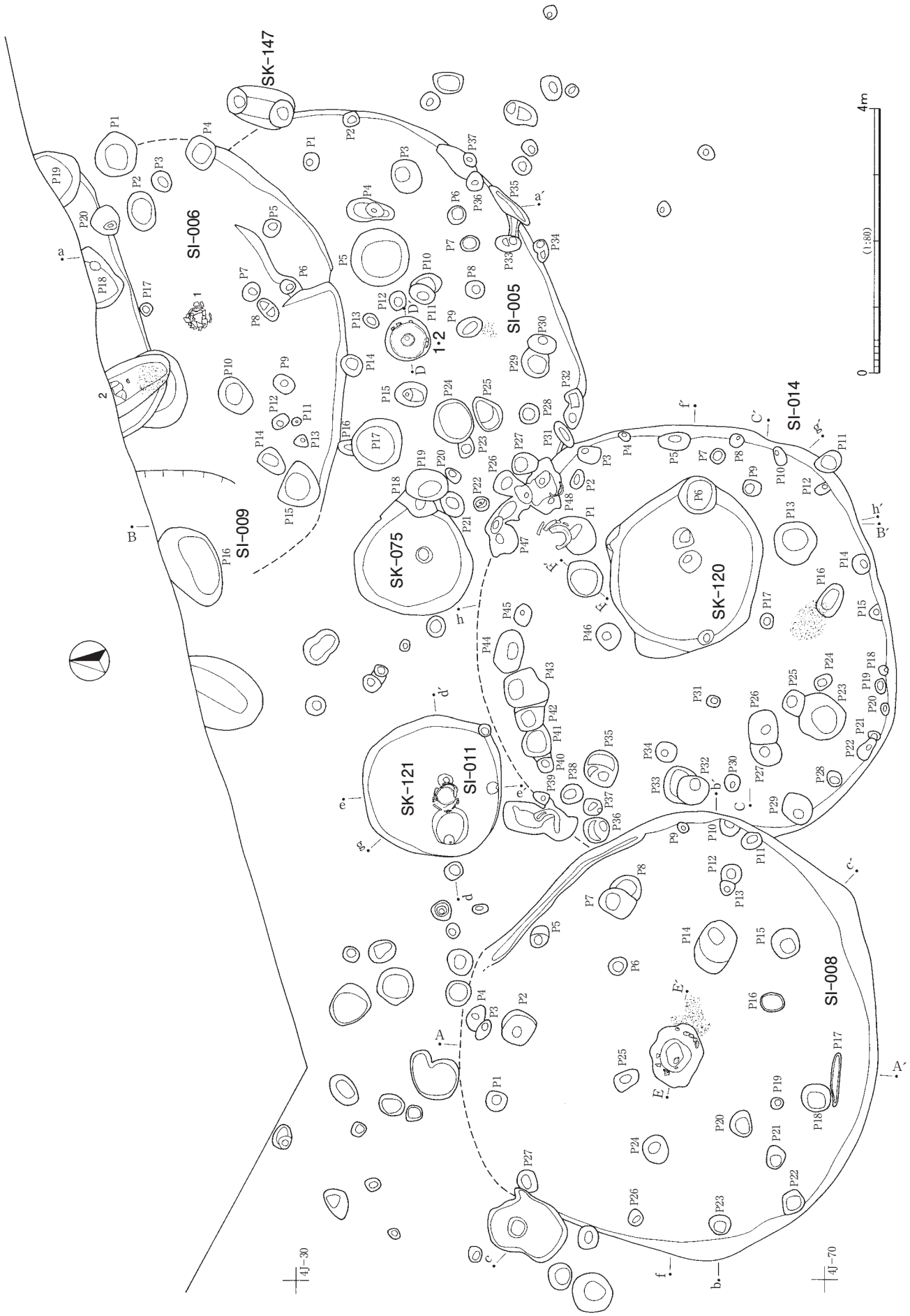
堆積土はSI-004と同様の黒褐色土となり、焼土や砂粒が若干混入していた。炉跡周辺部の堆積土は５層に分離できた。第１層は黒褐色土（焼土と砂粒を含む）、第２層は暗褐色土（黒色土を含む）、第３層は暗褐色土、第４層は暗黄褐色土（褐色土と黒色土混入）で小型土器を固定するためかよく締まっていた、第５層は暗灰褐色土（砂層）となる。

遺物の出土状況についてみると、炉跡周辺を中心として、大木式的な文様が胴部に施された小型品と大型破片及び石鏃、打製石斧、磨石、敲石、石皿片などが出土している。

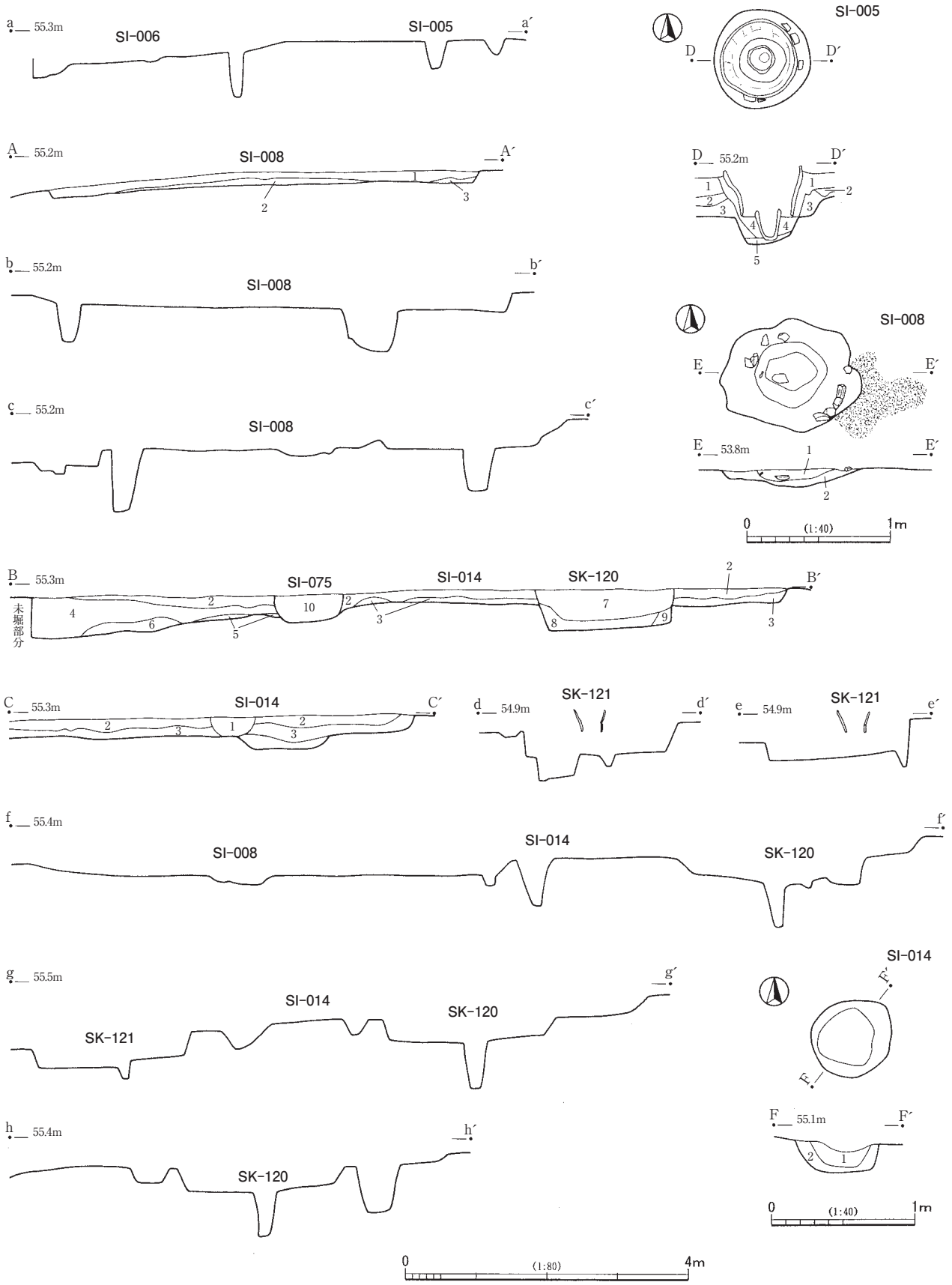
本跡の時期は土器埋設炉の土器から時期は加曽利ＥⅡ式期となろう。



第33図　SI-004出土石器(2)



第34図　SI-005・006・008・009・011・014(1)



第35図　SI-005・006・008・009・011・014(2)

SI-005　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

P１－32	P２－11	P３－60	P４－57	P５－64	P６－40	P７－28	P８－52
P９－14	P10－９	P11－38	P12－８	P13－15	P14－19	P15－65	P16－９
P17－43	P18－69	P19－85	P20－17	P21－26	P22－32	P23－28	P24－19
P25－23	P26－31	P27－34	P28－21	P29－21	P30－35	P31－24	P32－29
P33－29	P34－35	P35－23	P36－24	P37－20			

遺物（第36～38図、図版25・26・66）

土器　１・２は第34図に示したように土器埋設炉を構成していた２点である。２の小型土器を支えとし、その上に底部を除去した１の大型土器を設置することにより炉として使用していたものであろう。１の口縁部内外面は被熱のためか赤褐色に変色している。器面の文様構成は加曽利EⅡ式を特徴づけるものである。口辺には隆帯で区画された中を縄文で充填し、その間に渦巻文を配置する。２も同様な文様構成できれいな楕円の中を縄文で満たし、その上をS字状の簡略化した渦巻文で飾る。３は口縁部が失われており、胴部の2/3が遺存した小型品である。文様は胴部に渦巻文が描かれ、沈線間は磨り消されている。時期的には加曽利ＥⅡ式期と考えてよいであろう。胴部の文様から大木９式に近いものとなろう。４は口縁部が2/3ほど遺存した深鉢で２と同様な文様構成となるが、ここでの隆帯ははっきりと表現されている。５～10も口縁部片であり、埋設土器と共通する文様構成となる。11・13・19も沈線主体で文様が構成される。口縁部の作りは異なるが信州にみられる曽利式の影響を受けたものとなろう。12・20は口辺にみられる縦方向の沈線や粘土紐の貼付から古い段階の土器と思われる。14～18は円形の刺突文や隆帯がみられるところから加曽利ＥⅡ式の後半からEⅢ式にかけてみられるものであろう。17・21は曲線化した沈線を主文様としており、おそらくも加曽利EⅡ式の後半からEⅢ式の時期となろう。

石器　本跡では石鏃をはじめとして各種の石器がみられる。とりわけ石鏃等の剥片石器類は17点を図示することができた。ほかにも石斧や敲石、磨石、石皿と生活具としての石器も豊富といえよう。ただ住居跡が重複しているため確実に本跡に伴うとは限らない。

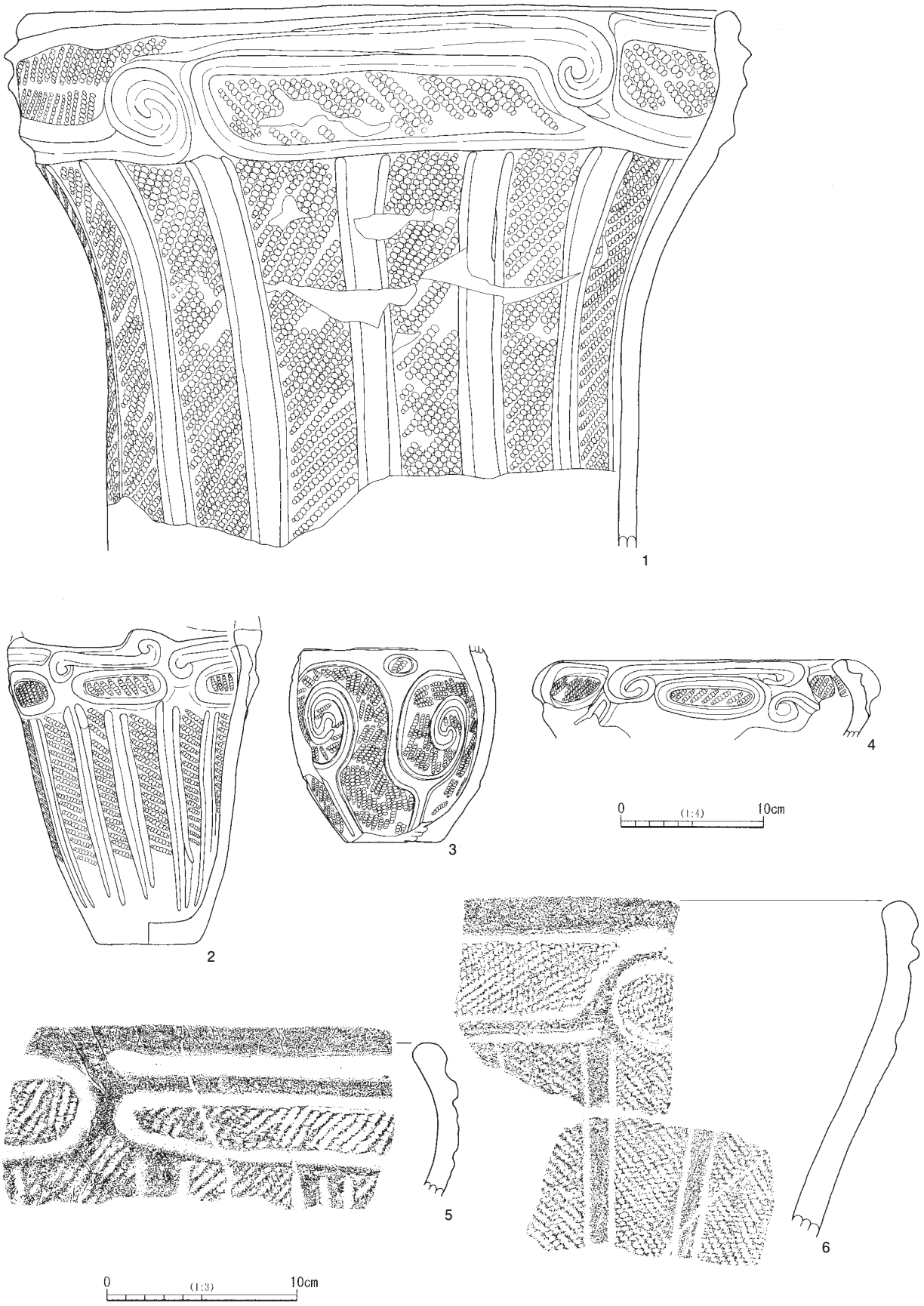
１～12は石鏃である。完形品は１・２・４の３点と少ない。石材をみると黒曜石製が６点と多いことに注目できる。１の下部は直線的でいわゆる平基タイプといえよう。一方、10の下部は半円形に仕上げられた類例の少ないものである。11は小剥片を素材として小さな剥離で簡単に石鏃としているが鏃としての効果には疑問符が付くような作りである。12は製作途上に破損、廃棄されたものであろう。３・５～９はいずれも先端部に欠損がみられる。

13は楔形石器である。１点のみの出土であるが黒曜石製で表裏から簡単な剥離で仕上げている。

14～17は剥片である。いずれも微細な調整痕が認められ、16は細石刃を思わせるよな縦長の剥片である。

18・19・22・23は打製石斧である。18は側面をみると磨製石斧の素材を想起させる。刃部は表裏面から小さな剥離で仕上げている。19は撥型に整形された石斧で裏面には若干の自然面を残す。22は右側縁が加工されているため打製石斧とした。23の石材は赤色チャートで石斧にはあまり使用されない石材であるが、周囲の加工から打製石斧とした。

20・21・24は敲石である。20は磨製石斧の素材にできるような形態を有する。欠損品ではあるが、下端部には顕著な打痕が観察できる。21も欠損しており、上下側面は長期の使用を物語る。24は敲打により下部は凹んでいる。



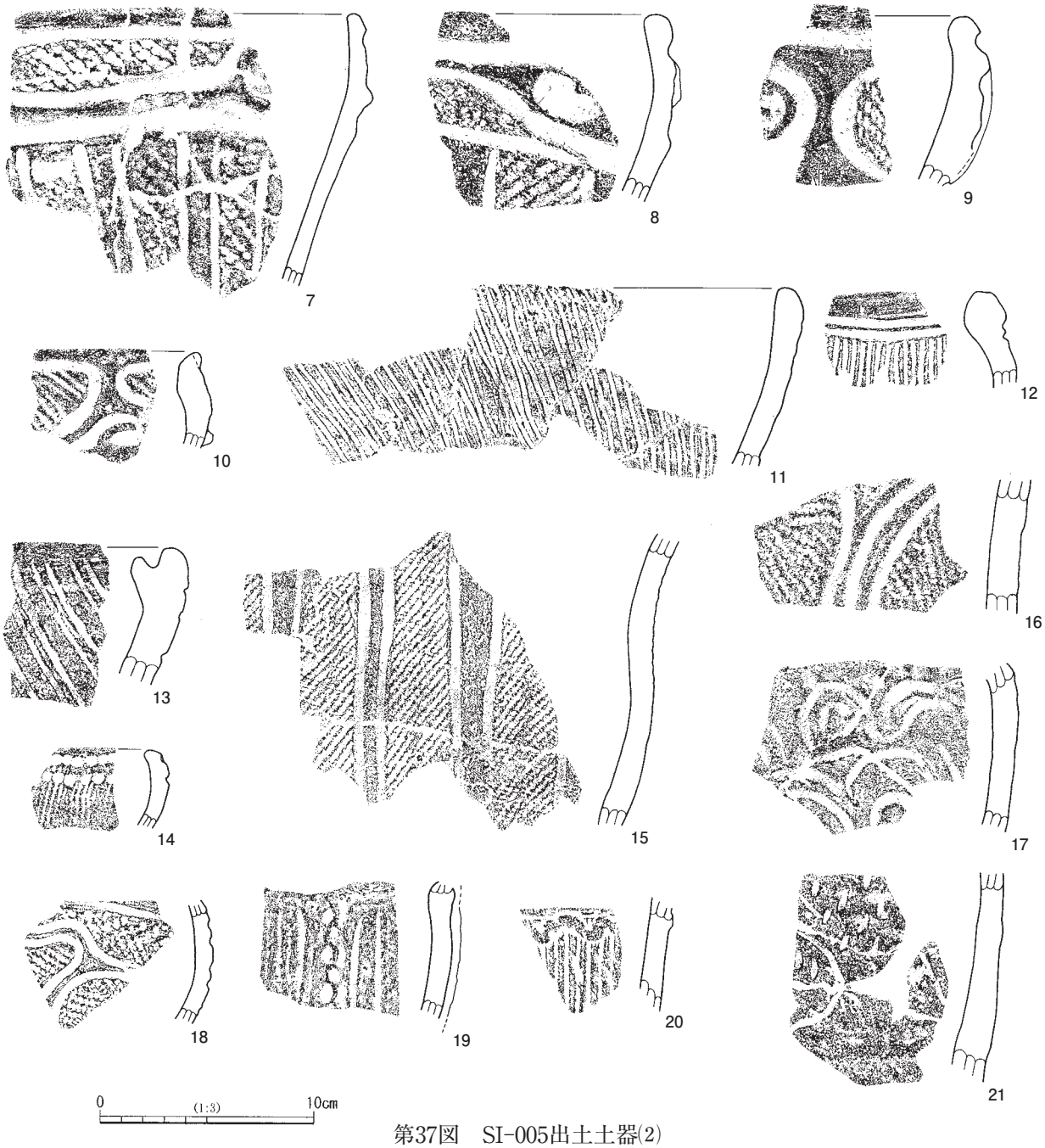
第36図　SI-005出土土器(1)

25・26は磨石である。25は完形品で表面中央部では顕著な磨耗痕が認められる。下端部に打痕を残す。26は約1/2の遺存で中央部は滑らかで周囲には打痕が著しい。

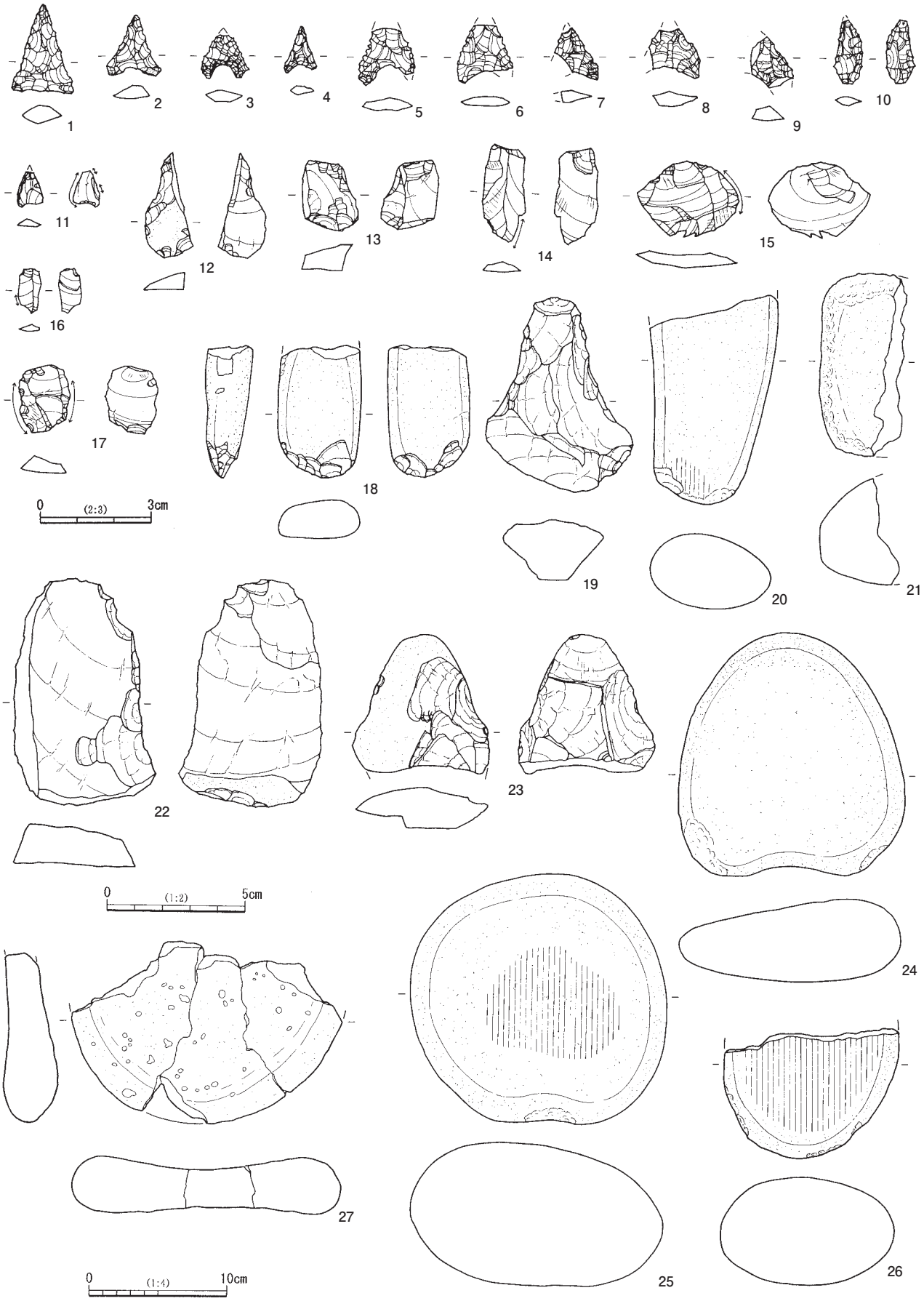
27は石皿である。破損した３点が接合したものである。炉跡の西、Ｐ24周辺で出土した。約2/5が遺存するもので、中央部にむかって皿状に緩やかな窪みがみられる。裏面はほぼ平坦である。

SI-006（第34・35図、図版10・12）

本跡は４Ｊ区で検出され、約1/2は調査区外にあたるため未調査となった。しかも南側はSI-005と重複しており、平面形を把握することはできなかった。床面の状態は概して軟弱で、調査区外の北方向に向かって緩やかに傾斜する。 ピットは20か所で検出できたが、柱穴を想定できるピットは少なくＰ５、Ｐ９や



第37図　SI-005出土土器(2)



第38図　SI-005出土石器

P16では床面下50㎝以上を計測する。炉跡は南壁から３ｍほど離れて検出された。楕円形と想定できる約30㎝の掘り込みに焼土混入の黒褐色土の堆積がみられた。また、この部分はSI-020とした住居跡らしき落ち込みが認められており、焼土混入層は上面に堆積していた。

床面上の堆積土はSI-005と同様であった。

遺物の出土状況についてみると、大型の浅鉢が炉跡から１ｍ南で床面直上から出土している。住居跡の時期を決定づけるものとなろう。ほかにキャリパータイプの深鉢もみられる。また石器も石鏃、スクレイパー、打製石斧、磨石などが床面上から出土している。

本跡の時期は浅鉢を基準に考えると加曽利ＥⅢ式期といえよう。

SI-006 ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝㎝）

Ｐ１－20	Ｐ２－14	Ｐ３－13	Ｐ４－42	Ｐ５－66	Ｐ６－14	Ｐ７－13	Ｐ８－37
Ｐ９－52	Ｐ10－25	Ｐ11－12	Ｐ12－17	Ｐ13－10	Ｐ14－26	Ｐ15－23	Ｐ16－52
Ｐ17－23	Ｐ18－30	Ｐ19－20	Ｐ20－28				

遺物（第39・40図、図版25・27・66）

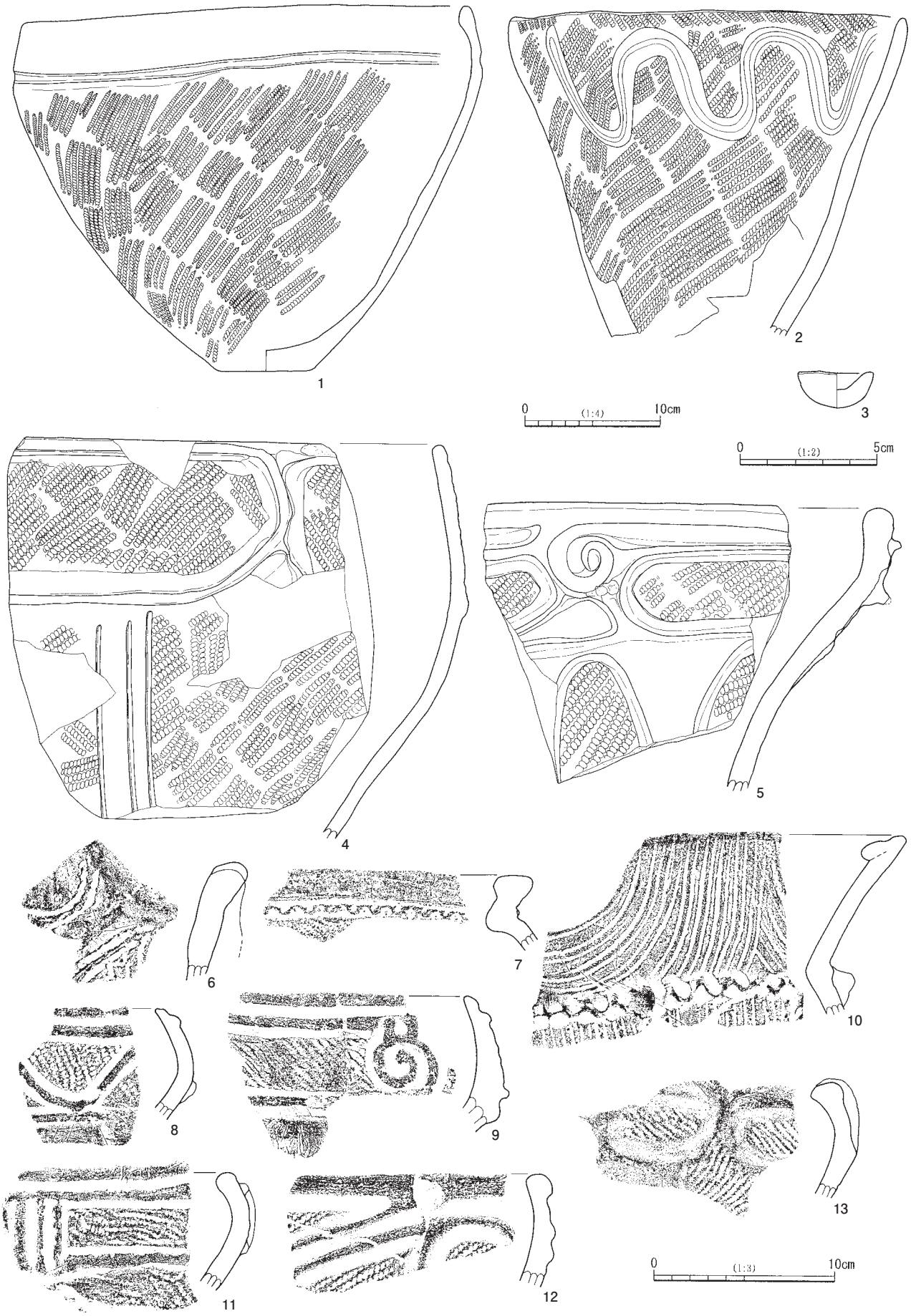
土器　ここでは一括土器がミニチュア土器を含めて３点出土した。浅鉢は前述したように床面上で、２の深鉢は炉跡の上面において検出されている。ほかに口縁部の大型破片もみられたため、口縁部を中心として器面の遺存度の良好な土器片について図示した。１は口縁部の一部が７㎝ほど遺存していたため器形全体を知ることができた。口縁部の器厚は12㎜前後、胴部では７㎜と薄い。口縁は平縁で約１㎝幅の浅い沈線が施される。以下は縄文が底部に至るまで施文されている。２は底部を欠失しており、口縁から胴部の2/3が遺存したものである。縄文が器面全体に施され、口縁部にのみ縄文原体の回転方向を変えることにより、羽状の効果を描出している。また２本一組の浅い沈線が大きく緩やかな波状を形作る。３はミニチュア品である。口径28㎜、高さ13㎜を計測する。４は口辺部を隆帯で区画し、胴部に３本一組の沈線がみられる。５には渦巻文がみられ、胴部の磨り消しは大胆になり縄文が幅広な沈線によって区画される。時期的には加曽利ＥⅢ式といえよう。６は２列の押引と胎土に混入された雲母から、阿玉台Ⅱ式の波状口縁となろう。14は縄文が地文となり、粘土帯に沿って幅広の押引文が施される。時期的には阿玉台式でも終末期のものとなろう。７～９･11などは粘土紐の貼付が明確であり、加曽利Ｅ式でも古いタイプとなろう。８・９は頸部に無文帯を残すようである。10は曽利系の特徴が口唇部によく表現されている。18・19も同系統のものである。15は胴部片であるが粘土紐による施文は、大木式的なモチーフで飾られている。16・17は文様、施文具等から堀之内Ⅰ式と思われる。

石器　石器は量的には少ないが、それぞれ個性的な成品が出土している。

20～23は石鏃である。20は別名トロトロ石とも呼称される石材のため磨耗が著しく剥離までははっきりしない。21は先端を欠損している。22は剥片に簡単な整形剥離を施しただけで成品としている。23は破損しているが、裏面では広く主剥離面がみられる。

24は楔形石器である。表皮部分の丸味を利用して楔形石器に仕上げたものである。裏面での加工も認められるため楔形石器としてよいであろう。

27はスクレパーである。剥片の周囲を簡単に加工したのみで右側縁を刃部に仕上げている。



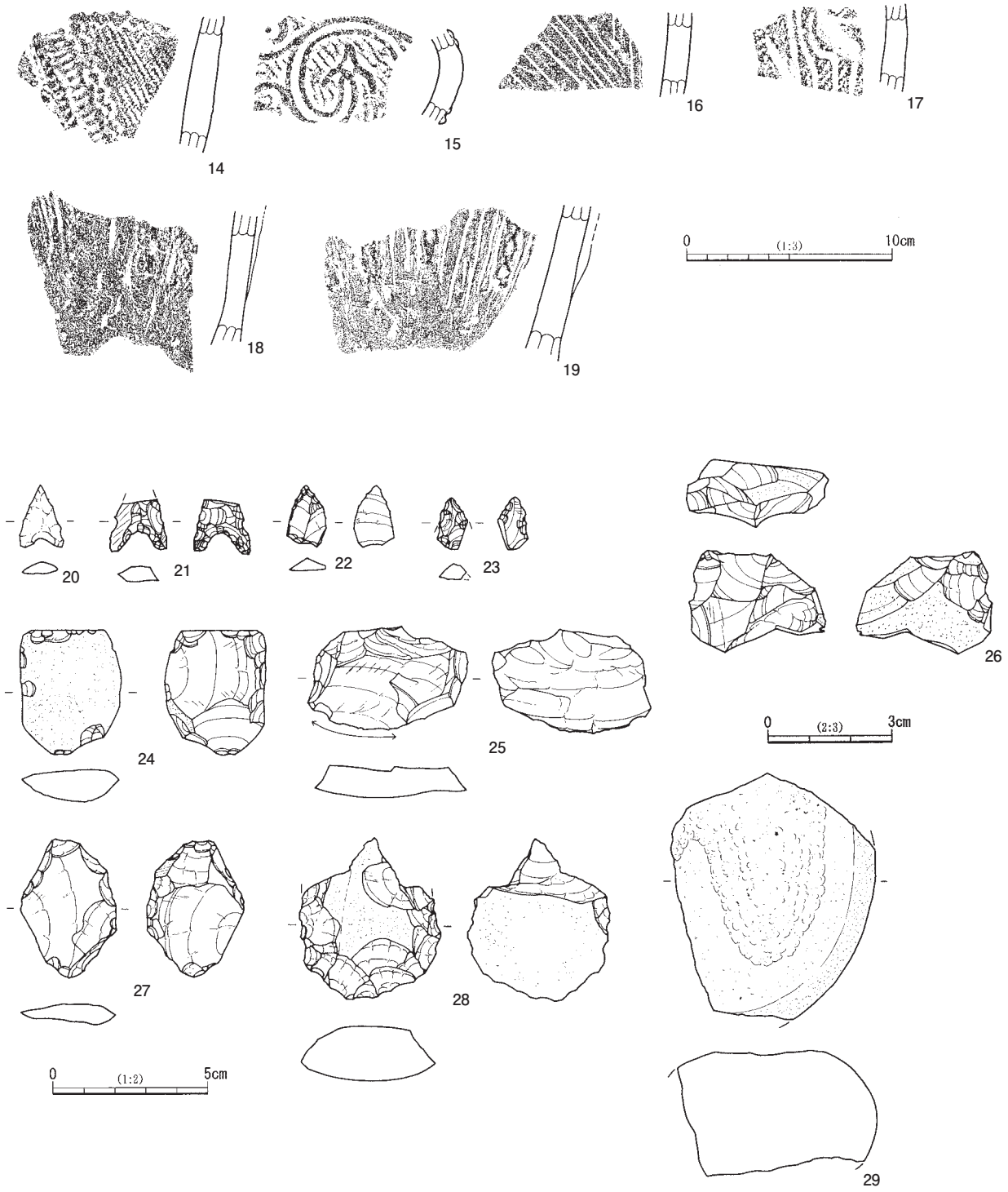
第39図　SI-006出土土器

25は剥片である。横長剥片を素材としたもので下部に使用痕が観察できる。

26は石核である。残核であろうが、22のような石鏃を製作することを考えるとまだ剥片剥離は可能となろう。

28は打製石斧である。打製石斧の刃部が遺存したものである。表裏面に自然面が認められるため扁平な河原石を素材として使用したものであろう。

29は磨石である。残された側面には打痕はみられず、表面が大きく剥離されている。



第40図　SI-006出土遺物

SI-008（第34・35図、図版11）

本跡は４Ｊ区の西に位置し、隣接して東にSI-014、西にSI-003が検出されている。平面形は、一部北側の壁面が失われているもののほぼ円形としてよいであろう。長径は東西方向にあり6.7m、短径は南北約6.3mを計測する。一部ではあるが、周溝を確認できた。床面の状態は良好で平坦な面を形成していた。覆土の堆積は、本跡が最も厚く20㎝を計測する。ピットは27か所で検出されている。深さ50㎝を超えるピットは８か所を数える。柱穴を想定するとＰ２、Ｐ７、Ｐ15、Ｐ21などが該当しよう。炉跡は住居跡のほぼ中央で検出されている。炉跡の中央部は約15㎝掘り込まれており図示したような位置に十数個の礫が配置されていた。残された礫は多くはないが石囲い炉としてよいであろう。また、炉跡の東側部分では床面が焼けて（トーン部分）いた。これは石囲い炉の設置以前に、炉として使用されていた痕跡と考えられる。

本跡の堆積土は層厚があったため３層に分類できた。第１層は黒褐色土、第２層は黒色土（黄褐色砂粒を若干混入）、第３層は黒色土（黄褐色砂粒をやや多く混入）となる。炉跡では、第１層が黒褐色土（焼土･炭化物を混入）、第２層は暗褐色土（焼土ブロック･砂粒を多く混入）となる。

遺物の出土状況についてみると、炉跡の周囲では土器は少なく、反面、10点以上の礫がみられた。そのうちの21・25・32は道具として使用された痕跡が認められたため図示した。また、Ｐ14やＰ24周辺でも土器や石器が出土している。なお、図示した一括土器は炉跡から北西に約１ｍ離れた地点で出土したものである。

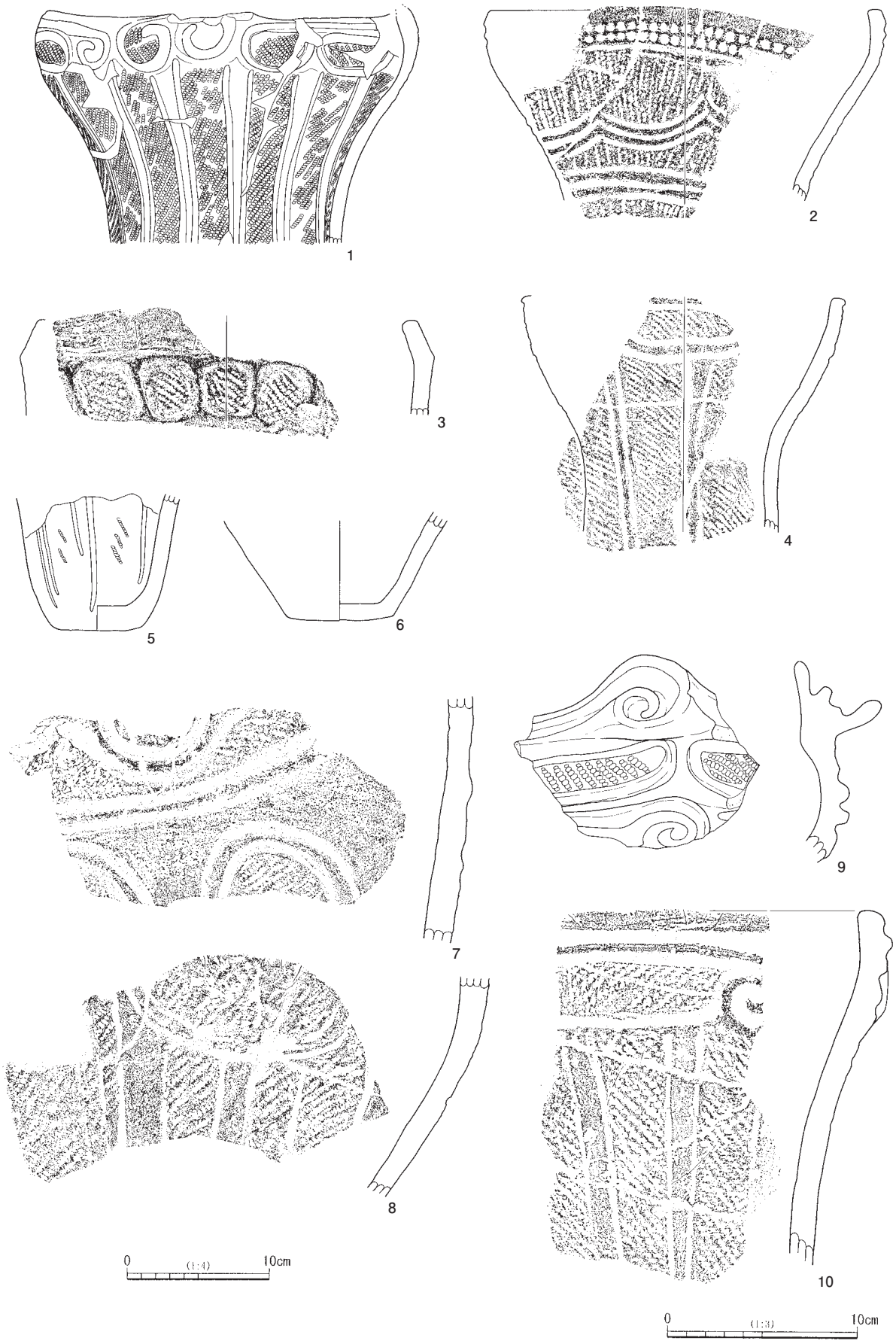
本跡の時期は一括土器を基準として加曽利ＥⅡ式期の後半からＥⅢ式期にかけてとなろう。

SI-008　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝㎝）

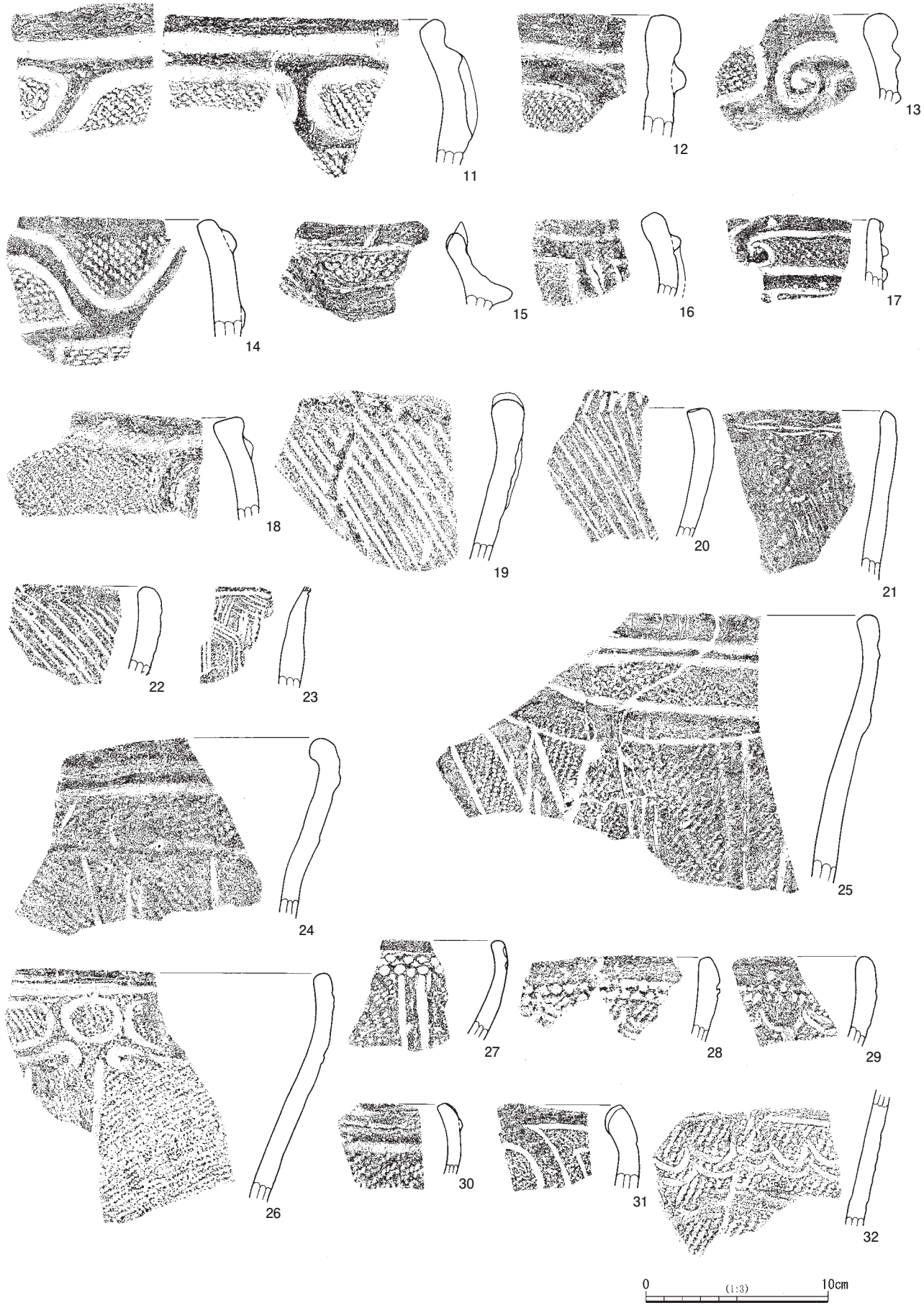
Ｐ１－32	Ｐ２－66	Ｐ３－26	Ｐ４－28	Ｐ５－38	Ｐ６－11	Ｐ７－78	Ｐ８－72
Ｐ９－13	Ｐ10－29	Ｐ11－30	Ｐ12－９	Ｐ13－32	Ｐ14－63	Ｐ15－62	Ｐ16－４
Ｐ17－11	Ｐ18－58	Ｐ19－18	Ｐ20－15	Ｐ21－64	Ｐ22－27	Ｐ23－54	Ｐ24－29
Ｐ25－34	Ｐ26－12	Ｐ27－24					

遺物（第41～45図、図版25・28～30・67）

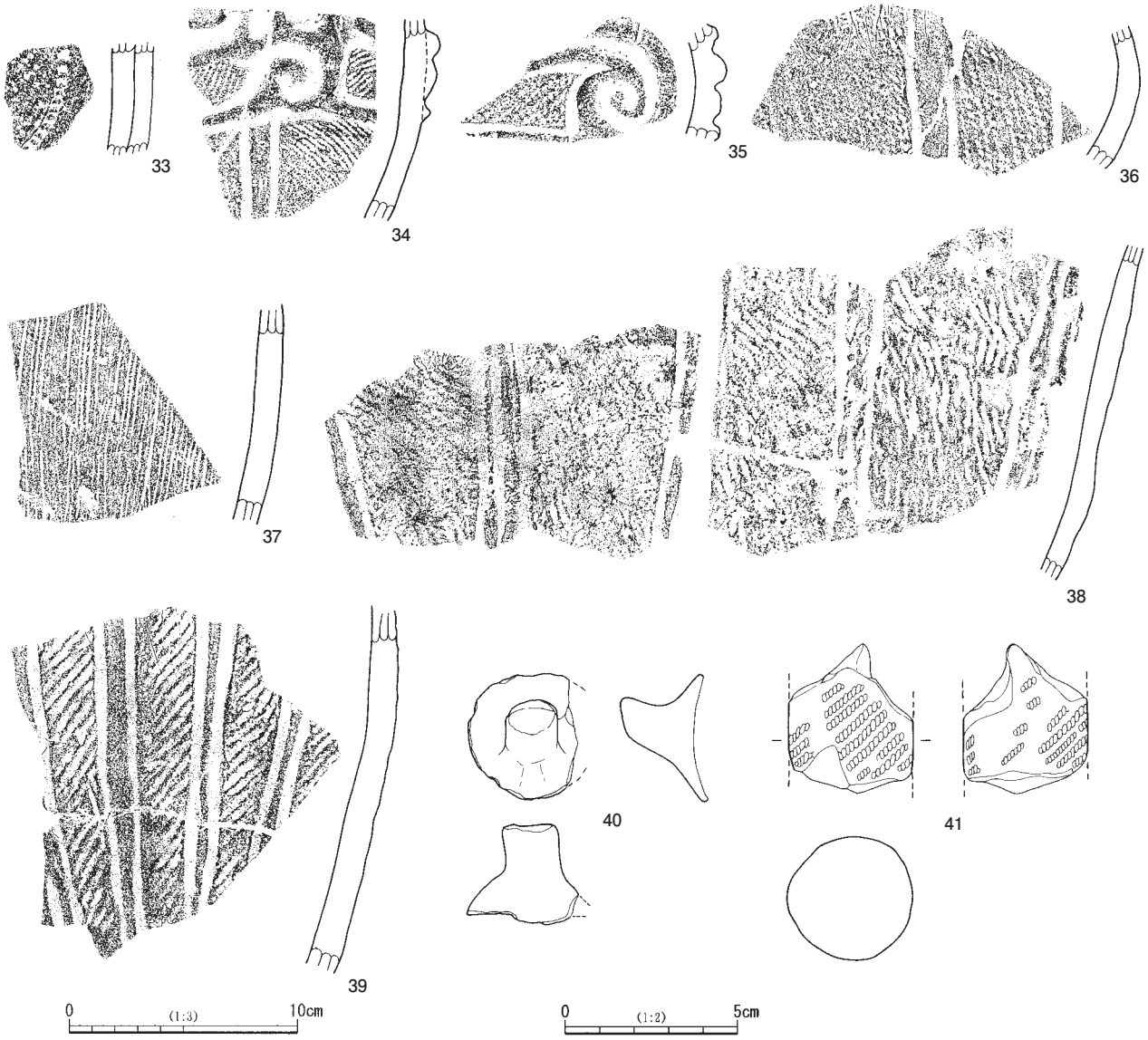
土器　本跡から出土した土器は多く器形を認識できる一括土器も３点を数える。１は底部を欠損した深鉢で４か所にみられる把手部分がすべて破損している。破損部を観察すると、新たな破損面ではなく若干磨耗部分も認められるため意識的に口縁把手部を平坦に整形したものと思われる。文様は渦巻文が簡略化され円形に近い。２は連弧文系の深鉢で口縁直下に２列の刺突文が施される。地文の縄文は単節を巻きつけた撚糸文とみなされる。時期的には１と同時期となろう。４の口縁部は楕円状に区画され、その直下にも沈線が巡る。この点は１と共通するようである。５・６は底部であるが、５の器面に施文された縄文はほとんど磨耗している。３は口縁部の大型片で隆帯によって区画された中を縄文で充填する。前者よりも新しい時期で１に近いものとなろう。７・８・38も時期的には同時期とみなされる。２点とも大きなタイプの深鉢で近接した位置において出土した。接合はしていないが胎土･縄文などから同一個体と思われる。７は胴上部、８は胴下部にあたる破片であろう。型式的には加曽利EⅢ式となろう。９は隆帯による渦巻文が鮮明である。10は４と同様の文様構成とみられる。時期的には２の連弧文系土器と重なるものである。また11～17、34・35などは太い隆帯が用いられているところから加曽利EⅡ式の範疇として捉えることができよう。19～23はヘラや半截竹管による沈線が器面を飾る。19は緩やかに垂下する粘土紐の貼付がみら



第41図　SI-008出土土器(1)



第42図　SI-008出土土器(2)

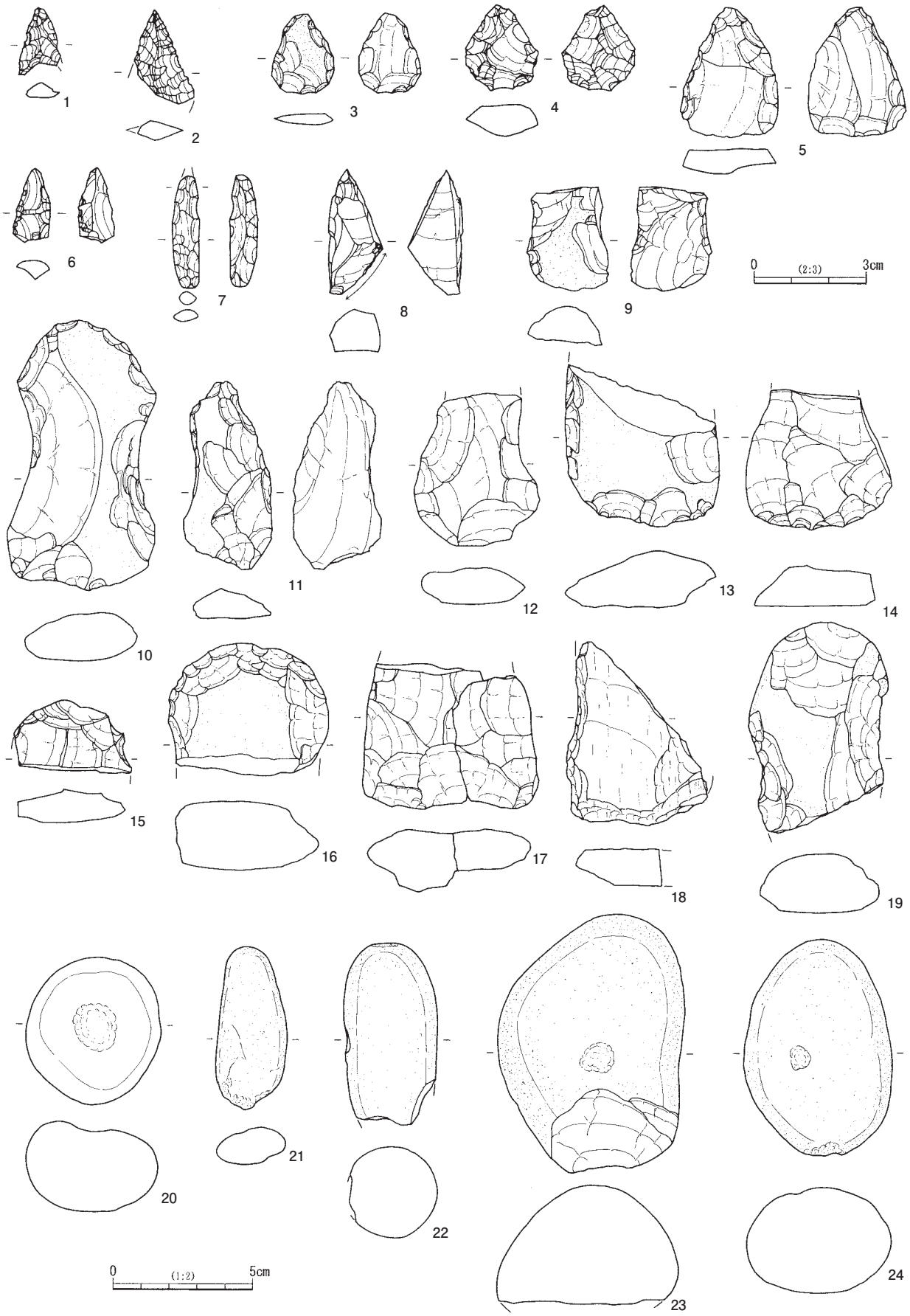


第43図　SI-008出土土器(3)

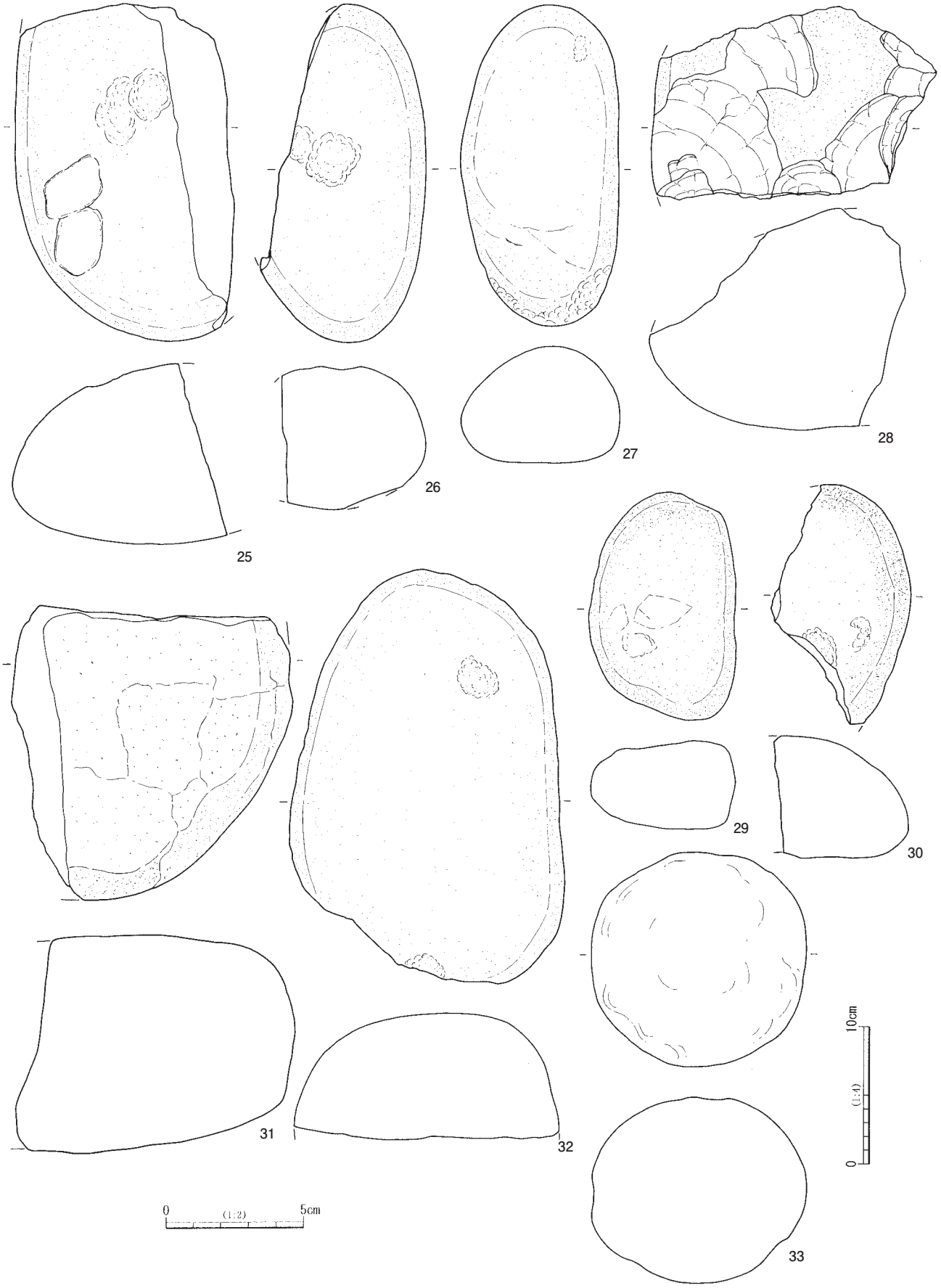
れる。19・20・22は曽利系の影響とみてよいであろう。緩やかな隆帯を有する18や24～26にみられる沈線間が磨り消された土器群は前述１と同時期とみられる。26は渦巻が消滅して円形に変化したものである。27～29・32は刺突文と稚拙な連弧文を施した土器群で、27以外は同一個体とも考えられる。30は微隆起線がみとめられるため加曽利EⅣ式の到来を示唆するものである。31は明確な沈線による幾何学的な文様の一部がみられるため称名寺式となろう。33は磨耗した器面に僅かな縄文施文が観察できる。また隆帯の脇をヘラによる押引文を施している。阿玉台式の小片で終末期のものである。40は胴部に貼付された突起物で、41は後期に属する土偶の脚の一部と思われる。

石器　ここでの器種は石鏃や打製石斧が主体となり、典型的な磨石はみられなかった。ほかにSI-002でも出土している球形の敲石がみられた。このため球形の敲石は間違いなく本遺跡では道具として使用されていたものとなろう。

１～６は石鏃である。１は右脚と先端の一部が欠損する。２も欠損品となるが、両側縁は鋸歯状にきれ



第44図　SI-008出土石器(1)



第45図　SI-008出土石器(2)

いに剥離されている。３～５は未成品のような仕上げである。いずれも黒曜石以外を採用したものである。６は製作途中で破損し廃棄したものであろう。

７は石錐である。先端部が欠損するがやや厚みを増すため錐となろう。しかし石鏃の可能性も否定しきれない。

８・９は剥片である。８はナイフのような形をした剥片で、右側縁には微細な調整痕が認められる。９は小型打製石斧のような形態であるが、刃部となる下端の加工はみられない。右側縁では表裏面で整形剥離が施されている。

10～19は打製石斧である。打製石斧は10点と多い。ただ完形品は２点のみで、10では表面に自然面を多く残す。反面､11の裏面では大きく主剥離面を残す。16は頭部が遺存したもので､周囲は丁寧な剥離によって整形されている。ほかは破損品で刃部の遺存が５点となる。

20～24・26・27・29・30・32・33は敲石で11点を数える。これらのうち20・22・26・29の４点は軟弱な凝灰岩（弱固結凝灰岩）であり、あまり敲石には使用されない石材である。32は表面の一部と右側縁に顕著な打痕が認められる。33は約３kgの重量で大きな破損はみられない。SI-002出土品よりも１kg弱軽い。

25・28・31の３点は台石である。25・28の表面の一部には上部からの加撃による剥落がみられる。

SI-009（第34・35図）

本跡はSI-006を調査中に西側隅で掘り込みらしき段差を確認できたため、調査区の限界まで排土をしたものである。しかし土坑や傾斜する地形により明確な根拠を得ることはできなかった。ただ落ち込み周辺では少なからず、土器や石器が出土したため住居跡の一部と考えて報告することにした。

遺物（第46・47図、図版31・32・68）

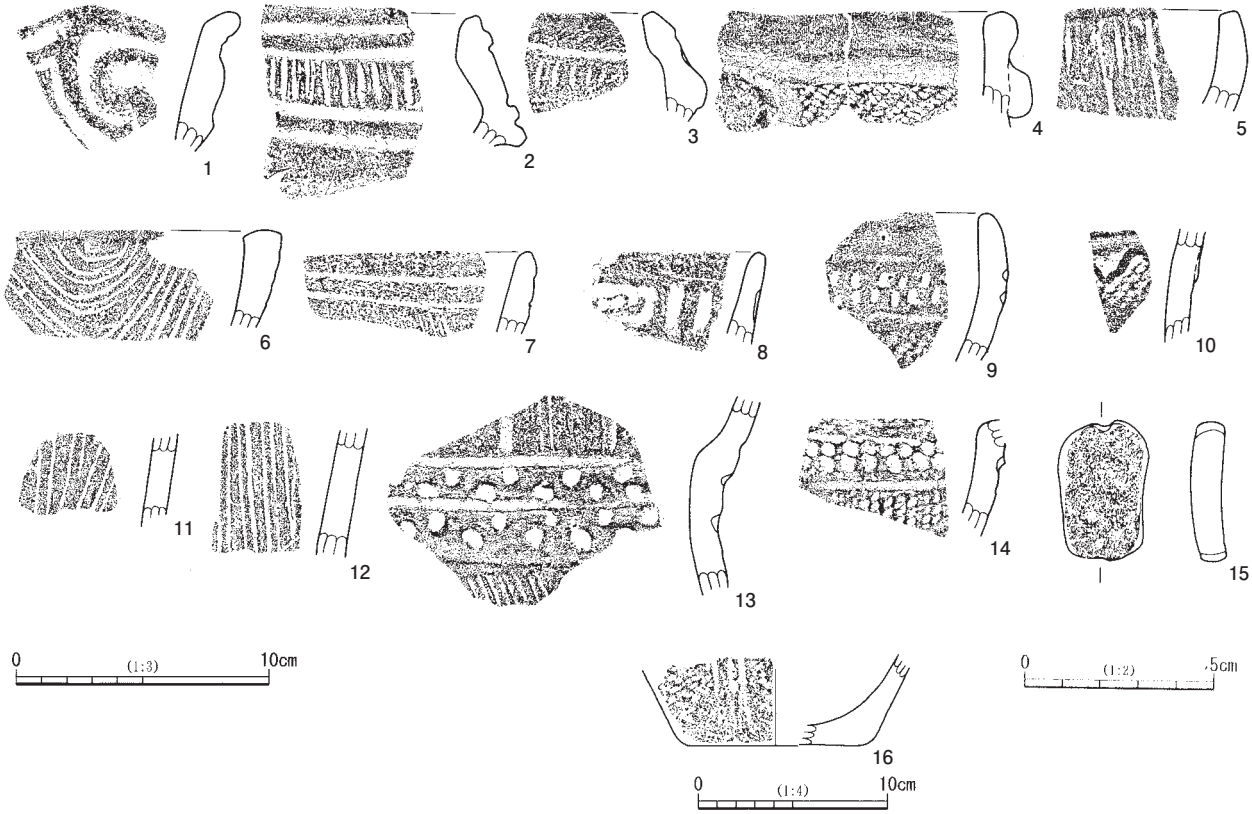
土器　一括土器の出土はみられなかったため口縁部と大型片を中心に図示した。１は波状口縁に渦巻文を描いたものである。２・３は口縁部でその屈曲する角度から器形は浅鉢となるようである。隆帯によって区画された口辺部には縦方向の沈線を充填したもので、時期的には加曽利ＥⅠ式とみなされる。８・10も同時期となろう。５～７、10～13は半截竹管や細い沈線により主文様が描かれている一群の土器である。曽利系の影響を受けていることは否定できない。13にみられる円形の刺突文は連弧文系に付された円形刺突文に近似する。９・14の文様構成はほとんど同様となる。刺突文下にみられる撚糸は９が縄文であり、14は撚糸文となる。14は典型的な連弧文系といえる。16は底部で沈線間は磨り消しが認められる。15は中期の土器片を利用した土錘である。僅かに縄文の痕跡を残すが拓本でははっきりしない。

石器　石器は土器に比べ多く出土している。未成品を含む石鏃は７点出土しており、周辺の住居跡でも破損品等がしばしばみられるところから石鏃を中心とした石器製作がおこなわれていたようである。

１～７は石鏃である。１は薄い剥片を利用して石鏃としたものである。２～４は破損品となる。５は周囲の剥離から石鏃製作の意図がよく理解できる資料となる。６・７も側縁での加工から石鏃製作を試みた結果、捨てられたものと思われる。

８～12は剥片である。８の右側縁上部には微細な剥離痕が認められる。そのほかは自然面を残す剥片であり、二次剥離が観察できるため図示した。石鏃製作には十分な大きさといえる。

13は石核である。礫を打割したもので、２枚～３枚の剥片を剥取したものである。ここでのチャートの剥片は、こうした礫から得られるものと思われる。



第46図　SI-009出土遺物

14～16は打製石斧である。14・15は頭部が遺存したもので扁平な礫を素材とし簡単に側面を整形して刃部を作出しているようである。16は刃部であり、裏面では自然面が認められる。

17～19は磨石である。いずれも欠損品で、18の表面ではきれいな磨耗部分が認められる。19は軟弱な凝灰岩で、表裏面に敲打による痕跡が窪みとして残っている。同種の石材はSI-008でも出土している。

SI-010（第24図、図版12）

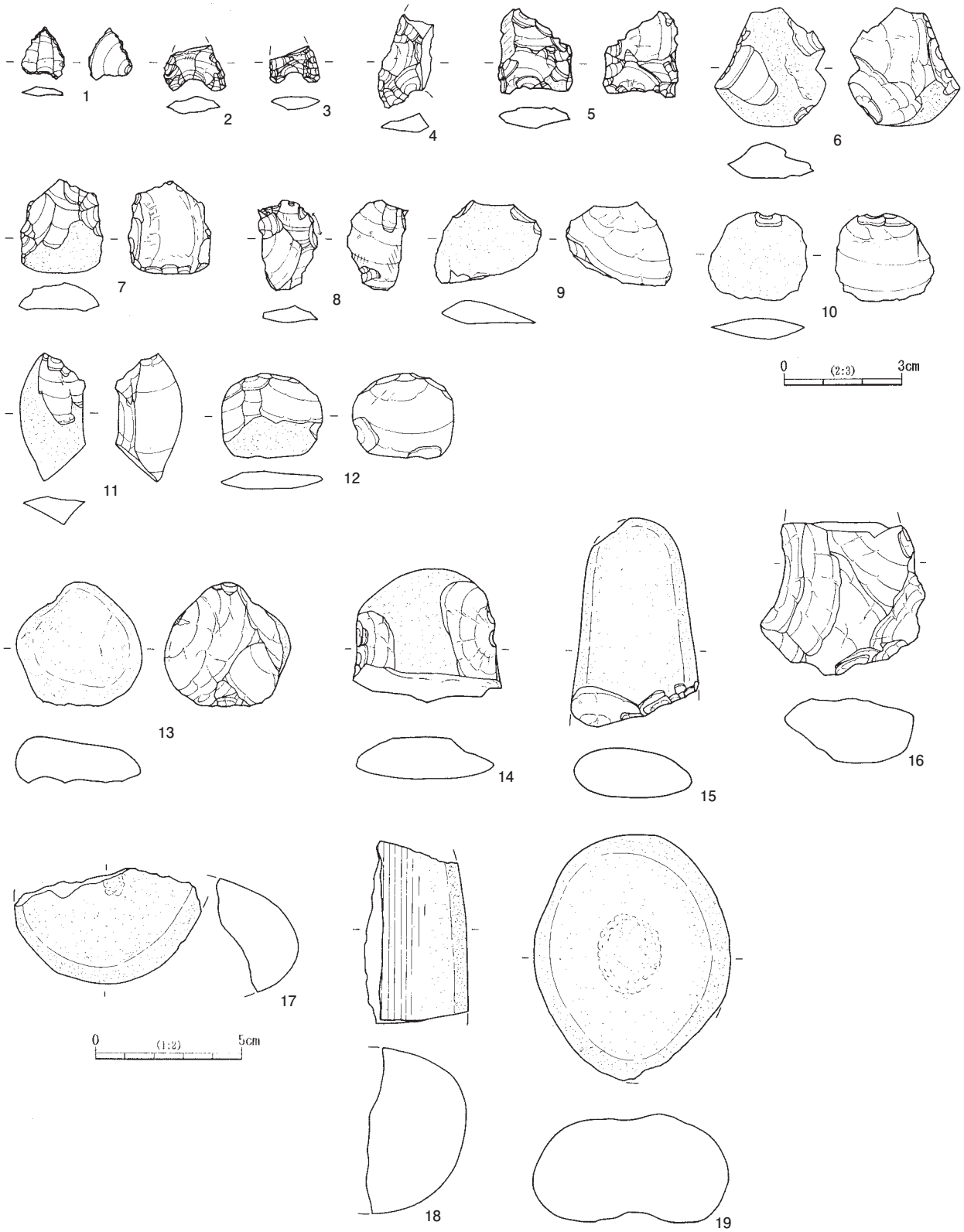
本跡は前述したSI-002の北壁の一部と重複していたようである。斜面部に位置しており、東側部分に15cmほどの落ち込みが認められたため住居跡の存在を想定しつつ調査を進めていった。その結果、住居跡と想定した部分の西側は傾斜部分にあたり壁面の確認はできなかった。つまり東側半分が僅かな壁面として残されているような状況であった。遺存部の径は4.4mを計測するが、形状は円形に近い隅丸方形といえる。床面は平坦であったが、柱穴らしきピットと炉跡は検出できなかった。北東コーナーよりに検出されたピットは開口部の大きさや形、底部の作りから土坑として分類した。

堆積土は、SI-002とほぼ同様な色調であった。ただ重複部分ではSI-002の覆土を切っているようにもみえた。

遺物は小破片が若干出土しただけで、本跡の時期決定までには至らなかった。

SI-010　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

P 1 －21	SK－071－23	SK－072－29

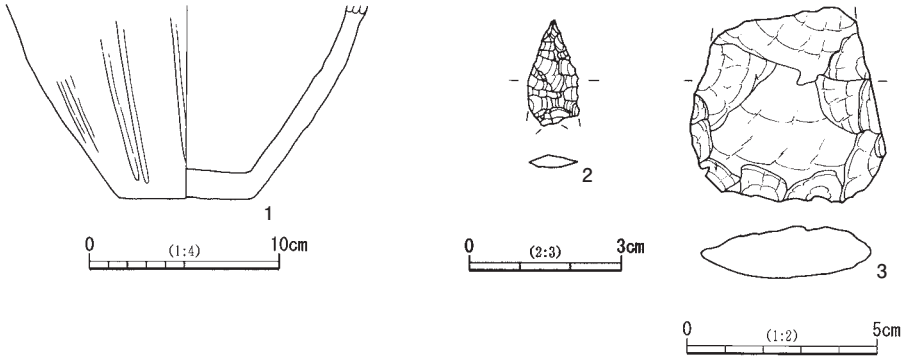


第47図　SI-009出土石器

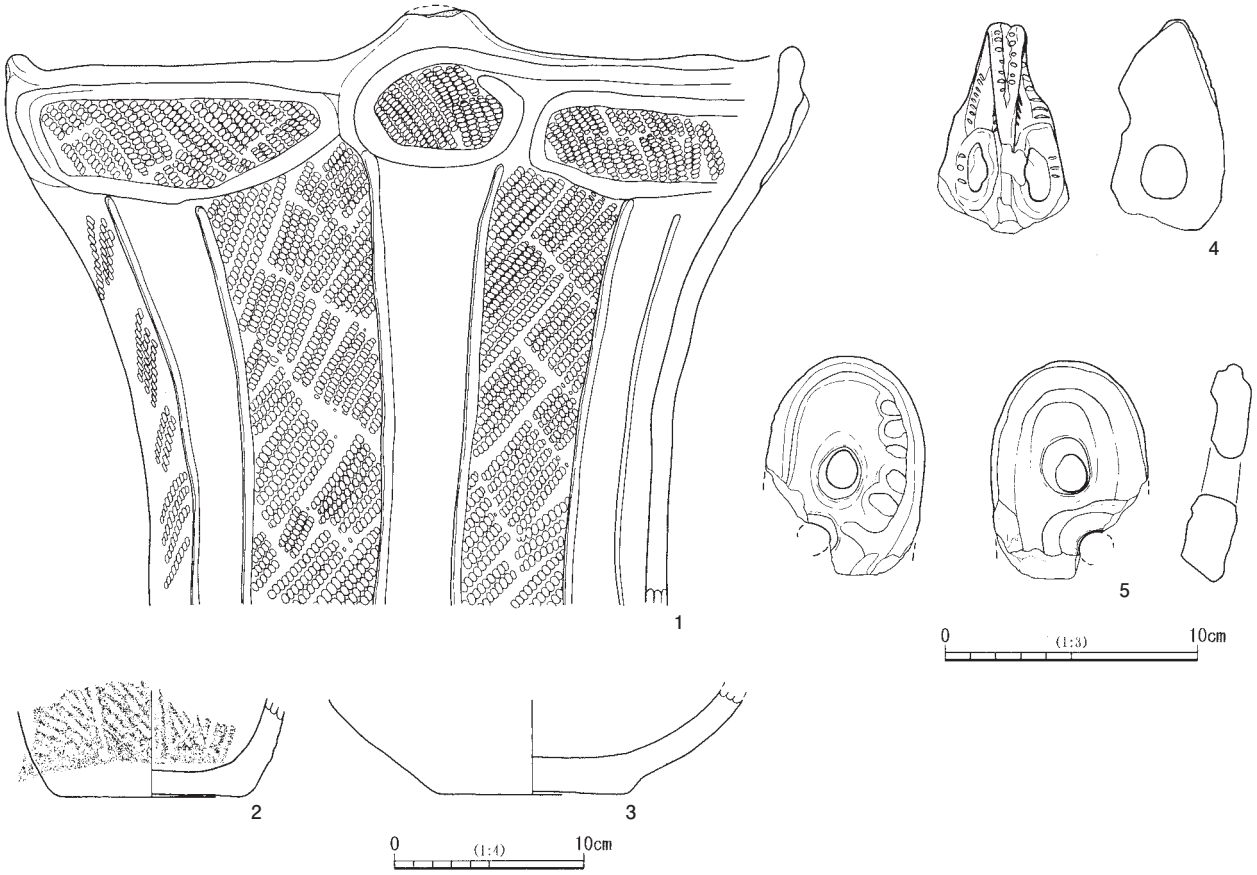
遺物（第48図、図版31・68）

土器　土器は、図示したもの以外は小片が若干出土しただけである。ただ図示した土器は北側斜面部から出土しており、本跡に伴う土器とは断定できない。器面は磨耗が著しく、僅かに２本一組の沈線が認められる。時期的にはおそらく加曽利ＥⅡ式となろう。

石器　２点が出土したのみである。２は脚部が欠損した石鏃で鋭利な先端部を作出し、薄く精巧な作りとなっている。３は頭部が欠損した打製石斧で、裏面は自然面で加工は施されていない。一部に被熱痕が認められる。



第48図　SI-010出土遺物



第49図　SI-011出土土器(1)

SI-011（第34・35図）

本跡は４Ｊ区の住居跡集中地区を精査中に小竪穴（SK-121）の中央部に一括土器が検出されたため、急遽遺構番号をSI-011として周辺の調査を進めていった。同時進行していたSI-014では南壁から東壁にかけては僅かながら確認できるが、北壁部分では地山も北方向に向かってやや傾斜しており、壁は明確に把握できなかった。こうした状況のもとでの調査であったため、本跡は一括土器出土地点と小竪穴周辺の精査に終始した。以下、記載した遺物は小竪穴周辺で出土した土器･石器である。

本跡の時期は一括土器の出土から加曽利ＥⅡ式期の末からＥⅢ式期と考えられるが、本跡では平面形等の詳細を把握することはできなかった。

遺物（第49～51図、図版31～33・68）

土器　１は口径約40㎝の大きな深鉢で底部を欠損する。口縁の波頂部下に描出された渦巻文は簡略化されたものであり、胴部にみられる磨り消しの無文帯は８か所にみられる。２は底部であるが、前者とは縄文の撚りが異なる。沈線間での磨り消しもみられないため、１より古く位置づけられよう。３も底部で大きく開くタイプとなるため浅鉢と考えられる。４・５は把手部分であり、その形状から時期的には勝坂式の末期に位置づけられよう。６～11は口縁部片で隆帯と沈線によって文様が構成されている。21～24は胴部片で磨り消し等はみられず、沈線と縄文のみとなる。これらはおおむね加曽利ＥⅠ式となろう。12・13は沈線のみで13の口唇部はやや凹むような作りである。28とともに曽利系の土器といえよう。14・15・18は渦巻文や沈線により区画された縄文がみられる。17・19・20では口縁直下に刺突文が施されている。16は２条の太い沈線が施され、胴部にもその痕跡が残る。25では横位に３本組の沈線が走る。これらは加曽利ＥⅡ式後半からＥⅢ式となろう。29は大型土器の胴部片で、隆帯による曲線で大胆に表現した深鉢である。時期的には加曽利ＥⅢ式となる。30は沈線間が磨り消され、31では縄文に変わり刺突文で充填している。

石器　石器は打製石斧を中心に10点を図示した。

１～４は打製石斧である。１は断面でみると磨製とも思えるが、刃部が欠損しているため打製石斧とした。２は完形品で左側縁は弯曲している。３は大きな原石から剥離した剥片を利用して製作した石斧である。裏面は周囲だけの剥離で仕上げている。４も磨製石斧から転用したような断面である。

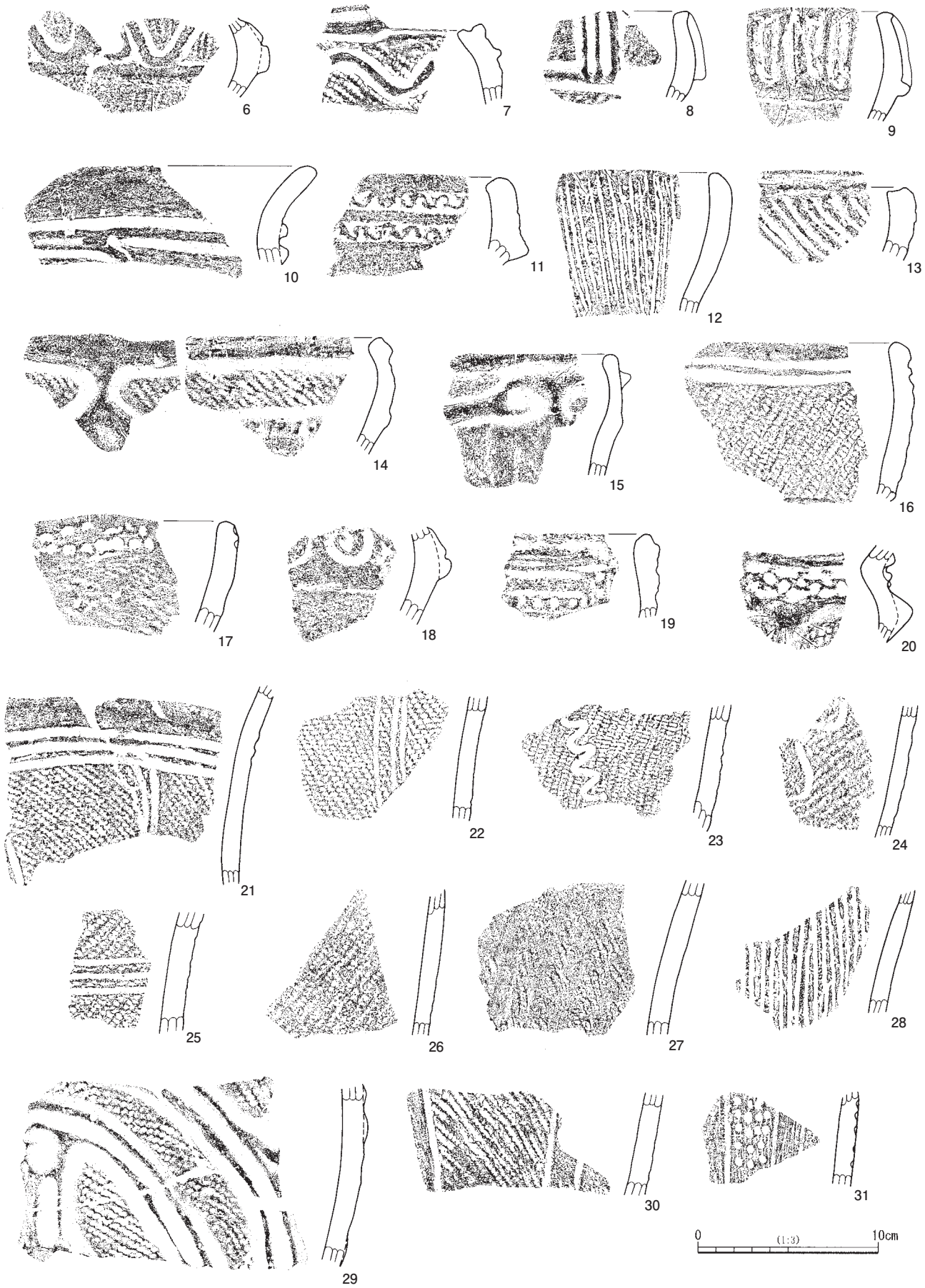
５・７は磨石である。５は径１㎝ほどの打痕の周囲には滑らかな面が認められる。７は上下部分を敲打に使用し、表面では若干ながら円滑な面を認めることができる。

６・８・９は敲石である。６は破損部の鋭角な部分を刃部あるいは敲打により使用している。片刃石斧ともいえよう。８は表面に僅かな打痕がみられる。９は下端部が顕著に使用されている。

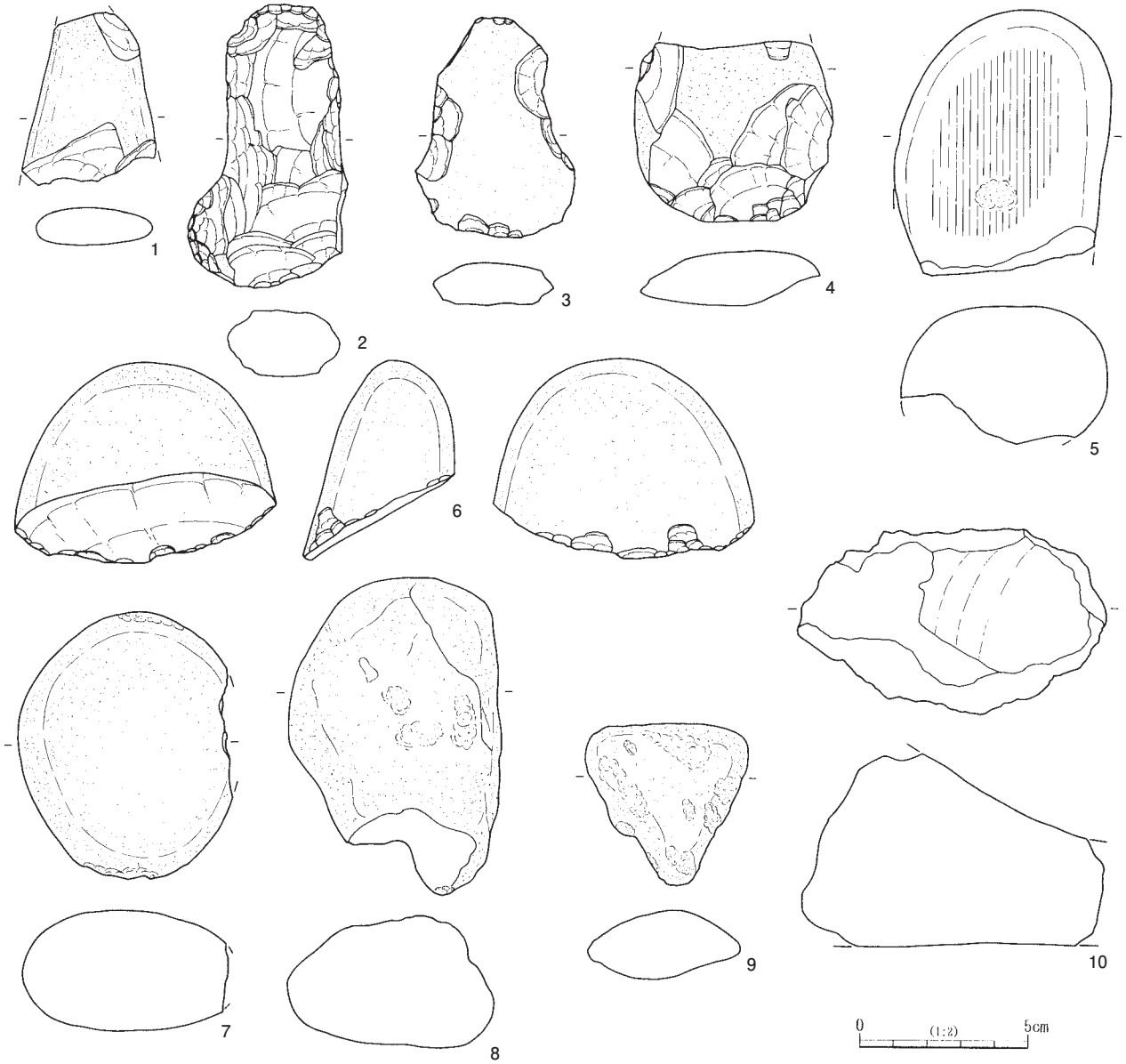
10は石皿の一部である。表裏面を観察すると長期に使用されたようである。

SI-014（第34・35・52図、図版12）

４Ｊ区のほぼ中央で検出されたものであり、調査開始時点でＰ１と接するような位置で一括土器が検出された。そのためこの土器を中心にSI-013を設定したが、調査が進捗するにつれ全容が把握できるようになると、SK-120を一周するような形で壁面を確認できた。さらに東西の壁の一部はSI-005とSI-008に接している。また、SK-120によって床面が大きく削除されていた。SK-120は、いわゆる小竪穴であり、床面下42㎝で底面となる。その中に穿たれたピットはSK-120に伴うものであろう。土層断面からは、住居跡の廃棄後にSK-120が構築されたようである。本跡の平面形は円形を呈しており、その径は約6.5mとな



第50図　SI-011出土土器(2)



第51図　SI-011出土石器

る。床面は緩やかな凹凸がみられ、Ｐ16とＰ17の間には焼土の散布が認められた。壁面付近では等間隔に小ピットが穿たれている。大部分は壁柱穴になるであろう。柱穴と考えられるピットは、Ｐ3、Ｐ６、Ｐ13、Ｐ23、Ｐ32、Ｐ35、Ｐ43などで主柱穴とも思われる。炉跡はSK-120の北に接して検出され、約20cmほど掘り下げ炉としていた。

堆積土についてみると、床面を覆う第２層、第３層には若干の焼土と炭化物が混入していたことが特徴的であった。第１層は黒褐色土（少量の焼土粒と炭化物を若干多く混入）、第２層は黒褐色土（焼土粒と炭化物を少量含む）、第３層は暗褐色土（粘質土と炭化物を少量含む）、第４層は黒褐色土（少量の焼土粒とローム粒を多く含む）、第５層は暗褐色土（ローム粒を多く含む）、第６層は暗褐色土（砂粒を多く含む）、第７層は暗褐色土（SK-120覆土で焼土粒･砂粒･ローム粒を少量混入）、第８層は暗褐色土（SK-120覆土で焼土粒少量、砂粒を多く混入）、第９層は黒褐色土（SK-120覆土で砂粒を多く混入）、第10層は黒褐色土（SK-075覆土で焼土粒を少量、ローム粒をやや多く混入）で構成されていた。一方、炉跡をみると、第１層は黒褐色土（焼土ブロック、ロームブロックを多く混入）、第２層は暗褐色土（焼土ブロック、ロー

ムブロックを少量混入）となり長期間の使用を想起させる。

遺物の出土状況についてみると、Ｐ１に接して１の胴下半部を欠失した深鉢が検出されSI-008に東壁に接する位置で２・３の深鉢が、ほかに炉跡とＰ45の間で浅鉢が出土した。これらの時期は加曽利ＥⅡ式とみなされる。また石器では石鏃、石鏃の未成品、剥片、石皿、台石、凹石などがみられ豊富な出土量となっている。

本跡の時期は一括土器の出土から加曽利ＥⅡ式期となろう。

SI-014　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

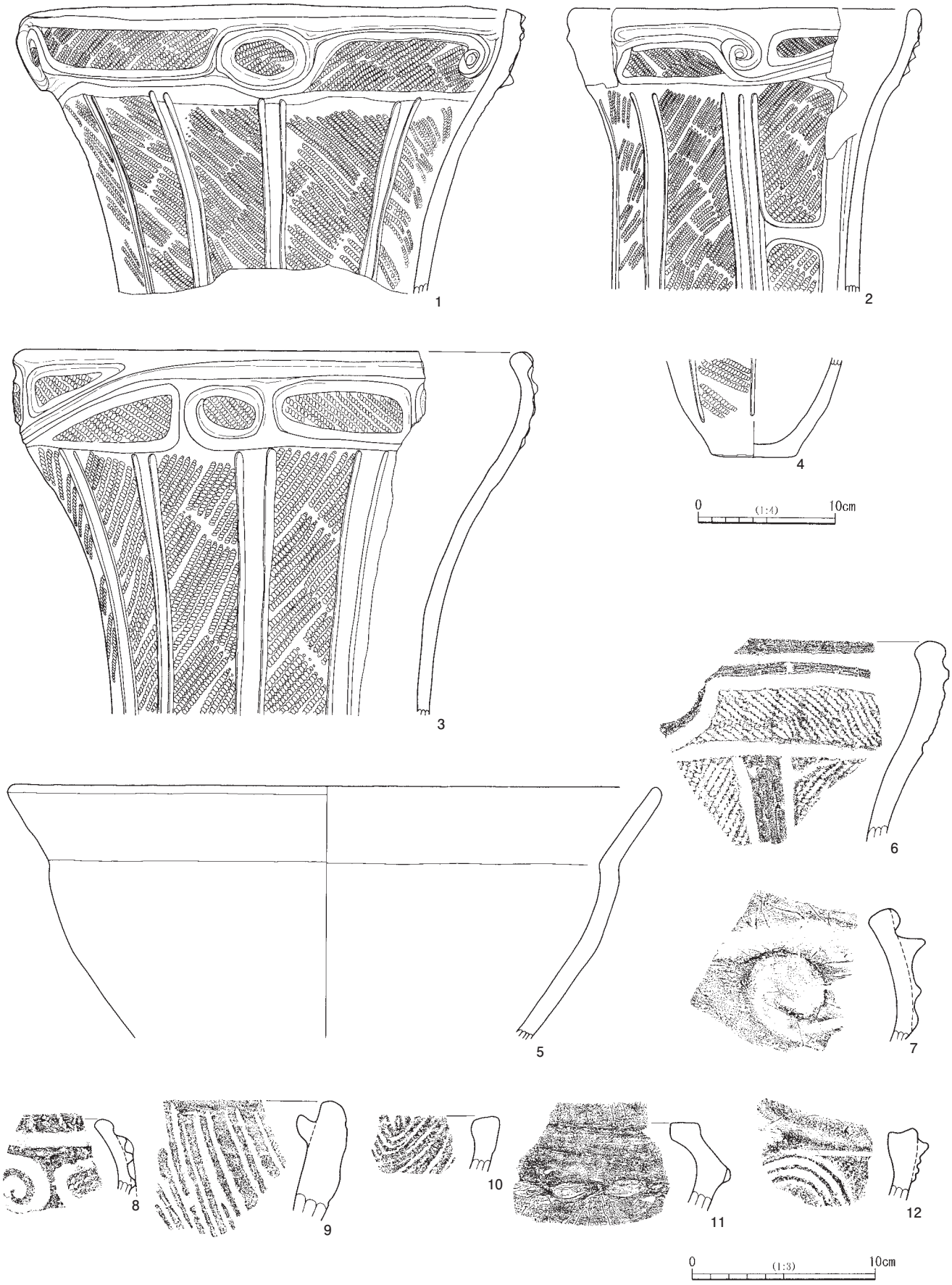
Ｐ１－69	Ｐ２－29	Ｐ３－41	Ｐ４－13	Ｐ５－30	Ｐ６－39	Ｐ７－23	Ｐ８－49
Ｐ９－16	Ｐ10－20	Ｐ11－71	Ｐ12－23	Ｐ13－72	Ｐ14－29	Ｐ15－17	Ｐ16－23
Ｐ17－27	Ｐ18－39	Ｐ19－18	Ｐ20－23	Ｐ21－14	Ｐ22－１	Ｐ23－52	Ｐ24－40
Ｐ25－42	Ｐ26－68	Ｐ27－28	Ｐ28－35	Ｐ29－46	Ｐ30－31	Ｐ31－26	Ｐ32－69
Ｐ33－11	Ｐ34－48	Ｐ35－63	Ｐ36－40	Ｐ37－39	Ｐ38－19	Ｐ39－19	Ｐ40－33
Ｐ41－20	Ｐ42－37	Ｐ43－63	Ｐ44－53	Ｐ45－27	Ｐ46－22	Ｐ47－11	Ｐ48－25

遺物（第52～55図、図版31・33・34・69）

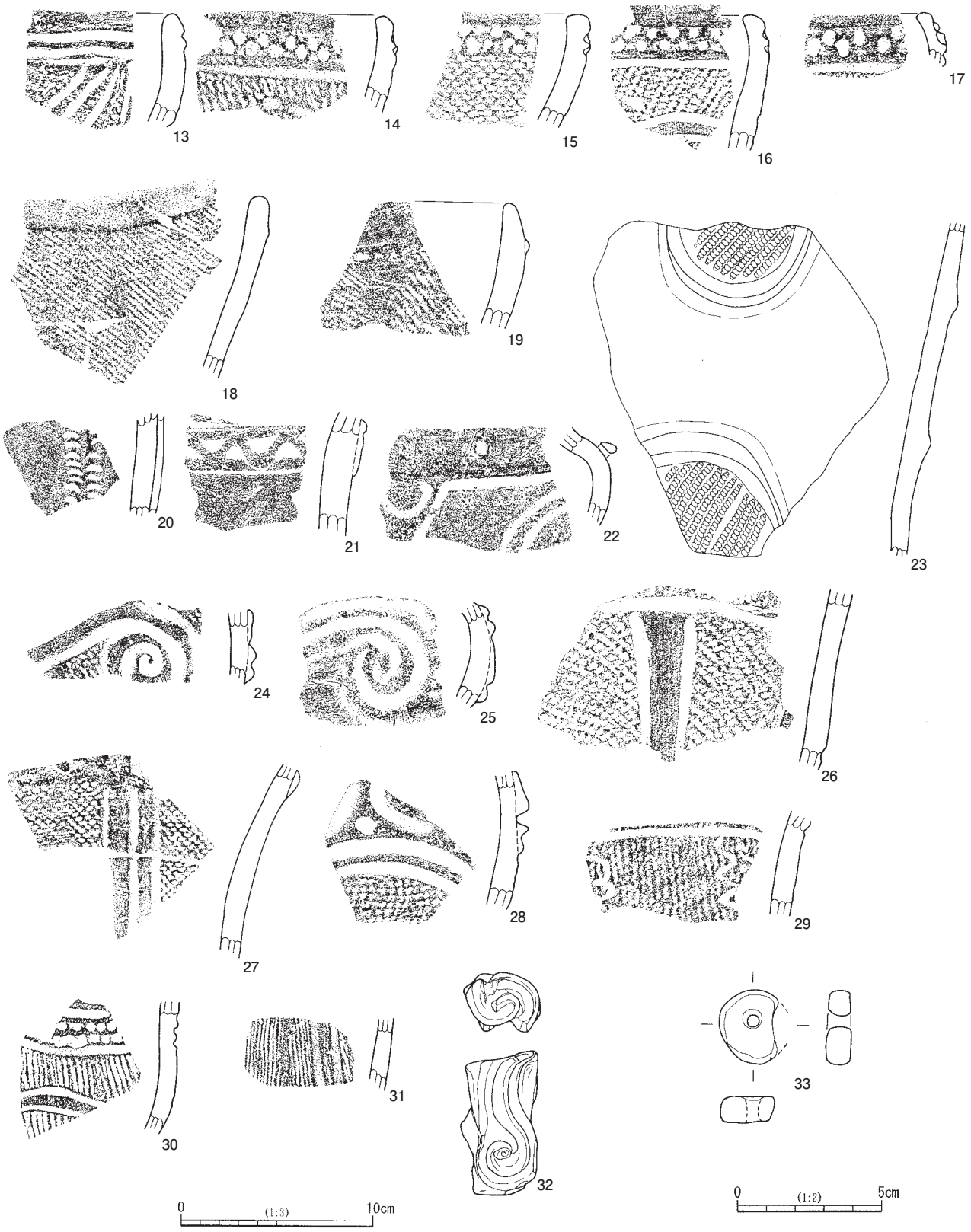
土器　１と３はほぼ同様な文様構成で器面が飾られている。楕円形ないしほぼ三角形の隆帯で区画された中は縄文で充填され、渦巻文は簡略化され楕円形に表現されている。なお、１は被熱した痕跡はみられないため炉としての使用はなかったようである。一方、２でははっきりとした渦巻文を描出している。４は小さめの深鉢で沈線間に磨り消しを有している。５は浅鉢で器面での文様は無く、底部は遺存しない。その口径は前出の深鉢を上回り推定48cmとなる。６～８では渦巻文や磨り消し等がみられる。13～17の口縁部は沈線と円形刺突文で構成される。いわゆる連弧文系を含む土器群となる。22は有孔鍔付土器の鍔部分である。24～31も時期的には一括土器と同時期の加曽利ＥⅡ式と考えられる。９・10は曽利系であり、９は内面に粘土帯による稜を形成する。11・12・21はやや古手の土器群で、粘土紐の貼付とその造形により文様を形作る。11は内彎する口縁部から浅鉢となろう。12は粘土帯で曲線を描き、21は鋸歯状に粘土を添付している。時期的には加曽利ＥⅠ式と思われる。18・19は緩やかな波状を呈した口縁部で、微隆起以下には縄文が施文される。典型的な加曽利ＥⅣ式といえる。32は同時期の突起部分となろう。23は大きな胴部片で、磨り消し部分が大きく隆帯によって楕円形に区画された中は縄文で充填している。時期的には加曽利ＥⅣ式直前の大型深鉢とみなされる。20は隆帯の左右にヘラによる幅広の連続爪形文がみられる。阿玉台Ⅲ式となろう。33は有孔円盤で一部欠損する。文様は認められない。

石器　ここでは石器の出土量が抜きんでている。とりわけ石鏃では多様な変化がみられ、成品か未成品の判別が難しいものもある。しかも破損品が多いことと多量の剥片の出土を考えると、本跡周辺で石器製作がおこなわれていたと考えてよいであろう。

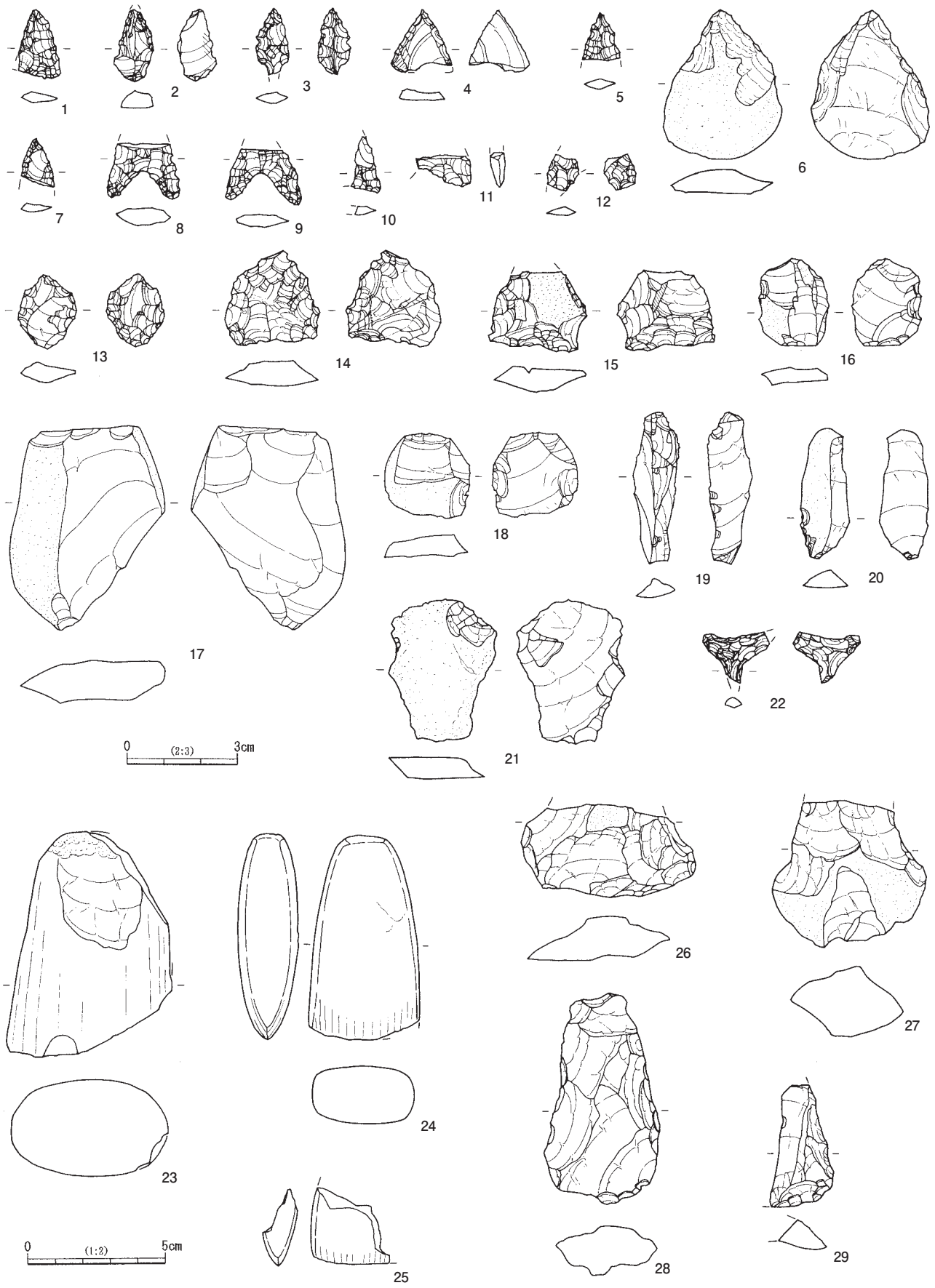
１～15は石鏃である。未成品を含めた15点のうち11点が黒曜石製である。その多くが破損しているため明確な形態を把握することはできないが、１～４の形態を比較すると大きく整形の異なる成品となる。１は左右が非対称で、２は整形が行き届いてないようである。３は明らかに有茎となり、４は薄い剥片の左右側縁を加工するだけで成品としたように思われる。また、６・13・14のみ欠損部はみられない。しかし６を成品と捉えるか、未成品とするか疑問の残るところである。13・14は製作途中で廃棄されたことも考えられる。



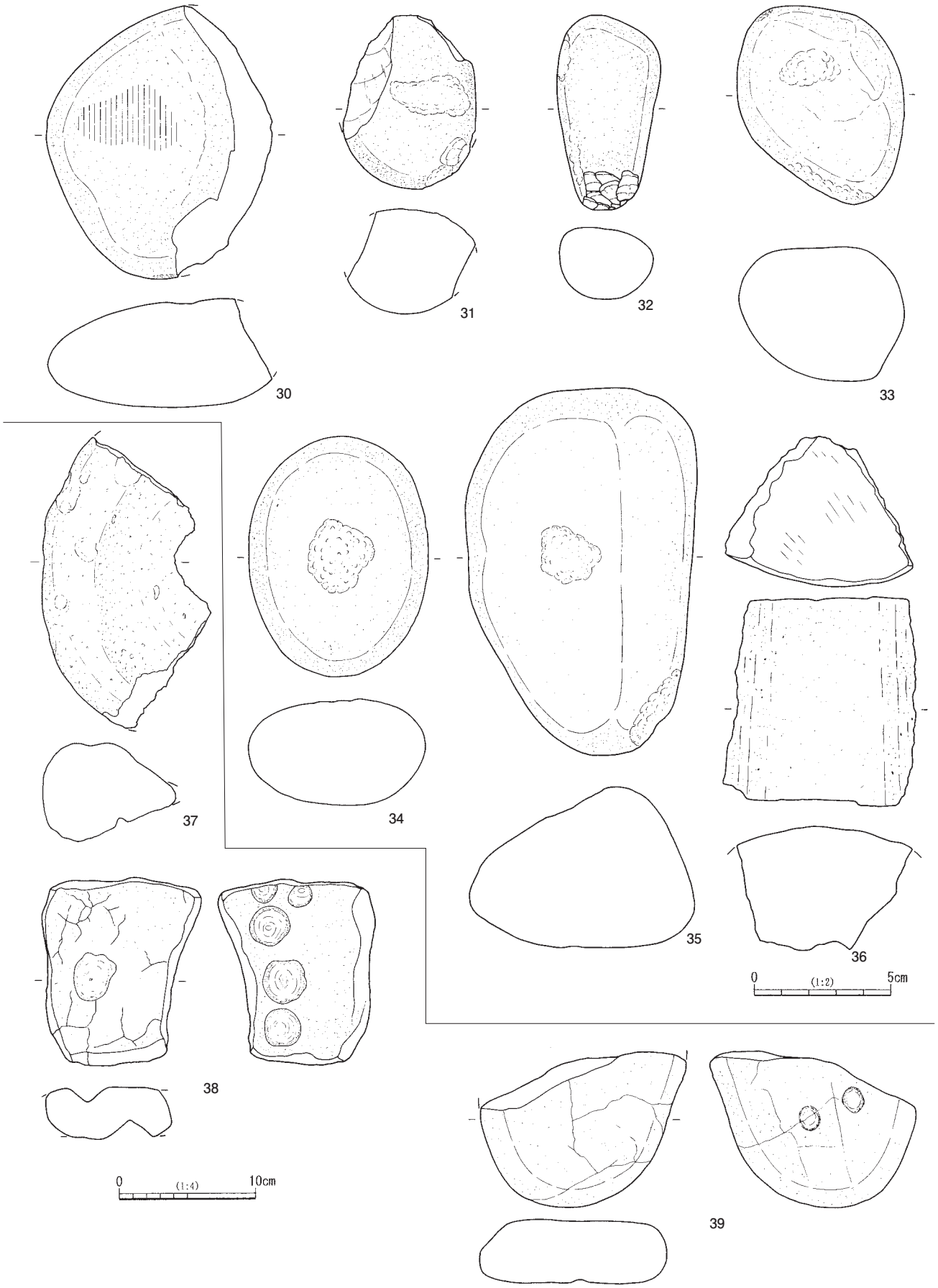
第52図　SI-014出土土器(1)



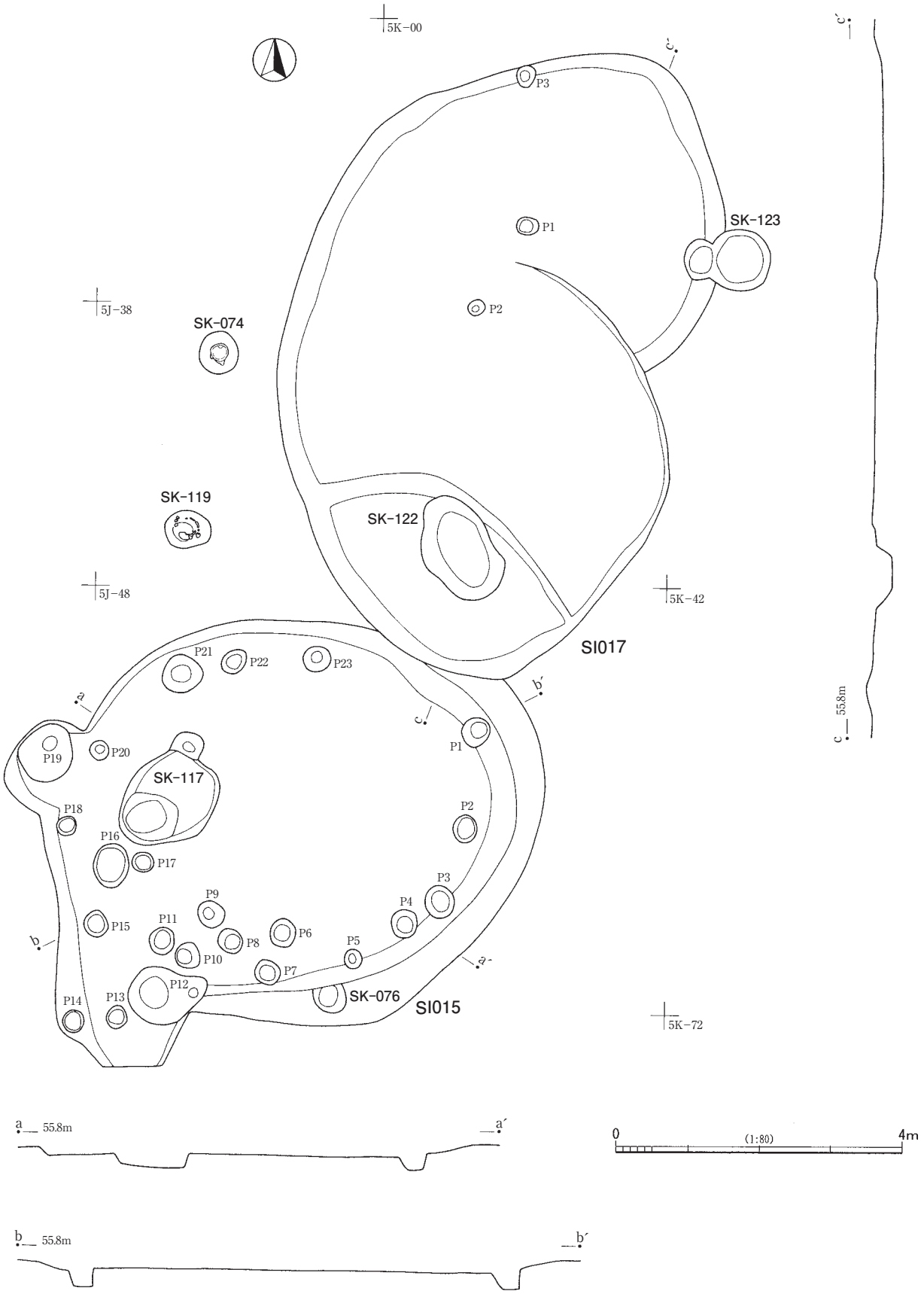
第53図　SI-014出土土器(2)



第54図　SI-014出土石器(1)



第55図　SI-014出土石器(2)



第56図　SI-015・017

22は欠損しているが石鏃と捉えるよりも石錐と考えてよいであろう。

16・17は楔形石器である。16は自然面の残る薄手の剥片であるが、上下端の表裏に剥離が施されている。17は上部で表裏からの剥離がみられる。

18～21は剥片である。いずれも二次剥離が施されているため図示した。19や20は石器として使用されていたことは間違いあるまい。

23～25は磨製石斧である。23は磨製石斧の上半部が遺存したもので、その後に敲石として使用されたらしく左側面には打痕がみられる。24は刃部を僅かに欠損する。きれいに面取された石斧といえる。25は刃部の約2／3が残されたものである。刃部の損傷は少ないため使用して間もなく破損したものと思われる。

26～29は打製石斧である。28は原形をとどめている。ほかは刃部が遺存したものであり、26・27では自然面が認められる。29の遺存部をみると、表裏面はかなり丁寧な剥離で整形されていたようである。

30・31・34は磨石である。30は欠損しているが、表裏面の中央部は滑らかな面に変化している。34は表裏面に打痕がみられ、その周囲は磨耗している。

32・33・35は敲石である。32は石器製作に用いたらしく、下端部が著しく損傷している。33は表面の中央部と下端部が敲打のためか白く変色している。35も表裏面の中央部に打痕を残す。

37は石皿である。約1/4が遺存し、長期の使用により中央部が抜けてしまったようである。SI-002から出土した石皿片と接合している。

38は凹石である。数か所の窪みが認められる。断面はやや弯曲しており、石皿の一部であったと思われる。

39は台石である。表面に２か所の凹みが認められた。石皿として使用されていたとも考えられる。破損面も磨耗していたため台石に転用したものであろう。

36は石棒の一部が遺存したものであり、推定径は15㎝となる。表面は丸く整形されている。破損部の一面は磨耗しているため破損後も再利用されていたと思われる。この径の大きさから考えると中期の所産となろう。

SI-015（第56・57・58図、図版12・35・39・70）

本跡は住居跡集中部の南、大グリッドでいう５J区と５K区間で検出され、後述するSI-017と北側の一部が重複する。平面形は長径7.0m、短径5.6mの楕円形を呈するものと思われるが、西側部分がはっきりしない。あるいはＰ12とＰ19は出入り口部分とも考えられる。壁面は西側ではっきり確認できたが、そのほかでは緩やかに立ち上がっていた。床面は比較的平坦であった。中央西よりに浅く大きな掘り込みが確認できたが、本跡とは切り離して考えるべきものであろう。ここではSK-117とした。ここでの炉跡は検出できなかった。精査はしたものの痕跡らしきものさえ確認できなかった。重複するSI-017でも炉跡は存在していなかった。ピットは計23か所で検出できた。床面上のピットを観察すると、その位置は壁に沿った形で配置されているため壁柱穴とも考えられる。

堆積土は、他の住居跡と同様に黒褐色土の堆積がみられた。

遺物の出土状況についてみると、１はＰ22の周辺で、２は３の0.6m東、３はSK-117とＰ23との中間地点で押し潰されるような形で検出されている。そのほかは床面に近いところから出土している。石器も磨石・石斧類のほかに石鏃や楔形石器などの剥片石器もみられた。

本跡の時期は、緩やかな波状を描く連弧文の一括土器から称名寺式・堀之内式と入り交じった状態で出

土しているが、より後出の堀之内１式期と考えたい。

SI-015　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

Ｐ１－24	Ｐ２－34	Ｐ３－28	Ｐ４－20	Ｐ５－８	Ｐ６－22	Ｐ７－13	Ｐ８－35
Ｐ９－６	P10－26	P11－24	P12－35	P13－11	P14－23	P15－26	P16－12
P17－31	P18－10	P19－28	P20－23	P21－25	P22－10	P23－18	

遺物（第57・58図、図版35・39・70）

土器　１と２は連弧文系の深鉢である。１の地文は撚糸で口縁直下に２列の刺突が巡る。３は口縁部が欠損するもので下降する沈線の様相から堀之内Ｉ式となろう。４も同時期であろう。６・８～10は比較的細い撚りの縄文を地文とし、９・10では沈線間を磨り消している。これらは加曽利EⅢ式からＥⅣ式への移行期にみられる土器群といえよう。11と17は、その文様構成から称名寺式となろう。そのほかは口縁部の作り、沈線の用い方などから堀之内式に属するものである。12・15は堀之内式でも後出のタイプとなろう。ほかに土製品が１点みられた。５は土錘と考えたが、周囲は磨耗しており切り込みが明確ではない。拓本には沈線の一部と刺突が僅かに残されている。

石器　10点が出土した。

１は石鏃である。破損品であるが、右側縁部の作りは丁寧である。製作途中で廃棄されたものであろう。

２は楔形石器である上部で表裏面での剥離が認められるため楔形石器とした。見方を変えると石鏃製作の素材とも考えられる。

３は掻器である。打点部に近い厚手の剥片を素材とし周囲に簡単な整形を施し石器としたものである。作りについてみると粗雑感は否めない。

４は剥片である。裏面下端部には整形のための剥離が３回にわたって施されている。楔形石器として使用したものか、未成品とも考えられる。

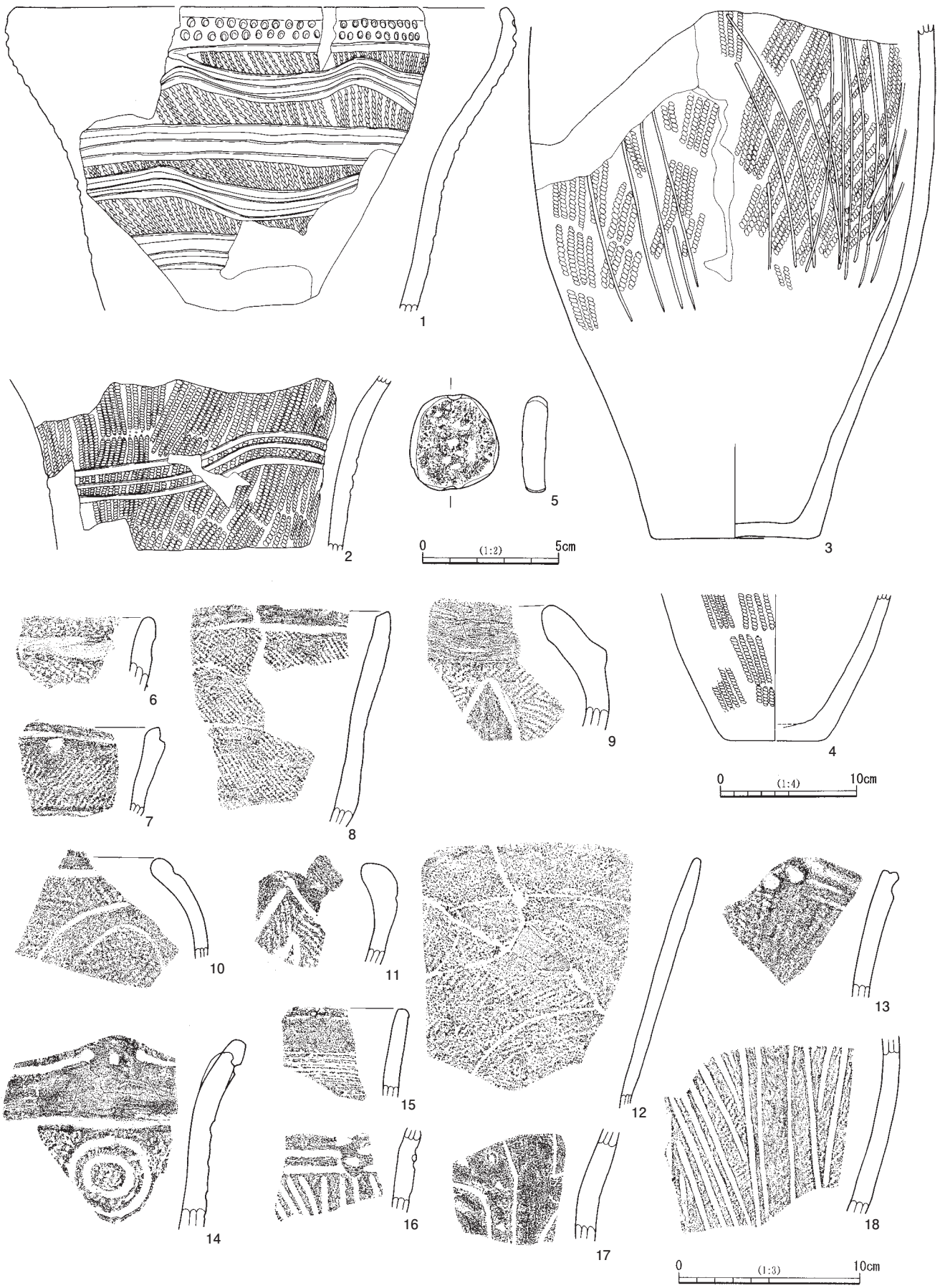
６・７は打製石斧である。６は一部欠損するものの分銅タイプに近い石斧である。７は上半部を失っている。刃部は簡単な剥離で作出したものである。また、側面では顕著な打痕が認められるため、破損後には敲石として使用していたものであろう。ともに自然面を残している。

８～10は磨石である。３点とも表面は滑らかである。８の下端部は意識的に剥離したような剥離面である。９は上部に打痕が認められる。10にも左下端部に打痕を観察することができる。

５は石剣である。一部が遺存したものである。遺存部が磨製石斧の上半部と異なり平行に整形されている点と石材には緑泥片岩が採用されている点から、石剣の可能性が強いものと判断した。

SI-016（第59図、図版13）

本跡は５Ｋ区の西側、５Ｋ-83・84グリッドで検出された小型の住居跡である。平面形はほぼ円形を呈しており、長径は4.2m、短径は4.0mを計測する。壁は比較的良好な状態で遺存しており、やや傾斜するが床面までの掘り込みは15cmほどの深さであった。床面は西に傾斜するものの平坦である。ピットは２か所のみで浅く柱穴を想起させるものではない。ただＰ１としたピットは床面から５cmと浅く、なだらかな掘り込みであったため焼土はみられなかったが、炉跡として使用していたとも考えられる。



第57図　SI-015出土遺物

堆積土は、黒褐色土が主体となり、下部では黄褐色の砂粒が若干混入していた。Ｐ１の堆積土も同様であった。

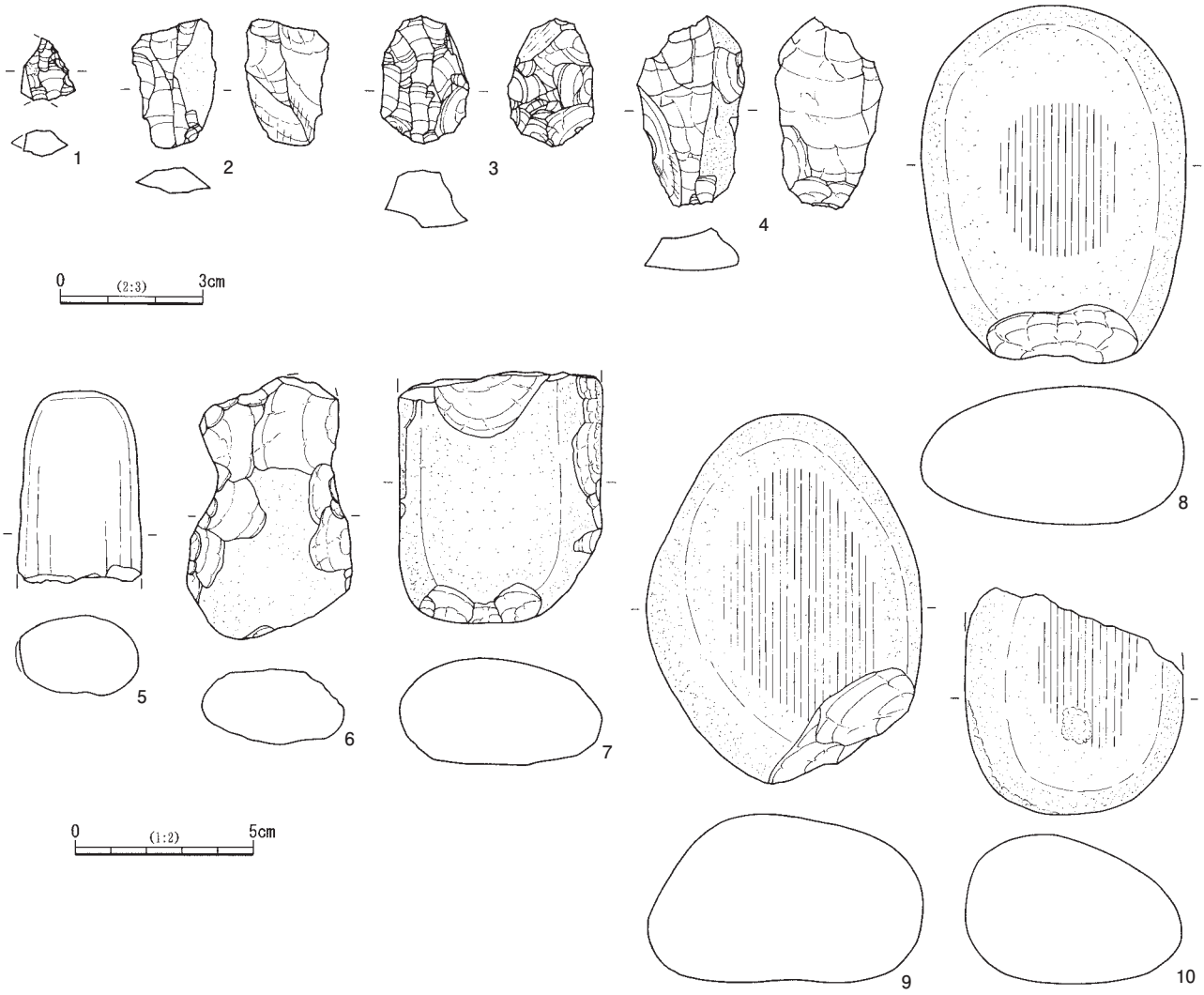
遺物の出土状況についてみると、Ｐ１から薄手の深鉢が出土し、覆土中からも後期の土器群がみられた。本跡の時期は大型破片等の出土から堀之内Ⅱ式期となろう。

SI-016　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

Ｐ１－５	Ｐ２－７

遺物（第59・60図、図版36・39・70）

土器　本跡から出土した土器群はすべて後期に属するものであった。１～３は底部で、３の底部には網代痕がかすかに残る。胴部では縄文が施文されているようであるが、器面の剥落が著しく図示してもはっきりしない。４は浅鉢で補修孔が穿たれている。口唇部と沈線下には刻目が施される。５・６は縄文地に半截竹管による浅い沈線が器面を飾る。７・８は同一個体で、口縁は波状となる。器面はヘラ状工具により整形しているが、かなりの部分で凹凸が残る。９～12は口辺に粘土帯を貼付した土器群で、10・11の裏面

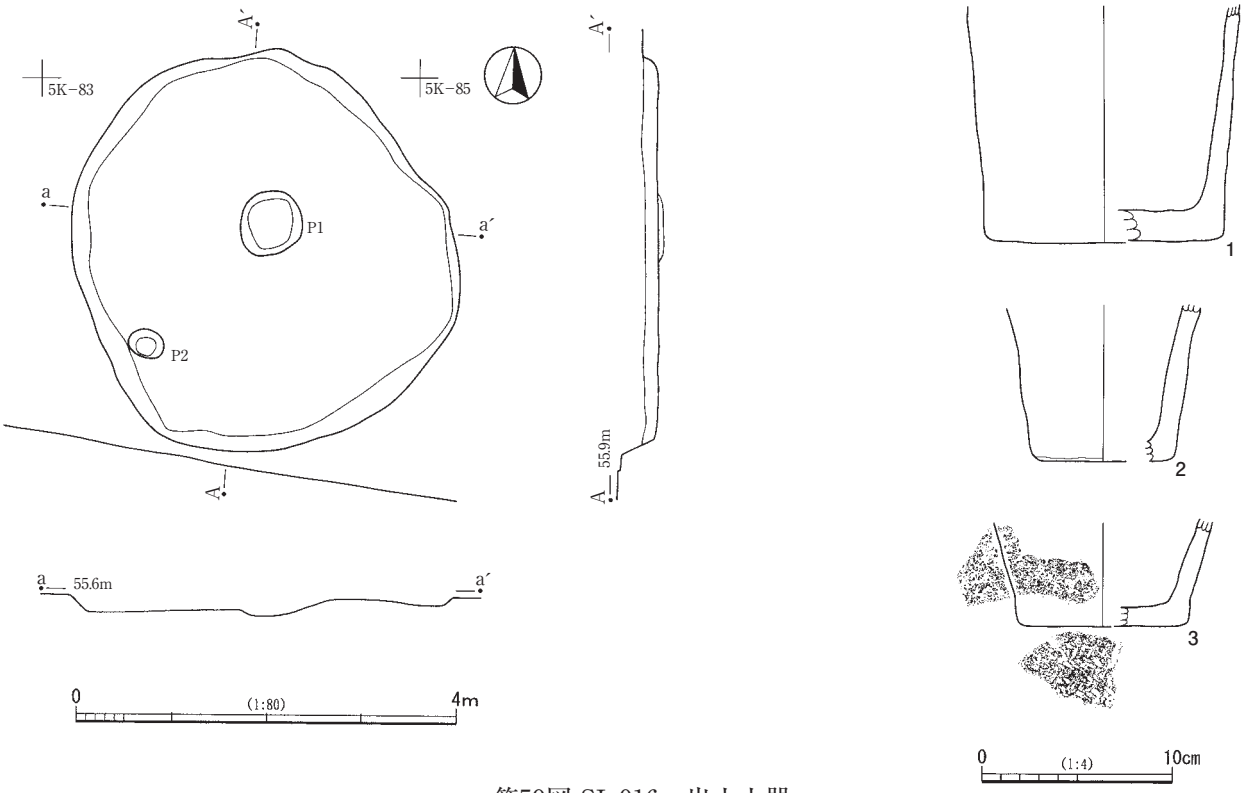


第58図　SI-015出土石器

にみられる沈線は細いが深くしっかりと掘り込まれている。13・14も同一個体であり縄文地に斜行する浅い沈線が特徴的である。これらは堀ノ内Ⅱ式とみてよいであろう。15は胴部片で沈線により渦巻が表現されている。堀之内式の渦巻きとは異なるため加曽利E式でも古い部分に位置づけられよう。16も縄文のみで即断はできないが同一時期と考えられる。

石器　３点が出土した。

17は完形の打製石斧であり、扁平な河原石を素材としたもので表裏に自然面を残す。18・19は敲石で、18の敲打部分は表皮が剥離し白色化している。19は上下の端部に僅かな打痕が観察できる。また裏面の平坦部は滑らかであり、磨石としても使用されたようである。



第59図 SI-016・出土土器

SI-017（第56図）

本跡は前述したSI-015の一部と重複する。平面形は、楕円形を呈した２軒の住居跡が重なり合ったようにも思われる。壁面と思われる部分は緩やかに傾斜し床面へと続くが、主柱穴に値するようなピットはみられない。さらに炉の痕跡も認められず住居跡とするには甚だ心許ない。ただ、深鉢の大型片が出土したため、住居跡の存在を想定して調査した。

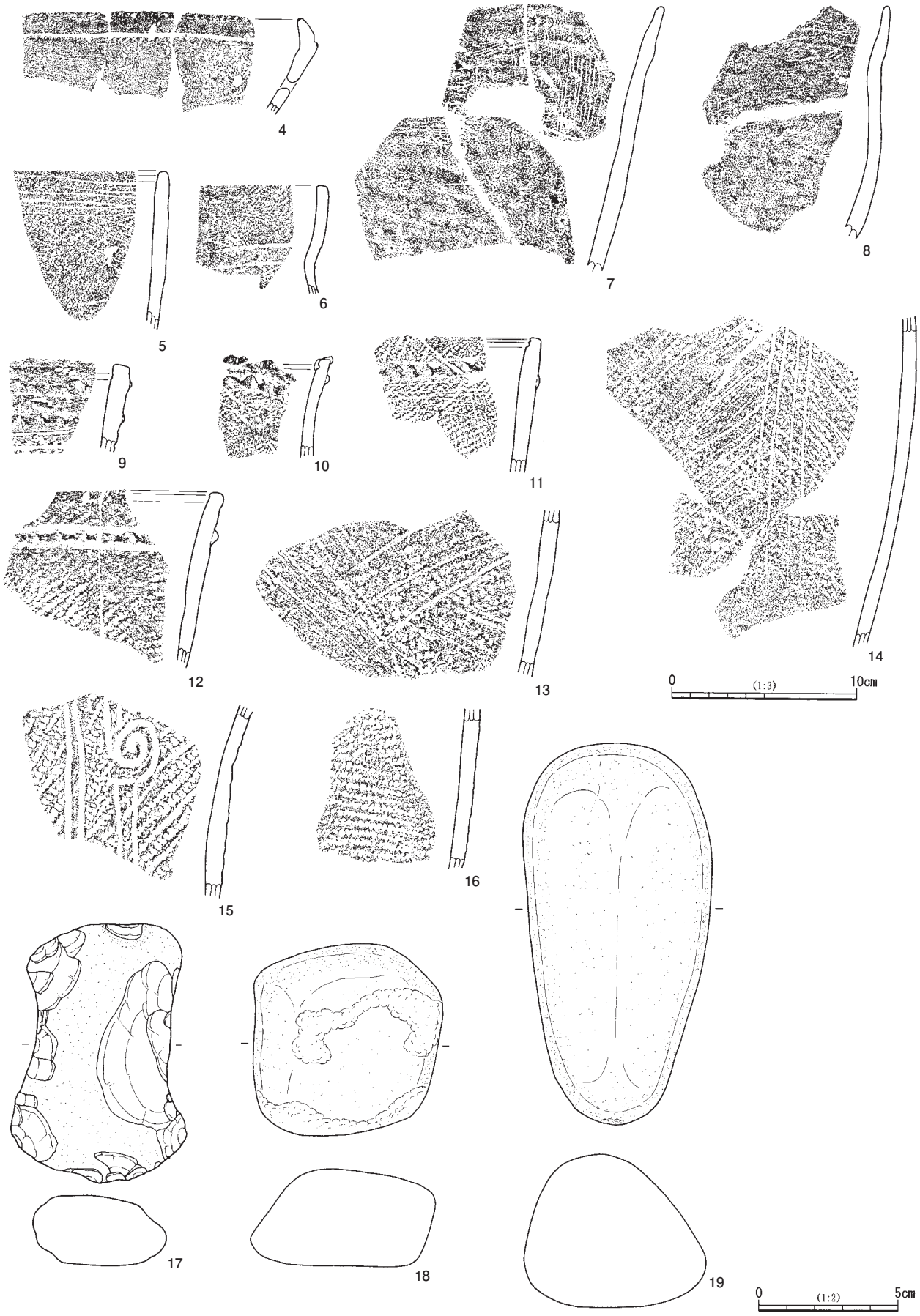
堆積土は、黒褐色土が主体となっている。

遺物の出土状況についてみると、後期に属する大型片と底部が出土している。

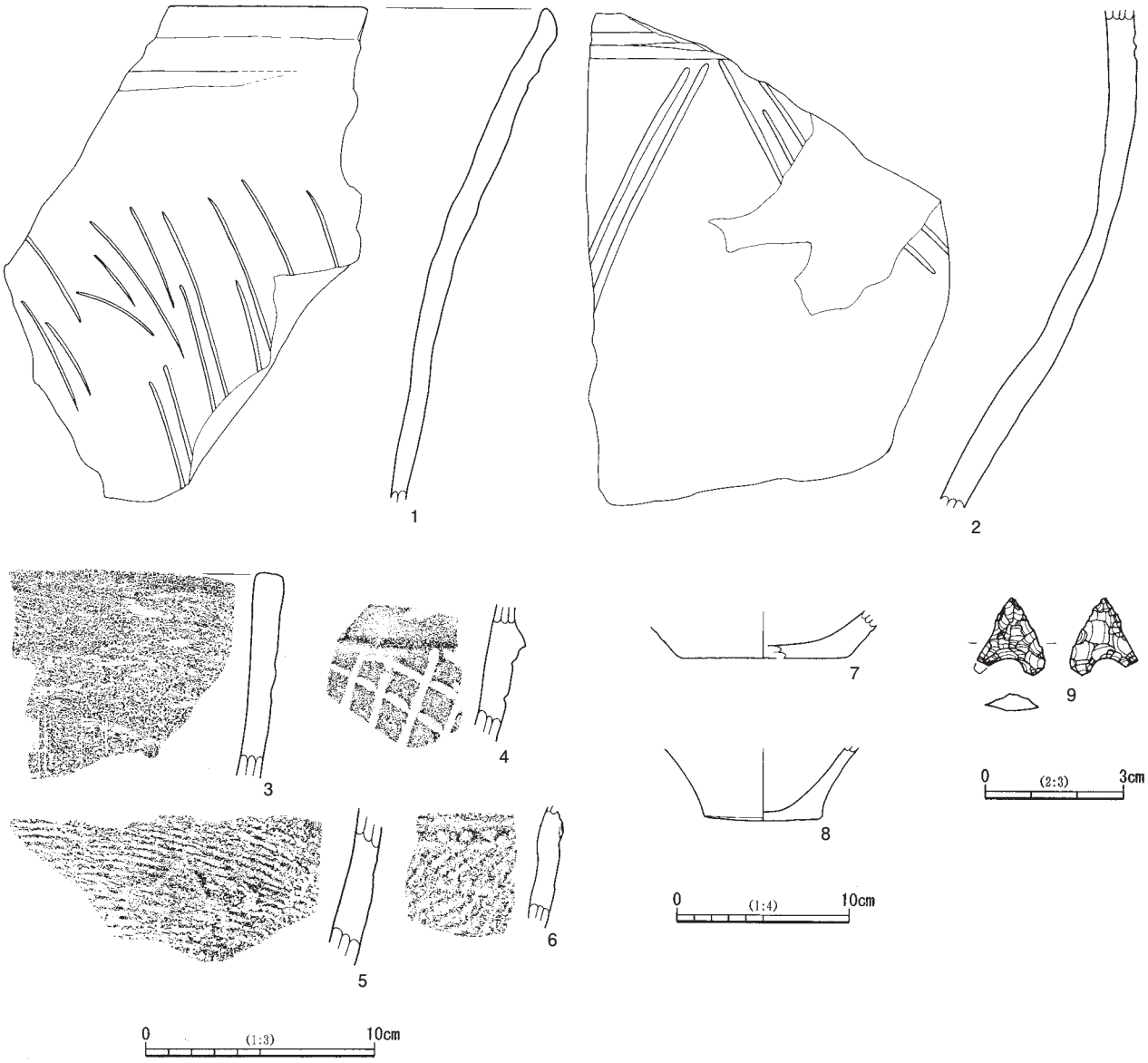
本跡の時期は、出土土器から堀之内Ⅱ式期と考えられる。

SI-017　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

Ｐ１－23	Ｐ２－19	Ｐ３－25



第60図　SI-016出土遺物



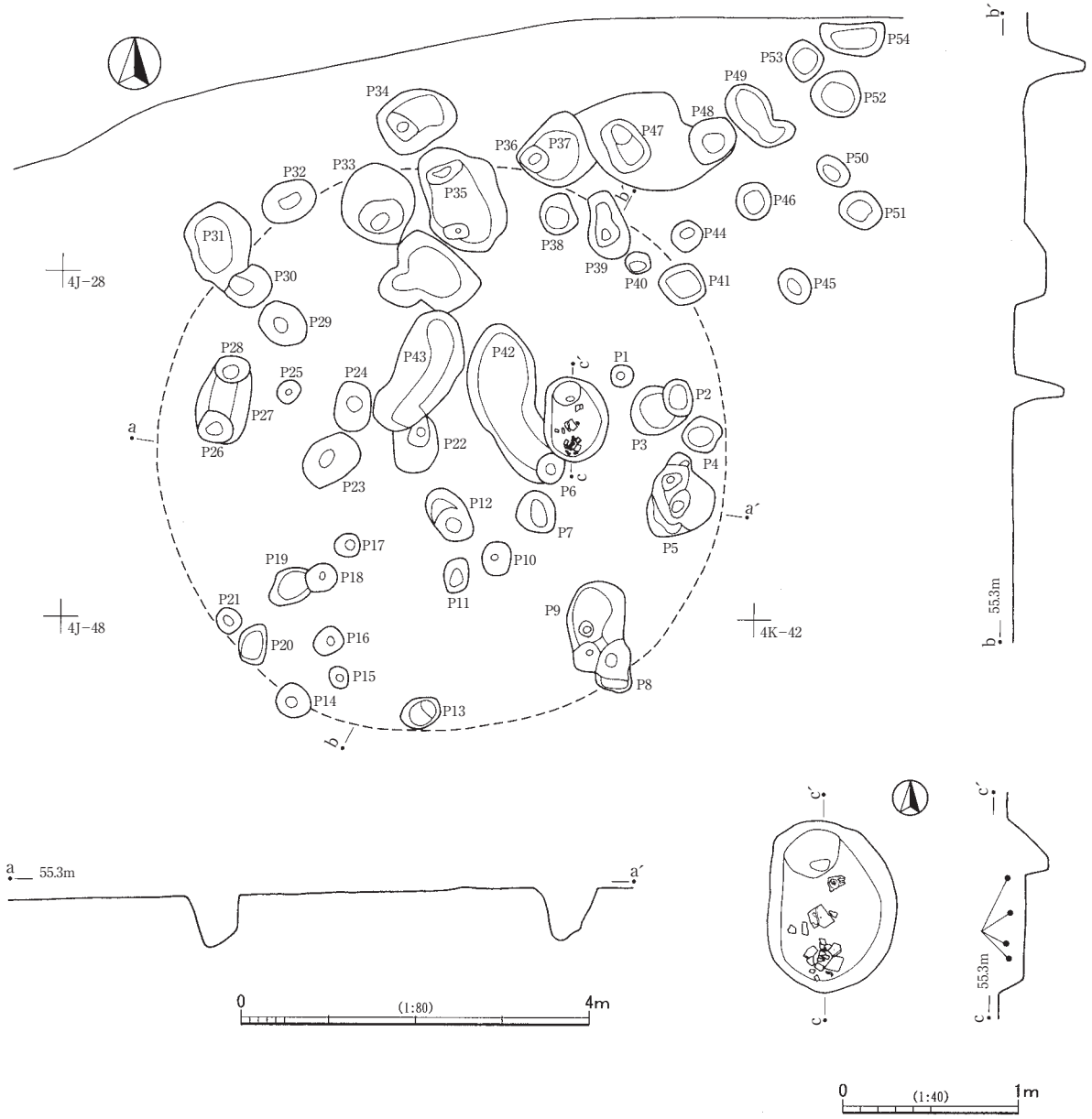
第61図　SI-017出土遺物

遺物（第61図、図版37・39・70）

土器　土器の出土量は少なかったが、大型の破片が２点出土した。１はＰ２から２ｍほど南で出土している。口縁が緩やかに外反する深鉢で沈線らしき痕跡を残す。胴部はヘラ状工具で整形しているが粗雑なものである。また口縁部の内側は若干内彎するような作りである。２はポイントＣ′付近の床面から出土したものである。胴部の膨らみが大きい深鉢で、口辺には横走する沈線と胴部にみられる斜行沈線で主文様を構成している。ただ器面が磨耗しているため、地文に縄文らしき痕跡もみられるがはっきりしない。以上の２点は施文等から堀之内Ⅱ式と考えられる。３は下部に半截竹管状の工具による縦方向の沈線がみられる。器面の整形は粗い。４の隆帯以下でははっきりとした沈線による格子目文が描かれる。５は全面が縄文施文と思われるが磨耗により痕跡をとどめる程度となっている。６には紐線文が僅かに確認できる。これらはおおむね堀之内Ⅰ式となろう。底部が２点出土している。いずれも堀之内式に属するものと思われる。

石器　１点出土した。

９は石鏃である。左脚部を若干欠損しており左右対称とはいいがたい。表裏面の剥離は丁寧に施されている。



第62図　SI-018

SI-018（第62図、図版13）

本跡は４Ｊ区と４Ｋ区にかけて検出されたピット群を精査の過程で、４Ｋ-21・22グリッド間において一括土器の出土とともに炉の痕跡を確認した。そこで炉跡を中心に平面形の把握を試みたが、精査の結果、周囲はほぼ平坦で壁の立ち上がりなどの痕跡すら見当たらなかった。しかし、炉跡周辺の床面は比較的平坦で状態は良好であった。ピットの検出状況をみると、炉跡の東側では耕作による削平も深くほとんど認められなかった。しかも遺構の分布も希薄となっていた。炉跡を基準として住居跡の範囲を破線で括ったが、Ｐ30～Ｐ41までは壁柱穴とも考えられる。だが、Ｐ42とＰ43は、その形状から後期にしばしばみられる出入り口のような様相を呈している。またピットの深さも一様ではないが、床面下で30cmを超えるピット数は25か所と多数が検出されているところから住居跡の重複も考えられる。炉跡は楕円形であり、長径98cm、短径75cmを計測する。深さは床面下15cmとなる。

炉内の覆土は黒褐色土で若干の焼土が認められ、床面直上の堆積土も焼土を除きほぼ同様なものであった。

遺物の出土状況についてみると、本跡では炉跡内とＰ35から器形の窺える粗製深鉢が出土している。ほかには中期から後期にかけての破片がみられた。

本跡の時期は炉跡から出土した粗製土器から加曽利ＢⅠ式期に該当する。

SI-018 ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

Ｐ１－44	Ｐ２－58	Ｐ３－15	Ｐ４－28	Ｐ５－68	Ｐ６－44	Ｐ７－23	Ｐ８－47
Ｐ９－55	P10－53	P11－16	P12－62	P13－14	P14－37	P15－16	P16－35
P17－58	P18－36	P19－16	P20－55	P21－27	P22－56	P23－60	P24－54
P25－31	P26－38	P27－16	P28－30	P29－53	P30－24	P31－26	P32－20
P33－28	P34－27	P35－26	P36－51	P37－32	P38－35	P39－70	P40－33
P41－27	P42－36	P43－50	P44－41	P45－30	P46－37	P47－37	P48－30
P49－22	P50－38	P51－40	P52－22	P53－29	P54－37		

遺物（第63図、図版38・39・70）

土器　ここでも大型の剥片が出土している。１は口縁部から胴下部にかけての大きな破片である。炉跡の上面から出土している。器面は縄文で全面に施文が及ぶようである。口縁の内側には浅い沈線がみられる。２は口縁部と底部を欠損する深鉢で器面には若干磨き痕が認められる。３は１の底部と考えられるが接点を見出すことはできなかった。いずれも加曽利BⅠ式となろう。４は把手部分の破損品であり、勝坂式終末期のものであろう。５は波状口縁片で隆帯以下は細沈線で縄文と磨り消し部分を区画している。時期的には加曽利EⅢからＥⅣ式への移行段階といえよう。６は口縁直下に粘土帯を貼付し刺突を加えている。稚拙な粘土紐の貼付がみられる。７・８は口縁部の作りや沈線による曲線等からこれらは堀之内Ⅰ式となろう。９の沈線間には縄文の末端部がみられる。11は器厚は４㎜と薄く、沈線間を縄文で満たす。一方、12は沈線のみの文様構成となる。器形は胴部がやや丸味を帯びた鉢形と推測できる。いずれも堀之内Ⅱ式と考えられる。10は幅広の沈線間に磨り消しが認められるところから加曽利EⅡ式となろう。

石器　石器は少なく、図示できるものは４点だけであった。

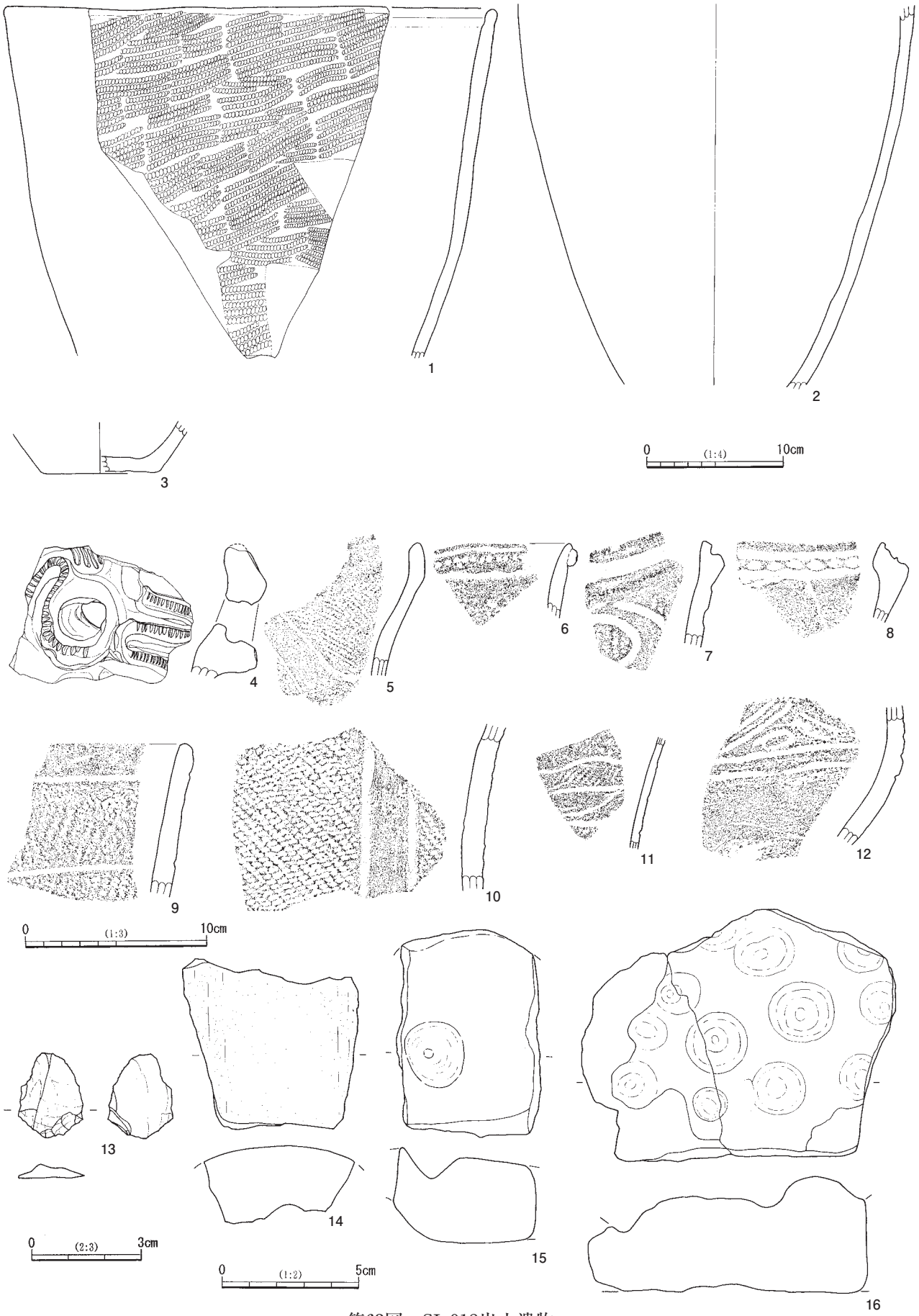
13は剥片である。一部に二次剥離がみられる。石鏃の素材とも思われる。

14は石棒である。一部が遺存し、表面はきれいに整形されている。この大きさから中期のもの推測できる。SI-014でも同様な石棒が出土している。

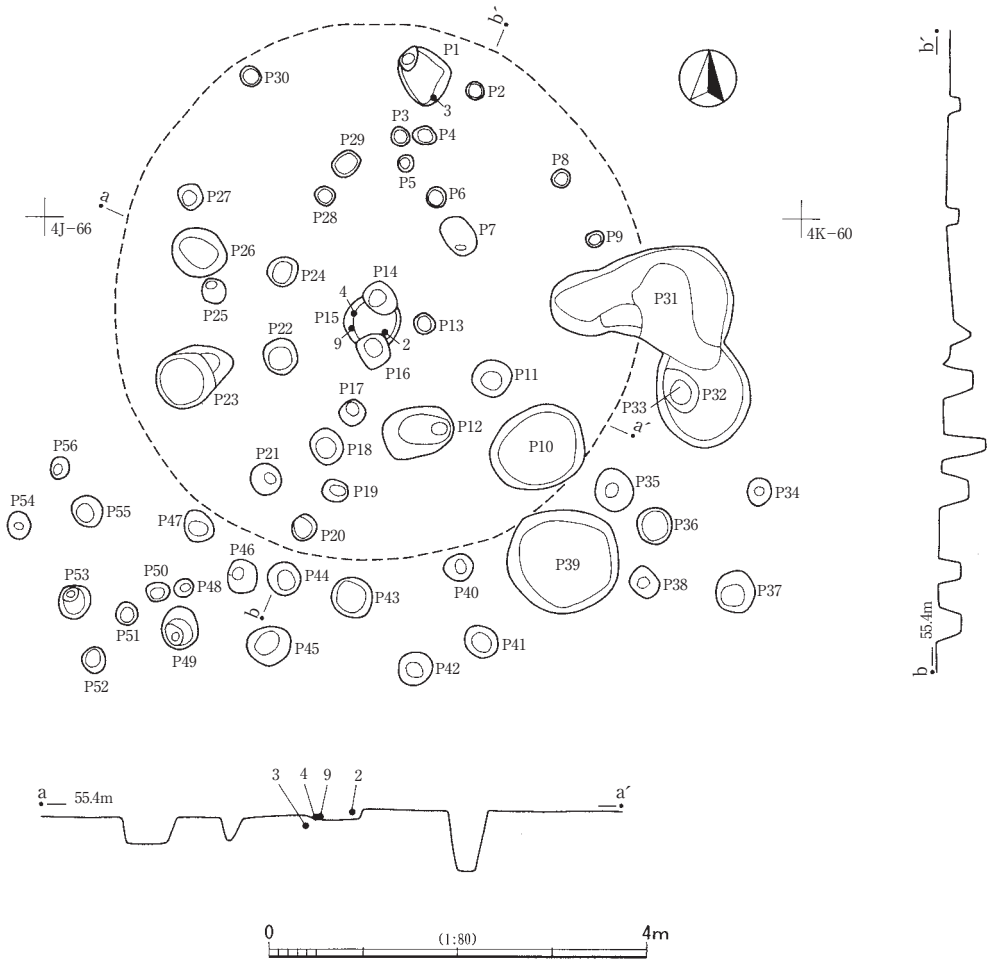
15・16は凹石である。15は器面に１か所の窪みがみられる。16は裏面にはみられないが、表面では所狭しと大小の窪み痕が形成されている。

SI-019（第64図、図版13）

本跡は４Ｊ区のなかでも４Ｊ-67グリッドを中心としてピット群が検出された地点に位置し、遺物も伴っていたため住居跡の存在を想定して調査を慎重に進めていった。ただ、SI-018と異なる点は住居としての掘込み、炉跡といった関連遺構の検出には至らなかった。ピットは下記のとおり柱穴としての十分な深さを有しているものも多々みられた。



第63図　SI-018出土遺物



第64図　SI-019

遺物の出土状況についてみると、中期末葉から後期前半の土器群が出土している。P15からは後期初頭の同一個体数点が出土している。こうした点から住居跡の痕跡として報告するにとどめたい。

本跡の時期は後期初頭から前半期となろう。

SI-019　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

P 1 −13	P 2 −13	P 3 −14	P 4 −12	P 5 −24	P 6 −13	P 7 −51	P 8 −11
P 9 − 5	P10−25	P11−63	P12−50	P13−21	P14−29	P15− 8	P16−32
P17−47	P18−30	P19−22	P20−21	P21−45	P22−36	P23−63	P24−23
P25−34	P26−27	P27−29	P28−17	P29−25	P30−14	P31−38	P32−18
P33−33	P34−33	P35−46	P36− 9	P37−42	P38−24	P39−30	P40−21
P41−22	P42−50	P43−24	P44−24	P45−37	P46−26	P47−26	P48−38
P49−41	P50−27	P51−30	P52−25	P53−21	P54−52	P55−49	P56−17

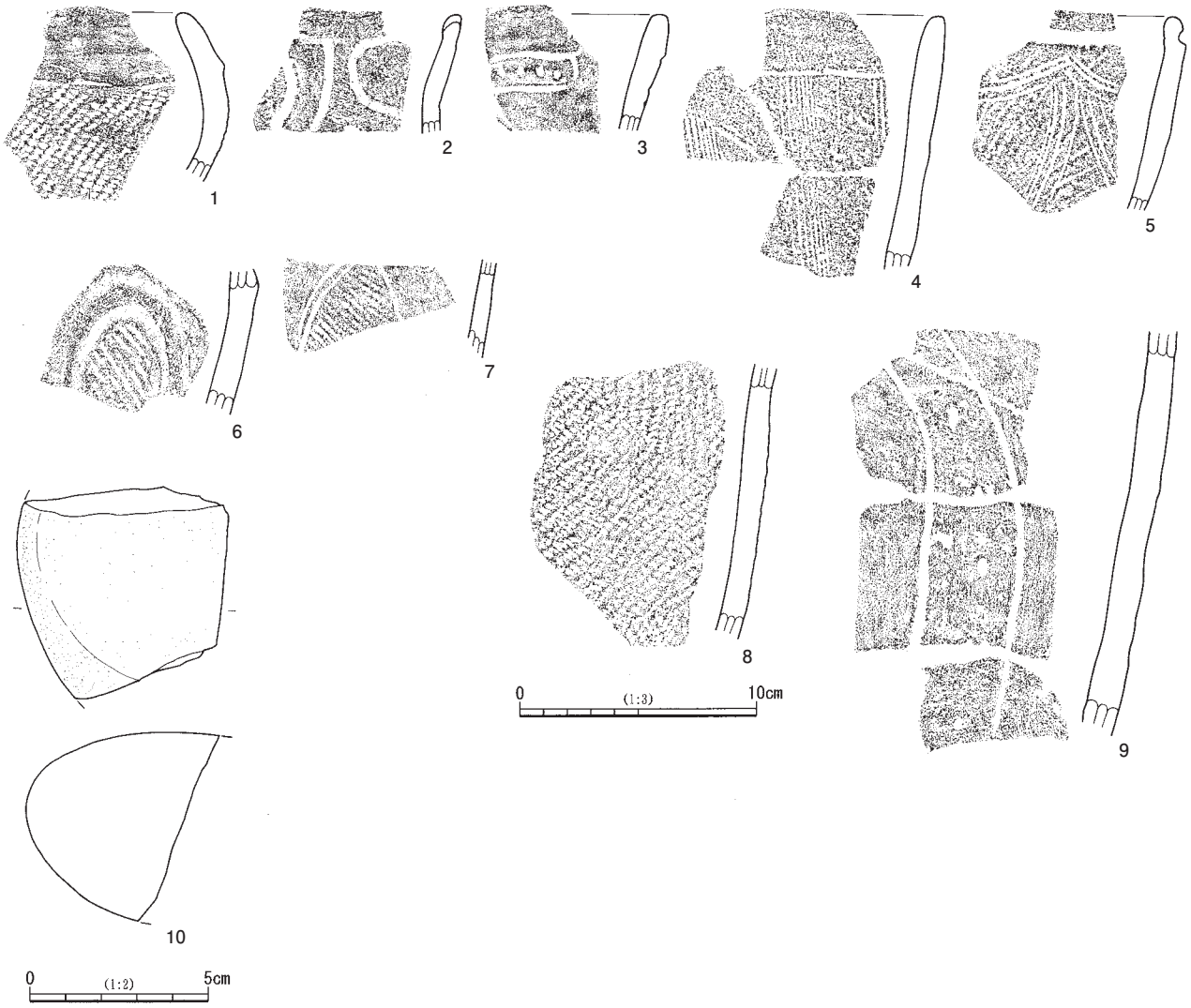
遺物（第65図、図版38・70）

土器　土器の出土量は少なく、文様のはっきりした破片を図示した。３はＰ１、９はＰ15から出土した。時期的には加曽利ＥⅢからＥⅣ式から堀之内Ⅰ式までがみられる。

１は緩やかに内彎する口縁部で縄文との境界に微隆起を配置する。７は胴部片で沈線に囲まれた枠内は縄文で満たされる。時期的には加曽利EⅣ式となろう。３・９は沈線内に刺突文を加えるもので称名寺式に位置づけられる。２は太い沈線が特徴的である。４は沈線以下を櫛歯状痕で器面を覆う。５は縄文地に半截竹管により施文している。時期的には堀之内Ⅰ式の範疇で捉えられよう。なお、６の胴部片は隆帯の形から加曽利ＥⅢ式となろう。

石器　１点出土した。

10は磨石である。欠損しており、残された表皮部分は滑らかである。



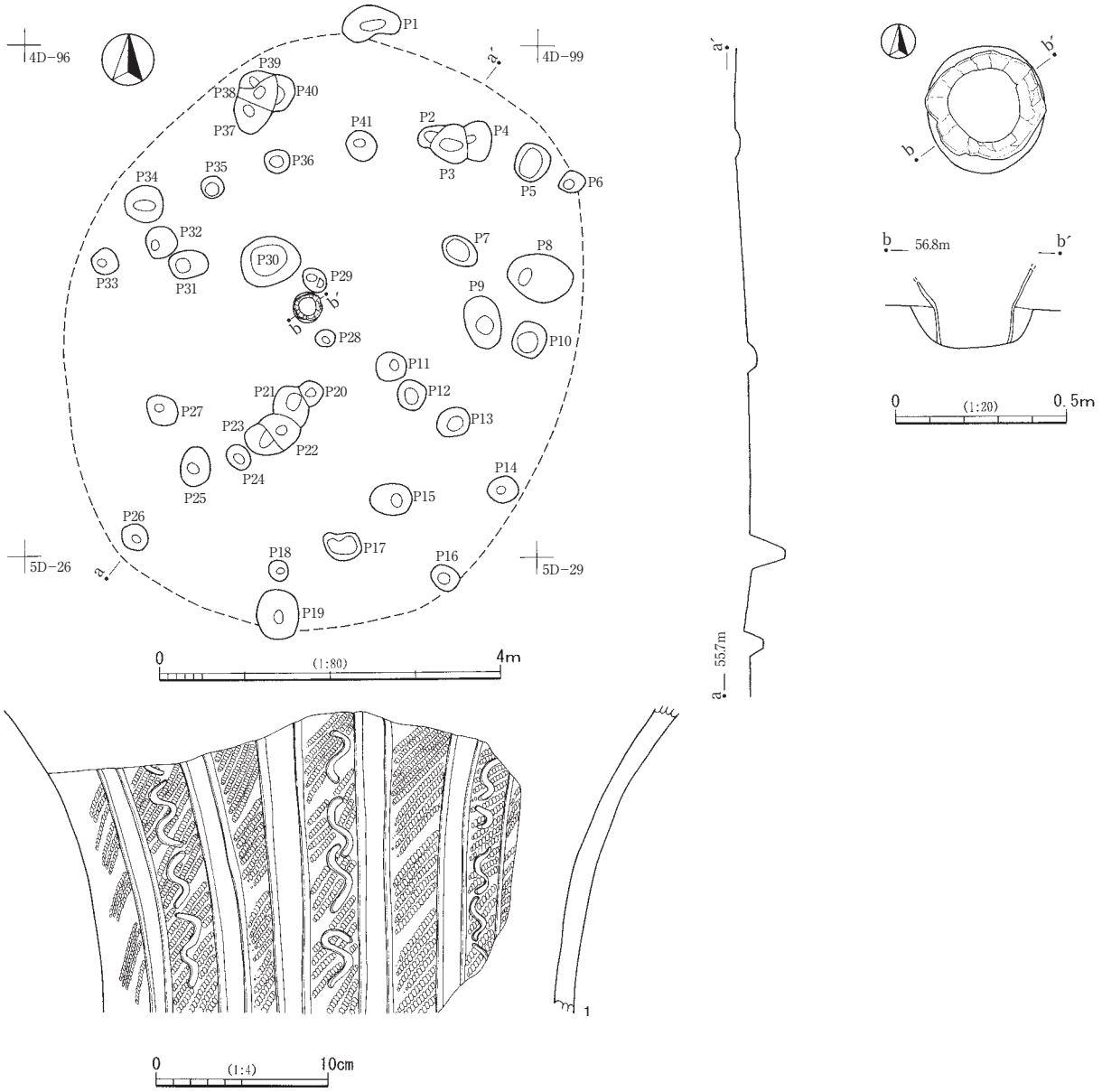
第65図　SI-019出土遺物

SI-025（第66図、図版13）

本跡は、積極的な根拠はないが５Ｏ-07グリッドにおいて一括土器が検出されたため住居跡を想定して調査を進めていった。ただ、ここでは明確な炉跡は検出できなかった。一括土器は図示したような形で埋め込まれており、口縁部と底部が欠損していた。堆積土は粘土質の黒褐色土であり、焼土や炭化物等は認められなかった。しかし底部が欠損しているため意識的な埋甕というよりも炉跡としての可能性も否定できないため一括土器出土地点の周辺を図示してみた。ピットは40か所余を掲載したが柱穴として十分な深さを示すものも少なくない。こうしたことを考慮すれば住居跡の存在した可能性は十分考えられる。

遺物（第66図、図版39）

土器　胴部のみであるが、遺存する下部の径は27㎝を計測する。上部では約38㎝となり、口縁部に向かって大きく外反する深鉢である。地文の縄文は垂下する沈線で区画され、さらに沈線により「Ｓ」字状の文様が施される。時期的には加曽利ＥⅡ式となろう。



第66図　SI-025・出土土器

SI-025　ピット一覧表（数字は床面からの深さ、単位＝cm）

Ｐ１－22	Ｐ２－12	Ｐ３－28	Ｐ４－18	Ｐ５－10	Ｐ６－８	Ｐ７－13	Ｐ８－69
Ｐ９－42	P10－40	P11－44	P12－12	P13－20	P14－11	P15－60	P16－17
P17－17	P18－13	P19－32	P20－22	P21－16	P22－45	P23－18	P24－35
P25－40	P26－15	P27－23	P28－８	P29－11	P30－14	P31－34	P32－37
P33－39	P34－36	P35－17	P36－11	P37－41	P38－47	P39－28	P40－10
P41－43							

第２節　小竪穴

小竪穴については、前述した久保堰ノ台遺跡１では小竪穴を開口部の規模によってＡタイプとタイプＢに分類して記載したが、本遺跡では開口部の径が１ｍに満たないタイプでも基底部の立ち上がりが明確なものはここに含めるこことした。また、ここでは明らかに貯蔵を主目的とした形態の異なるタイプの小竪穴が検出されている。そのため貯蔵目的のタイプを形態の相違により、ＣタイプとＤタイプ（フラスコ形）として分類して、出土遺物を中心に記載していくことした。なお、小竪穴個々の詳細については計測表としてまとめ、ピットは床面からの深さとした。

Ａタイプ

本タイプは縄文時代中期の集落では普遍的にみられる小竪穴である。ここでは９基が該当する。SK-025とSK-210ではピットはみられなかった。SK-010の平面形は不整形で出入り口部分とも考えられる。出土遺物はSK-025で多く、次いでSK-120・121となる。また、SK-009・115・210では図示できるような遺物は出土していない。

SK-001（第67・68図、図版14・42・71）

本跡に伴うピットは計６か所で検出できた。P6は深さからみて主柱穴的な役割を果たすものであろう。

遺物は、そのＰ６周辺から１～３が出土した。いずれも器面は著しく磨耗してるが、渦巻文と沈線ははっきり認識できる。時期的には加曽利ＥⅡ式となろう。４は前者よりも古く位置づけられよう。なお、１・２は同一個体と思われる。

５は石鏃未成品である。石鏃としての形態はおおむね整っているが、右側縁の加工は加えられていない。

SK-010（第67・68図、図版42）

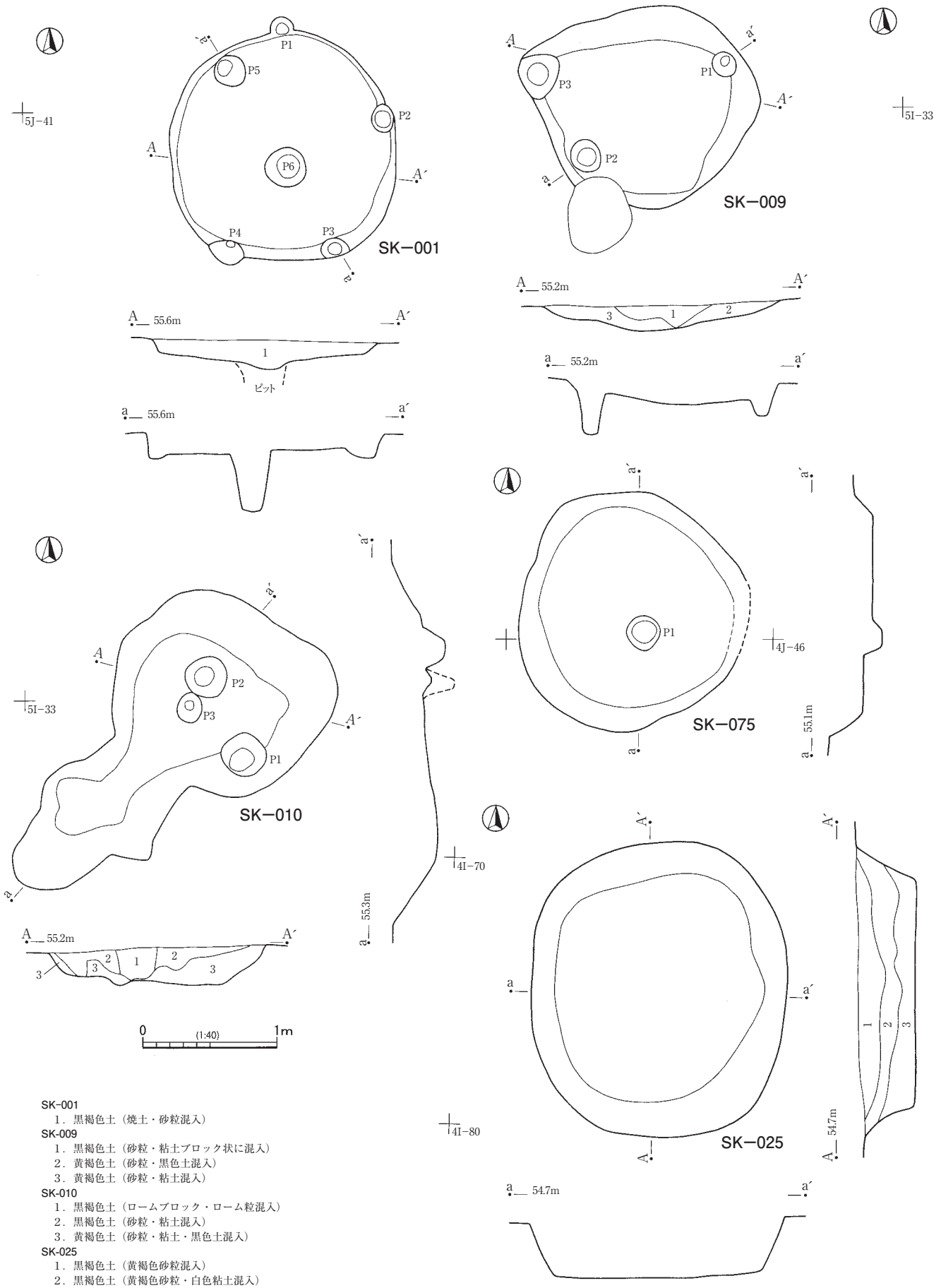
本跡のピットはいずれも深い。ただ平面形は不整形であり、南西部に延びる掘込みは出入り口か、土坑との重複となろう。遺物は小片が出土しては、本跡の時期を断定するには不十分である。

６は波状口縁の波頂部となる。沈線か条線を確認できる。阿玉台Ⅲ式であろう。７の地文は縄文で太い沈線が施される。加曽利ＥⅡ式となろう。

SK-025（第67・68・69図、図版14・40・43・71）

本跡ではピットはみられなかった。しかし出土遺物は豊富で器形の理解できる一括土器をはじめとして図示できる土器も多数みられた。

10は緩やかな波状口縁で、口縁内側に浅い沈線が施される。文様は胴上半部に沈線による三角文が描かれ、一部には縄文の施文がみられる。13は口縁部から胴部にかけて約1/3が欠損する。内外面は磨きによ



SK-001
1．黒褐色土（焼土・砂粒混入）
SK-009
1．黒褐色土（砂粒・粘土ブロック状に混入）
2．黄褐色土（砂粒・黒色土混入）
3．黄褐色土（砂粒・粘土混入）
SK-010
1．黒褐色土（ロームブロック・ローム粒混入）
2．黒褐色土（砂粒・粘土混入）
3．黄褐色土（砂粒・粘土・黒色土混入）
SK-025
1．黒褐色土（黄褐色砂粒混入）
2．黒褐色土（黄褐色砂粒・白色粘土混入）
3．黒褐色土（白色粘土混入）

第67図　SK-001・009・010・025・075

りきれいに仕上げられており、底部にまで及んでいる。典型的な精製土器といえよう。口唇部には指頭による押圧で凹みを作り、内面の２か所に棒状工具による刺突を加えており、穿孔までには至っていない。器面の文様は短沈線による曲線や斜線が縦横に施されている。15は口縁部が1/5程度の遺存で推定復元によるものである。器厚は５㎜と薄く、撚りの密な短い原体で施文されている。時期的には堀之内Ⅱ式となろう。なお、29・33・34の鉢形土器や30の浅鉢、内面がきれいに仕上げられてた29･30も同時期の所産といえよう。11は３単位の波状口縁を有するタイプと考えられる。器面上半部に縄文を施文した後に、深い沈線で半月形や楕円を煩雑に描く。12は口縁部の1/4ほどが遺存したものである。11同様に縄文地のうえを沈線で飾る。14は縄文のみの施文で内面の一部には磨き痕も認められるが、仕上げは概して粗雑で凹凸もみられる。このほかに27･28･35も含めて堀之内Ⅰ式と考えられる。21は幅広の連続爪形文が隆帯に沿って施されているところから阿玉台Ⅲ式となろう。22は胎土に雲母を含み縄文施文が認められるため阿玉台Ⅳ式といえる。16は加曽利ＥⅡ式の底部である。22～24は口縁部片で枠内を縄文施文する。32は胴部片で磨り消しが認められる。これらは加曽利ＥⅡ式となろう。また、25や37は隆帯を有するタイプで前者よりも新しく位置づけられる。17～20は後期の底部である。

石器が２点出土している。40の剥片の表面には自然面が多くみられる。右上部側縁に整形のための剥離が施されている。41は打製石斧の頭部である。ここでも自然面を残す。整形という点では断面図に示したように左右対称とは大きくかけ離れている。

以上のような出土遺物からみれば、本跡の時期は堀之内Ⅱ式期と考えることができよう。

SK-075（第67・68図、図版41・42）

本跡の中央に穿たれたピットもSK-001同様の柱穴となろう。遺物は少なく、図示できる土器は２点のみであった。８には細い粘土帯が波状に貼付されたもので加曽利ＥⅠ式となろう。９は基底部の作りから後期に属する底部である。

SK-115（第70図）

ここでもＰ４は60㎝余りの深さとなり主柱穴的なピットとなろう。しかし出土遺物には恵まれず、図示できるような土器はみられなかった。

SK-120（第70・71図、図版41・42・71）

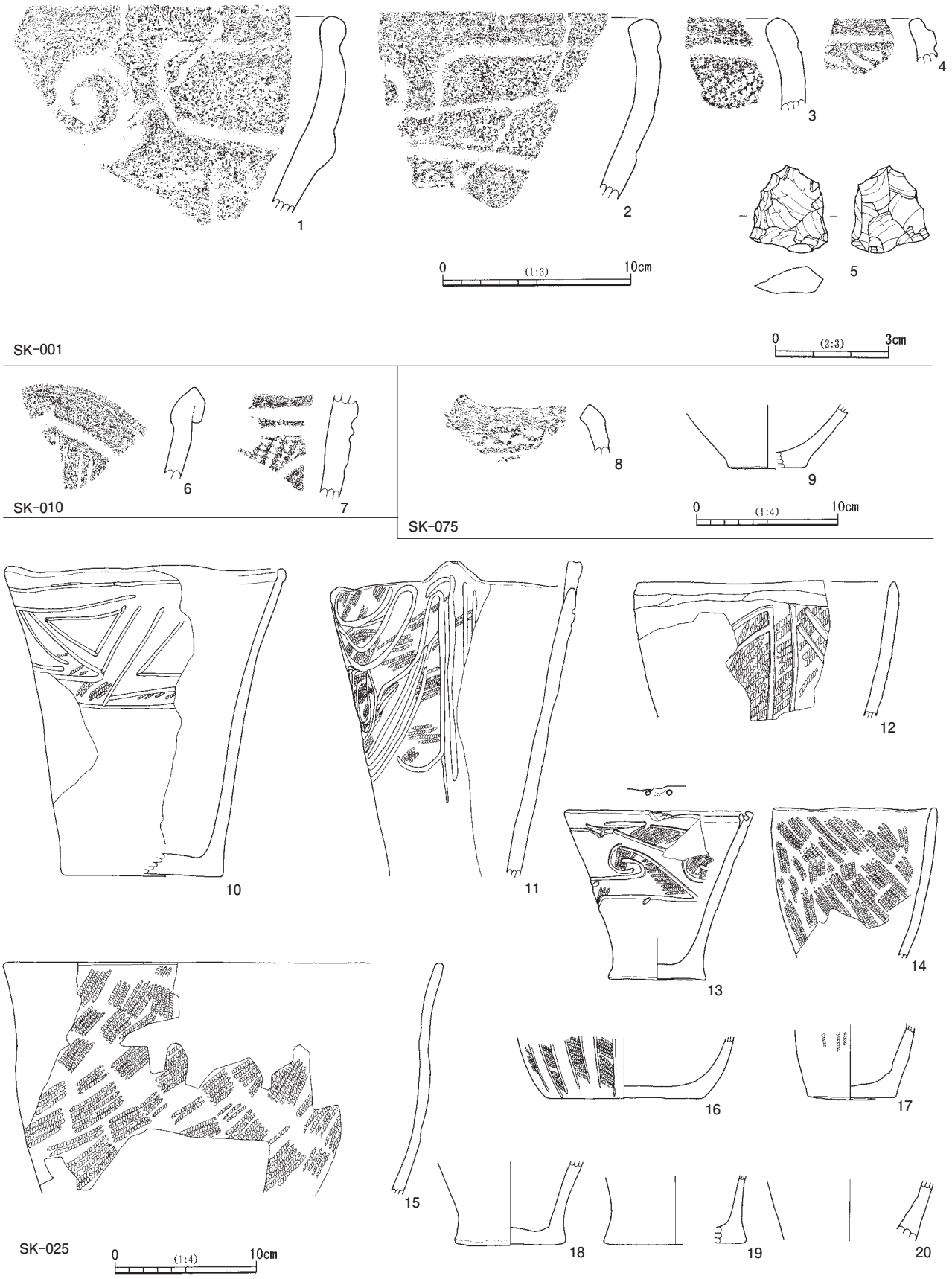
本跡も中央に位置するＰ４が主柱穴になるものと思われる。浅い掘込みのＰ１は独立した土坑となるようである。遺物は多いとはいえないが、石器も含めて10点を図示することができた。時期的にはすべて加曽利ＥⅡ式の新しいタイプに含められよう。

１は口縁部が3/5 ほど遺存する深鉢であり、渦巻文がやや簡略化されている。10数片が接合したもので、そのうちの１点はSI-014出土したものであった。４は円形の刺突文と下部には連弧文の一部が確認できる。５は口辺部片である。紐等を通すためか橋状に粘土を貼付している。

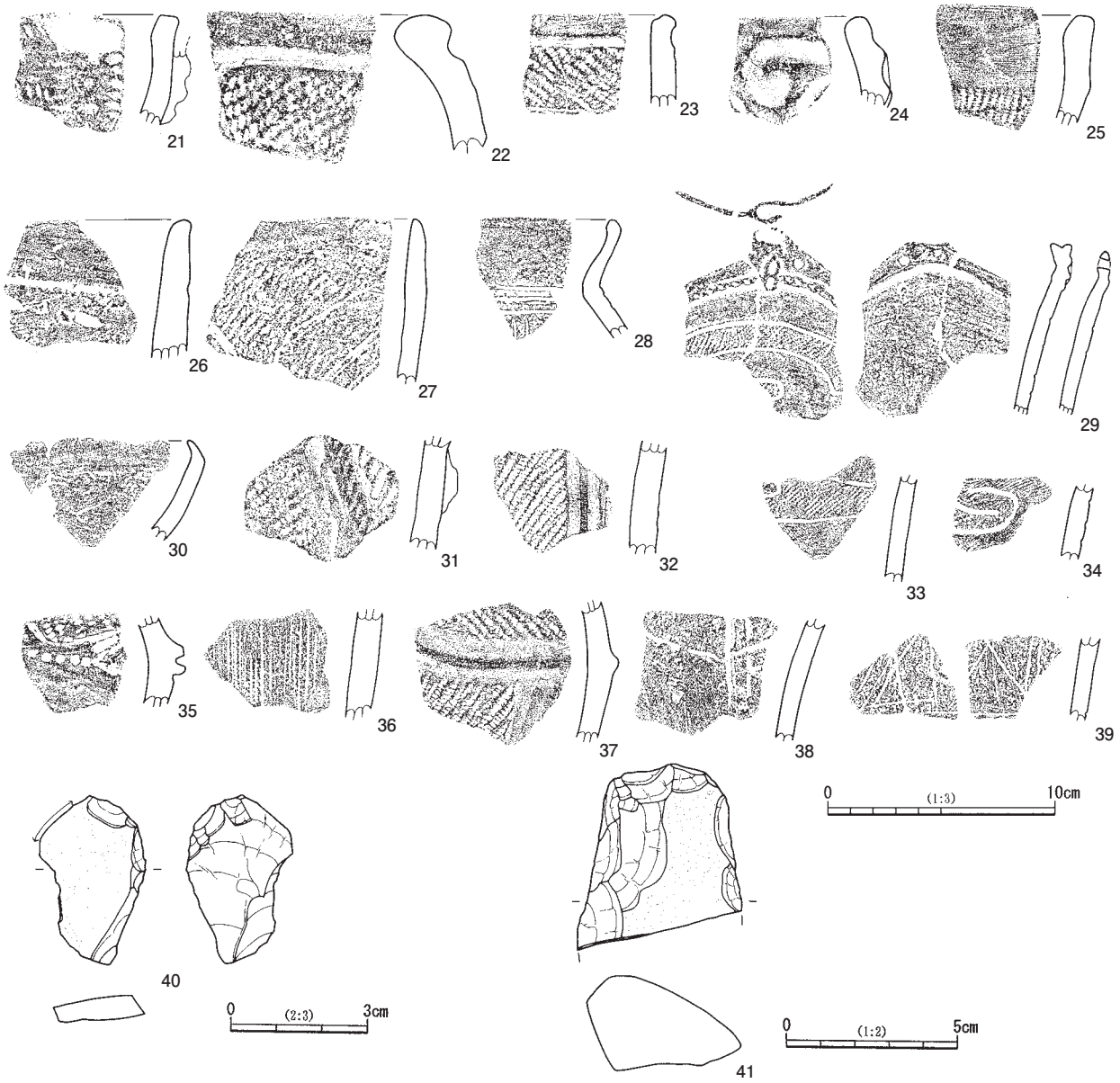
ほかに石器が２点出土している。９は凹石であり、石皿の一部を再利用したものと考えられる。10は打製石斧の完形品である。整形は入念で鋭利な刃部を作り出している。

SK-121（第70・71図、図版42・71）

本跡はSI-011内で検出された小竪穴である。Ｐ３とＰ４の間には住居跡に伴う一括土器が出土している。つまり住居跡よりも古い遺構であることは確認できた。しかし本跡覆土内で出土している土器とは形式的な差異は認められない。本跡の形態はSK-120とほぼ同様なタイプの小竪穴であり、中心に位置するピッ



第68図　SK-001・010・025・075出土遺物



第69図　SK-025出土遺物

トは床面下19cmと浅い。遺物は少なく、図示できる土器が３点と石器が５点となっている。

11～13はいずれも加曽利ＥⅡ式で渦巻文や、沈線間の磨り消しといった特徴を具備したものである。

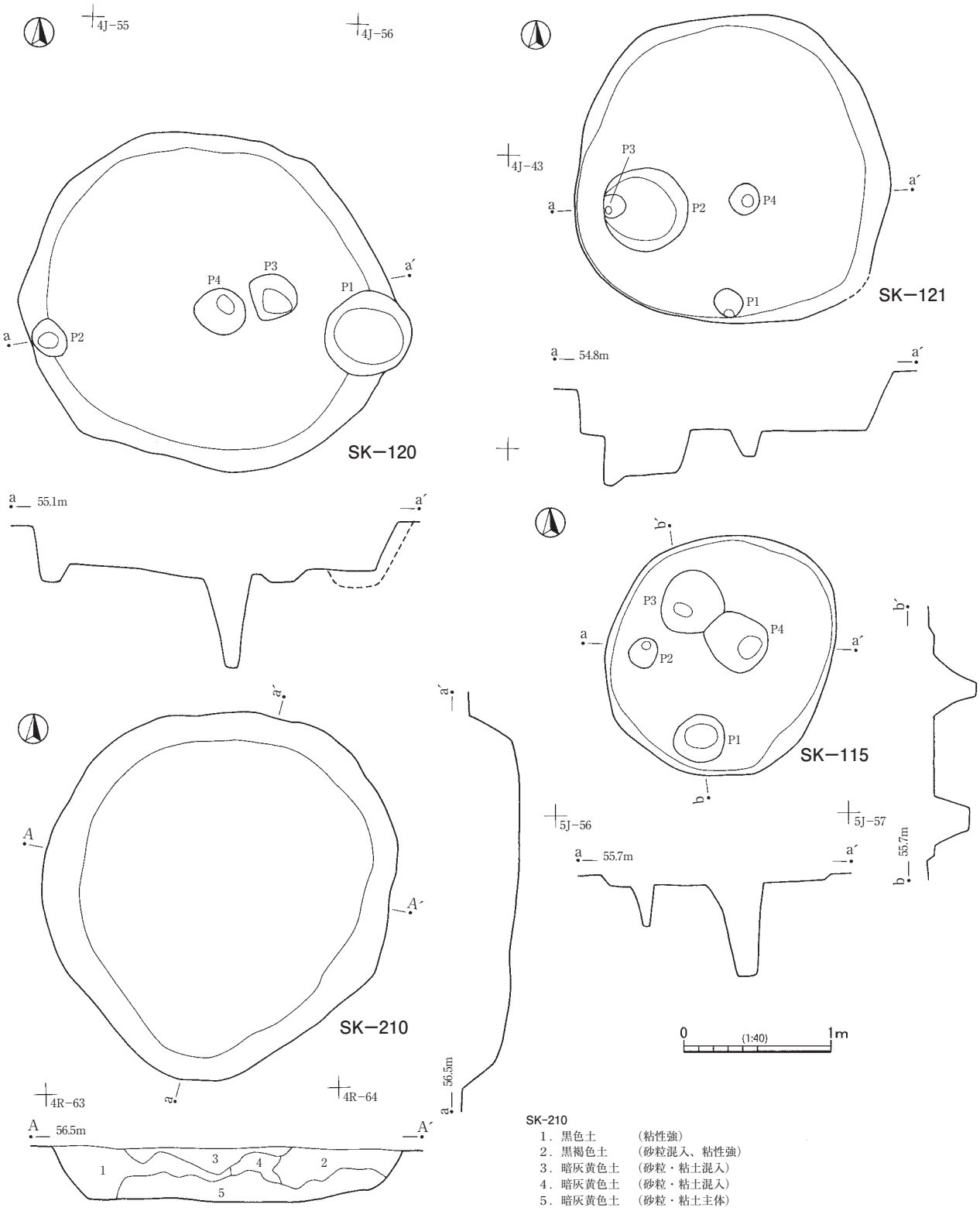
14は自然面を残す石鏃で、簡単な剥離で周囲を整形し成品としている。本遺跡ではしばしばみられるタイプである。15・16は黒曜石製で加工は丁寧である。17は磨石で表面は研磨されたように滑らかである。側面には打痕がみられる。18は敲石で表裏両面の中央部に打痕があり、周囲ではみられない。

SK-210（第70図）

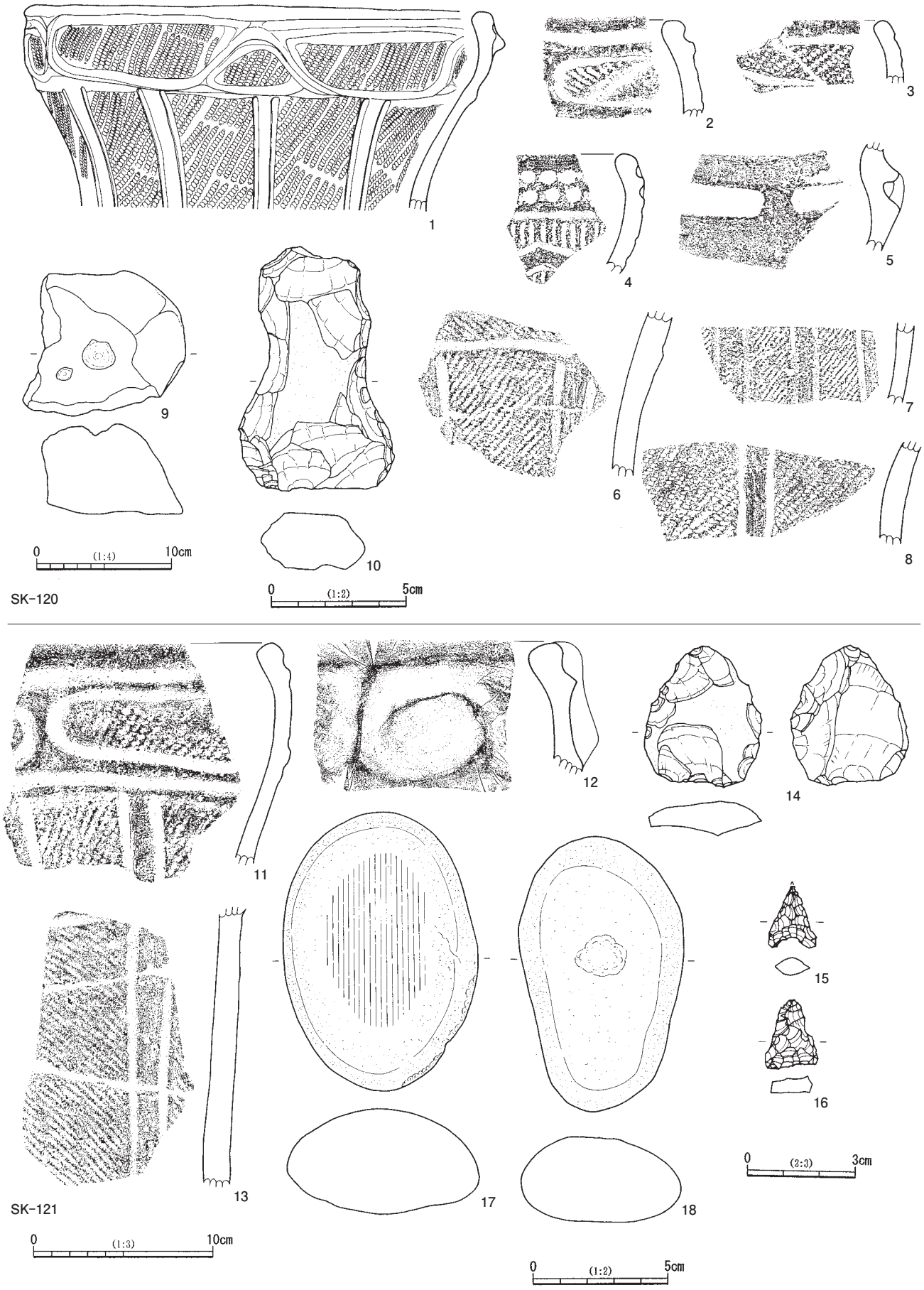
本跡でのピットは確認できなかった。遺物も出土していない。

Ｂタイプ

このタイプは総体的にみて前者よりも規模が小さく遺物の出土量も少なかった。しかも土器面が著しく磨耗しており所属時期を判別できるものは僅少であった。そのため図示できるような土器片はできる限り



第70図　SK-115・120・121・210



第71図　SK-120・121出土遺物

掲載することとした。また石器に至っては図示できるような遺物は１点のみであった。なお、SK-003・006・020では遺物の出土は認められず、SK-012は覆土中から土器片10点と礫片３点が出土したが、土器の器面は磨耗が著しく図示が不可能であったため図示することができなかった。SK-004・042・046・047も小片が若干出土したのみで図示できるものはなかった。

SK-116（第72・73図、図版42）

図示できる土器片は８点となる。１は磨消縄文と沈線の組み合わせによる文様構成である。そして大きく内彎する口縁部から加曽利ＥⅢ式の終末からＥⅣ式に位置づけられる。２の沈線間の縄文は磨り消され幾何学的な文様がみられる。薄手の器厚で、口縁の内面には浅い沈線が認められる。堀之内Ⅱ式となろう。３・５は器面の磨耗が著しい。明確な沈線により飾られており、４・６も含めて堀之内Ⅰ式となろう。

SK-117（第72・73図、図版44・71）

ここで図示できる遺物は胴部片２点と石器１点であった。

９・10は同一個体と思われる。深鉢で隆帯と縄文による文様構成から加曽利ＥⅢ式となろう。

11は黒曜石の剥片で下端に小さな剥離が施されている。掻器のような用い方をしたものであろう。

SK-202（第72・73図、図版44）

土器３点が図示できた。14の縄文は複節のようである。加曽利EⅡ式となる。12・13の器厚はやや薄手となり、時期的には後期に属するものと思われる。

SK-205（第72・73図、図版44）

10点余りの破片が接合したものである。波状口縁を呈した紐線文系深鉢であり、内面では細く深い沈線が２条みられる。施文された縄文には加曽利Ｂ式特有の乱雑さがみられる。

Ｃタイプ

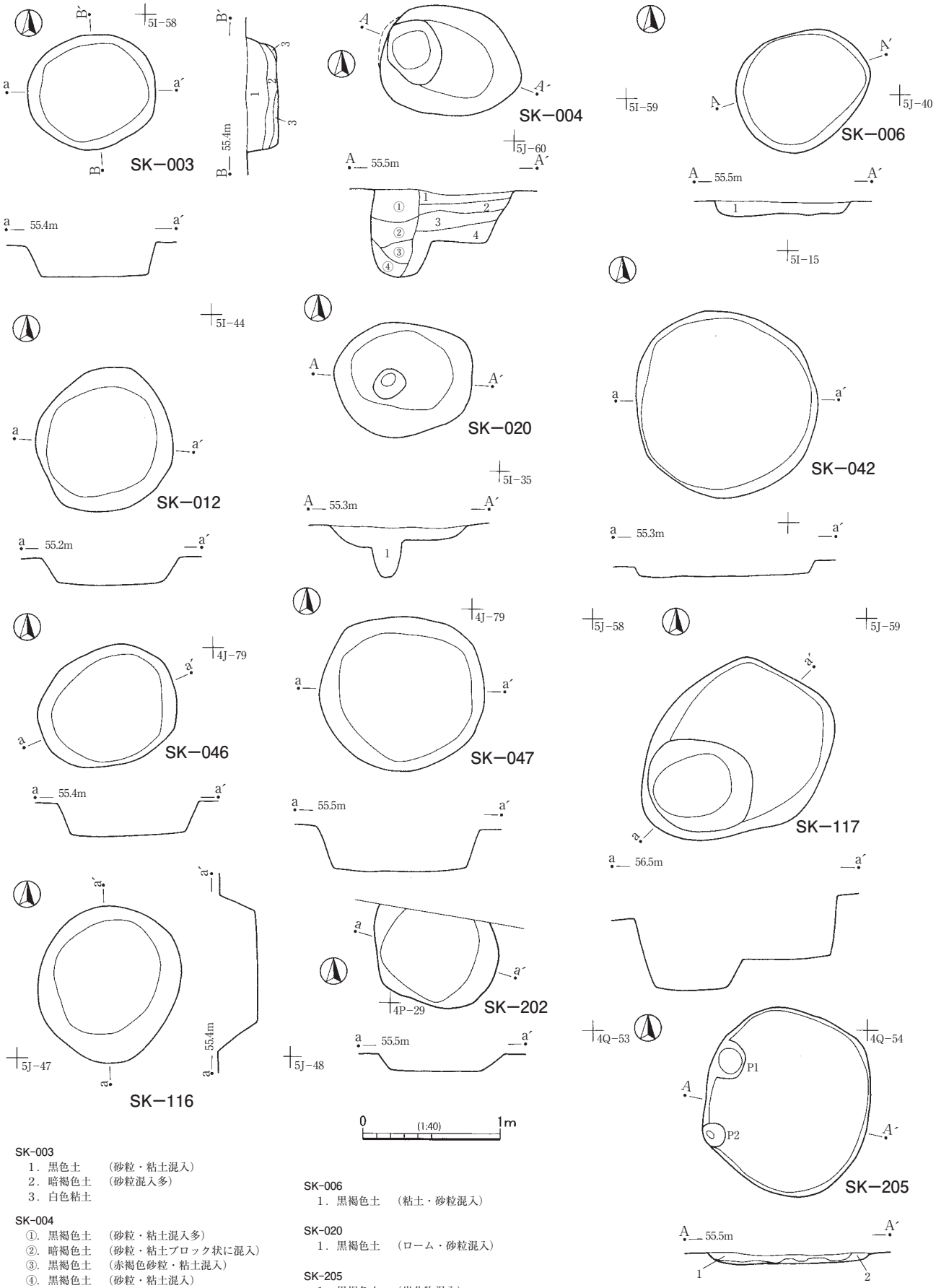
本タイプの平面形は、Ｂタイプとしたものと同程度の大きさである。ただ掘り込みは深く明らかに貯蔵穴を意図した作りとなっている。

SK-221（第74・75図、図版15・40・44・71）

本跡は開口面から底面まで１ｍ余りの深さとなっている。底部付近ではやや広がりをみせる。むろん製作当時の開口部は削平されていると考えられるので本来の深さは1.5mほどはあったものと思われる。出土遺物についてみると、一括土器はみられなかったものの大型の口縁部片が数点出土している。

１は幅広のヘラによる押引文が隆帯に沿ってみられる。阿玉台Ⅲ式となろう。９は口辺部片で幅の狭い施文具で密に押引している。施文具から阿玉台Ⅱ式と考えられる。いずれも雲母の混入は認められない。４・５は加曽利Ｅ式でも新しいタイプである。４の沈線は浅く、５は渦巻きが簡素化され円形に変化している。２・３・６～８は波状口縁での施文や口唇部の作りから堀之内Ⅰ式となろう。12・13の胴部片も同時期と考えられる。10の胴部片では太い沈線と刺突がみられる。この点から称名寺式となろうが11も同時期であろう。15の平坦面はきれいに仕上げられているため、脚付の器台と考えてよさそうである。器台部分の推定径は14.5㎝となる。脚部の一部には短沈線による文様もみられる。惜しむらくは欠損品で全体が確認できないことである。時期的には本跡が堀之内Ⅰ式期と考えられるため同時期の土製品と考えたい。14は土錘である。薄手の土器片を利用しており、これも後期の所産であろう。

16は砥石と考えられる。表裏両面に僅かな凹みを残す。17は敲石で側面と下端部には顕著な打痕が認められる。



SK-003
1．黒色土　（砂粒・粘土混入）
2．暗褐色土　（砂粒混入多）
3．白色粘土

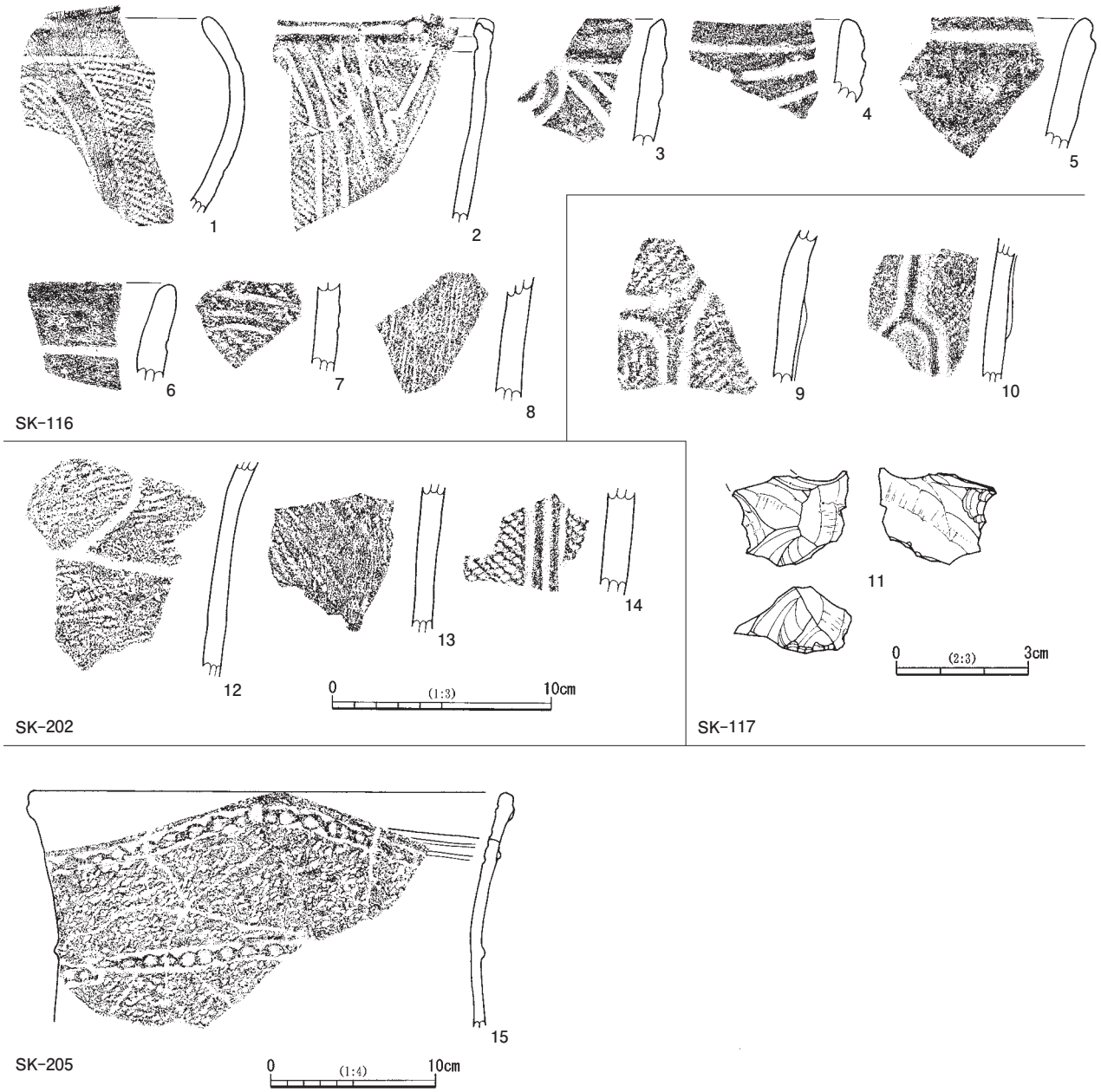
SK-004
①．黒褐色土　（砂粒・粘土混入多）
②．暗褐色土　（砂粒・粘土ブロック状に混入）
③．黒褐色土　（赤褐色砂粒・粘土混入）
④．黒褐色土　（砂粒・粘土混入）
1．黒褐色土　（砂粒・粘土混入多）
2．暗褐色土　（砂粒混入多）
3．黒褐色土　（砂粒・粘土混入）
4．白色粘土　（砂粒混入）

SK-006
1．黒褐色土　（粘土・砂粒混入）

SK-020
1．黒褐色土　（ローム・砂粒混入）

SK-205
1．黒褐色土　（炭化物混入）
2．褐色土　（黒褐色土混入）

第72図　SK-003・004・006・012・020・042・046・047・116・117・202・205

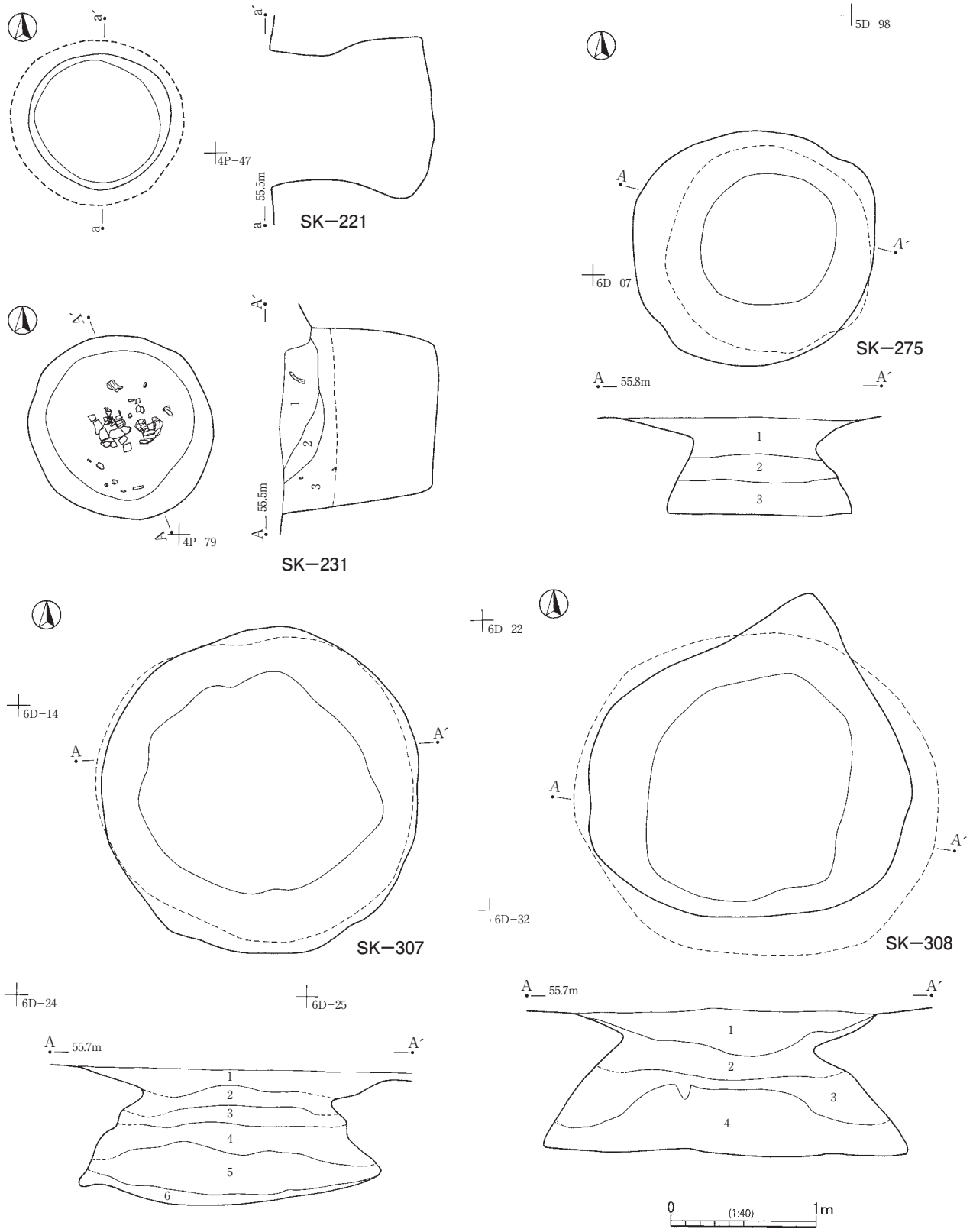


第73図　SK-116・117・202・205出土遺物

SK-231（第74・76図、図版15・45・71）

円形のきれいな貯蔵穴となる。ただ下半部では湧き水がみられたため、遺物を取り上げたところで底部まで一挙に掘り下げた。そのため堆積土は上部面のみの記録となってしまった。しかし遺物の出土量は多く、土器では中期の加曽利EⅡ式から後期の堀之内Ⅰ式までが出土している。

１～３は加曽利ＥⅡ式となろう。隆帯枠内において縄文の充填がみられる。６は口辺部にみられる隆帯の作りから加曽利EⅢ式、７は口縁直下の微隆起が特徴的である。加曽利Ｅ式での最後の段階となろう。４・５は沈線で区画された描出から称名寺式と思われる。また13～16も同時期で刺突と沈線による文様構成となる。８～12は口縁部で、９や10は堀之内Ⅰ式によくみられる作りと施文である。11は口縁部に粘土紐を縦位に貼付し、小ぶりの刺突文で文様を構成する。17や18の底部もこの時期の所産となろう。



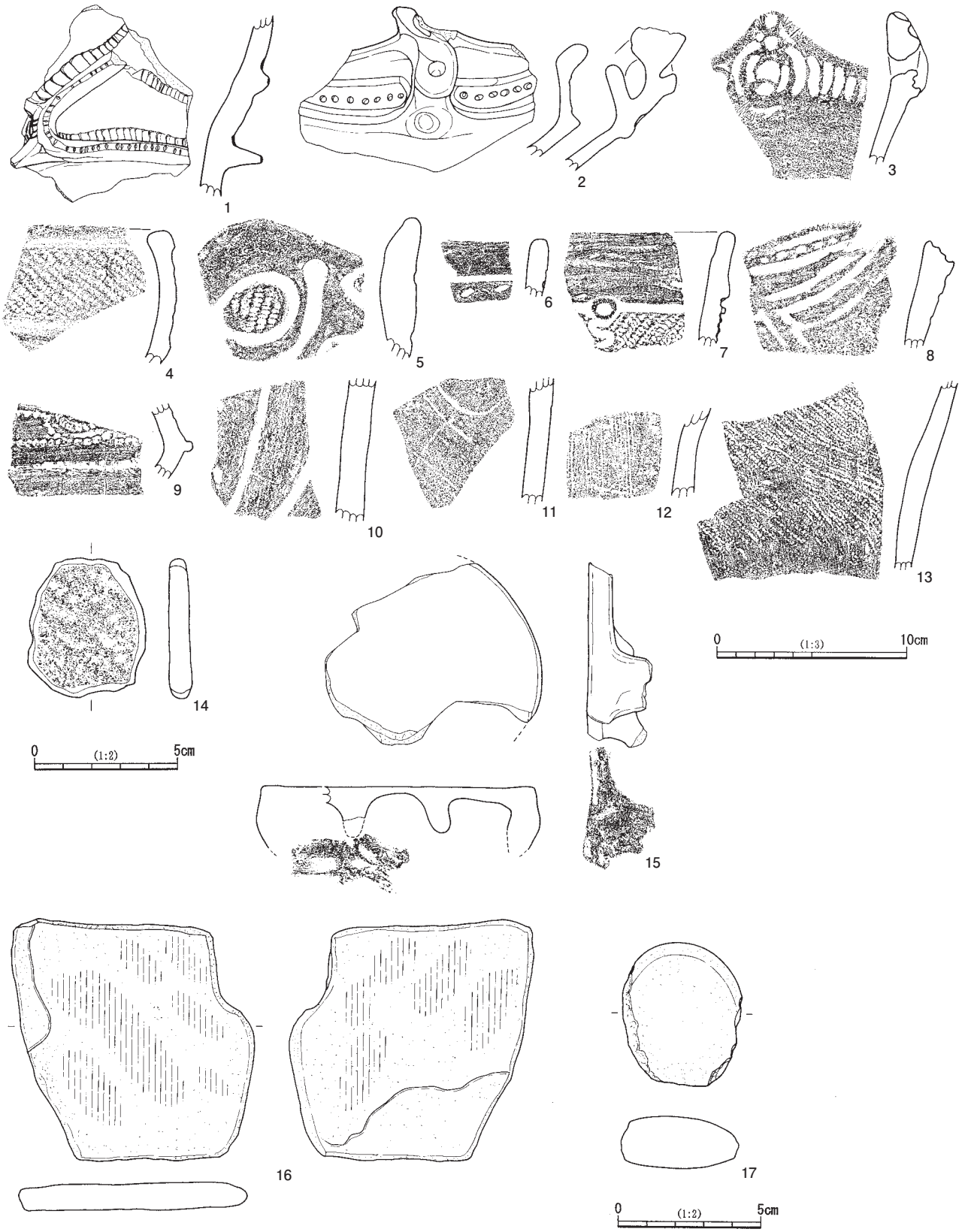
SK-231
1．黒褐色土　（粘土混入、粘性強）
2．暗褐色土　（粘土混入）
3．黒褐色土　（粘性強）

SK-275
1．黒色土　（粘性強）
2．黒褐色土　（粘土混入、炭化物混入少）
3．暗褐色土　（砂粒・粘土混入、粘性強）

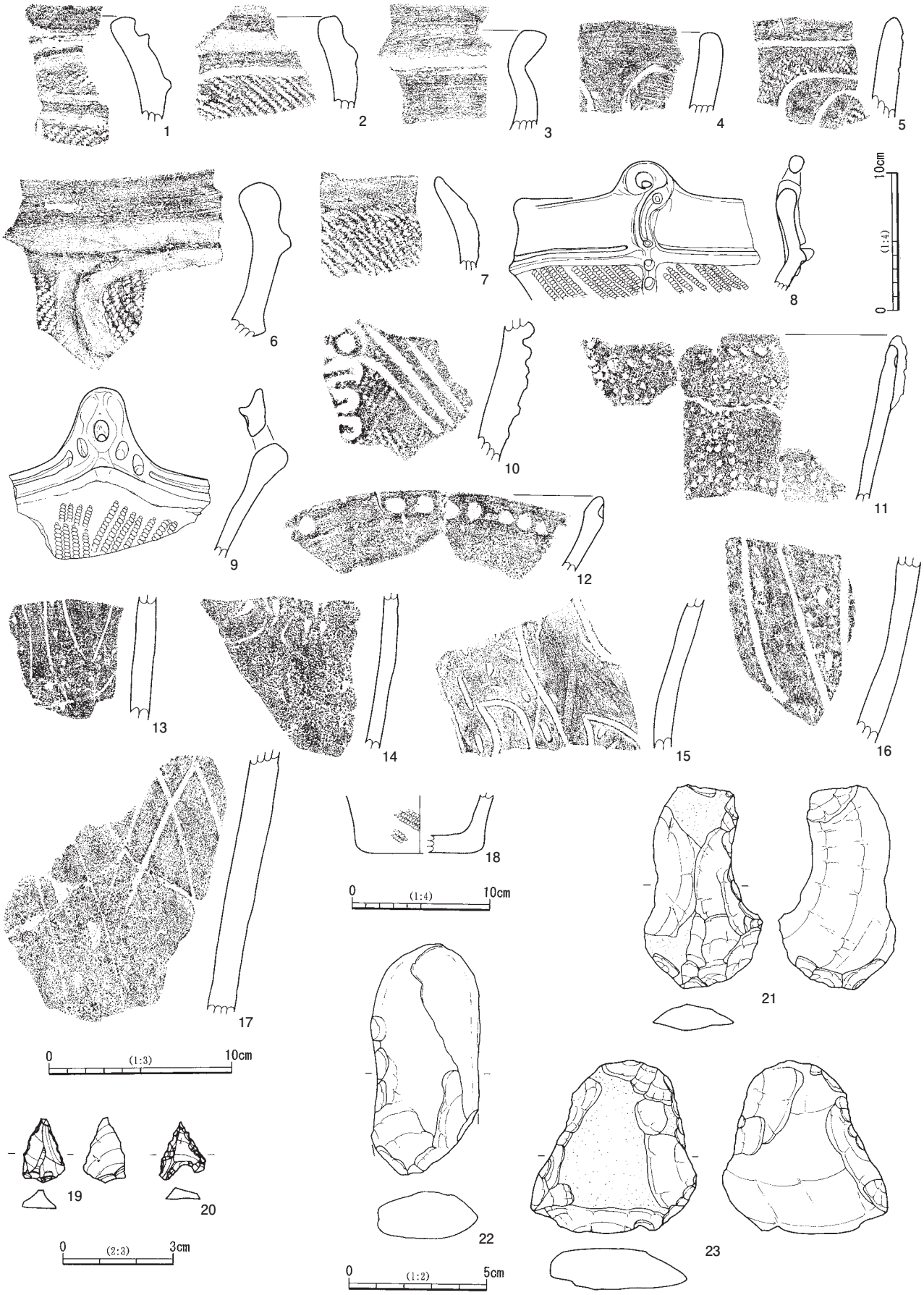
SK-307
1．黒色土　（粘性強）
2．黒色土　（粘土ブロック状に混入）
3．黒褐色土　（炭化物混入少、遺物多）
4．褐色土　（粘性強）
5．暗灰黄色土　（砂粒・粘土混入）
6．暗灰黄色土　（粘土主体、黒色土混入）

SK-308
1．黒褐色土（焼土混入少）
2．黒褐色土
3．暗褐色土（粘土ブロック状に混入）
4．暗灰黄色土（粘土主体）

第74図　SK-221・231・275・307・308



第75図　SK-221出土遺物



第76図　SK-231出土遺物

19・20は石鏃であり、19は周囲の整形が若干みられる程度で、裏面では２回の整形剥離を加えているだけである。未成品とも考えられる。20は左右非対称となるが、裏面での加工も認められるため成品といえよう。21～23は粗雑な製作だが打製石斧に分類できよう。21は礫の表皮部分を若干残しており、裏面での加工はほとんどみられず、刃部に３回の小さな剥離を施しているだけである。こうしてみると打面部作出時に剥離された剥片に簡単な加工を加えて石斧としたものと考えられる。22は扁平な礫を利用したもので刃部が失われている。側面の整形は中央部だけで石斧としている。23も表裏の側面に簡単な整形剥離を施し石斧としたもので、刃部の作出は簡単である。

Ｄタイプ

本タイプは、いわゆるフラスコピットと呼称される特徴的な作りである。

SK-275（第74・77図、図版15・46・71）

３基検出されたうちで最も小規模なフラスコピットである。遺物は覆土上層から出土したものである。時期的には阿玉台Ⅲ式とみられる土器群となろう。

１は隆帯に沿ってヘラによる押引が施される。３・６も胎土に小石が混入し、暗褐色を呈した色調などから１と同一個体と思われる。５は施文具のヘラが異なるものの同時期と考えられる。２の把手部分は勝坂式の色彩がよく表現されている。４は隆帯に囲まれた部分に縄文が施されており加曽利ＥⅢ式に位置づけられよう。

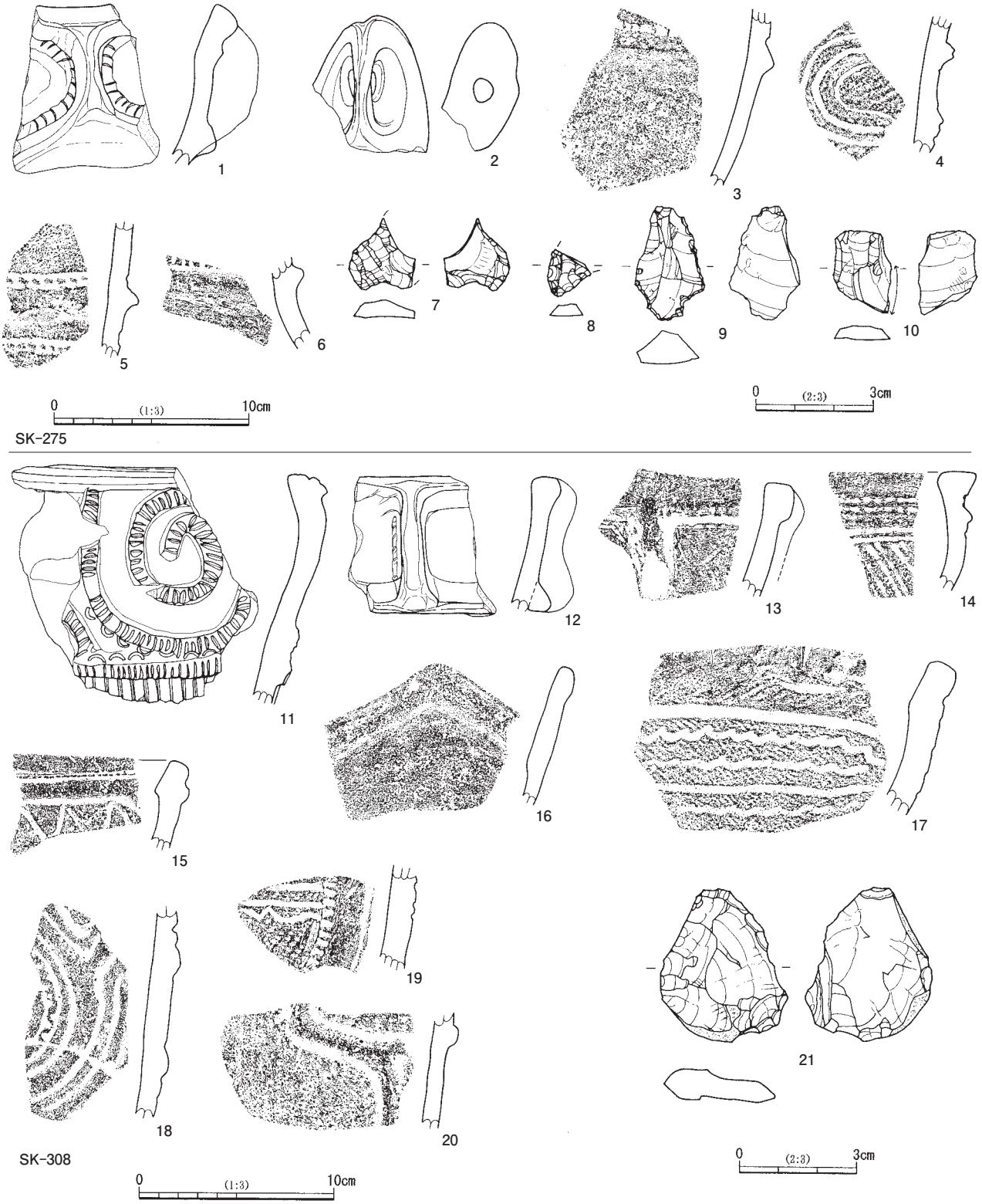
石器は図示できる黒曜石製の石器が４点出土した。７・８は石鏃の破損品である。９は周囲が調整された剥片で削器のような使用法が想定できる。10にも右側縁に調整痕が認められた。

SK-307（第74・78・79図、図版16・41・47・48・71）

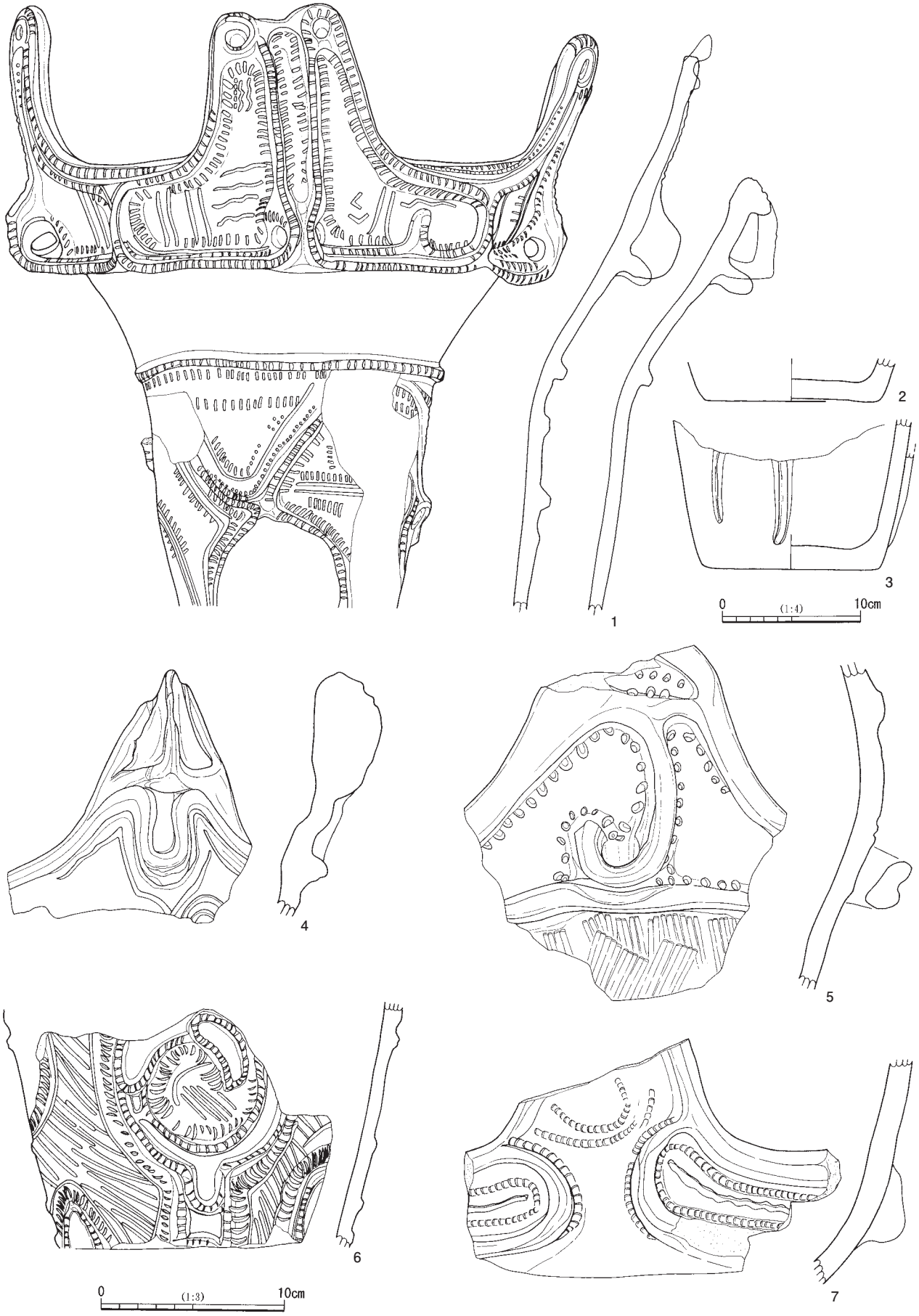
本跡では住居跡以外の遺構として最多の遺物が出土している。遺物の多くは覆土３層から５層で出土しており、そのほとんどは阿玉台Ⅲ式に属するものであった。

１は覆土４層から集中的に出土したものである。底部は欠損しているが、幅広の押引文と口縁突起部の作りから阿玉台Ⅲ式に相当するものであろう。２の底部は１に接合はしないものの近くで出土したため同一個体の可能性も否定しきれない。３は底部のみの遺存で、１よりもやや大きな土器となる。１にみられるような隆帯に沿った押引は認められない。４は隆帯の下に沈線がみられる。胎土には雲母の混入が著しい。５は隆帯の側縁を半截竹管状の工具で刺突し、隆帯以下では同工具による集合沈線で器面を飾っている。６は胴部の大型片である。文様は、隆帯をＵ字状に貼付するところは４と同様である。また隆帯に沿った連続爪形文が特徴的である。胎土には若干の雲母を含む。７は把手部分の一部を失う口縁部である。いずれも１と同時期のものであろう。８～10は無文の波状口縁部片である。器形は浅鉢となろう。８の胎土には石英粒と白色鉱物が多く混入し、雲母は少ない。９・10・13～15には雲母の混入が目立つ。14・16・19～21は器面に施される文様には押引文のほかに縄文、12・13は条線文、12～15・17・21～25は沈線文などがみられる。23は浅鉢で口辺部に瘤状の把手を貼付し、深い沈線で口辺に鋸歯状の文様を描いている。胎土には雲母が混入されている。26は土錘で表面には文様の痕跡は認められるが磨耗が著しい。若干雲母が認められるため阿玉台式に属することは間違いないであろう。

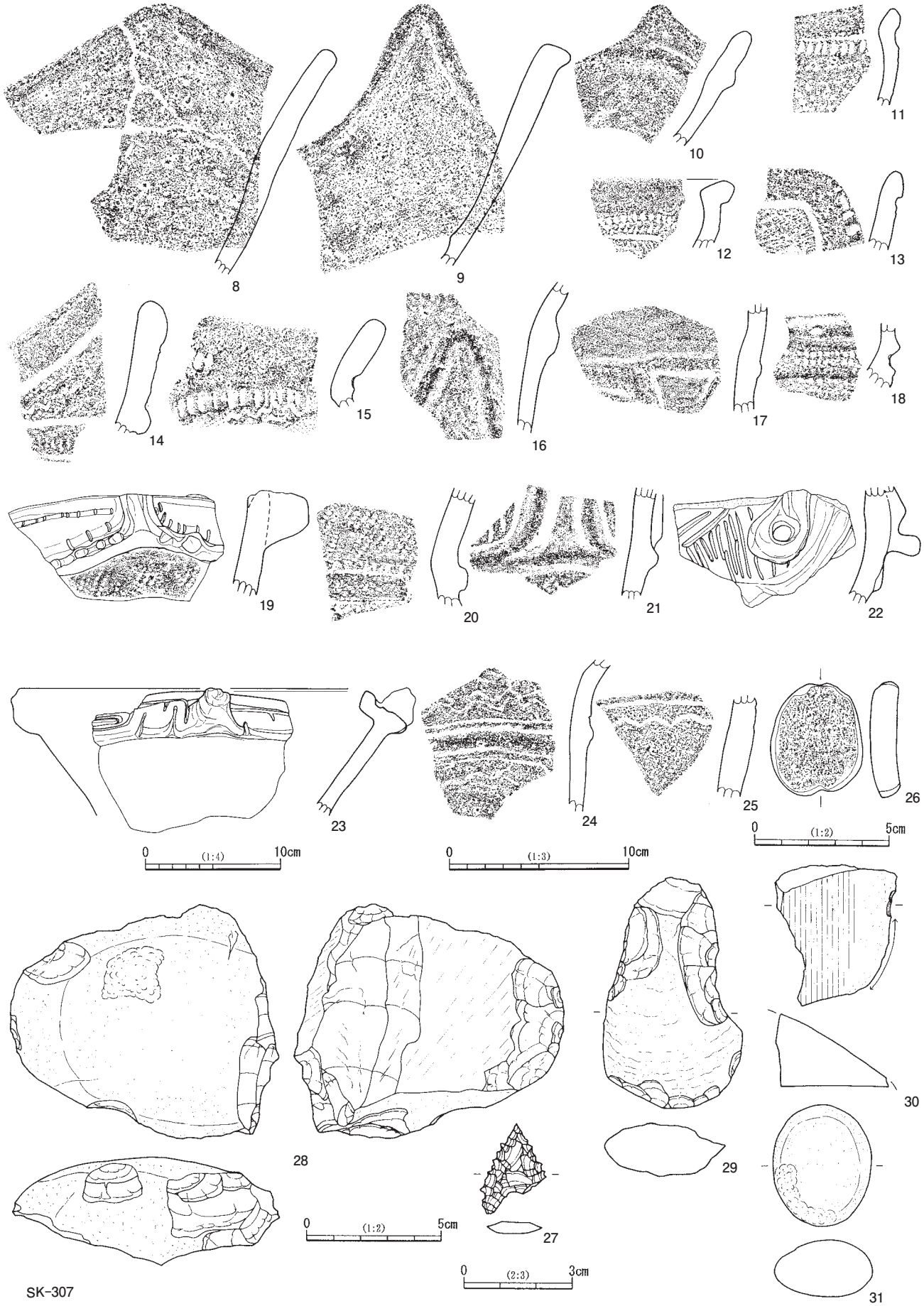
石器は５点出土している。27は右脚部が欠損しているものの石鏃らしい側縁の作りである。28はかなり大きな礫から剥離したものであろう。図示したように各所から剥片剥離の痕跡がみられる。打面調整痕も認められるが石質的には良好な剥片が得られなかったのではなかろうか。29は打製石斧で表面が著しく磨



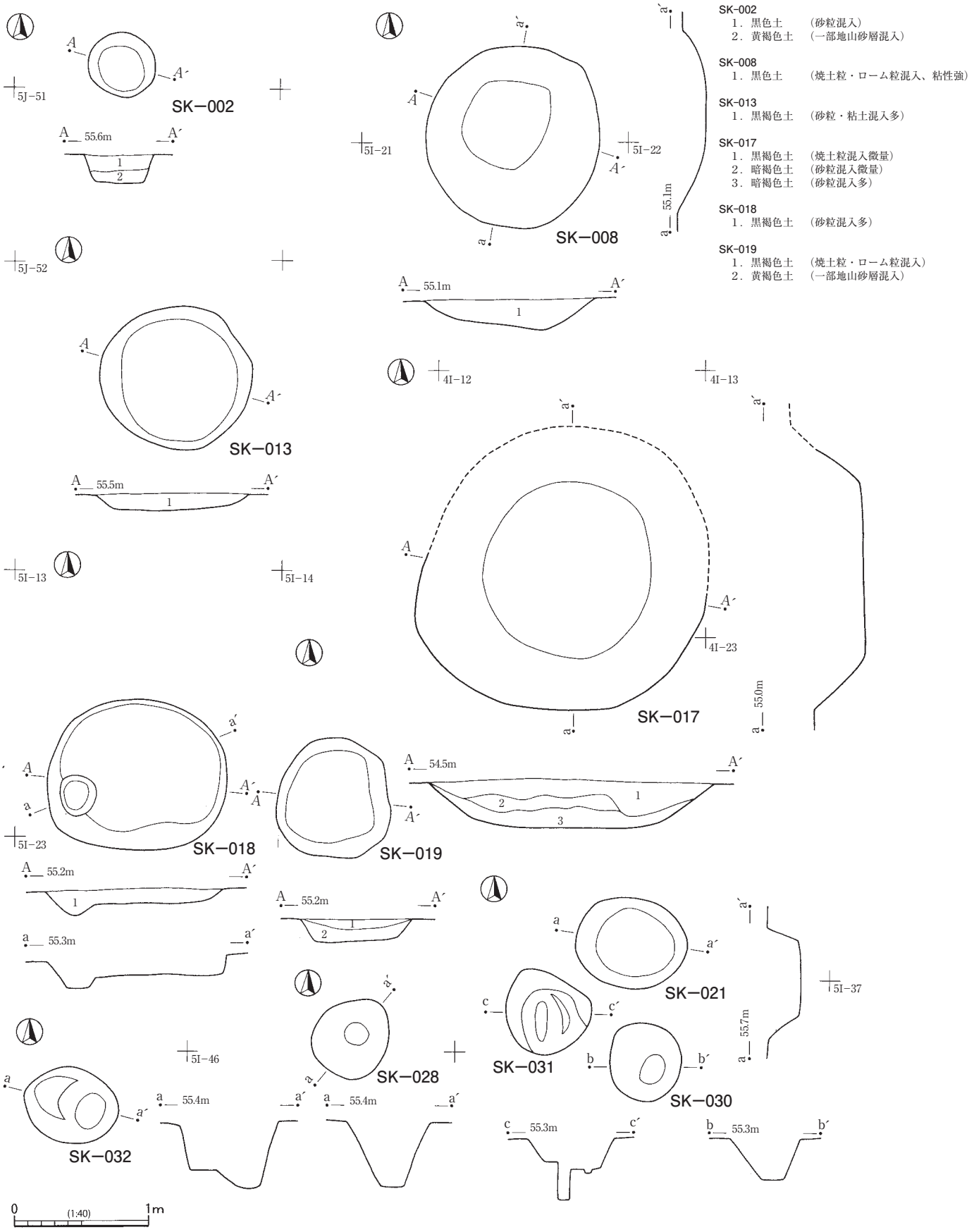
第77図　SK-275・308出土遺物



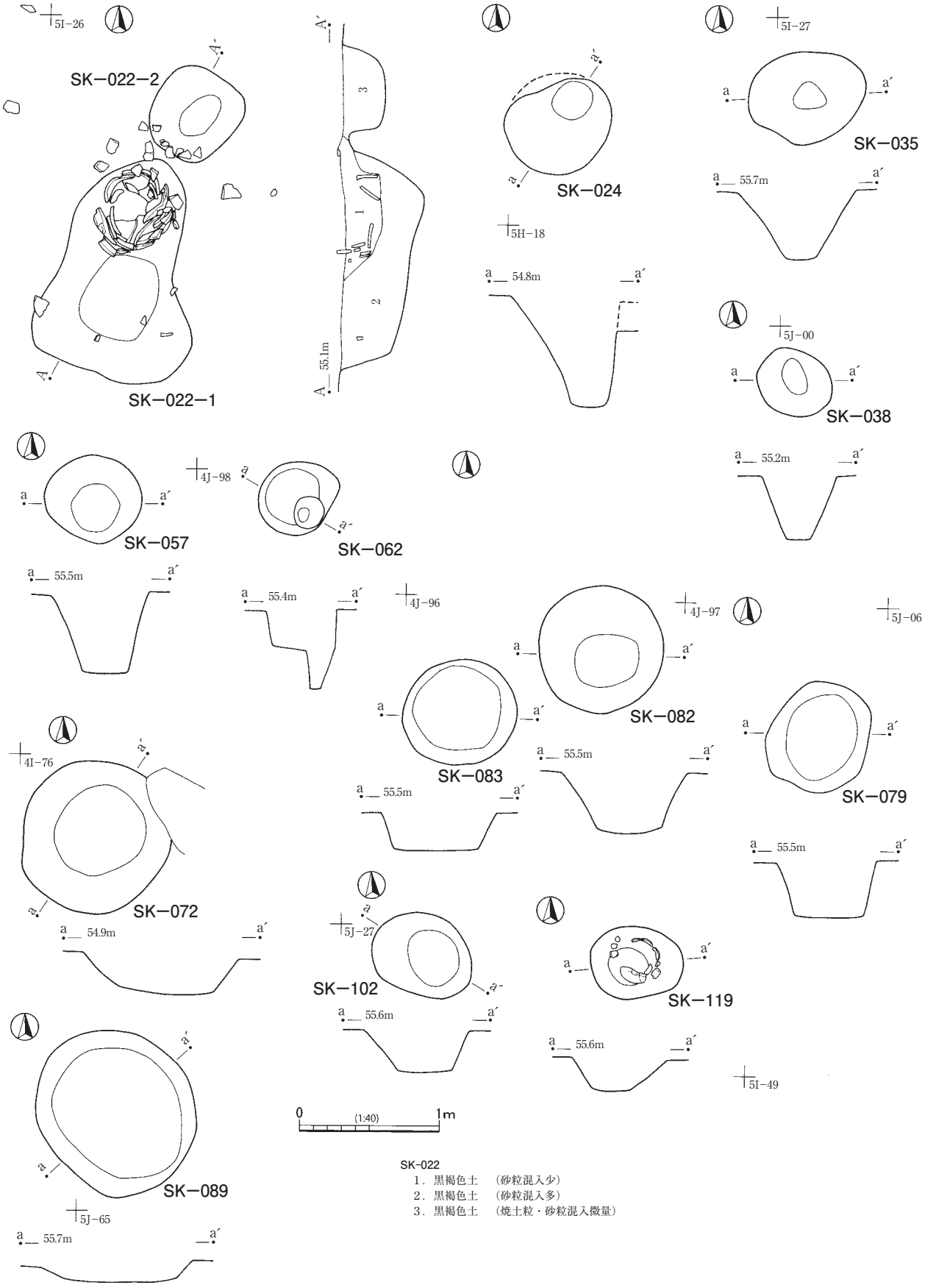
第78図　SK-307出土土器



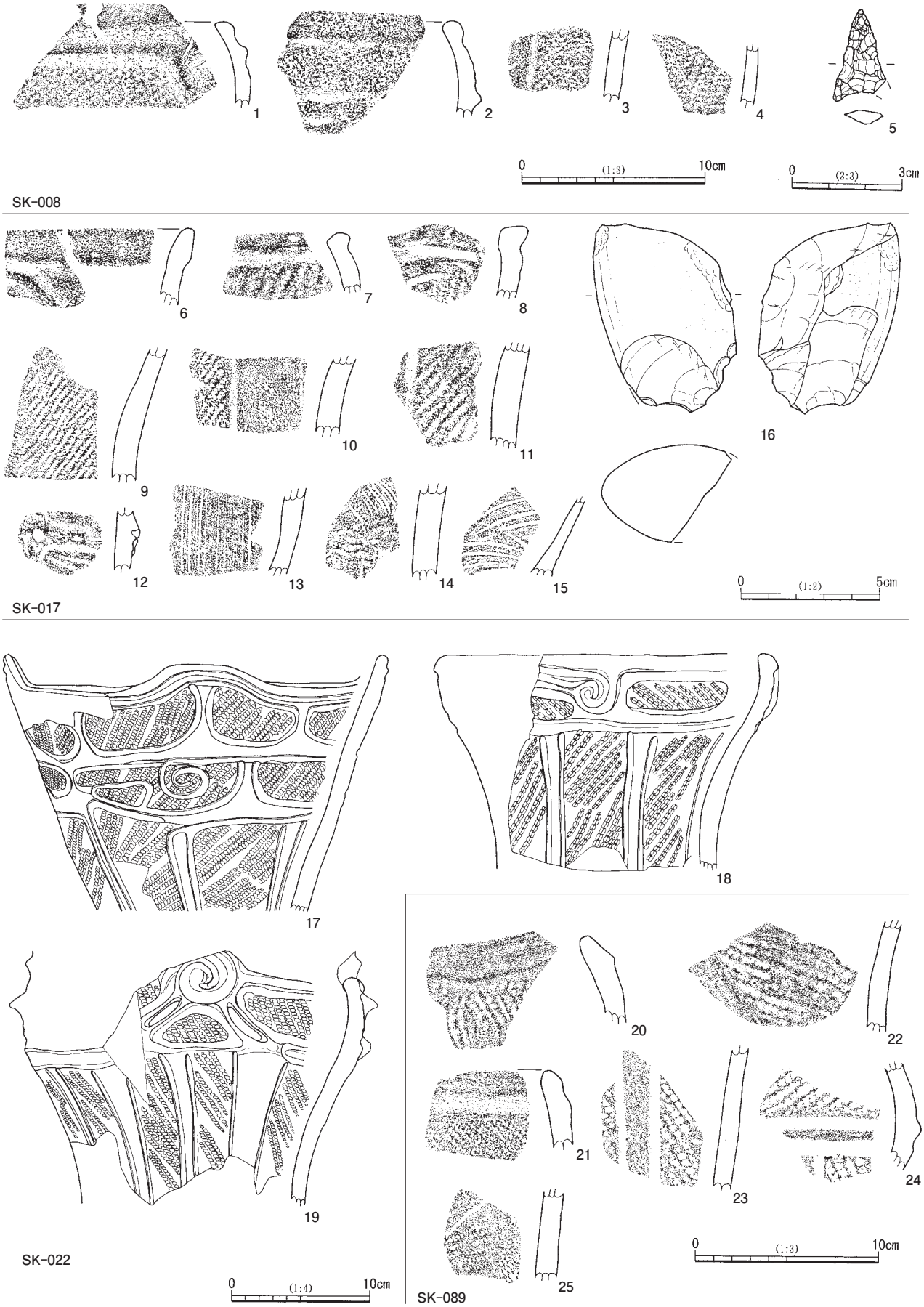
第79図　SK-307出土遺物



第80図　SK-002・008・013・017・018・019・021・028・030・031・032



第81図　SK-022-1・022-2・024・035・038・057・062・072・079・082・083・089・102・119



第82図　SK-008・017・022・089出土遺物

耗している。30には滑らかな面が観察できる。31は剥落部分があるため敲石として使用されたものであろう。

SK-308（第74・77図、図版16・46・71）

本跡での遺物は覆土１・２層で出土している。時期的には阿玉台Ⅱ式から終末期に属するものと考えられる。

11は粘土帯を渦巻状に貼付し刻目を施しており、勝坂式に属するものである。押引したような刻目は阿玉台式と共通するところともいえる。12・13は同様な口縁部となるが、口唇部の作りが異なる。14は半截竹管による横位の押引で胴部では斜行する。これらは阿玉台Ⅱ式となろう。15の隆帯の下には波状の沈線文がみられる。16は無文で浅鉢の口縁である。18･20には隆帯がみられる。20の拓本でははっきりしないが、隆帯に沿って半截竹管による押引が付されている。これらはおおむね阿玉台Ⅲ式となろう。また17・19では地文が縄文となる。とりわけ17の縄文は単節のLRで、原体は密に撚っている。時期的には阿玉台式期でも終末期に該当するものであろう。

石器が１点のみみられた。21はチャートの剥片で表裏面に整形のための剥離が観察できる。残された形状と剥離から石鏃製作の意図が窺われる。

第６表　久保堰ノ台遺跡２小竪穴計測表

	遺構番号	位置	形状	タイプ	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備考
1	SK-001	5J-41	円形	A	170	170	15	6	1 2 3 4 5 6	2 15 3 3 10 45	加曽利EⅡ式
2	SK-009	5I-32	不整円形	A	180	150	20	3	1 2 3	12 32 26	
3	SK-010	5I-33	不整形	A	270	160	28	3	1 2 3	27 22 25	土坑と重複か
4	SK-025	4I-70	楕円形	A	220	190	43	0			堀之内Ⅰ・Ⅱ式
5	SK-075	4J-35	円形	A	178	168	25	1	1	16	
6	SK-115	5J-46	円形	A	165	155	10	4	1 2 3 4	22 28 31 63	
7	SK-120	4J-55	円形	A	250	230	30	4	1 2 3 4	11 16 9 66	P1は土坑か 加曽利EⅡ式
8	SK-121	4J-43	円形	A	215	210	45	4	1 2 3 4	24 29 33 19	P2は土坑か 加曽利EⅡ式
9	SK-210	4R-53	円形	A	255	235	35	0			
10	SK-003	5I-57	円形	B	93	84	24	0			
11	SK-004	5I-59	楕円形	B	103	79	36	1	1	24	
12	SK-006	5I-49	楕円形	B	97	85	11	0			
13	SK-012	5I-43	円形	B	104	100	20	0			
14	SK-020	5I-24	楕円形	B	101	84	15	1	1	27	
15	SK-042	5I-14	円形	B	136	134	10	0			
16	SK-046	4J-78	楕円形	B	104	86	24	0			
17	SK-047	4J-78	円形	B	121	114	34	0			
18	SK-116	5J-37	円形	B	115	105	28	0			堀之内式
19	SK-117	5J-58	不整楕円形	B	155	122	44	0			加曽利EⅢ式
20	SK-202	4P-19	円形	B	92	—	13	0			
21	SK-205	4Q-53	楕円形	B	135	120	8	2	1 2	8 9	加曽利B式
22	SK-221	4P-36	円形	C	100	95	111	0			堀之内Ⅰ式
23	SK-231	4P-68	円形	C	130	125	105	0			堀之内Ⅰ式
24	SK-275	5O-97	円形	D	96	90	52	0			阿玉台Ⅲ式
25	SK-307	6O-14	円形	D	170	150	78	0			阿玉台Ⅲ式
26	SK-308	6O-22	円形	D	150	140	75	0			阿玉台Ⅲ式

第３節　土坑

土坑は、前出の小竪穴と比較してより小規模なタイプを主体として、平面形が楕円形や不整形といった落ち込みや基底面の立ち上がりの緩やかな作りといった遺構を「土坑」として分類した。遺構番号には前出の小竪穴と同様に「SK」を用いたため遺構番号が継続していない点と遺構番号は付けたものの植物根や後世の掘削等による落ち込みにも念のため遺構番号を付したため欠番が多く生じてしまうこととなった。また、柱穴状のピットでは「SH」で番号をつけてみたが、図示できるような土器は僅少であったため図示できるもののみ掲載することとした。なお、本節でも特徴的な土坑と図示できるような遺物を出土した土坑のみを記述の対象としたことを付記しておく。土坑個々の詳細については計測表（第７表）としてまとめた。ピットは底面からの深さとした。

SK-008（第80・82図、図版49・71）

本跡は小規模な円形の掘込みであり、覆土上層から中期の土器片が若干出土している。１・２は加曽利ＥⅢ式の口縁部で器面がだいぶ磨耗している。３・４は加曽利ＥⅢ式胴部片である。

５は石鏃で右の脚部が欠損している。だが左右対称の均整のとれた作りである。

SK-017（第80・82図、図版49・71）

本跡は皿状に掘り込まれた大規模な土坑である。遺物では、小破片が10数点出土し、磨製石斧の破損品もみられた。

６～８は口縁部で、８の文様からは新しいタイプの加曽利E式の片鱗が窺える。９～11は同時期の胴部片と思われる。12は口縁部から堀之内Ⅰ式とみられ、13・14も同時期となろう。15は加曽利ＢⅡ式の台付鉢の破片である。

16は断面が楕円形に整っており、本来は磨製石斧であったものと思われる。破損後は敲打具として利用されたり、石核として剥片を剥離されたりしている。

SK-022（第81・82図、図版14・40）

本跡は３基の土坑により構成されたもので、遺物は２基の土坑が重複したものと考えられるSK-022-1の北側の落ち込み部分から一括土器３点が出土した。

17は波状口縁を呈した深鉢で口縁部に向かって直線的に開くタイプとなる。文様は18・19にみられるような口縁部文様帯と異なり、分離した文様帯を構成する。渦巻文は沈線により下段で作られ、胴部の文様については大きな差異は認められない。一方、18・19は口縁部が内彎するキャリパー形を呈しており、渦巻は隆帯によって構成されている。時期的にはいずれも加曽利EⅡ式の範疇を逸脱するものではなかろう。

SK-072（第81・83図、図版49・72）

ここでは図示できる遺物は土器片１点と石器2点だけであった。

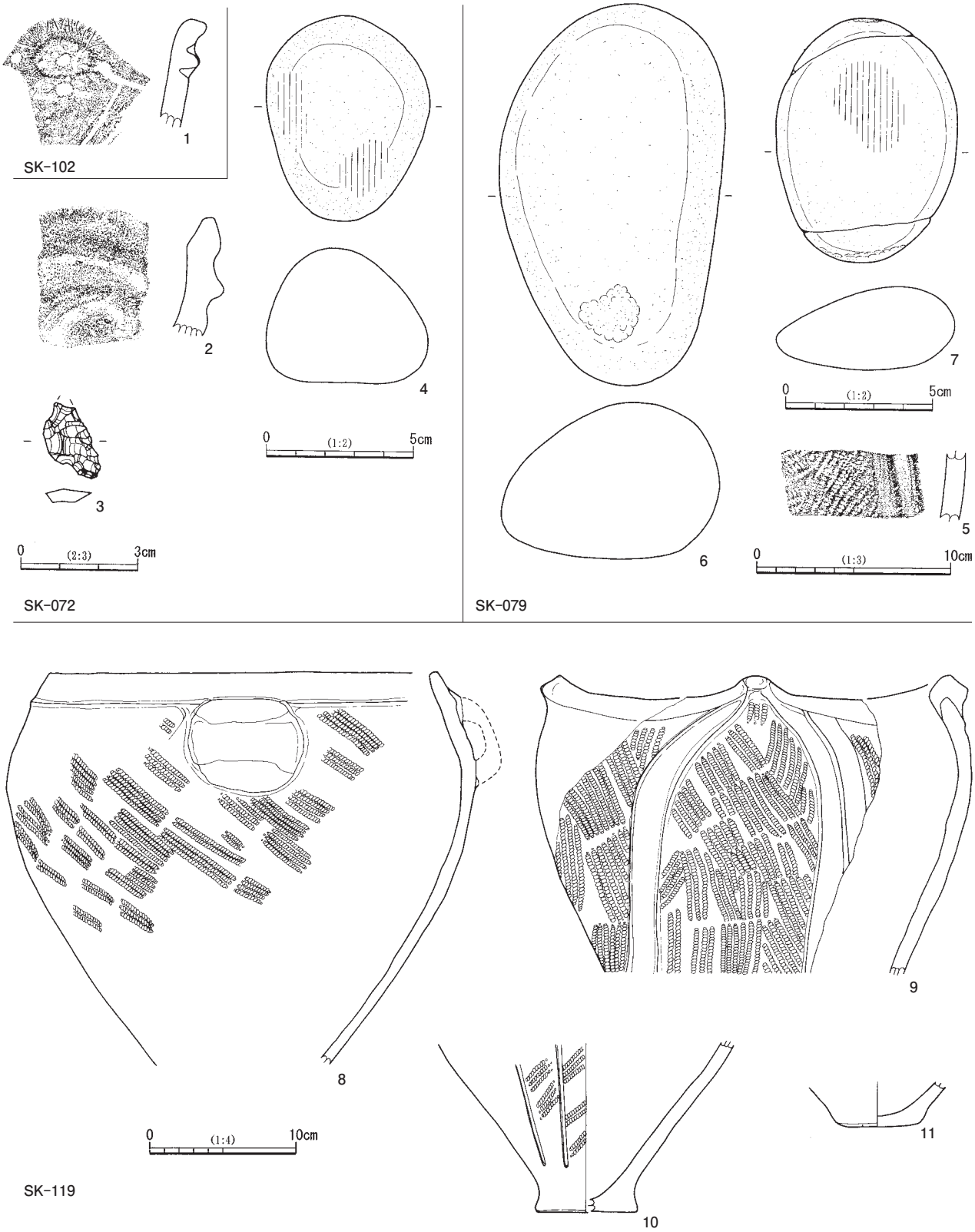
２は退化した渦巻文を有する波状口縁の一部である。時期的には加曽利ＥⅢ式となろう。

３は製作に失敗した石鏃であろうか。先端部と脚部が失われている。４は磨石で表面の一部に滑らかな面が形成され、裏面は平坦となっている。

SK-079（第81・83図、図版49・72）

本跡の掘込みは開口部から40㎝を計測し、基底部からの立ち上がりもしっかりしたものであった。ここでも３点の遺物が図示できた。

５は胴部片で微隆起の左右は磨り消されている。



第83図　SK-072・079・102・119出土遺物

６は敲石で表面下部に打痕がみられる。７は磨石と敲石の兼用品で上下端に打痕がみられ、中央部には滑らかな磨耗痕が観察できる。

SK-089（第81・82図、図版49）

本跡は浅い皿状の土坑で10数点の土器片が出土している。そのうちの６点について図示した。いずれも器面が磨耗している。

20は口縁部に微隆起を有するもので、22の微隆起は斜行する。器面の色調や縄文が近似するところから同一個体と考えられる。加曽利EⅣ式に位置づけられる。21も緩やかな隆線が認められる。時期的には20よりもやや古式となろう。23・24は沈線や磨り消し等から加曽利EⅢ式である。

SK-119（第81・83図、図版15・41・49）

本跡は第81図にみられるよう径60㎝余りの土坑であり、覆土中から図示したような一括土器が出土している。このことから本跡は加曽利ＥⅣ式期に営まれた遺構といえよう。

８は口縁直下に一対の把手が付されていたようである。貼付された粘土帯の破損部が残されている。９は緩やかな波状口縁を呈した深鉢で微隆起により区画された中を縄文で充填する。しっかりした微隆起から２点は加曽利ＥⅣ式となろう。10は縄文間に沈線がみられ、底部の作りが特徴的である。時期的には加曽利ＥⅢ式期に属するものであろう。

SK-123（第84・86図、図版50）

本跡はほぼ円形の浅い土坑であり、中期の土器２点が出土している。

１は中期後半に稀にみられる両耳壺の把手部と考えられる。２は底部片で後期に属するようである。

SK-126（第84・86図、図版50・72）

本跡もSK-123と同様の形状と規模の土坑であり、ここでは称名寺式の大型片が出土している。

３は平縁の深鉢で約1/5が遺存する。口縁部下にみられる沈線は深く鮮明であるが、器面には刷毛目状の整形痕や縄文らしき痕跡も一部で認められる。磨耗が著しいため縄文の表現については省略した。４は沈線で曲線を表現しており縄文らしき痕跡もみられる。５では区画された沈線内にはっきりした縄文が観察できる。ともに称名寺式となる。

６は敲石と磨石を兼用した石器で1/5程度の遺存である。

SK-200（第84・86図、図版50）

本跡は楕円形の掘込みが重複しているような形状を呈した土坑で、図示できる土器片が１点出土した。器面は縄文に覆われており、口縁内面には浅い沈線が巡る。加曽利Ｂ式の粗製深鉢である。

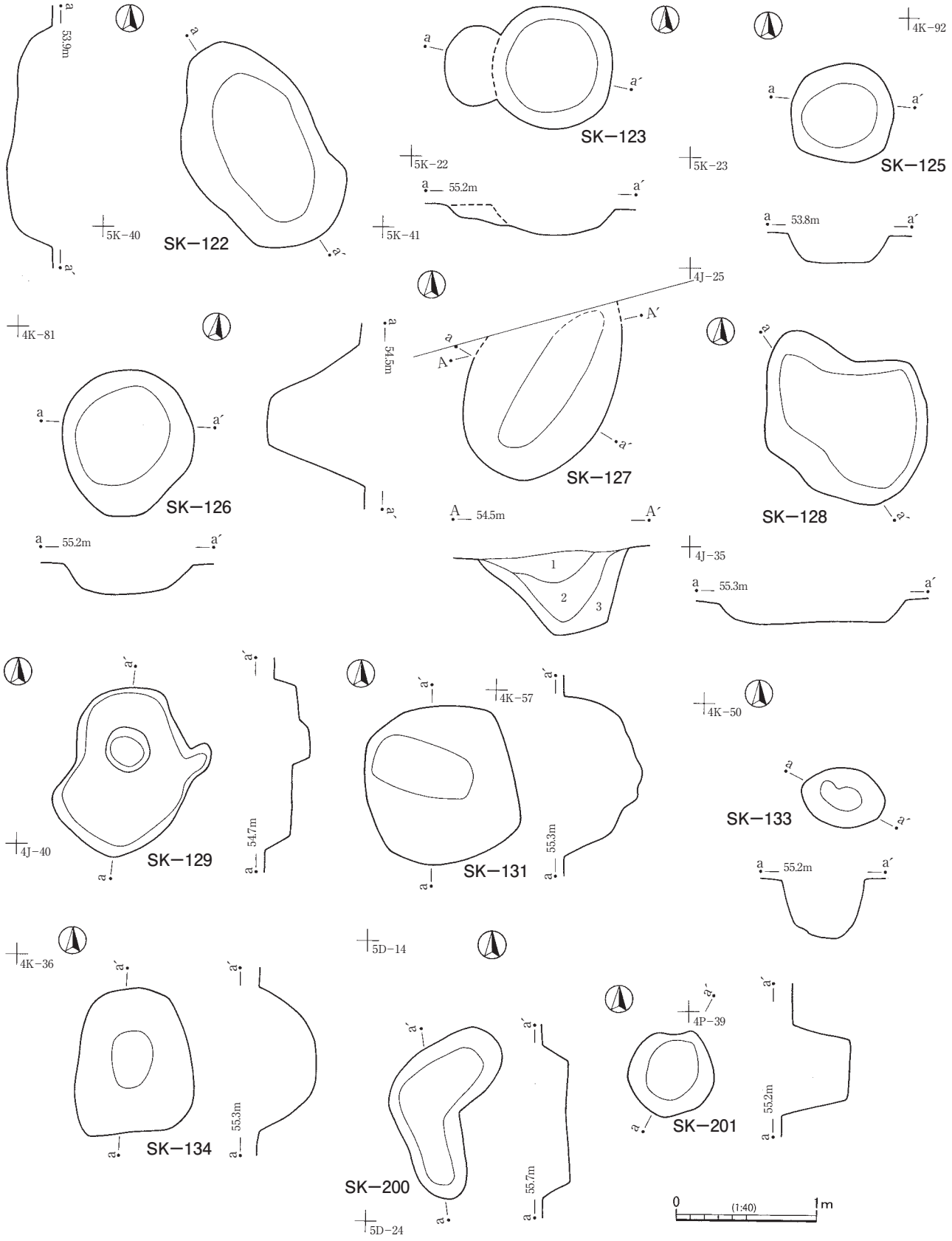
SK-201（第84・86図、図版50）

本跡は比較的深く掘り込まれた遺構で、覆土上層から数点の土器片出土した。９は波状口縁の一部で半截竹管のような同一工具による刺突と沈線で文様を描いている。９～11は加曽利ＥⅡ式となろう。９は連弧文系によくみられる複数刺突である。

SK-203（第85・86図、図版72）

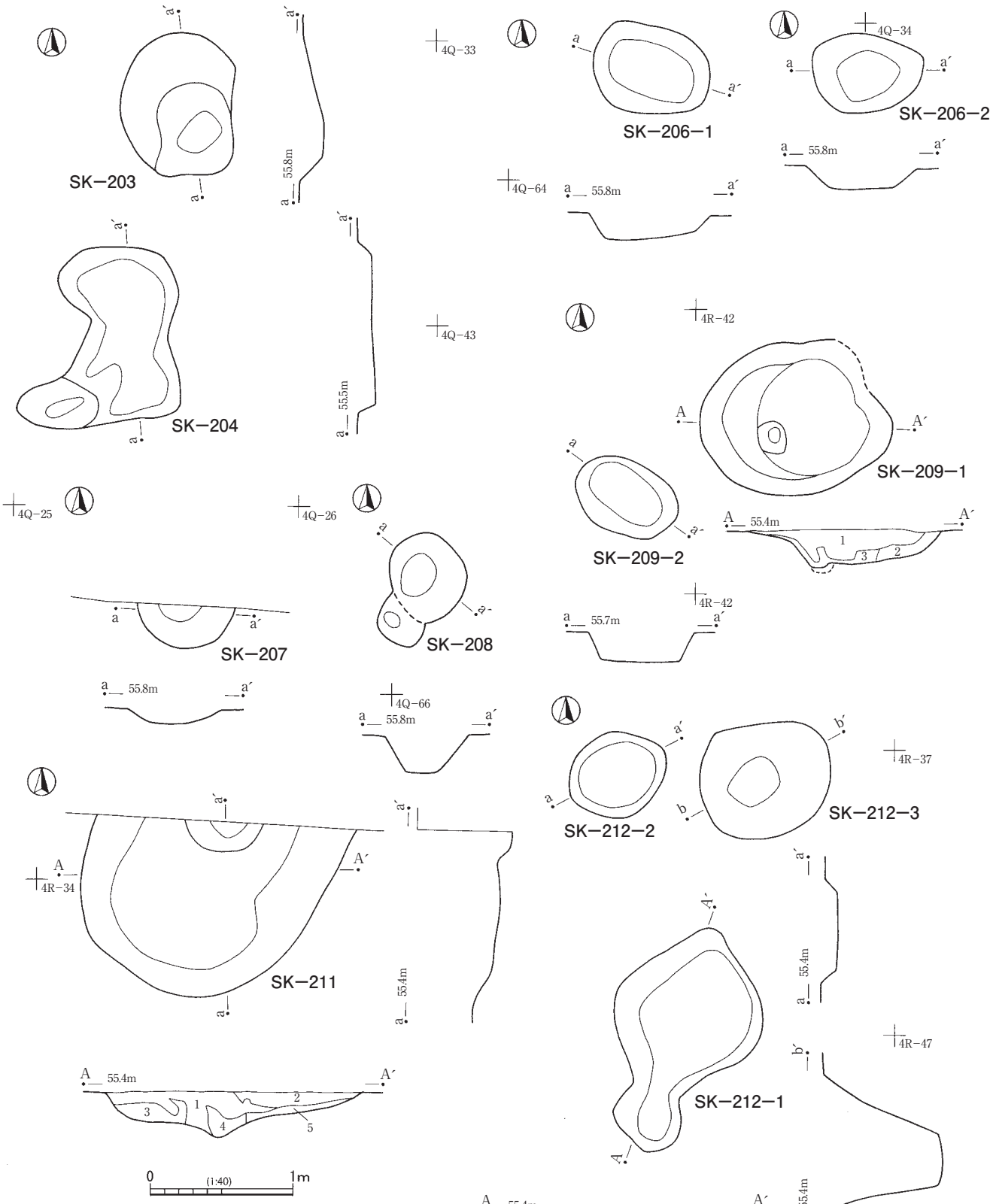
本跡は不整形な形状を呈した遺構で南よりに底部分がある。ここでは小さな土器片数点と図示できる石器が２点出土した。

12は石鏃の脚部が遺存したものである。13は薄く扁平な河原石の側縁を上下から抉るように整形している。形としては錐先部分の作出かと思われるが、石材は軟弱な凝灰岩であるため疑問も残る。



SK−127
1．黒褐色土　（炭化物混入少、粘性強）
2．黒褐色土　（砂粒・炭化物混入少、粘性強）
3．暗褐色土　（黒色土・砂粒混入多、粘性強）

第84図　SK−122・123・125・126・127・128・129・131・133・134・200・201

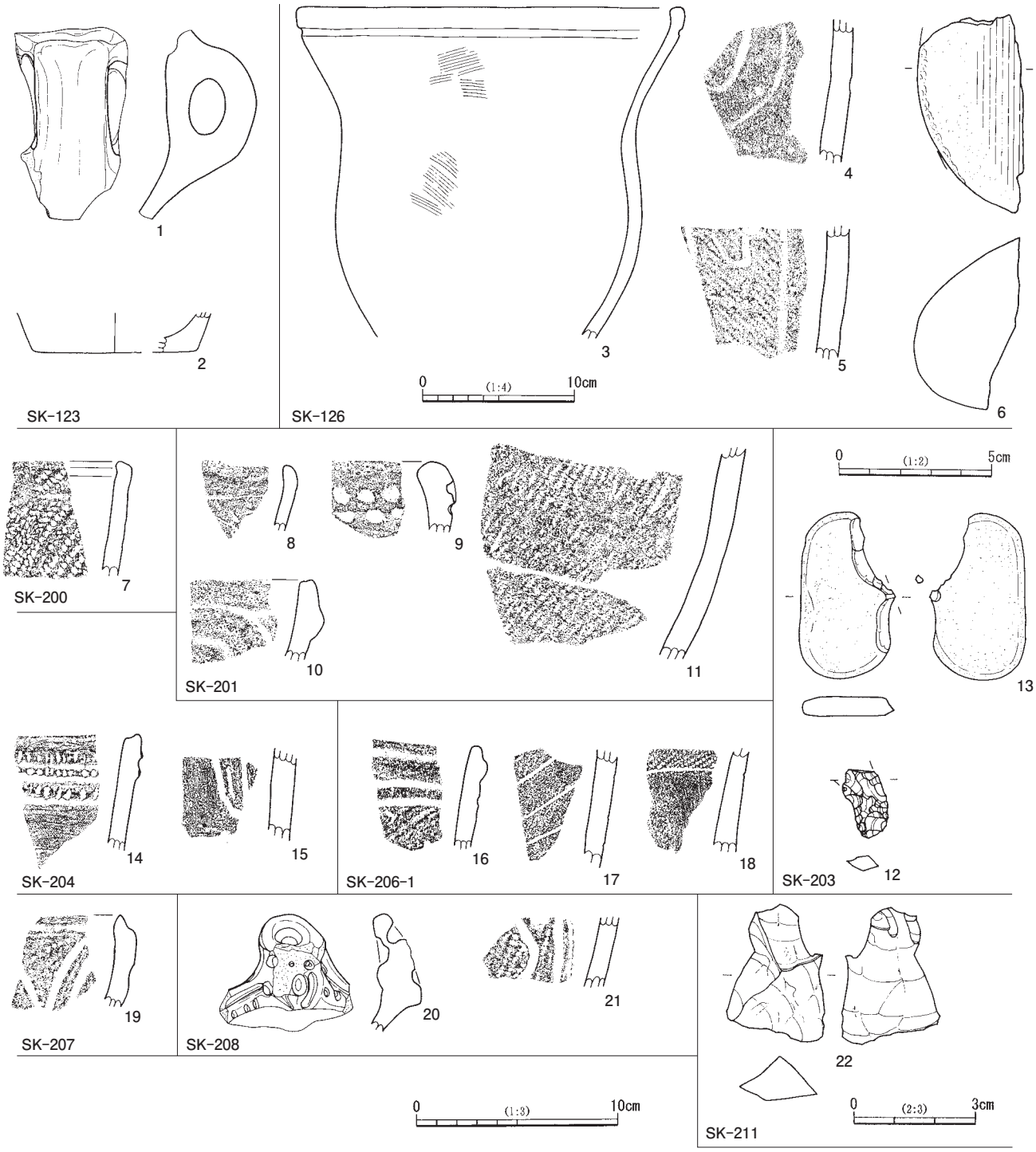


SK-209
1．黒褐色土　（粘性強）
2．暗灰黄色土　（砂粒混入多）
3．黒褐色土　（砂粒混入多）

SK-211
1．黒褐色土　（ローム粒混入少）
2．黒褐色土
3．明褐色土
4．褐色土
3．暗褐色土

SK-212
1．黒褐色土　（粘性強）
2．暗灰黄色土　（粘性強）
3．明赤褐色土
（一部地山砂層混入、粘性強）

第85図　SK-203・204・206-1・206-2・207・208・209-1・209-2・211・212-1・212-2・212-3



第86図　SK-123・126・200・201・203・204・206-1・207・208・211出土遺物

SK-204（第85・86図、図版50）

本跡も不整形な形をした遺構で図示できる土器片が２点みられた。

14は緩やかな波状を呈した口縁の一部で、口唇部では沈線ではなく、むしろ凹みと表現できる作りがみられる。また口辺には２条の粘土紐を貼付し刻目を施している。器面には調整が加えられており、半精製土器といえよう。時期的には堀之内Ⅱ式と考えられる。15は沈線と刺突による文様構成から称名寺式となろう。

SK-206（第85・86図、図版50）

本跡は２基が接近して検出されたため枝番を付して区別した。遺物はSK-206-1から出土したもので図示できる土器片は３点であった。

16は隆帯の上下に沈線を施しており堀之内Ⅰ式と思われる。17は斜行する沈線、18は底部付近の破片で縄文帯が沈線によって区画されるものであろう。いずれも堀之内Ⅱ式とみなされる。

SK-207（第85・86図、図版50）

本跡は皿状の掘り込みで円形を呈していたものと思われる。図示可能な土器が１点のみ存在した。

地文が縄文ではっきりした沈線により文様が描出されている。口縁部の特徴から堀之内Ⅰ式となろう。

SK-208（第85・86図、図版50）

本跡は小型の土坑であり、柱穴状のピットが南にみられる。ピットは開口部から19㎝と浅いものであった。遺物は数点出土し、図示できるものが２点あった。

口縁と胴部片であり、20の口縁部の作りは堀之内Ⅰ式の特徴をよく表現している。21も同時期と思われる。

SK-211（第85・86図、図版72）

本跡の平面形は楕円形を呈するものと推測できる。未掘中央部には落ち込みがみられるものの詳細は把握できなかった。遺物は若干の土器と剥片が１点出土した。

22では加工痕はみられないが、その形状から石鏃素材には十分といえる。

SK-223（第87・88図、図版50）

本跡は小型の土坑で、遺物はSK-223-1から図示できる土器が４点出土した。

１は中期で加曽利EⅢ式となろう。２は粗製土器の胴部片で縄文の間隔は粗い。３は浅鉢型の口辺部でヘラによる刻目と沈線によって文様が描かれている。器面では調整痕が残る。時期的にはともに加曽利BⅠ式となろう。４は底部片で網代痕が観察できる。

SK-229（第87・88図、図版50）

本跡は台形に近い形状で、コーナーにピットが存在する。遺物は少なく図示できる土器は１点のみであった。

口縁部片で隆帯によって主文様が構成されている。胎土には雲母を多く含むところから阿玉台式の系譜に連なるものであろう。

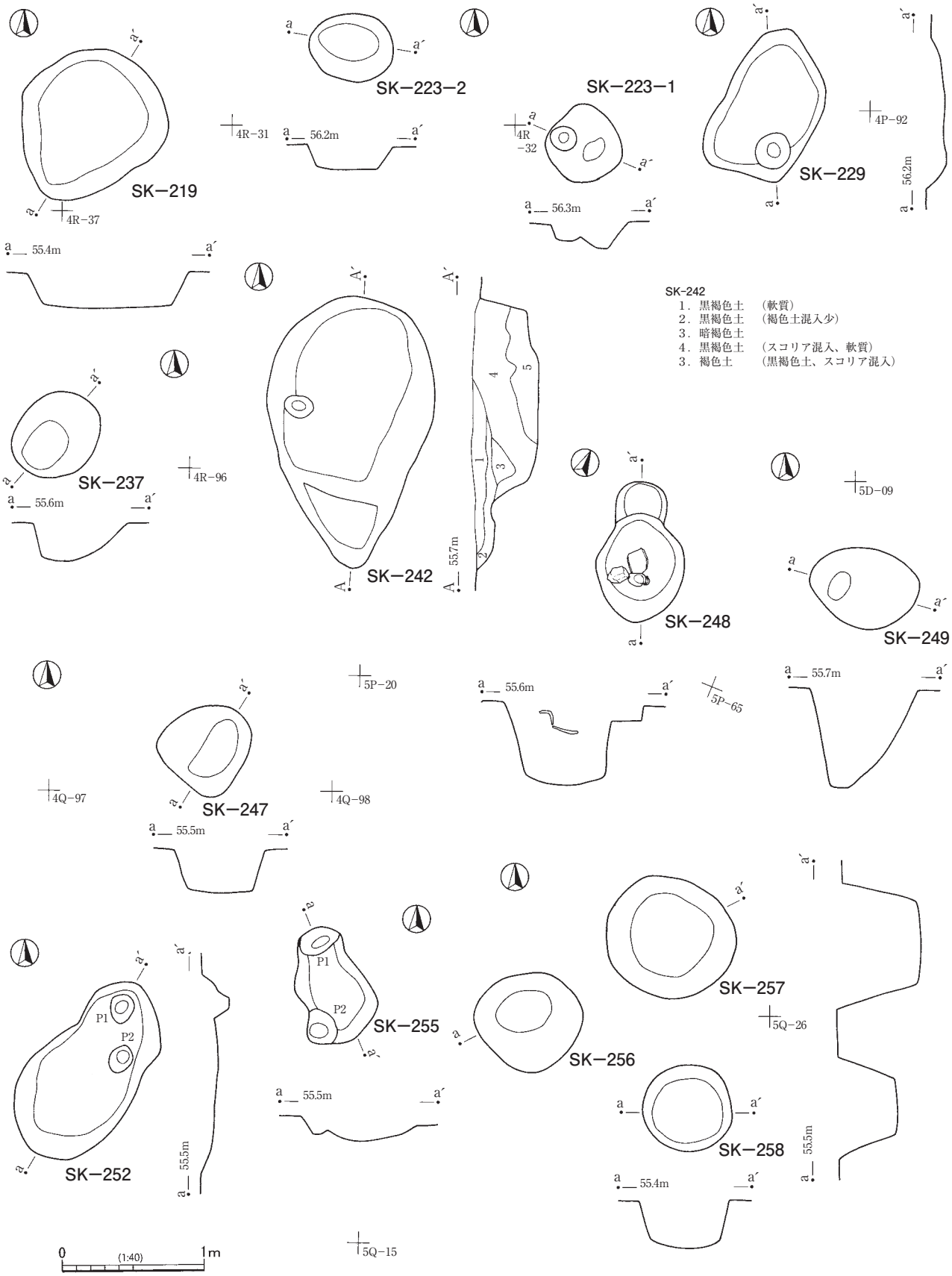
SK-237（第87・88図、図版72）

本跡は小型の楕円形の土坑で、少量の土器と楔形石器が１点出土したのみである。

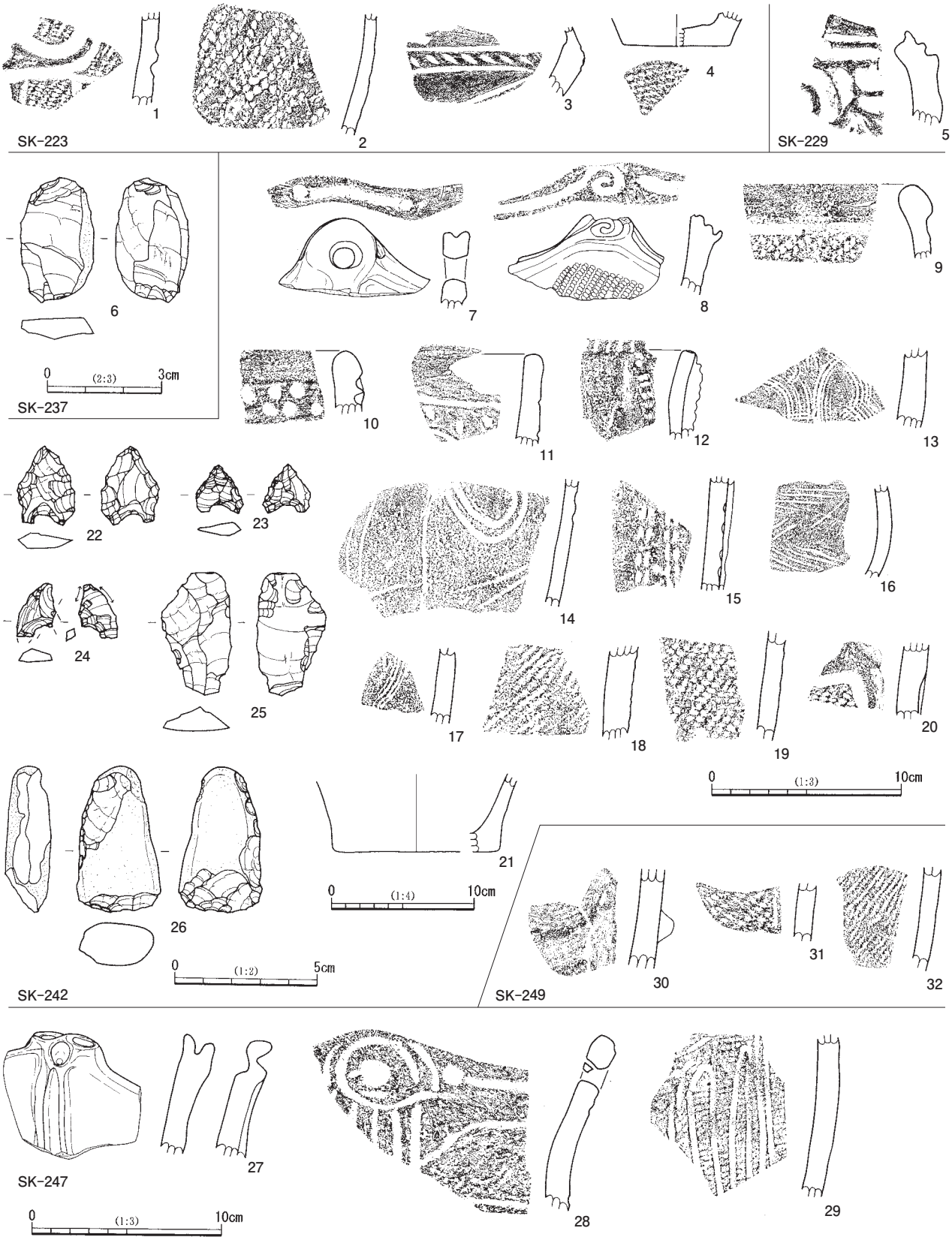
楔形石器は薄手の剥片を利用したもので、表裏面に剥離が施されている。右側面には自然面がみられるため小礫を素材にしたものであろう。

SK-242（第87・88図、図版15・50・72）

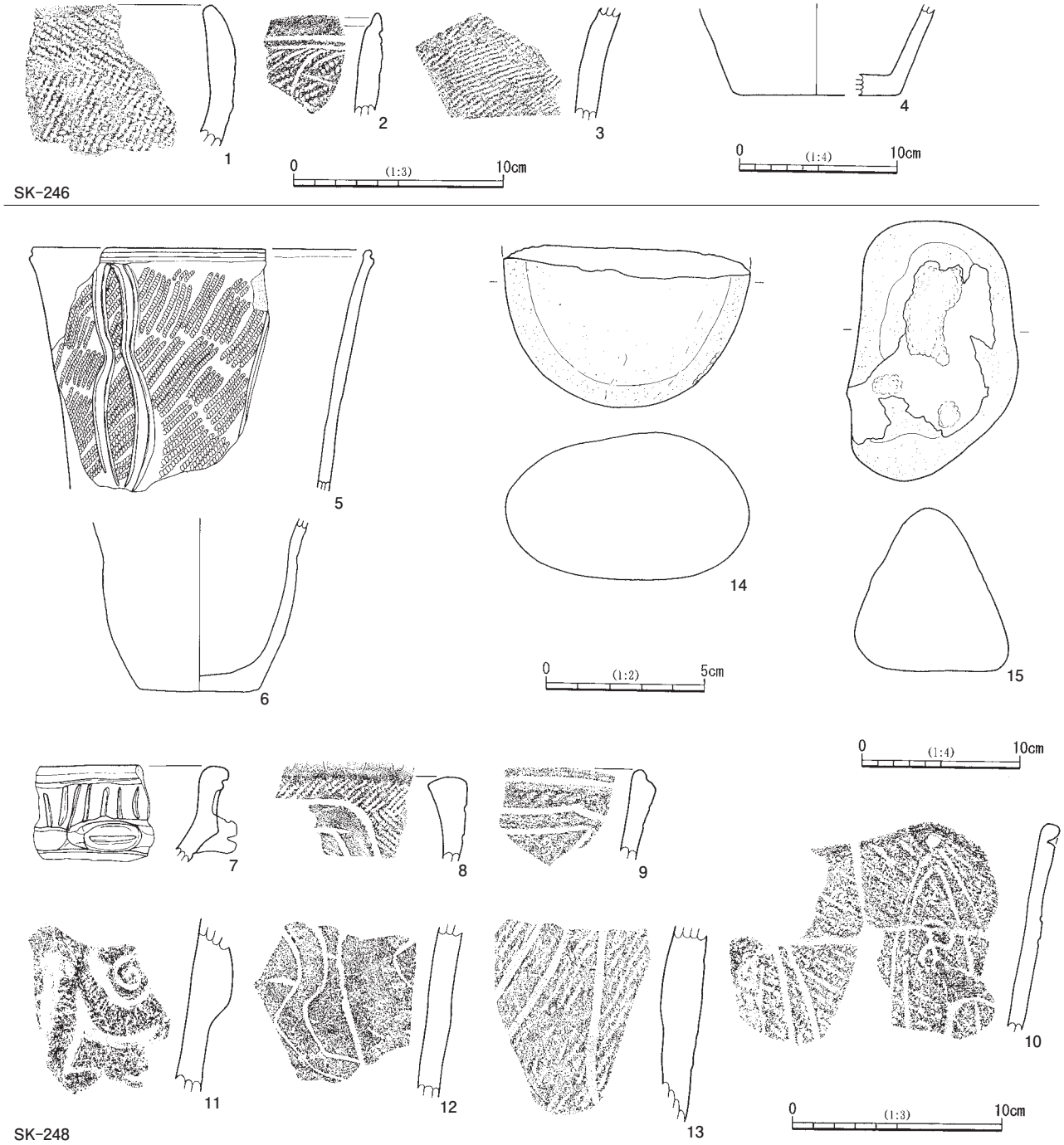
本跡は西壁に接してピットが穿たれており、南に足場状の段差がみられるが、堆積土からは２基の土坑が重複しているようである。出土遺物の多くは４層から出土している。ここでは図示できる遺物も多かっ



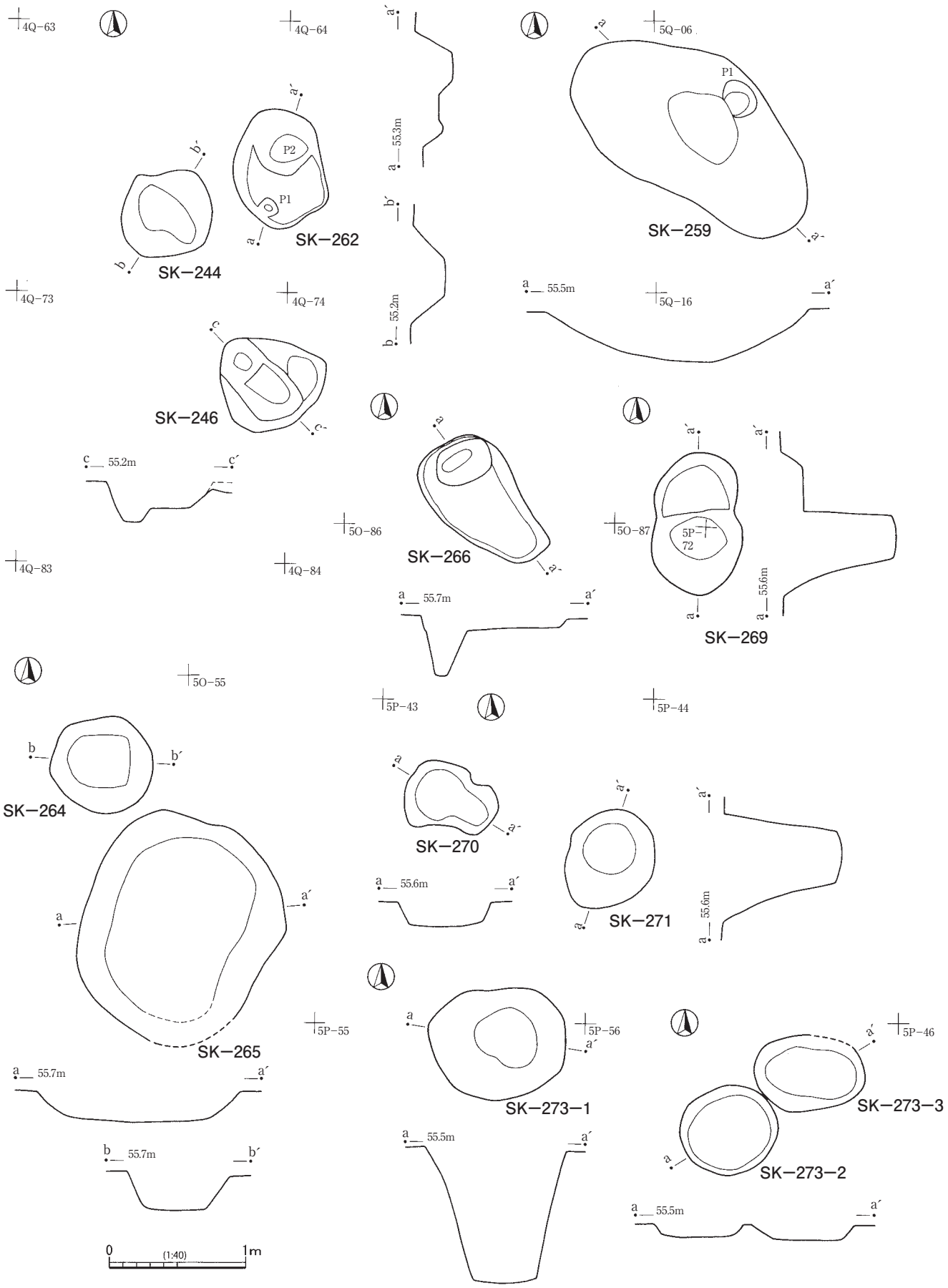
第87図　SK-219・223-1・223-2・229・237・242・247・248・249・252・255・256・257・258



第88図　SK-223・229・237・242・247・249出土遺物



第89図　SK-246・248出土遺物



第90図　SK-244・246・259・262・264・265・266・269・270・271・273-1・273-2・273-3

た。出土土器についてみると、中期の阿玉台式・加曽利EⅡ式から堀之内Ⅱ式まで出土している。

９・10は加曽利ＥⅡ式となろう。10は連弧文系に属する深鉢である。11は沈線と刺突による文様構成であり称名寺式となろう。７・８・12は口縁部の作りや粘土帯の貼付から堀之内Ⅰ式となろう。胴部片についてみると、15には雲母の混入がみられ、隆帯に沿って竹管による押引が施される。阿玉台Ⅱ式となろう。20は加曽利ＥⅢ式に位置づけられよう。そのほかはおおむね堀之内Ⅰ式となろう。21は底部が約1/3ほど遺存したもので、文様等は認められない。時期的には後期となる。

石器では石鏃等５点が図示できた。22は仕上がりは雑となるが成品といえよう。23も完形品といえるが概して作りは粗悪といえる。24は石鏃か石錐の破損品と考えられる。25は剥片で裏面には二次剥離が数回施されている。26は小型の打製石斧である。扁平なチャートの礫を加工した数少ない例といえる。

SK-246（第89・90図、図版41・51）

本跡の平面形は複雑で足場状の平坦面があり、その上部から若干の遺物が出土している。口縁部片が２点出土した。

１は縄文の施文方向を変えて羽状の効果を作り出している。中期でも新しいタイプとなろう。２は縄文地に半截竹管による沈線で器面を飾る。内面には浅い沈線が認められるため堀之内Ⅱ式となる。３の縄文は細く密に撚られている。２よりも古式となろう。４は後期の底部で無文はみられない。

SK-247（第87・88図、図版51）

本跡は小型の土坑で、図示できる遺物は土器が３点であった。

27は口縁部だが器面の磨耗が著しい。28とともに縄文施文がほとんど磨滅している。29は沈線間に辛うじて縄文がみられる。沈線による文様構成が主体となっているところからすべて堀之内Ⅰ式となる。

SK-248（第87・89図、図版15・41・51・72）

本跡は小土坑を切り込んで設けられた土坑で出土土器から堀之内Ⅰ式期の所産となろう。遺物は図示したように覆土上層から多くが出土している。

５は口縁部から胴部にかけて約1/4が遺存した深鉢で底部から直線的に立ち上がるタイプとなる。推定口径は22㎝と小型品で施文から堀之内Ⅰ式となる。６は小型品となる。器面は無文でヘラにより簡単な整形が施されるのみであるが、内面はきれいに調整されている。７は口辺の有段部に切り込みを入れた粘土塊を貼付している。時期的には加曽利ＥⅠ式となろう。11は隆帯上に刻目が施され、渦巻きを形作る。７と同時期となろう。８は平縁で口唇部が特徴的といえる。太い沈線間は磨り消されており、型式的には称名寺式と考えたい。12も同時期となろう。９･10･13は堀之内Ⅰ式で９の口縁の作りは典型的なものである。

図示できる石器が２点出土した。14は欠損しているが、遺存する表裏面は滑らかである。15は断面三角形を呈した敲石で被熱している。中央部には打痕が残る。平坦な側面は台石として使用されたらしく表面には表皮部分の剥落がみられる。

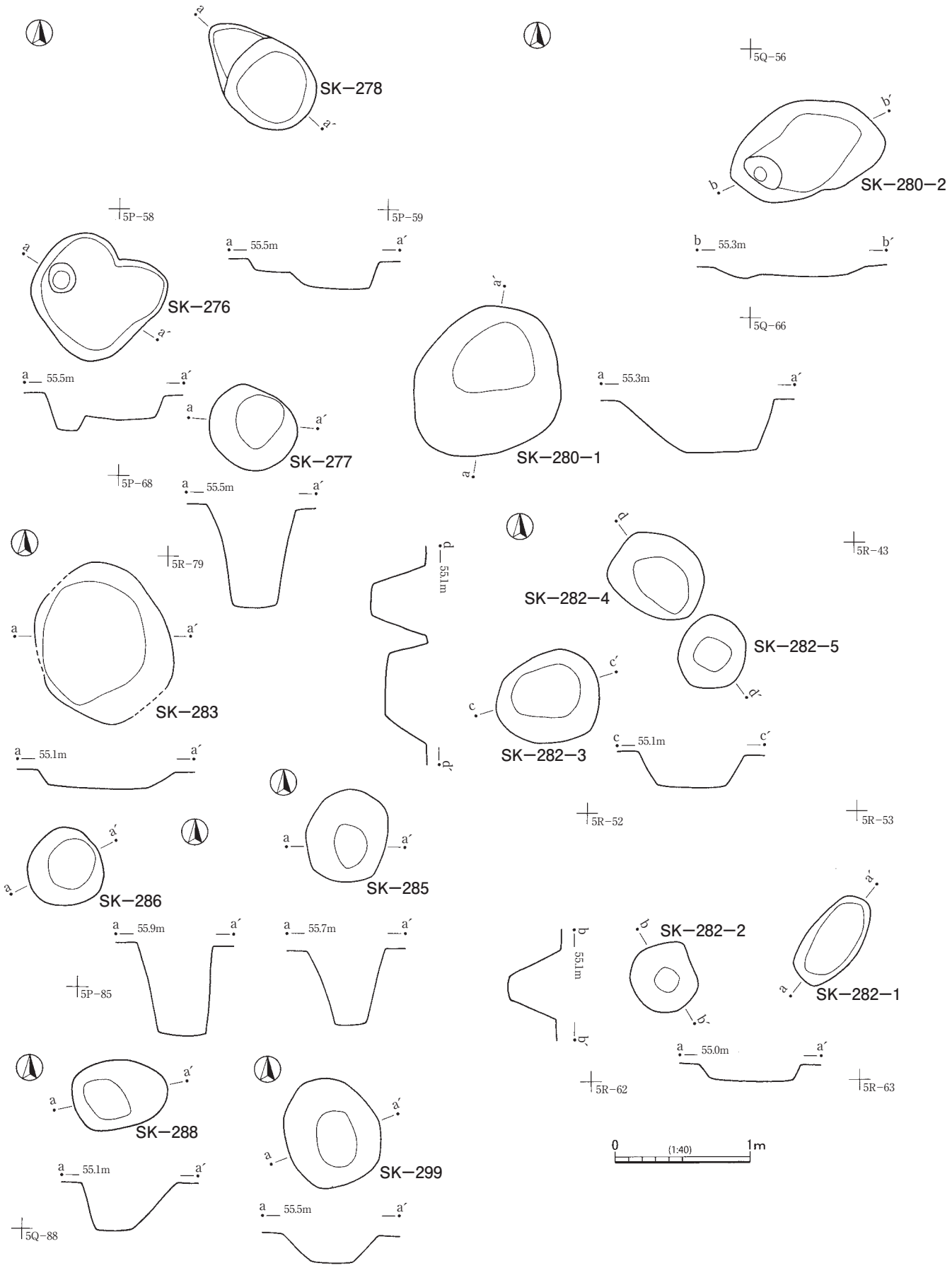
SK-249（第87・88図、図版51）

本跡は柱を引き抜いたような断面となっていた。図示できるような遺物が３点みられた。

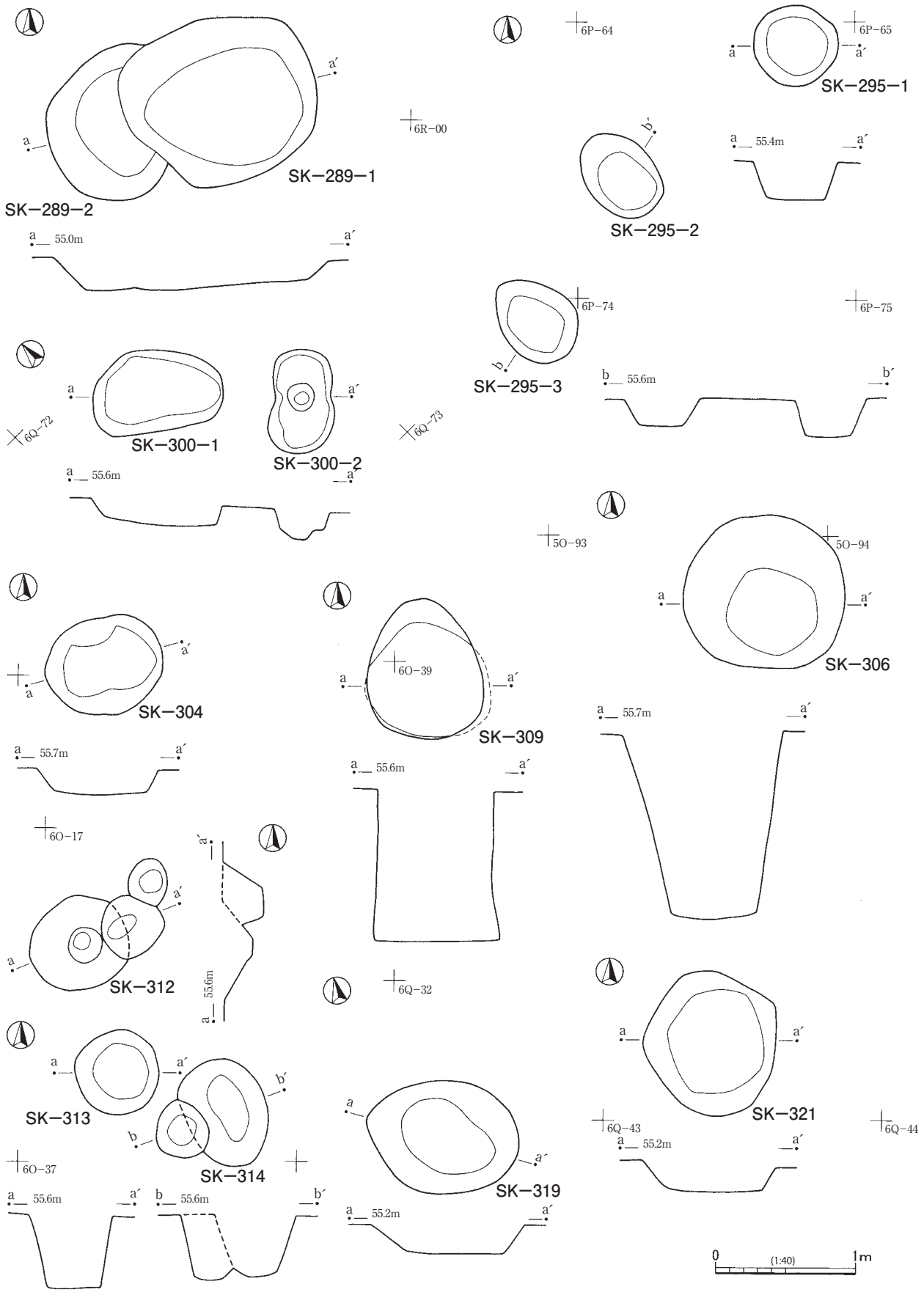
30・31は中期の加曽利ＥⅡ式で、32は堀之内Ⅰ式となろう。

SK-259（第90・93図、図版51）

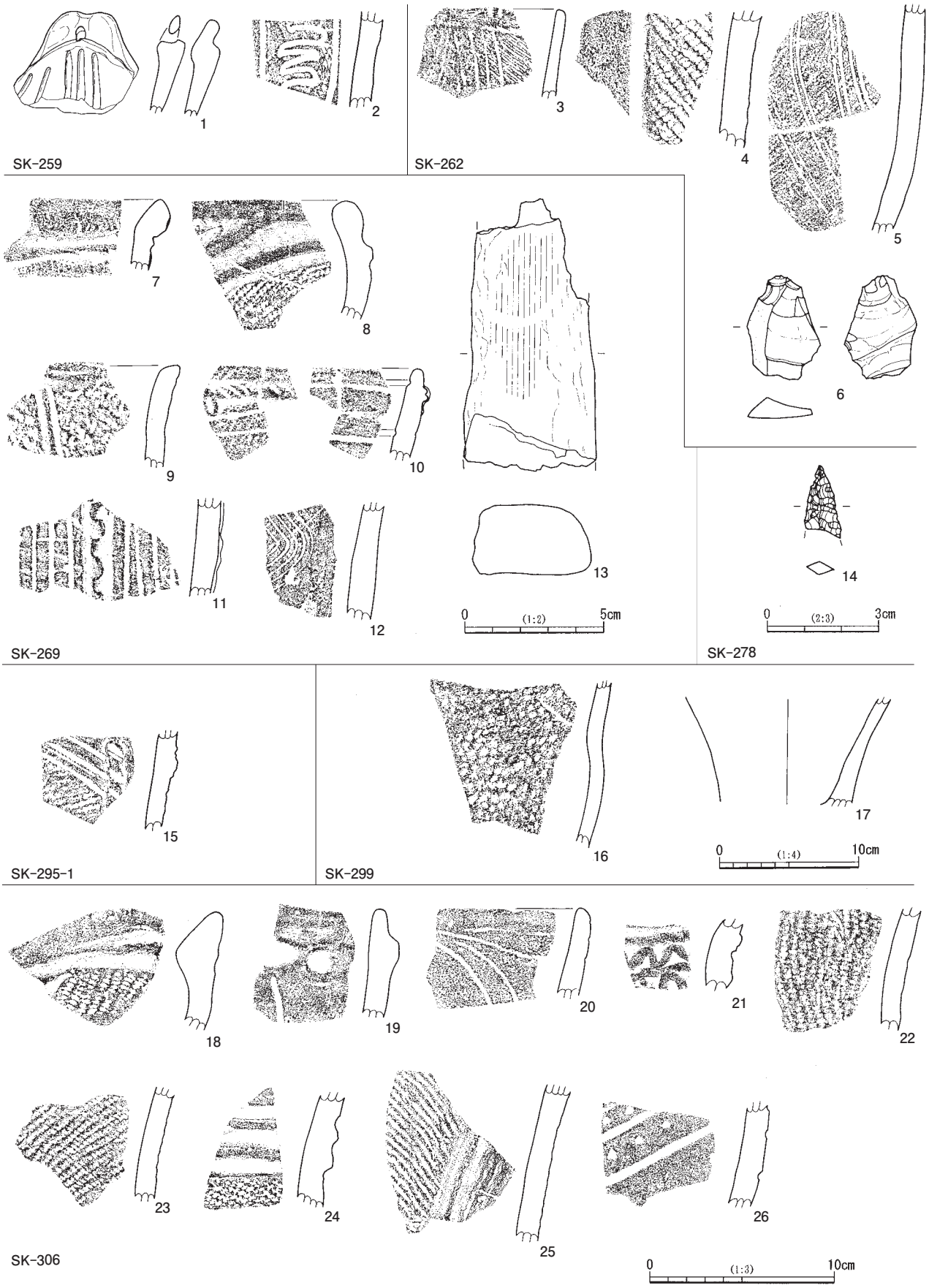
本跡は緩やかに立ち上がる楕円形に近い土坑であり、覆土上層から図示できた堀之内Ⅰ式の口縁部と胴部が各１点出土した。



第91図　SK-276・277・278・280-1・280-2・282-1・282-2・282-3・282-4・282-5・283・285・286・288・299



第92図　SK-289-1・289-2・295-1・295-2・295-3・300-1・300-2・304・306・309・312・313・314・319・321



第93図　SK-259・262・269・278・295・299・306出土遺物

１の口縁部は堀之内Ⅰ式の典型で、２の沈線間で左右に揺れる曲線はしばしばみられる文様である。

SK-262（第90・93図、図版51・72）

本跡にはピットが穿たれており、堆積土では確認できなかったが、Ｐ２は、土坑の重複とも考えられる。図示できる土器は３点出土している。

３は小型の深鉢で地文には細縄文を用いている。５も同様な縄文がみられ沈線による施文も共通するが器厚にかなりの差が認められる。時期的にはともに堀之内Ⅰ式となろう。４は磨消縄文と幅広の沈線が特徴的な加曽利ＥⅡ式からＥⅢ式にかけてのものであろう。器厚は13㎜と厚く内面の緩やかな弯曲からかなりの大型深鉢と考えられる。

６は自然面を残す剥片である。打点部では二次剥離、裏面ではバルブ部分を削除している。

SK-269（第90・93図、図版51・72）

本跡はおそらく２基の土坑が重複したものと思われるが堆積土からは確認できなかった。出土遺物には土器と石器がみられたが、決めてとなる遺物はみられず、土坑の時期については即断できない。

７は幅広の連続爪形文が口縁とその直下を横走する。文様から阿玉台Ⅲ式となろう。８の加曽利ＥⅡ式、11の曽利系の深鉢である。また９・12は堀之内Ⅰ式となり、10は裏面に細く深い沈線が２条みられる。堀之内Ⅱ式となる。

出土石器は両端が欠損しており断言することはできないが、石材と形状を考えると石棒とも考えられる。また表面は研磨したように滑らかであり砥石としても使用されていたようである。

SK-278（第91・93図、図版72）

本跡も重複したような形状である。出土遺物は若干の土器と石鏃であるが、土器は図示できるようなものはなかった。

石鏃は脚部が欠損するが表裏面はきれいに調整剥離が施され左右対称で精緻な作りとなっている。

SK-293（第98図、図版16・54・72）

本跡は６P-68グリッドを中心に長径4.85m、短径1.80mの巨大な落込みとして検出されたものである。その堆積土について観察すると、中心部に堆積していた層は褐色土であったが、しまりのない層で地山である粘土層等の混入も認められたため、後世のイモ穴かとも考えられた。このため遺構としての記載は省略した。ただ遺物は大型の土器片等多彩であったため図示することとした。

土器についてみると、１～４は中期に属するものである。１は阿玉台Ⅱ式で雲母を多量に含んでいる。２は加曽利ＥⅠ式の口縁部で、３は加曽利ＥⅡ式に属するものである。４は連弧文系となろう。５・15～17は堀之内Ⅰ式と思われる。17は把手部となろう。６～14はおおむね加曽利ＢⅠ式の範疇に入るものと思われる。６は口縁部が大きく開く浅鉢である。縄文帯は沈線により区画されたものである。７・８は６と同様の浅鉢であるが口縁部の作りに相違がみられる。14は大きく内彎する鉢形で沈線と「Ｓ」字状の縄文帯による文様構成となる。11は紐線文系の深鉢である。12･13は縄文のみの施文で内面には沈線が施される。

石器で図示できるものは８点を数える。器種は楔形石器が最多で４点、ほかはスクレイパー、石錐、剥片、敲石が各１点となる。18・19・23・24は楔形石器となる。18は板状の礫の一端を両面から剥離し楔としている。19は表皮部分の残る剥片に両面から剥離し刃部を作出している。23も扁平な礫を利用したものである。右からの剥離は整形のためのものであろう。24は両面から大きく剥離し斜行する刃部を作り出している。20は錐部が欠損したものと考えられる。周囲は簡単に加工して下部には予備となる錐先部分を残

しているようにも思われる。21は先端部分に両面加工が施されているため楔とも考えられるが、大きく剥離された裏面からスクレイパーとした。22は下端部に小さな剥離が認められる。掻器のように使われたものであろう。25は被熱した敲石である。欠損したものであり、表面にも若干打痕が認められる。

SK-295（第92・93図、図版52）

本跡は３基の土坑が接近して検出されたため枝番を付して記録した。図示した遺物はSK-295-1から出土した堀之内Ⅰ式の胴部片である。

縦位に粘土帯を添付し、その上を棒状工具で押捺している。

SK-299（第91・93図、図版52）

本跡は掘込みの浅い土坑である。図示できる２点の土器が出土している。

16は撚りの緩い不規則な縄文であり、加曽利B式にみられる粗製土器の特徴を残している。17は底部片で文様は認められない。時期的には後期に属するものである。

SK-306（第92・93図、図版52）

本跡の開口部はほぼ円形を呈しており、開口部からの深さも133㎝を計測する。この点、前述した小竪穴Ｃタイプとの類似点を見い出すこともできるが、出土遺物に共通性は認められない。

18は波状口縁となり、波頂部の作りに特徴がみられる。加曽利ＥⅢ式の深鉢である。24も同時期のものとなろう。19・20は口縁部の作りと沈線による文様は堀之内Ⅰ式となろう。21は粘土帯の貼付が特徴的である。こうした手法は加曽利ＥⅠ式にみられる。25はしっかりした隆帯から加曽利ＥⅣ式と思われる。26は沈線と刺突文の組み合わせから称名寺式となる。

SK-309（第92・94・95図、図版16・52・53・72）

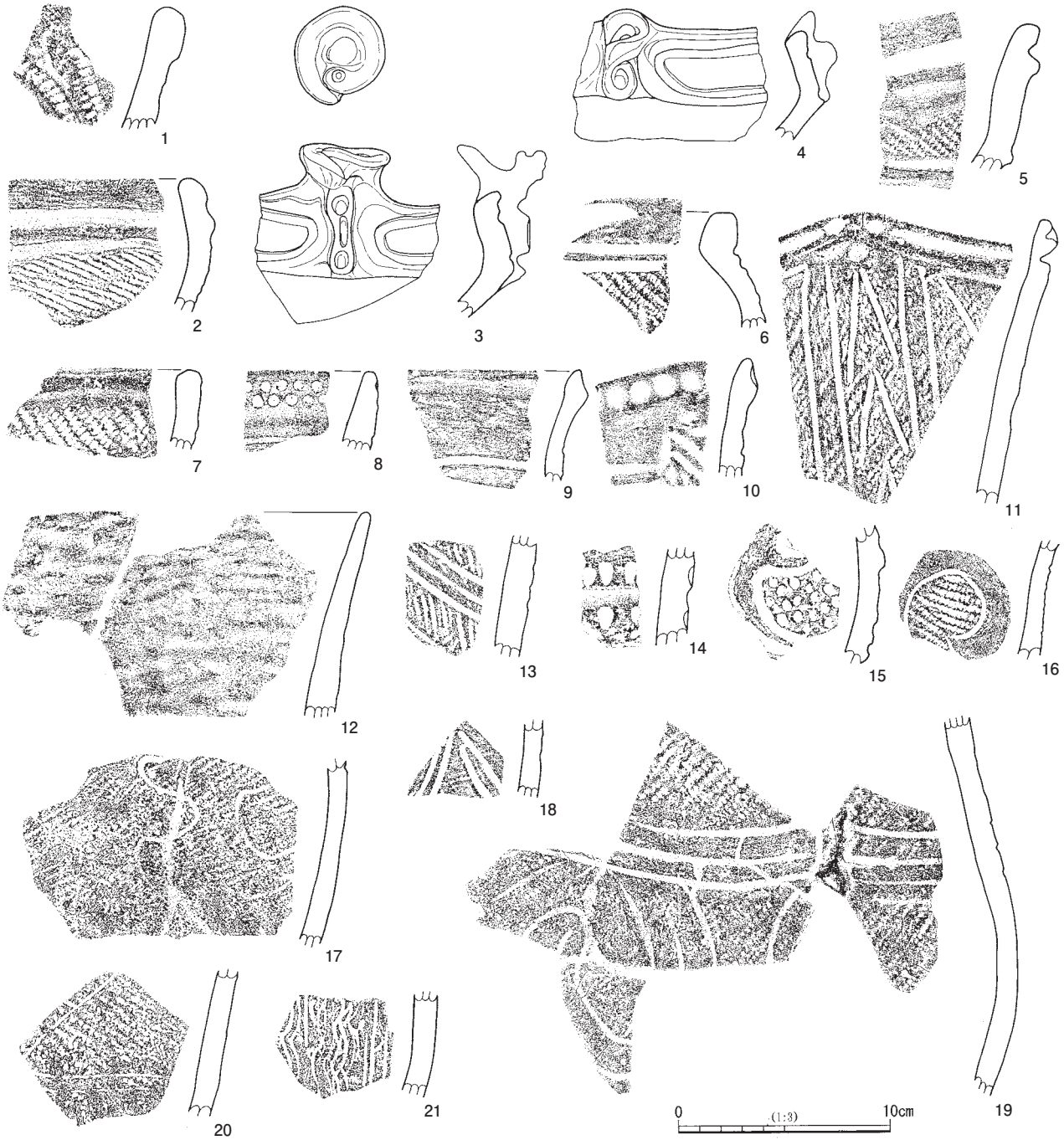
本跡もSK-306と同様に深い掘込みとなっている。出土遺物も豊富で一括土器はみられないものの堀之内Ⅰ式を主体とした中期の阿玉台式から堀之内Ⅰ式までが確認されている。一方、石器の出土量も多く、石鏃や打製石斧、砥石等が出土している。

１は隆帯間に幅広の押引文がみられる。阿玉台Ⅲ式になろう。胎土には雲母が若干混入する。２・５～８・13はおおむね加曽利EⅡ式からＥⅢ式に位置づけられよう。13には撚り糸の地文に連弧文の一部が認められる。15・16は沈線によって区画されており、称名寺式と思われる。そのほかは堀之内Ⅰ式と考えてよいであろう。３・４や９～11の口縁部は堀之内Ⅰ式の特徴をよく表現している。12は朝顔形に開く無文の鉢形土器である。

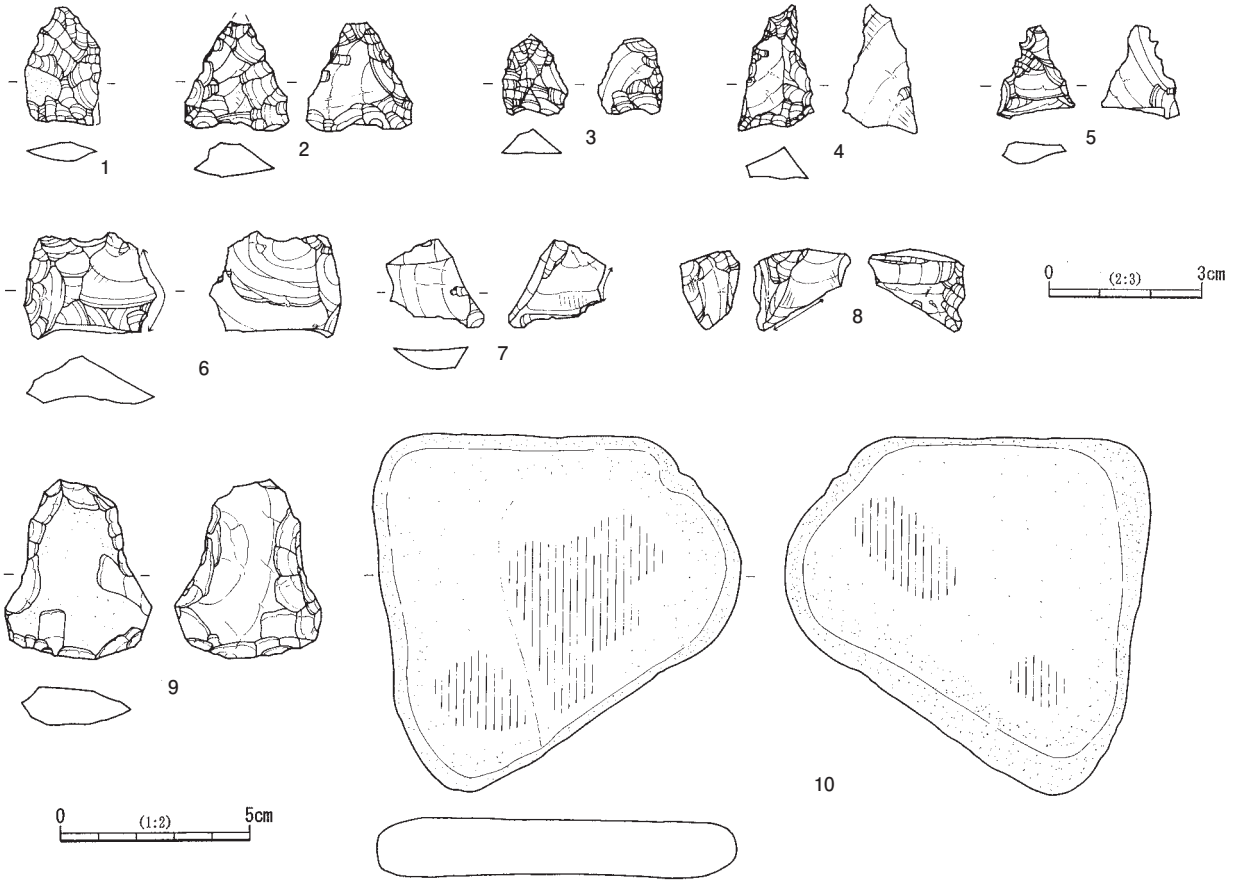
石器は10点を図示することができた。１は非対称の作りで自然面を残す。欠損部はみられないため成品となろうが、出来映えとしては良好とはいえまい。２は唯一チャート製である。先端部が欠損するものの、ほかと比較すると作りは丁寧といえよう。３は僅かに先端部を欠損する。使用によるものか、製作時のものか判別しにくく、裏面の整形も粗雑なものである。４は左右非対称であるが、これで完成品と思われる。裏面は主剥離面をそのまま残している。５は上下逆からみると有茎鏃の可能性も否定しきれない。６・７は剥片で共に使用痕が観察できる。８は残核となろう。９は小型の打製石斧である。表面では自然面がみられる。整形のための剥離は裏面でより丁寧になる。10は砥石である。斜線部分は滑らかで僅かに窪んでいる。

SK-314（第92・95図、図版53・72）

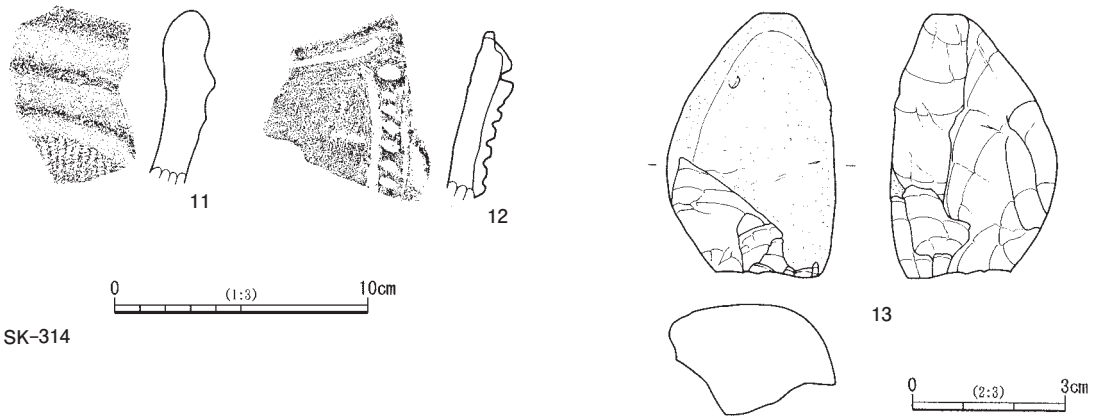
本跡は小型の土坑と重複したもので、若干の土器と石器が出土している。図示できるものは土器２点、石器１点となる。



第94図　SK-309出土土器



SK-309



SK-314

第95図　SK-309出土石器、SK-314出土遺物

11は大きな波状を呈する深鉢の口縁部となる。口縁部には丸味を帯びた隆帯が２条みられる。時期的には加曽利ＥⅢ式となろう。12も波状口縁の一部で波頂部下には押捺を加えられた粘土帯が垂下する。堀之内Ⅰ式に位置づけられる。

13は打割した礫の一方に再度剥離を施し刃部を作出している。刃部の整形は整ってはおらず、楔形石器の製作途上品とも思われる。

SK-033（第96・97図、図版14・53）

本跡は小規模な土坑であるが、大型の土器片が出土している。

１・２は同一個体で磨消縄文が特徴的である。また胎土には多くの雲母を混入している。１の弯曲する度合いから口辺部の径は65㎝前後と推測できた。時期は加曽利ＥⅡ式でも新しいものとなろう。

SK-074（第96・97図、図版14・40）

本跡は土器出土状態からみるといわゆる埋甕といえよう。胴上半部は失っているものの、意識的に設置したような状態で出土している。

器面は磨耗が著しく縄文はほとんど消滅した状態で一部に痕跡を残す程度であった。そのほかに数条の垂下する沈線を認められ、磨り消し部の幅が広いようである。底部も加曽利ＥⅡ式以降の作りであるためＥⅢ式とみなされる。

SK-076（第96・97図、図版15・53）

本跡はトレンチによる確認調査時にその一部を掘削したものである。

出土土器は底部に近い部分で上部には縄文施文が認められる。時期的には加曽利ＥⅡ式からＥⅢ式となろう。

SK-251（第96・97図、図版53）

本跡は柱穴状の深い掘込みに切られており、遺物は皿状の浅い掘り込みから出土したものである。

５は口縁部が大きく外反するタイプであり、胴部に向かって逆「く」の字状に屈曲する。８・９は胴部片で沈線による施文がみられる。いずれも堀之内Ⅰ式となる。６は大きな波状口縁の一部であり、内面には蓋受けと思われる張出部が存在する希有な例である。口辺部には低い隆帯により枠状の区画文がみられる。時期は加曽利ＥⅢ式となろう。７は６と同時期で磨消縄文を採用したものである。

SK-254（第96・97図、図版54）

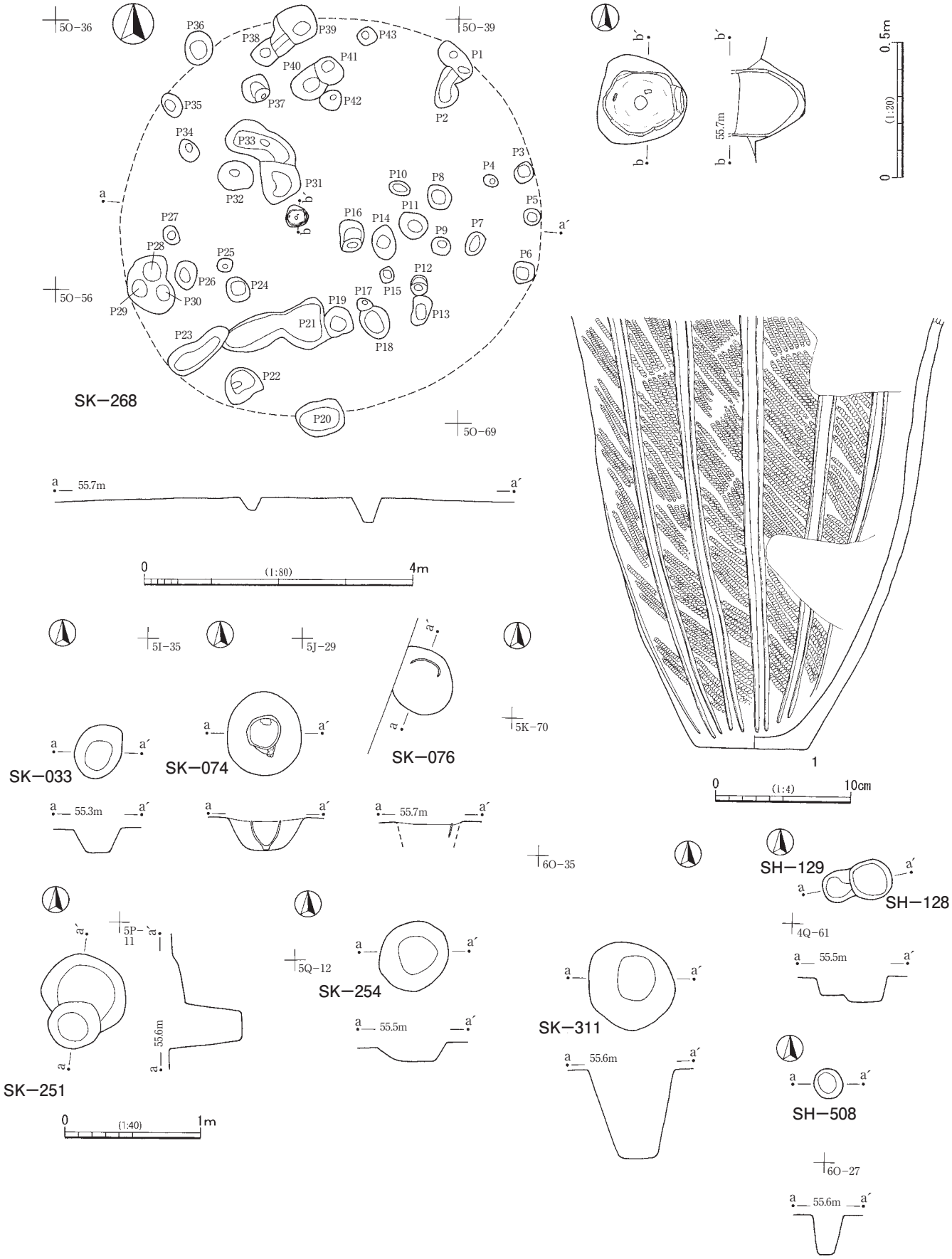
本跡は浅く小さな土坑であるが、器形を把握できる浅鉢が出土している。

10の遺存は約1/4となる。器面は無文でヘラによりきれいに整形されている。また内面でも調整痕が認められ仕上げは至って丁寧である。11は縄文地に横走する沈線で文様を描出したものであり、時期的には10も含めて加曽利ＢⅠ式となろう。

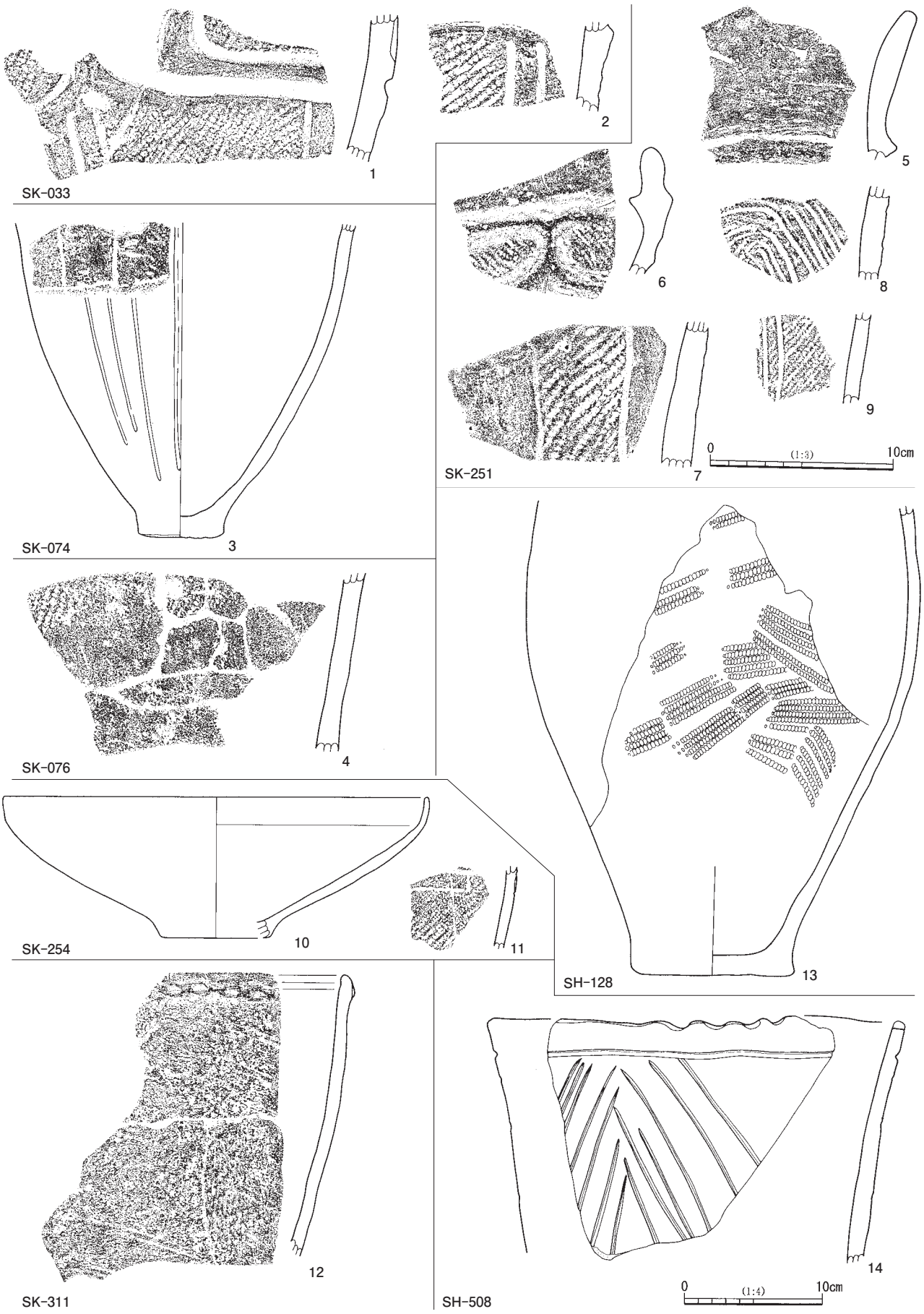
SK-268（第96図、図版16・41）

本跡周辺には柱穴跡を思わせるようなピットが多々みられたため住居跡の存在を予想してピットを含めた平面図を作成してみた。周辺でのピット数は40か所でみられ、深さでも30㎝以上を計測できたＰ４やそのほかのピットは十分柱穴としての機能を有するものであろう。しかし炉跡らしき痕跡や焼土等は検出されていないので、住居跡と断定することはできなかったため、土坑として取り扱った。遺物としては、口縁部の失われた深鉢が出土している。また、このような出土状況は埋甕と捉えられるものとなろうが、ほかに目に付くような遺物はみられなかった。

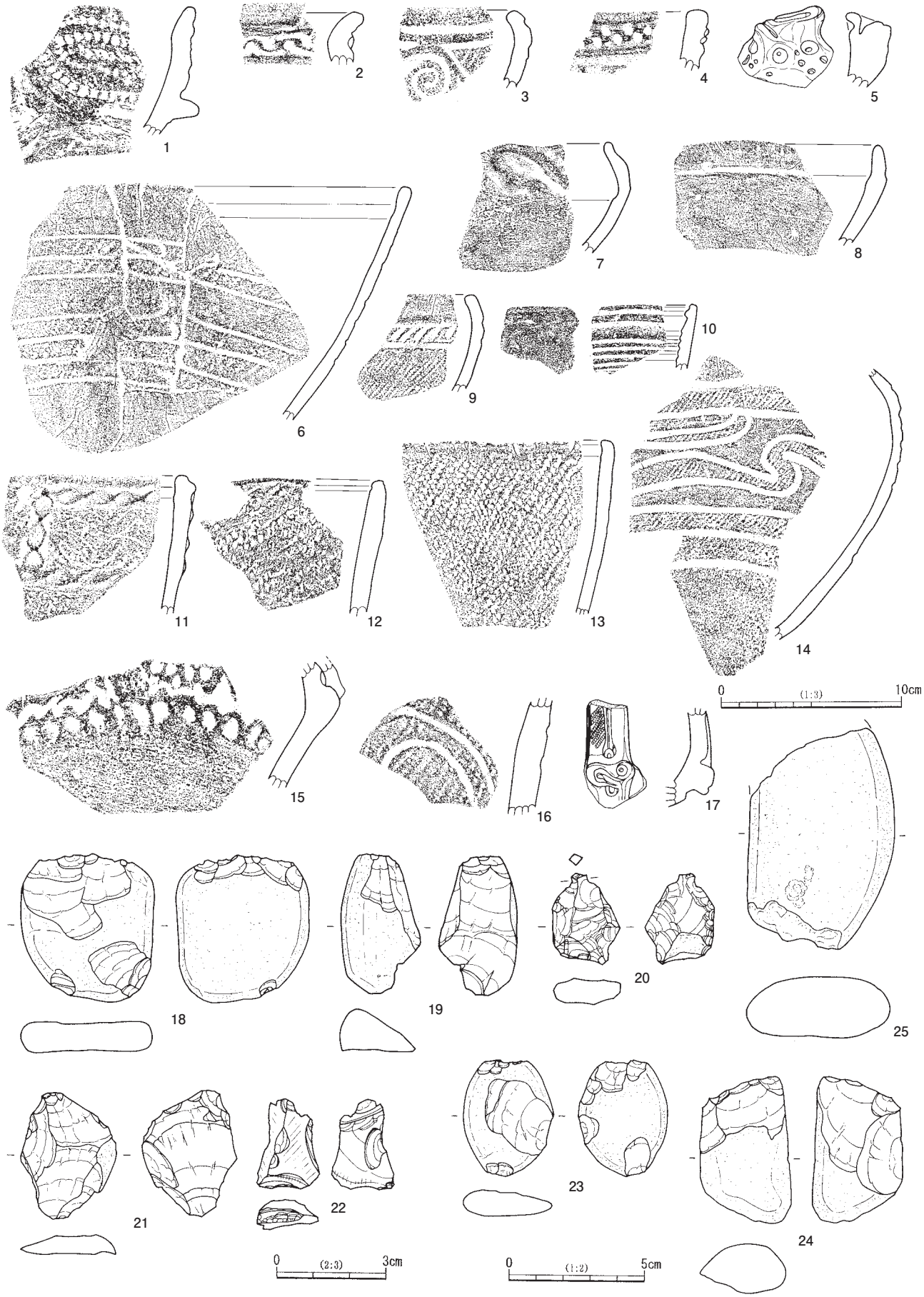
口縁部を欠損した深鉢は縄文を地文として沈線間に磨り消しがみられる。時期的には加曽利ＥⅡ式としてよいであろう。



第96図　SK-268・033・074・076・251・254・311、SH-128・129・508、SK-268出土土器



第97図　SK-033・074・076・251・254・311、SH-128・508出土土器



第98図　SK-293出土遺物

SK-268周辺ピット一覧表（数字は開口部からの深さ、単位＝cm）

P１－18	P２－７	P３－８	P４－47	P５－15	P６－14	P７－６	P８－13
P９－12	P10－15	P11－31	P12－30	P13－20	P14－14	P15－20	P16－９
P17－13	P18－22	P19－70	P20－12	P21－14	P22－28	P23－７	P24－12
P25－16	P26－34	P27－28	P28－45	P29－25	P30－25	P31－13	P32－20
P33－14	P34－40	P35－50	P36－15	P37－27	P38－13	P39－20	P40－24
P41－64	P42－45	P43－24					

SK-311（第96・97図、図版54）

本跡は円形の土坑で開口部から67cmと深く掘られていた。底面からの立ち上がりはSK-271やSK-306と類似点がみられる。遺物は加曽利Ｂ式の紐線文系の深鉢で口縁部から胴部にかけて約1/5が遺存したものである。

器面は磨耗が著しく地文の縄文は僅かにその痕跡を残すのみで、半截竹管状工具による斜行する沈線は漸く確認できる程度であった。

SK-128（第96・97図、図版41）

本跡は小規模であったため柱穴等に用いる遺構記号のSHを用いて遺構番号を付した。その一部はSH-129と重複する。

遺物はSK-311と同様に紐線文系の深鉢である。これも耕作によるものか胴上半部を失う状態で出土した。器面には撚りの粗い縄文が無雑作に施文されている。

SH-508（第96・97図、図版54）

柱穴状の本跡からは大型の口縁部が出土している。

口縁部の約1/4が遺存しており、推定口径は約28cmを計測する。口唇部の一部には指頭による押捺がみられ、その直下にははっきりとした沈線が横走する。胴部には斜行する沈線で山形文の文様が描かれている。時期は堀之内Ｉ式とみなされる。

第７表　久保堰ノ台遺跡２土坑計測表　（数値単位＝cm）

番号	遺構番号	位置	形　状	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備考（伴出土器）
1	SK- 002	5J- 41	円　形	50	49	20	0			加曽利EⅡ式
2	SK- 008	5I- 21	円　形	138	130	23	0			
3	SK- 013	5J- 52	円　形	134	107	14	0			
4	SK- 017	4I- 12	円　形	215	－	35	0			加曽利EⅡ式
5	SK- 018	5I- 13	楕円形	134	113	10	1	1	10	
6	SK- 019	5I- 14	楕円形	90	85	17	0			
7	SK- 021	5I-26	楕円形	83	57	25	0			
8	SK- 022-1	5I-26	不整楕円形	160	115	55	0			加曽利EⅡ式の一括土器３点
9	SK- 022-2	5I-26	隅丸方形	65	60	30	0			
10	SK- 024	5H-08	円　形	78	72	83	0			
11	SK- 028	5I-36	楕円形	62	56	48	0			
12	SK- 030	5I-36	円　形	58	55	30	0			
13	SK- 031	5I-35	楕円形	65	60	15	0			深掘りは後世のものか
14	SK- 032	5I-45	楕円形	71	56	49	0			
15	SK- 033	5I-34	楕円形	47	35	20	0			
16	SK- 035	5I-27	楕円形	84	65	49	0			

番号	遺構番号	位置	形　状	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備考（伴出土器）
17	SK- 038	5J-00	楕円形	55	45	45	0			
18	SK- 057	4J-97	円　形	69	61	59	0			
19	SK- 062	4J-75	円　形	53	50	25	0			
20	SK- 072	4I-76	円　形	110	107	29	0			SI-10と重複
21	SK- 079	5J-05	楕円形	80	70	40	0			
22	SK- 082	4J-96	円　形	90	90	45	0			
23	SK- 083	4J-96	円　形	82	75	28	0			
24	SK- 089	5J-55	楕円形	121	108	15	0			
25	SK- 102	5J-27	楕円形	75	57	30	0			
26	SK- 119	5I-38	楕円形	67	52	24	0			加曽利EⅣ式の一括土器２点
27	SK- 122	5K-30	不整楕円形	156	100	31	0			
28	SK- 123	5K-12	円　形	87	85	18	0			
29	SK- 125	4K-91	円　形	73	70	21	0			
30	SK- 126	4K-81	楕円形	105	95	21	0			称名寺式
31	SK- 127	4J-24	長楕円形	－	102	68	0			未掘部あり
32	SK- 128	4K-60	不整形	116	105	15	0			
33	SK- 129	4J- 30	不整楕円形	123	83	19	1	1	10	
34	SK- 131	4K-56	隅丸方形	112	106	55	0			
35	SK- 133	4K-50	楕円形	61	32	42	0			
36	SK- 134	4K-36	隅丸方形	102	85	40	0			
37	SK- 200	5O-14	不整形	121	52	20	0			２基の重複か
38	SK- 201	4P-38	楕円形	64	60	45	0			
39	SK- 203	4Q-32	不整形	100	77	16	0			
40	SK- 204	4Q-42	不整形	125	73	10	0			
41	SK- 206-1	4Q-54	楕円形	84	61	18	0			
42	SK- 206-2	4Q-34	楕円形	78	56	15	0			
43	SK- 207	4Q-25	－	－	－	－	0			1/2程度の調査
44	SK- 208	4Q-56	円　形	63	54	27	0			ピットと重複
45	SK- 209-1	4R- 42	楕円形	135	108	24	1	1	16	
46	SK- 209-2	4R- 41	楕円形	73	50	20	0			
47	SK- 211	4R-34	楕円形	－	－	20	1	1	13	1/2程度の調査
48	SK- 212-1	4R-46	不整形	163	105	15	0			２基の重複か
49	SK- 212-2	4R-36	楕円形	72	60	10	0			
50	SK- 212-3	4R-36	楕円形	96	80	80	0			
51	SK- 219	4R- 37	不整楕円形	113	104	25	0			
52	SK- 223-1	4R-32	円　形	55	53	20	1	1	－	
53	SK- 223-2	4R-21	楕円形	60	48	18	0			
54	SK- 229	4P-91	不整形	107	70	14	1	1	6	
55	SK- 237	4P-85	楕円形	65	55	28	0			
56	SK- 242	5P- 10	不整楕円形	191	117	45	1	1	5	
57	SK- 244	4Q-63	不整形	67	60	24	0			
58	SK- 246	4Q-73	不整形	75	70	18	0			ピットと重複か
59	SK- 247	4Q-87	不整楕円形	64	60	30	0			
60	SK- 248	5P-54	楕円形	76	63	60	0			一括土器、浅いピットと重複
61	SK- 249	5O-09	楕円形	75	56	69	0			
62	SK- 250	5D-07	円　形	37	35	12	0			SI-025参照
63	SK- 252	5P-27	不整楕円形	140	76	13	2	1 2	12 9	
64	SK- 255	5Q-04	不整形	83	50	15	2	1 2	3 18	
65	SK- 256	5Q-25	円　形	70	69	40	0			
66	SK- 257	5Q-15	円　形	93	85	57	0			
67	SK- 258	5Q-25	円　形	64	61	24	0			
68	SK- 259	5Q-06	不整楕円形	200	107	40	1	1	3	

番号	遺構番号	位置	形　状	長径	短径	深さ	ピット数	P番号	深さ	備考（伴出土器）
69	SK- 262	4Q-73	楕円形	87	68	25	1	1	4	
70	SK- 266	5O-76	不整楕円形	116	65	7	1	1	33	
71	SK- 268	5O-47	円　形	37	35	12	0			加曽利EⅡ式
72	SK- 269	5P-62	楕円形	－	61	10	1	1	70	ピットと重複か
73	SK- 270	5P-43	不整楕円形	68	52	20	0			
74	SK- 271	5P-43	楕円形	77	65	89	0			
75	SK- 273-1	5P-55	楕円形	100	80	100	0			
76	SK- 273-2	5P-45	楕円形	71	65	9	0			
77	SK- 273-3	5P-45	楕円形	82	55	10	0			
78	SK- 276	5P-57	不整形	88	88	18	1	1	10	
79	SK- 277	5P- 58	円　形	65	59	75	0			
80	SK- 278	5P- 48	円　形	66	62	21	0			２基の重複
81	SK- 280-1	5Q-65	不整円形	110	110	40	0			
82	SK- 280-2	5Q-56	不整楕円形	116	71	8	0			
83	SK- 282-1	5R-52	長楕円形	75	40	12	0			
84	SK- 282-2	5R-52	円形	50	48	39	0			
85	SK- 282-3	5R-41	楕円形	80	66	26	0			
86	SK- 282-4	5R-42	楕円形	71	58	42	0			
87	SK- 282-5	5R-42	円　形	54	50	31	0			
88	SK- 283	5R-78	楕円形	119	100	13	0			
89	SK- 285	5O-98	楕円形	69	62	56	0			
90	SK- 286	5P-74	円　形	58	57	67	0			
91	SK- 288	5Q-78	楕円形	72	51	37	0			
92	SK- 289-1	6Q- 09	不整楕円形	140	120	23	0			
93	SK- 289-2	6Q-09	楕円形	110	－	24	0			
94	SK- 295-1	6P-64	円　形	61	59	27	0			
95	SK- 295-2	6P-64	楕円形	67	49	37	0			
96	SK- 295-3	6P-73	楕円形	70	53	20	0			
97	SK- 299	6Q-72	楕円形	81	72	22	0			
98	SK- 300-1	6Q-62	楕円形	93	60	15	0			
99	SK- 300-2	6Q-62	楕円形	75	45	15	1	1	13	
100	SK- 304	5O-71	楕円形	86	70	19	0			
101	SH- 447	5O-71	楕円形	75	60	14	0			SHで記録
102	SK- 306	5O-93	円　形	116	110	133	0			
103	SK- 309	6O-39	円　形	100	83	108	0			
104	SK- 312	6O-17	円　形	72 45	66 44	18 30				２基の重複
105	SK- 313	6O-27	円　形	60	60	50	0			
106	SK- 314	6O-27	楕円形	78	60	43	0			ピットと重複
107	SK- 319	6Q-32	楕円形	112	81	20	0			
108	SK- 321	6Q-33	楕円形	104	95	19	0			
109	SK- 033	5I-25	楕円形	43	33	19	0			破片のみの出土
110	SK- 074	5J-28	円　形	62	55	24	0			SI-017の西
111	SK- 076	5J-79	楕円形	－	46	－	0			SI-015と一部重複、その一部か
112	SK- 251	5P-10	円　形	63 38	－ 36	11 53	0			破片のみの出土
113	SK- 254	5Q-02	円　形	53	48	14	0			
114	SK- 311	6O-35	円　形	67	61	67	0			
115	SH- 128	4Q-51	円　形	31	30	19	0			
116	SH- 129	4Q-51	楕円形	23	－	14	0			
117	SH- 508	6O-17	円　形	23	21	30	0			周辺にピット多数、柱穴か

第４節　溝状遺構

本遺跡では４H区を中心とし調査区西部分（SD-001～003）とＰ・Ｑ区（SD-004～007）において溝状遺構が検出されている。規模的には後者のほうが大きく、結果的には調査区を縦断するような形で設置されていたようである。時期については出土遺物から16世紀後半の磁器も出土しており、一概には断定できないが18世紀前後に掘削された溝と考えられる。遺物については遺構ごとにまとめてみたが、陶磁器類については遺構外出土品も含めてここで一括して記載することした。

SD-001（第22図）

本跡は調査区の西側にあたる３H区において検出された溝で、その大半は調査区外に延びていたため一部の調査で終了した。溝は東西に走っており地山部分から計測すると、幅が約70㎝、深さ10㎝前後の規模であった。むろん深さや幅については掘削当時よりもだいぶ縮小しているものと考えてよいであろう。遺物はほとんどみられなかった。

SD-002（第22・99・100図、図版55・73）

本跡は４H区から５H区に延びており南北方向に走っていたようである。だが、SD-001と同様調査区外となるため一部の調査となった。規模に付いてみると、幅が約1.5m、深さは20㎝～25㎝となる。

遺物　出土量は少なく図示できたものは計５点となった。

１は磨消縄文のみられる胴部片で、２とともに加曽利ＥⅡ式であろう。３は細沈線が横方向にみられる。おそらく堀之内Ⅰ式であろう。

石器は打製石斧が２点出土している。２は頭部が若干欠損している。表裏に自然面が認められることから薄く扁平な礫を素材にしたものであろう。３は剥片を利用したもので刃部と左側縁を簡単に整形して石斧としている。

SD-003（第22・100図、図版73）

本跡は４H区で検出されたものであるがSD-002とほぼ直線的な位置にある。このことから本来は１条の溝として存在していたとも考えられる。規模についてみると、長さ8.5m、幅45㎝～55㎝、深さは20㎝前後を計測する。なお、本跡の西に位置する小規模な溝は長さ4.5m、幅25㎝、深さは７㎝～８㎝と浅い。遺物も出土しなかったため遺構番号は省略した。

遺物　ここで図示できる遺物は石鏃１点のみである。作りは粗雑で左右は非対称である。

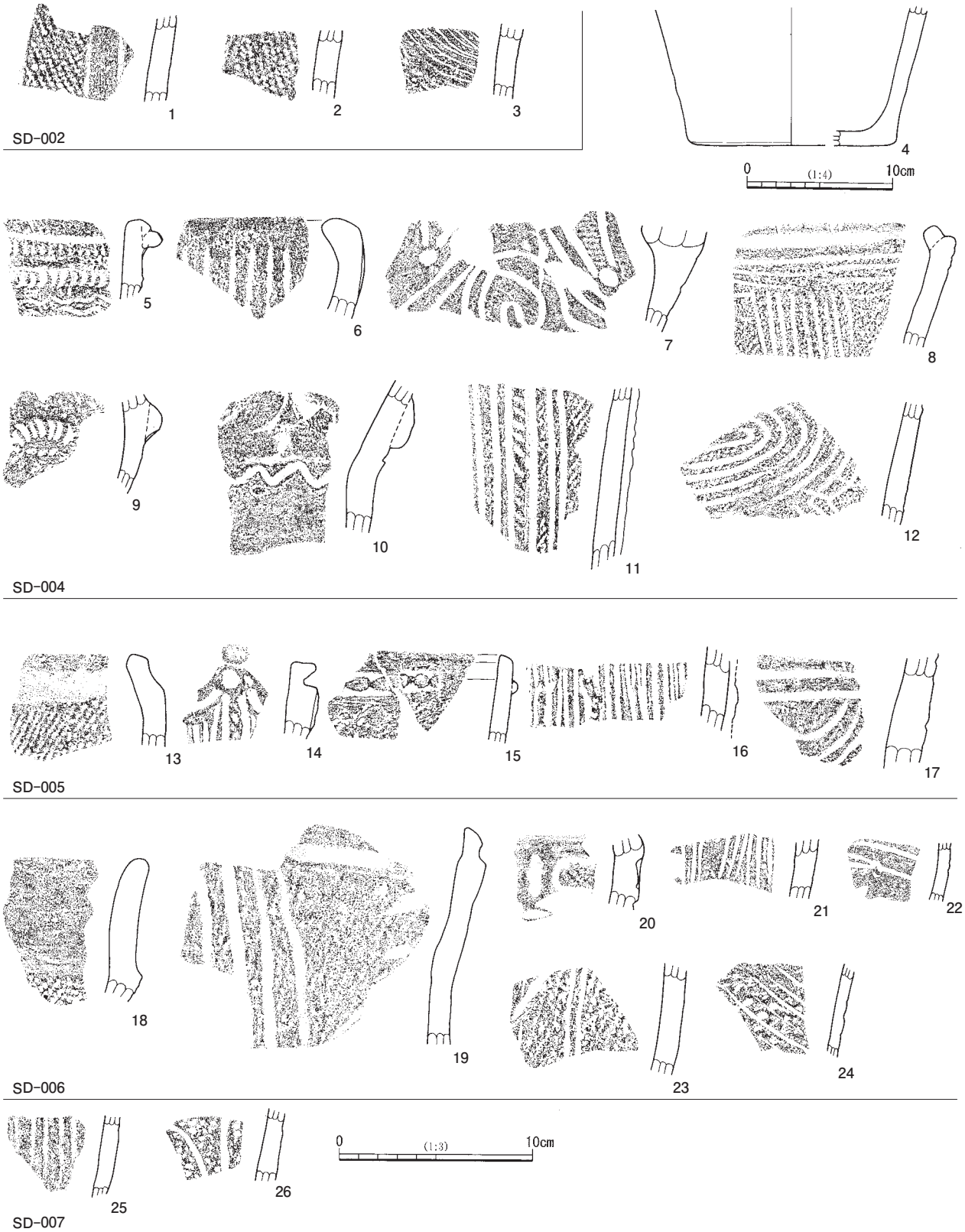
SD-004（第23・99～101図、図版41・55・73）

本跡は遺跡を縦断するように掘削された溝のSD-006から分岐し、さらに北へ向かう溝をSD-004とした。規模についてみると、現存する長さは約13.5m、幅100㎝～120㎝、深さは25㎝～30㎝を計測する。

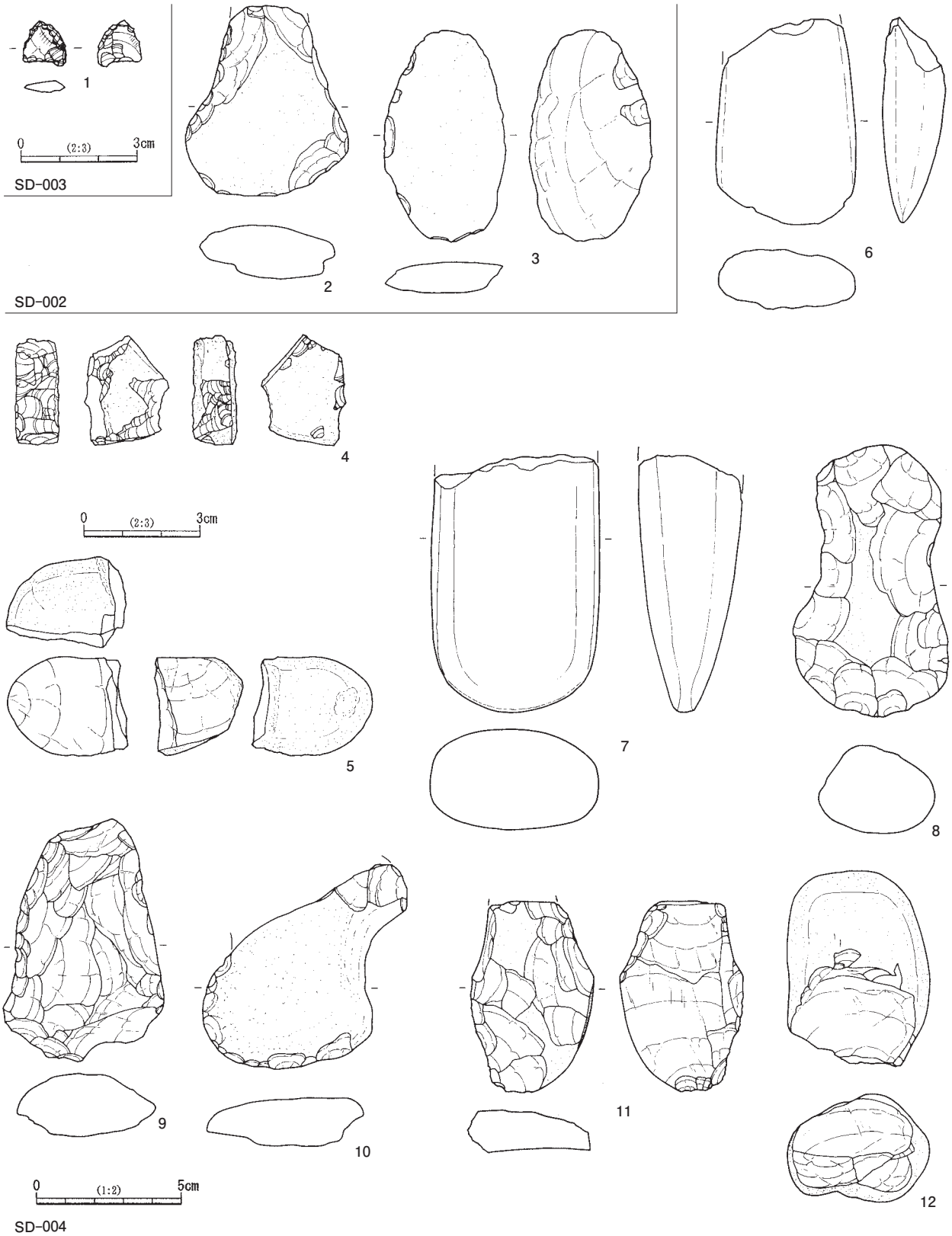
遺物　土器は中期から後期にかけて出土している。石器では削器や磨製石斧･ 打製石斧・石核などが出土している。図示できた石器は20点と多い。

５・９・10は幅広の押引文がみられるところから、阿玉台式でも新しいタイプとなろう。６は口唇部の作りから曽利系である。７は明確な沈線と刺突文・縄文とで文様が構成されている。５・８・９は口縁部の作りや垂下する粘土紐からともに堀之内Ⅰ式である。また、４は後期の底部と考えられる。

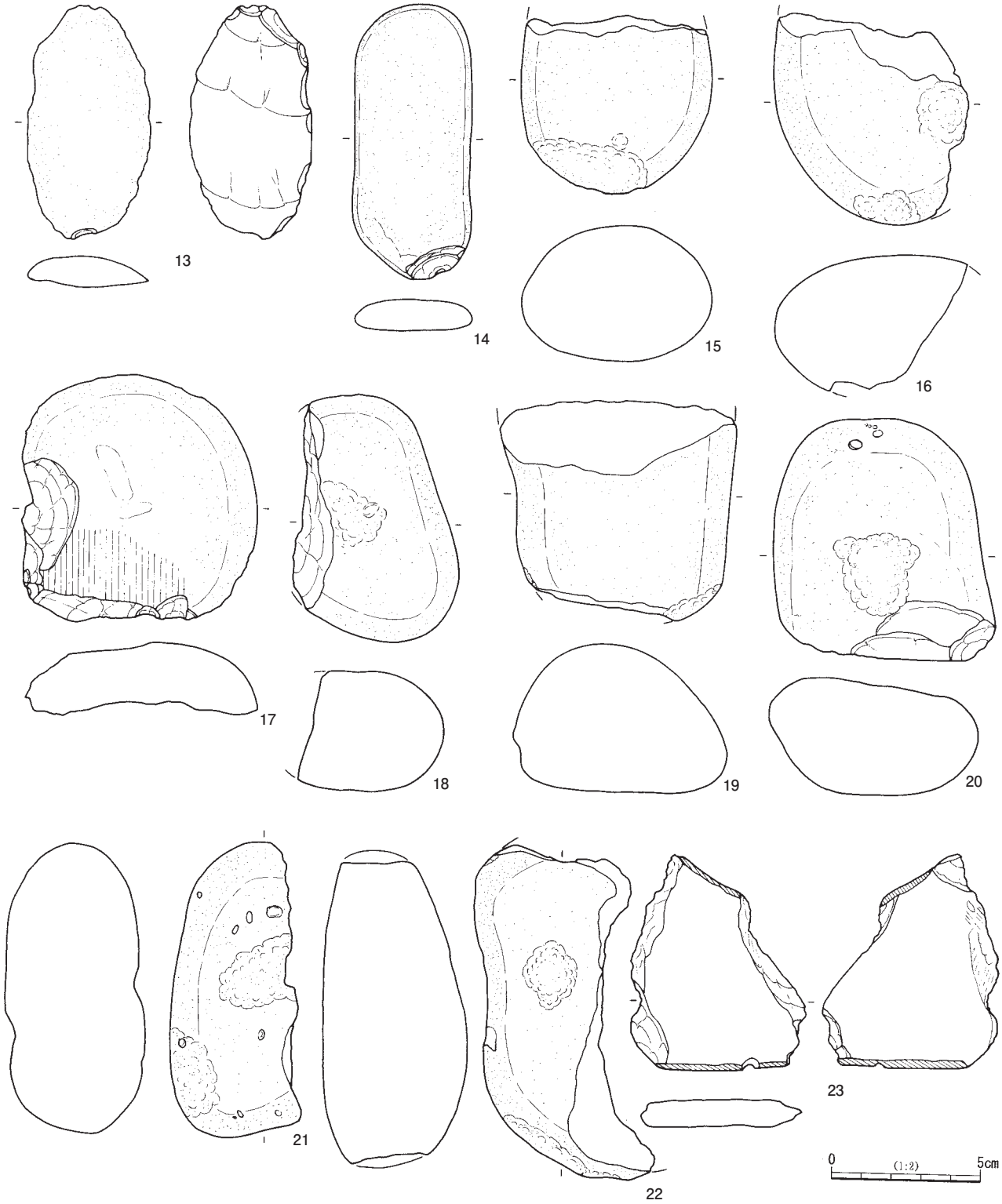
石器では第100図の４は、板状の黒曜石の右側面を弯曲に加工している。加工部分を削器のように使用したものであろう。５には打痕がみられるため敲石として使用していたものであり、次に平坦面を打面として剥片剥取を試みている。６・７は磨製石斧でいずれも頭部を欠損する。７は刃部が磨耗しているため



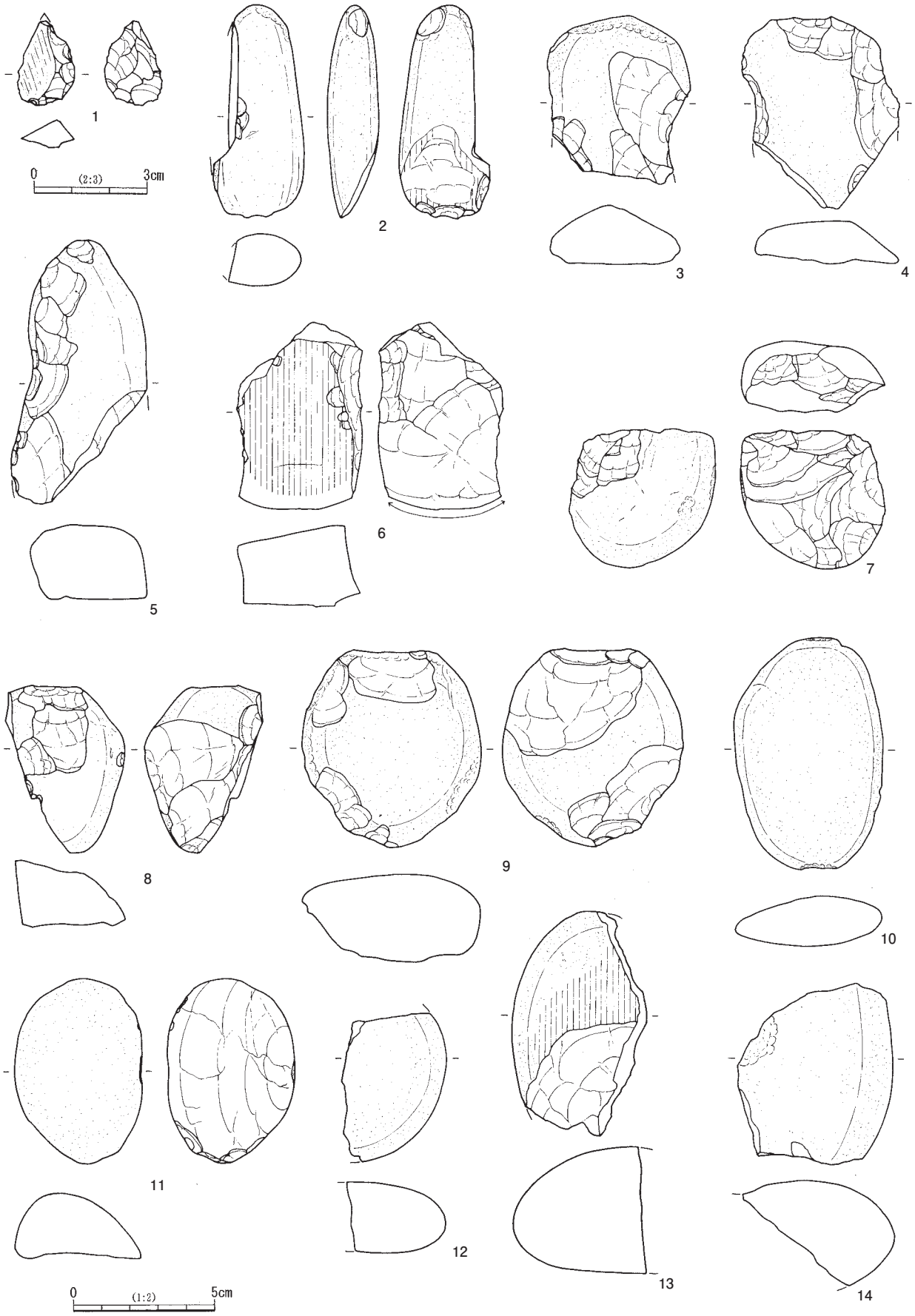
第99図　SD-002・004・005・006・007出土土器



第100図　SD-002・003出土石器、SD-004出土石器(1)



第101図　SD-004出土石器(2)



第102図　SD-005出土石器(1)

敲石として再利用されたものである。８～11は打製石斧で、10は典型的な分銅タイプである。11は頭部が欠損しており、側面での整形が認められるため打製石斧とした。13は頭部に整形のための剥離がみられる。14は下部に剥離痕を残す。打製石斧の未成品と思われる。12・17は礫器となろう。12は大きな剥離で刃部を作出していたものであろう。17は磨石として使われていたことが、滑らかな表面の状態から窺われる。15・16は敲石兼用の磨石である。18～22は敲石で、すべて破損品である。23は板状の緑泥片岩を利用したもので、下部には研磨が施されている。しかも切り込みの痕跡があるため石錘と考えた。

SD-005（第23・99・102・103図、図版55・74）

本跡はSD-004の分岐点と同一地点から東へと向かう溝である。規模は約25mまで確認でき調査区外へとなる。幅は45㎝～50㎝でほぼ一定の広さとなっている。深さは15㎝前後と浅い。

遺物　土器で図示できるものは少なかったが、石器はSD-004と同様に豊富な出土量を示す。

13は口縁直下に浅い沈線を施し、以下は縄文となる。このタイプは加曽利ＥⅢ式からＥⅣ式にかけてみられる土器群である。14は波頂部の特徴から堀之内Ⅰ式となろう。17も同時期の胴部片である。15は加曽利B式の紐線文系深鉢で内面の沈線は極めて浅い。16は粘土帯の貼付と縦方向の条線から曽利系の胴部片となろう。

第102図の１は節理面を多く残す石鏃である。裏面の調整も簡素な作りとなっている。２は磨製石斧の破損品である。刃部を整形し打製石斧として使用したものであろう。３～５は打製石斧の破損したものであり、６は破損した磨石の一部を打製石斧のように使用したものと考えられる。７は残核となろう。チャートの礫を打割し平坦な面を打面としている。８・９は楔形石器として分類できよう。８は製作途中ので廃棄されたものと思われる。９も上部と左側面下部において表裏両面からの剥離が認められる。10は敲石で下端に打痕の痕跡がみられる。11～14は磨石の破損品で、11には右側縁に使用痕が観察できる。15は石皿の一部である。

SD-006（第23・99・103図、図版55・74）

本跡は６Ｑ区から台地中央部へと向かい、４Ｐ区でSD-004とSD-005と交わる。この交点は台地部から下るように流れでた水流の合流点とも考えられる。検出された７条の溝のうち本跡が最大となる。規模は長さ約44m、幅は1.8m～２m、深さは23㎝～25㎝を計測する。

遺物　土器は文様の鮮明なもの７点を図示した。また石器については６点図示することができた。

18は口縁部片で有段を形成する。屈折部以下では縄文施文となる。時期的には加曽利ＥⅣ式に位置づけられよう。19は地文の縄文と太い沈線で文様が構成されている。口縁部の作りから堀之内Ⅰ式となろう。20は楕円状の枠で区画されている。21・23も同時期とみなされる。22は精製土器の胴部片で沈線のみがみられる。時期的には新しくなるものと思われる。24は撚りの粗い縄文と斜行する沈線で文様を構成する。加曽利Ｂ式の粗製土器の一部であろう。

第103図の16は石鏃であるが、成品か未成品か判別し難い作りといえる。本遺跡では他の遺構でも出土している。17は表裏面に剥離がみられる。おそらく楔形石器の製作を意図したものであろう。18～20は打製石斧でいずれも欠損品である。21は下部に顕著な打痕が観察できる。磨石兼用の敲石とは使用目的が異なるものと思われる。

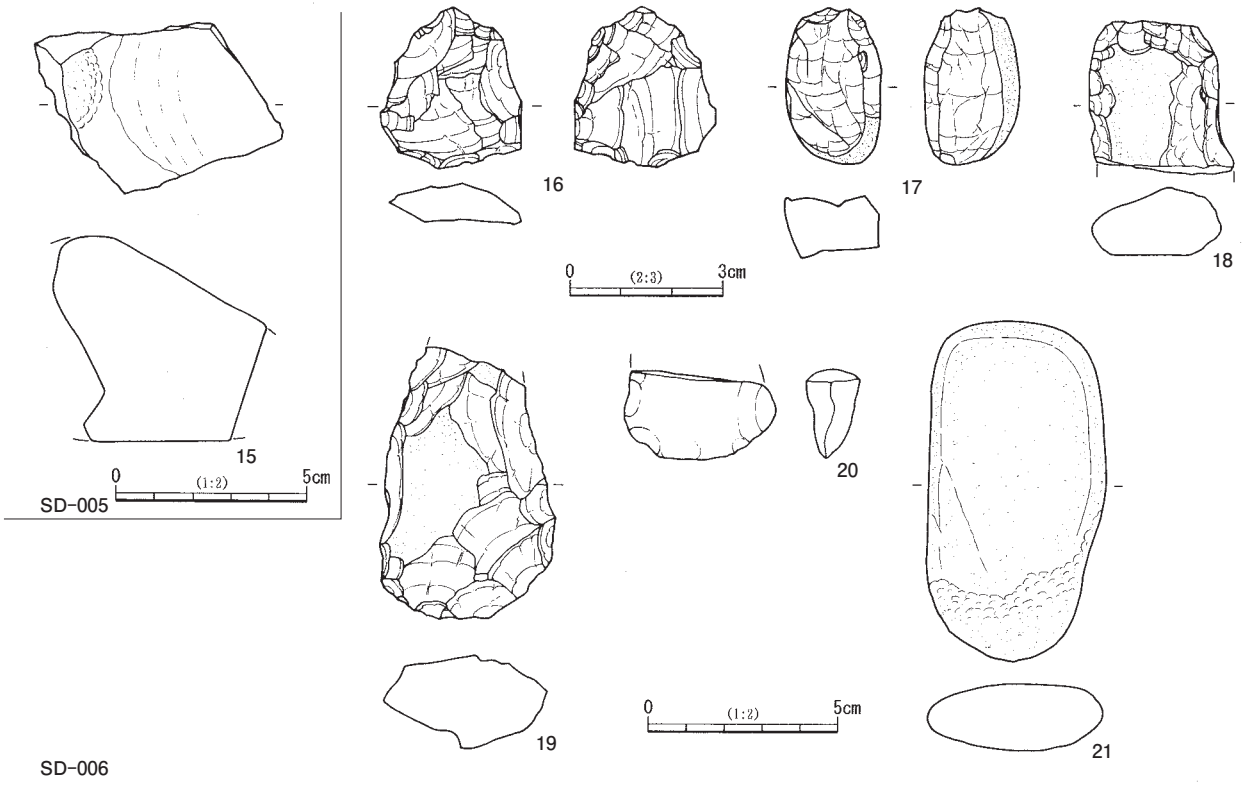
SD-007（第23・99図、図版55）

本跡は６Ｑ区で検出された小規模な溝で、SD-006に平行して位置する。その長さは10.5m、幅30㎝、

深さ10cm前後を計測し、単独で位置しているようである。

遺物　土器が数点出土したのみである。

25は縦方向に沈線がみられ、26は縄文地に沈線による曲線が描かれている。時期的には堀之内Ⅰ式あたりのものであろう。



第103図　SD-005出土石器(2)、SD-006出土石器

第８表　久保堰ノ台遺跡２出土石器一覧表

挿図No.	出土地点	遺物番号	器　種	石　材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	備　考
第27図1	SI002	127	尖頭器	メノウ	34.60	15.27	6.44	3.3	
第27図2	SI002	122	石鏃	黒曜石	(15.28)	(11.73)	3.76	(0.6)	
第27図3	SI002	120	石鏃	チャート	20.99	(22.87)	4.66	(2.6)	
第27図4	SI002	118	楔形石器	チャート	(44.35)	(29.13)	(16.84)	(26.9)	
第27図5	SI002	120	剥片	チャート	(34.08)	(38.56)	(6.08)	(9.0)	
第27図6	SI002	22	磨製石斧	安山岩	49.93	30.12	11.06	21.8	
第27図7	SI002	32	打製石斧	安山岩	(84.82)	46.22	23.81	(129.9)	
第27図8	SI002	58	打製石斧	安山岩	(74.64)	52.21	(19.62)	(54.4)	
第27図9	SI002	109	打製石斧	変質ドレライト（被熱）	(85.09)	(72.77)	21.72	(197.0)	
第27図10	SI002	46	敲石	砂岩	(64.66)	54.83	26.36	(123.5)	
第27図11	SI002	146	磨(敲)石	石英斑岩（被熱）	(123.28)	70.00	47.75	(584.6)	
第27図12	SI002	27	磨石	石英斑岩	(61.46)	69.70	41.01	(250.2)	
第27図13	SI002	33	磨石	砂岩	(51.05)	52.84	19.63	(62.5)	
第27図14	SI002	123	敲石	砂岩	92.24	67.05	51.21	363.2	
第27図15	SI002	138・139	敲石	砂岩　（被熱）	(65.27)	87.57	56.89	(483.0)	
第27図16	SI002	26	敲石	砂岩	50.42	64.57	14.77	75.5	
第28図17	SI002	145	敲石	砂岩（被熱）	(147.05)	187.10	156.20	(4750.0)	
第28図18	SI002	67・144	磨石	石英斑岩	172.45	108.25	64.46	1723.0	
第28図19	SI002	141	敲石	石英斑岩	(106.30)	109.70	101.73	(1260.0)	
第28図20	SI002	143	石皿	多孔質安山岩	163.50	(106.77)	67.99	(1250.0)	(SI014-4と接合)
第29図10	SI003	8	石鏃	黒曜石	21.66	(15.50)	3.15	(0.6)	
第29図11	SI003	7	スクレイパー	細粒凝灰岩	36.32	42.42	10.29	17.1	
第29図12	SI003	20	打製石斧	砂岩	(59.31)	45.07	14.97	(51.7)	
第29図13	SI003	17	磨石	多孔質安山岩	133.60	84.29	40.06	644.2	
第32図1	SI004	15	石鏃	チャート	23.67	14.63	4.98	1.8	
第32図2	SI004	95	石鏃	チャート	13.24	16.49	2.40	0.38	
第32図3	SI004	17	石鏃	チャート	24.58	(18.54)	3.07	(1.0)	
第32図4	SI004	137	石鏃	チャート	21.79	(15.64)	5.83	(1.6)	
第32図5	SI004	23	石鏃	黒曜石	(14.46)	6.95	4.10	(0.4)	
第32図6	SI004	124	楔形石器	チャート	32.13	16.14	9.22	4.5	
第32図7	SI004	16	楔形石器	チャート	31.83	15.95	4.92	3.2	
第32図8	SI004	112	楔形石器	チャート	28.30	17.52	5.57	2.6	
第32図9	SI004	17	剥片	チャート	31.09	(14.02)	5.18	(2.4)	
第32図10	SI004	116	剥片	チャート	42.42	25.05	8.78	7.7	
第32図11	SI004	116	剥片	チャート	30.44	42.47	8.10	6.4	
第32図12	SI004	116	剥片	チャート	49.73	33.01	12.18	24.8	
第32図13	SI004	4	磨製石斧	砂岩	(72.40)	48.78	24.19	(151.1)	
第32図14	SI004	142	打製石斧	ホルンフェルス	91.60	56.66	28.00	189.6	
第32図15	SI004	65	打製石斧	砂岩	65.25	43.07	19.77	64.8	
第32図16	SI004	14	打製石斧	ホルンフェルス	(80.09)	42.23	21.45	(68.7)	
第32図17	SI004	1	打製石斧	石英斑岩	(56.82)	(53.60)	33.45	(124.4)	
第32図18	SI004	96	磨石	石英斑岩	86.74	71.78	45.71	353.7	
第32図19	SI004	93	磨石	安山岩	79.89	62.76	36.23	229.8	
第32図20	SI004	134	磨石	砂岩	(62.95)	(26.07)	(46.80)	(110.0)	
第33図21	SI004	115	磨石	石英斑岩	120.34	72.10	(41.86)	(540.0)	
第33図22	SI004	145	台石	砂質凝灰岩	(79.33)	(143.51)	28.83	(368.6)	
第33図23	SI004	24	台石	砂岩　（被熱）	(126.08)	(110.39)	57.55	(930.0)	
第38図1	SI005	42	石鏃	チャート（被熱）	24.73	17.43	5.48	1.6	
第38図2	SI005	62	石鏃	チャート	16.58	14.61	4.07	0.66	
第38図3	SI005	24	石鏃	黒曜石	(11.99)	11.74	2.53	(0.31)	
第38図4	SI005	136	石鏃	メノウ	12.43	8.66	2.16	0.17	
第38図5	SI005	74	石鏃	黒曜石	(15.79)	16.21	3.82	(0.7)	
第38図6	SI005	110	石鏃	チャート	(15.73)	15.48	2.96	(0.7)	
第38図7	SI005	86	石鏃	黒曜石	(15.34)	(10.97)	2.76	(0.3)	
第38図8	SI005	86	石鏃	黒曜石	(14.03)	(12.86)	7.12	(0.5)	
第38図9	SI005	158	石鏃	黒曜石	(13.91)	(11.81)	3.63	(0.5)	
第38図10	SI005	108	石鏃	黒曜石	(9.53)	7.50	1.52	(0.3)	
第38図11	SI005	108	石鏃	チャート	(16.95)	7.47	2.44	(0.12)	
第38図12	SI005	86	石鏃	チャート	28.02	(11.71)	5.35	(1.5)	未成の破損品
第38図13	SI005	86	楔形石器	黒曜石	21.25	15.38	6.90	2.1	
第38図14	SI005	149	剥片	黒曜石	26.24	11.24	5.42	0.9	
第38図15	SI005	47	剥片	黒曜石	20.37	26.96	4.36	2.3	
第38図16	SI005	149	剥片	黒曜石	11.87	5.90	1.91	0.1	
第38図17	SI005	86	剥片	黒曜石	17.79	13.81	4.88	1.2	
第38図18	SI005	161	打製石斧	細粒凝灰岩	(48.28)	30.24	17.33	(39.8)	
第38図19	SI005	109	打製石斧	砂岩	(71.14)	52.95	24.23	(66.6)	
第38図20	SI005	161	敲石	砂岩	(79.46)	46.47	30.97	(136.3)	
第38図21	SI005	95	敲石	石英斑岩（被熱）	67.04	(30.52)	(44.98)	(107.5)	
第38図22	SI005	65	打製石斧	砂岩（被熱）	82.91	51.67	13.75	81.9	

挿図No.	出土地点	遺物番号	器　種	石　材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	備　考
第38図23	SI005	161	打製石斧	チャート	(51.71)	49.86	(13.33)	(34.9)	
第38図24	SI005	109	敲石	砂岩	89.03	80.85	29.51	260.0	
第38図25	SI005	142	磨石	石英斑岩	92.10	92.70	51.30	641.4	
第38図26	SI005	108	磨石	石英斑岩　(被熱)	(53.52)	62.90	40.16	(157.5)	
第38図27	SI005	162･163･166	石皿	多孔質安山岩(被熱)	(129.66)	195.50	40.05	(1003.3)	
第40図20	SI006	24	石鏃	ガラス質デイサイト	15.21	10.86	2.99	0.44	
第40図21	SI006	53	石鏃	黒曜石	(12.57)	13.13	3.77	(0.6)	
第40図22	SI006	58	石鏃	黒曜石	14.97	9.29	(3.20)	(0.41)	
第40図23	SI006	58	石鏃	黒曜石	12.35	(7.349)	3.70	(0.3)	
第40図24	SI006	57	楔形石器	頁岩	29.53	24.43	7.65	6.0	
第40図25	SI006	58	剥片	チャート	(24.49)	(38.59)	(10.62)	(11.5)	
第40図26	SI006	54	石核	黒曜石	(26.41)	(33.69)	15.68	(10.3)	
第40図27	SI006	37	スクレイパー	細粒凝灰岩	45.10	30.98	7.29	10.9	
第40図28	SI006	58	打製石斧	砂岩	(54.14)	47.09	18.12	(43.9)	
第40図29	SI006	40	磨石	石英斑岩　(被熱)	(75.94)	(65.49)	(51.68)	(278.1)	
第44図1	SI008	111	石鏃	チャート	17.58	(12.00)	3.96	(0.53)	
第44図2	SI008	114	石鏃	黒曜石	25.29	(15.77)	5.57	(1.3)	
第44図3	SI008	112	石鏃	ホルンフェルス	21.57	17.39	3.68	1.6	
第44図4	SI008	107	石鏃	チャート	(20.31)	(22.26)	8.28	(3.5)	
第44図5	SI008	116	石鏃	黒色安山岩	36.12	27.18	7.10	8.3	
第44図6	SI008	114	石鏃	黒曜石	18.92	9.40	5.24	0.8	
第44図7	SI008	109	石錐	ホルンフェルス	(30.31)	7.40	3.68	(1.2)	
第44図8	SI008	114	剥片	黒曜石	33.03	14.43	11.22	4.8	
第44図9	SI008	113	剥片	流紋岩	(27.69)	(22.60)	(15.15)	(9.3)	
第44図10	SI008	145	打製石斧	ホルンフェルス	97.42	53.28	17.80	119.3	
第44図11	SI008	48	打製石斧	ホルンフェルス	68.06	(33.13)	10.23	(21.8)	
第44図12	SI008	79	打製石斧	ホルンフェルス	(55.60)	44.80	14.09	(44.5)	
第44図13	SI008	156	打製石斧	砂岩	(59.30)	54.36	21.55	(63.6)	
第44図14	SI008	122	打製石斧	砂岩	(49.46)	53.03	15.62	(51.8)	
第44図15	SI008	141	打製石斧	ホルンフェルス	(24.48)	(43.02)	11.76	(14.8)	
第44図16	SI008	131	打製石斧	砂岩	(47.17)	57.35	25.34	(86.7)	
第44図17	SI008	136	打製石斧	ホルンフェルス	(50.45)	62.01	27.31	(85.6)	
第44図18	SI008	135	打製石斧	石英片岩	(68.12)	(47.48)	14.16	(47.9)	
第44図19	SI008	159	打製石斧	砂岩	(76.58)	50.44	21.38	(100.6)	
第44図20	SI008	18	敲石	弱固結凝灰岩	52.46	48.58	31.58	48.1	
第44図21	SI008	186	敲石	砂岩	58.27	26.80	14.32	29.6	炉
第44図22	SI008	74	敲石	弱固結凝灰岩	(66.53)	33.62	32.28	(59.5)	
第44図23	SI008	101	敲石	石英斑岩	(90.81)	64.90	(47.40)	(331.4)	
第44図24	SI008	141	敲石	流紋岩	(77.33)	53.31	38.79	(202.0)	
第45図25	SI008	183	台石	石英斑岩	(124.43)	(77.57)	71.94	(817.5)	炉
第45図26	SI008	36	敲石	弱固結凝灰岩	122.65	(54.86)	52.00	(239.3)	
第45図27	SI008	141	敲石	砂岩	116.02	58.02	42.45	410.4	
第45図28	SI008	82	台石	石英斑岩（被熱）	(67.85)	(108.62)	75.15	(627.2)	
第45図29	SI008	39	敲石	弱固結凝灰岩	83.82	53.17	32.60	102.2	
第45図30	SI008	16	敲石	石英斑岩（被熱）	(87.74)	(51.64)	45.07	(200.4)	
第45図31	SI008	126	台石	弱固結火山礫凝灰岩	(95.56)	(105.64)	80.85	(718.7)	
第45図32	SI008	184	敲石	石英斑岩	(149.03)	101.34	(44.17)	(935.0)	炉
第45図33	SI008	23	敲石	砂岩	156.05	155.10	135.04	2980.0	
第47図1	SI009	2	石鏃	黒曜石	12.61	10.84	1.45	0.26	未成品
第47図2	SI009	8	石鏃	黒曜石	(12.71)	15.67	3.84	(0.5)	
第47図3	SI009	1	石鏃	黒曜石	(9.43)	11.85	3.19	(0.3)	
第47図4	SI009	8	石鏃	チャート	(22.15)	(14.89)	5.11	(1.5)	
第47図5	SI009	2	石鏃	チャート	22.18	19.38	4.87	2.0	
第47図6	SI009	8	石鏃	凝灰岩	(30.17)	(29.16)	(13.79)	(10.0)	未成品
第47図7	SI009	2	石鏃	チャート	24.20	21.25	(7.56)	(4.6)	未成品
第47図8	SI009	8	剥片	黒曜石	23.14	15.50	4.20	1.3	
第47図9	SI009	8	剥片	チャート	(21.20)	(28.10)	(5.77)	(3.6)	
第47図10	SI009	8	剥片	チャート	22.98	25.31	5.40	3.3	
第47図11	SI009	8	剥片	チャート	(16.78)	(31.98)	(7.20)	(3.7)	
第47図12	SI009	8	剥片	頁岩	21.88	25.64	5.54	3.6	
第47図13	SI009	2	石核	チャート	43.02	43.33	(13.59)	(31.5)	
第47図14	SI009	8	打製石斧	安山岩	(44.67)	(51.82)	15.47	(44.7)	
第47図15	SI009	8	打製石斧	砂岩	(71.75)	43.50	18.99	(79.4)	
第47図16	SI009	2	打製石斧	安山岩	(51.49)	(55.96)	23.11	(75.5)	
第47図17	SI009	2	磨石	石英斑岩　(被熱)	(29.32)	(62.64)	(24.48)	(82.3)	
第47図18	SI009	3	磨石	砂岩	(62.27)	(34.43)	59.74	(176.4)	
第47図19	SI009	5	磨石	弱固結凝灰岩(被熱)	83.26	67.21	38.06	124.9	
第48図2	SI010	9	石鏃	チャート	(21.05)	10.42	2.65	(0.5)	
第48図3	SI010	1	打製石斧	砂岩	(52.38)	52.18	15.68	(44.5)	
第51図1	SI011	57	打製石斧	ホルンフェルス	(49.45)	40.04	10.94	(30.1)	
第51図2	SI011	183	打製石斧	ホルンフェルス	83.99	(45.90)	20.55	(89.5)	

挿図No.	出土地点	遺物番号	器　種	石　材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	備　考
第51図3	SI011	78	打製石斧	ホルンフェルス	(65.52)	47.44	12.99	(47.7)	
第51図4	SI011	175	打製石斧	安山岩	(53.15)	59.10	17.55	(72.5)	
第51図5	SI011	197	磨石	砂岩	(87.34)	63.17	49.44	(282.8)	
第51図6	SI011	101	敲石	石英斑岩	(66.76)	78.21	38.51	(217.8)	
第51図7	SI011	98	敲石	安山岩	79.27	(63.80)	37.09	(262.2)	
第51図8	SI011	36	敲石	チャート　(被熱)	94.86	64.14	43.44	304.0	
第51図9	SI011	58	敲石	細粒凝灰岩	48.62	48.38	21.97	57.8	
第51図10	SI011	47	石皿	安山岩　(被熱)	(53.60)	(89.99)	57.57	(330.7)	
第54図1	SI014	2	石鏃	黒曜石	18.69	11.30	3.15	0.6	
第54図2	SI014	74	石鏃	黒曜石	19.06	11.15	4.28	0.8	
第54図3	SI014	136	石鏃	黒曜石	(18.01)	8.88	3.15	(0.4)	
第54図4	SI014	2	石鏃	珪質頁岩	17.43	16.90	2.52	0.7	
第54図5	SI014	2	石鏃	黒曜石	(12.92)	9.97	3.34	(0.3)	
第54図6	SI014	2	石鏃	チャート	40.11	31.68	6.65	9.7	
第54図7	SI014	74	石鏃	黒曜石	19.37	(11.21)	4.71	(0.1)	
第54図8	SI014	125	石鏃	黒曜石	(15.19)	19.82	5.29	(1.3)	
第54図9	SI014	125	石鏃	黒曜石	(14.76)	20.72	3.53	(0.8)	
第54図10	SI014	2	石鏃	黒曜石	15.06	7.48	2.91	0.2	
第54図11	SI014	8	石鏃	チャート	(8.34)	(15.25)	3.45	(0.4)	
第54図12	SI014	2	石鏃	黒曜石	(10.08)	(9.07)	3.40	(0.2)	
第54図13	SI014	2	石鏃	黒曜石	19.68	16.29	5.77	1.5	未成品
第54図14	SI014	2	石鏃	黒曜石	24.93	25.80	7.11	4.1	未成品
第54図15	SI014	105	石鏃	チャート	(22.60)	27.80	9.02	(5.2)	未成品
第54図16	SI014	74	楔形石器	チャート	24.32	19.24	4.80	2.8	
第54図17	SI014	2	楔形石器	ホルンフェルス	(53.62)	(40.60)	(10.96)	(30.2)	
第54図18	SI014	2	剥片	チャート	22.99	23.07	6.12	3.8	
第54図19	SI014	2	剥片	黒曜石	40.11	12.27	6.29	2.8	
第54図20	SI014	117	剥片	チャート	35.26	13.34	5.76	2.8	
第54図21	SI014	2	剥片	チャート	38.51	30.04	6.79	8.5	
第54図22	SI014	96	石錐	チャート	(13.88)	(18.50)	3.67	(0.7)	
第54図23	SI014	67	磨製石斧	流紋岩	(83.69)	56.66	35.05	(240.6)	
第54図24	SI014	45	磨製石斧	変質ドレライト	74.60	40.62	22.55	104.7	
第54図25	SI014	117	磨製石斧	ホルンフェルス	(30.31)	(26.81)	10.16	(7.9)	
第54図26	SI014	117	打製石斧	ホルンフェルス	(33.24)	63.28	17.78	(36.2)	
第54図27	SI014	115	打製石斧	ホルンフェルス	(53.10)	56.09	31.12	(69.2)	
第54図28	SI014	79	打製石斧	ホルンフェルス	76.32	40.74	19.72	57.3	
第54図29	SI014	103	打製石斧	ホルンフェルス	42.96	22.86	11.51	10.2	
第55図30	SI014	16	磨石	石英斑岩	99.85	(83.18)	40.03	(408.4)	
第55図31	SI014	4	磨石	砂岩　(被熱)	(64.75)	(46.06)	38.78	(155.8)	
第55図32	SI014	54	敲石	頁岩	71.87	38.35	29.51	108.9	
第55図33	SI014	61	敲石	チャート	79.30	59.69	48.13	302.0	
第55図34	SI014	2	磨石	安山岩	87.72	65.81	39.06	326.4	
第55図35	SI014	6	敲石	石英斑岩	137.07	82.35	69.92	930.0	
第55図36	SI014	30	石棒	安山岩	(73.33)	(68.17)	(55.87)	(331.9)	
第55図37	SI014	4	石皿	多孔質安山岩	(215.05)	(116.82)	66.08	(1945.0)	(SI002-143と接合)
第55図38	SI014	12	凹石	弱固結砂質凝灰岩	(142.19)	(114.57)	49.61	(638.6)	
第55図39	SI014	5	台石	弱固結砂質凝灰岩	114.50	154.51	46.03	699.3	
第58図1	SI015	4	石鏃	黒曜石	12.86	(10.76)	5.14	(0.6)	
第58図2	SI015	32	楔形石器	黒色安山岩	25.98	18.07	6.12	2.9	
第58図3	SI015	4	掻器	黒曜石	27.03	19.21	11.48	4.9	
第58図4	SI015	54	剥片	チャート	41.26	23.07	9.65	9.3	
第58図5	SI015	3	磨製石斧	緑泥片岩　(被熱)	(54.35)	35.35	22.34	(60.8)	
第58図6	SI015	3	打製石斧	ホルンフェルス	(75.96)	46.70	17.76	(70.7)	
第58図7	SI015	33	打製石斧	砂岩　(被熱)	(72.16)	57.14	30.56	(181.4)	
第58図8	SI015	33	磨石	砂岩	(101.63)	74.58	38.79	(422.6)	
第58図9	SI015	3	磨石	石英斑岩　(被熱)	(104.15)	76.67	45.06	(537.7)	
第58図10	SI015	33	磨石	石英斑岩　(被熱)	(60.76)	62.21	41.33	(201.9)	
第60図17	SI016	7	打製石斧	安山岩	(91.83)	63.53	25.17	(197.1)	
第60図18	SI016	3	敲石	砂岩	69.61	66.13	42.15	279.9	
第60図19	SI016	3	敲石	石英斑岩	138.24	67.83	60.12	743.4	
第61図9	SI017	14	石鏃	黒曜石	16.97	(14.99)	3.51	(0.58)	
第63図13	SI018	113	剥片	チャート	23.53	18.10	4.44	1.6	
第63図14	SI018	26	石棒	流紋岩　(被熱)	(61.94)	(63.47)	(39.10)	(132.8)	
第63図15	SI018	42	凹石	多孔質安山岩	(76.00)	(50.94)	30.86	(162.7)	
第63図16	SI018	26	凹石	弱固結凝灰岩	(90.29)	(115.99)	42.93	(289.3)	
第65図10	SI019	33	磨石	砂岩　(被熱)	(56.09)	(53.30)	61.22	(245.3)	
第68図5	SK001	1	石鏃	チャート	24.51	21.17	6.69	3.6	未成品
第69図40	SK025	23	剥片	チャート　(被熱)	(59.69)	(48.29)	(29.58)	(6.0)	
第69図41	SK025	32	打製石斧	砂岩	(37.57)	(23.60)	(6.19)	(88.0)	
第71図9	SK120	8	凹石	安山岩	(111.18)	(117.10)	(70.31)	(1205.0)	
第71図10	SK120	11	打製石斧	頁岩	(90.80)	59.20	21.68	(103.6)	

挿図No.	出土地点	遺物番号	器　種	石　材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	備　考
第71図14	SK121	7	石鏃	チャート	38.95	31.78	10.04	12.9	未成品
第71図15	SK121	8	石鏃	黒曜石	17.29	13.72	5.16	0.8	
第71図16	SK121	8	石鏃	黒曜石	19.21	15.31	5.77	1.4	
第71図17	SK121	4	磨石	砂岩　（被熱）	104.10	72.45	40.15	406.9	
第71図18	SK121	2	敲石	石英斑岩	102.72	60.28	34.73	285.3	
第73図11	SK117	4	剥片	黒曜石	(19.19)	(26.88)	(14.28)	(5.0)	
第75図16	SK221	1	砥石	砂岩	(86.22)	(86.49)	9.93	(105.8)	
第75図17	SK221	2	敲石	安山岩	(51.17)	(40.83)	18.95	(64.7)	
第76図19	SK231	3	石鏃	黒曜石	17.86	13.95	5.58	0.92	未成品
第76図20	SK231	3	石鏃	黒曜石	14.35	(13.17)	3.24	(0.42)	
第76図21	SK231	2	打製石斧	ホルンフェルス	73.76	43.38	12.32	35.4	
第76図22	SK231	2	打製石斧	砂岩	(85.39)	40.51	17.55	(80.4)	
第76図23	SK231	2	打製石斧	砂岩	62.64	61.53	18.37	79.5	
第77図7	SK275	1	石鏃	黒曜石	(18.87)	(16.34)	3.39	(0.7)	
第77図8	SK275	1	石鏃	黒曜石	(12.08)	(10.82)	2.83	(0.3)	
第77図9	SK275	1	剥片	黒曜石	30.04	18.80	9.73	3.9	
第77図10	SK275	1	剥片	黒曜石	21.18	15.44	4.60	1.5	
第77図21	SK308	2	剥片	チャート	(39.55)	(31.87)	(6.94)	(10.5)	石鏃未成品
第79図27	SK307	1	石鏃	黒曜石	25.69	(18.59)	3.56	(1.2)	
第79図28	SK307	49	石核	チャート	85.72	(99.26)	42.55	(411.0)	
第79図29	SK307	5	打製石斧	ホルンフェルス	(85.87)	51.85	20.48	(98.7)	
第79図30	SK307	4	磨石	砂岩	(50.23)	(46.69)	(27.41)	(51.7)	
第79図31	SK307	1	敲石	砂岩	45.32	37.10	22.11	47.9	
第82図5	SK008	5	石鏃	黒曜石	24.37	(14.80)	3.75	(0.9)	
第82図16	SK017	2	敲石	砂岩	(77.51)	(47.02)	39.93	(131.2)	磨製石斧の再利用
第83図3	SK072	4	石鏃	黒曜石	(19.18)	(14.48)	3.59	(0.8)	
第83図4	SK072	2	磨石	石英斑岩	70.90	55.62	50.75	242.8	
第83図6	SK079	2	敲石	石英斑岩	130.64	77.18	55.42	756.1	
第83図7	SK079	3	磨石	ホルンフェルス	83.64	62.65	28.23	205.7	
第86図6	SK126	2	磨石	石英斑岩　（被熱）	(33.60)	(66.30)	(32.92)	(145.9)	
第86図12	SK203	3	石鏃	黒曜石	(16.71)	(9.84)	4.24	(0.7)	
第86図13	SK203	2	石錐	弱固結凝灰岩	41.88	(23.88)	4.74	(3.5)	
第86図22	SK211	1	剥片	チャート	(35.51)	(24.83)	(10.64)	(6.0)	石鏃素材
第88図6	SK237	1	楔形石器	チャート　（被熱）	33.32	19.74	7.01	4.3	
第88図22	SK242	2	石鏃	チャート	21.10	15.80	3.91	1.3	
第88図23	SK242	2	石鏃	黒曜石	13.10	12.17	3.72	0.47	
第88図24	SK242	2	石鏃	黒曜石	(13.92)	(9.29)	4.25	(0.4)	石鏃か石錐の破損品
第88図25	SK242	2	剥片	チャート	(32.14)	18.65	6.35	(3.9)	
第88図26	SK242	2	打製石斧	チャート　（被熱）	(51.11)	28.66	15.05	(30.1)	
第89図14	SK248	2	磨石	砂岩　（被熱）	(48.10)	77.78	48.44	(240.1)	
第89図15	SK248	6	敲石	流紋岩　（被熱）	165.50	104.46	105.69	2330.0	
第93図6	SK262	1	剥片	チャート	(28.46)	(20.82)	(6.07)	(2.8)	
第93図13	SK269	2	砥石	頁岩	(98.40)	47.58	25.10	(188.8)	
第93図14	SK278	1	石鏃	黒曜石	20.44	(8.91)	3.62	(0.5)	
第95図1	SK309	4	石鏃	黒曜石	23.00	14.80	4.68	1.4	
第95図2	SK309	5	石鏃	チャート	(21.95)	20.90	6.76	(2.8)	
第95図3	SK309	5	石鏃	黒曜石	15.53	13.01	4.72	0.8	
第95図4	SK309	5	石鏃	黒曜石	(24.62)	(15.09)	5.13	(1.9)	
第95図5	SK309	5	石鏃	黒曜石	(16.91)	(15.77)	4.49	(1.0)	
第95図6	SK309	5	剥片	黒曜石	(19.81)	(26.72)	(10.08)	(5.3)	
第95図7	SK309	4	剥片	黒曜石	(17.47)	(20.33)	(8.04)	(1.3)	
第95図8	SK309	5	石核	黒曜石	(13.95)	(22.80)	(11.12)	(3.1)	
第95図9	SK309	5	打製石斧	ホルンフェルス	(46.15)	38.43	10.25	(20.9)	
第95図10	SK309	6	砥石	砂岩	(95.14)	(94.50)	14.96	(194.7)	
第95図13	SK314	2	楔形石器	チャート	(53.17)	32.67	(26.72)	(48.5)	
第98図18	SK293	2	楔形石器	チャート　（被熱）	(42.95)	36.66	8.39	(20.4)	
第98図19	SK293	2	楔形石器	石英	(39.40)	(22.50)	(13.05)	(11.9)	
第98図20	SK293	2	石錐	黒曜石	(25.85)	(18.28)	(7.41)	(3.3)	
第98図21	SK293	2	スクレイパー	チャート	(35.22)	(26.56)	(7.14)	(6.0)	
第98図22	SK293	2	剥片	黒曜石	(25.53)	(16.62)	(6.26)	(2.9)	
第98図23	SK293	2	楔形石器	ホルンフェルス	(42.76)	33.34	10.47	(20.4)	
第98図24	SK293	2	楔形石器	硬質細粒凝灰岩	(55.54)	32.44	22.74	(47.3)	
第98図25	SK293	2	敲石	砂岩　（被熱）	(83.73)	54.06	23.30	(150.1)	
第100図1	SD003	3	石鏃	黒曜石	11.90	11.22	2.71	0.34	
第100図2	SD002	2	打製石斧	ホルンフェルス	(67.25)	56.09	19.27	(73.1)	
第100図3	SD002	2	打製石斧	ホルンフェルス	73.43	41.65	10.62	37.3	
第100図4	SD004	1	スクレイパー	黒曜石	(29.15)	(20.68)	11.79	(8.2)	
第100図5	SD004	1	石核	チャート	(42.16)	33.51	33.49	(56.4)	
第100図6	SD004	1	磨製石斧	緑色岩　（被熱）	(70.90)	48.92	20.25	(106.6)	
第100図7	SD004	1	磨製石斧	緑色岩	(87.68)	58.99	35.24	(338.2)	
第100図8	SD004	1	打製石斧	安山岩	95.15	54.74	31.84	185.3	
第100図9	SD004	1	打製石斧	ホルンフェルス	(84.95)	55.65	24.08	(119.0)	

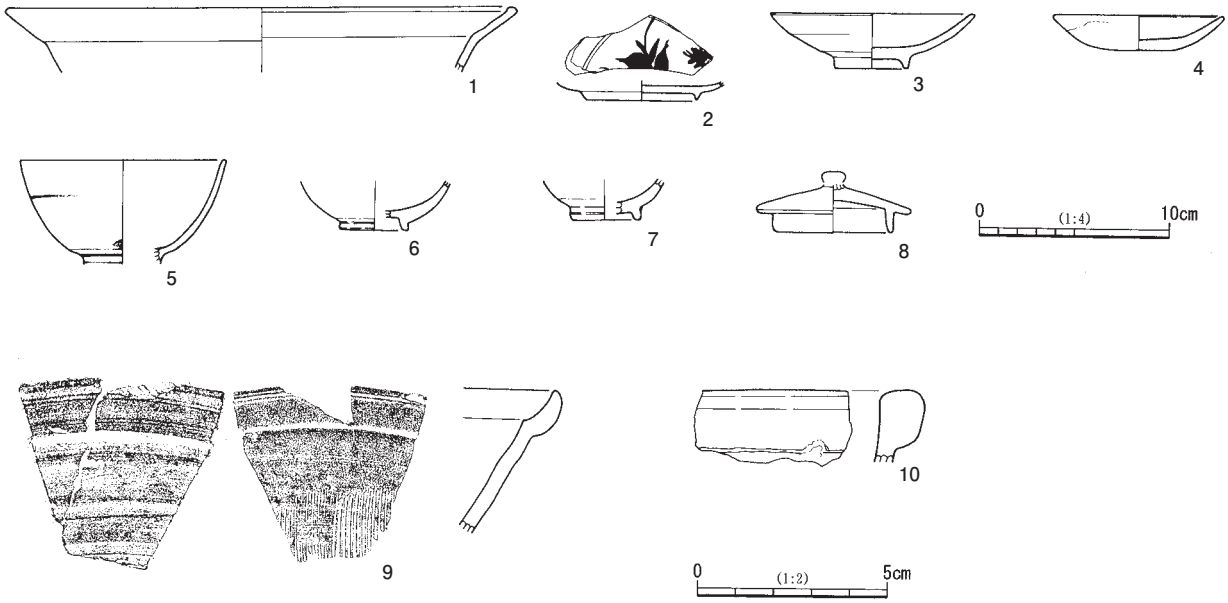
挿図No.	出土地点	遺物番号	器　種	石　材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	備　考
第100図10	SD004	1	打製石斧	中粒凝灰岩	(71.99)	58.90	18.25	(103.7)	
第100図11	SD004	1	打製石斧	ホルンフェルス	(66.63)	(42.15)	15.75	(54.0)	
第100図12	SD004	1	礫器	チャート	(69.84)	50.04	36.85	(164.8)	
第101図13	SD004	1	打製石斧	ホルンフェルス	78.42	41.77	11.22	46.6	
第101図14	SD004	1	打製石斧	ホルンフェルス	93.18	39.02	11.43	71.8	
第101図15	SD004	1	磨石	石英斑岩　(被熱)	(63.07)	64.57	45.57	(238.3)	
第101図16	SD004	1	磨石	石英斑岩　(被熱)	(78.36)	(55.64)	62.06	(273.7)	
第101図17	SD004	1	礫器	流紋岩	(85.10)	(79.60)	(22.71)	(191.9)	磨石の再利用
第101図18	SD004	1	敲石	チャート	85.34	(54.28)	41.18	(253.9)	
第101図19	SD004	1	敲石	砂岩	(76.64)	78.76	(52.24)	(393.4)	
第101図20	SD004	1	敲石	砂岩　(被熱)	(82.93)	72.60	39.62	(344.0)	
第101図21	SD004	1	敲石	チャート（被熱）	(45.27)	(98.86)	51.73	(258.1)	
第101図22	SD004	1	敲石	砂岩　(被熱)	(61.20)	113.47	49.65	(364.8)	
第101図23	SD004	1	石錘	緑泥片岩	(74.04)	(59.45)	10.18	(64.5)	下端部研磨
第102図1	SD005	2	石鏃	チャート	(21.91)	14.89	7.88	(2.3)	
第102図2	SD005	2	磨製石斧	頁岩	(76.07)	32.38	18.77	(57.2)	
第102図3	SD005	2	打製石斧	石英斑岩	(59.92)	(51.19)	(21.44)	(89.7)	
第102図4	SD005	2	打製石斧	砂岩	(70.08)	(56.83)	(18.479	(79.9)	
第102図5	SD005	2	打製石斧	中粒凝灰岩	(98.75)	39.61	34.63	(161.1)	
第102図6	SD005	1	打製石斧	砂岩　(被熱)	(66.61)	(44.00)	(28.15)	(114.8)	
第102図7	SD005	2	石核	チャート	(57.74)	(52.91)	(27.91)	(85.9)	
第102図8	SD005	2	楔形石器	チャート	(63.77)	(42.46)	24.24	(68.9)	未成品
第102図9	SD005	2	楔形石器	砂岩　(被熱)	(70.07)	64.77	30.75	(173.7)	
第102図10	SD005	2	敲石	石英斑岩	82.64	52.91	18.91	115.3	
第102図11	SD005	2	磨石	ホルンフェルス	(65.92)	46.11	(21.87)	(82.7)	スクレイパーとして再利用
第102図12	SD005	2	磨石	砂岩	(56.64)	(36.80)	27.93	(71.0)	
第102図13	SD005	2	磨石	石英斑岩（被熱）	(84.10)	(48.46)	47.08	(213.0)	
第102図14	SD005	2	磨石	石英斑岩　(被熱)	(64.85)	(55.61)	(34.10)	(131.0)	
第103図15	SD005	2	石皿	砂岩　(被熱)	(44.52)	(65.98)	52.87	(163.7)	
第103図16	SD006	2	石鏃	チャート	32.32	28.95	9.39	8.6	
第103図17	SD006	6	剥片	チャート　(被熱)	40.92	25.63	(25.85)	(24.0)	楔形石器の素材
第103図18	SD006	2	打製石斧	砂岩	(41.11)	35.80	18.25	(44.4)	
第103図19	SD006	2	打製石斧	ホルンフェルス	(72.21)	46.10	25.94	(79.6)	
第103図20	SD006	2	打製石斧	ホルンフェルス	(25.33)	40.17	(13.68)	(14.8)	
第103図21	SD006	2	敲石	砂岩	89.72	46.48	18.14	120.6	
第112図1	4H	TG117	石鏃	黒曜石	21.75	15.67	5.28	1.1	
第112図2	5O-18	1	石鏃	黒曜石	19.56	17.84	4.06	0.9	
第112図3	5O-5O	3	石鏃	黒曜石	15.78	16.41	4.23	0.7	
第112図4	5O-81	2	石鏃	黒曜石	14.96	13.79	2.75	0.38	
第112図5	5O-17	1	石鏃	黒曜石	(15.77)	11.17	3.44	(0.36)	
第112図6	5P-10	2	石鏃	黒曜石	15.67	15.43	3.58	0.5	
第112図7	5O-16	2	石鏃	黒曜石	22.40	7.91	4.23	0.6	
第112図8	5P-00	2	石鏃	黒曜石	14.53	13.15	3.60	0.46	
第112図9	4P-72	3	石鏃	黒曜石	12.61	(13.26)	3.95	(0.48)	
第112図10	5J-27	2	石鏃	黒曜石	13.01	(10.22)	3.38	(0.29)	
第112図11	6O-12	2	石鏃	黒曜石	22.91	14.95	5.88	1.9	未成品
第112図12	5Q-1T	TG48	石鏃	黒曜石	23.43	19.69	8.54	3.5	未成品
第112図13	5P-05	1	石鏃	黒曜石	15.76	13.96	6.18	1.3	未成品
第112図14	4J-24	TG194	石鏃	黒曜石	20.53	(9.33)	3.82	(0.7)	未成品
第112図15	4O-95	2	石鏃	黒曜石	(28.32)	(14.35)	8.51	(2.7)	未成品
第112図16	5Q-99	3	石鏃	黒曜石	(16.62)	(19.28)	(9.95)	(3.1)	未成品
第112図17	4J-41	2	石鏃	黒曜石	24.55	(16.98)	9.81	(2.2)	未成品
第112図18	4I	(サブトレ)22	石鏃	黒曜石	26.11	18.11	7.77	2.8	未成品
第112図19	4J-41	2	石鏃	黒曜石	19.78	14.54	4.44	1.1	未成品
第112図20	6P-31	1	石鏃	黒曜石	(20.47)	(19.42)	(5.88)	(1.9)	未成品
第112図21	5O-07	3	石鏃	黒曜石	16.86	8.70	4.23	0.49	未成品
第112図22	4I	TG100	石鏃	黒曜石	15.39	10.10	1.64	0.24	未成品
第112図23	4I	TG12	石鏃	黒曜石	21.44	(11.49)	4.01	(0.9)	破損品
第112図24	5P-00	2	石鏃	黒曜石	(21.36)	(18.02)	4.80	(1.29)	破損品
第112図25	6Q-34	3	石鏃	黒曜石	(12.619)	15.72	3.42	(0.49)	破損品
第112図26	4I	TG12	石鏃	黒曜石	(16.479)	14.39	3.80	(0.7)	破損品
第112図27	5J	2	石鏃	黒曜石	18.67	(12.72)	4.03	(0.6)	破損品
第112図28	4K-00	TG175	石鏃	黒曜石	21.00	16.16	5.17	1.4	破損品
第112図29	4K-01	TG172	石鏃	黒曜石	(20.31)	(18.50)	5.46	(1.9)	破損品
第112図30	4J	TG108	石鏃	黒曜石	(14.23)	21.16	6.32	(2.1)	破損品
第112図31	4I	TG3	石鏃	黒曜石	(20.19)	(13.75)	5.71	(1.0)	破損品
第112図32	5O-30	2	石鏃	黒曜石	(15.90)	23.92	8.86	(1.4)	破損品
第112図33	4J-36	1	石鏃	黒曜石	(13.06)	16.47	2.92	(0.6)	破損品
第112図34	4I	TG141	石鏃	黒曜石	(23.55)	(8.82)	(7.139)	(0.9)	破損品
第112図35	4P-91	2	石鏃	黒曜石	(14.39)	13.44	3.62	(0.4)	破損品
第112図36	6P-01	2	石鏃	黒曜石	(22.75)	(13.36)	3.03	(0.7)	破損品
第112図37	4H	TG87	石鏃	黒曜石	16.70	(8.61)	2.85	(0.4)	破損品

挿図No.	出土地点	遺物番号	器　種	石　材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	備　考
第112図38	6O-47	2	石鏃	黒曜石	14.01	(8.64)	2.16	(0.2)	破損品
第112図39	6P-31	1	石鏃	黒曜石	(10.42)	(8.60)	2.68	(0.2)	破損品
第112図40	4O-99	2	石鏃	黒曜石	(12.14)	(10.19)	2.88	(0.4)	破損品
第112図41	4I	TG12	石鏃	黒曜石	(13.66)	(12.489)	5.44	(1.2)	破損品
第112図42	4I	(サブトレ)24	石鏃	黒曜石	(11.41)	(11.84)	3.01	(0.3)	破損品
第112図43	4K-00	2	石鏃	黒曜石	13.46	(9.62)	4.42	(0.5)	破損品
第113図44	6O-47	2	楔形石器	黒曜石	(25.31)	(16.00)	(7.88)	(3.11)	
第113図45	4P-70	1	楔形石器	黒曜石	(16.67)	(11.66)	(5.16)	(1.2)	
第113図46	5P-13	2	楔形石器	黒曜石	(14.22)	(8.84)	(3.81)	(0.4)	
第113図47	4I	TG12	剥片	黒曜石	(37.53)	(24.47)	(7.96)	(6.5)	二次剥離
第113図48	4J-48	1	剥片	黒曜石	(26.46)	(17.12)	(8.01)	(2.5)	二次剥離
第113図49	6Q-34	3	剥片	黒曜石	(27.06)	(24.05)	(12.45)	(5.9)	二次剥離
第113図50	5K-1T	TG19	剥片	黒曜石	(24.05)	(24.78)	(9.499)	(2.8)	二次剥離
第113図51	5R-2T	TG60	剥片	黒曜石	(16.96)	(14.89)	(4.68)	(1.2)	二次剥離
第113図52	5M-2T	TG56	剥片	黒曜石	(12.93)	(24.33)	(8.22)	(1.9)	調整痕
第113図53	5O-48	1	剥片	黒曜石	(17.87)	(19.80)	4.17	(1.0)	調整痕
第113図54	6P-30	3	剥片	黒曜石	(16.49)	(12.98)	2.23	(0.5)	調整痕
第113図55	6O-55	2	剥片	黒曜石	(17.95)	(16.39)	3.69	(1.2)	調整痕
第113図56	4J-23	1	石核	黒曜石	(15.94)	(14.96)	(10.04)	(2.4)	
第113図57	4J-29	5	石鏃	頁岩	29.77	(18.37)	4.79	(2.3)	
第113図58	4I	(サブトレ)20	石鏃	チャート	(24.46)	(11.14)	4.47	(1.4)	
第113図59	6O-15	1	石鏃	チャート	24.25	(12.49)	5.17	(1.2)	
第113図60	6P-22	1	石鏃	チャート	(24.20)	(15.30)	4.05	(0.9)	
第113図61	4P-74	2	石鏃	珪質頁岩	23.89	21.24	4.32	1.7	
第113図62	5O-45	1	石鏃	黒色安山岩	24.68	19.41	3.92	1.3	
第113図63	表採	1	石鏃	チャート	28.11	24.60	9.67	5.1	
第113図64	4J-23	1	石鏃	ガラス質デイサイト	23.33	20.79	3.07	0.7	
第113図65	4I	TG5	石鏃	硬質細粒凝灰岩	27.27	22.64	6.12	3.7	
第113図66	4J-23	1	石鏃	チャート	30.40	22.22	8.05	4.7	
第113図67	5H-2T	TG72	石鏃	チャート	28.15	29.22	5.11	4.6	
第113図68	4I	TG12	石鏃	ホルンフェルス	30.00	(17.29)	5.04	(2.1)	破損品
第113図69	4I	(サブトレ)16	石鏃	チャート	21.17	(16.90)	5.53	(1.8)	破損品
第113図70	4K-17	TG163	石鏃	チャート	(23.25)	(15.01)	3.35	(0.9)	破損品
第113図71	6O-26	2	石鏃	チャート	(17.52)	21.54	4.96	(1.6)	破損品
第113図72	4I	TG5	石鏃	チャート	(27.65)	(25.34)	(6.01)	(4.1)	未成品
第113図73	5L-2T	TG29	石鏃	チャート	22.90	(18.94)	5.24	(2.0)	未成品
第113図74	4I	TG12	石鏃	チャート	(27.23)	(18.02)	6.42	(3.3)	未成品
第113図75	4P-65	2	石鏃	チャート	(25.41)	(17.01)	(5.97)	(2.3)	未成品
第113図76	5L-2T	TG29	石鏃	チャート	24.05	23.76	7.04	4.3	未成品
第114図77	4M-2T	TG76	スクレイパー	チャート　(被熱)	(47.05)	(29.37)	(8.56)	(16.5)	
第114図78	4K-00	TG178	スクレイパー	チャート	47.61	27.69	6.95	8.5	
第114図79	5P-61	2	スクレイパー	チャート	(27.95)	(33.26)	6.15	(6.6)	
第114図80	4I	TG10	石錐	チャート	(34.80)	18.21	9.75	(6.5)	
第114図81	7M-1T	TG31	石錐	チャート	(44.38)	22.12	7.45	(8.5)	
第114図82	5O-20	2	楔形石器	石英片岩	(57.409)	35.79	13.39	(42.8)	
第114図83	4Q-33	1	楔形石器	チャート	52.19	39.41	11.47	25.7	
第114図84	4I	TG6	楔形石器	安山岩	(53.90)	(35.36)	(12.34)	(26.2)	
第114図85	4K-02	1	楔形石器	チャート(被熱)	(32.24)	(27.77)	(9.21)	(8.4)	
第114図86	4I	TG8	楔形石器	チャート	(38.08)	38.11	(11.82)	(22.9)	
第114図87	4I	TG8	楔形石器	頁岩	(37.19)	(30.54)	(11.65)	(13.9)	
第114図88	5O-30	2	楔形石器	チャート	37.54	30.97	14.97	16.2	
第114図89	5O-50	2	楔形石器	チャート	(17.85)	(26.95)	(6.01)	(3.2)	
第114図90	5O-36	1	楔形石器	チャート	(17.55)	(28.62)	(7.94)	(5.4)	
第114図91	4I	TG12	楔形石器	チャート	(21.97)	(15.33)	8.33	(3.0)	
第114図92	5O-58	2	楔形石器	チャート	(16.79)	(15.17)	3.92	(0.9)	
第114図93	6O-36	1	楔形石器	チャート	(15.21)	(21.18)	(6.59)	(1.7)	
第114図94	5P-06	1	楔形石器	石英　(被熱)	(25.40)	(20.90)	(7.08)	(3.9)	
第114図95	5R-2T	TG60	楔形石器	チャート	27.68	21.63	6.29	4.3	
第114図96	5O-06	2	楔形石器	頁岩	(33.86)	(21.33)	(3.94)	(4.3)	
第115図97	5Q-15	2	剥片	ホルンフェルス	(33.10)	(41.79)	9.43	(13.9)	
第115図98	6O-38	1	剥片	ホルンフェルス	(38.95)	(46.52)	8.50	(18.1)	
第115図99	5O-58	2	剥片	チャート	34.98	15.99	8.63	4.4	
第115図100	5O-50	2	剥片	砂岩	(20.15)	(25.88)	(5.82)	(3.2)	
第115図101	4I	TG97	剥片	チャート	(53.52)	(31.80)	(9.93)	(14.1)	
第115図102	5O-11	1	剥片	チャート	(51.39)	(38.93)	(7.40)	(20.0)	
第115図103	5R-2T	TG60	剥片	黄色碧玉	34.97	23.33	7.90	7.0	
第115図104	6O-58	1	剥片	チャート	(18.56)	(17.26)	(10.20)	(1.9)	
第115図105	5O-71	1	剥片	チャート	37.12	25.60	9.04	7.6	
第115図106	4Q-71	1	剥片	チャート	(28.18)	(25.81)	(10.91)	(8.6)	楔素材
第115図107	5P-13	2	剥片	細粒凝灰岩	(28.68)	(22.44)	(4.57)	(2.8)	
第116図108	6O-54	2	磨製石斧	透閃石岩	(38.98)	28.44	11.28	(16.5)	
第116図109	5O-40	2	磨製石斧	緑色岩	(31.73)	19.93	9.06	(10.6)	

挿図No.	出土地点	遺物番号	器　種	石　材	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	備　考
第116図110	5O-3T	TG64	磨製石斧	変質玄武岩	(30.84)	(15.43)	8.38	(6.6)	
第116図111	5I	TG114	打製石斧	ホルンフェルス	(53.15)	(20.74)	(11.69)	(11.6)	
第116図112	4P-65	2	打製石斧	砂岩　(被熱)	90.60	(42.64)	15.20	(84.9)	
第116図113	6P-1T	TG36	打製石斧	ホルンフェルス	(96.11)	59.37	(17.09)	(131.4)	
第116図114	4I-46	1	打製石斧	ホルンフェルス	86.37	51.37	14.74	66.2	
第116図115	6P-04	2	打製石斧	砂岩	(67.16)	49.12	18.33	(49.0)	
第116図116	5O-34	1	打製石斧	ホルンフェルス	59.21	35.80	13.52	37.3	
第116図117	4I	(サブトレ)28	打製石斧	砂岩	70.10	39.17	12.84	40.5	
第116図118	5O-50	2	打製石斧	ホルンフェルス	(57.32)	(34.13)	(17.21)	(38.7)	
第116図119	6P-1T	TG36	打製石斧	ホルンフェルス	(50.50)	(31.29)	8.37	18.1	
第116図120	4H	(サブトレ)2	打製石斧	粘板岩	83.95	39.98	9.91	35.9	
第116図121	4O-87	2	打製石斧	ホルンフェルス	60.13	27.53	15.57	28.6	
第116図122	6O-38	1	打製石斧	安山岩　(被熱)?	(65.48)	26.44	13.39	(36.2)	
第116図123	4H	TG86	打製石斧	石英斑岩　(被熱)	(82.18)	(63.23)	26.03	(186.9)	
第116図124	6P-24	2	打製石斧	ホルンフェルス	(80.00)	53.46	28.80	(136.8)	
第117図125	4I	(サブトレ)15	打製石斧	ドレライト	(76.22)	64.59	17.59	(82.8)	
第117図126	5Q-15	2	打製石斧	ホルンフェルス	(78.72)	84.43	24.95	(162.2)	
第117図127	4J-24	TG191	打製石斧	安山岩　(被熱)	(61.75)	(50.30)	12.71	(44.2)	
第117図128	4I	(サブトレ)14	打製石斧	ホルンフェルス	(62.05)	(39.60)	19.39	(53.3)	
第117図129	4P-75	2	打製石斧	細粒凝灰岩(被熱)	(52.50)	(42.98)	(19.19)	(59.5)	
第117図130	4I	TG3	打製石斧	安山岩	(46.81)	35.38	9.06	(26.0)	
第117図131	4H	TG86	打製石斧	ホルンフェルス	(47.43)	46.92	20.21	(52.1)	
第117図132	4K-00	174	打製石斧	砂岩　(被熱)	(49.36)	(36.29)	18.40	(44.7)	
第117図133	4J-41	1	打製石斧	ホルンフェルス	(46.08)	38.17	19.29	(37.0)	
第117図134	4I	(サブトレ)31	打製石斧	ホルンフェルス	(29.51)	69.80	10.50	(26.3)	
第117図135	4Q-51	2	打製石斧	ホルンフェルス	(39.92)	33.95	12.09	(18.6)	
第117図136	6P-32	1	打製石斧	ホルンフェルス	33.76	32.75	12.60	18.1	
第117図137	4I	TG1	打製石斧	砂岩	(27.83)	33.70	15.40	(16.7)	
第117図138	4J-41	2	打製石斧	ホルンフェルス	(28.74)	(40.04)	8.93	(13.0)	
第118図139	5O-62	2	磨石	安山岩　(被熱)	130.62	91.03	45.88	742.2	
第118図140	5P-53	2	磨石	砂岩	125.08	75.45	(38.36)	(517.8)	
第118図141	5O-50	2	磨石	石英斑岩	118.13	85.77	44.92	648.8	
第118図142	5K-56	8	磨石	石英斑岩	93.48	80.80	40.86	433.8	
第118図143	4I	TG95	磨石	砂岩	90.29	70.30	48.64	371.8	
第118図144	5J-56	2	磨石	石英斑岩	102.94	66.32	38.88	366.4	
第118図145	5K-62	1	磨石	砂岩	111.05	64.43	40.91	386.2	
第118図146	5S-00	2	磨石	チャート	62.11	65.54	41.04	246.0	
第118図147	6P-21	1	磨石	ホルンフェルス	93.46	69.77	40.48	382.1	
第118図148	4H	(サブトレ)2	磨石	砂岩	(70.27)	(79.34)	35.86	(269.5)	
第118図149	6P-26	2	磨石	石英斑岩	89.42	69.96	37.44	329.4	
第119図150	6O-12	2	磨石	砂岩	(101.45)	53.55	36.05	(299.4)	
第119図151	6O-68	1	磨石	石英	129.70	65.39	48.20	579.9	
第119図152	4I	TG83	磨石	石英斑岩	160.00	120.05	81.57	2140.0	
第119図153	5J	2	磨石	砂岩　(被熱)	(64.21)	79.74	(58.04)	(449.6)	
第119図154	5O-92	1	磨石	砂岩	144.80	93.54	55.85	1095.0	
第119図155	4K-00	174	敲石	砂岩	67.87	45.41	24.99	104.6	
第119図156	4I	(サブトレ)15	敲石	ホルンフェルス	104.65	79.75	51.55	503.6	
第119図157	4I	TG95	敲石	チャート　(被熱)	(95.74)	87.02	42.76	(497.6)	
第120図158	6P-31	1	敲石	変質玄武岩	128.44	60.96	(54.48)	(619.9)	
第120図159	4H	TG120	敲石	チャート	102.15	60.11	51.22	484.58	
第120図160	4Q-36	2	敲石	石英斑岩　(被熱)	139.91	(72.71)	48.15	(703.9)	
第120図161	表採	1	敲石	砂岩	(79.19)	(64.90)	27.53	(176.0)	
第120図162	6P-26	2	敲石	石英斑岩 (被熱)	82.89	59.52	38.51	261.5	
第120図163	5K	TG149	敲石	安山岩	(107.03)	(118.41)	(36.88)	(441.9)	
第120図164	4I	TG97	敲石	弱固結凝灰岩	89.96	57.55	36.82	113.8	
第120図165	4I	(サブトレ)31	敲石	弱固結凝灰岩	67.25	63.84	(26.68)	(63.9)	
第120図166	6O-05	1	敲石	ホルンフェルス	(57.51)	61.15	10.80	(58.6)	
第120図167	4J	TG104	敲石	砂岩	(47.71)	30.32	19.61	(41.5)	
第121図168	5K	TG146	石皿	多孔質安山岩	(201.50)	(133.41)	75.50	(1185.0)	
第121図169	5I-35	1	石皿	褐鉄鉱砂岩	(74.72)	(59.52)	(38.79)	(159.7)	
第121図170	5I-35	1	石皿	褐鉄鉱砂岩	(92.44)	(51.47)	(56.65)	(255.0)	
第121図171	4J-36	1	軽石製品	軽石	(125.75)	73.83	33.02	(68.0)	
第121図172	5K-1T	TG19	砥石	砂岩	(111.16)	(46.88)	15.08	(82.4)	
第121図173	4K-00	2	石棒	安山岩	(92.08)	(95.56)	(65.74)	(727.6)	
第121図174	4K-00	2	石棒	安山岩	(126.42)	(75.87)	(18.21)	(247.8)	
第121図175	4I	TG93	軽石	軽石	20.60	13.94	9.42	0.6	
第121図176	4I	TG93	軽石	軽石	21.23	16.40	11.05	1.0	
第121図177	4I	TG93	軽石	軽石	30.19	20.50	12.84	1.4)	

陶磁器（第104図、図版63）

本遺跡では量的には少ないものの溝を中心に陶磁器の破片が数十点ほど出土している。大半は細片で図示できるものとして碗・皿・擂鉢等があった。出土地点についてみると、SD-004が多く、ほかは疎らな散布となっている。これらの陶磁器類で注目できるものとして染付皿（第104図２）をあげることができる。底部だけが遺存したもので畳付部分は鋭く「V」字状に作り出されており、大陸からの輸入品と思われる。器厚は薄く３㎜ほどで見込みには花弁文を描いており、16世紀後半から末期のものと考えられる。そのほかはすべて陶器である。以下、掲載した陶磁器類は第９表にまとめた。



第104図　近世陶磁器

第９表　久保堰ノ台遺跡２出土陶磁器一覧表

番号	出土地点	産　地	器　種	時　期	遺存度	釉　薬	色　調
1	SD-004	唐津	皿	17世紀代	口縁部片	透明釉	褐色・褐灰色
2	表採	中国	染付中皿	16世紀後半	底部片	透明釉	青灰色・白色
3	SD-004	肥前	小皿	17世紀前半	口縁一部欠損	長石釉	灰白色・灰白色
4	SD-006	瀬戸・美濃	灯明皿	18世紀後半	約1/4	飴釉	暗赤褐色・淡黄色
5	SD-004	肥前	染付碗	17世紀代	約1/3	透明釉	灰白色・灰白色
6	SK-235	瀬戸・美濃	小碗	18世紀代	底部～体部片	長石釉	灰オリーブ色・黄橙色
7	SI-002	瀬戸・美濃	小碗	18世紀代	底部～体部片	灰釉	淡黄色・明黄褐色
8	4P-65	信楽	蓋	19世紀前半	約2/3	鉄釉	黒色・明赤褐色
9	SD-004	瀬戸・美濃	擂鉢	18世紀前半	口縁部片	飴釉	暗赤褐色・黄橙色
10	SD-006	唐津	甕	17世紀代	口縁部片	透明釉	暗褐色・褐色

第５節　遺構外出土遺物

ここでは出土土器に限り、遺構分布の空白部分を境として東西に分割してみた。西側では集落の一端が垣間見られ、中期後半から後期初頭に位置づけられる住居跡が検出されている。一方、東側では住居跡の存在は予想できるものの、遺構の主体は土坑等であった。この点、双方に土器群での差異がみられるかに興味がもたれた。また掲載土器については口縁部を中心に図示可能な資料についてはできる限り図示した。

石器では石鏃や楔形石器が多数出土しており、遺跡内で石器製作が行われていたと考えられたため、未成品あるいは素材となるような剥片も掲載するようにした。さらに礫を利用した磨石や敲石等では破損品も含めて掲載の対象とした。

１　土器

本遺跡から出土した土器群は図示したように中期前半から後期中葉まで継続しているが、それ以前と以後の土器群についてはほとんどみることができなかった。つまり土器型式からみれば阿玉台式から加曽利E式を経て後期の称名寺式・堀之内式へと続き加曽利Ｂ式をもって終焉を迎えることになる。このように限定された土器群の出土は集落を構成している遺跡では珍しく、しかも丘陵地に所在する周辺遺跡を含めて河川流域や海浜部に立地する遺跡との比較検討資料として貴重な遺跡となろう。

西地区（第105～107図、図版41・56～58）

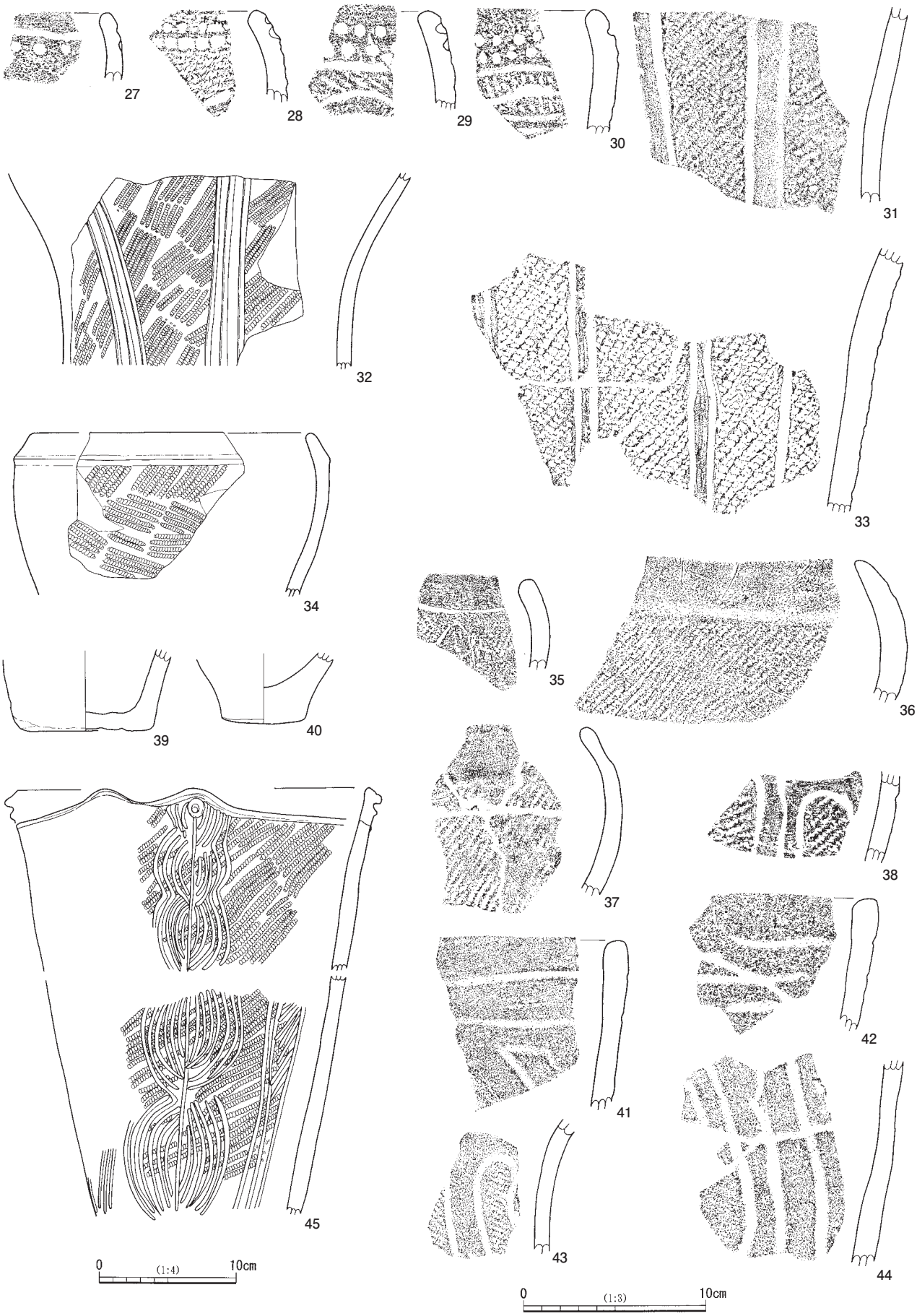
中期　１・２は波状口縁片で口縁直下に押引文がみられる。３は刺突による施文となる。これらは阿玉台Ⅱ式となろう。４は隆帯に沿った幅広の押引文が特徴的であり、３よりも後出と考えられる。５～８は勝坂式の影響を強く受けたものである。５は把手部分で空洞部が特徴といえよう。下部には縄文が僅かにみられる。７・８は口縁部でヘラによる刻目が施されている。９は中峠（なかびょう）式となろう。半截竹管により深い沈線で文様が構成されている。10～12は加曽利ＥⅠ式、13～33は加曽利ＥⅡ式である。口辺部を沈線により区画されたり、口辺部には渦巻文が描かれる。24～26では撚糸文が用いられている。27～30は円形の刺突文が口縁直下にみられる。加曽利ＥⅡ式でも新しいタイプとなる。34～38は加曽利ＥⅢ式からＥⅣ式に位置づけられる土器群である。ここでの微隆起（34・37）は鮮明ではない。

後期　41～44は太く力強い沈線が特徴的である。43の沈線内は縄文で充填されている。これらは称名寺式に該当するものである。45～54はおおむね堀之内Ⅰ式と呼称できるタイプである。45は垂下する沈線を中心に楕円状文が描かれる。50では沈線により格子目文がみられ、52～54の口縁部にみられる円形刺突文はこの時期の特徴をよく表現している。55～60は加曽利Ｂ式に属するものである。55は口辺部に縄文帯の認められる鉢あるいは浅鉢で加曽利Ｂ１式となろう。56は胴部に弧線文の施される浅鉢か台付と思われる。加曽利ＢⅡ式によくみられるタイプである。57～60は粗製の深鉢となる。61は無文であり、加曽利Ｂ式に伴うものと考えられる。62は小型品で、これも加曽利Ｂ式に属するものである。63･64は後期の底部である。

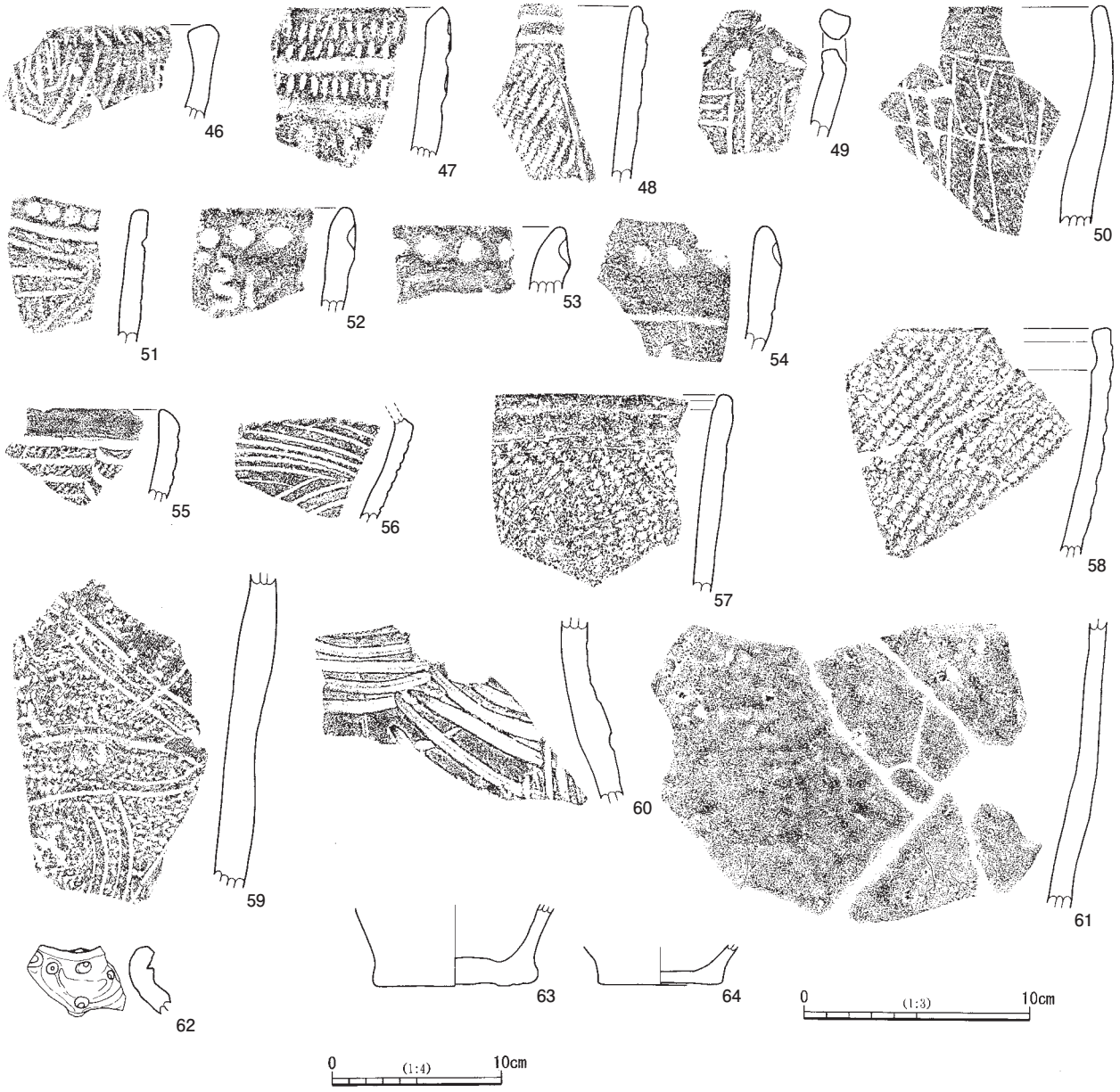
東地区（第108～111図、図版41・59～62）

中期　１・２は隆帯に沿って押引が施されることから阿玉台Ⅱ式となる。３には条線が加わり、押引の幅も広い。この種は阿玉台Ⅲ式といえよう。４の内彎した把手部には沈線による渦巻がみられる。型式的には３と同様であろう。５・６には縄文施文がみられ、５の把手裏面にも縄文が施文されている。これらは把手の形態や縄文施文から阿玉台Ⅳ式に属するものである。なお、３・５には若干雲母の混入が認められる。７～11は勝坂系に属するものと考えたい。７は隆帯上に刻目を施し、８は口唇部の作りが特徴的である。その直下には縦方向に縄文が施文される。９・10は胴部片で大きな渦巻文が際立っている。11は把手部で

第105図　遺構外出土土器（西地区１）



第106図　遺構外出土土器（西地区２）



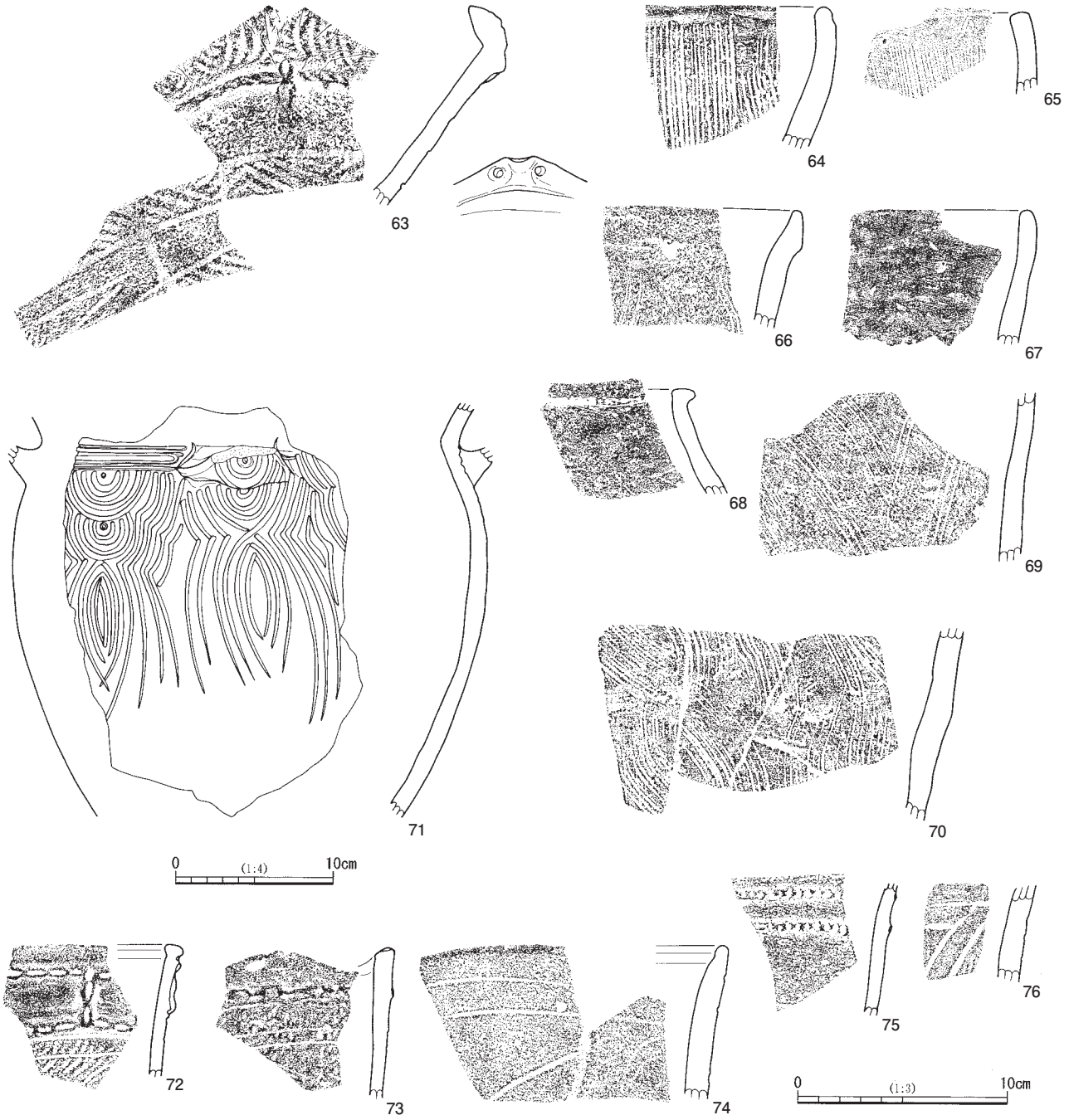
第107図　遺構外出土土器（西地区３）

沈線によるきれいな細工がみられる。12～18は粘土紐の貼付により主文様が構成されており、加曽利E1式となろう。12は手の込んだ細工がみられる口縁部で、刺突による中途穿孔もみられる。下部には縄文が施文されているため、胴部にも続くものと考えられる。13は深く抉るような沈線が特徴的である。14・15は口辺部に粘土紐を波状に貼付したものである。17の胎土には雲母が僅かに混入されている。19～31加曽利EⅡ式となろう。渦巻文とともに隆帯や沈線によって区画された中は縄文で充填される。30や31には刺突文が認められるため時期的には新しいものである。32は口縁部が内彎する小型品で隆帯部分に穿孔が認められる。隆帯を重視すれば加曽利ＥⅢ式以降に位置づけられるものであろう。33は口唇部の作りと斜行する沈線から曽利系となろう。34・35は中期に伴う底部である。

後期　36は沈線間の縄文と磨り消しは称名寺式の典型といえよう。37～71は堀之内Ⅰ式に属する土器群である。37～56は地文に縄文を施しているものである。40は編んだような縄文を不規則に押捺している珍しい例である。41は波状口縁であり、口縁の内面は大きく凹んでいる。このような口縁の作りは堀之内Ⅱ式

第108図　遺構外出土土器（東地区１）

第109図　遺構外出土土器（東地区２）



第110図　遺構外出土土器（東地区３）

に近いものといえよう。57・58は口縁部の小片であり、器面には刺突が加えられている。59・60では縦方向に粘土紐が貼付され、その上を指頭による押捺が加えられる。61では波頂部に孔がみられ、62は補修孔を有している。63は浅鉢か、口縁は大きく開くようである。64～70は櫛歯状工具による条線で器面が飾られ、68は大きく内に反るタイプの鉢で胴部には細い条線の一端が認められる。71は45と同様な文様構成となる。72～76は堀之内Ⅱ式となろう。口縁の内面には浅い沈線がみられる。72・73・75では口辺の隆帯上に工具による刺突でアクセントをつけ、76では沈線による三角文の一部が認められる。77～83は加曽利B式に属するものである。77・78は無文の浅鉢で、77の口縁には粘土瘤の貼付がみられる。79はほぼ口縁部

といえる破片で裏面では沈線の代用として２列の刺突がみられる。80は薄手の鉢形で細縄文を地文とし平行沈線が数条横走する。81は胴部片であるが、精製された器面と丸味を帯びた器形は壺形を連想させる。これらは加曽利ＢⅠ式に位置づけられよう。82・83は紐線文系の深鉢で82には沈線が横走するため別個体としたが同一グリッドから出土している。84は胴部以下の遺存となる粗製の深鉢である。85～88は後期の底部で、85・86は網代痕がみられる。89は注口土器の注口部であり、文様は認められない。

２　土製品（第111図、図版62）

土錘　いずれも中期の土器片錘である。90・93には若干雲母が含まれる。

円盤形土製品　96は周囲に加工がみられるため図示したものである。97は周囲の加工と裏面の中央部に穿孔の意図が窺われる小さな凹みが存在する。

３　石器（第112～121図、図版75～82）

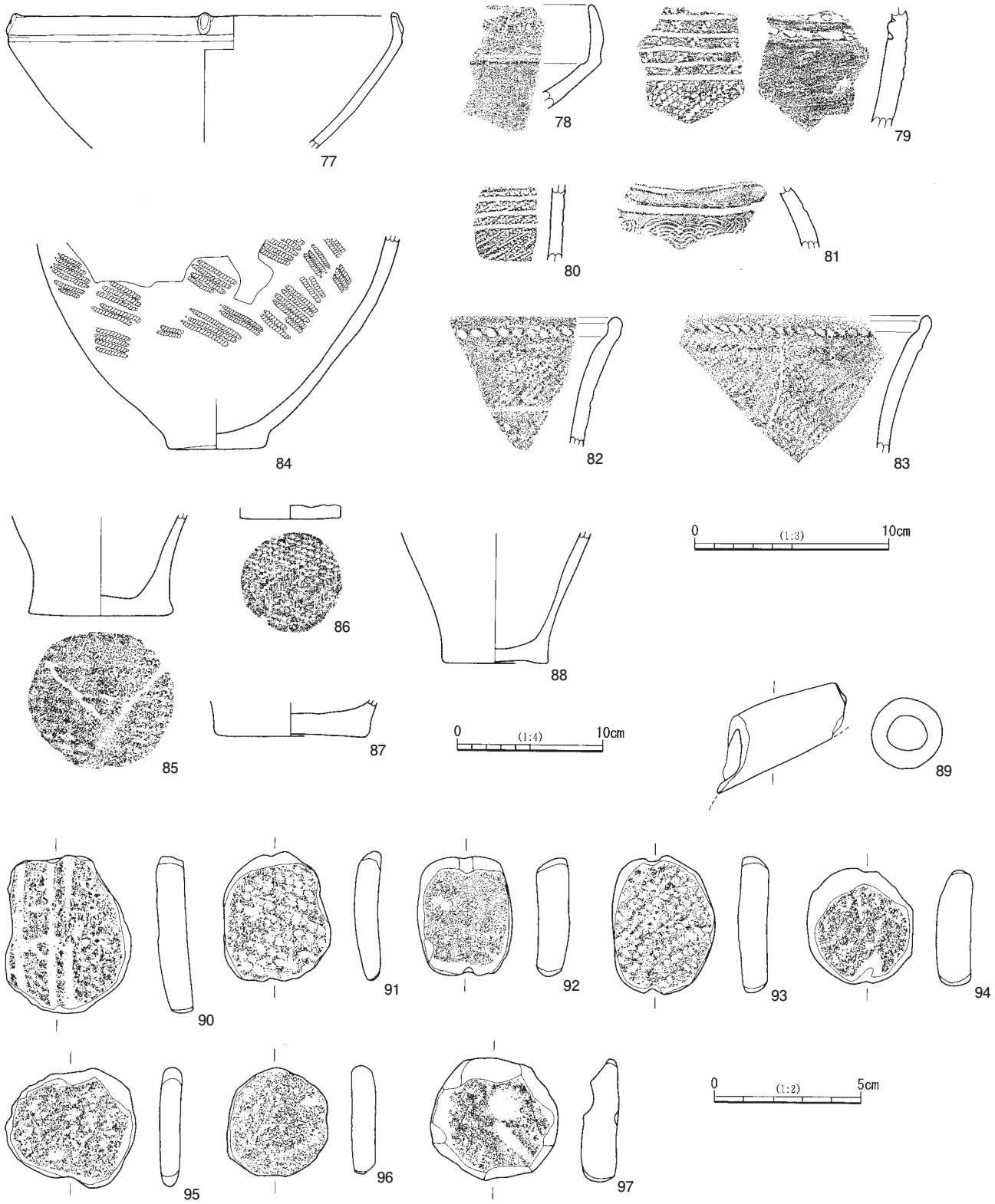
本遺跡では石鏃をはじめとする剥片石器類が多数出土しいる。これらを石材的にみるとほぼ黒曜石とチャート等に二分できるため、剥片石器についてのみ石材を重視して掲載した。

１～43・57～76は石鏃である。１～43は黒曜石製を一括した。１～10は明らかに完成品といえよう。６は「逆Y字」に整形された特異な器形を呈した石鏃で希有な例となろう。こうした例は後晩期に多い[1]ようである。７は左右が若干異なる柳葉形を呈した石鏃である。丸く加工した基部と両側縁は丁寧に剥離されている。11～13も成品と思われるが、加工という点では製作途中のような形状となっている。とりわけ12・13では狩猟の用具として機能するか疑問の残る作りである。14は幅広の剥片を利用したもので製作途中で作り損ねたものと思われる。15～22は未成品と考えたい。それぞれ先端部を鋭角に整形した18・19・22や周囲に整形を施した15・16・20などはまさにこれから調整剥離を施す段階といえよう。23～43は大きく破損したものである。25は６と同様類例の少ない形態を呈したものである。29は斜め左から打ち下ろしたような剥離が認められ、彫器のような剥離面がみられる。38は薄手の剥片を用いたもので先端部の加工は精緻に施されている。36や41は脚部のみの遺存で、これから推測すると全長が４㎝を超える大型鏃となろう。57～76は黒曜石以外の石材を用いた石鏃で、チャート14点、そのほか６点となっている。ただ71～76については未成品の域を出ることはないであろう。ここでも59～62は丁寧に加工されているが、反面66・67といった鏃としては疑問視されるような成品も存在する。この点では黒曜石と共通したものとして捉えられる。

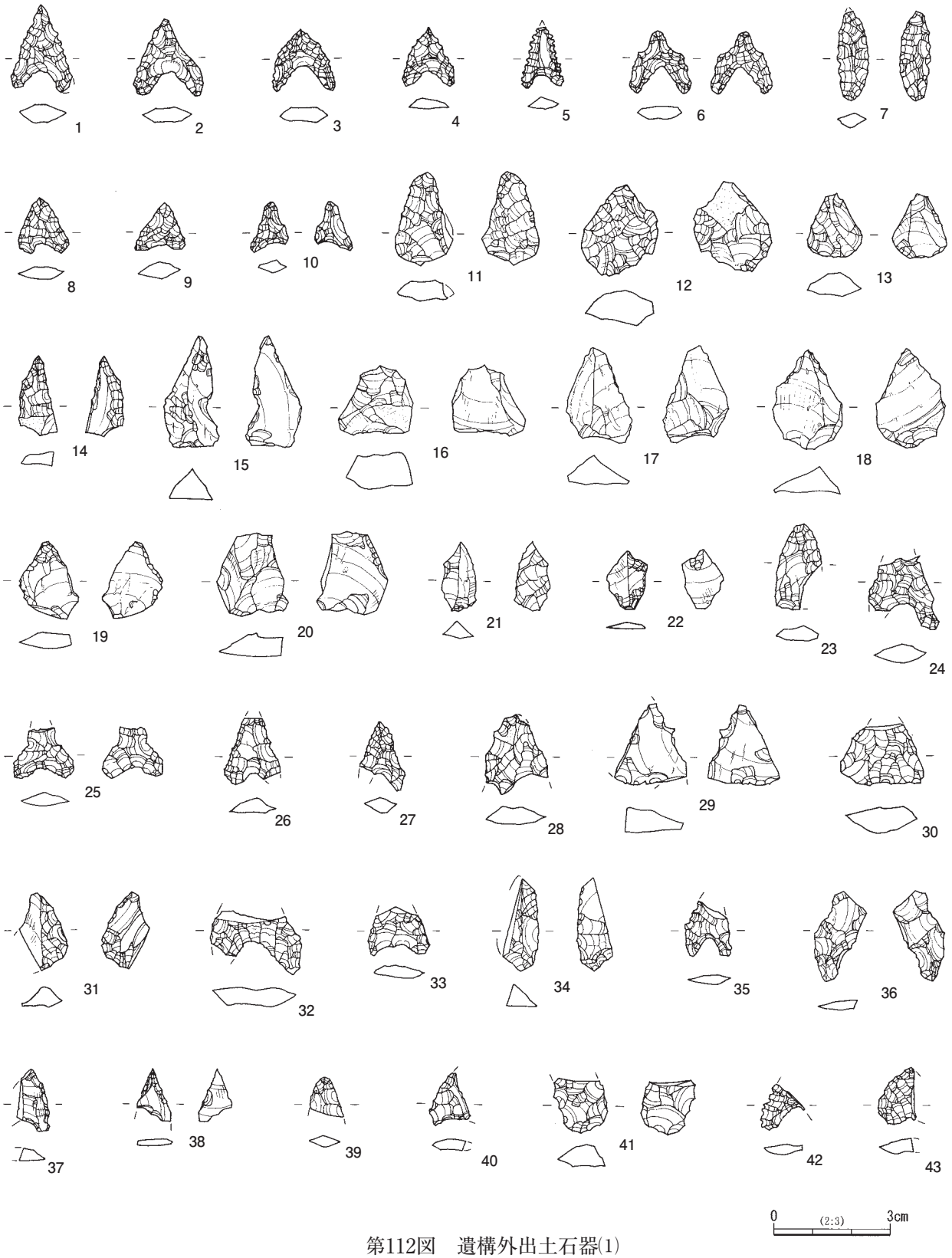
77～79はスクレイパーである。チャート製のスクレイパーが３点出土している。77は下端部に刃部を設定したもので器種としては掻器といえよう。78は側縁を加工しており削器に近い。79は礫の表皮部分を素材として採用したもので剥離面のみに剥離が施されている。

80・81は石錐である。２点とも先端部が欠損しているため確実に錐とはいいきれないが欠損部の断面や表裏面の加工から石錐とした。

44～46・82～96は楔形石器である。44～46は黒曜石製の楔形石器と思われる。44では主剥離面での剥離が著しく、表面では調整程度の剥離である。45は縦長の剥片を折断したもので、上部は両面から調整が施されている。46の表面には細石刃剥離痕のような痕跡が残されている。裏面でも剥離されているためより楔としての条件を備えたものといえよう。82～96はチャートを主とした楔形石器で2/3はチャート製であ



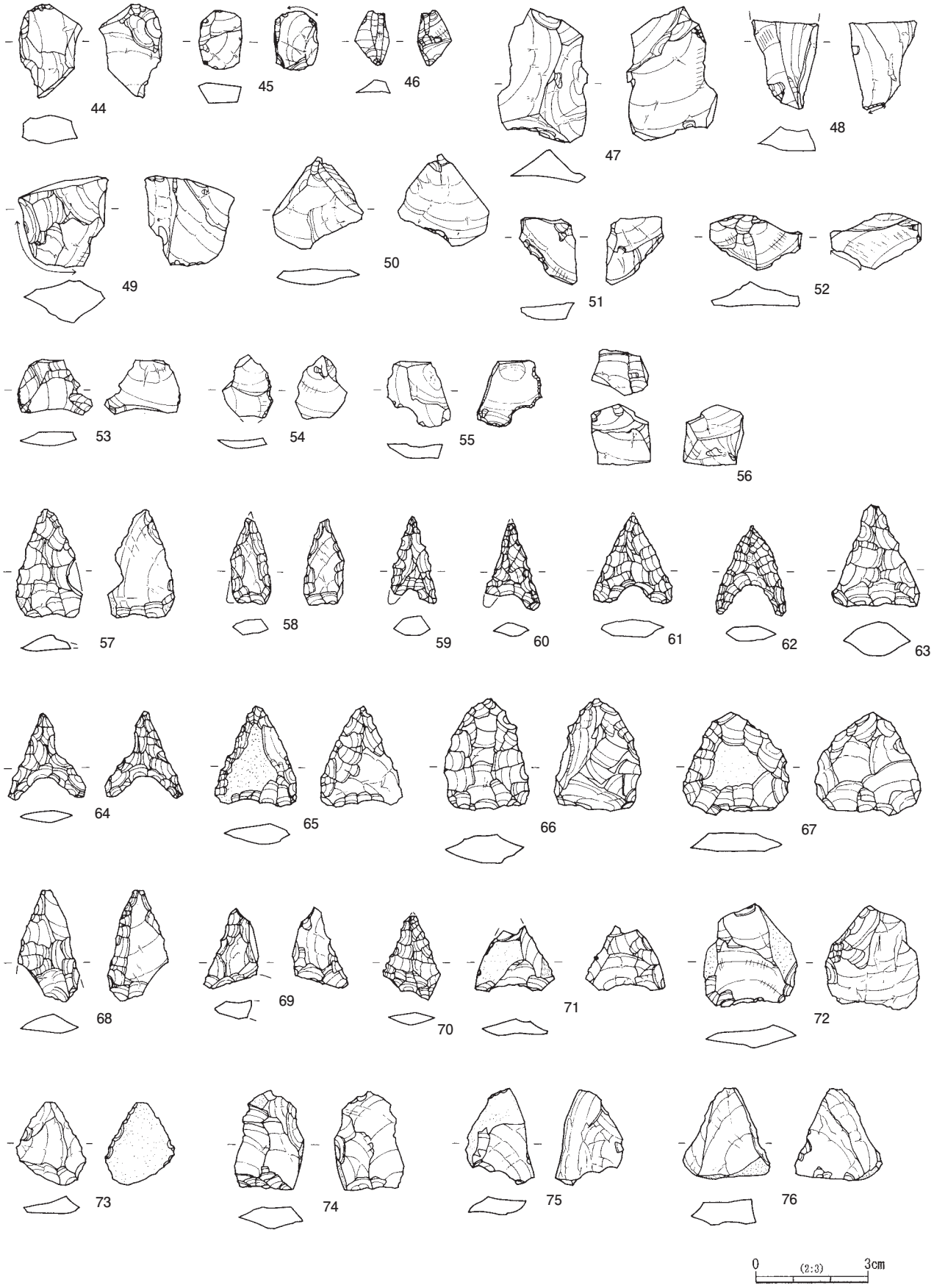
第111図　遺構外出土土器（東地区４）、土製品



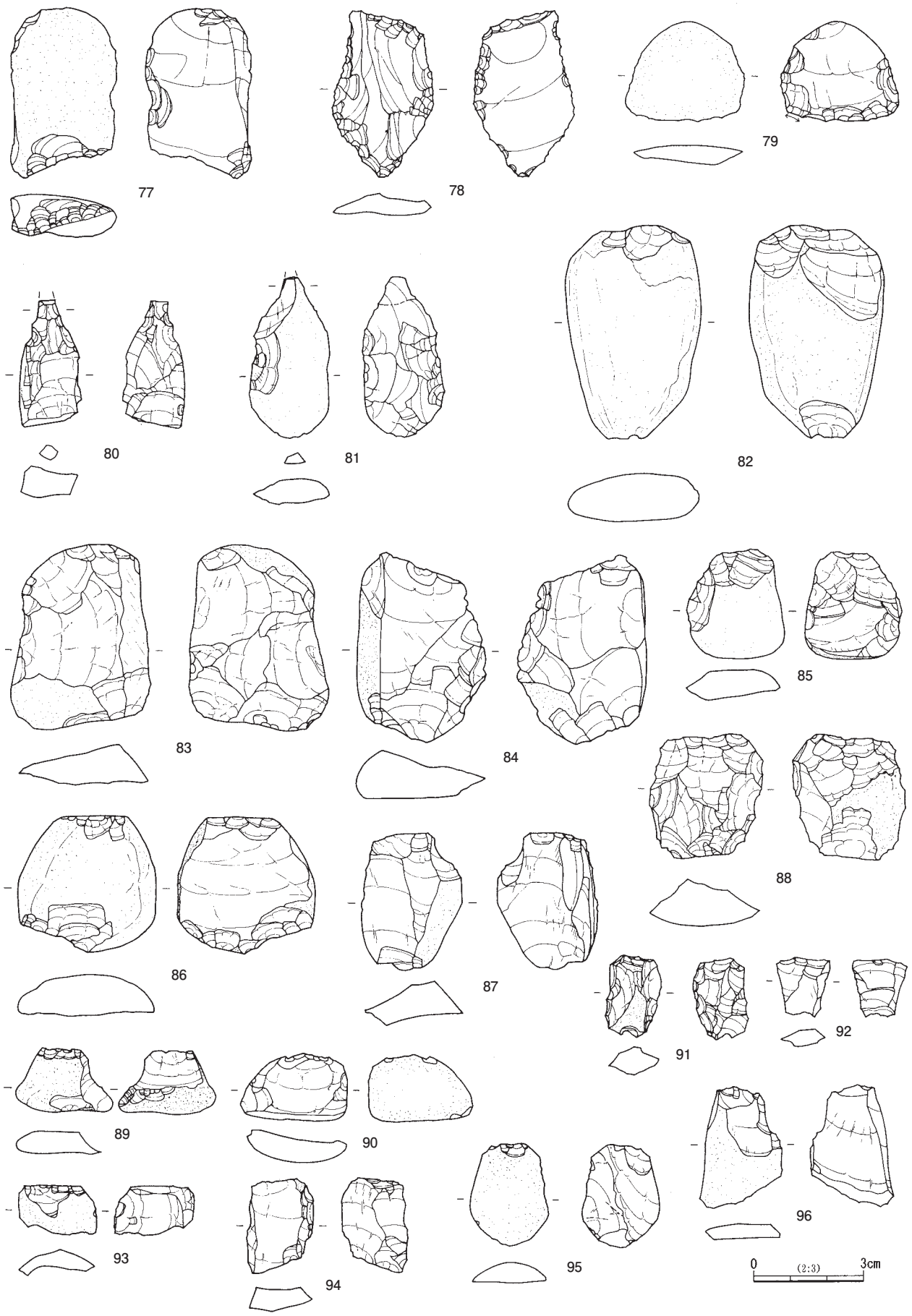
第112図　遺構外出土石器(1)

る。82は上端部に表裏から大きな剥離が認めらる。83・84も雑駁な剥離により刃部を作出したものである。86は上下端に両面から剥離しており楔らしい石器となっている。89以下は小型品で表皮部分がみられるため素材となった礫は拳大以下の小礫であったと思われる。95・96では簡単な剥離で刃部を作り出している。

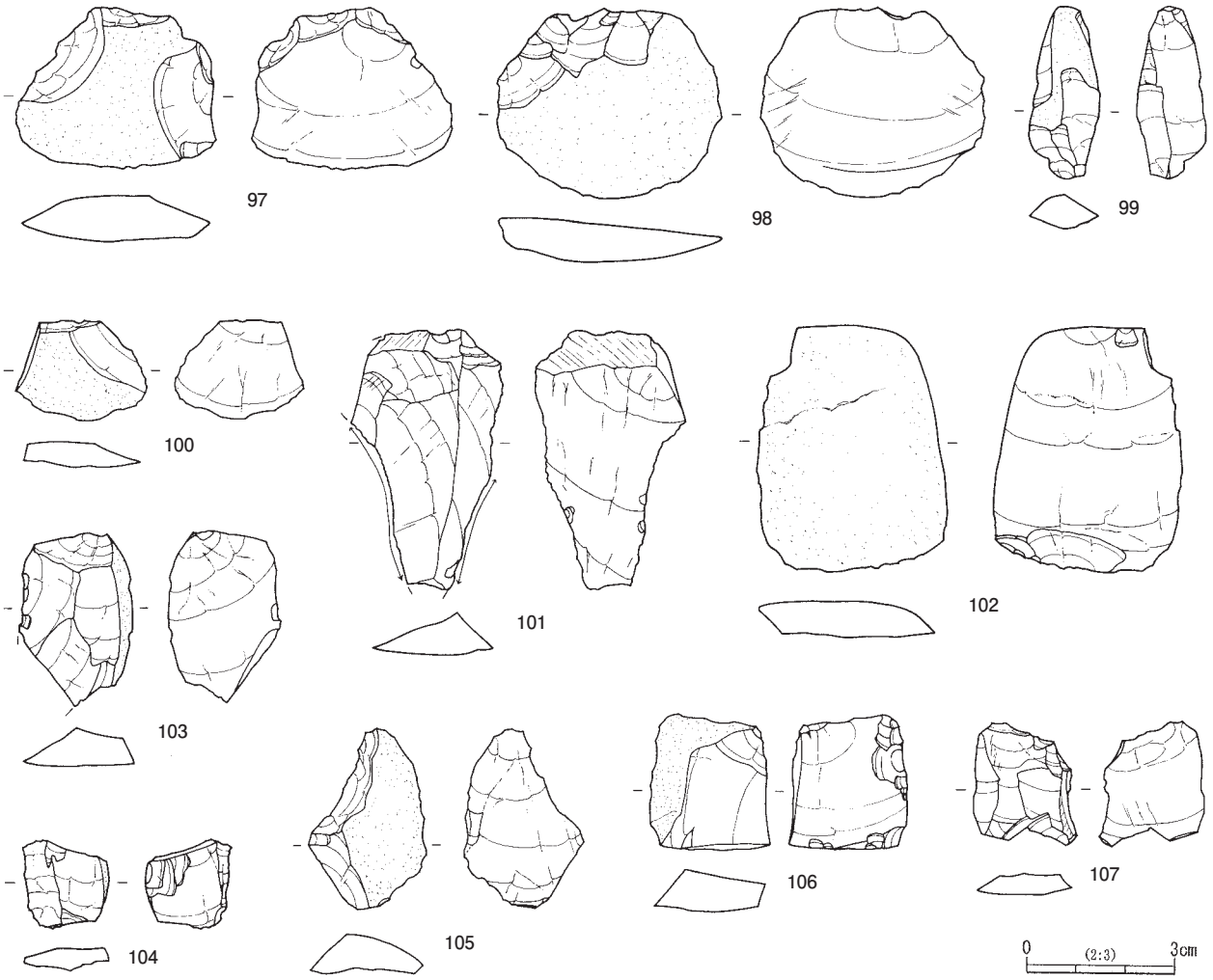
47～55、97～107は剥片である。47～51は表裏面の一部に二次剥離が認められる。52～55は側縁に微細



第113図　遺構外出土石器(2)



第114図　遺構外出土石器(3)



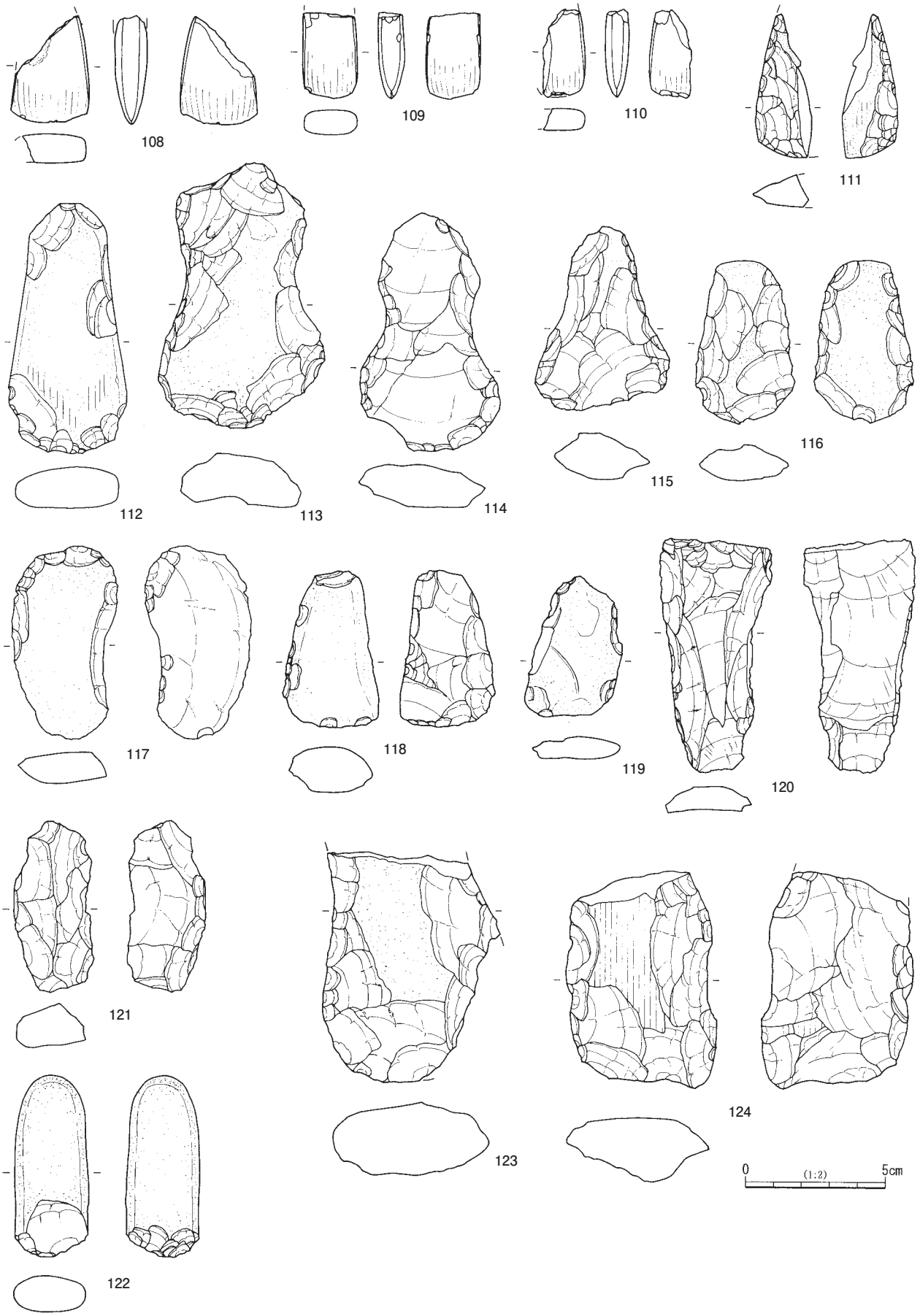
第115図　遺構外出土石器(4)

な調整痕が付されている。97・98・100は石斧製作時に剥離された剥片と考えられる。101は縦長剥片で両側縁では刃こぼれ痕がみられる。102は楔形石器の素材ともいえる。106は石器として使用されたらしく裏面の一部には二次剥離が認められる。

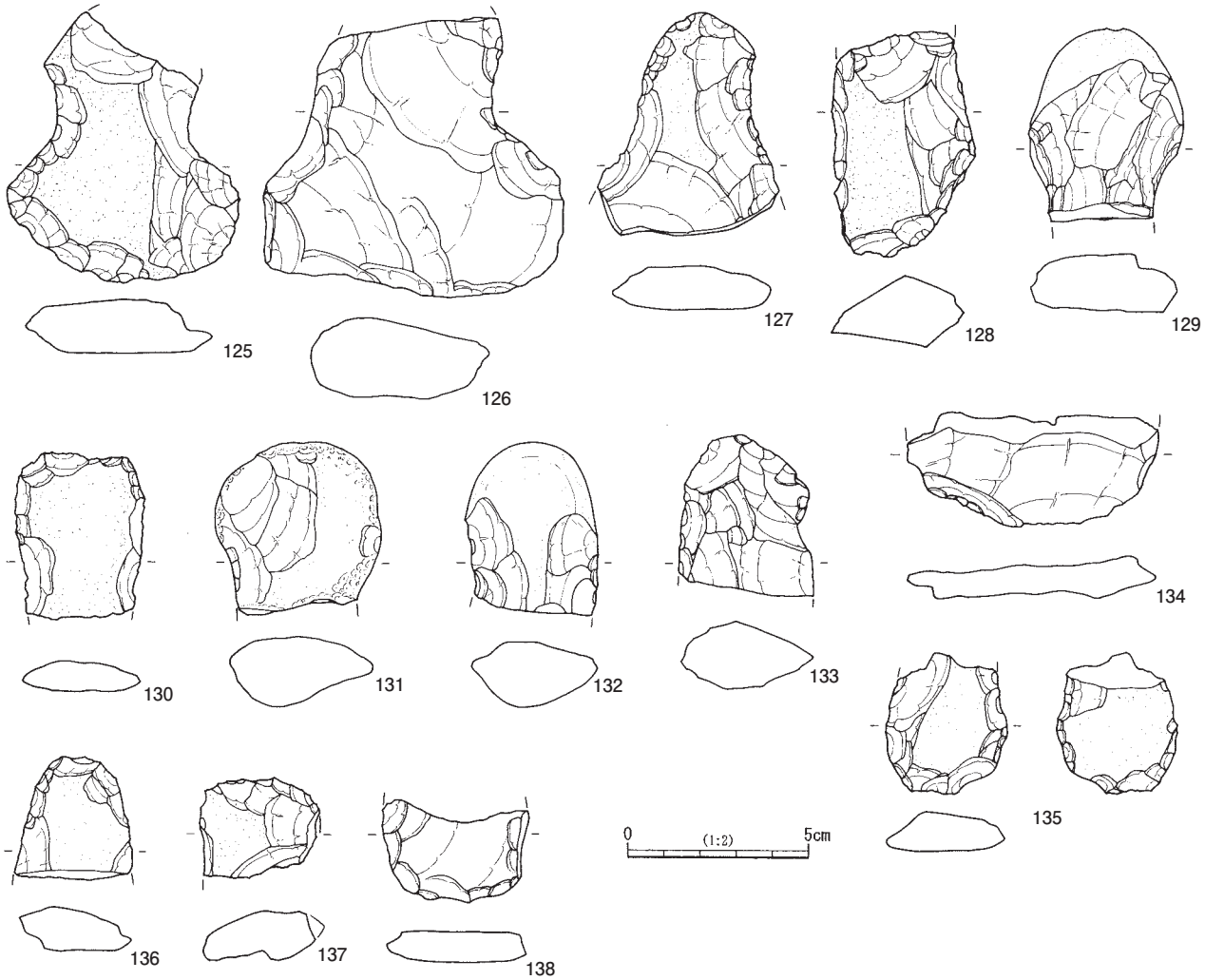
56は石核である。きれいな剥離面はみられないが、平坦面を打面として数枚の剥片を剥ぎ取っている。

108～110は磨製石斧で３点出土した。いずれも頭部や側面まで欠損した小型の磨製石斧である。108の刃部は広がり、109は平行に作られている。

111～138は打製石斧である。111は裏面の一部に磨製の痕跡を認めることができる。以下の石斧と比較すると、側面の整形や鋭利な刃部から磨製石斧を再利用したものと考えられる。112～122までは完形品となる。112は扁平な河原石の両端を簡単に整形して打製石斧としている。117・120は剥離した素材を利用して製作している。123～138は破損部がみられるものである。残された頭部をみると129・131・132では自然面の加工まではなされていないため手頃な大きさの礫を加工して成品としたものであろう。また石材についてみると、28点中16点がホルンフェルスによって占められている。次が砂岩の５点となり、明らかにホルンフェルスに偏っていることが理解できる。この点、前述した97・98の剥片の存在を考慮すると、少なくともホルンフェルスを用いた石斧類は、遺跡まで礫を運び込んで製作していたものと思われる。つまり遺跡から遠くない範囲で石材を獲得できたものと考えられる。



第116図　遺構外出土石器(5)

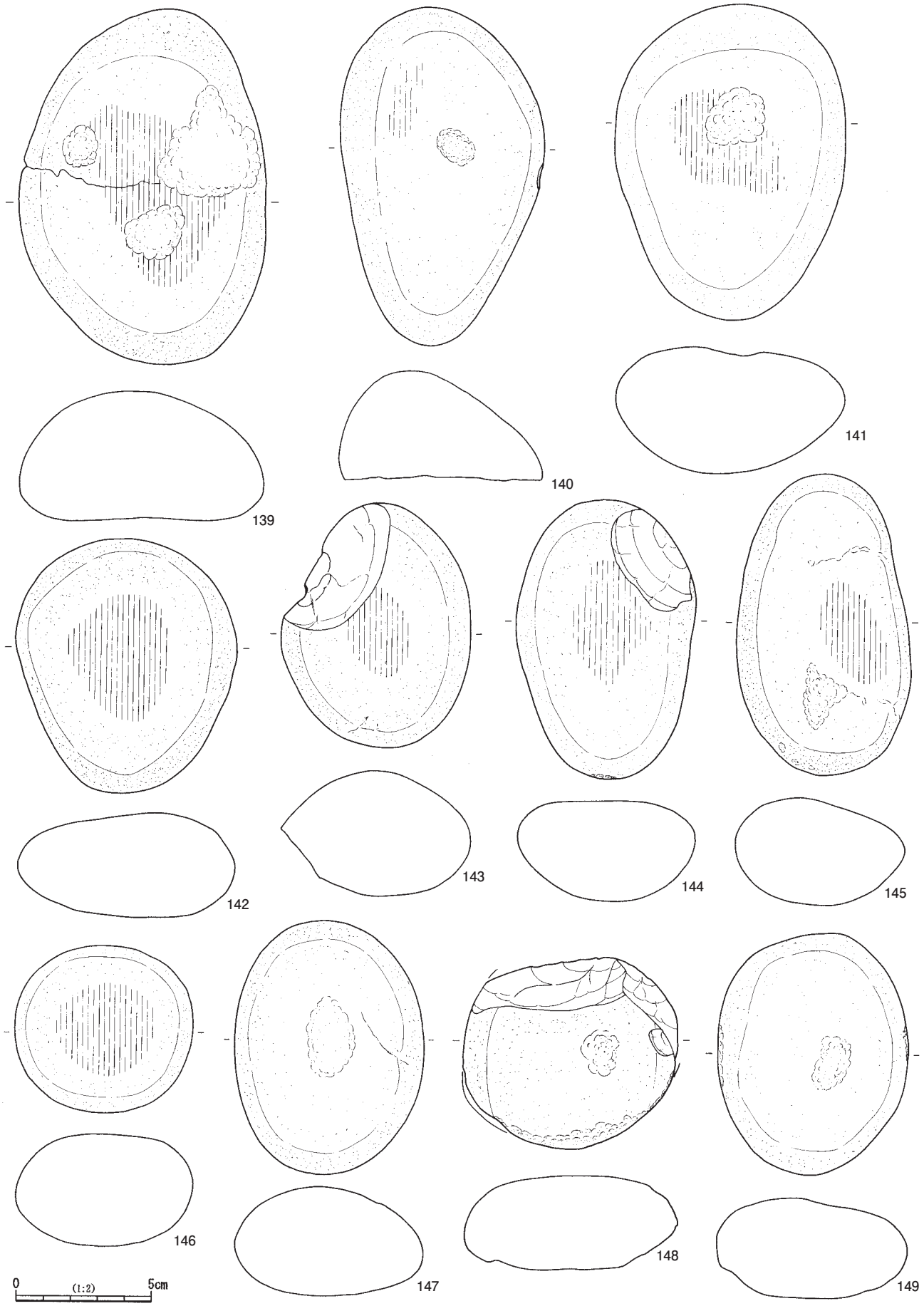


第117図　遺構外出土石器(6)

139～154は磨り石である。ここでは側面に打痕が残されているものを含めて磨石として取り扱った。これらの中には表裏面の一部が磨耗により滑らかになっているもの（破線部）が少なくない。これは石皿との組み合わせの中では考えられないことであり、石材も石英斑岩・砂岩が多用されていることから、用途の差は明らかであろう。一方、敲石ではこのような事例はほとんどみられない。

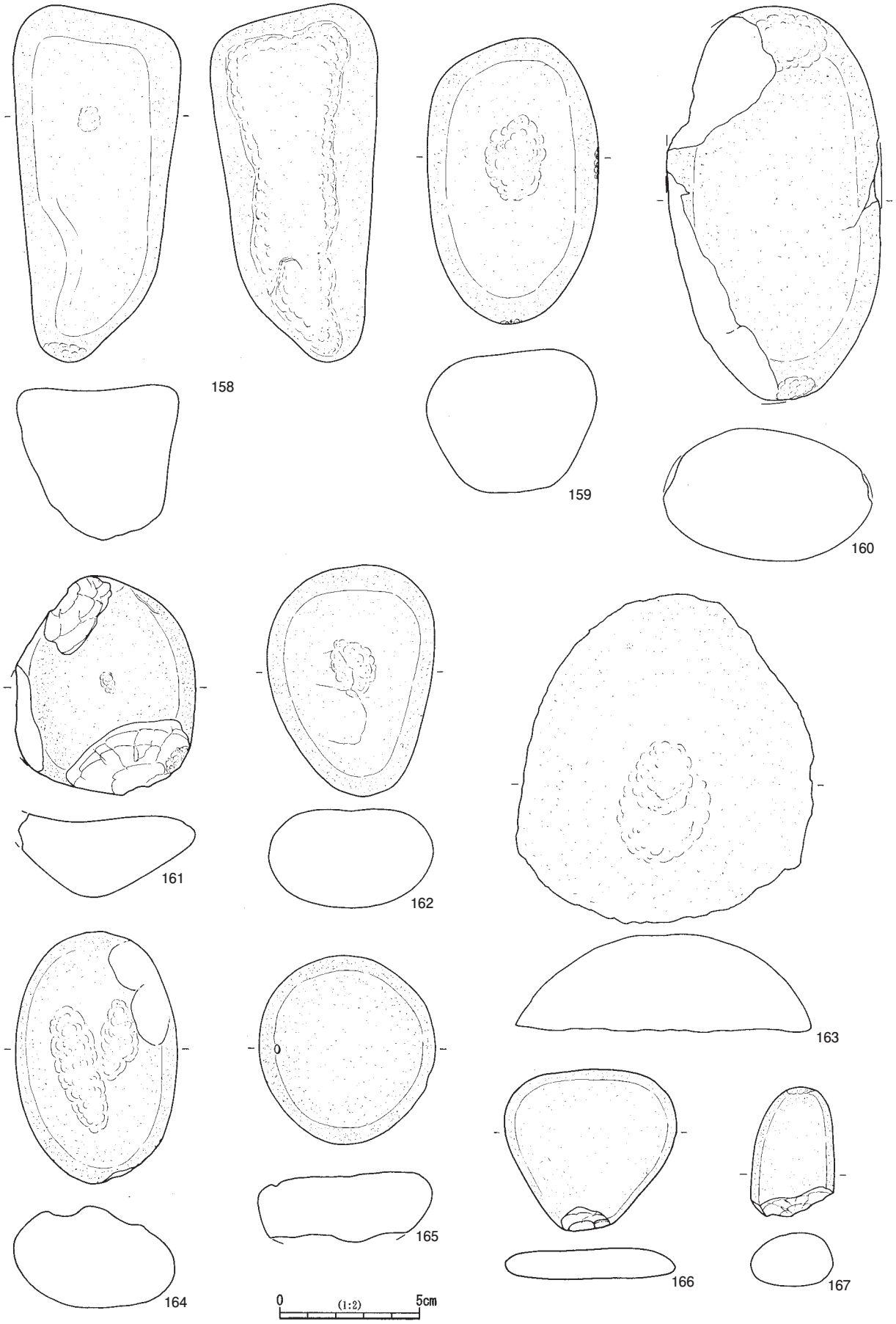
155～167は敲石である。表裏面や側面に敲打痕のある礫13点を図示した。これらの形や大きさは千差万別であり、打痕の範囲や位置も様々といえる。158は側面を広く使用しており、152・154・159では表面中央部に打痕がみられる。166では下端部に打痕がみられるため剥片剥取用の道具と思われる。また、163は径10数cmの大きな球形を呈した礫の一部を利用したものであろう。中央部には打痕がはっきりと残されている。SI-002やSI-008で出土した球形敲打具と共通する石器であったものと思われる。

168～170は石皿である。３点はいずれも欠損品である。168は約1/4が遺存するもので、裏面では脚部を作り出している。また円形の窪みが７か所にあり、凹石としての機能も保有していた。他の２点は小片である。169・170は同一個体と考えられる。同一地点から出土した石皿片で、石材も特徴的な色合いを呈した褐鉄鉱砂岩である。



第118図　遺構外出土石器(7)

第119図　遺構外出土石器(8)



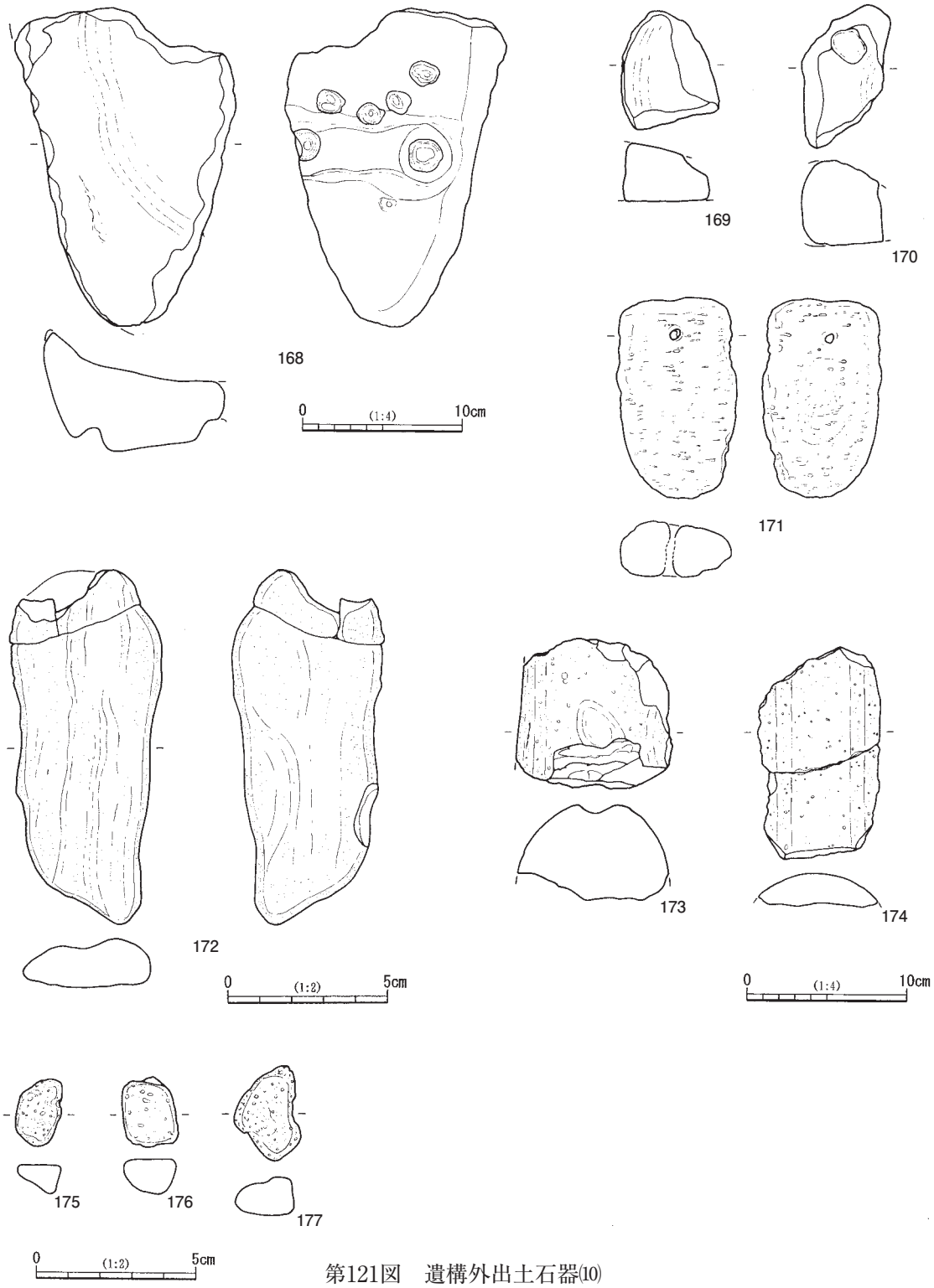
第120図　遺構外出土石器(9)

4　石製品（第121図）

171・175～177は軽石である。171は穿孔された成品である。175～177は破損品の類となろう。

砥石（172）　砥石が１点のみ出土した。一部破損しているが中央部には溝状の凹みが認められる。矢柄研磨用の砥石と考えられる。

石棒（173・174）　同一グリッドから３点が出土したもので２点は接合した。径は12㎝～13㎝となる。これらも同一の石材である点から同一品とみなされる。時期的には中期としてよいであろう。



第121図　遺構外出土石器(10)

第６節　遺構・遺物からみた久保堰ノ台遺跡

１　集落と土器群

これまで述べてきたように久保堰ノ台遺跡１と久保堰ノ台遺跡２は地形的にみても同一台地上に位置する遺跡であり、ここでは両者を合わせて久保堰ノ台遺跡として若干の考察を加えてみたい。

まず集落の形成過程を遺構出土土器から考えてみたい。調査によって確認された遺構には住居跡のほかに小竪穴・貯蔵穴・土坑がみられた。これらの遺構の中では最古の一括土器を出土したSK-307のフラスコピットとそれに伴う阿玉台Ⅲ式土器に注目したい。SK-308もその時期のフラスコピットとなる。この遺構を堅果類の貯蔵穴と考えると、一時的な居住ではなく長期の暮らしを想起することができる。仮にそのように考えた場合、この時期の住居跡は検出できなかったものの、複数の住居跡が存在し小さな集落を構成していたことは十分考えられる。次いで加曽利E式期を迎えると、とりわけ加曽利ＥⅡ式期からＥⅢ式期では住居跡が７軒、小竪穴４基・土坑５基・埋甕というような多種類の遺構が検出されるようになる。しかし加曽利EⅣ式期以降では、土器の出土は少なく確実な遺構は認められない。

後期に移行すると初頭の称名寺式期では土器は出土するが量的には少なく明確な遺構はSK-126の土坑が該当する程度である。次の堀之内式Ⅰ式土器に移行すると、住居跡２軒、小竪穴や貯蔵穴が４基ほど確認されている。その後、加曽利ＢⅠ・ＢⅡ式期では住居跡３軒と小竪穴１基が検出されているが、この時期を最後に遺跡から人々の痕跡は消えていく。

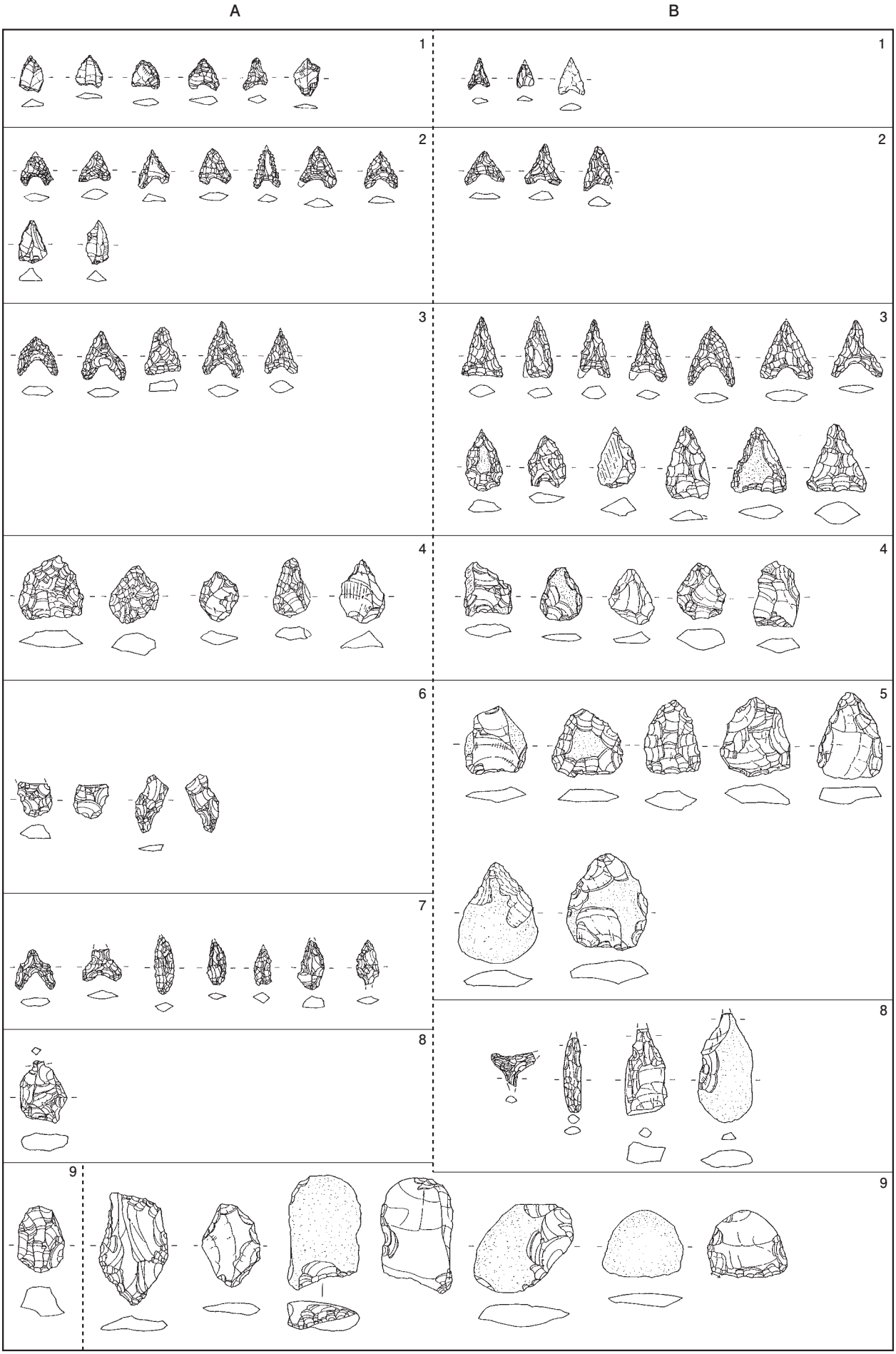
一方、出土土器を量的にみると、最多は加曽利ＥⅡ式となり、次に堀之内Ⅰ式、さらに阿玉台Ⅲ式・堀之内Ⅱ式などとなる。その間に存在する形式の土器群は僅かなものであった。

こうした遺構のあり方や出土土器の量から久保堰ノ台遺跡の消長を推測すると、集落が形成された時期は縄文時代中期の阿玉台Ⅲ式となり、同じく阿玉台式の終末期まで集落存続していたものと思われる。その後、加曽利Ｅ式期の初期の段階では集落として機能を見い出すことはできず、次の加曽利ＥⅡ式の段階に入ると、小規模ながらもはっきりとした集落が形成されることとなる。遺構・遺物の変遷からこの時期が最も充実した集落を形成していたものといえよう。中期終末から後期初頭にかけては再び衰退期と捉えることができる。だが、堀之内式期になるとSI-017やSI-019といった住居跡が確認されている。小竪穴・貯蔵穴といった住居跡の付帯施設的な性格を有する遺構の存在も集落構成を考えるうえで重要となる。この点から堀之内Ⅰ・Ⅱ式期は加曽利ＥⅡ式期に次いで集落の条件を整えていた時期と看做すことができよう。さらに隣接する緑岡古墳[2)]でも堀之内式期の住居跡が検出されている。その後、加曽利Ｂ式期に移行してもしばらくは集落としての機能は保持されていたようである。しかし、加曽利ＢⅢ式以降では遺構・遺物が検出されることはなかった。

２　石器群とその組成

本遺跡の調査結果から石器の器種と出土量について興味ある事実が提供された。そのため出土石器群を器種ごとに集成し、その特質と遺存状況等から当時の人びとと石器との関わりについて考えてみたい。

石鏃　本遺跡から出土した石鏃は形態・重量等から多彩で変化に富むものであった。ここでは小型品と整形の粗い石鏃に注目してみたい。そこで形態や重量といった点から６タイプに分類して集成図を作成してみた。なお、集成図１・２については全長と重量を基準として形状の整った未成品の一部も含めて掲載した。Ａには黒曜石、Ｂには黒曜石以外の石材を使用した石鏃を羅列した。



第122図　石器集成図(1)

小型タイプとした石鏃では、１の重量はほぼ0.2g～0.3gを計測し、２では0.4g～0.5gとなる。いずれにしても小さな石鏃で矢柄にセットするにも工夫を要するように思われる成品である。しかも狩猟の対象となる獣類も小型獣や鳥類に限られよう。ただ石材的には黒曜石が卓越していることを考えると、ガラス質という性質を利用して鋭い先端が作出できる点は矢として有効となろう。３は一般的にみられる大きさの石鏃であり、ここではチャートを主体とした石材で構成されている。

４・５は石鏃らしからぬ粗雑な作りとなっている。このタイプは早期の頃から出現しているため未成品とは考えられない。石材についてみると、ここでもチャートが主体を占めている。チャート製では表裏面にはしばしば自然面が認められるところから小さな礫からも製作できたという点は利点といえよう。

６は５の石鏃に対して黒曜石製の大型石鏃の使用状況を対象としたが、僅かな欠損品を確認できただけであった。つまり大型品を製作し得るような材料を入手できないか、あるいは移動時に貴重品として携帯していったものとも考えられる。

７は形態の異なるタイプを集めてみた。概して緻密に製作されたものであり、尖頭器に近い作りの石鏃が特徴的である。有茎部が欠損した石鏃もみられた。こうした精緻な作りは加工し易いガラス質の石材のみに有効であろう。

楔形石器　楔形石器にも大小が認められ、その形状から４分類してみた。使用されている石材はチャートが34点中18点と1/2以上を占めていた。ほかには黒曜石、頁岩、石英、ホルンフェルスなどで多彩な石材を用いている。このような石材の採用状況から楔形石器には身近な石材を利用して製作していたものと考えられる。石材と大きさの関係をみると、黒曜石はすべて小型品のみに利用されており、大型品では砂岩・安山岩・石英斑岩等がみられチャートの割合は減ずる傾向にある。また表面観察から自然面の残されているものが多く、これは石鏃にみられる傾向と一致するところでもある。

石錐・スクレイパー　剥片石器では石錐やスクレイパーも少ないながらも出土している。ここでも使用されている石材をみるとチャート等によって構成され、黒曜石は僅少である。錐ではすべて先端部が欠損した状態であった。反面、スクレイパー類は原形を保ったままであり対称的なあり方を示している。

石斧　ここで図示した磨製石斧は、破損品も含めて全14点を掲載した。そのうち完形品は小型品の２点だけで、刃部の一部欠損品が１点みられた。そのほかは再加工しても目的とする石斧に整形することはできないと判断し廃棄されたものであろう。また使用されている石材についてみると、緑色岩やホルンフェルス、砂岩など多彩であり器形による石材の選択はみられない。また１点のみ久保堰ノ台遺跡１から出土したチャート製の石斧を取り上げた。細部加工に用いたものであろうが類例は少ない。こうした状況を考慮すると、磨製石斧はかなり大事に扱われていたようであり、集落の移動に際しては携帯していったものとみて間違いあるまい。

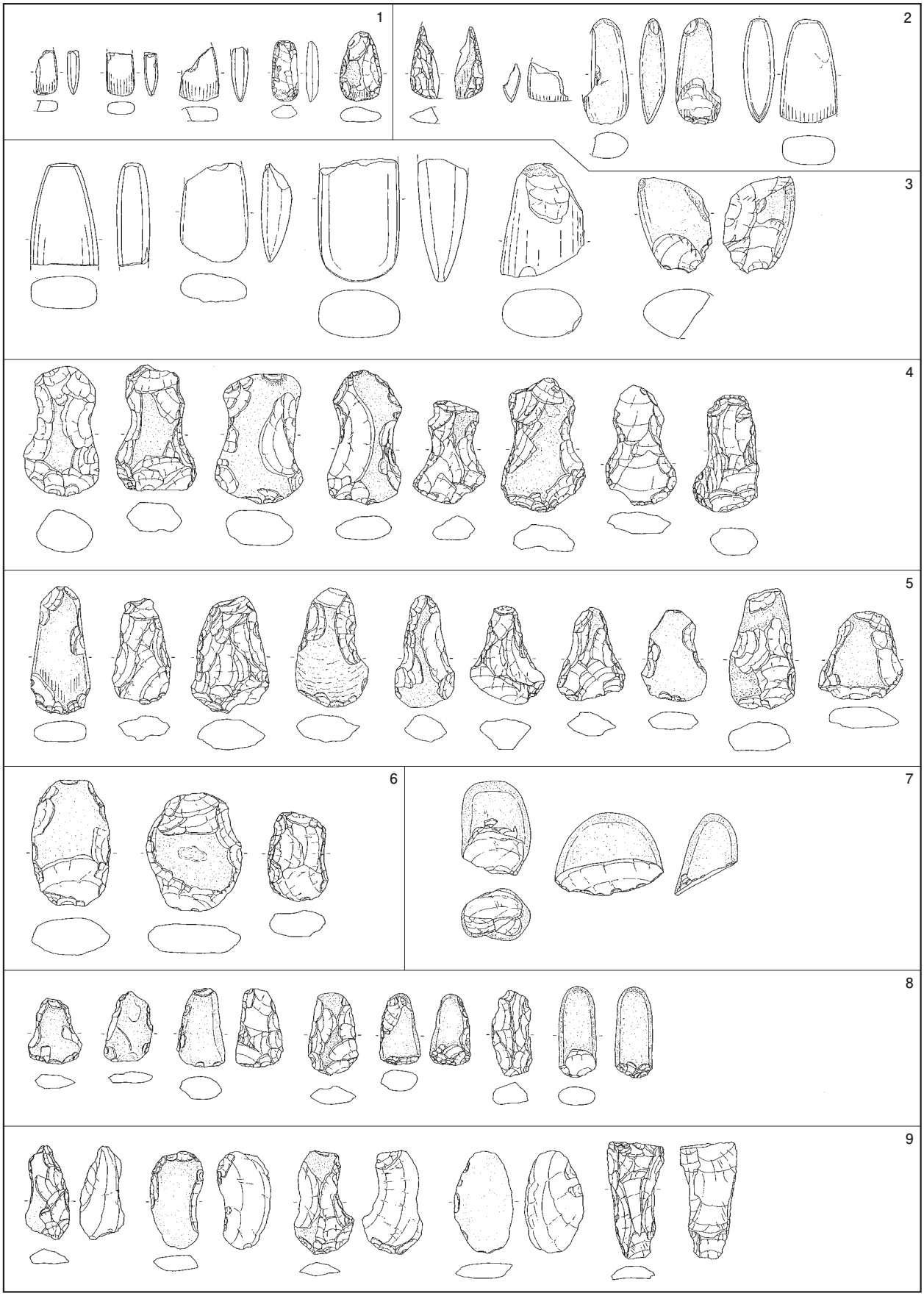
一方、打製石斧の出土は多く破損品まで含めると91点が出土している。このため、ここでの掲載資料は完形品のみとした。打製石斧は大別すると分銅形・撥形・短冊形に分類できることはよく知られている。本遺跡出土品では図示したように分銅形と撥形は多くみられるが、短冊形は図示８・９の一部と破損品に若干みられる程度であった。ほかに図示６のような楕円形を呈するものもあるが、量的には僅少といえる。石材ではホルンフェルスが多用され、次いで砂岩や凝灰岩となる。また磨製石斧にみられたチャート製も２点が確認されている。さらに大型剥片を利用し、周囲を軽く整形して石斧（第124図－９）に仕上げていることも興味深い。石器製作という点からみると、第113図に示した一部には石斧製作時に剥離された

第123図　石器集成図(2)

ような剥片も存在しており遺跡内でも打製石斧の製作が想定できる。いずれにしてもホルンフェルスや砂岩にみられる使用可能な石斧が多数廃棄されているということは磨製石斧と比較したとき明らかに石材が安易に入手できるということを示唆するものであろう。

磨石・敲石　磨石と敲石は兼用されている場合が多々みられる。そのため、ここではまとめて記載することとした。まず磨石について分類すると３タイプ（１～３）となる。１としたものは石皿製作に使用される安山岩と同質の石材であり、石皿とセットで使用されたものと考えられる。次いで砂岩や安山岩、石英斑岩を採用し、敲石としても利用したもの。最後に敲石として使用されてもいるが、器面中央部に滑らかな擦痕が認められるタイプがある。１・２は石皿と磨石のセット関係で理解できるが、３のタイプは前者とは異なる使用法となろう。滑らかに磨かれたような表面からは皮をなめす時などに使用されたものと推測できる。

一方、敲石としたものは形状によって四分類が可能となった。そのうち４としたものは一般的にみる縦長タイプの敲石となる。５は小型品で、さらに細分すれば縦長と楕円タイプとなろう。前者は剥片剥離などに用いられたものと思われる。後者は磨石としても使用されていたものであろう。６の場合、その大半は磨石との兼用品であることは疑いなかろう。ただ、打痕が顕著なものだけをここに含めた。７は２点の



第124図　石器集成図(3)

みの出土であったが、球形を呈しておりともに表面は被熱し一部が剥落していた。このため使用痕等の観察ができるような状態にはなかった。欠損品は遺存部のみで4.75kgを計測する。もう１点はやや小さ目で2.98kgを計測する。いずれも住居跡からの出土品でその重量は抜きんでており、欠損品では1/2弱が失われていることを考慮すると約９kgの重量と考えられる。しかも住居跡からの出土ということで道具としての使用を目的として搬入されたものと考えてよいであろう。用途としては持ち上げてから落として物体を破砕することが主となろう。そのため敲石として分類した。いずれにせよ稀有な例といえる。

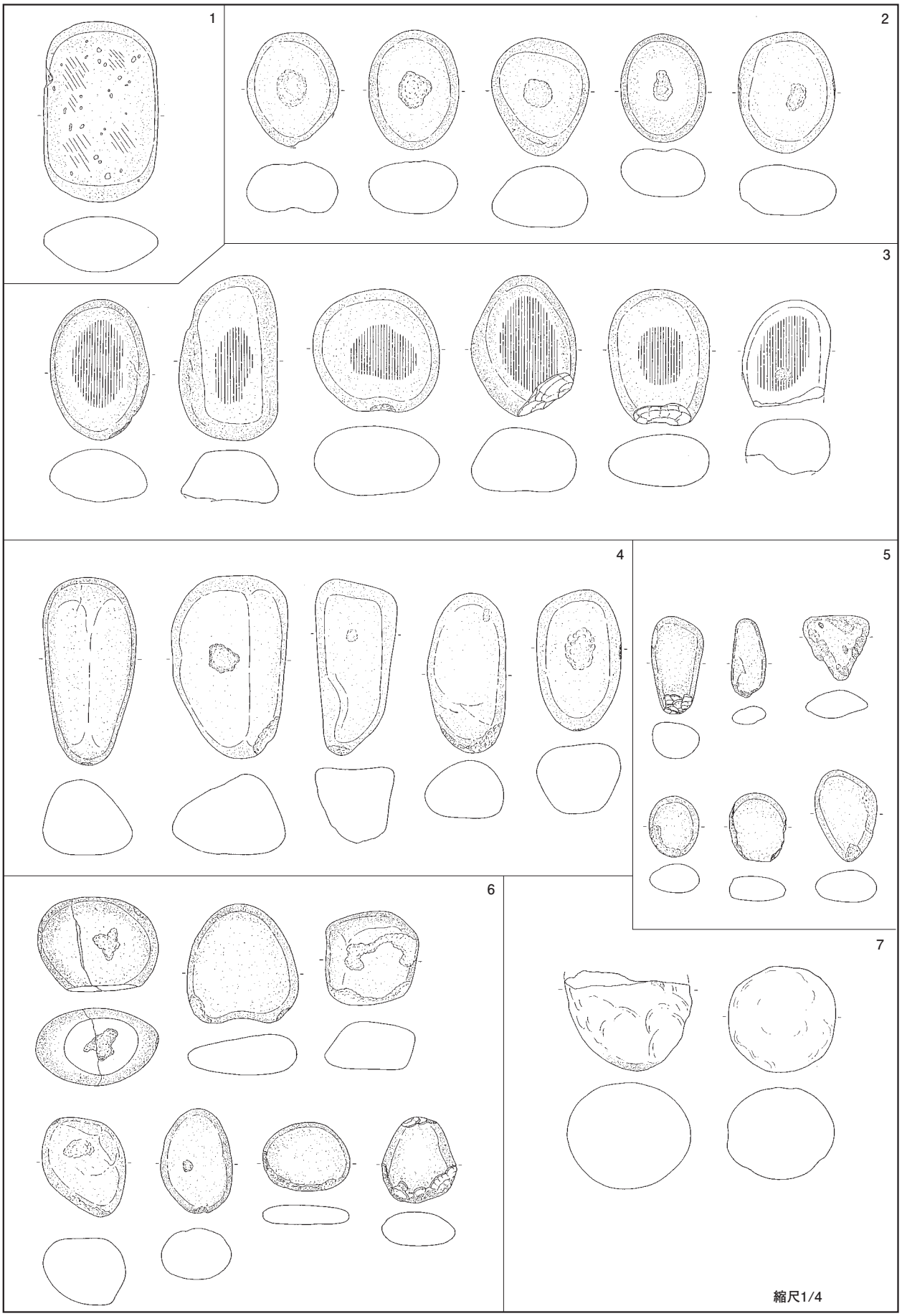
石皿・凹石　石皿や凹石といった石器は調理には不可欠な道具であることはいうまでもない。特に石皿は重く大きな石器で完形品が残されていることは稀である。本遺跡でも廃棄された破損品が数点出土したのみであった。とりわけ石皿に適した石材は多孔質安山岩と呼称されるものであり、この種の石材は内部に小さな気泡がみられるため堅果類の種子を磨り潰すのに好都合であったらしい。しかし、房総の地では産出しないため貴重品の部類に入り、長期の使用により底部が磨耗して壊れるまで使われていたことであろう。こうした点から石皿は磨製石斧同様に扱われていたと考えられる。

砥石　砥石と呼べる石器は３点出土している。２点は薄手で扁平な川原石を利用したもので表裏面に研磨痕が観察できる。他の１点は縦方向に浅い溝が認められる。この点を重視すれば矢柄研磨具として使用されたものであろう。ただ磨製石斧の刃部を磨いたような砥石はみられなかった。この種の砥石は石斧とセットになっているため残されることはないのかもしれない。

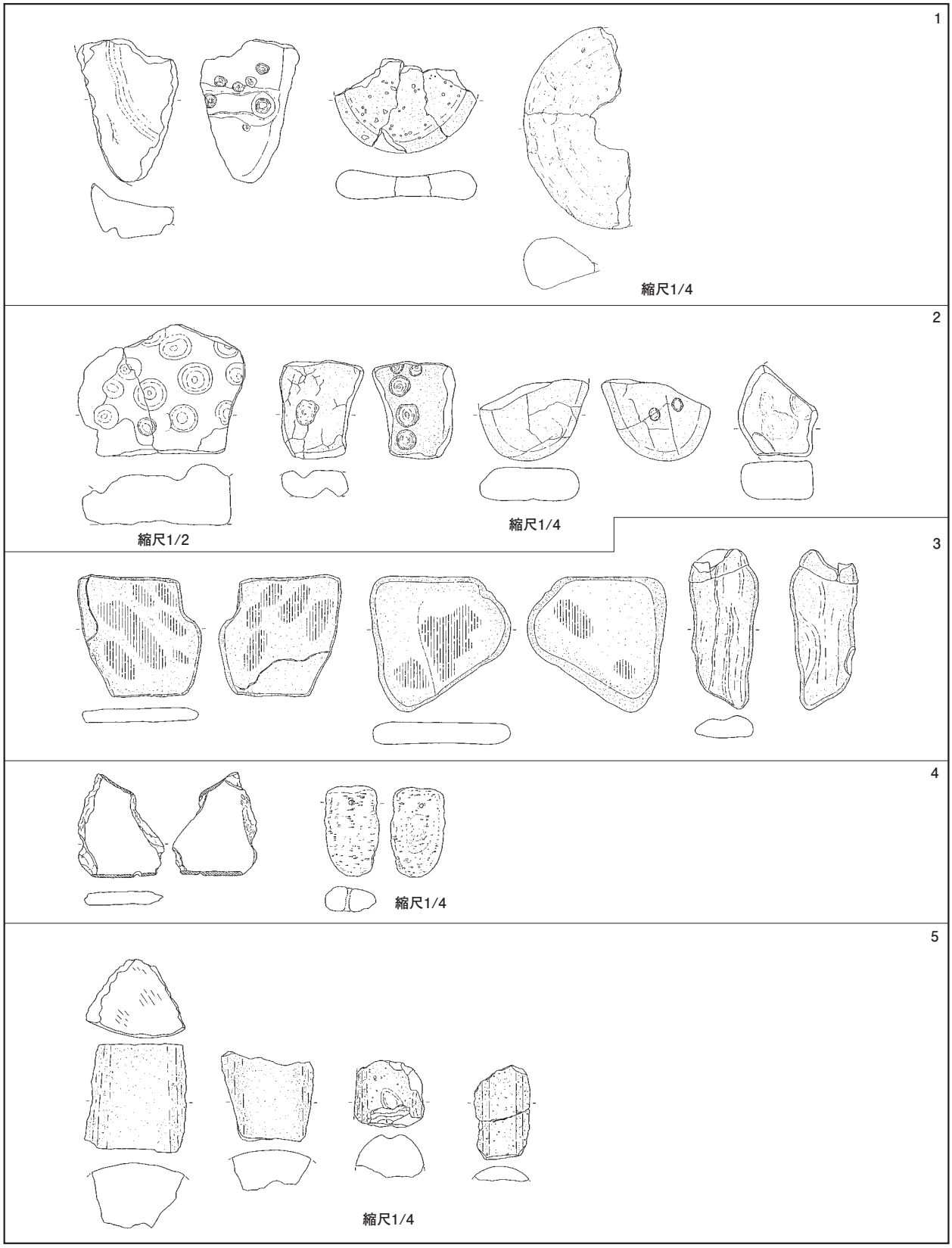
石錘　破損しているものが１点出土した。石錘ではないが漁具関連遺物として軽石製の浮子も掲載した。ほかに土錘も数点出土しており養老川での漁撈が想定できる。養老川流域では堀込貝塚や上高根貝塚が最奥部に位置する貝塚[3)]となり、高滝湖周辺では確認されていない。こうした状況から本遺跡でみられる漁撈具は淡水魚の捕獲に使われたものと考えることが妥当といえよう。

石棒　特殊な事例として掲載した。５点の破片が出土し接合もみられた。破片からの推定径は10㎝を超える太さとなる。中期の典型的な石棒といえよう。石材は安山岩と流紋岩であったため少なくとも２点の石棒が存在していたものである。この種の石材も房総では産出しないため他地域から搬入されたことは間違いあるまい。出土した５点のうち２点は廃棄後、日常的に使用される石器として再利用されている。１点は平坦面に若干の研磨痕が認められ、他の１点は周囲を少し整形し凹石としている。このように祭祀に使用された神聖な石器も目的を達成すれば破砕し廃棄する。そこで再利用という点を考えると石器石材に恵まれない房総の特質とも思われる。

以上、出土石器群について推測を含めて気づいた点を述べてきたが、長期にわたって営まれてきた集落という視点から残された石器群を考えると、多彩な器種と消耗する特定の器種（石鏃・打製石斧）、携帯品といった器種のあり方は集落の動向と深く結びつく一面を残しているようである。また石器石材に視点を移すと、材料となる円礫が安易に入手できる地域では成品であっても廃棄される傾向が認められる。一方、産地の限られた石材（搬入石材）では製作される石器（石皿・磨製石斧・石鏃の一部）の破損品のみが残されることになる。



第125図　石器集成図(4)



第126図　石器集成図(5)

３　石器製作跡と黒曜石

ここでは久保堰ノ台遺跡２として調査した部分の整理作業において黒曜石の成品及び剥片等の出土が一部の地域に集中していたことが判明した。そこで中心地点を確認するとともに成品、剥片等を一括して整理・分類してみた。その結果、黒曜石の総出土点数は1085点を数え、住居跡からの出土は531点、そのほか遺構とグリッド出土は554点となった。その中でもSI-005（155点）とSI-014（142点）では他の住居跡を大きく引き離した数値を示していた。そのため再度黒曜石について緻密な点検を重ねてSI-005では石鏃６点のほかに剥片５点を含めて11点、SI-014では石鏃11点と剥片１点の12点を実測対象とした。この数値をみても２軒の住居跡で石鏃を製作していたことが推測できる。このように石材と器種、加えて石器成品の数量を追っていくとSI-004ではチャート製の石鏃と剥片が出土しており、SI-005でもチャート製の石鏃５点と打製石斧１点が出土している。同じくSI-014でもチャート製の石鏃、楔形石器、石錐、剥片とともにホルンフェルス製の磨製石斧や打製石斧が出土している。さらにSI-008ではホルンフェルスと砂岩製の打製石斧が９点、石英片岩１点を加えて計10点の打製石斧が出土した。しかもこれらの住居跡はいずれも中期の加曽利ＥⅡ式に属する土器群を出土する住居跡であった。このような事例をもとに住居跡から出土する特定器種の石器から石器製作を考えると、本報告に掲載した石器群の多くは中期に製作されたものと考えてもよさそうである。そして石器に使用される石材は神津島産の黒曜石[4)]と周辺でみられる万田野礫層から採取されるチャート等により石器を製作していたものであろう。

このような石器製作という点を重視すれば、本遺跡では縄文中期前半から開始された集落の形成は中期中頃の加曽利ＥⅡ式期にその盛期を迎えたものと推測することができる。

注１　鈴木道之助1981『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』 柏書房

２　本事業の関連で調査された遺跡であり、堀之内式期の住居跡が数軒検出されている。

３　千葉県教育委員会1999『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)』－千葉市･市原市･長生地区（改訂版）による。

４　黒曜石の産地推定では、付編に記載されているように住居跡出土の石鏃を中心として50点を分析した。その結果、長野県産（諏訪・和田）が７点みられたが、ほかはすべて神津島産と推定されている。また、報告では触れなかったが、参考のため久保堰ノ台遺跡１遺跡（５点）と緑岡古墳群（５点）で出土した黒曜石を㈱パレオ・ラボの協力で分析していただいたがいずれも神津島産という結果が得られている。

第５章　結　語

これまで述べてきたように縄文時代における本遺跡の推移をみると、中期前半の阿玉台式期から小さいながらも集落が存在していたようである。その後、集落は中期中頃の加曽利ＥⅡ式の頃に盛期を迎えることとなる。中期の終末から後期初頭では一時的に集落規模は縮小傾向に転じるが、堀之内式期に移行すると再度充実した集落を営むようになる。そして次の加曽利Ｂ式土器が普及する頃になると人びとはこの地を離れていったことが調査の結果から想像できる。ただ調査は道路幅のみといった限定的なものであるため詳細を把握することはできないまでもおおむね縄文時代の様相を明らかにすることはできた。

また縄文時代中期は加曽利貝塚をはじめとして東京湾沿いに大規模貝塚を形成した時期でもある。養老川下流域では山倉地区にみられる貝塚群や瓜ヶ岱貝塚、堂谷貝塚、上高根貝塚などが下流域に形成されている。しかし中流域に入ると貝塚が形成されることはなく、本遺跡のような小規模な集落を営む遺跡が多くなるようである。つまり貝塚の形成は地形に左右されることとなり、流れの激しい河川では独木舟を自在に操ることができないため中流域から上流域では海への依存度は低下するようである。

出土遺物についてみると、土器では、SI-002・005・006・014では中部地方に分布する曽利式土器、さらにSI-005・006で東北南部を起源とする大木式土器が検出されている。特に後者は房総北部域ではしばしばみられるが、南部の山間部での出土例は少なく貴重な類例となろう。しかも隣接する緑岡古墳群[1)]でも住居跡から一括品が出土しており大木系文化圏との交流という点でも興味は尽きない。また石器では前節でも触れたように小型の石鏃、楔形石器をはじめ石器とは思えぬような巨大な敲石は類例をみないものであった。そうした点からも本遺跡の調査では貴重な資料を提供してくれたものといえる。

縄文時代が過ぎて弥生時代が到来すると、前述したように養老川の蛇行によって形成された番後台の台地に集落を営み、狩猟・採集の生活から農耕へと生活基盤が変化する。だが本遺跡では土器片等の痕跡を認めることはできなかった。以後、古墳時代を経て中世まで今回の調査により遺構・遺物は検出されることはなかった。

近世に属する遺構としては調査区の西側や４Ｐ区から６Ｑ区にかけて斜行する溝状遺構をあげることができる。これらの溝から出土した陶磁器類を観察すると、古い磁器では16世紀後半と考えられる中国産の染付皿が出土している。この磁器は、当時一般庶民が入手できるものではないため、興味深い出土品といえよう。他では17世紀から18世紀の皿･碗･擂鉢など生活臭の強い陶磁器がみられた。そこで明治期に「参謀本部陸軍部測量局」で作成された地形図で遺跡周辺をみると、遺跡の背後には平坦な台地が広がり田畑として耕作されていたことが理解できる。このことから遺跡周辺は江戸時代から既に水田や畑地として耕作されていたと考えて間違いあるまい。この点、調査中にみられた表土・遺物包含層は粘性に富んだ土壌であるため水田としても利用できる土地であり、調査によって検出された溝は排水路としての役割を果たしていたものとも考えられる。いずれにしても調査によって得られた近世陶磁器類は当時の人びとと久保堰ノ台の地との関わりを示す証左となる資料といえる。

注１　古墳のほかに縄文中期から後期の住居跡が７軒検出され、加曽利ＥⅡ式の住居跡から出土している。

付　章　黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展（パレオ・ラボ）

第１節　久保堰ノ台遺跡1出土黒曜石製石器の産地推定

１　はじめに

市原市久保に所在する久保堰ノ台遺跡1は、養老川の北岸台地上に立地する集落跡であり、縄文時代中期後半（加曽利ＥⅡ式）を中心に、縄文時代中期～後期（阿玉台式～加曽利Ｂ式）にかけての遺物が出土している。ここでは、遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

２　試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器５点である（表１）。時期は、加曽利ＥⅡ式期とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジと精製水を用いて、表面の洗浄を行った。

表１　分析対象

資料番号	種類	遺構番号	遺構種類	注記No.	備　考
1	石鏃	SI001	竪穴住居	23	
2	石鏃	SI002	竪穴住居	20	
3	楔形石器			37	
4	剥片			26	
5	剥片			－	注記なし（一括出土）

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径８㎜、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月，2004など）。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計７元素のＸ線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

１）Rb分率=Rb強度×100／（Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度）

２）Sr分率=Sr強度×100／（Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度）

３）Mn強度×100／Fe強度

表２　黒曜石産地（東日本）の判別群名称（望月,2004参照）

都道府県	エリア	判別群	記　号	原石採取地
北海道	白滝	八号沢群	STHG	赤石山山頂･八号沢露頭･八号沢･黒曜の沢･幌加林道(36)
		黒曜の沢群	STKY	
	赤井川	曲川群	AIMK	曲川･土木川(5)
青森	木造	出来島群	KDDK	出来島海岸(10)
	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜(7)、八森山公園(8)
秋田	男鹿	金ヶ崎群	OGKS	金ヶ崎温泉(10)
		脇本群	OGWM	脇本海岸(4)
岩手	北上川	北上折居２群	KKO2	水沢市折居(9)
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前(10)
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	湯ノ倉(40)
	色麻	根岸群	SMNG	根岸(40)
	仙台	秋保１群	SDA1	土蔵(18)
		秋保2群	SDA2	
	塩釜	塩竈群	SGSG	塩竈(10)
新潟	新発田	板山群	SBIY	板山牧場(10)
	新津	金津群	NTKT	金津(7)
栃木	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢(22)
		七尋沢群	THNH	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)
長野	和田(WD)	鷹山群	WDTY	鷹山(14)、東餅屋(16)
		小深沢群	WDKB	小深沢(8)
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋西(11)
	和田(WO)	ブドウ沢群	WOBD	ブドウ沢(20)
		牧ヶ沢群	WOMS	牧ヶ沢下(20)
		高松沢群	WOTM	高松沢(19)
	諏訪	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台(35)、星ヶ塔(20)
	蓼科	冷山群	TSTY	冷山(20)、麦草峠(20)、麦草峠東(20)
神奈川	箱根	芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯(20)
		畑宿群	HNHJ	畑宿(51)
		鍛冶屋群	HNKJ	鍛冶屋(20)
静岡		上多賀群	HNKT	上多賀(20)
	天城	柏峠群	AGKT	柏峠(20)
東京	神津島	恩馳島群	KZOB	恩馳島(27)
		砂糠崎群	KZSN	砂糠崎(20)
島根	隠岐	久見群	OKHM	久見パーライト中(6)、久見採掘現場(5)
		箕浦群	OKMU	箕浦海岸(3)、加茂(4)、岸浜(3)

4）log（Fe強度／K強度）

そしてこれらの指標値を用いた２つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100／Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log（Fe強度／K強度）の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する方法である。この判別図法は、原石同士の判別図が重複した場合には分離は不可能となるが、現在のところ、同一エリア内に多少の重複はあっても、エリア同士の重複はほとんどないため、産地エリアの推定に問題はない。また、指標値に蛍光X線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせて算出しているため、形状や厚みなどの影響を比較的受けにくいという利点があり、非破壊分析を原則とし、形状が不規則で薄い試料も多く存在する考古遺物の測定に対して非常に有効な方法である。ただし風化試料の場合、log（Fe強度／K強度）の値が減少する（望月，1999)。試料の測定面には、なるべく奇麗で平坦な面を選んだ。原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に各原石の産地とそれぞれの試料点数、ならびにこれらのエリアと判別群名を示す。また、図1に各原石採取地の分布図を示す。

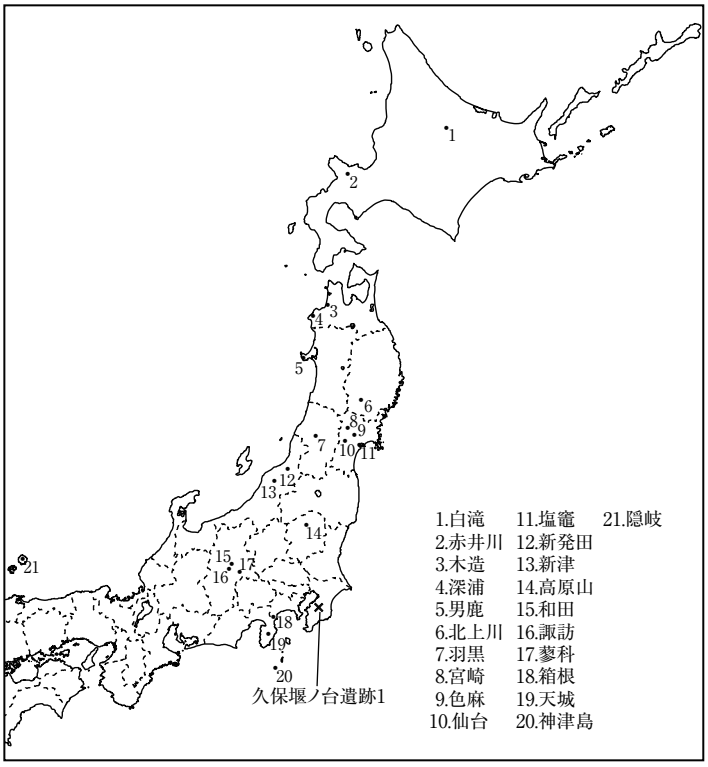


図１　黒曜石産地分布図（東日本）

３　分析結果

表３に測定値より算出された指標値を､図２､３に黒曜石原石の判別図に今回の石器５点の結果をプロットした図を示す。なお、図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、５点いずれも神津島エリア恩馳島群KZOBの範囲にプロットされた。表３に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。なお、同じ台地上に立地する近隣の久保堰ノ台遺跡２や緑岡古墳群においても産地推定を実施しており、やはり神津島産が主であったが、50点分析した久保堰ノ台遺

表３　測定値および産地推定結果

資料番号	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	$\frac{Mn*100}{Fe}$	Sr分率	$\log\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア	資料番号
1	186.7	99.2	1263.4	322.9	423.0	258.2	647.7	19.55	7.85	25.61	0.83	KZOB	神津島	1
2	224.3	119.0	1505.1	382.8	478.4	301.7	745.6	20.06	7.90	25.07	0.83	KZOB	神津島	2
3	244.8	127.9	1611.2	406.6	505.6	323.4	806.4	19.91	7.94	24.76	0.82	KZOB	神津島	3
4	215.6	115.6	1425.1	359.5	480.4	289.1	729.5	19.34	8.11	25.85	0.82	KZOB	神津島	4
5	248.0	132.1	1645.0	403.9	508.0	319.5	796.1	19.92	8.03	25.06	0.82	KZOB	神津島	5

跡２では、７点信州産が確認されている。

４　おわりに

久保堰ノ台遺跡1より出土した縄文時代中期後半の黒曜石製石器5点について蛍光X線分析による産地推定を行った結果、5点すべてが神津島エリア産と推定された。

引用・参考文献

望月明彦（1999）　上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定．大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書２　－上和田城山遺跡篇－」：172－179，大和市教育委員会

望月明彦（2004）　殿山遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定．上尾市教育委員会編「殿山遺跡　先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書」：272－282，上尾市教育委員会

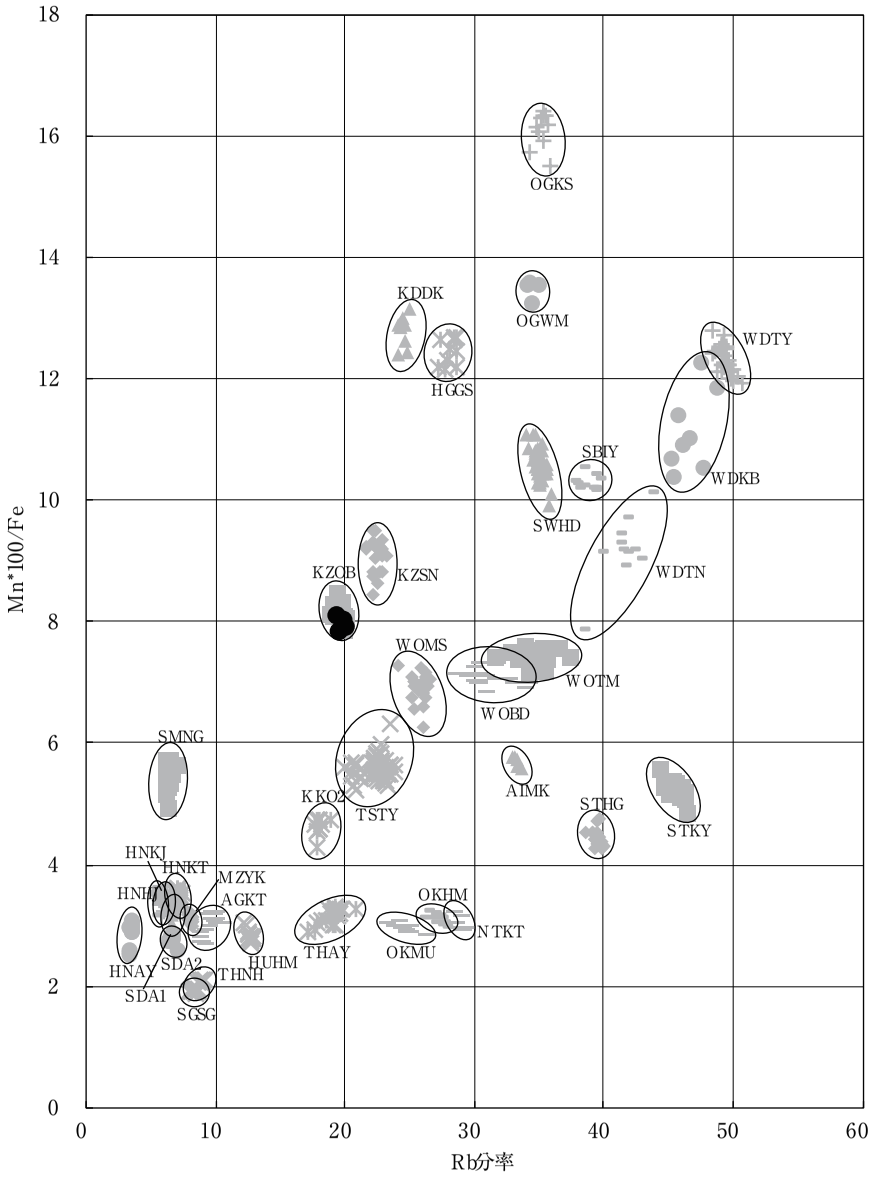


図２　黒曜石産地推定判別図(1)

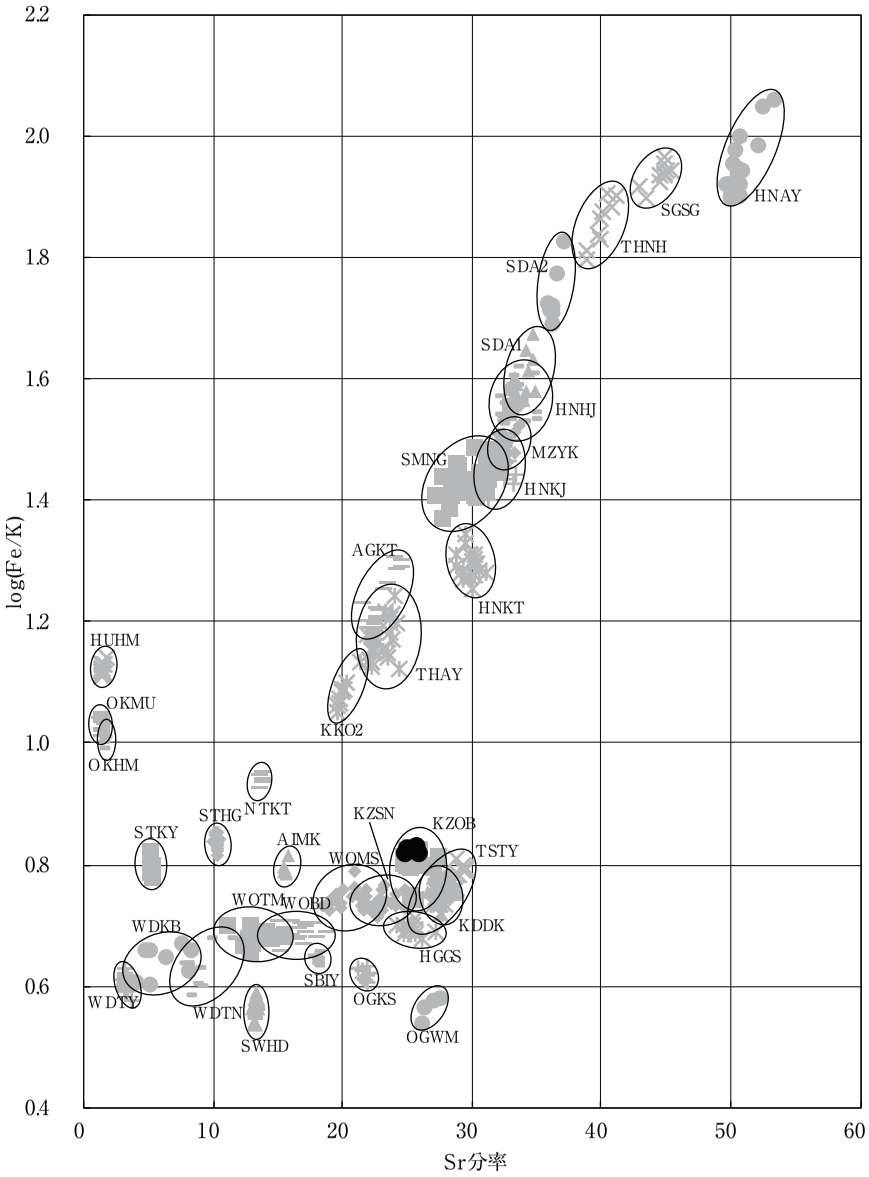


図３　黒曜石産地推定判別図(2)

第２節　久保堰ノ台遺跡２出土黒曜石製石器の産地推定

１　はじめに

市原市久保に所在する久保堰ノ台遺跡２は、養老川の北岸台地上に立地する集落跡であり、縄文時代中期後半（加曽利ＥⅡ式）を中心に、縄文時代中期～後期（阿玉台式～加曽利Ｂ式）にかけての遺物が出土している。ここでは、遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

２　試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器50点である（表１）。時期は、竪穴住居より出土した石器が加曽利ＥⅡ式期、それ以外の石器が阿玉台式～加曽利Ｂ式の範囲とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジと精製水を用いて、表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、Ｘ線管ターゲットはロジウム（Rh）、Ｘ線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径８㎜、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月，2004など）。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計７元素のＸ線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

１）Rb分率=Rb強度×100／（Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度）

２）Sr分率=Sr強度×100／（Rb強度＋Sr強度＋Y強度＋Zr強度）

３）Mn強度×100／Fe強度

表４　分析対象

資料番号	種　類	遺構番号	遺構種類	注記No.	備考
1	石鏃	SI005	竪穴住居	24	
2	石鏃			74	
3	石鏃			86	
4	石鏃			86	
5	石鏃			158	
6	石鏃			108	
7	楔形石器			86	
8	剥片			149	
9	剥片			47	
10	剥片			149	
11	剥片			86	
12	石鏃	SI014	竪穴住居	2	
13	石鏃			74	
14	石鏃			136	
15	石鏃			2	
16	石鏃			74	
17	石鏃			125	
18	石鏃			125	
19	石鏃			2	
20	石鏃			2	
21	石鏃			2	未成品
22	石鏃			2	未成品
23	剥片			2	
24	石鏃	SI015	竪穴住居	4	
25	掻器			4	
26	剥片			34	
27	剥片			34	
28	剥片			34	
29	石鏃	SI017	竪穴住居	14	
30	剥片			14	
31	剥片			14	
32	剥片			14	
33	剥片			14	
34	石鏃	4H	グリッド	TG117	
35	石鏃	5O-18		1	
36	石鏃	5O-5O		3	
37	石鏃	5O-81		2	
38	石鏃	5O-17		1	
39	石鏃	5P-10		2	
40	石鏃	5O-16		2	
41	石鏃	5P-00		2	
42	石鏃	4P-72		3	
43	石鏃	5J-27		2	
44	石鏃	6O-12		2	未成品
45	石鏃	5Q-1T		TG48	未成品
46	楔形石器	6O-47		2	
47	楔形石器	4P-70		1	
48	楔形石器	5P-13		2	
49	剥片	5M-2T		TG56	調整痕
50	石核	4J-23		1	

4）log（Fe強度／K強度）

そしてこれらの指標値を用いた２つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100／Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log（Fe強度／Ｋ強度）の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する方法である。この判別図法は、原石同士の判別図が重複した場合には分離は不可能となるが、現在のところ、同一エリア内に多少の重複はあっても、エリア同士の重複はほとんどないため、産地エリアの推定に問題はない。また、指標値に蛍光Ｘ線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせて算出しているため、形状や厚みなどの影響を比較的受けにくいという利点があり、非破壊分析を原則とし、形状が不規則で薄い試料も多く存在する考古遺物の測定に対して非常に有効な方法である。ただし風化試料の場合、log（Fe強度／Ｋ強度）の値が減少する（望月, 1999）。試料の測定面には、なるべく奇麗で平坦な面を選んだ。原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表２に各原石の産地とそれぞれの試料点数、ならびにこれらのエリアと判別群名を示す。また、図１に各原石採取地の分布図を示す。

3　分析結果

表３に測定値より算出された指標値を、図２、３に黒曜石原石の判別図に今回の石器50点の結果をプロットした図を示す。なお、図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

表５　黒曜石産地（東日本）の判別群名称（望月, 2004参照）

都道府県	エリア	判別群	記　号	原石採取地
北海道	白滝	八号沢群	STHG	赤石山山頂･八号沢露頭･八号沢･黒曜の沢･幌加林道(36)
		黒曜の沢群	STKY	
	赤井川	曲川群	AIMK	曲川･土木川(5)
青森	木造	出来島群	KDDK	出来島海岸(10)
	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜(7)、八森山公園(8)
秋田	男鹿	金ヶ崎群	OGKS	金ヶ崎温泉(10)
		脇本群	OGWM	脇本海岸(4)
岩手	北上川	北上折居2群	KKO2	水沢市折居(9)
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前(10)
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	湯ノ倉(40)
	色麻	根岸群	SMNG	根岸(40)
	仙台	秋保1群	SDA1	土蔵(18)
		秋保2群	SDA2	
	塩釜	塩竈群	SGSG	塩竈(10)
新潟	新発田	板山群	SBIY	板山牧場(10)
	新津	金津群	NTKT	金津(7)
栃木	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢(22)
		七尋沢群	THNH	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)
長野	和田(WD)	鷹山群	WDTY	鷹山(14)、東餅屋(16)
		小深沢群	WDKB	小深沢(8)
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋西(11)
	和田(WO)	ブドウ沢群	WOBD	ﾌﾞﾄｳ沢(20)
		牧ヶ沢群	WOMS	牧ヶ沢下(20)
		高松沢群	WOTM	高松沢(19)
	諏訪	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台(35)、星ヶ塔(20)
	蓼科	冷山群	TSTY	冷山(20)、麦草峠(20)、麦草峠東(20)
神奈川	箱根	芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯(20)
		畑宿群	HNHJ	畑宿(51)
		鍛冶屋群	HNKJ	鍛冶屋(20)
静岡		上多賀群	HNKT	上多賀(20)
	天城	柏峠群	AGKT	柏峠(20)
東京	神津島	恩馳島群	KZOB	恩馳島(27)
		砂糠崎群	KZSN	砂糠崎(20)
島根	隠岐	久見群	OKHM	久見パーライト中(6)、久見採掘現場(5)
		箕浦群	OKMU	箕浦海岸(3)、加茂(4)、岸浜(3)

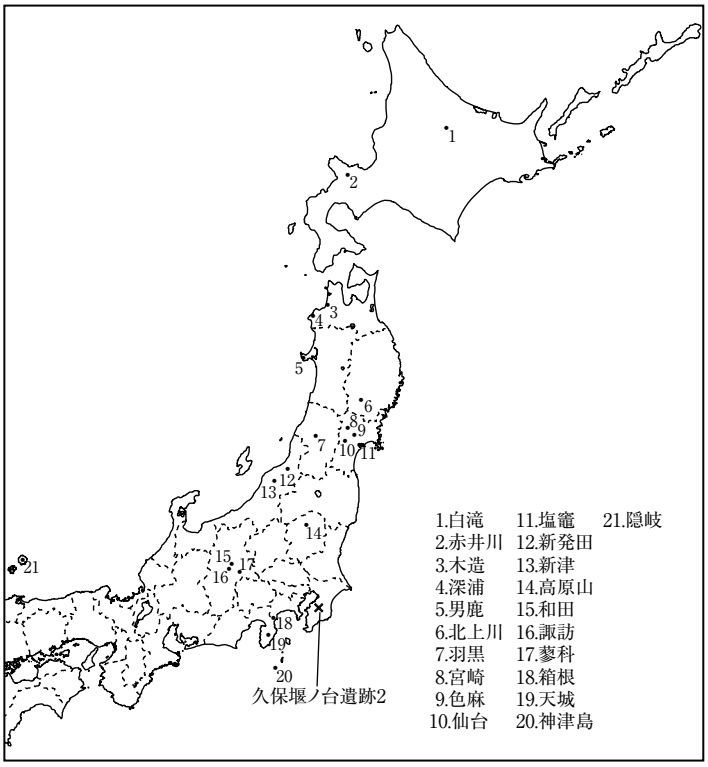


図４　黒曜石産地分布図（東日本）

表6　測定値および産地推定結果

資料番号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	$\frac{Mn*100}{Fe}$	Sr分率	$\log\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア	資料番号
1	149.8	83.4	1118.4	242.3	309.7	183.9	459.3	20.28	7.45	25.91	0.87	KZOB	神津島	1
2	217.8	116.5	1478.3	363.4	457.7	287.5	727.6	19.79	7.88	24.93	0.83	KZOB	神津島	2
3	173.6	93.9	1231.0	307.2	392.8	245.8	610.9	19.73	7.63	25.23	0.85	KZOB	神津島	3
4	194.6	110.5	1420.0	367.4	474.1	293.8	744.4	19.55	7.78	25.22	0.86	KZOB	神津島	4
5	154.7	83.8	1066.3	276.7	368.4	227.5	573.7	19.13	7.86	25.47	0.84	KZOB	神津島	5
6	161.6	87.7	1147.9	275.6	344.6	214.1	529.9	20.20	7.64	25.26	0.85	KZOB	神津島	6
7	245.3	129.7	1640.3	405.2	514.5	317.2	803.9	19.86	7.91	25.21	0.83	KZOB	神津島	7
8	309.2	105.0	1338.1	350.8	437.0	275.9	691.3	19.99	7.84	24.90	0.64	KZOB?	神津島?	8
9	293.7	116.4	1120.0	731.0	274.1	358.8	701.2	35.40	10.40	13.27	0.58	SWHD	諏訪	9
10	40.8	24.0	289.8	74.2	94.5	62.2	152.2	19.37	8.27	24.66	0.85	KZOB	神津島	10
11	301.9	121.9	1193.1	782.0	292.0	384.3	738.0	35.61	10.22	13.30	0.60	SWHD	諏訪	11
12	225.2	121.3	1577.7	391.9	498.6	312.5	775.9	19.80	7.69	25.20	0.85	KZOB	神津島	12
13	203.4	106.4	1326.0	349.8	444.8	287.0	715.9	19.46	8.03	24.75	0.81	KZOB	神津島	13
14	185.3	96.9	1277.6	309.3	391.3	240.1	621.1	19.81	7.58	25.05	0.84	KZOB	神津島	14
15	195.3	107.4	1378.1	339.8	434.6	272.6	674.0	19.75	7.79	25.25	0.85	KZOB	神津島	15
16	192.2	75.4	964.5	253.0	315.8	200.2	500.1	19.94	7.82	24.88	0.70	KZOB?	神津島?	16
17	185.7	99.6	1273.2	326.0	414.5	259.6	644.8	19.82	7.82	25.20	0.84	KZOB	神津島	17
18	240.1	95.3	956.7	633.3	241.2	320.2	617.4	34.95	9.96	13.31	0.60	SWHD	諏訪	18
19	27.4	15.7	195.2	55.4	70.4	46.0	115.8	19.26	8.06	24.46	0.85	KZOB	神津島	19
20	182.2	99.4	1290.5	301.8	384.9	232.1	580.4	20.13	7.70	25.67	0.85	KZOB	神津島	20
21	221.3	119.7	1484.7	379.6	482.1	303.7	759.0	19.73	8.06	25.05	0.83	KZOB	神津島	21
22	209.5	113.2	1415.3	368.2	467.8	300.6	763.6	19.38	8.00	24.62	0.83	KZOB	神津島	22
23	249.7	134.2	1650.1	413.5	536.9	324.3	815.8	19.78	8.13	25.68	0.82	KZOB	神津島	23
24	203.4	103.7	1353.5	341.1	428.9	272.7	686.1	19.73	7.66	24.81	0.82	KZOB	神津島	24
25	308.3	119.2	1195.7	730.6	270.4	357.9	694.8	35.58	9.97	13.17	0.59	SWHD	諏訪	25
26	195.1	102.5	1311.7	321.3	428.8	252.5	669.1	19.22	7.81	25.65	0.83	KZOB	神津島	26
27	270.7	108.2	1068.0	675.3	246.9	329.9	636.7	35.75	10.14	13.07	0.60	SWHD	諏訪	27
28	204.3	112.6	1463.7	369.5	490.0	292.9	747.3	19.45	7.69	25.79	0.86	KZOB	神津島	28
29	99.2	53.8	672.1	184.1	238.3	154.0	385.6	19.14	8.01	24.77	0.83	KZOB	神津島	29
30	354.8	112.1	1452.1	387.9	486.9	308.3	776.8	19.79	7.72	24.84	0.61	KZOB?	神津島?	30
31	227.0	118.5	1539.3	377.5	486.0	300.7	758.3	19.63	7.70	25.28	0.83	KZOB	神津島	31
32	237.6	127.0	1612.4	401.5	509.3	320.4	830.4	19.47	7.88	24.71	0.83	KZOB	神津島	32
33	117.8	63.8	838.4	222.9	294.5	181.2	461.9	19.21	7.61	25.38	0.85	KZOB	神津島	33
34	332.3	152.1	1306.4	1465.6	138.1	615.1	848.8	47.78	11.64	4.50	0.59	WDKB	和田	34
35	198.6	105.6	1330.9	332.2	418.3	266.6	653.5	19.89	7.93	25.04	0.83	KZOB	神津島	35
36	140.2	73.8	941.6	231.4	291.1	183.2	462.0	19.82	7.84	24.93	0.83	KZOB	神津島	36
37	152.3	80.7	1057.8	263.2	328.1	206.9	543.7	19.61	7.63	24.45	0.84	KZOB	神津島	37
38	148.7	77.8	1009.5	228.3	285.8	173.5	432.9	20.38	7.71	25.51	0.83	KZOB	神津島	38
39	169.0	95.0	1207.9	308.7	396.0	246.9	626.8	19.56	7.87	25.09	0.85	KZOB	神津島	39
40	183.7	98.0	1252.6	305.8	403.2	244.4	600.3	19.68	7.82	25.95	0.83	KZOB	神津島	40
41	40.9	22.2	265.6	76.8	98.3	66.9	161.1	19.07	8.36	24.38	0.81	KZOB	神津島	41
42	208.5	114.0	1473.3	342.5	451.7	270.8	678.9	19.64	7.74	25.90	0.85	KZOB	神津島	42
43	130.8	67.6	886.7	231.9	272.3	183.6	451.3	20.36	7.62	23.90	0.83	KZOB	神津島	43
44	244.6	129.5	1633.2	391.1	491.2	314.1	769.2	19.90	7.93	24.99	0.82	KZOB	神津島	44
45	235.0	124.9	1488.9	388.9	505.0	316.2	789.4	19.45	8.39	25.25	0.80	KZOB	神津島	45
46	522.9	124.8	1545.8	399.2	488.0	305.3	753.9	20.51	8.08	25.07	0.47	KZOB?	神津島?	46
47	253.2	132.9	1686.3	425.7	540.5	335.1	832.9	19.95	7.88	25.32	0.82	KZOB	神津島	47
48	208.8	69.3	914.3	208.0	269.9	162.9	404.6	19.90	7.58	25.82	0.64	KZOB?	神津島?	48
49	303.6	115.3	1077.3	762.4	292.7	382.6	754.9	34.77	10.70	13.35	0.55	SWHD	諏訪	49
50	213.3	110.7	1376.6	341.2	441.7	274.9	700.8	19.40	8.04	25.12	0.81	KZOB	神津島	50

分析の結果、38点が神津島エリア恩馳島群KZOB、６点が諏訪エリア星ヶ台群SWHD、１点が和田エリア小深沢群WDKBの範囲にプロットされた。残り５点は、図２ではKZOBの範囲にプロットされたが、図３ではKZOBの範囲の下方にプロットされた。これは先述したように遺物の風化による影響と考えられ(望月，1999)、SWHDに属する可能性が高い。表３に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。また、表４に石器種類別の、表５に出土遺構別の産地推定結果を示す。神津島産を主とし、少量信州産が含まれるという結果であった。

表７　石器種類別の産地推定結果

種類	神津島	諏　訪	和　田	計
石鏃	29	1	1	31
楔形石器	4	−	−	4
掻器	−	1	−	1
剥片	9	4	−	13
石核	1	−	−	1
計	43	6	1	50

表８　出土遺構別の産地推定結果

遺構	神津島	諏訪	和田	計
SI005	9	2	−	11
SI014	11	1	−	12
SI015	3	2	−	5
SI017	5	−	−	5
その他	15	1	1	17
計	43	6	1	50

４　おわりに

久保堰ノ台遺跡２より出土した縄文時代中期～後期の黒曜石製石器50点について蛍光X線分析による産地推定を行った結果、43点が神津島、６点が諏訪、１点が和田エリア産と推定された。

引用・参考文献

望月明彦（1999）　上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定．大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書２　－上和田城山遺跡篇－」：172－179，大和市教育委員会

望月明彦（2004）　殿山遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定．上尾市教育委員会編「殿山遺跡　先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書」：272－282，上尾市教育委員会

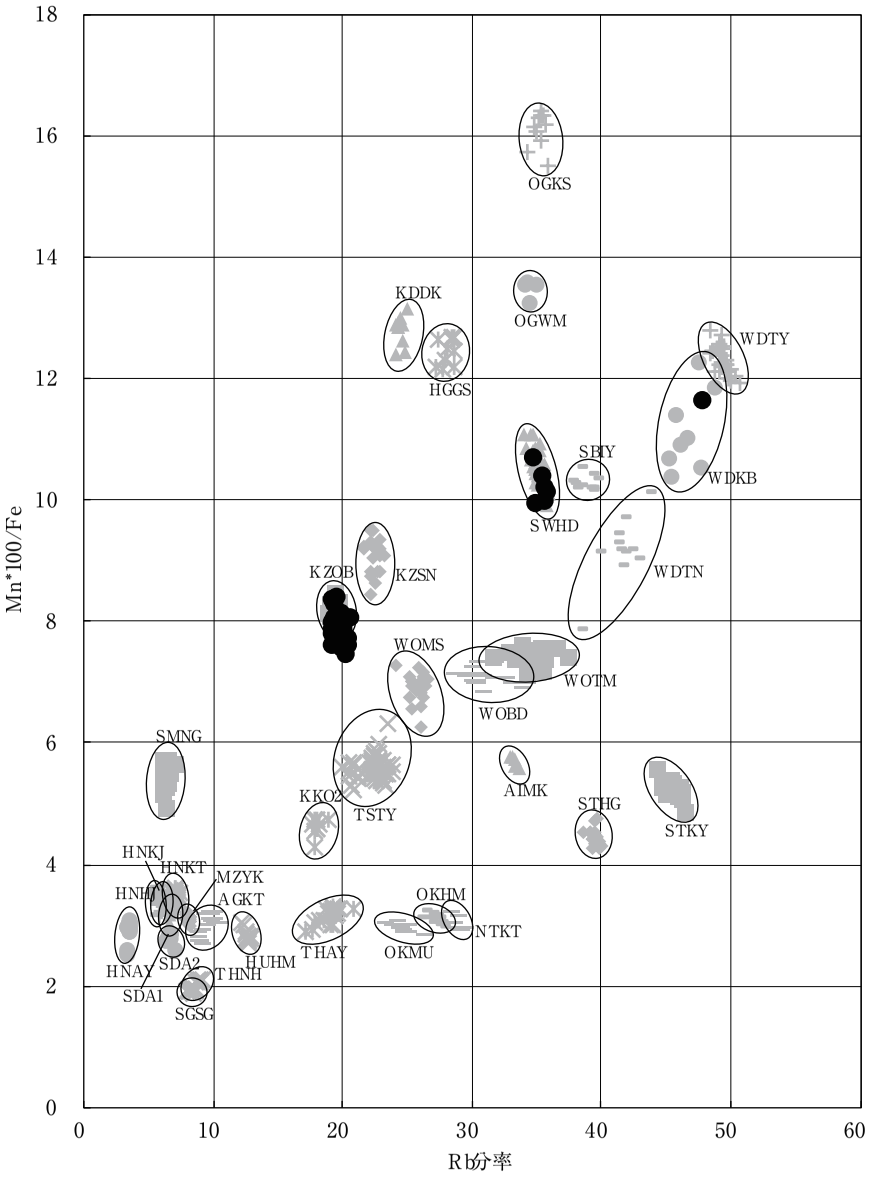


図５　黒曜石産地推定判別図(1)

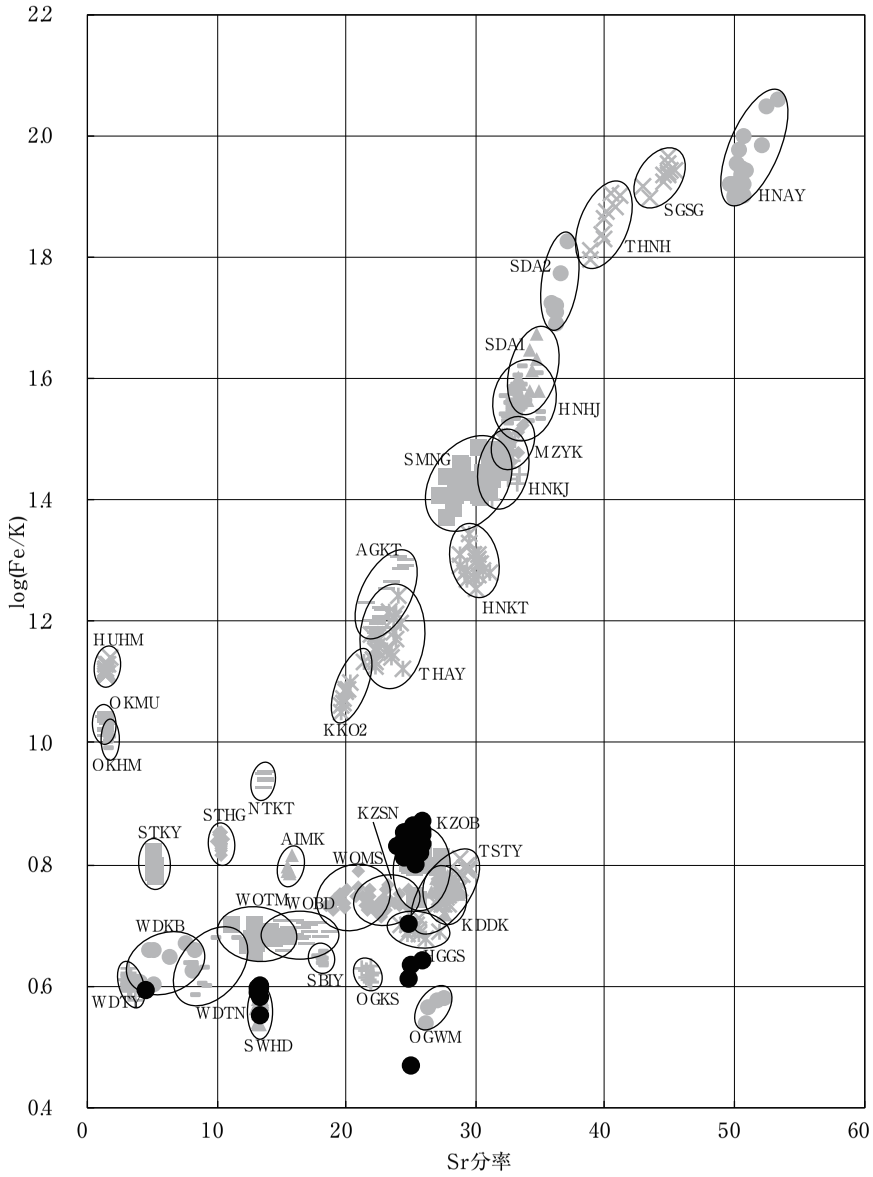


図６　黒曜石産地推定判別図(2)

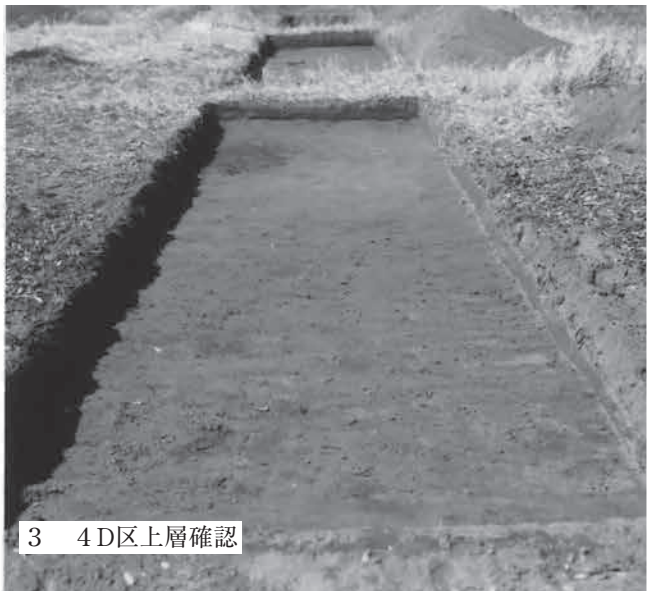
写　真　図　版

久保堰ノ台遺跡周辺の航空写真

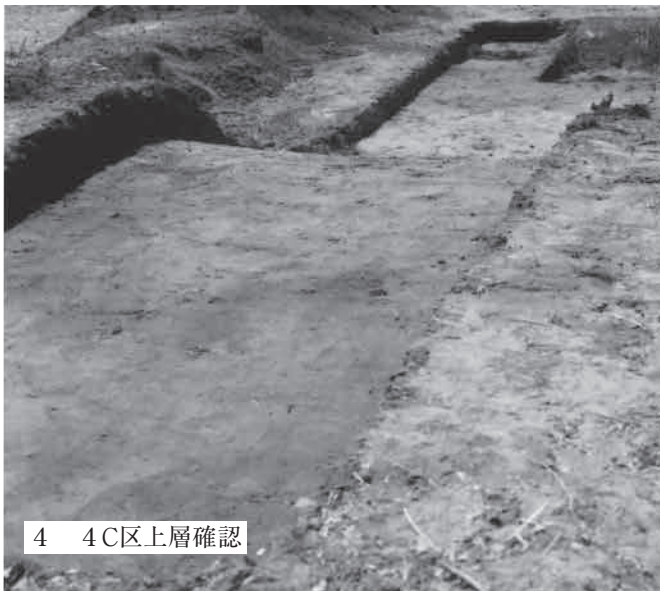
図版2

1　調査前近景

2　３C-00グリッド周辺調査状況

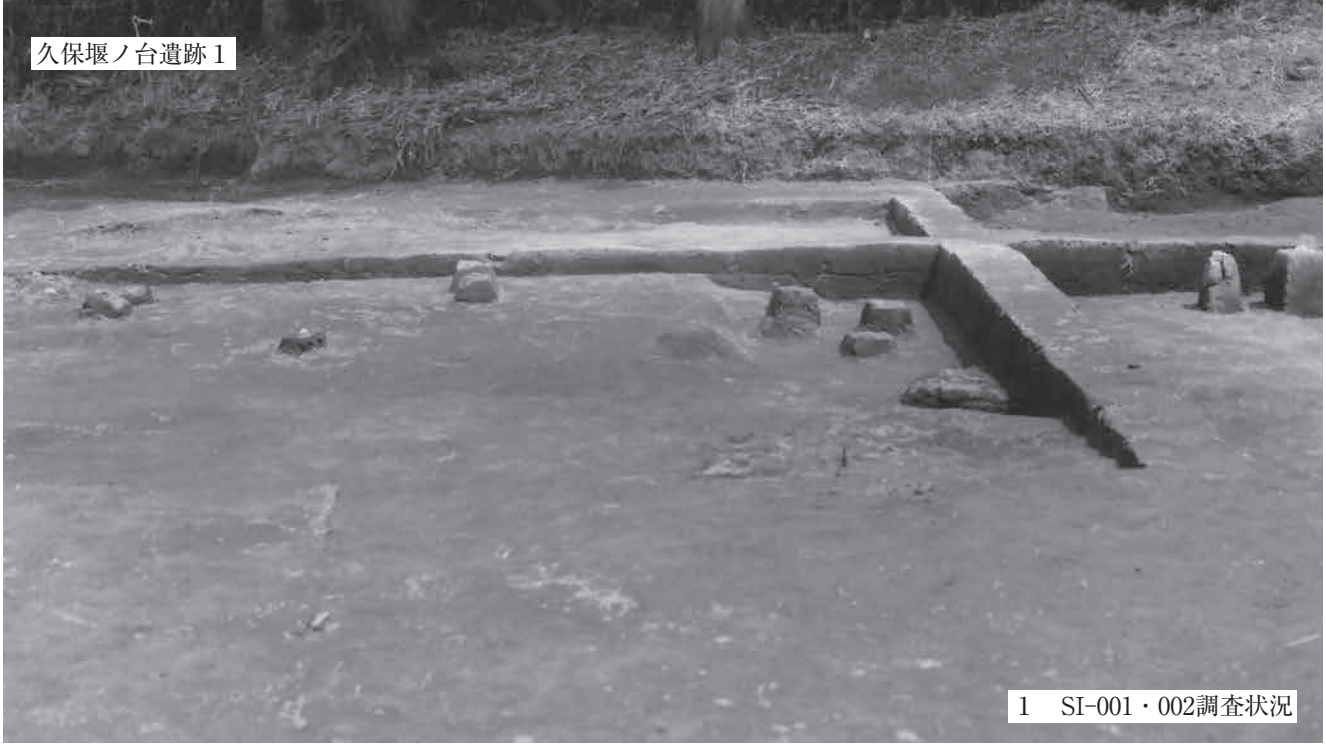


3　４D区上層確認



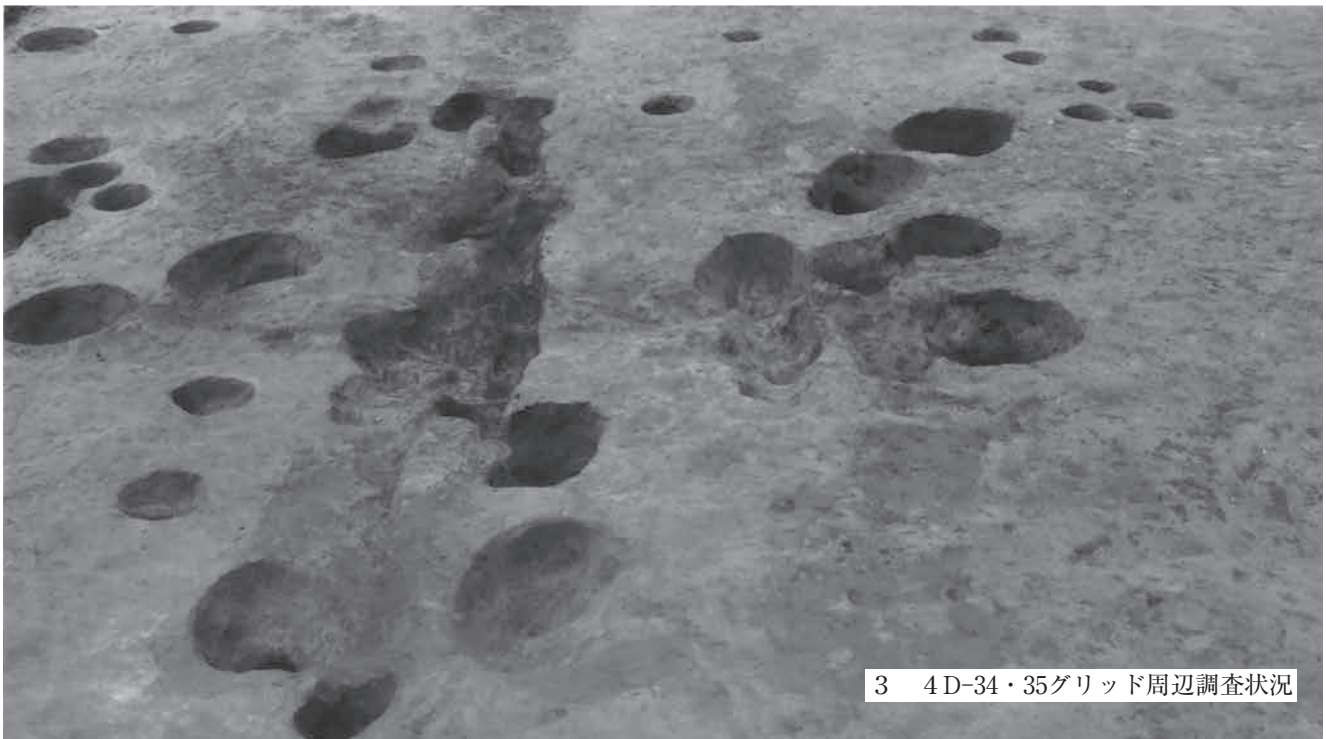
4　４C区上層確認

久保堰ノ台遺跡１



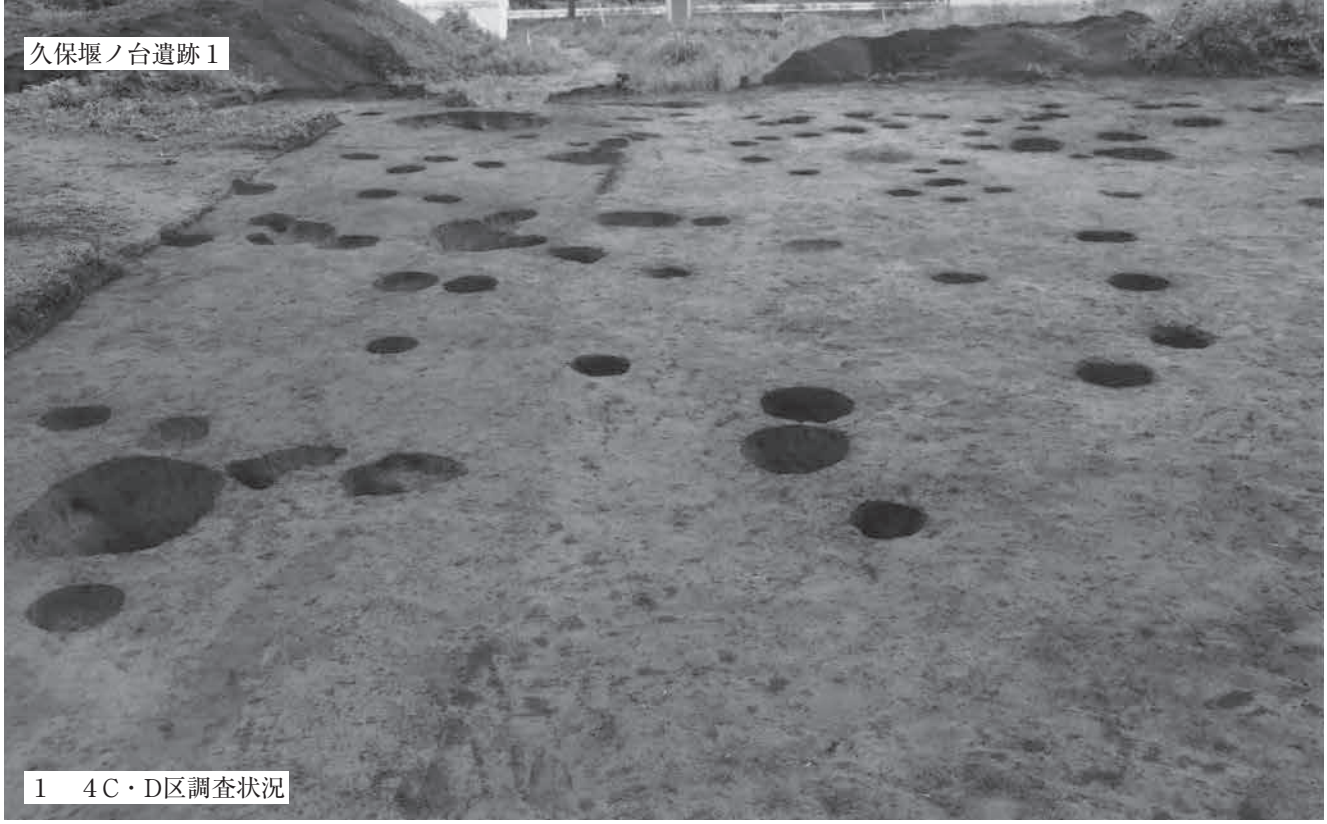
1　SI-001・002調査状況

2　SI-002全景

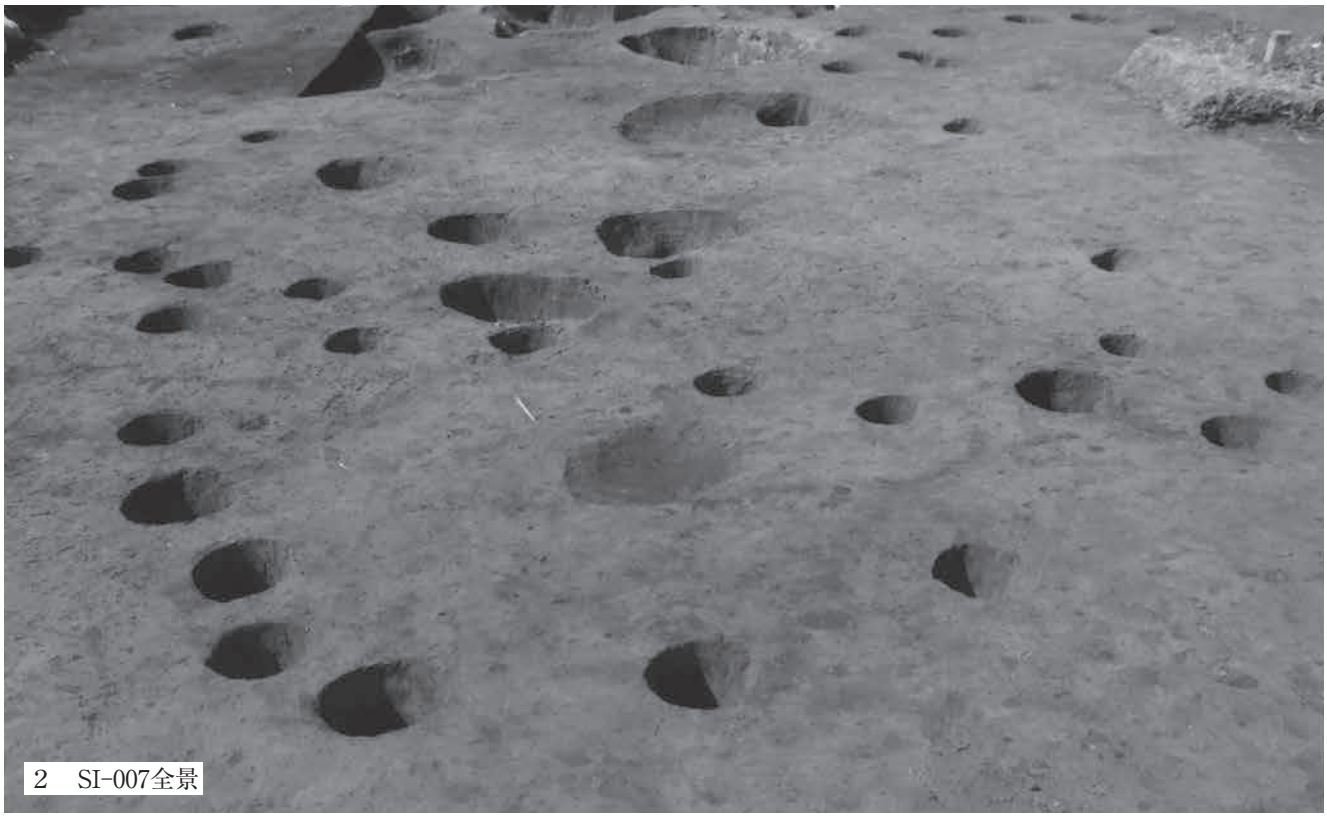


3　4D-34・35グリッド周辺調査状況

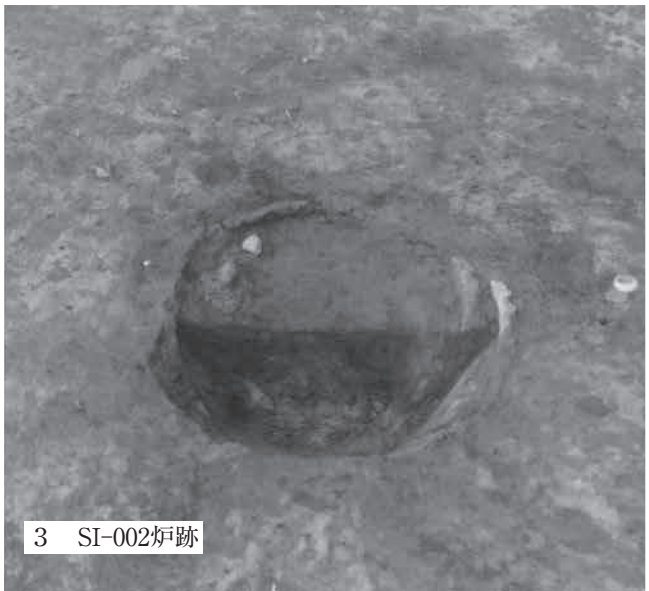
図版4



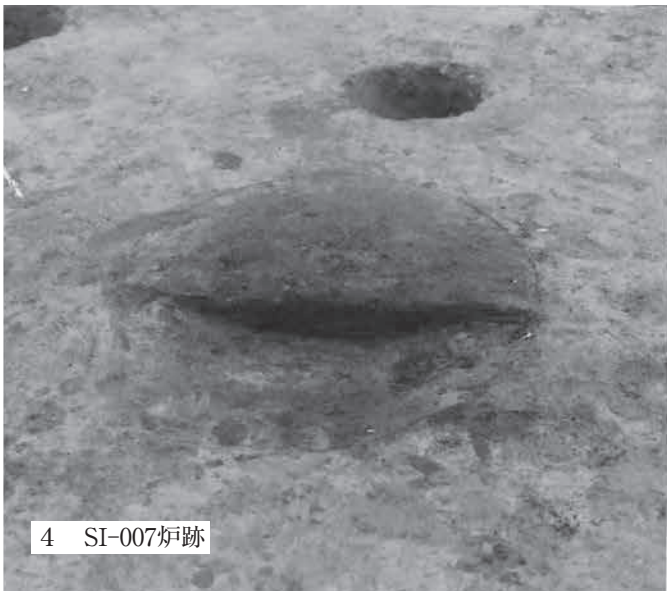
１　４Ｃ・Ｄ区調査状況



２　SI-007全景



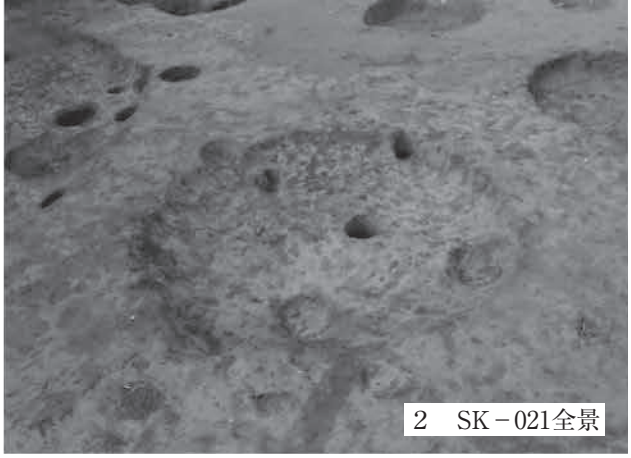
３　SI-002炉跡



４　SI-007炉跡

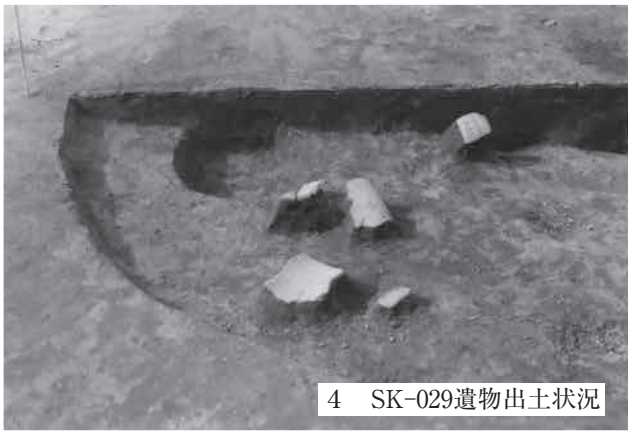
久保堰ノ台遺跡１

1　SK-015・017・018・019・020全景



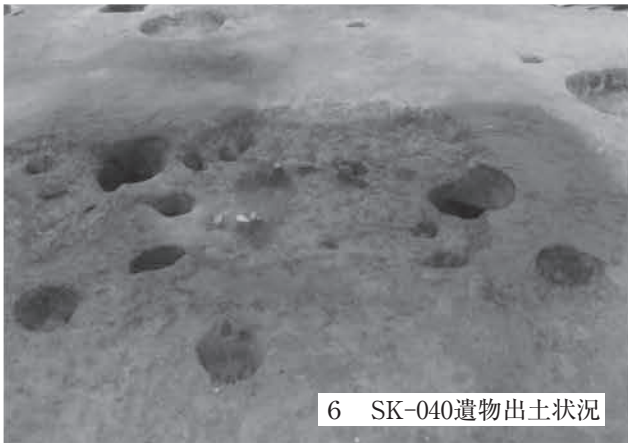
2　SK－021全景

3　SK-029全景

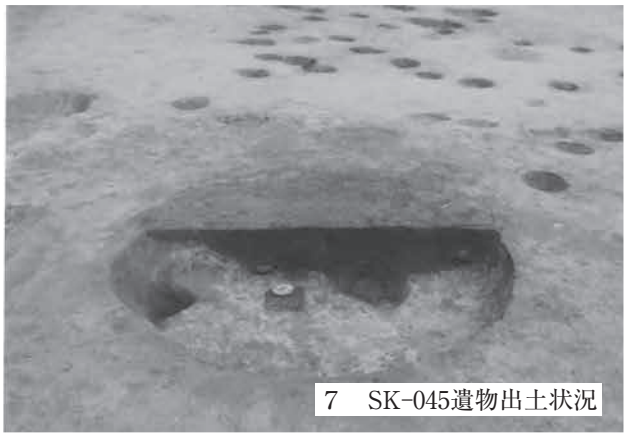


4　SK-029遺物出土状況

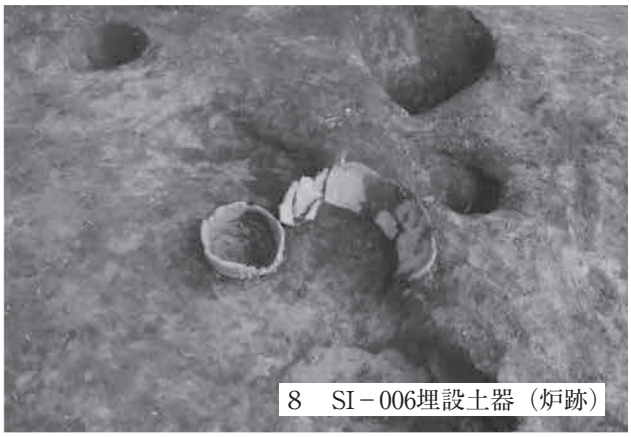
5　SK-033遺物出土状況



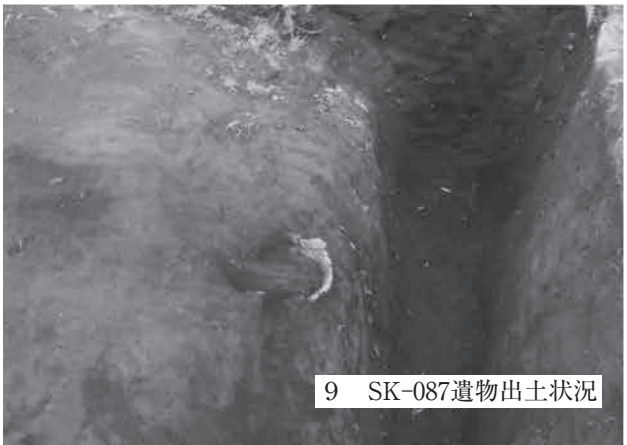
6　SK-040遺物出土状況



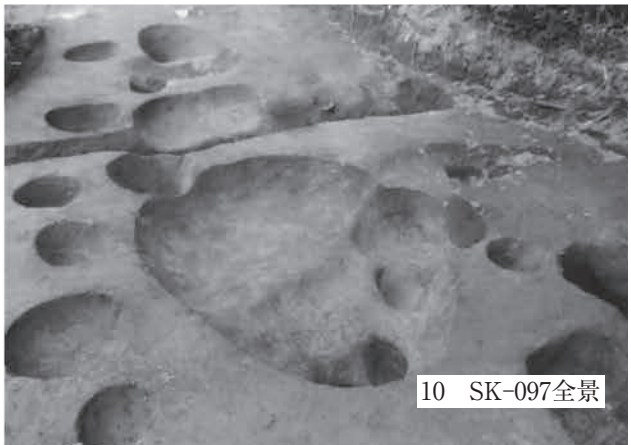
7　SK-045遺物出土状況



8　SI－006埋設土器（炉跡）



9　SK-087遺物出土状況

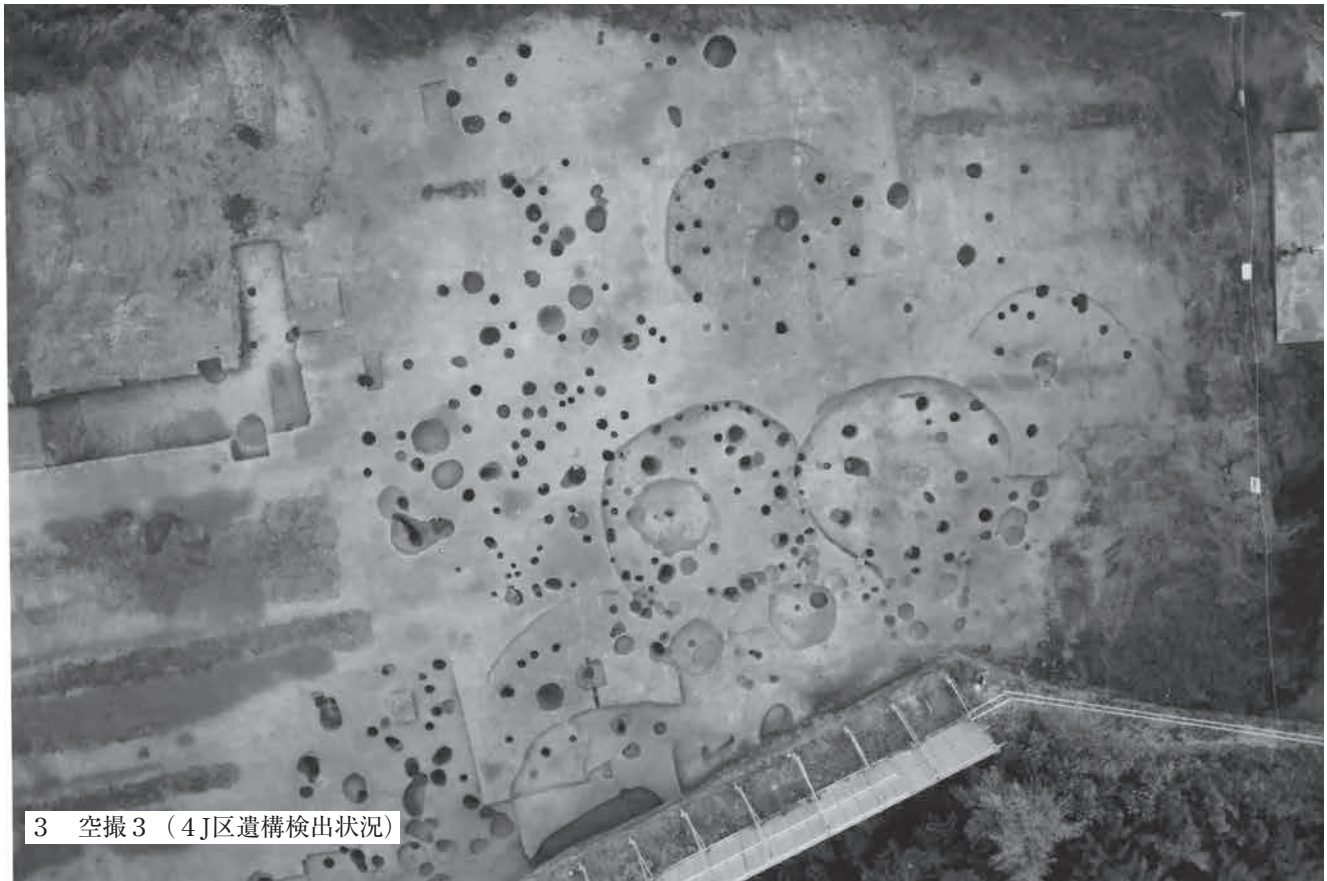


10　SK-097全景

図版6

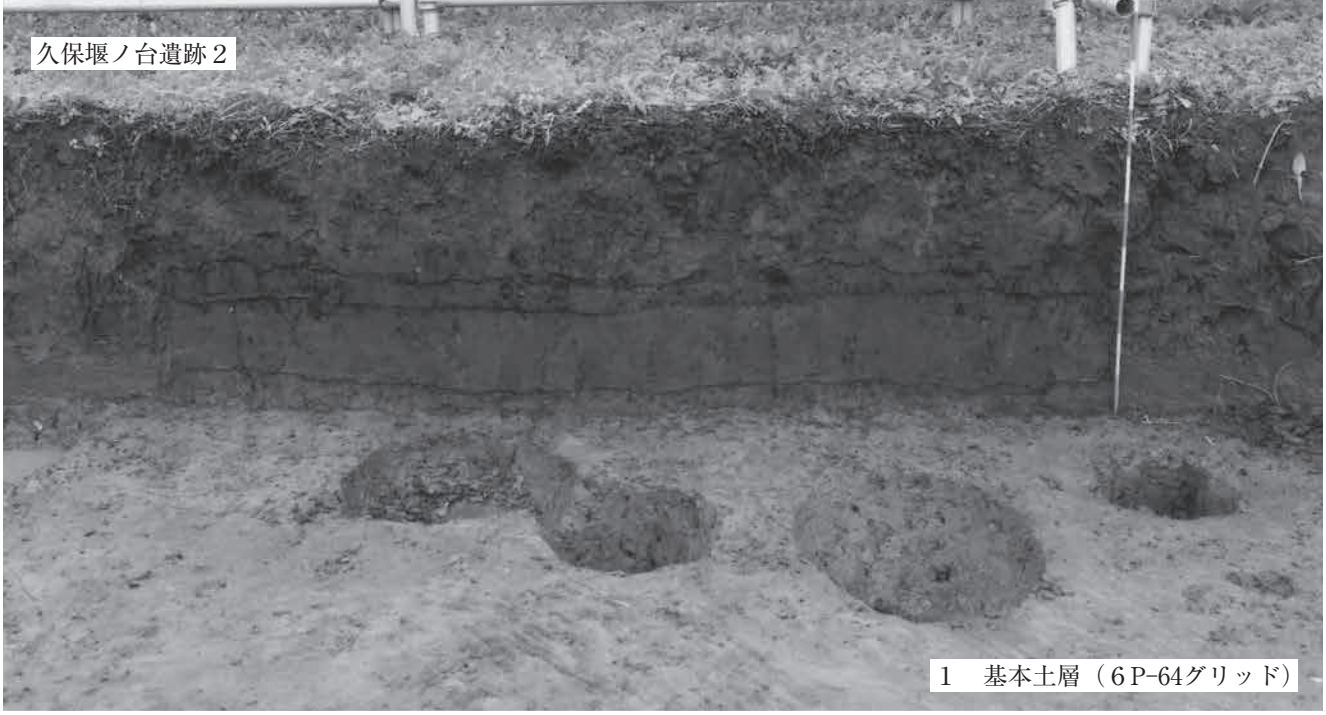
1　空撮１(遺跡西部全景）

2　空撮２（遺跡全景・西方から）

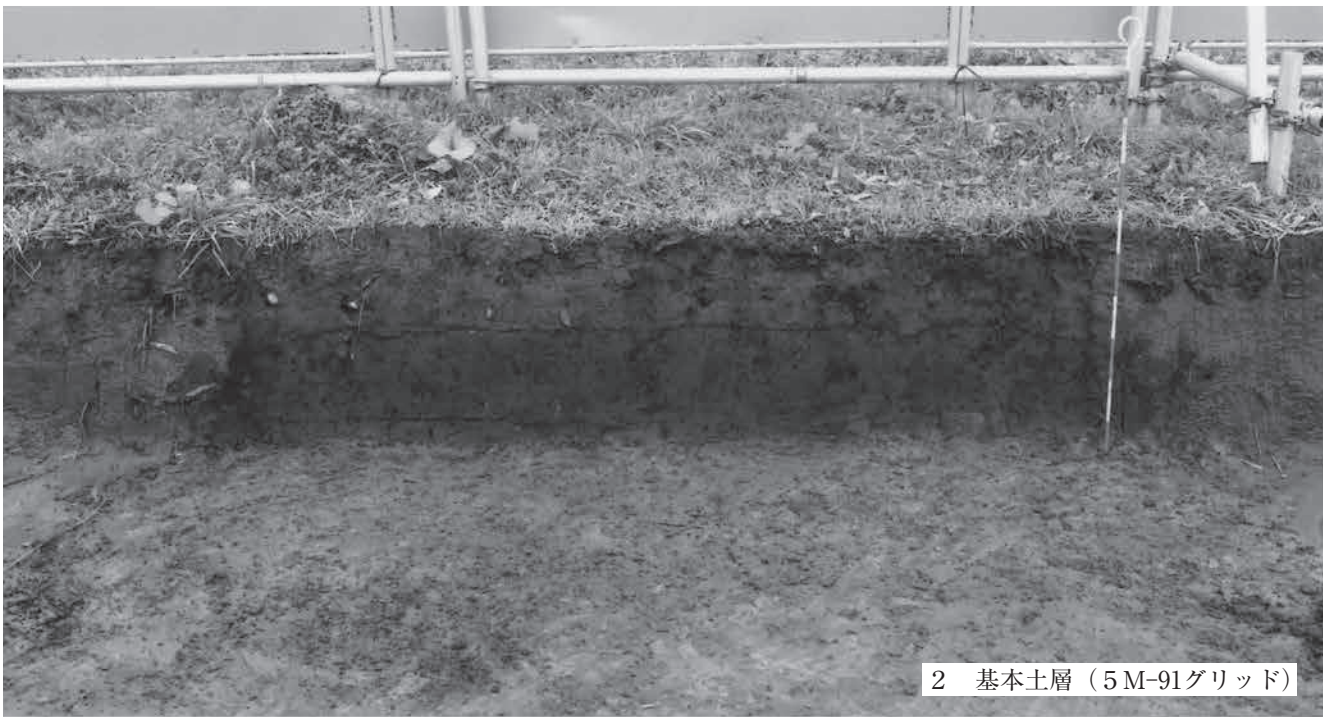


3　空撮３（４J区遺構検出状況）

久保堰ノ台遺跡２



１　基本土層（６P-64グリッド）



２　基本土層（５M-91グリッド）

３　ピット群検出状況（４R－42～46グリッド周辺）

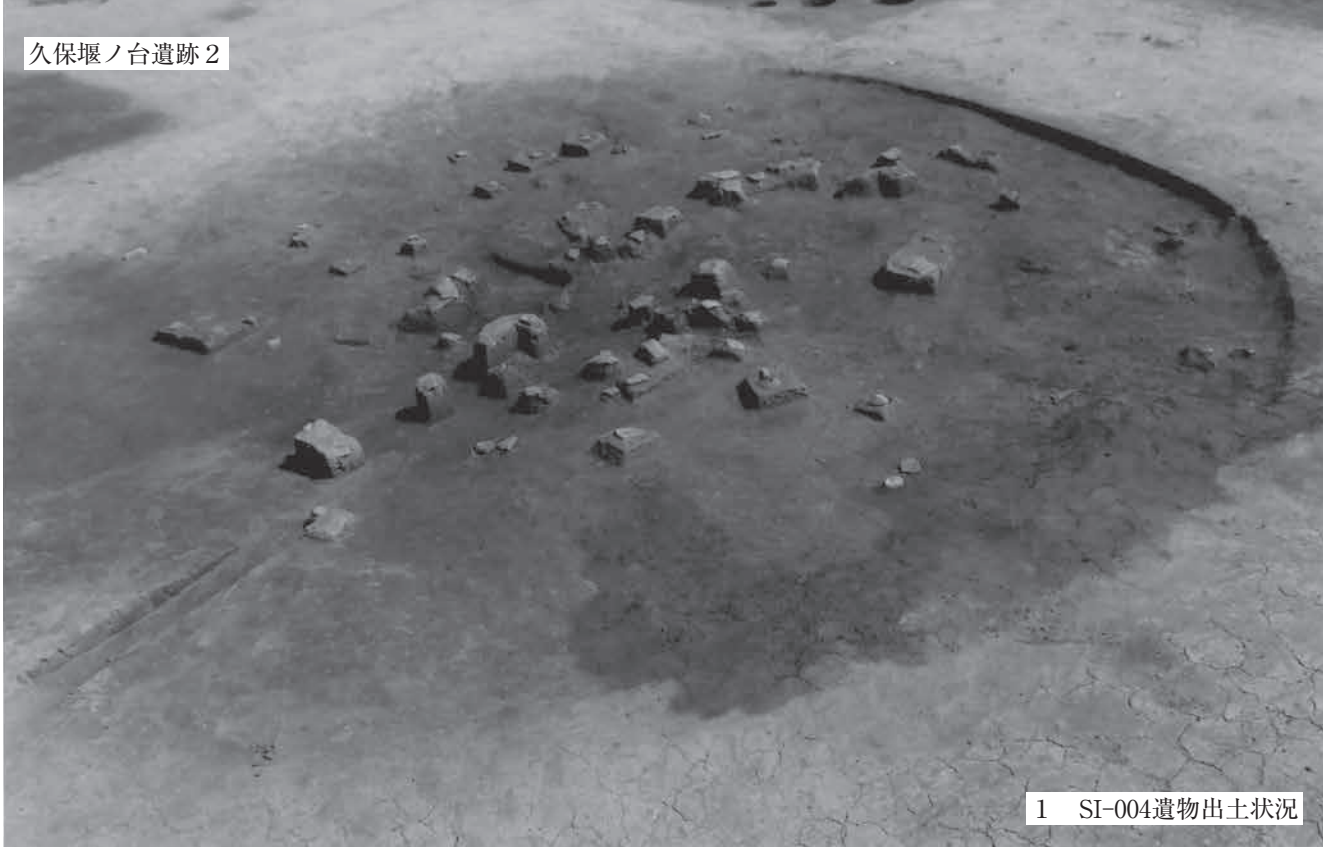
久保堰ノ台遺跡２

1　SI-002全景

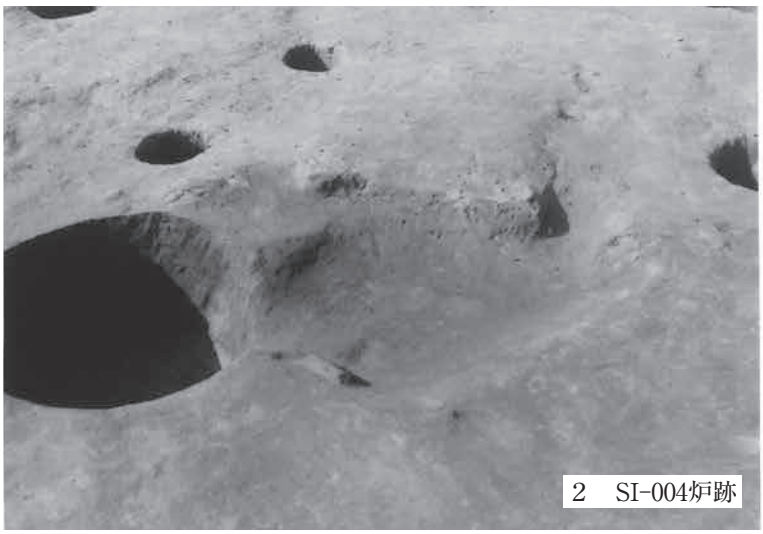
2　SI-002遺物出土状況

3　SI-003全景

久保堰ノ台遺跡２



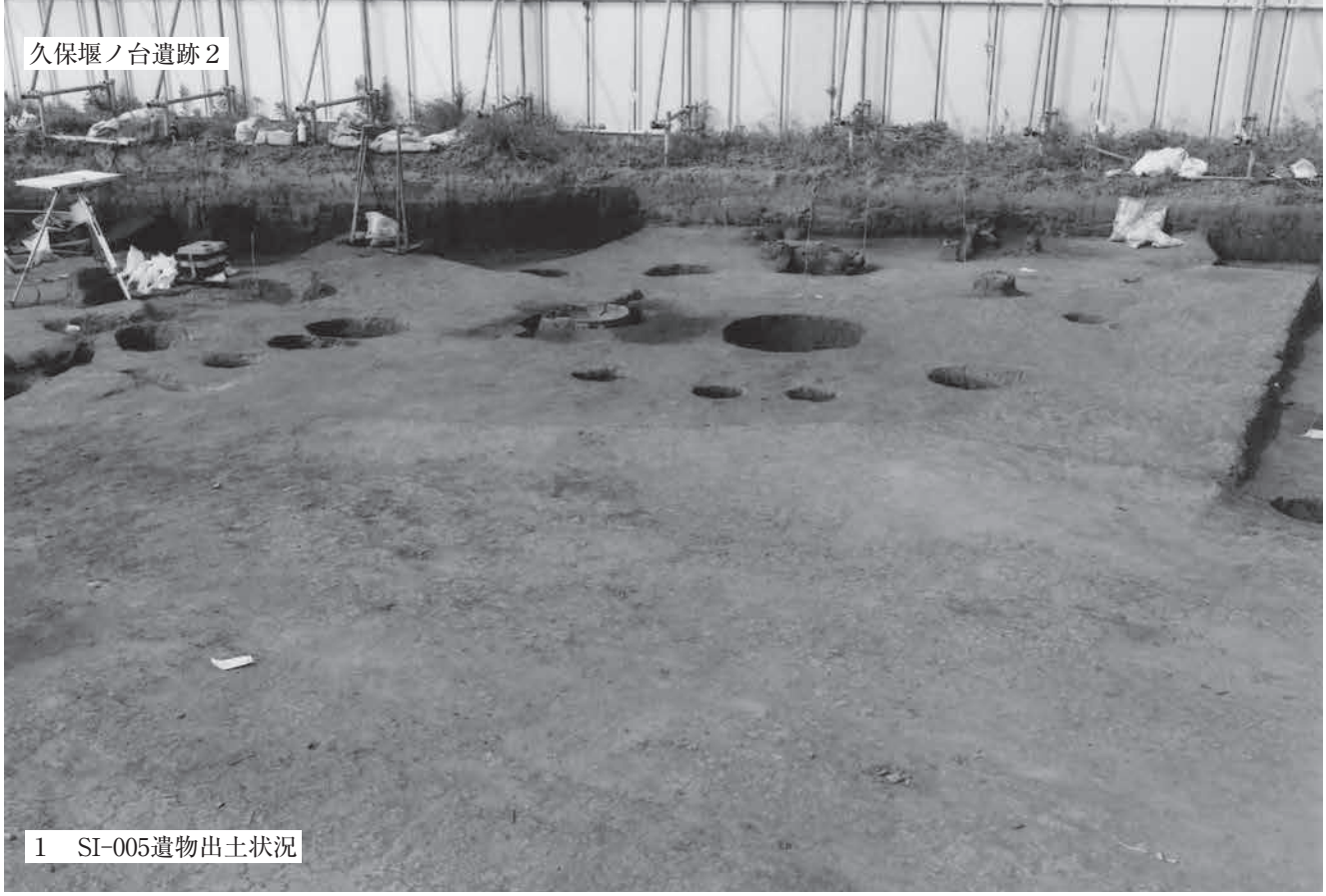
1　SI-004遺物出土状況



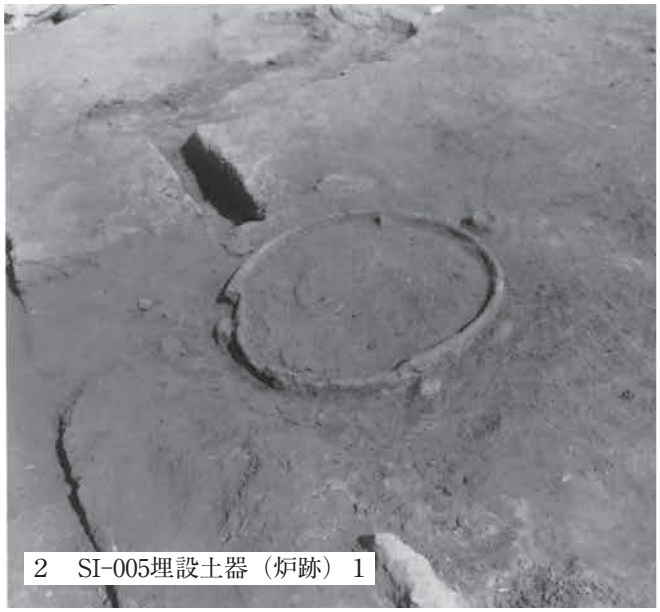
2　SI-004炉跡

3　SI-004全景

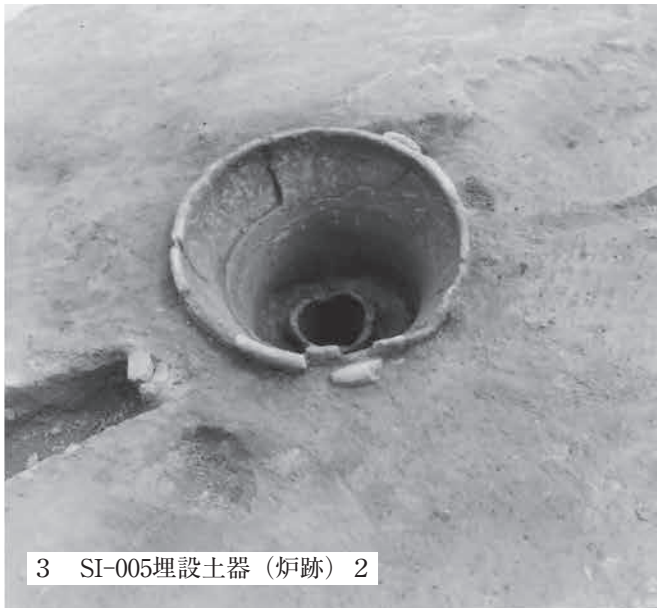
久保堰ノ台遺跡２



1　SI-005遺物出土状況

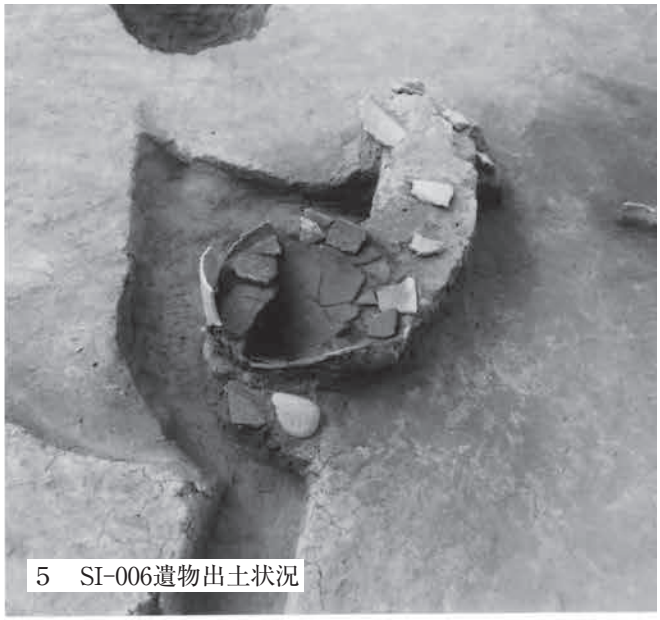


2　SI-005埋設土器（炉跡）１



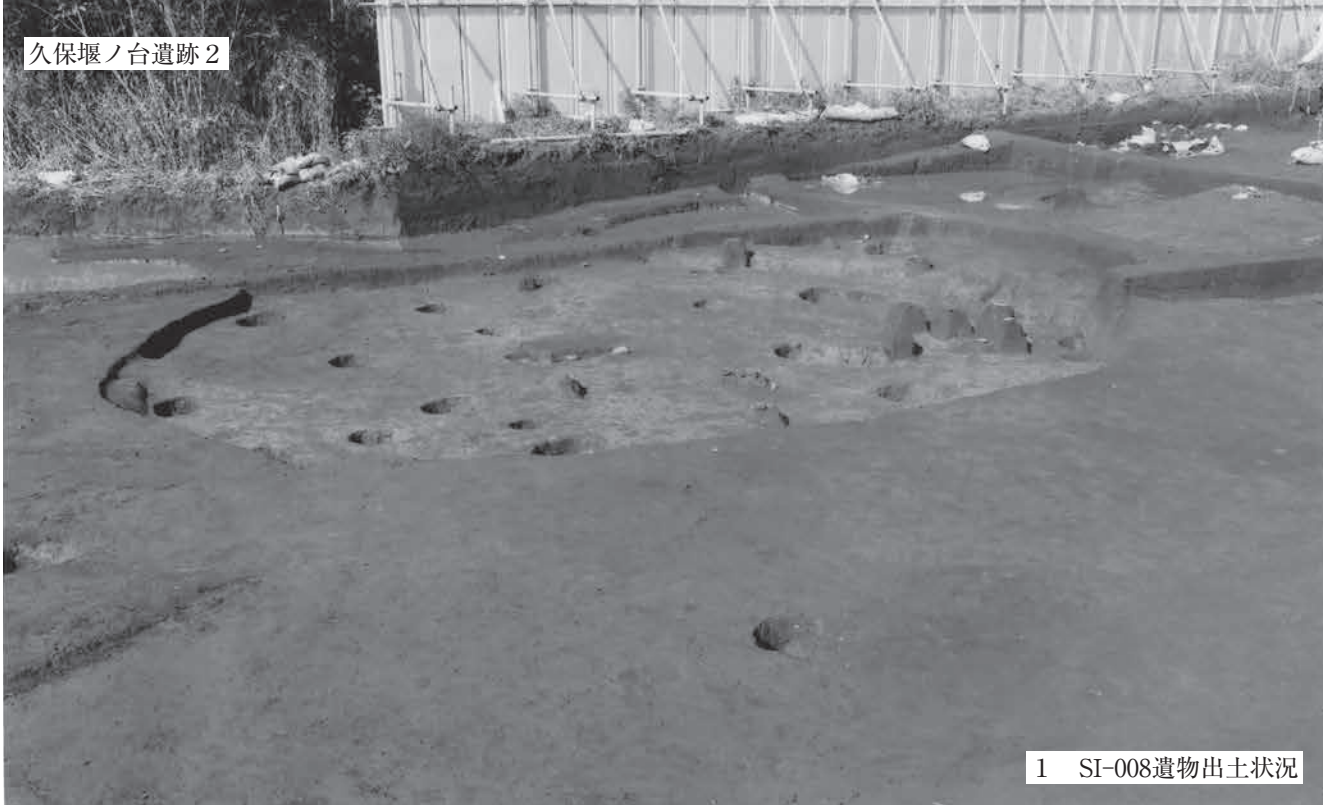
3　SI-005埋設土器（炉跡）２

4　SI-005埋設土器（炉跡）３



5　SI-006遺物出土状況

久保堰ノ台遺跡２



1　SI-008遺物出土状況

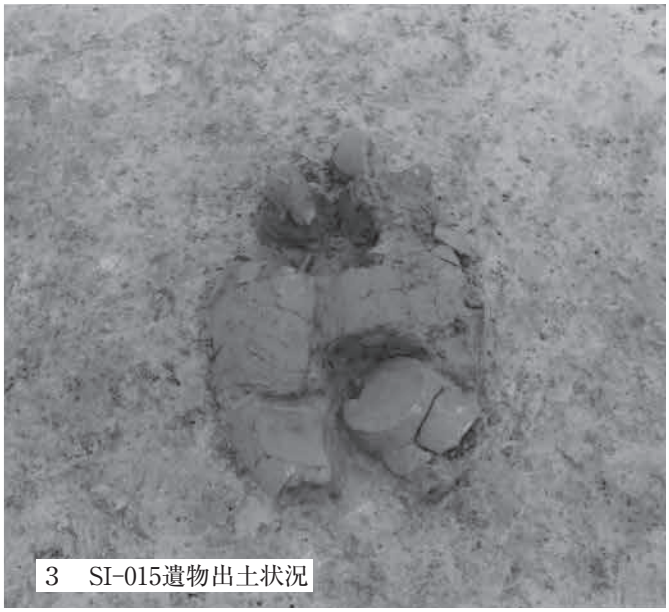
2　SI-008炉跡（配石）

3　SI-008全景

図版12

1　SI-006全景

2　SI-014遺物出土状況

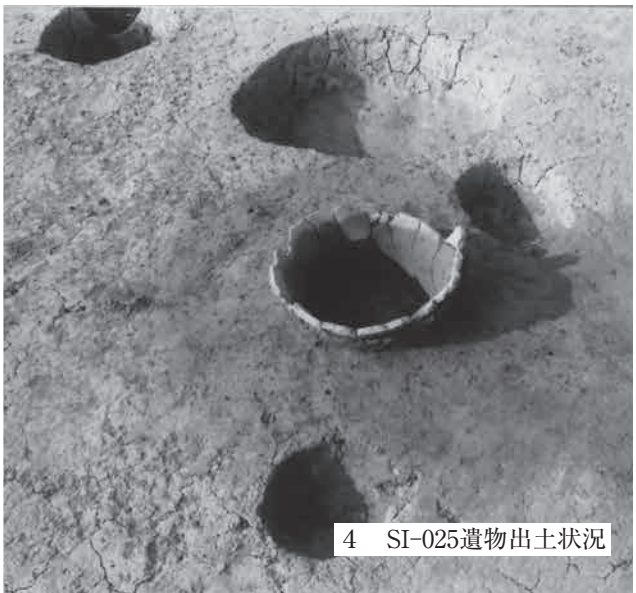

3　SI-015遺物出土状況

4　SI-010全景、SI-002（右）

1　SI-016全景

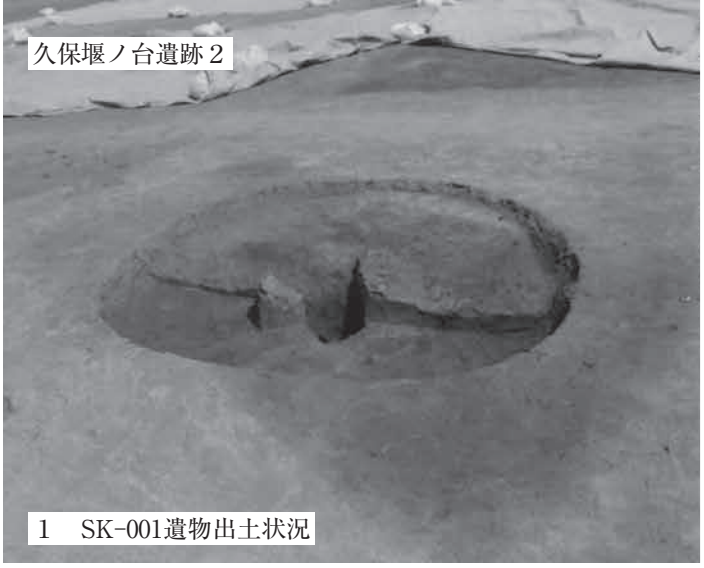
2　SI-018全景

3　SI-019遺物出土状況



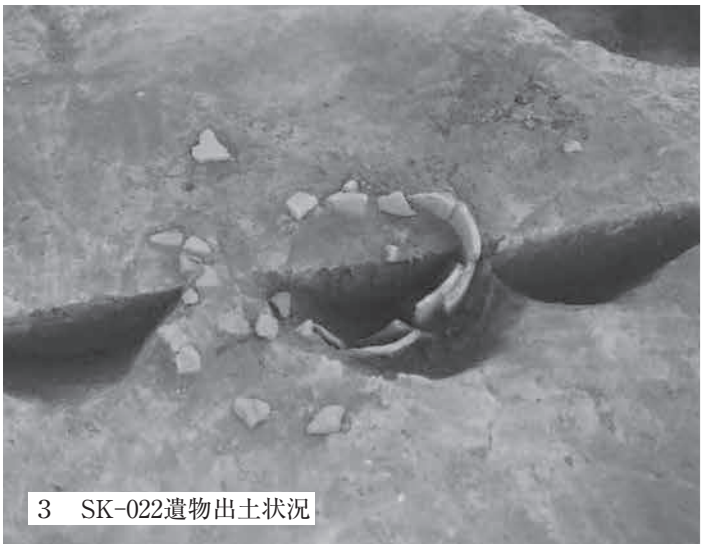
4　SI-025遺物出土状況

久保堰ノ台遺跡２



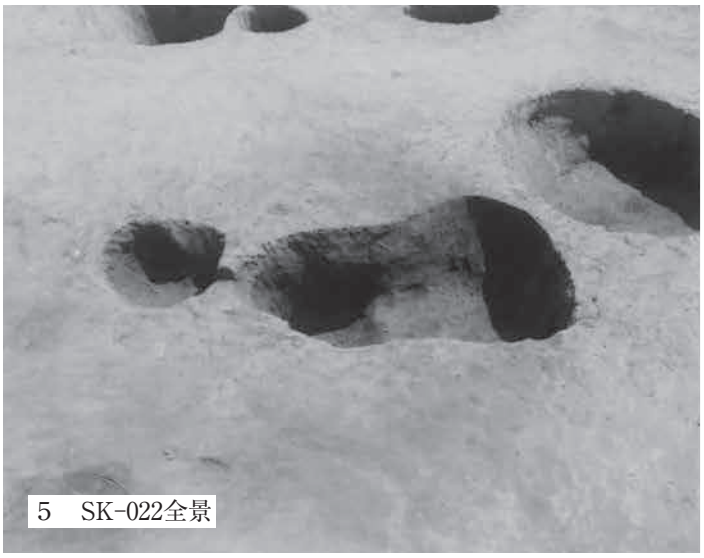
1　SK-001遺物出土状況

2　SK-012遺物出土状況



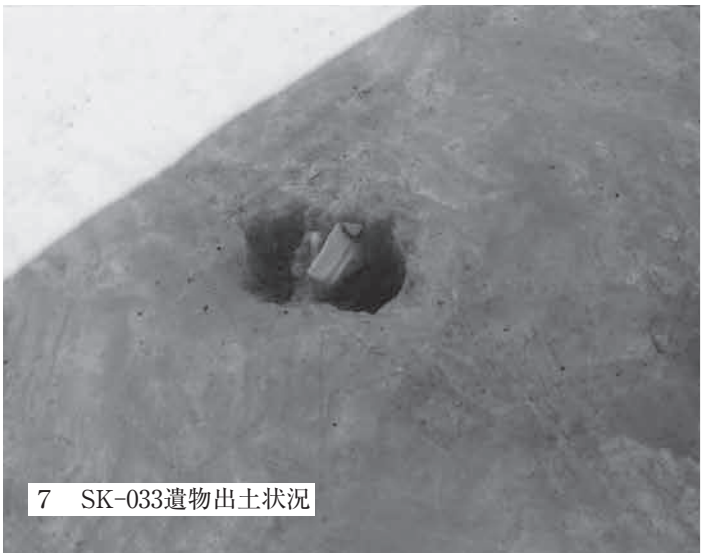
3　SK-022遺物出土状況

4　SK-022遺物出土状況

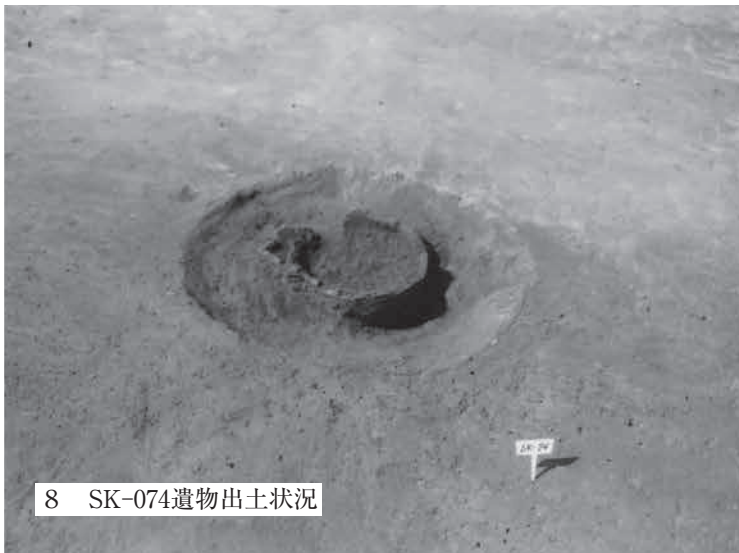


5　SK-022全景

6　SK-025遺物出土状況



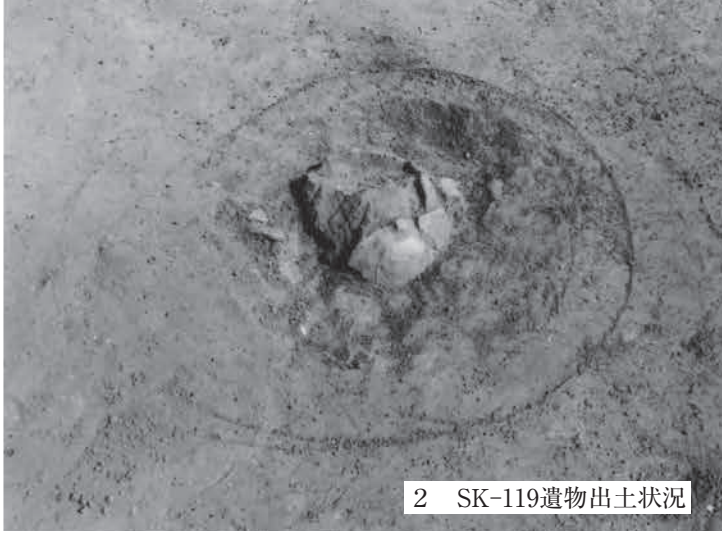
7　SK-033遺物出土状況



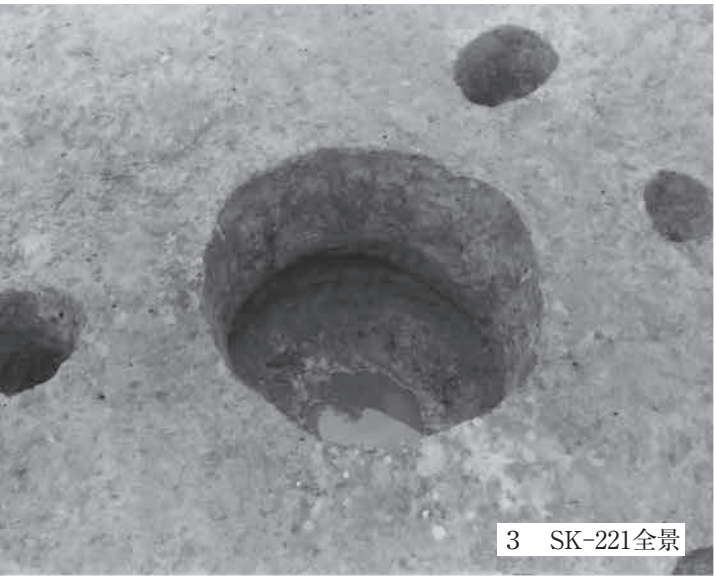
8　SK-074遺物出土状況

久保堰ノ台遺跡２

1　SK-076遺物出土状況



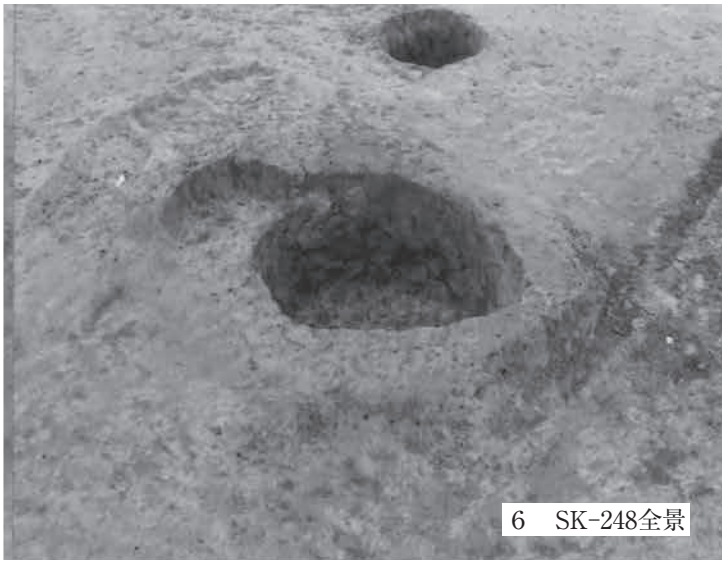
2　SK-119遺物出土状況



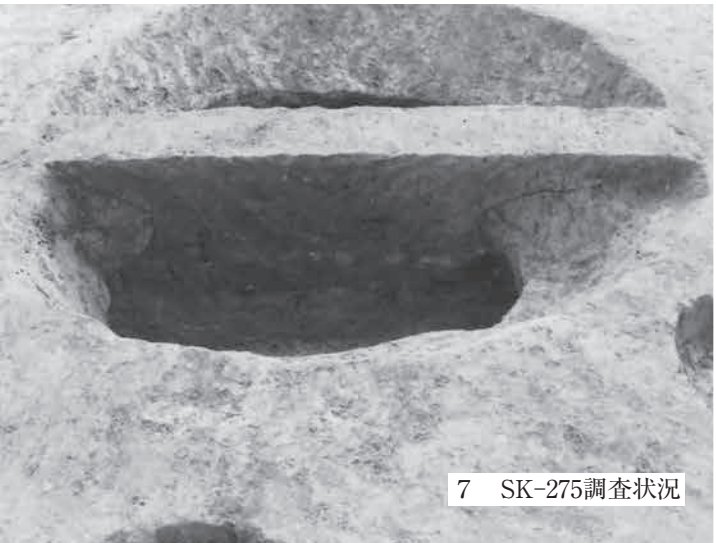
3　SK-221全景

4　SK-231全景

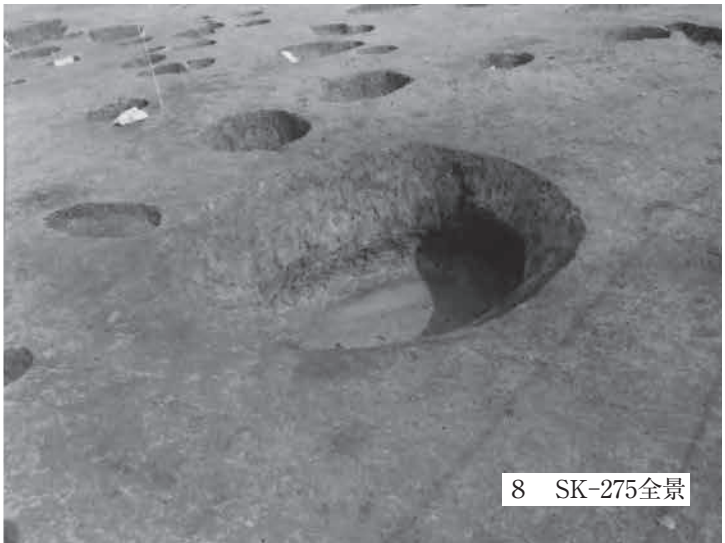
5　SK-242全景



6　SK-248全景



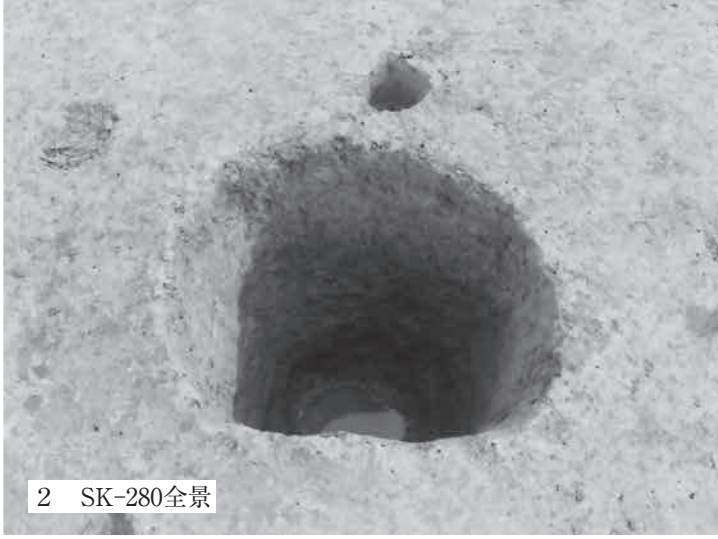
7　SK-275調査状況



8　SK-275全景

久保堰ノ台遺跡２

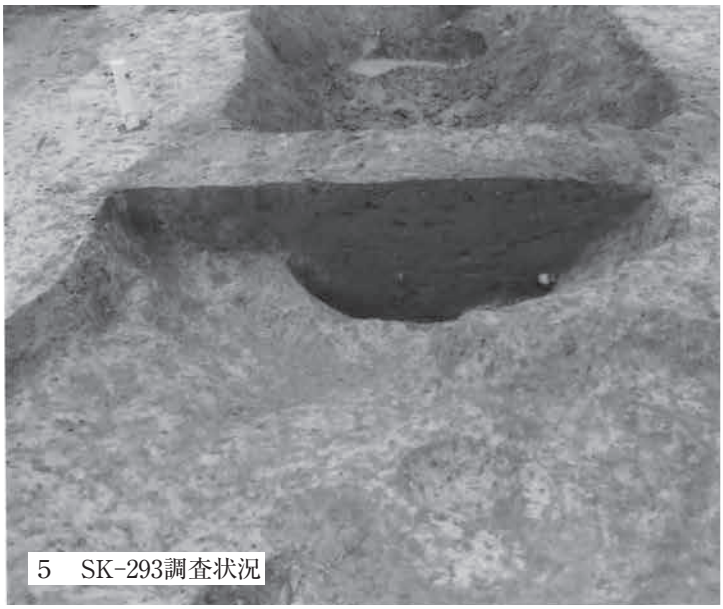
1　SK-268遺物出土状況



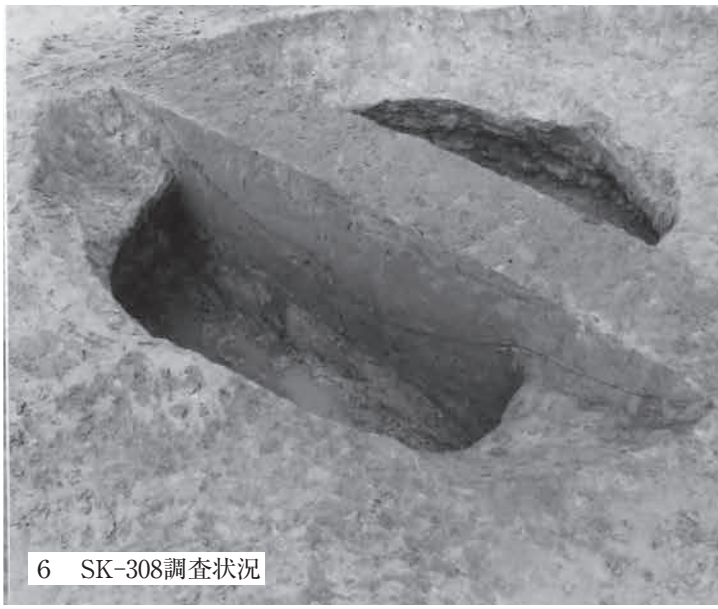
2　SK-280全景

3　SK- 307調査状況

4　SK-307遺物出土状況

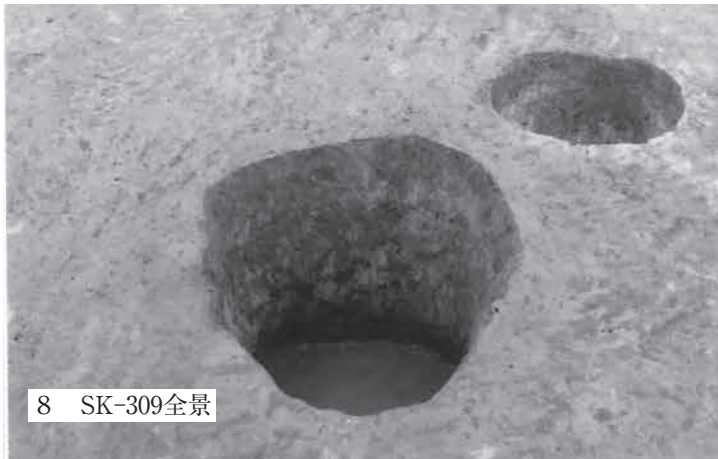


5　SK-293調査状況



6　SK-308調査状況

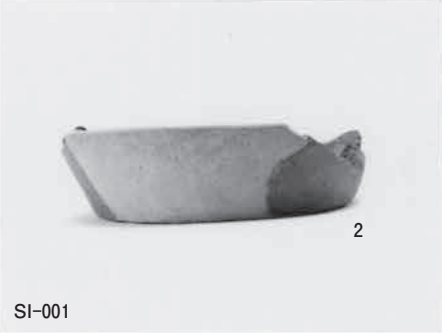
7　SK-309遺物出土状況

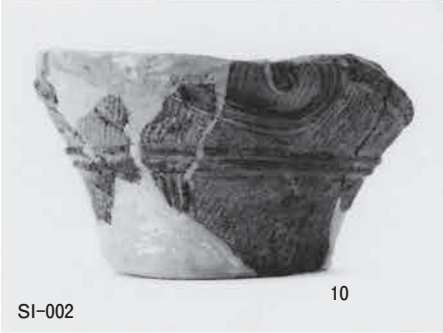


8　SK-309全景

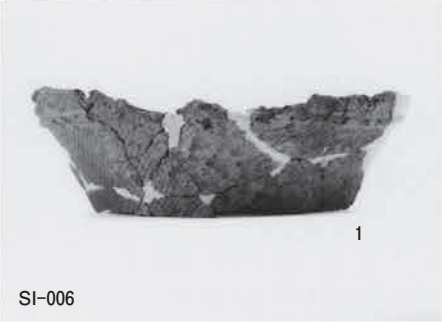
久保堰ノ台遺跡１

SI-001 1


SI-001 2


SI-002 10

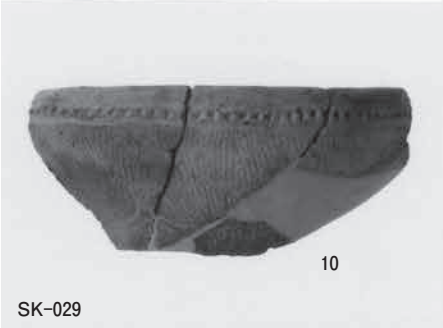
SI-006 2


SI-006 1

SI-002 11

SK-001 1

SK-001 2

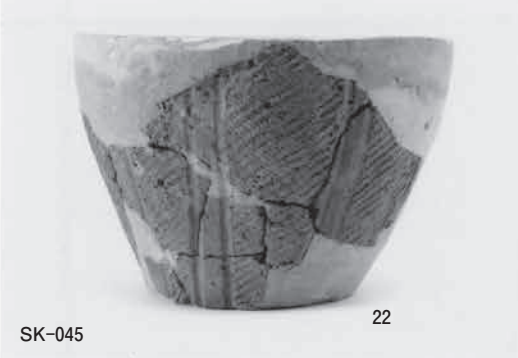

SK-029 10

SK-029 11

SK-032 25

SK-039 10

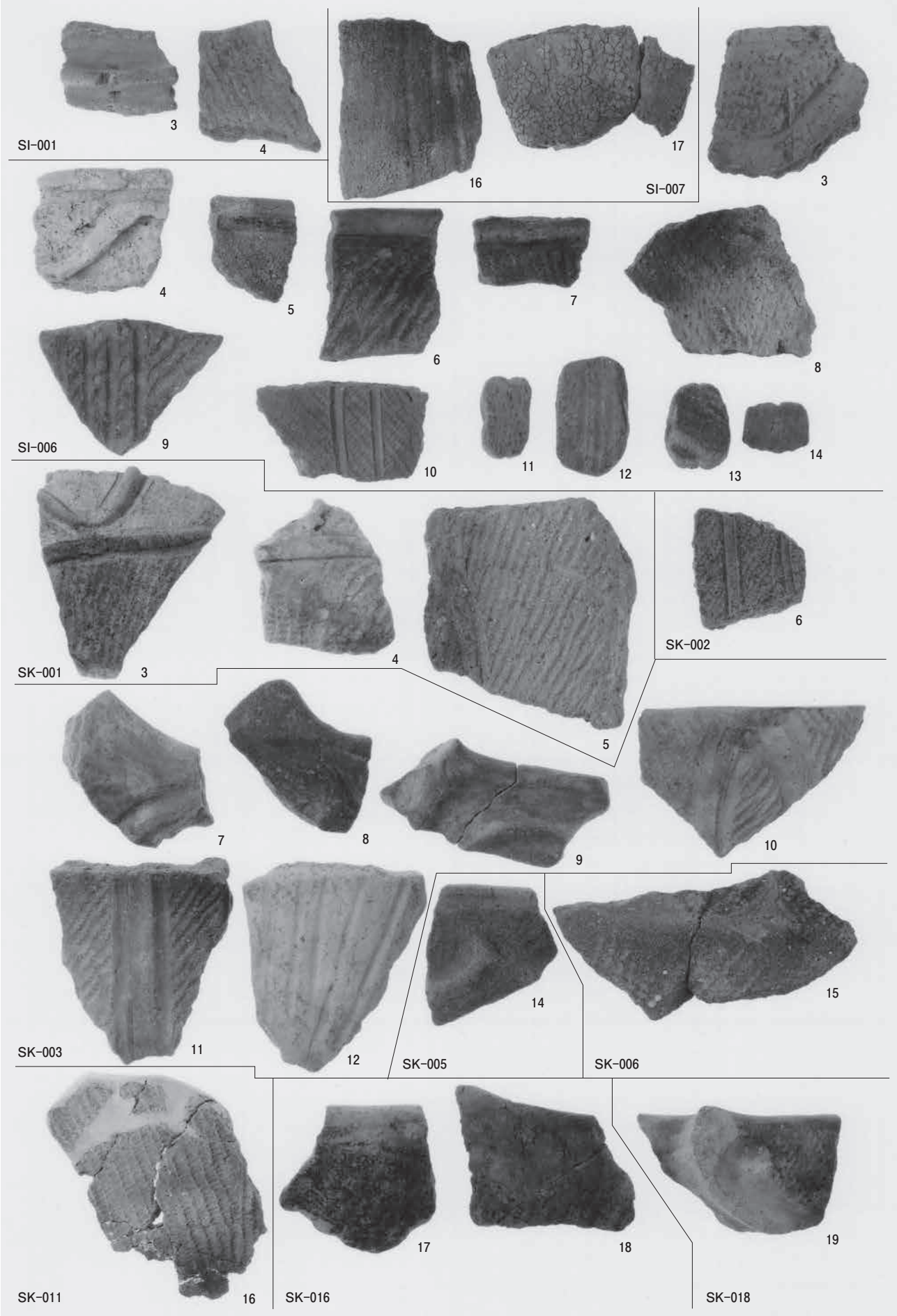
SK-037 9


SK-045 22

SK-087 11

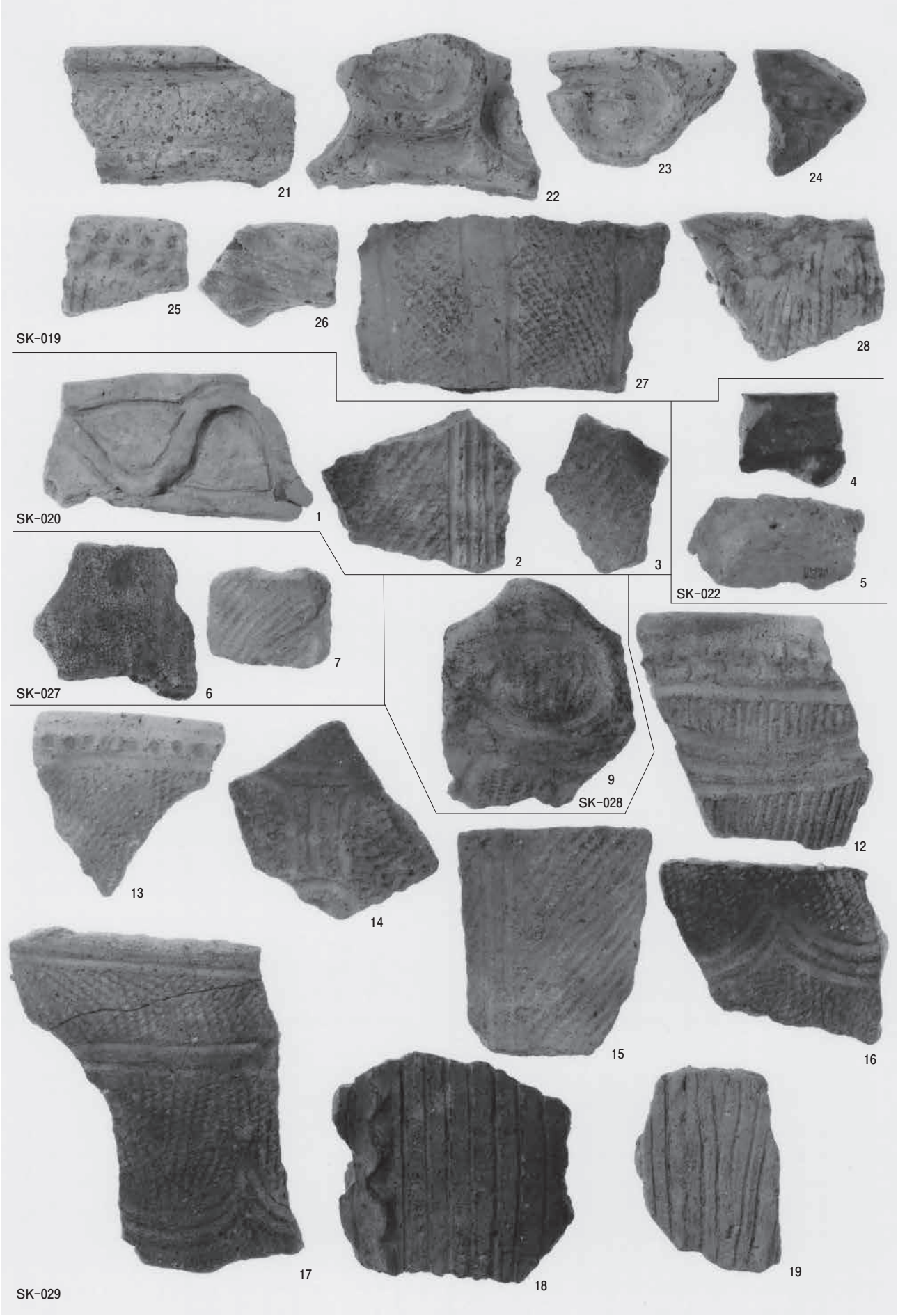
遺構出土土器(1)

久保堰ノ台遺跡１



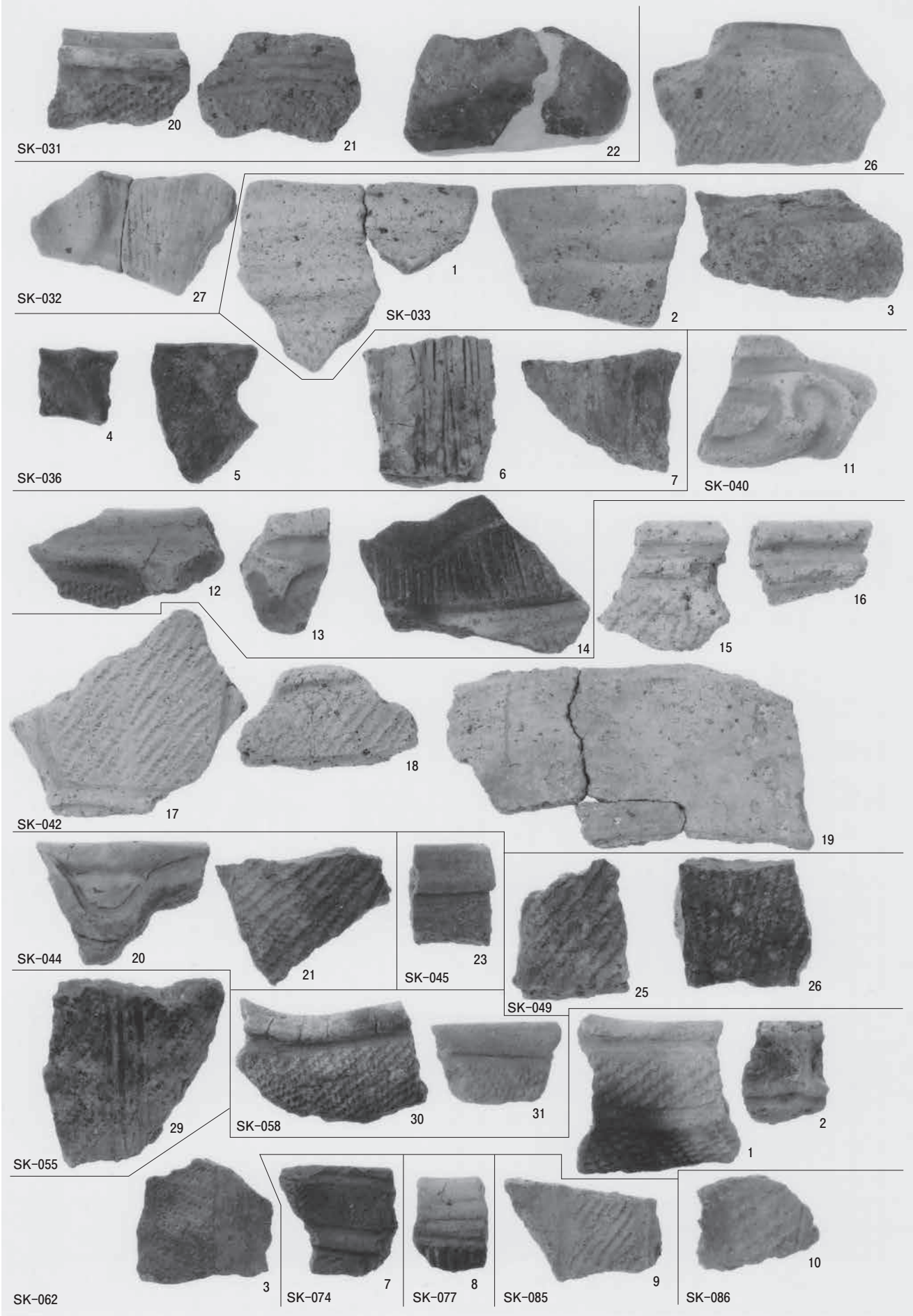
遺構出土土器(2)

久保堰ノ台遺跡１



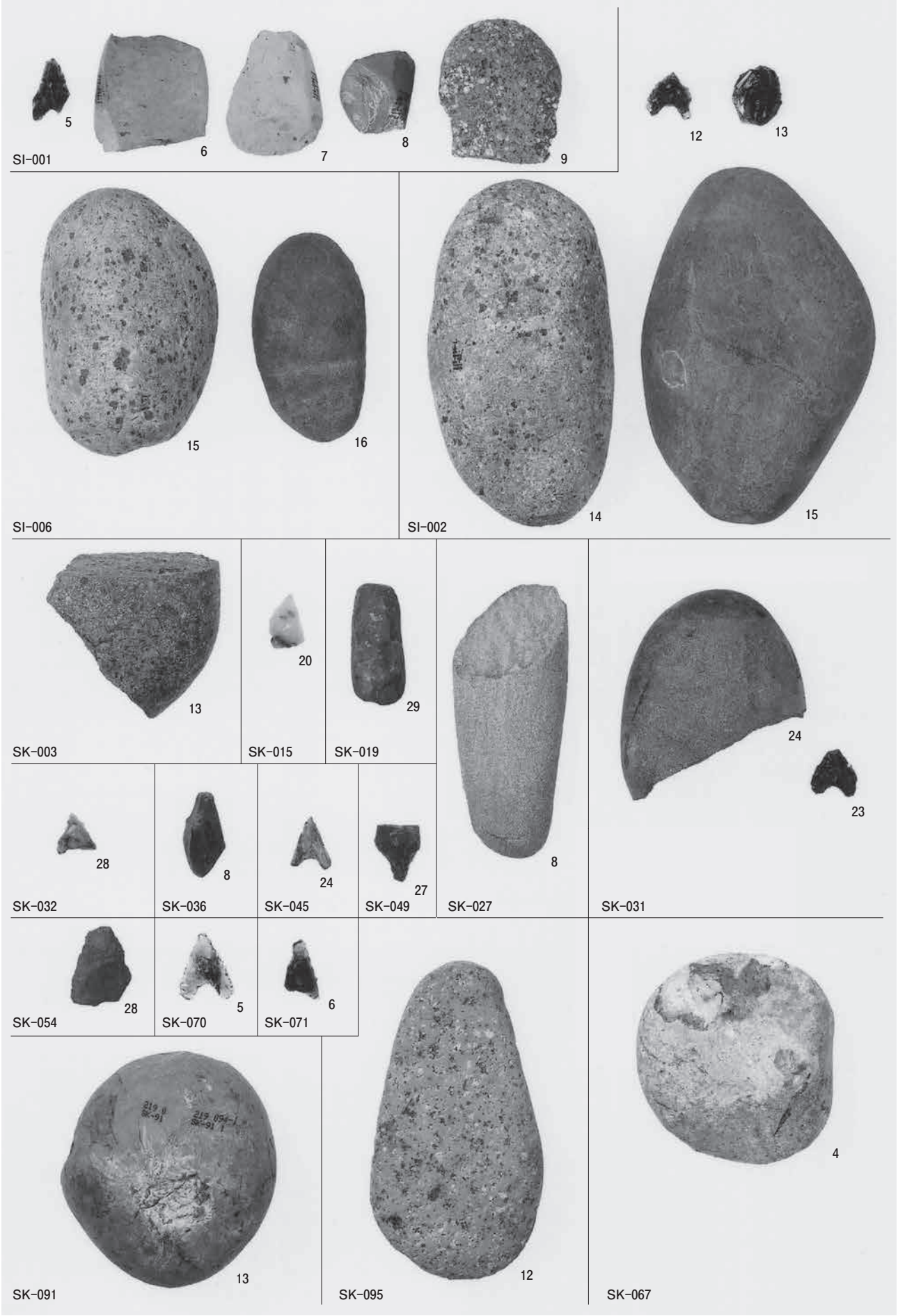
遺構出土土器(3)

久保堰ノ台遺跡１



遺構出土土器(4)

久保堰ノ台遺跡１



遺構出土石器(1)

久保堰ノ台遺跡１

遺構外出土石器

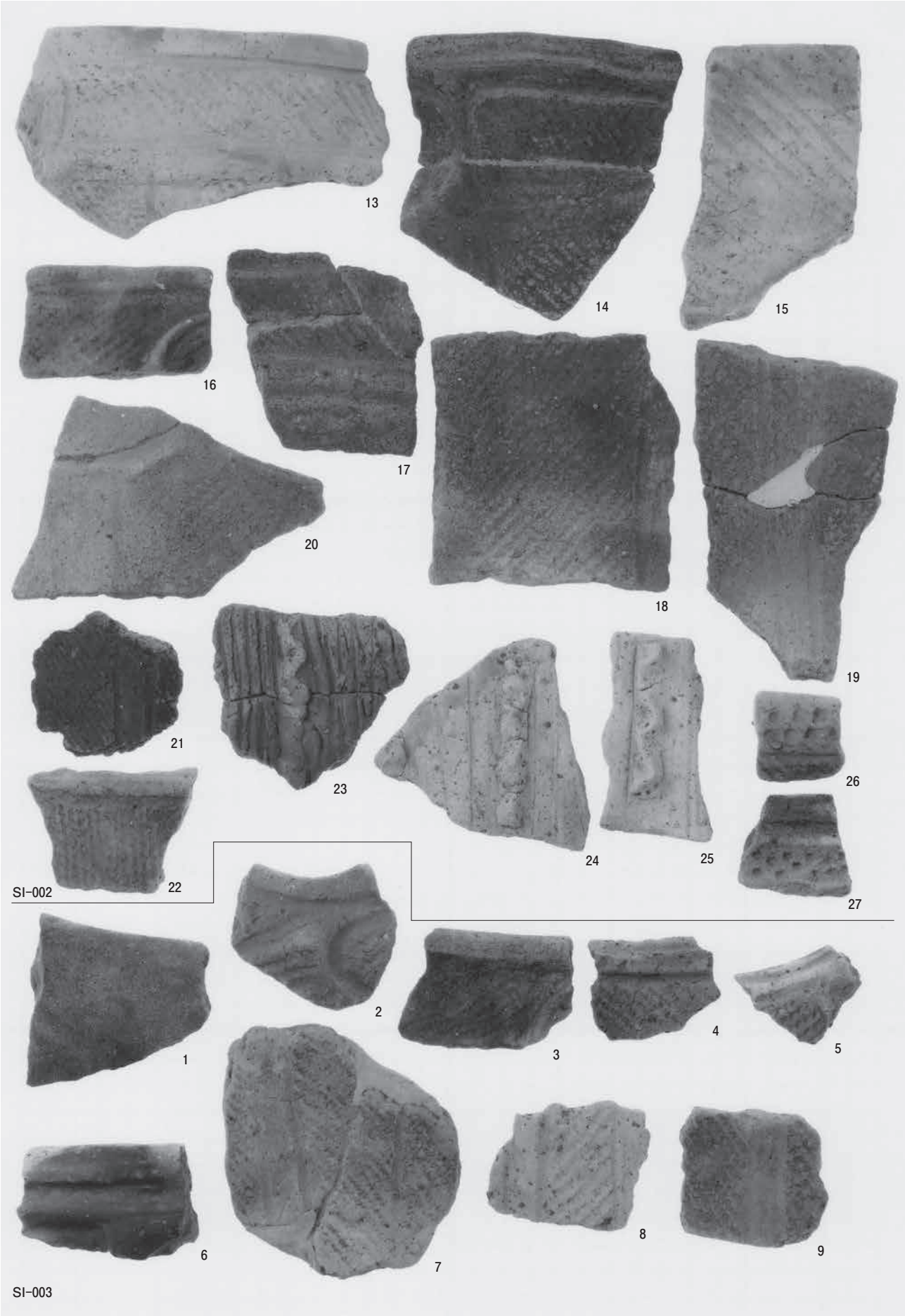
久保堰ノ台遺跡２

遺構出土土器(1)

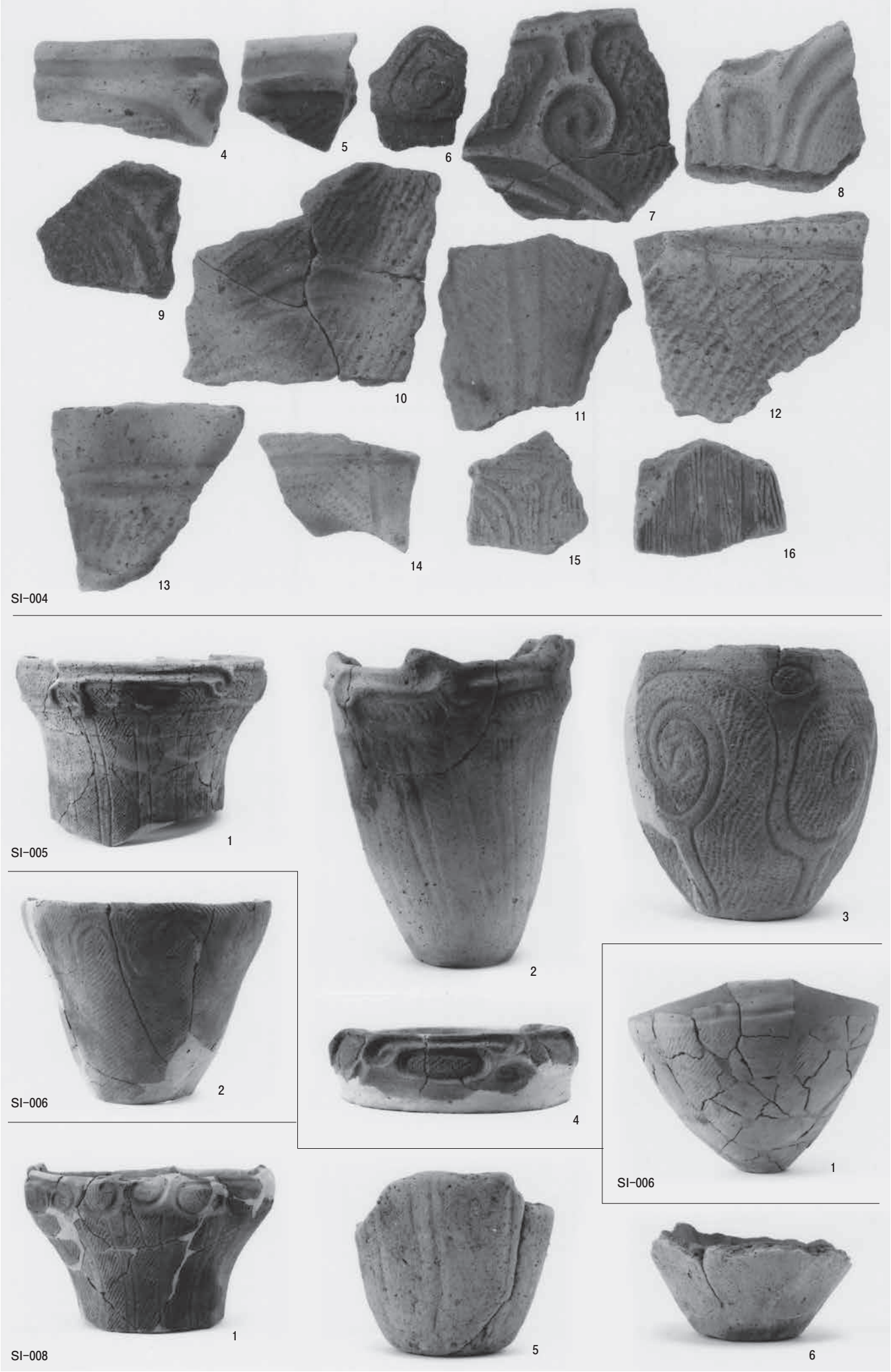
久保堰ノ台遺跡２

遺構出土土器(2)

久保堰ノ台遺跡２

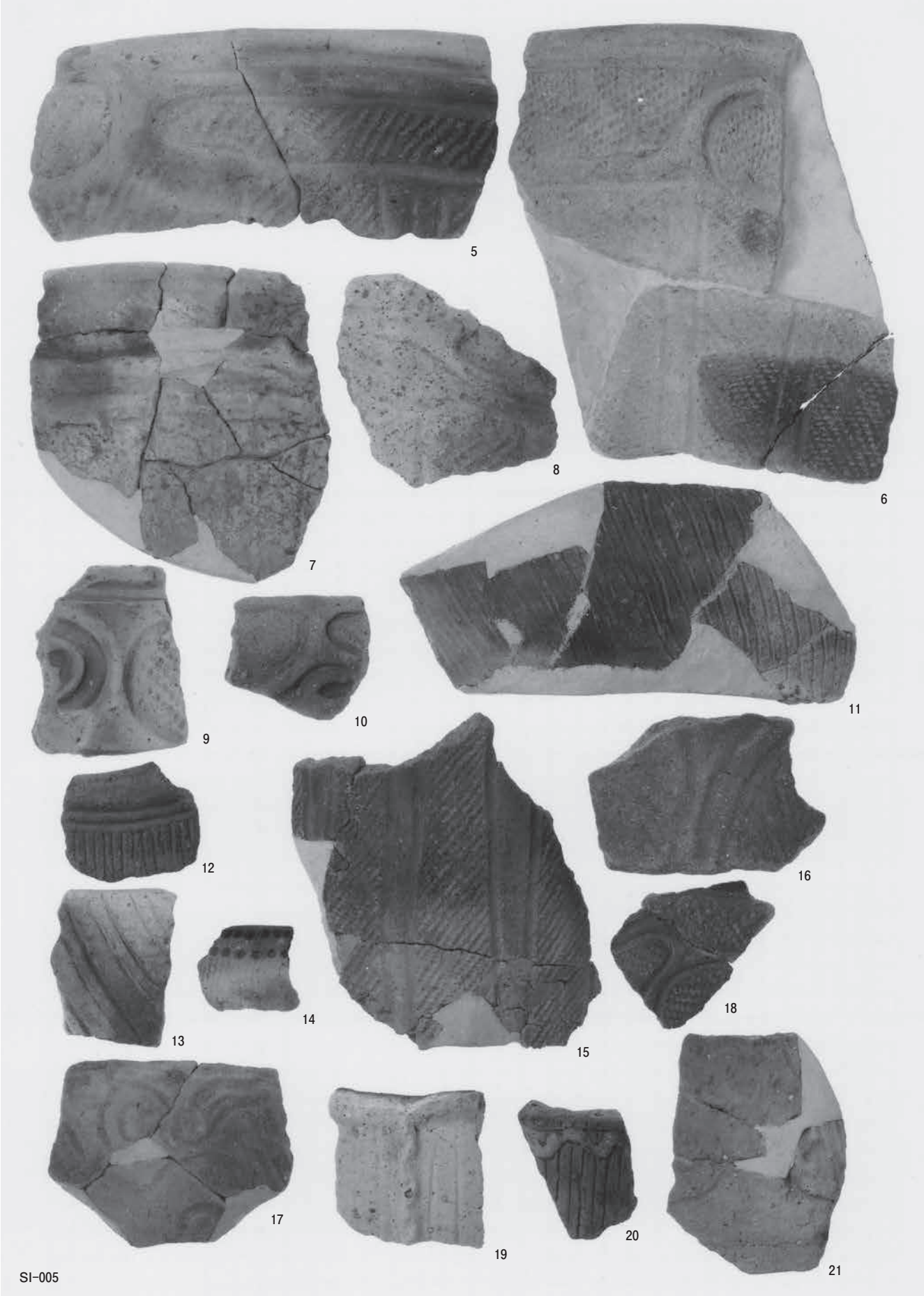


遺構出土土器(3)


4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
SI-004
1
SI-005
2
3
2
SI-006
4
1
SI-006
1
SI-008
5
6

遺構出土土器(4)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土土器(5)

久保堰ノ台遺跡２

遺構出土土器(6)

久保堰ノ台遺跡２

遺構出土土器(7)

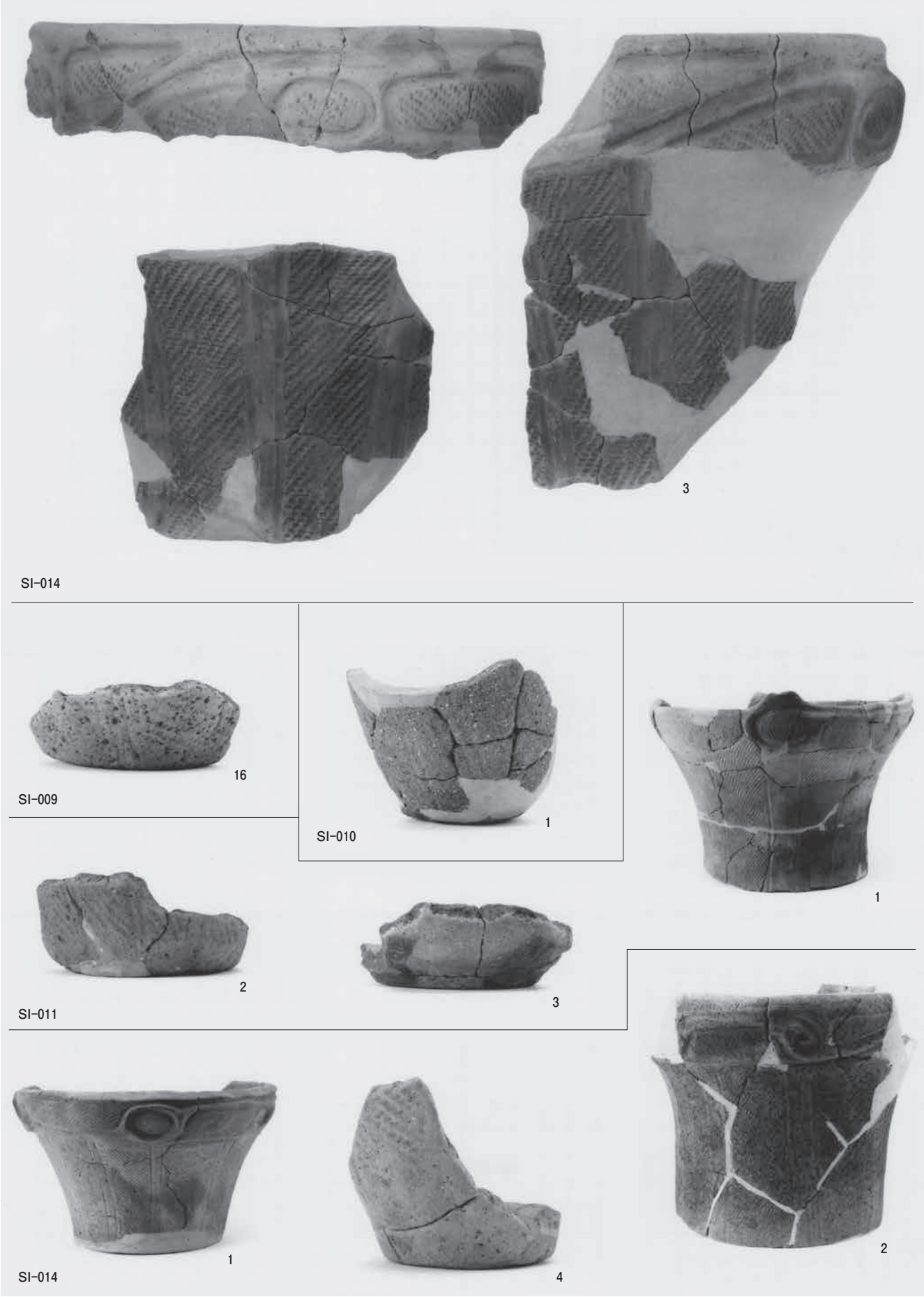
久保堰ノ台遺跡２

遺構出土土器(8)

久保堰ノ台遺跡２

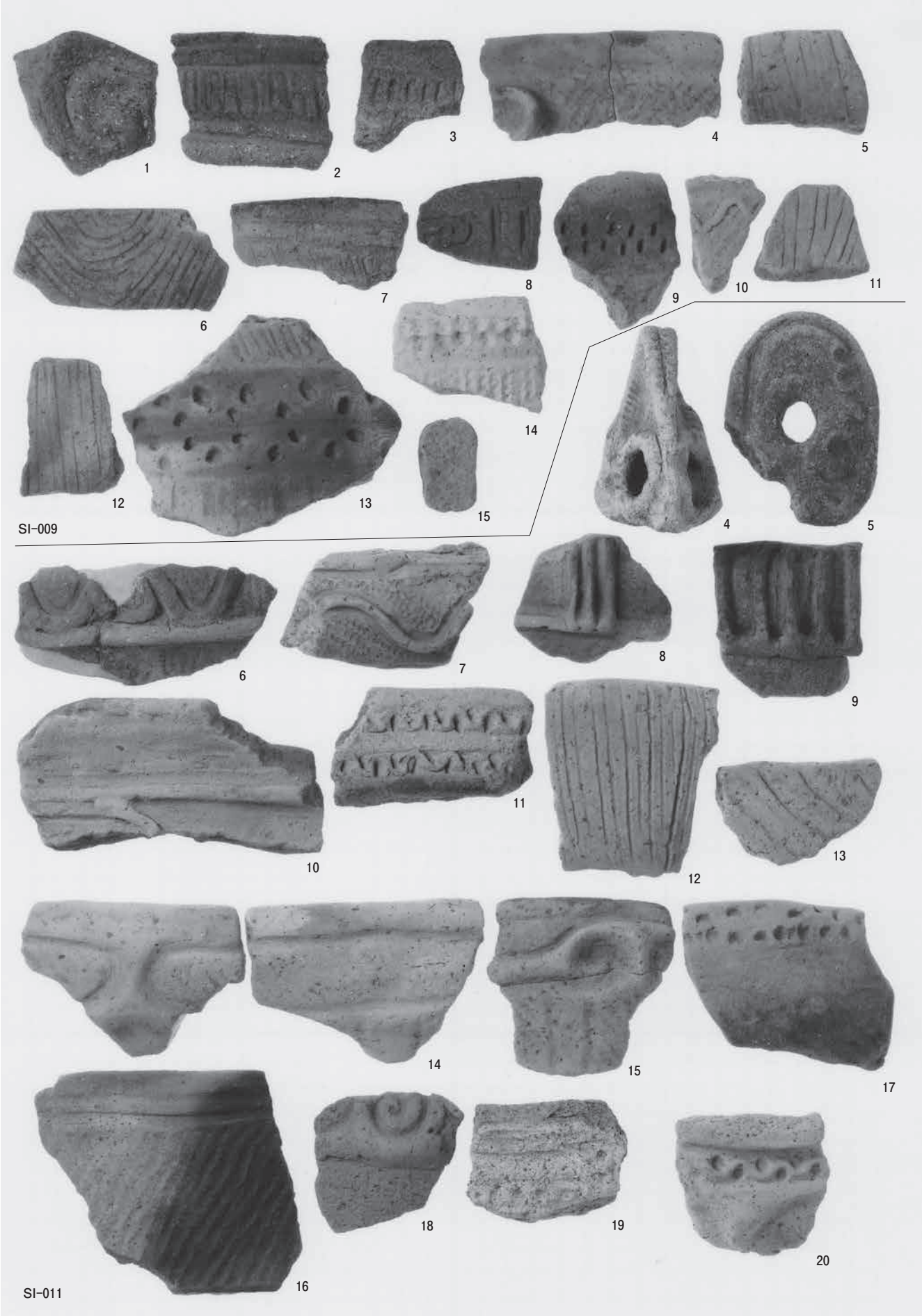
遺構出土土器(9)

久保堰ノ台遺跡２



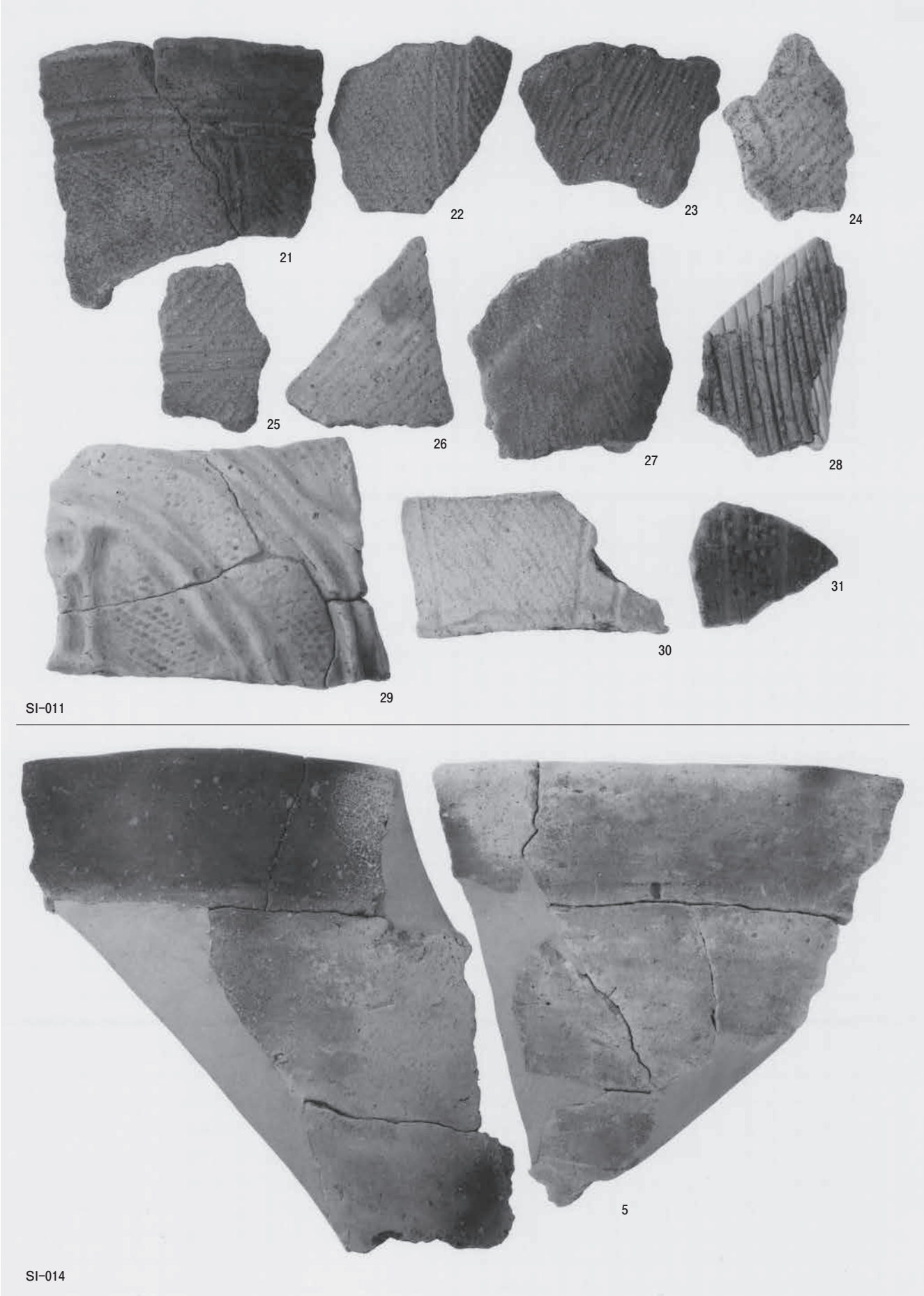
遺構出土土器⑽

久保堰ノ台遺跡２



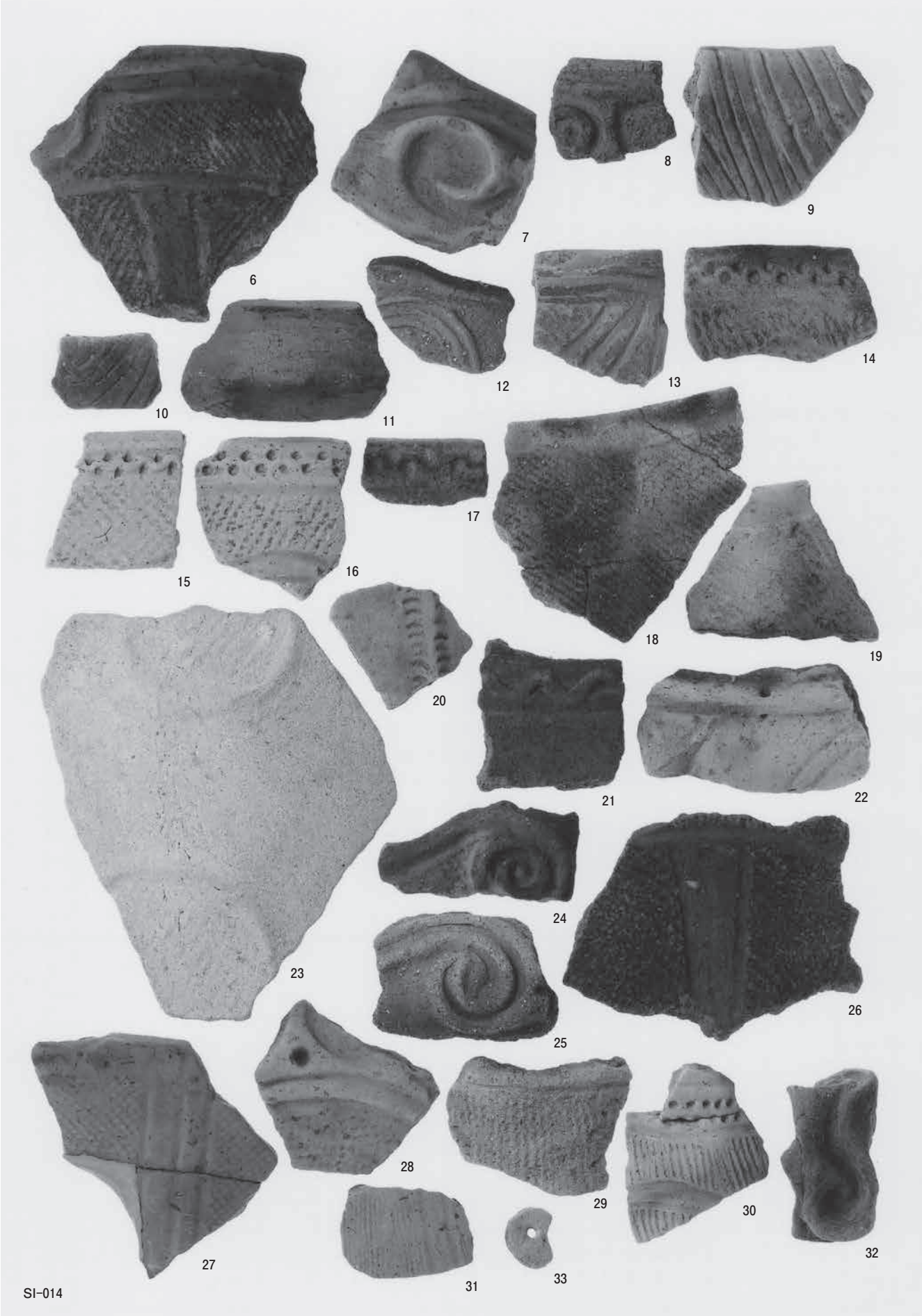
遺構出土土器(11)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土土器(12)

久保堰ノ台遺跡２

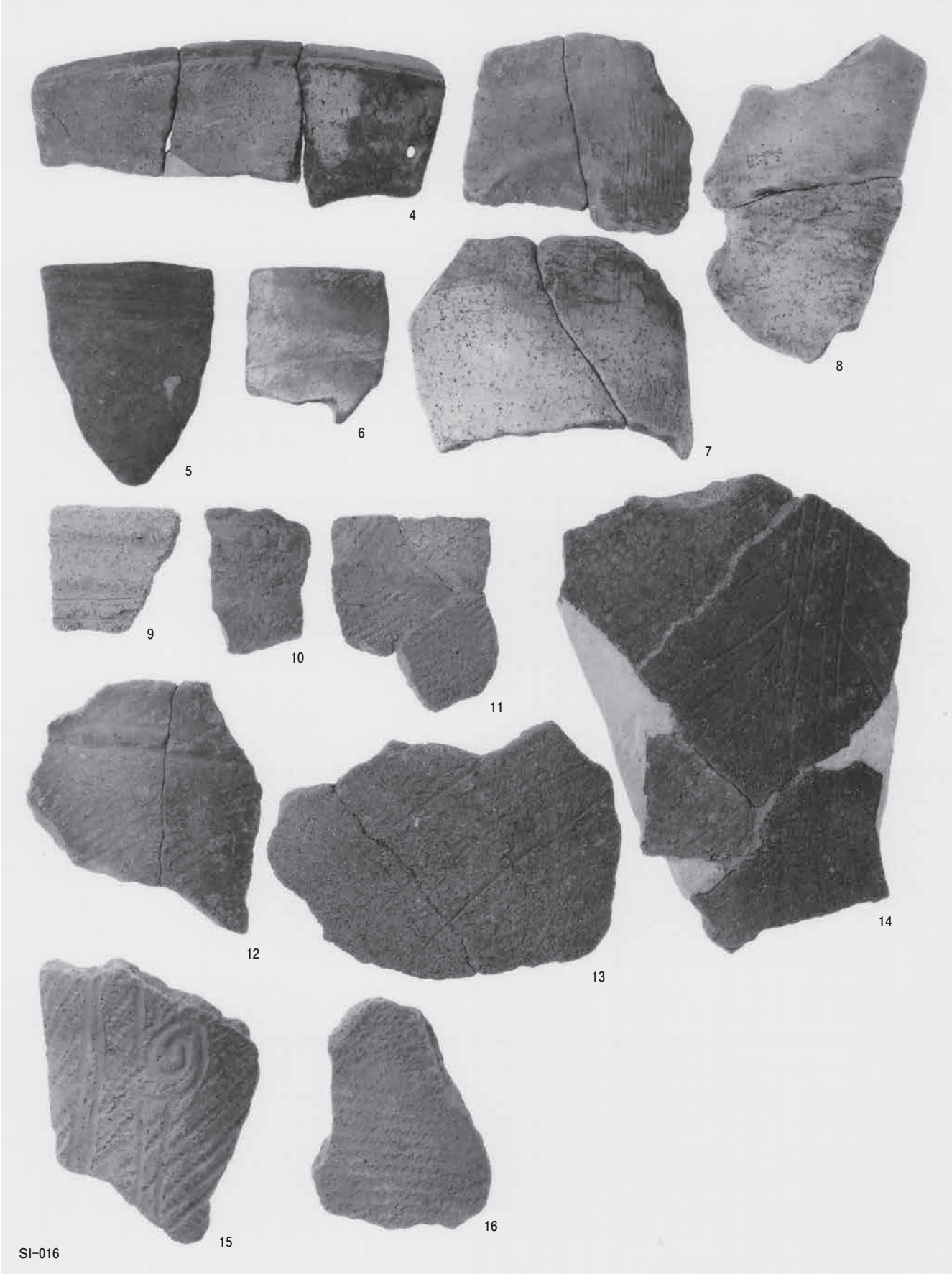


遺構出土土器(13)

久保堰ノ台遺跡２

遺構出土土器(14)

久保堰ノ台遺跡２

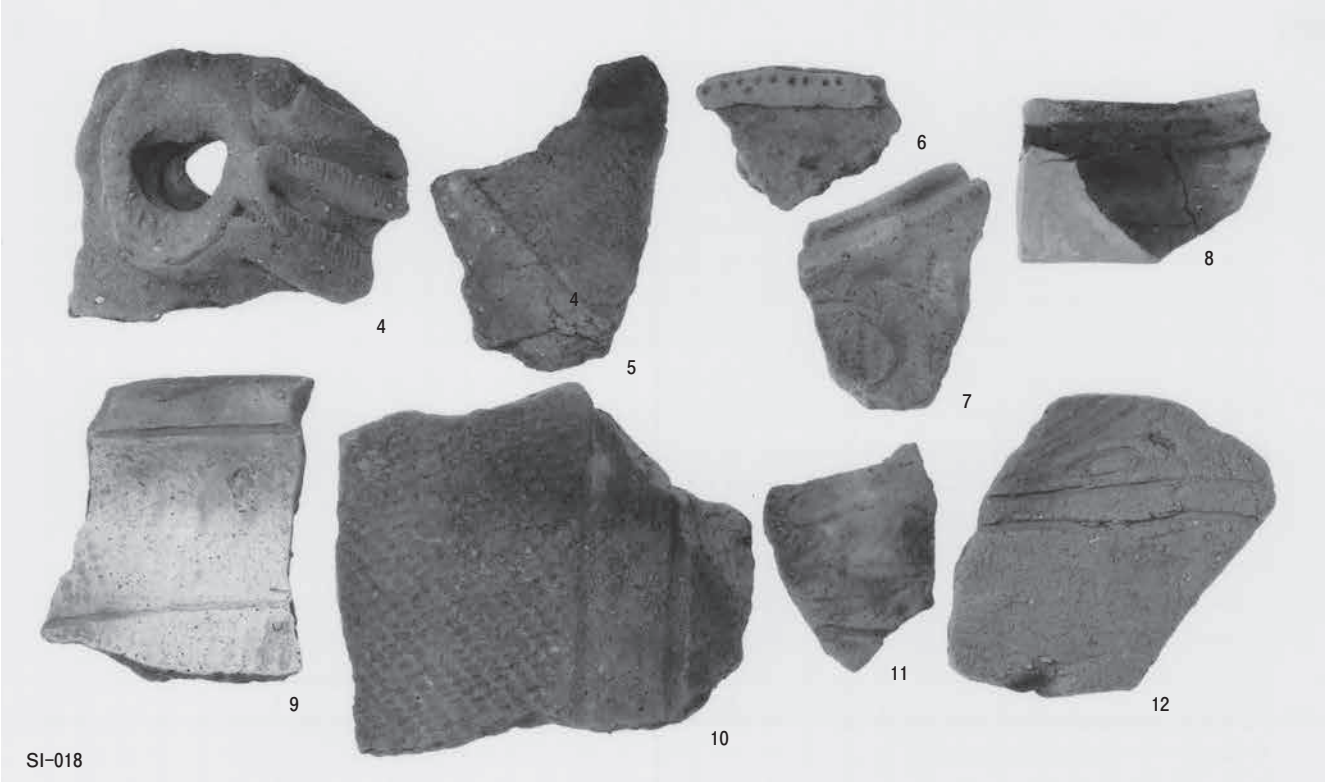


遺構出土土器(15)

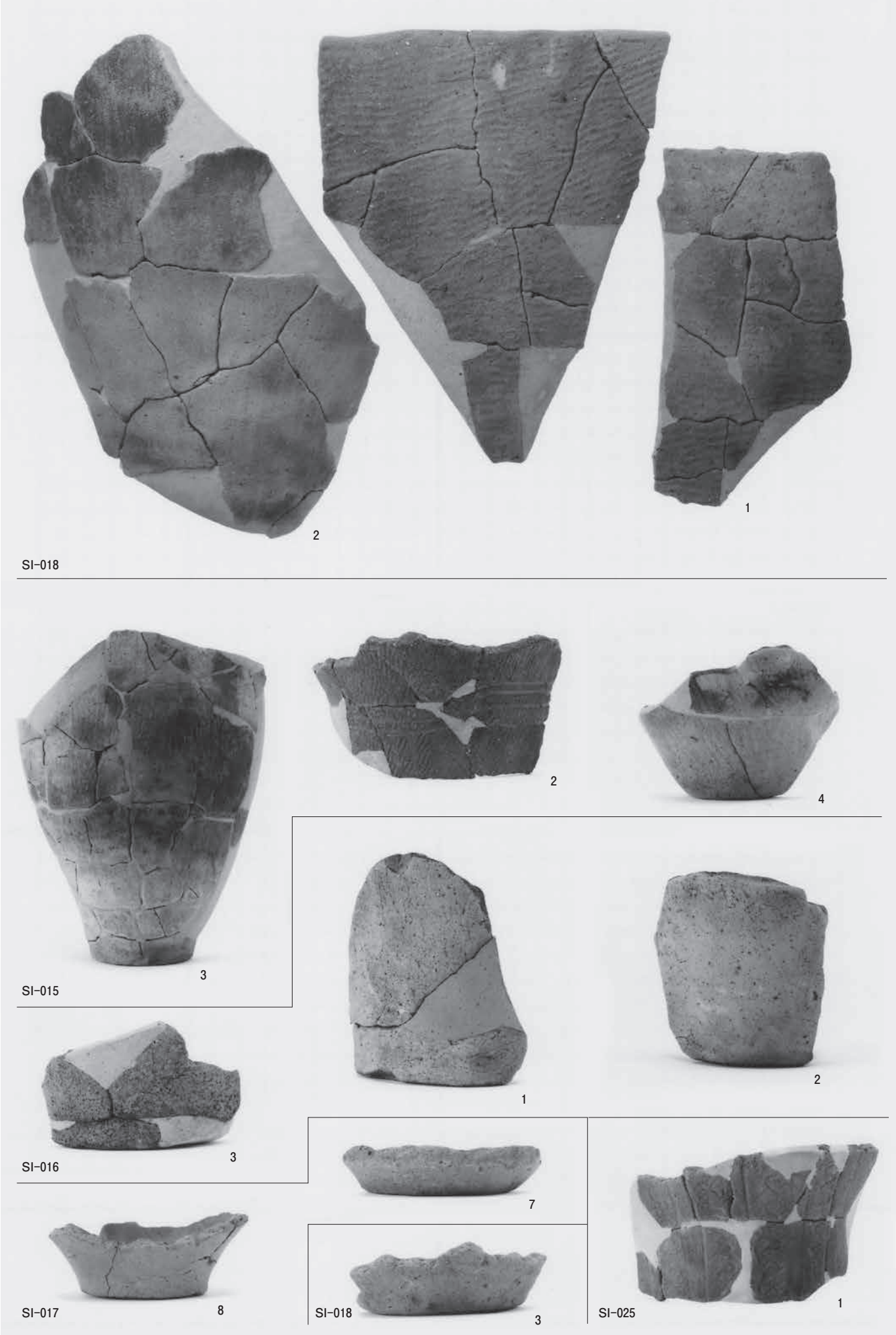
久保堰ノ台遺跡２

遺構出土土器(16)

久保堰ノ台遺跡２

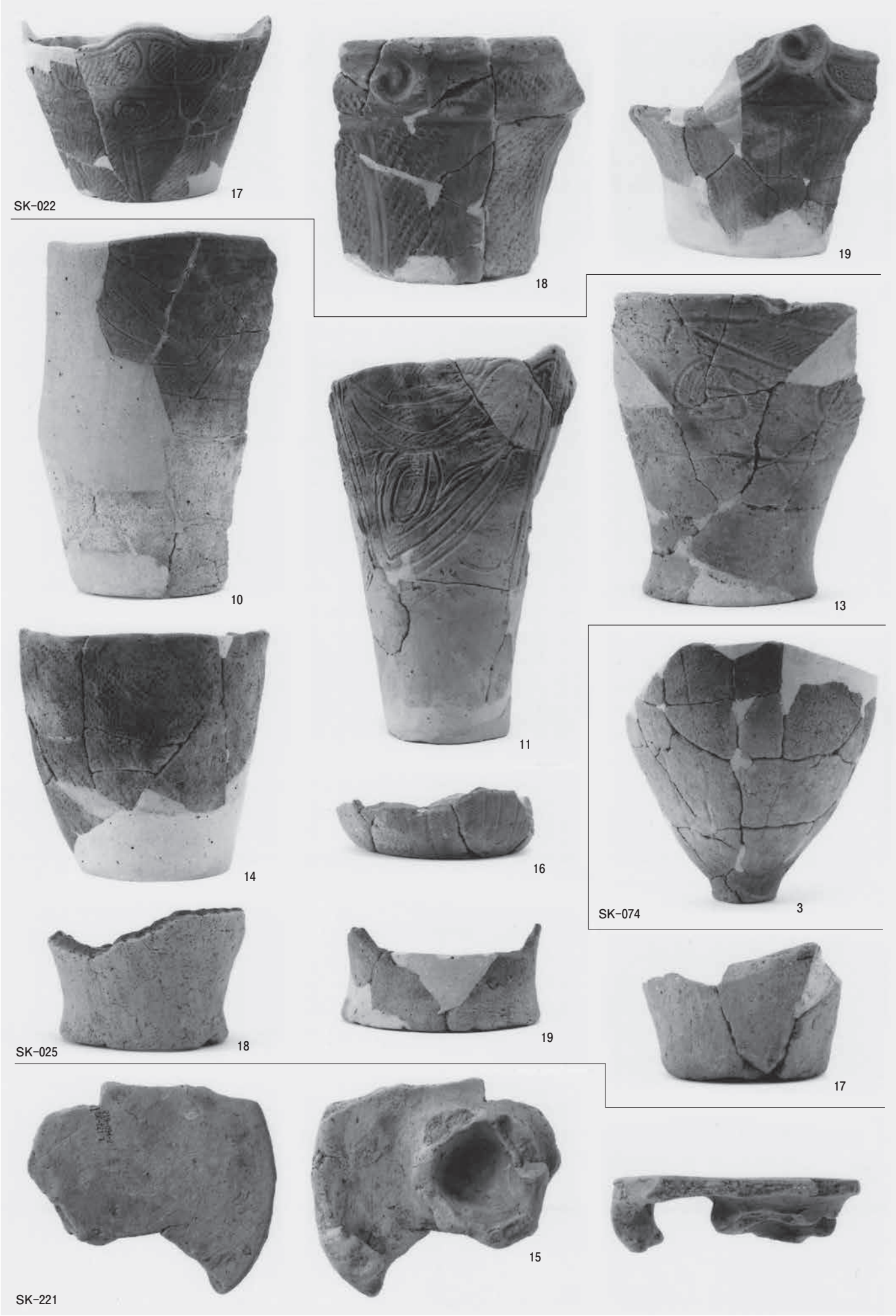


遺構出土土器(17)



遺構出土土器(18)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土土器(19)

久保堰ノ台遺跡２

SK-120 1

SK-075 9

SK-119 8

SK-246 4

SK-242 15

SK-307 1

SK-248 6

SK-268 1

SK-307 3

SH-128 13

39

84

SD-004 4

40

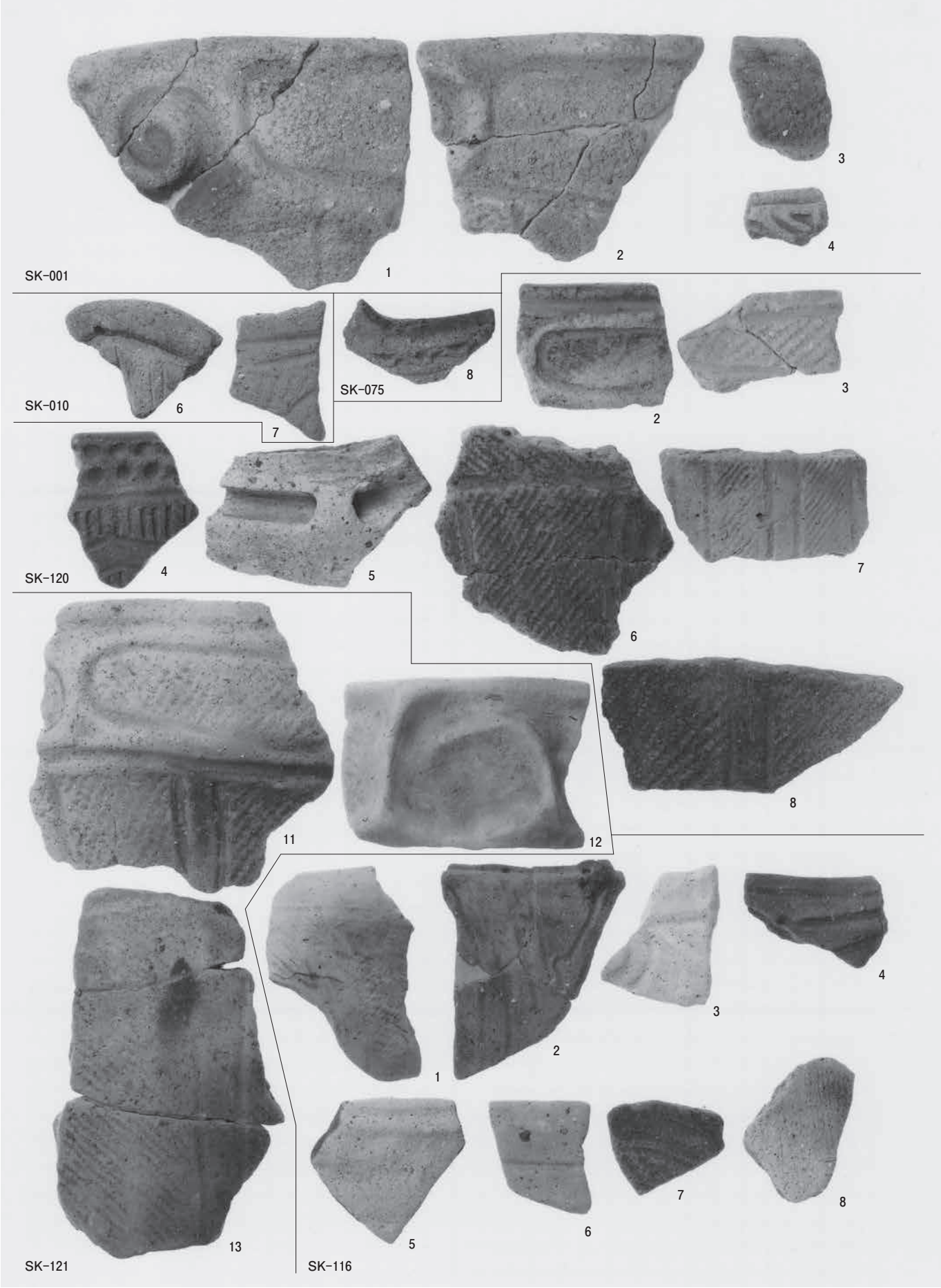
85

88

遺構外出土土器

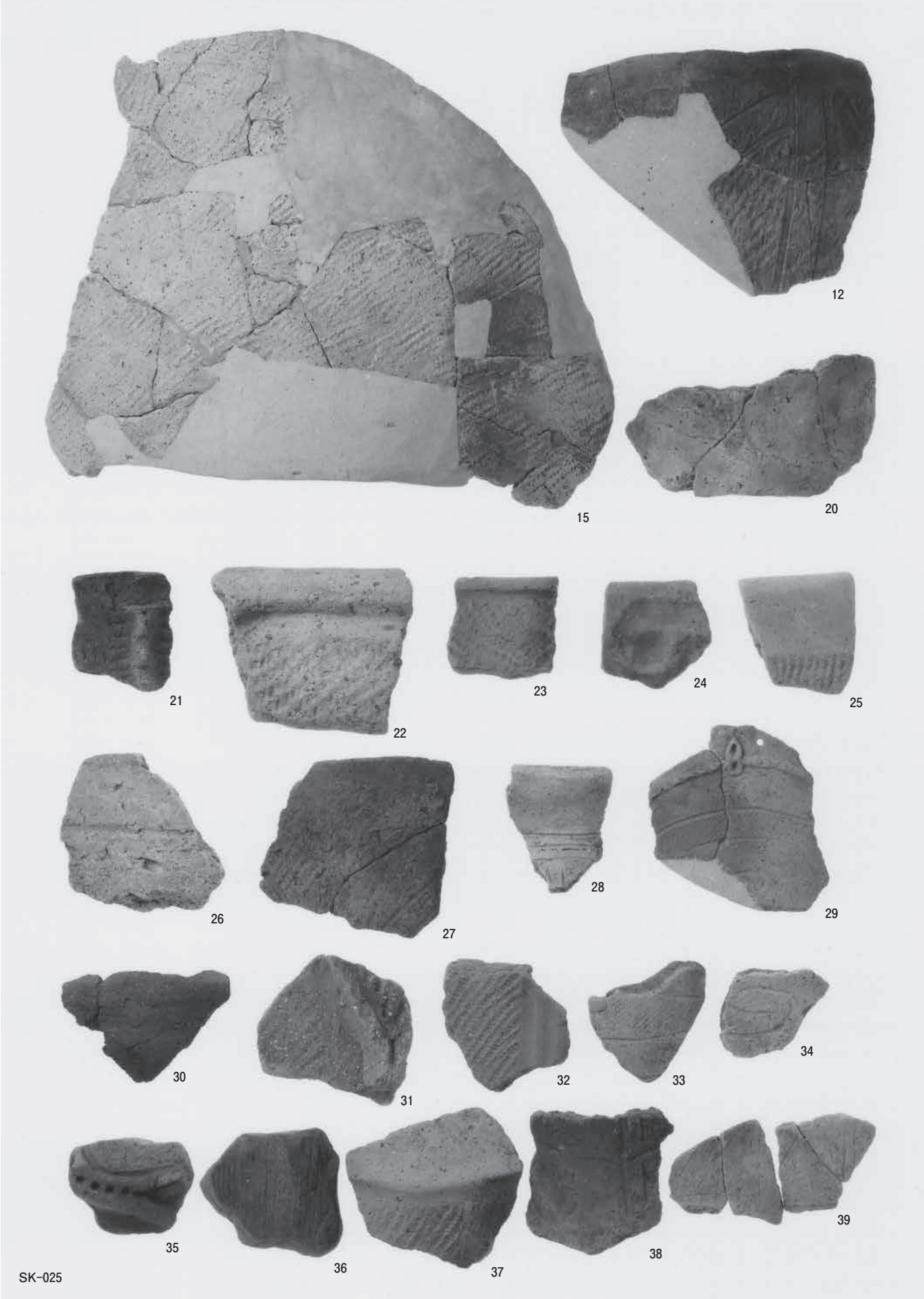
遺構出土土器⑳、遺構外出土土器

久保堰ノ台遺跡２



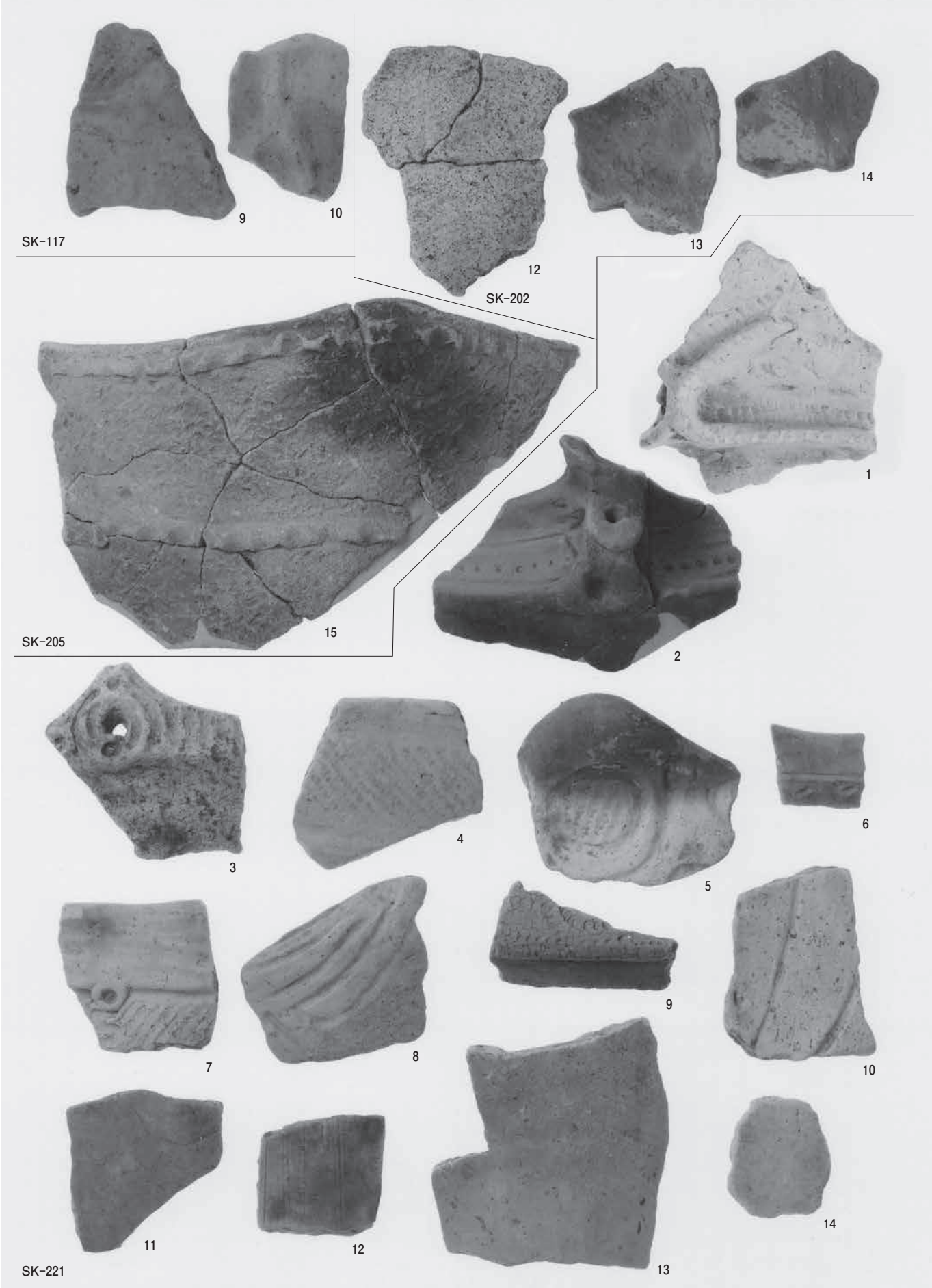
遺構出土土器(21)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土土器(22)

久保堰ノ台遺跡２

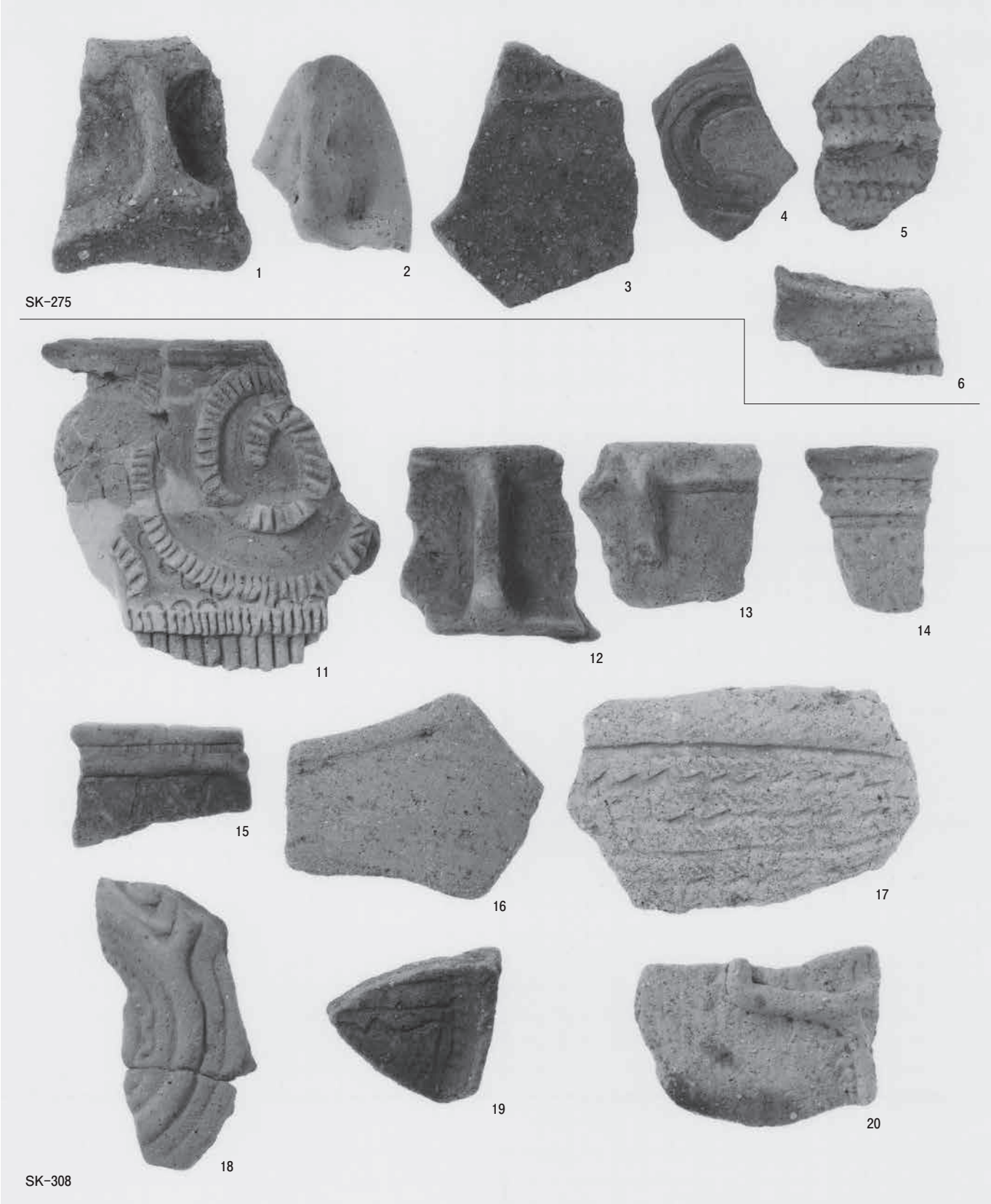


遺構出土土器(23)

久保堰ノ台遺跡２

遺構出土土器(24)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土土器(25)

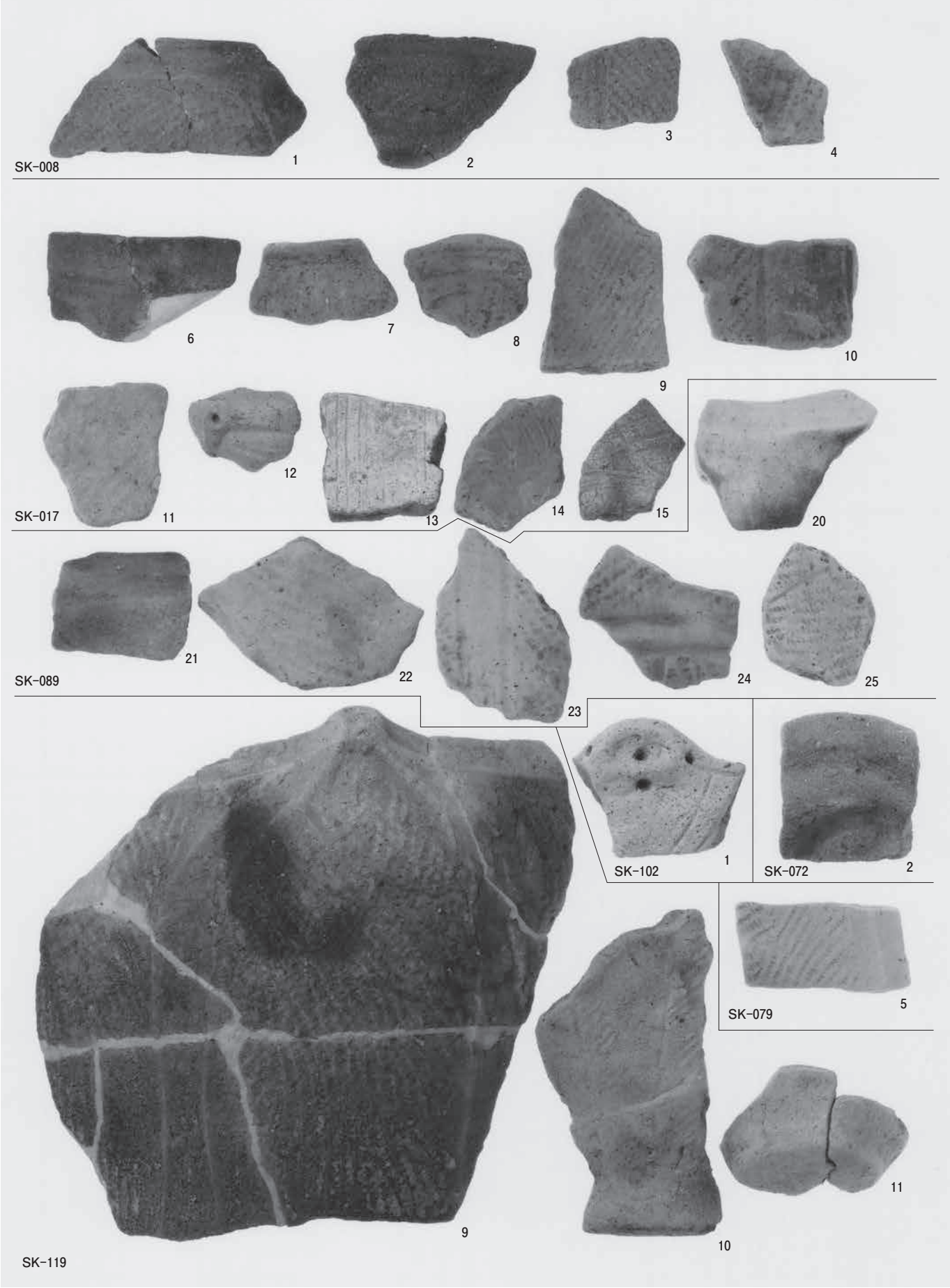
久保堰ノ台遺跡２

遺構出土土器(26)

久保堰ノ台遺跡２

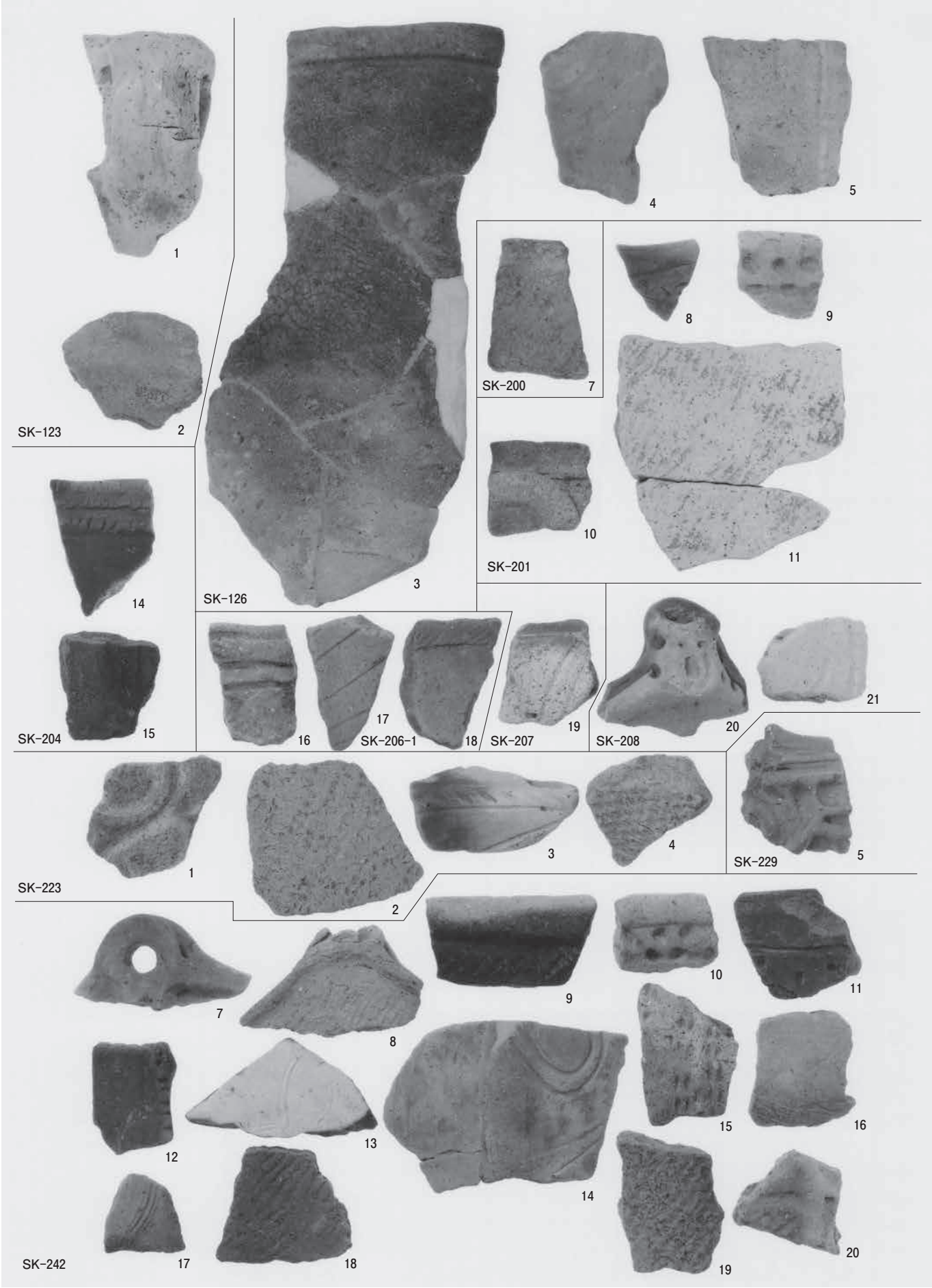
遺構出土土器(27)

久保堰ノ台遺跡２



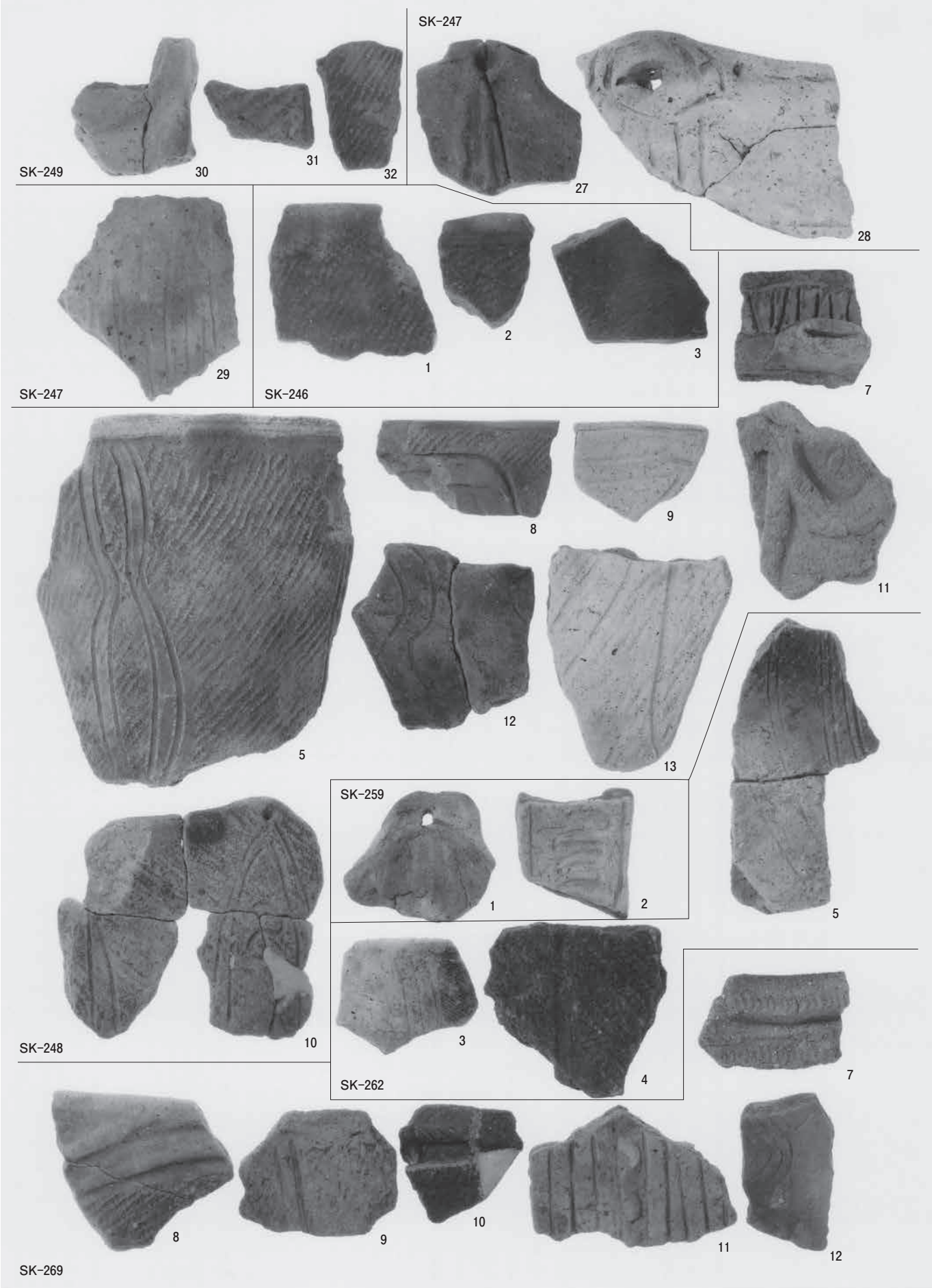
遺構出土土器(28)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土土器(29)

久保堰ノ台遺跡２

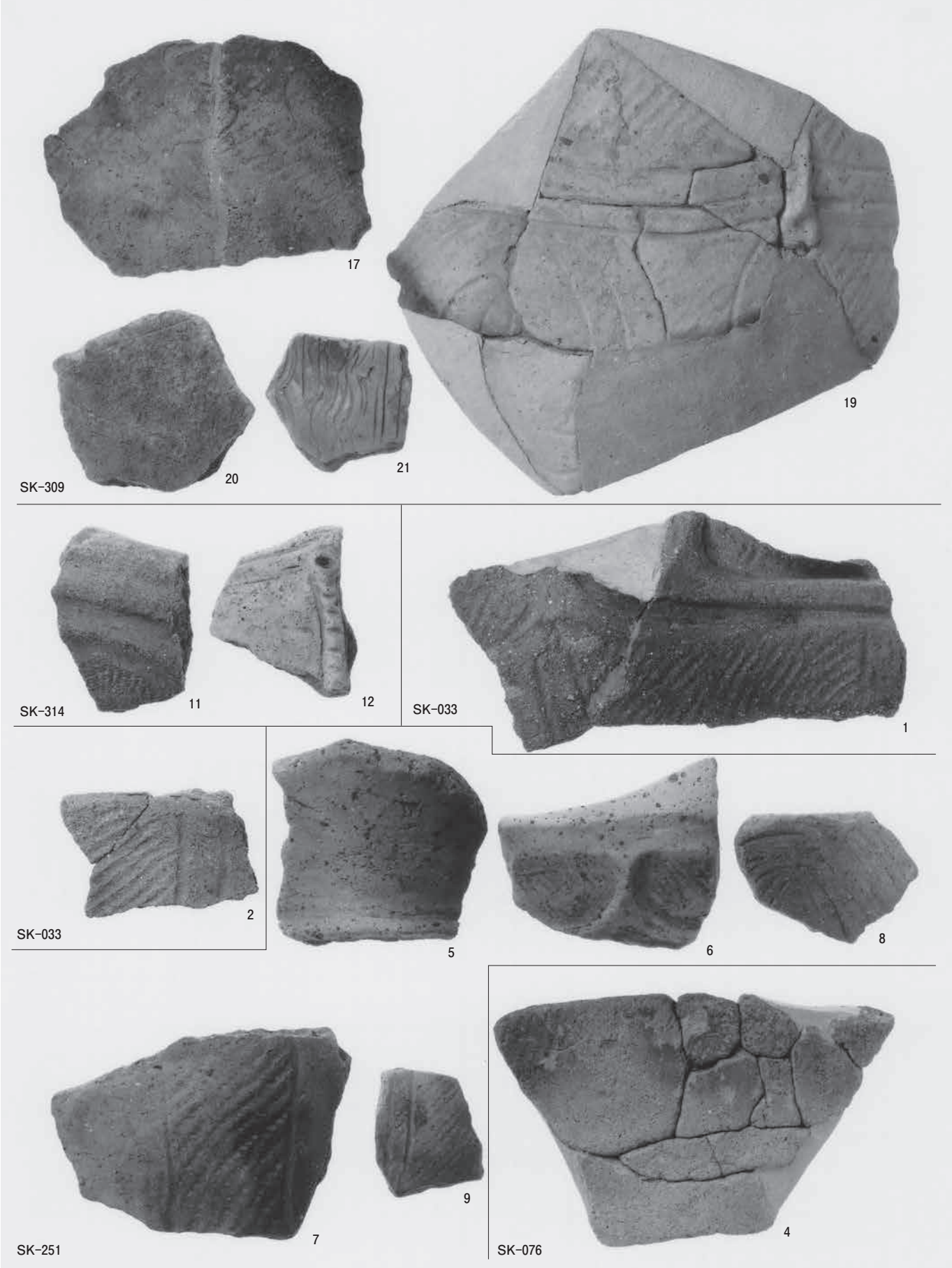


遺構出土土器(30)

久保堰ノ台遺跡２

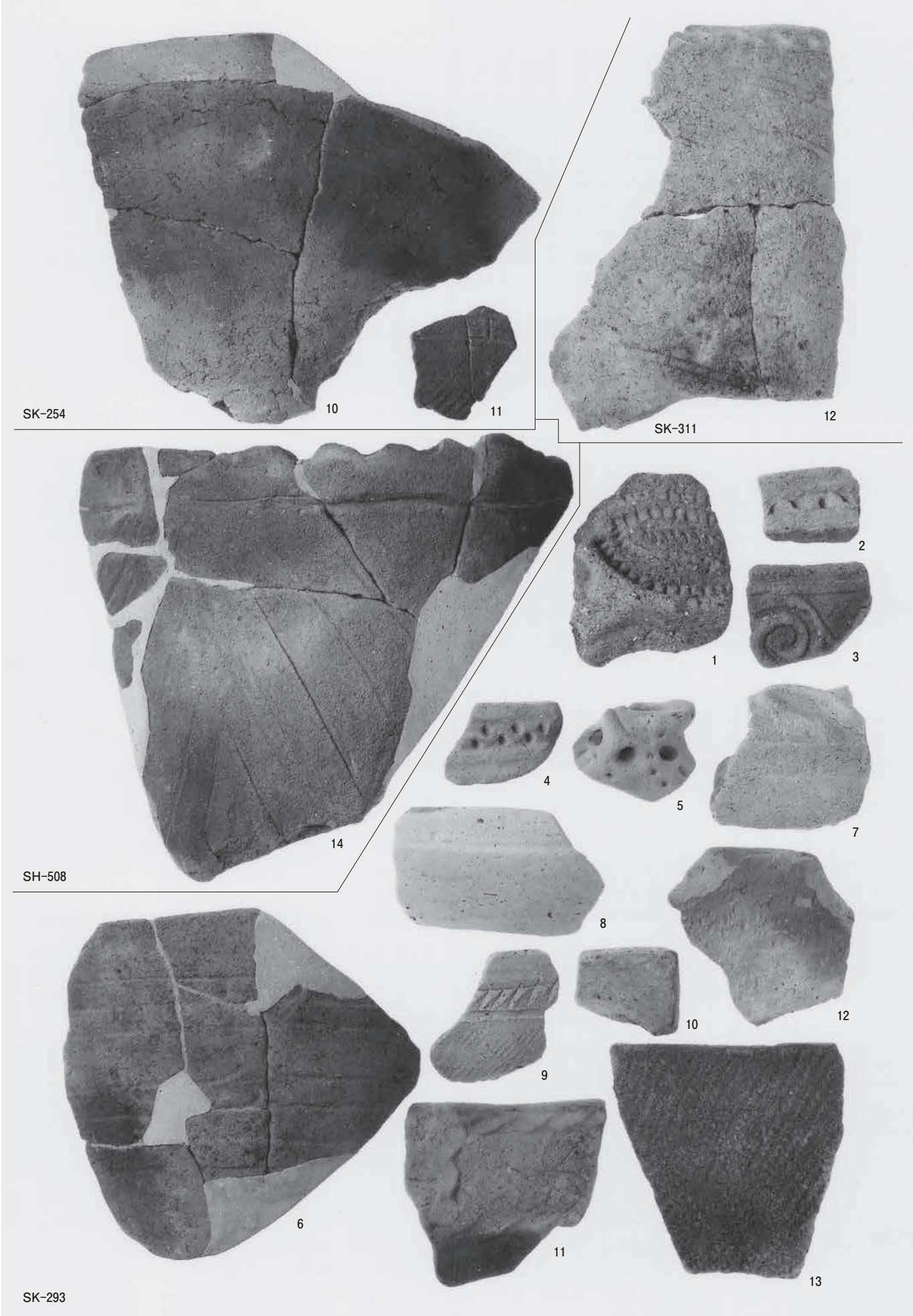
遺構出土土器(31)

久保堰ノ台遺跡２



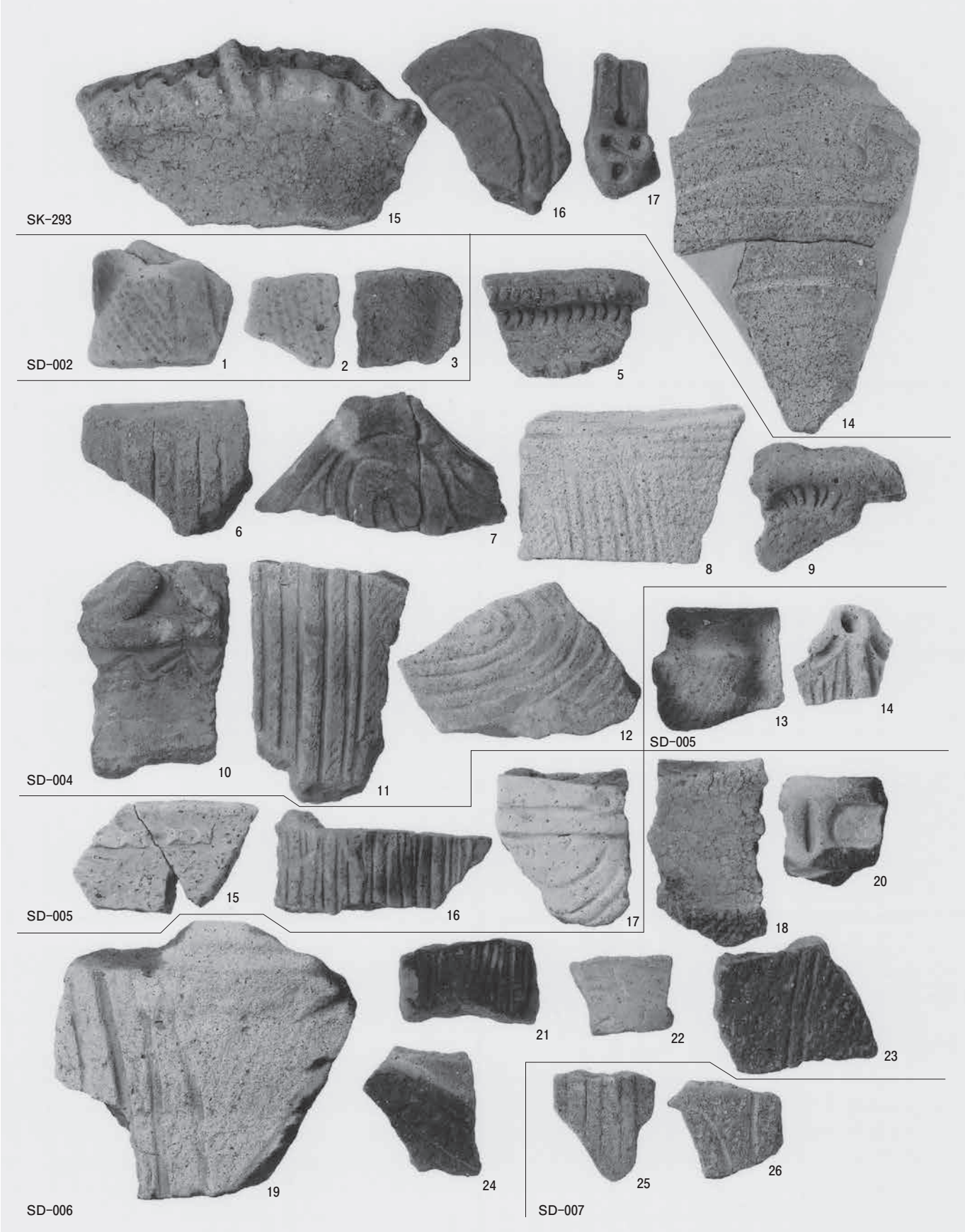
遺構出土土器(32)

久保堰ノ台遺跡２



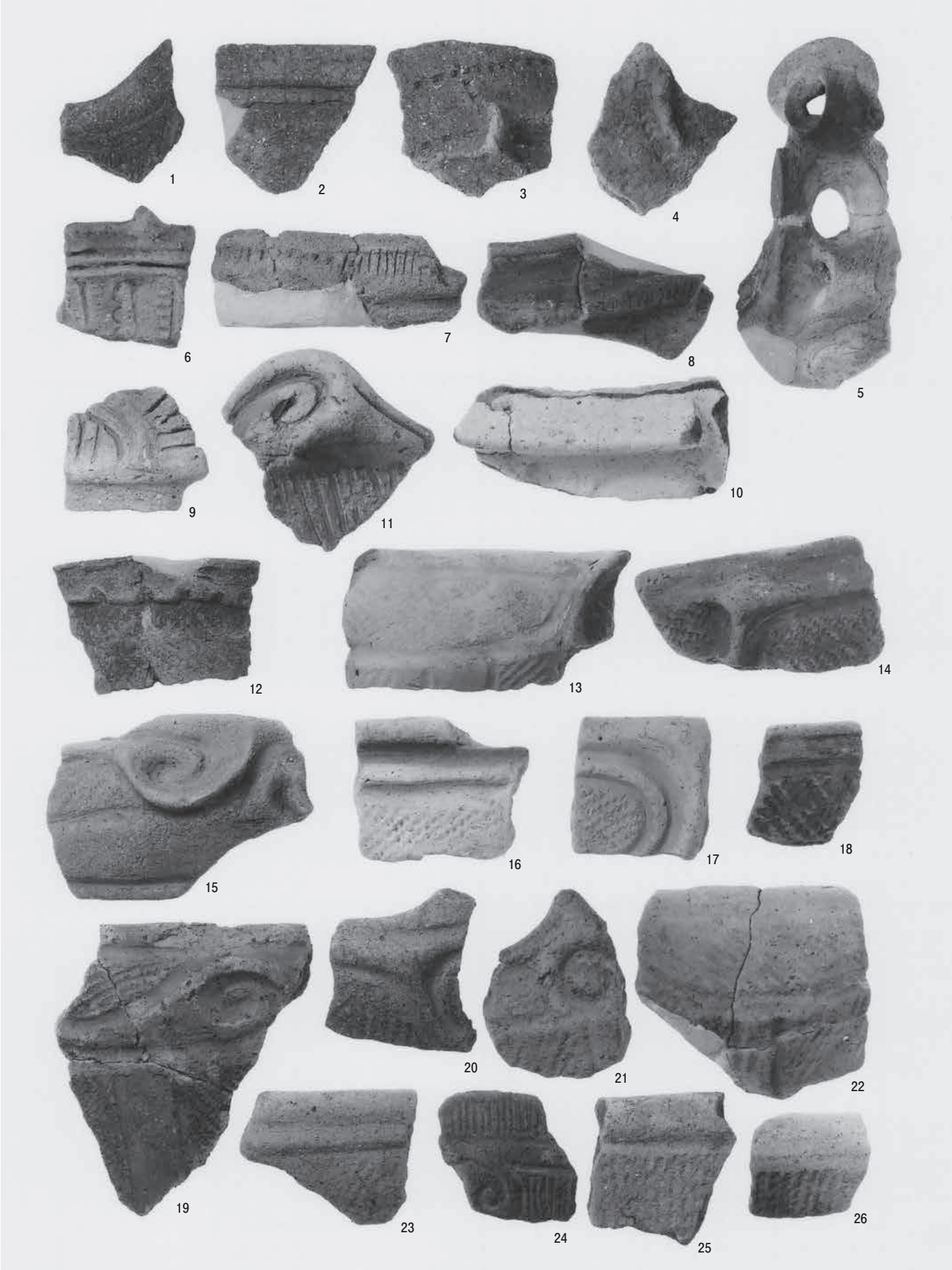
遺構出土土器(33)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土土器(34)

久保堰ノ台遺跡２



遺構外出土土器（西地区１）

久保堰ノ台遺跡２

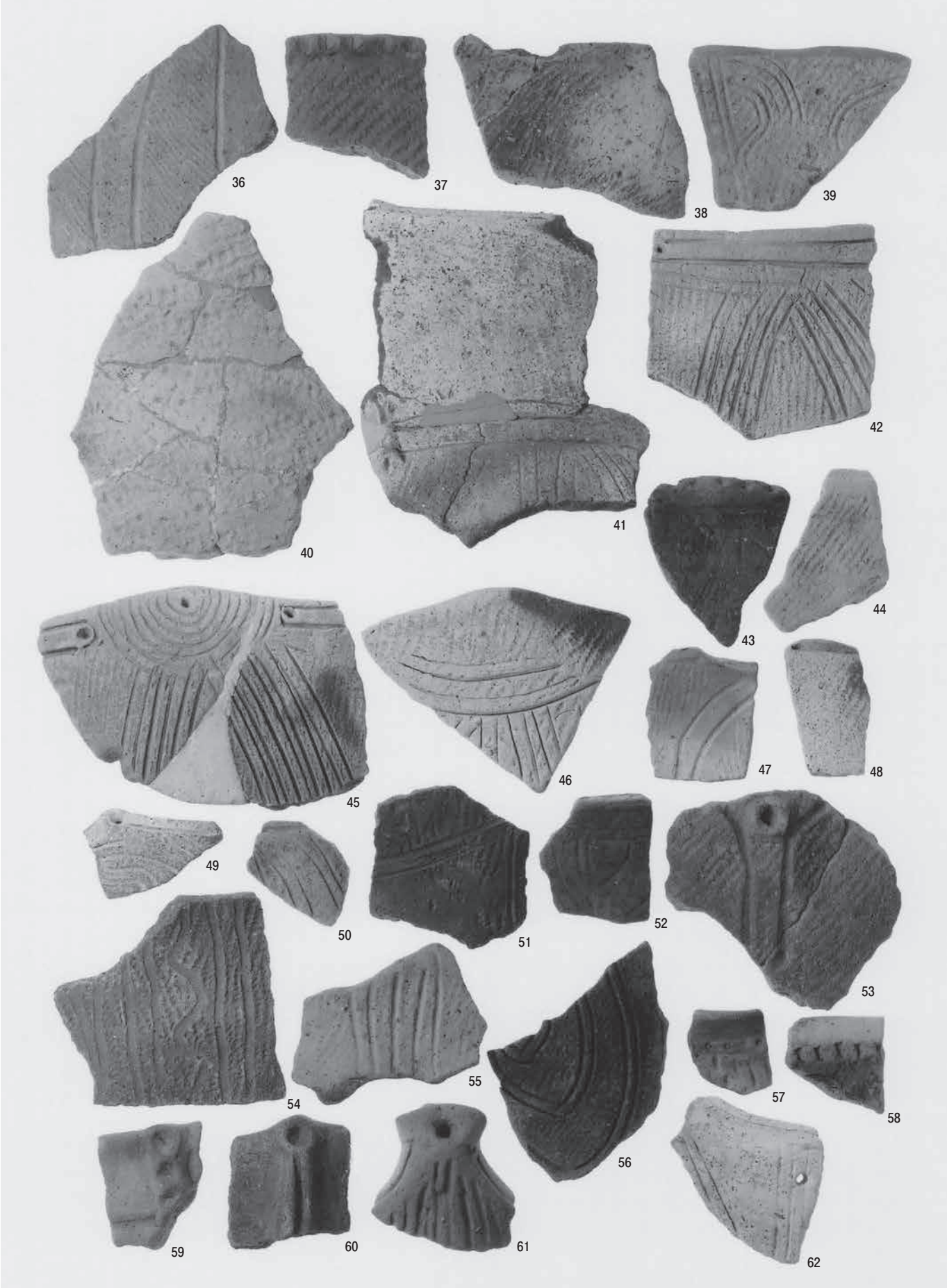
遺構外出土土器（西地区２）

久保堰ノ台遺跡２

遺構外出土土器（西地区３）

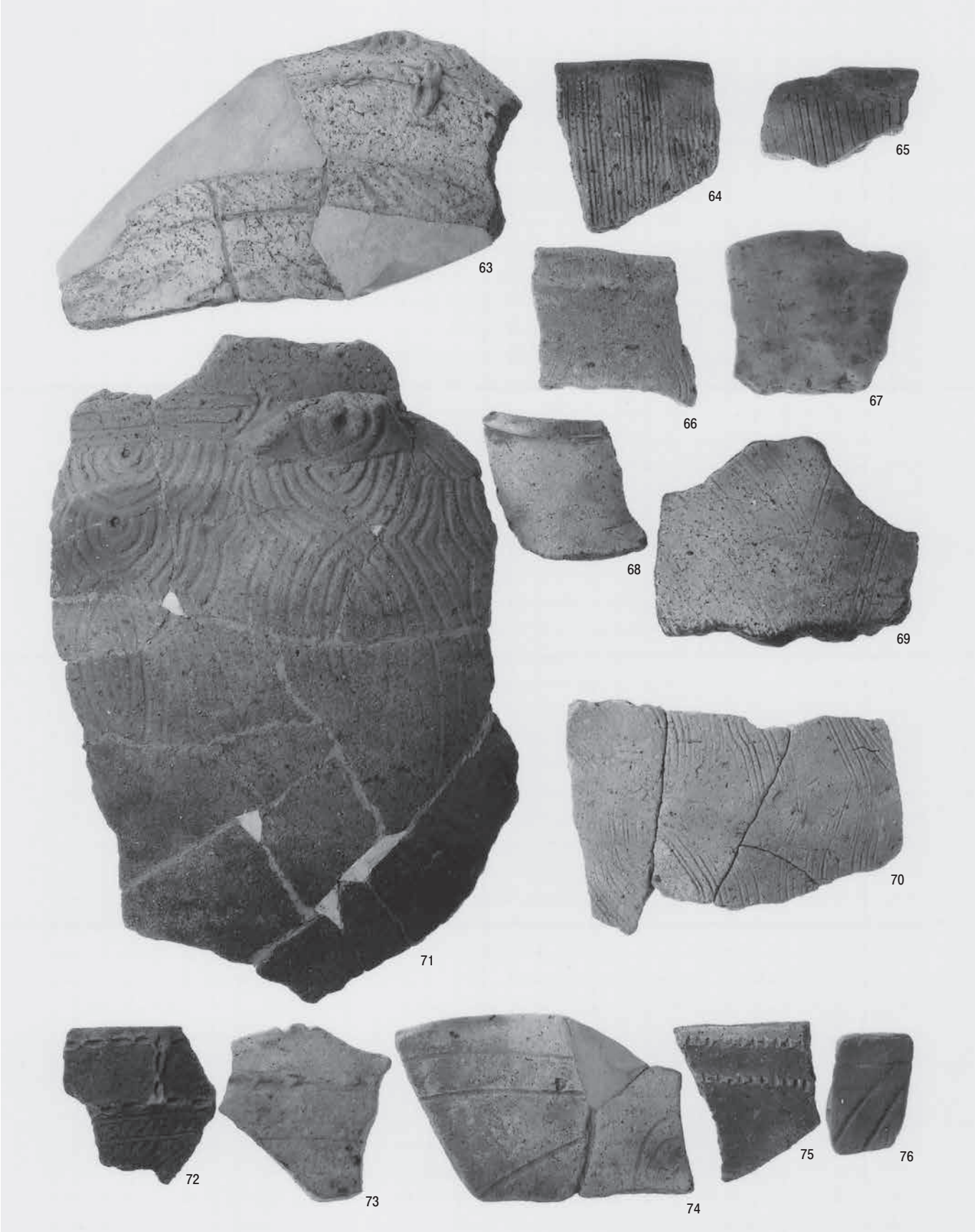
遺構外出土土器（東地区１）

久保堰ノ台遺跡２



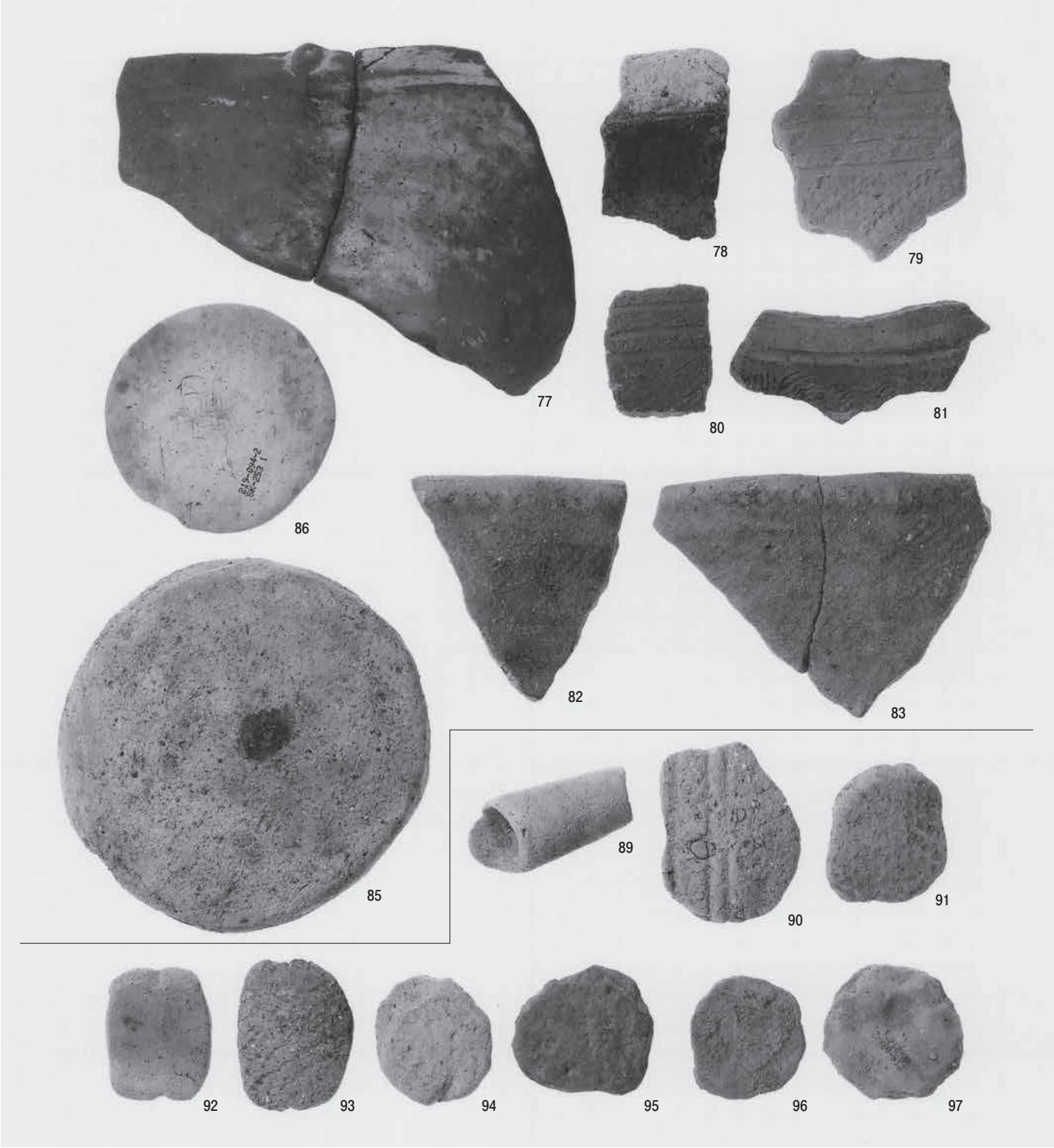
遺構外出土土器（東地区２）

久保堰ノ台遺跡２



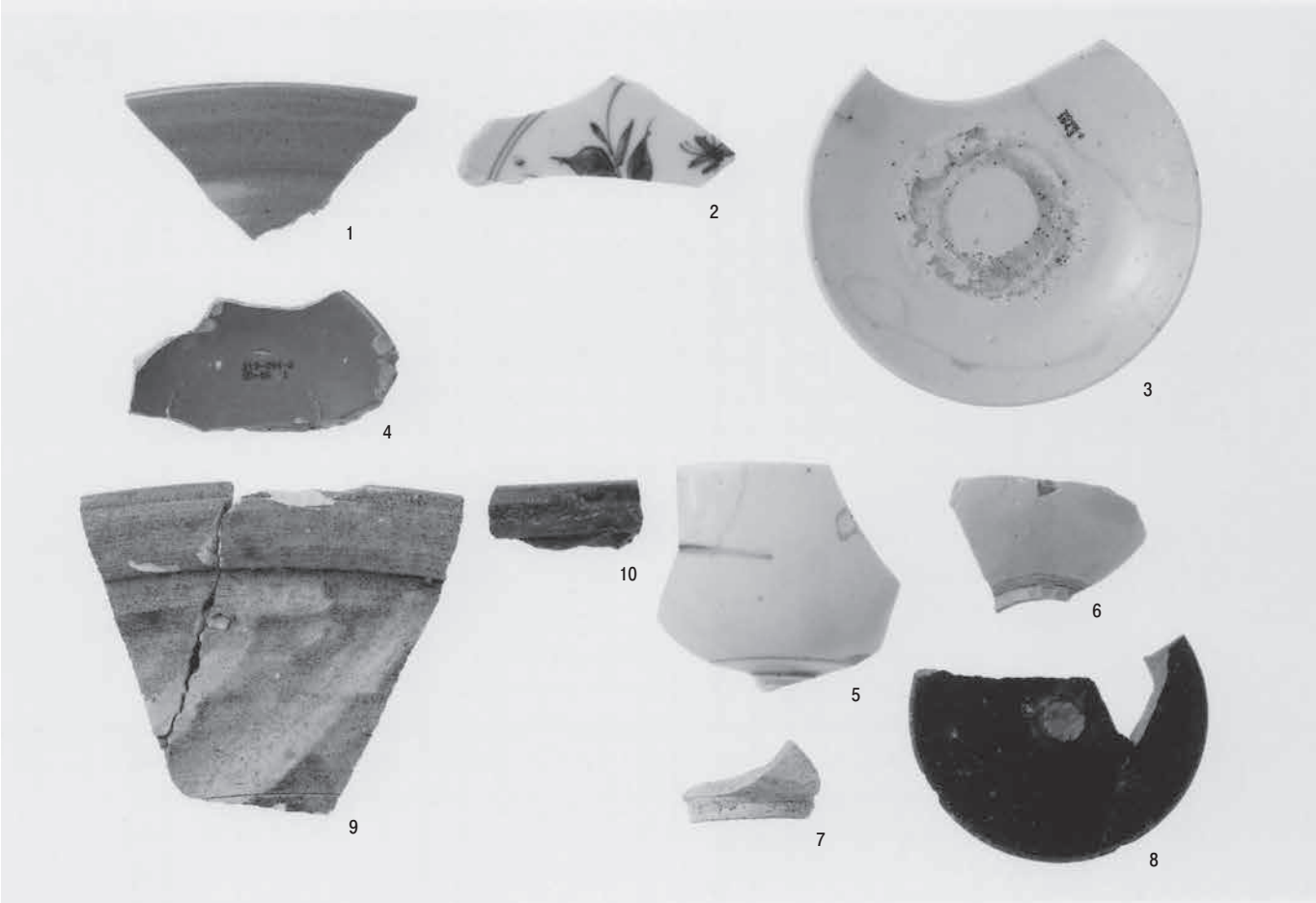
遺構外出土土器（東地区３）

久保堰ノ台遺跡２

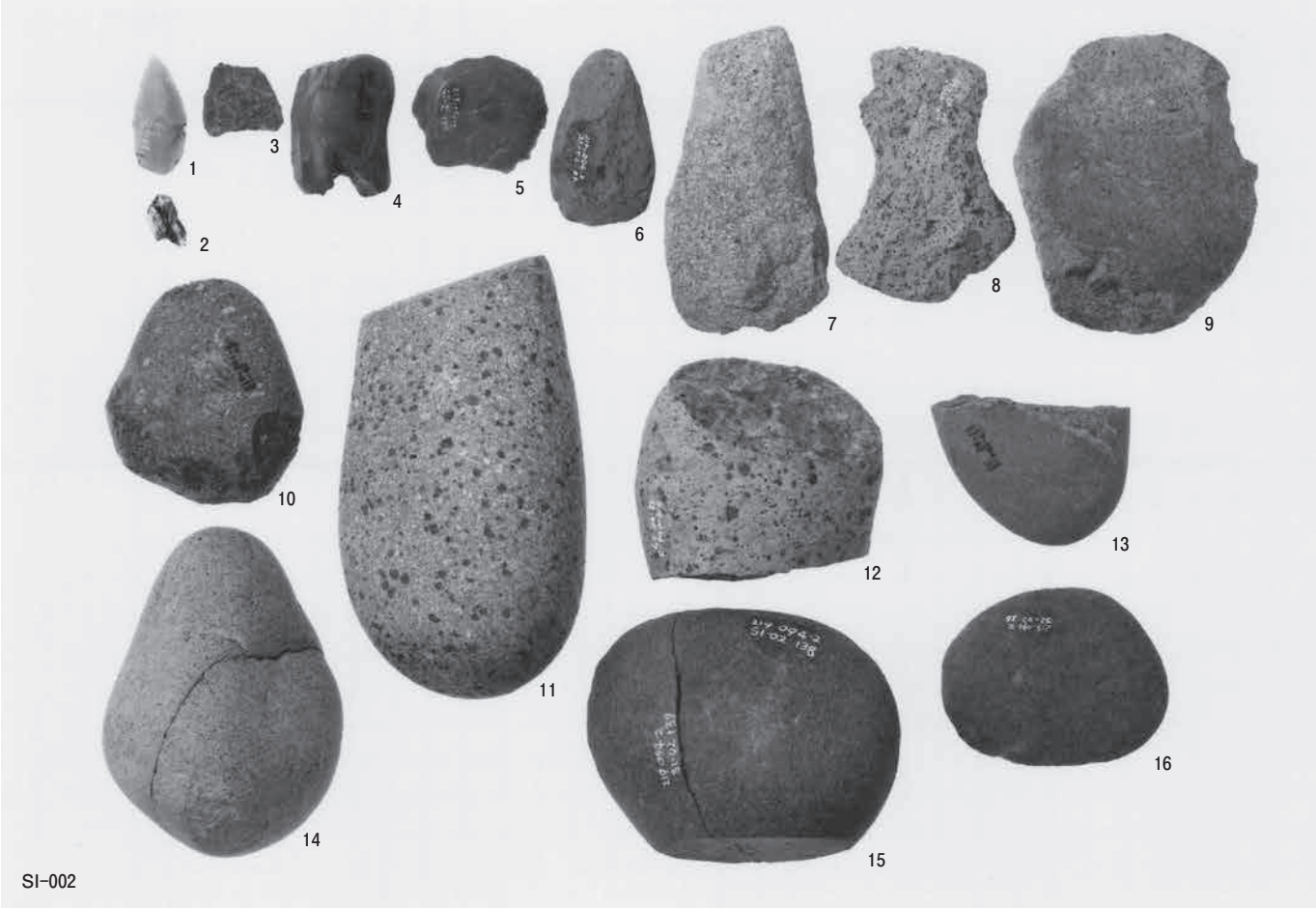


遺構外出土土器（東地区４）　遺構外出土土製品

久保堰ノ台遺跡２

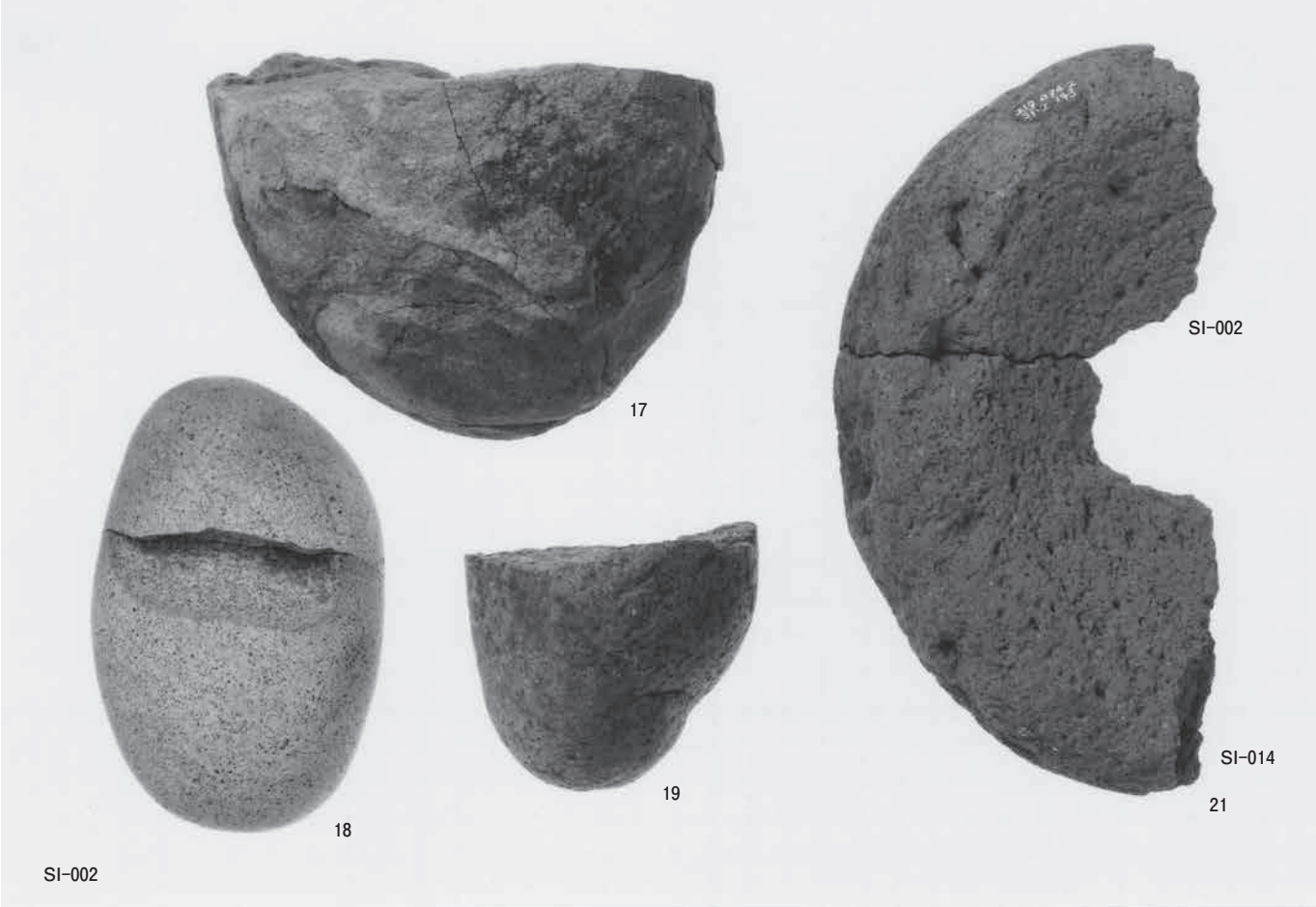


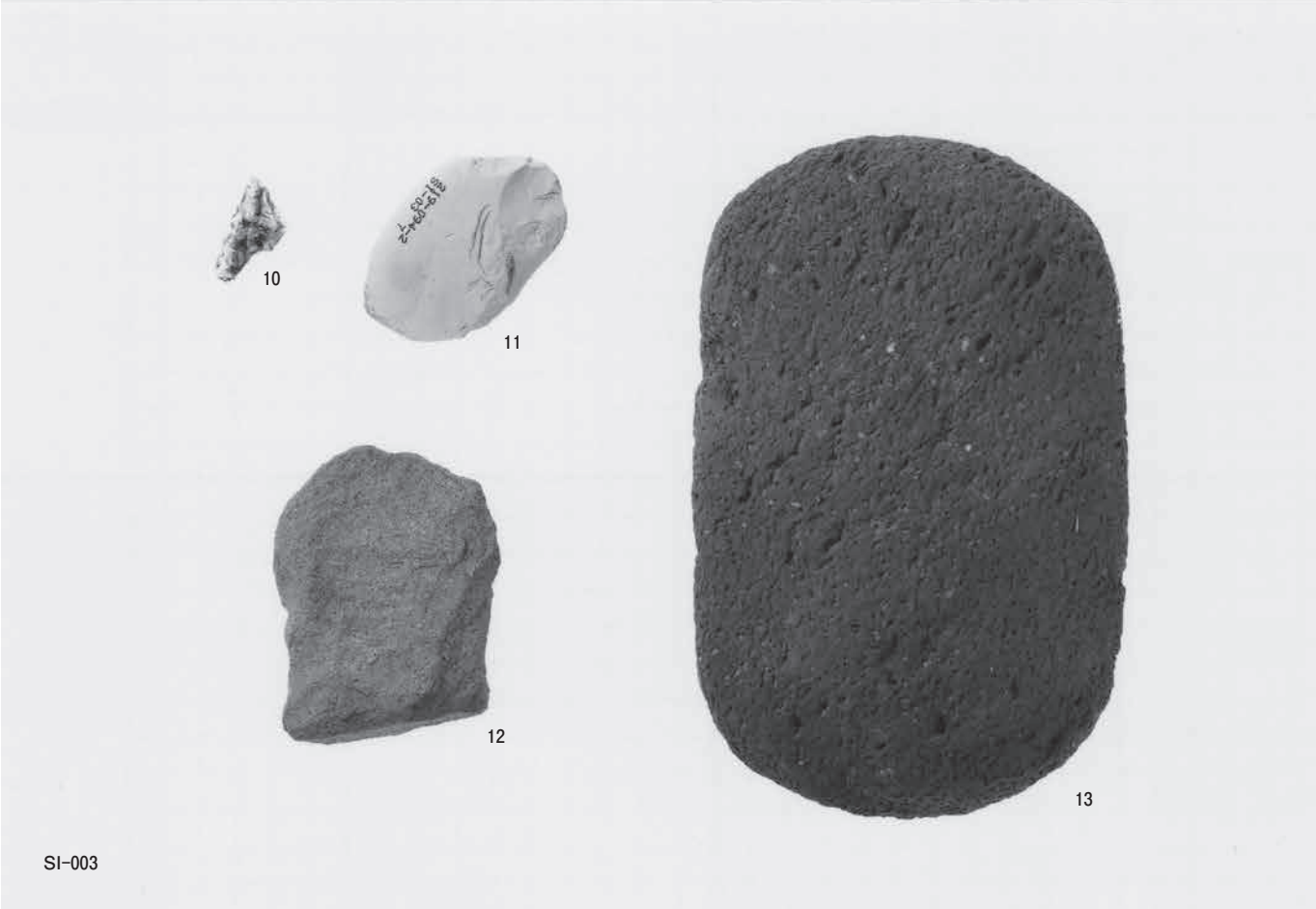
近世陶磁器



遺構出土石器(1)

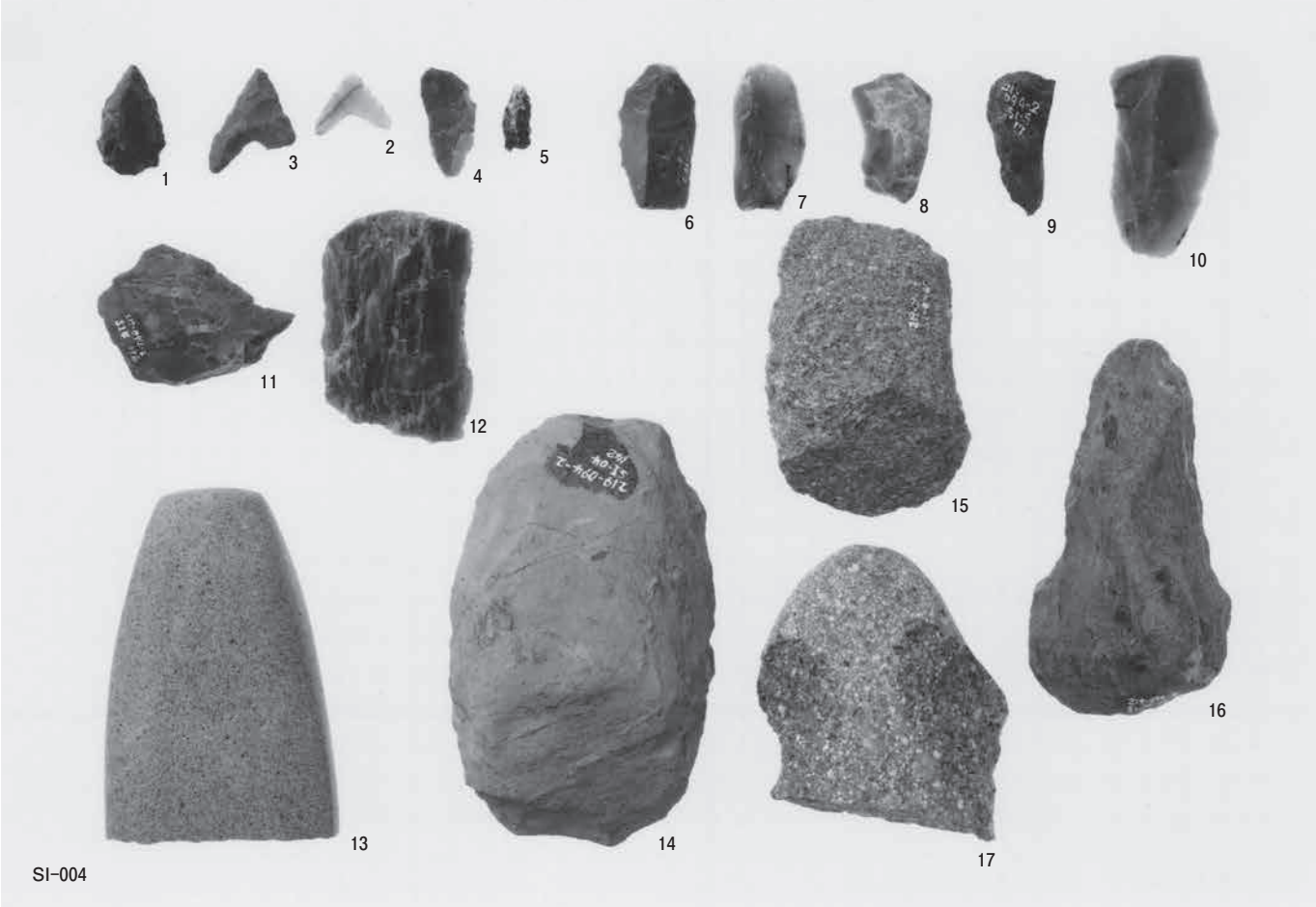
久保堰ノ台遺跡２

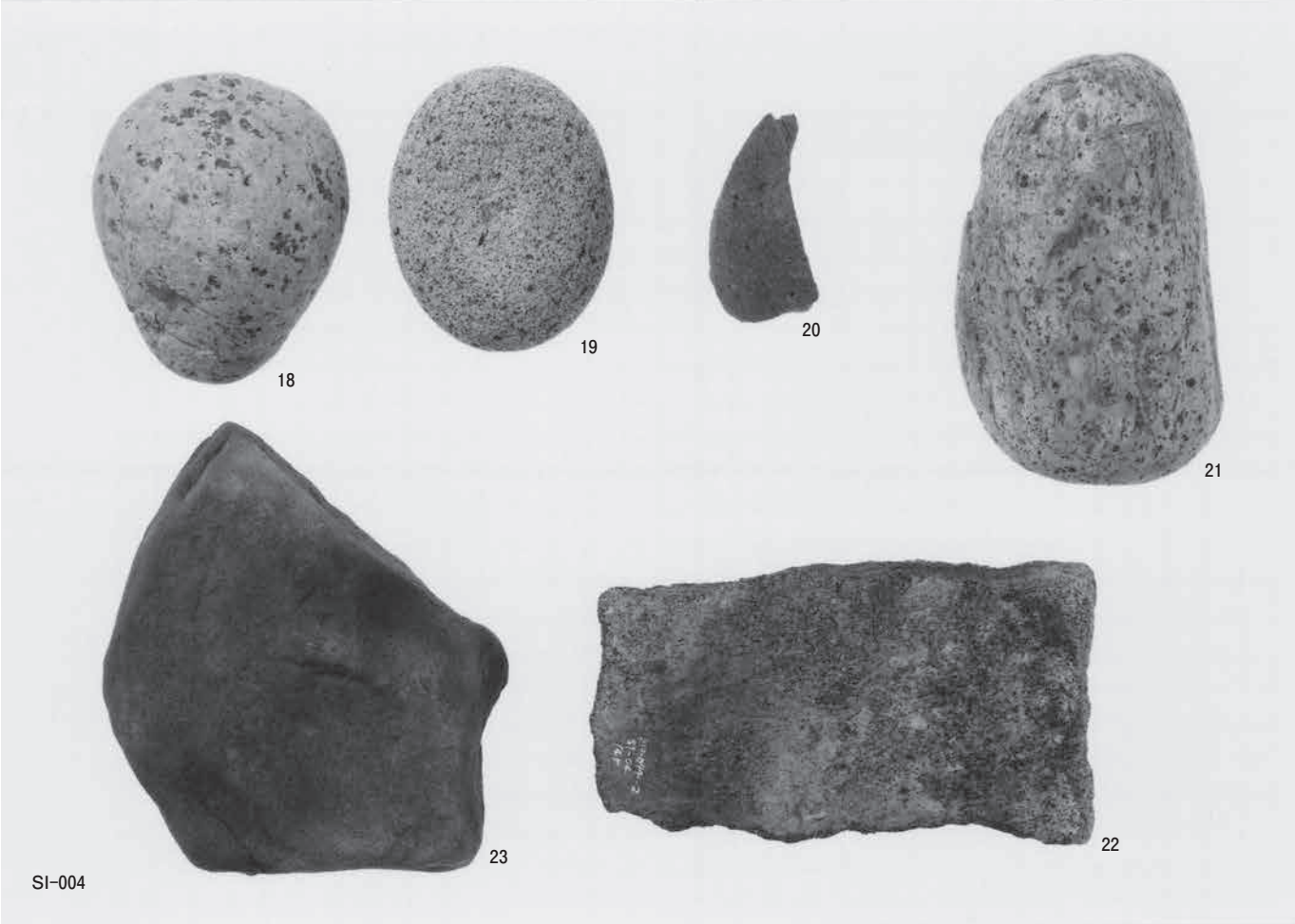




遺構出土石器(2)

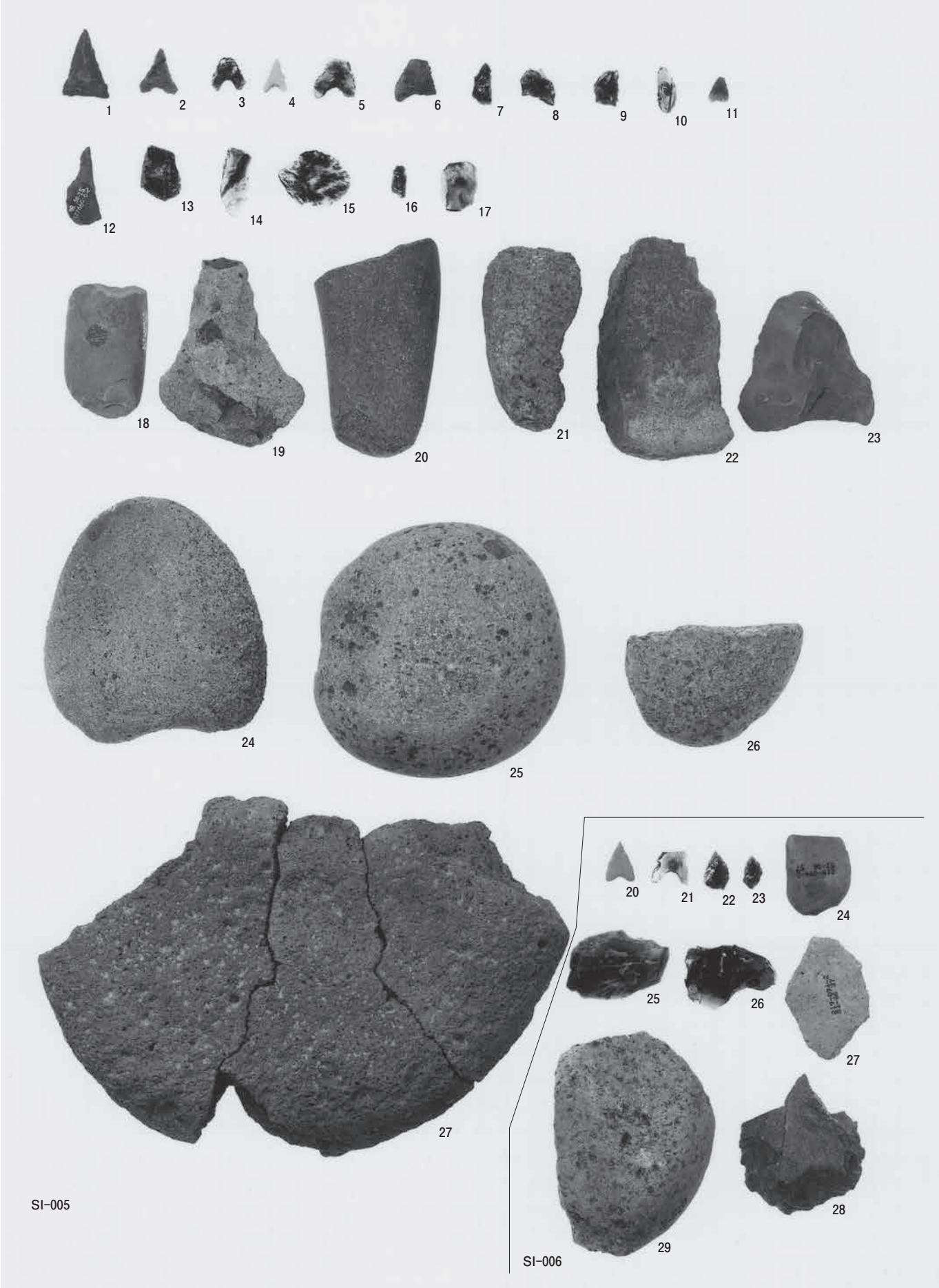
久保堰ノ台遺跡２





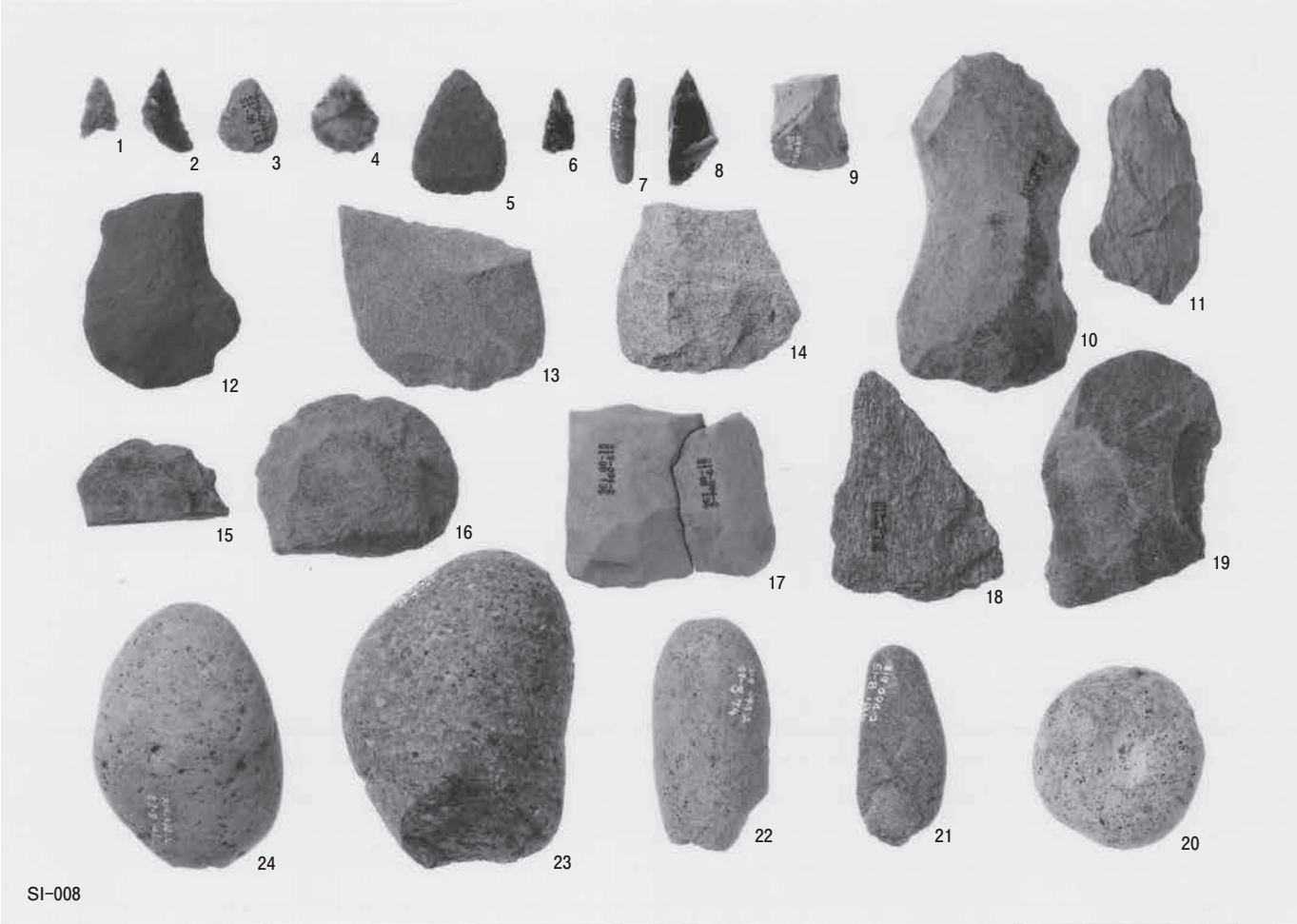
遺構出土石器(3)

久保堰ノ台遺跡２



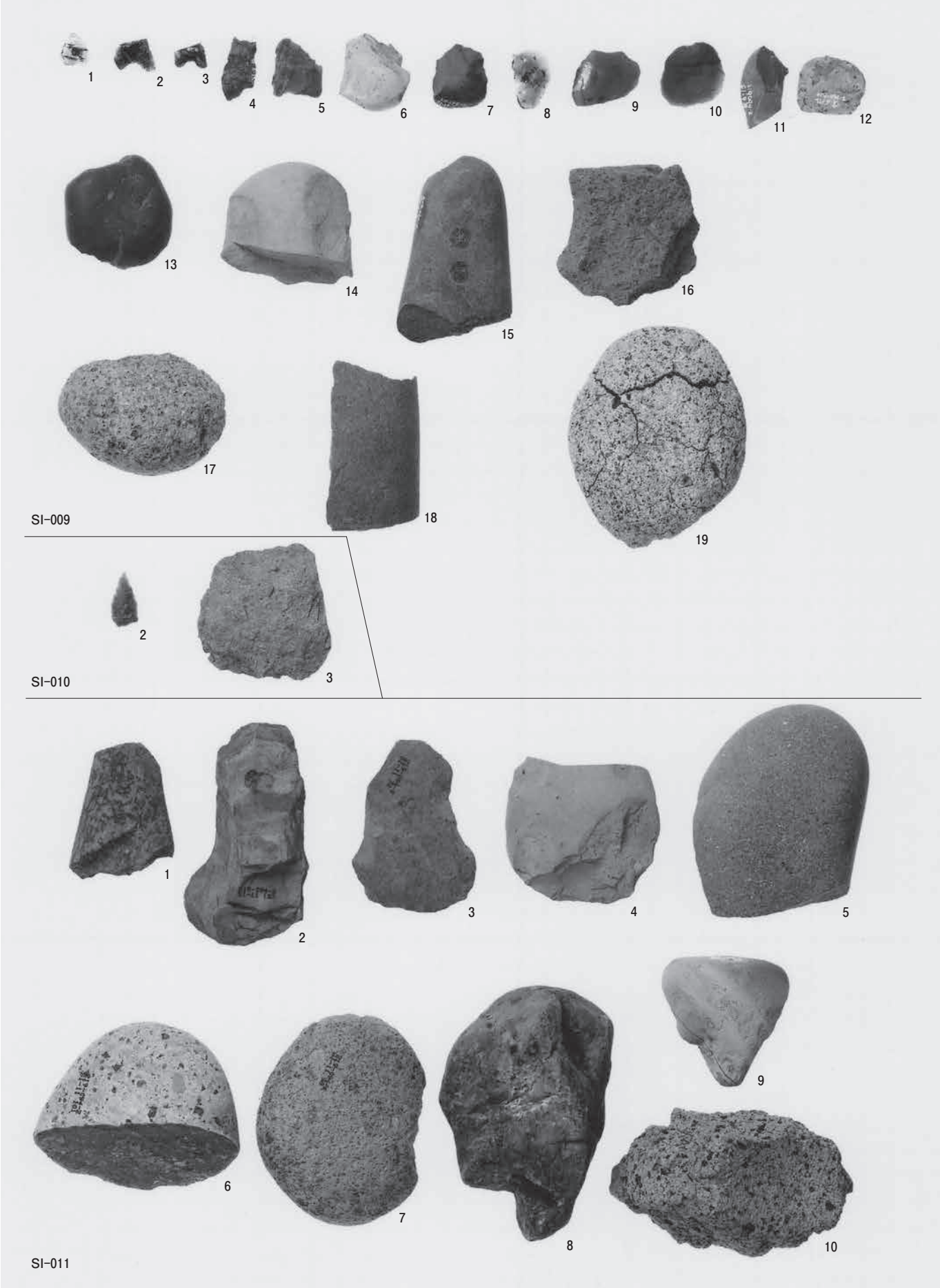
遺構出土石器(4)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土石器(5)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土石器(6)

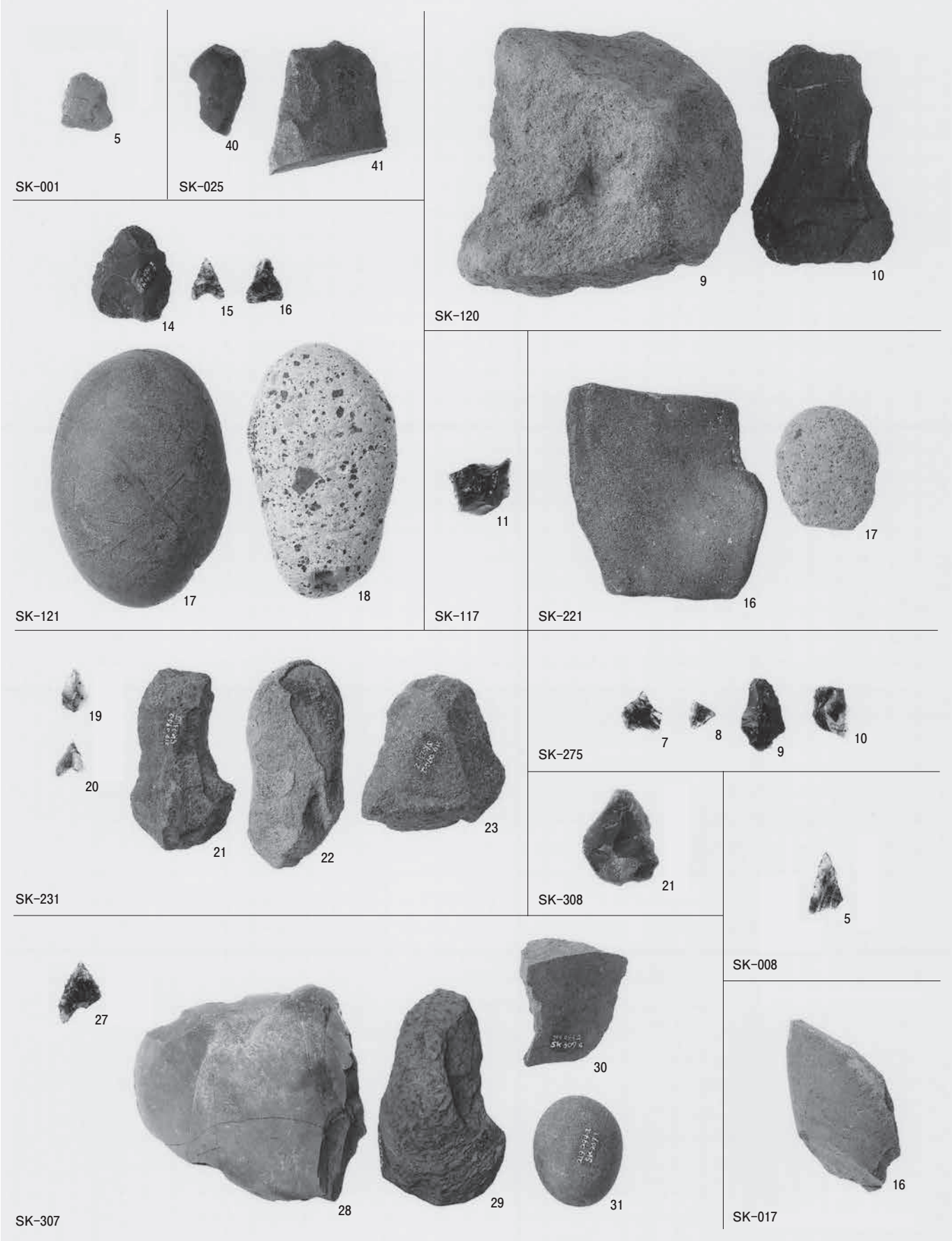
久保堰ノ台遺跡２

遺構出土石器(7)

久保堰ノ台遺跡２

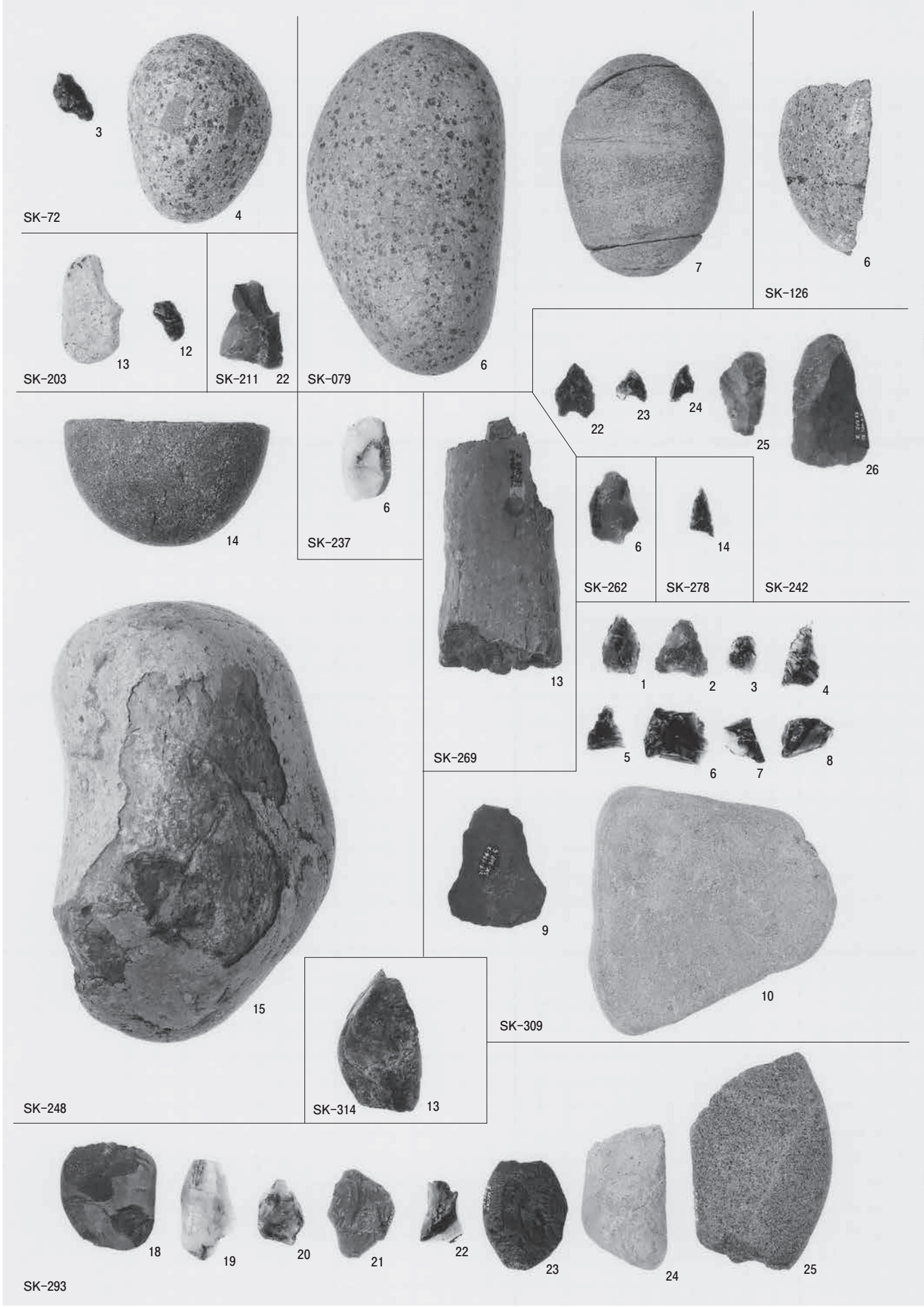
遺構出土石器(8)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土石器(9)

久保堰ノ台遺跡２



遺構出土石器(10)

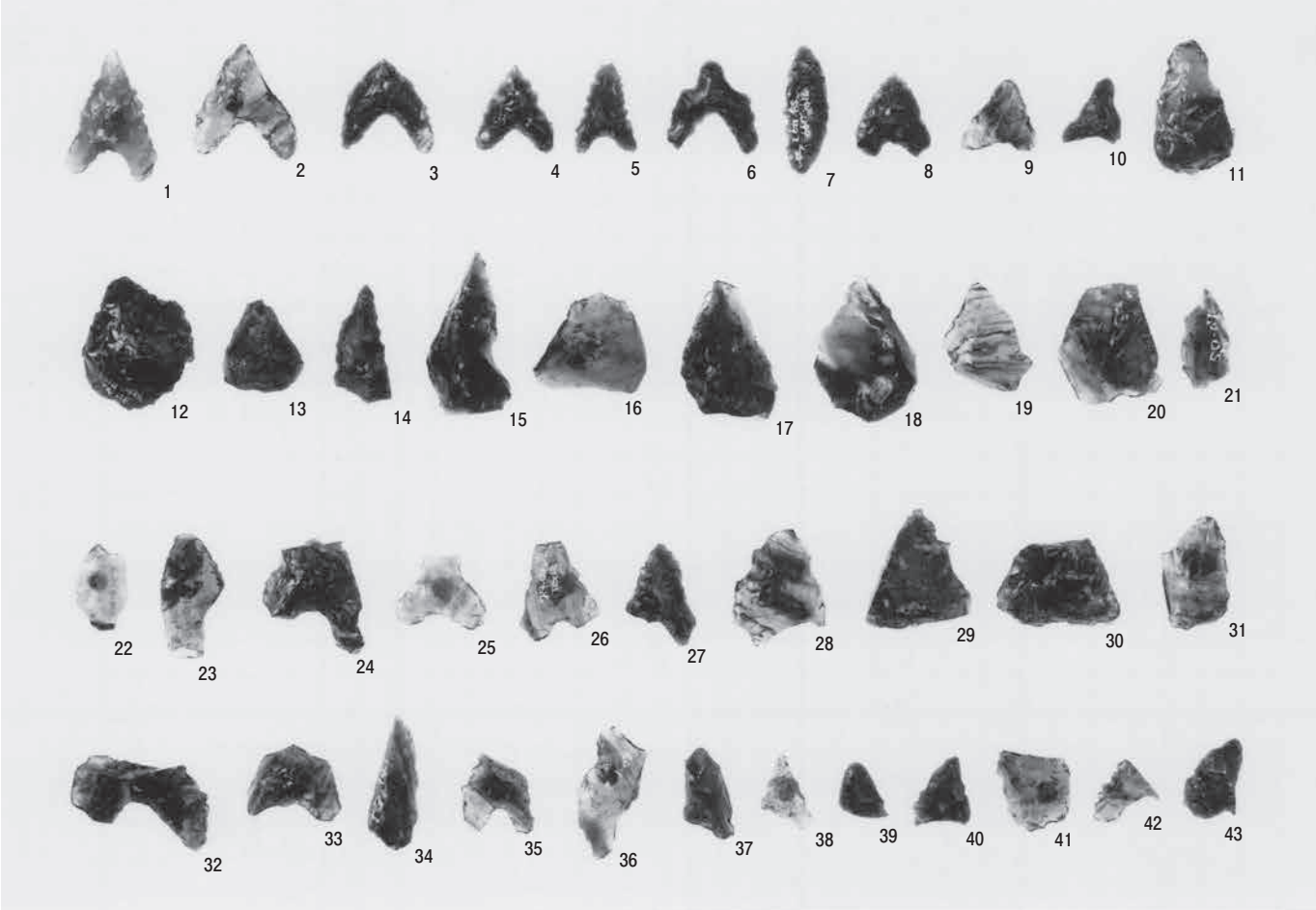
久保堰ノ台遺跡２

遺構出土石器(11)

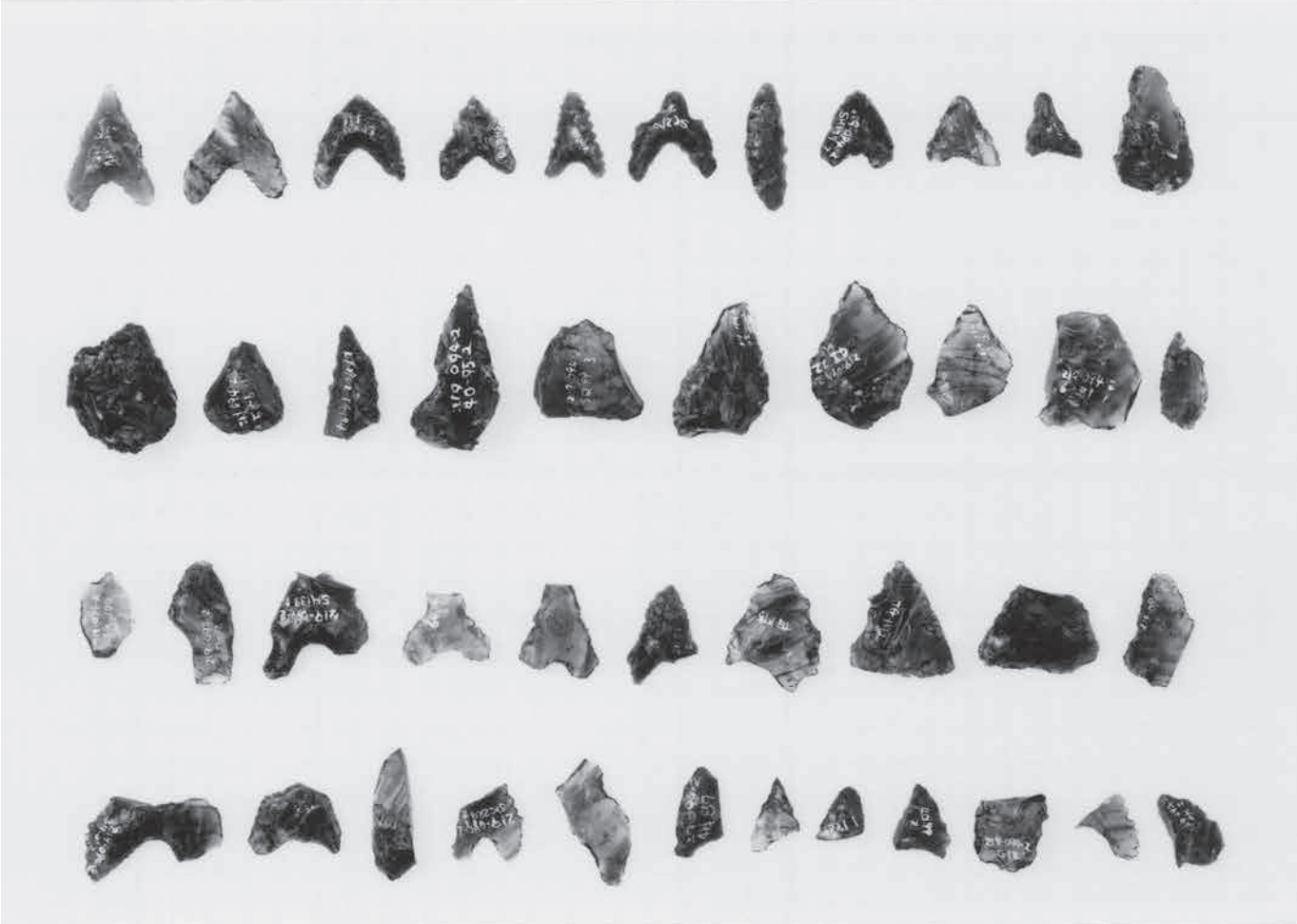
久保堰ノ台遺跡２

遺構出土石器⑫

久保堰ノ台遺跡２

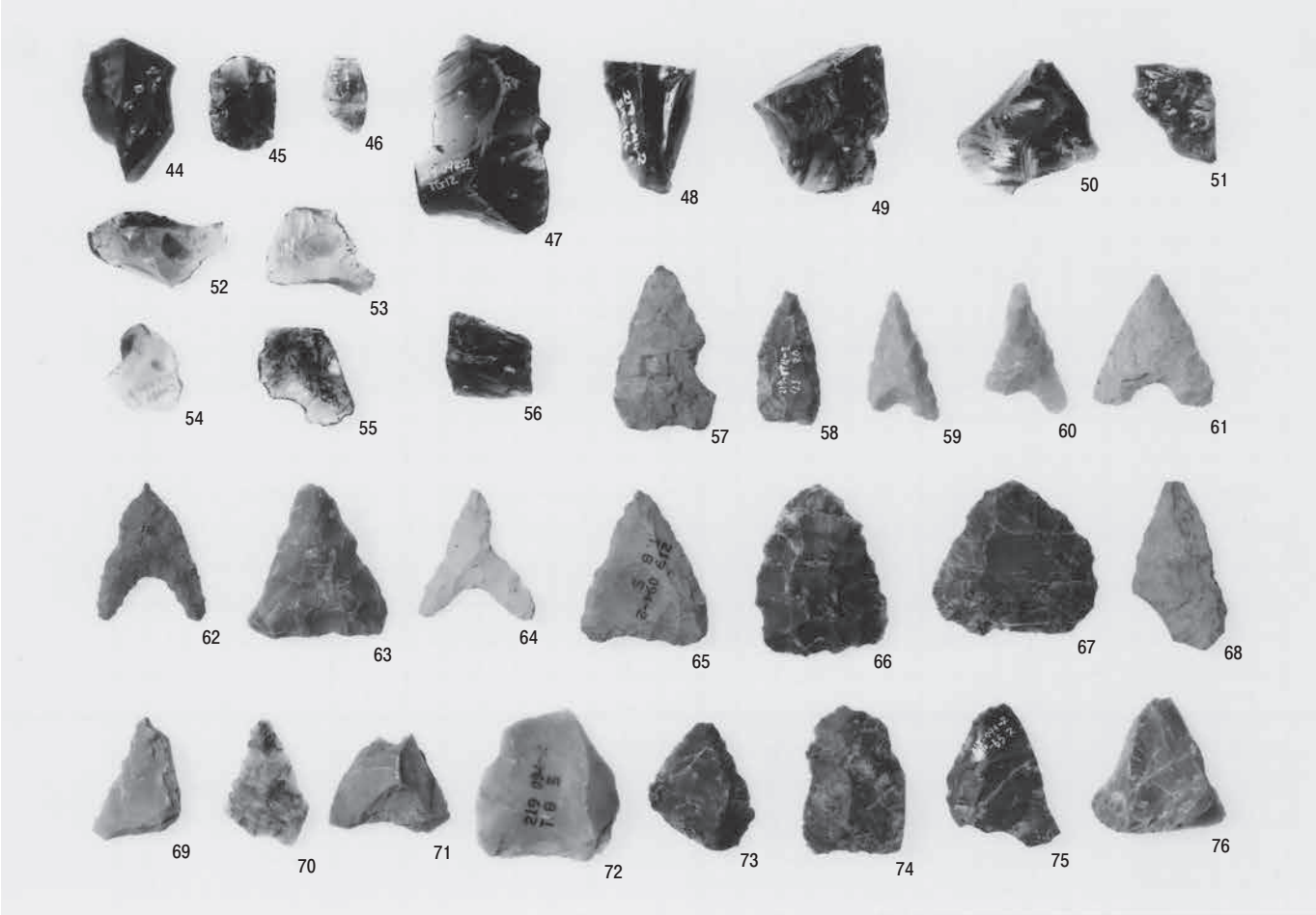


遺構外出土石器(1)－表

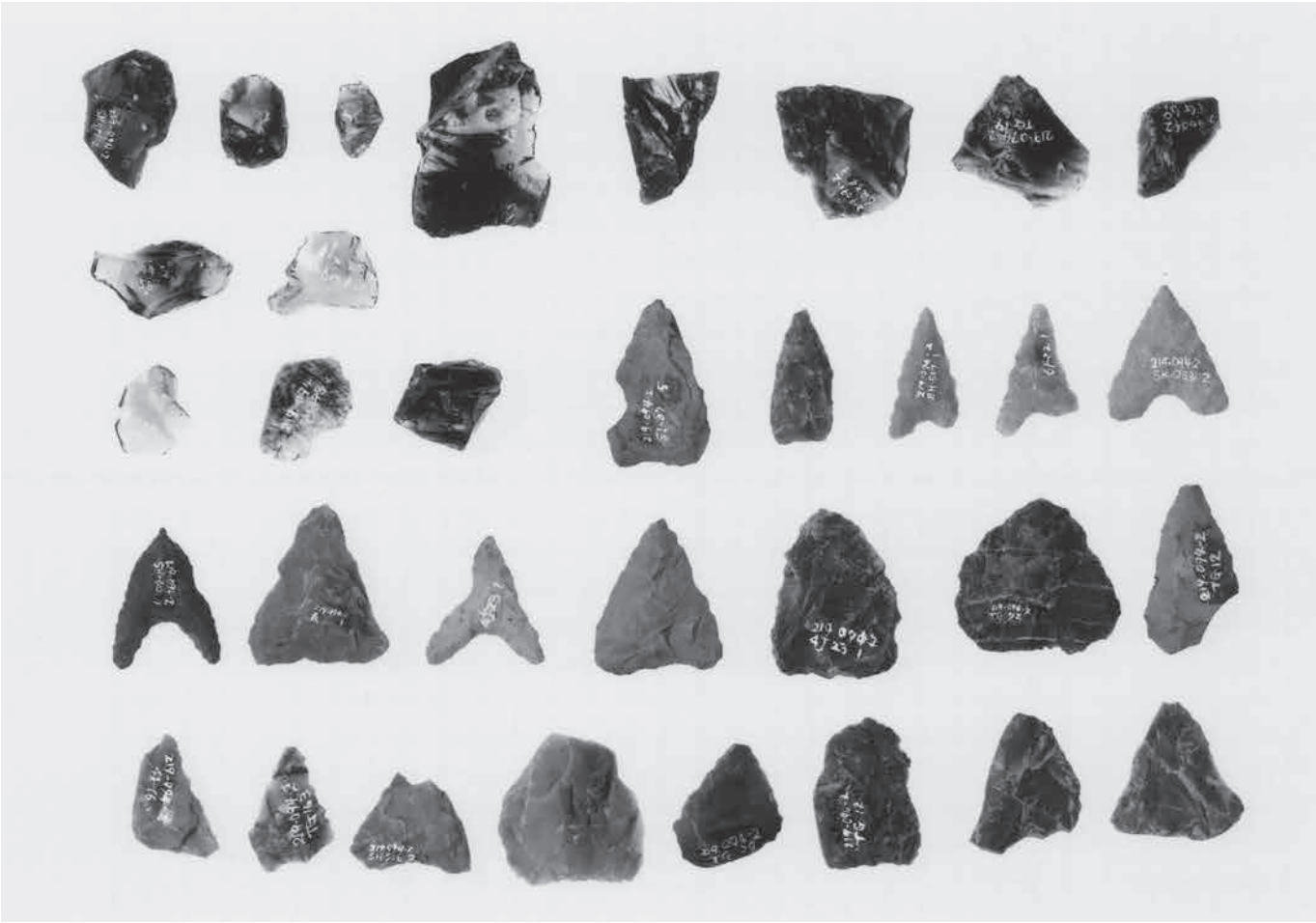


遺構外出土石器(1)－裏

久保堰ノ台遺跡２



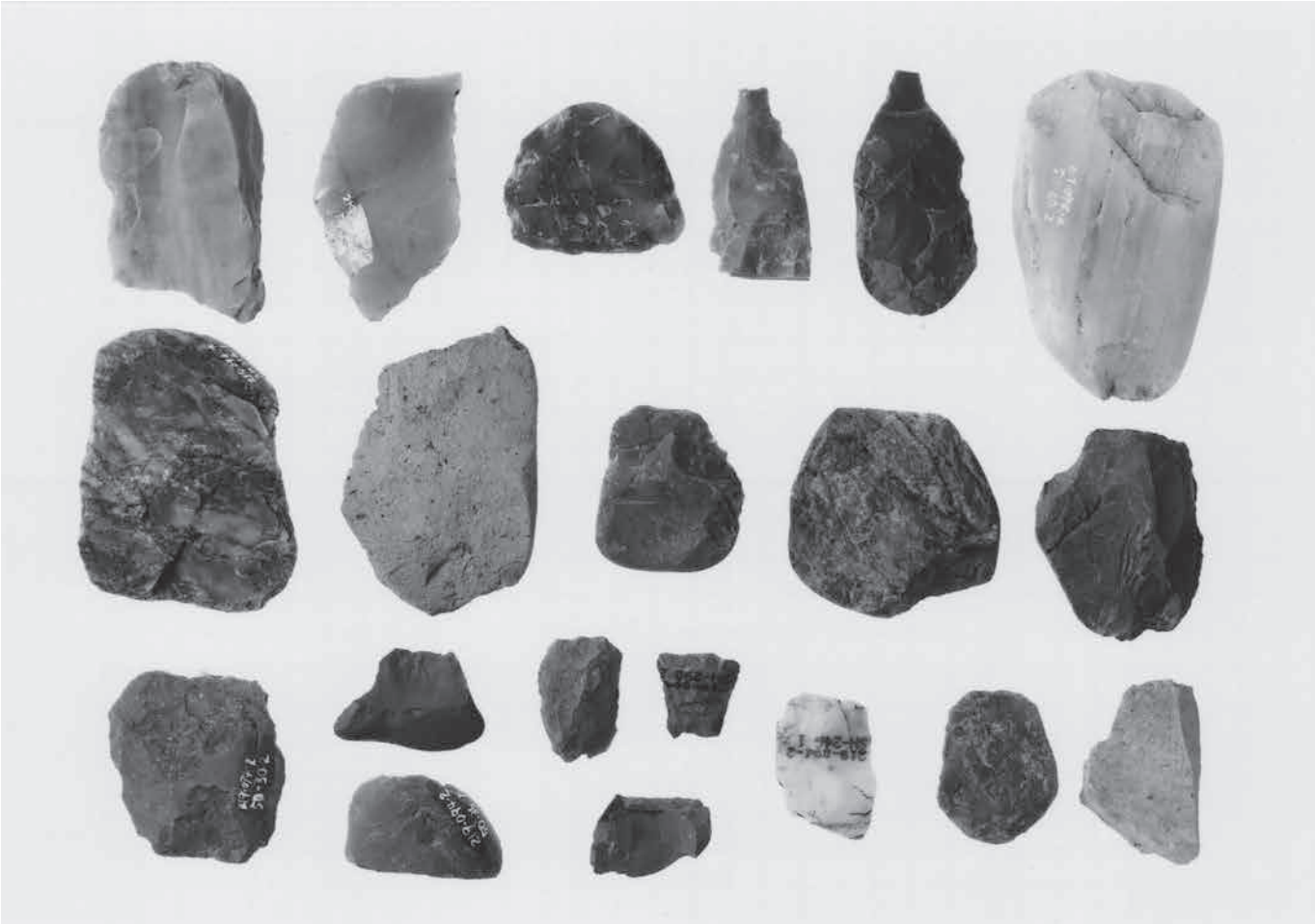
遺構外出土石器(2)－表



遺構外出土石器(2)－裏

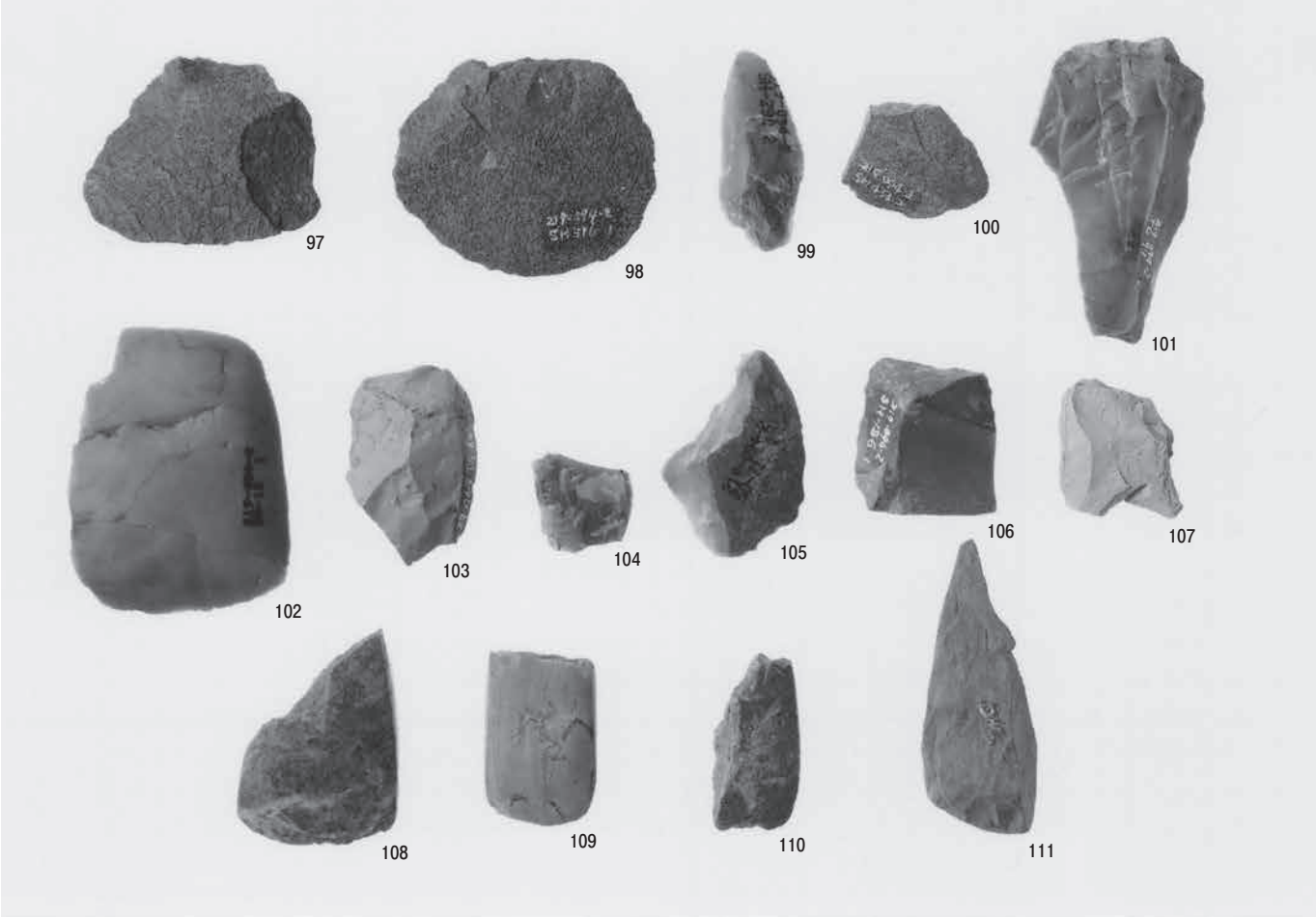
久保堰ノ台遺跡２

遺構外出土石器(3)－表



遺構外出土石器(3)－裏

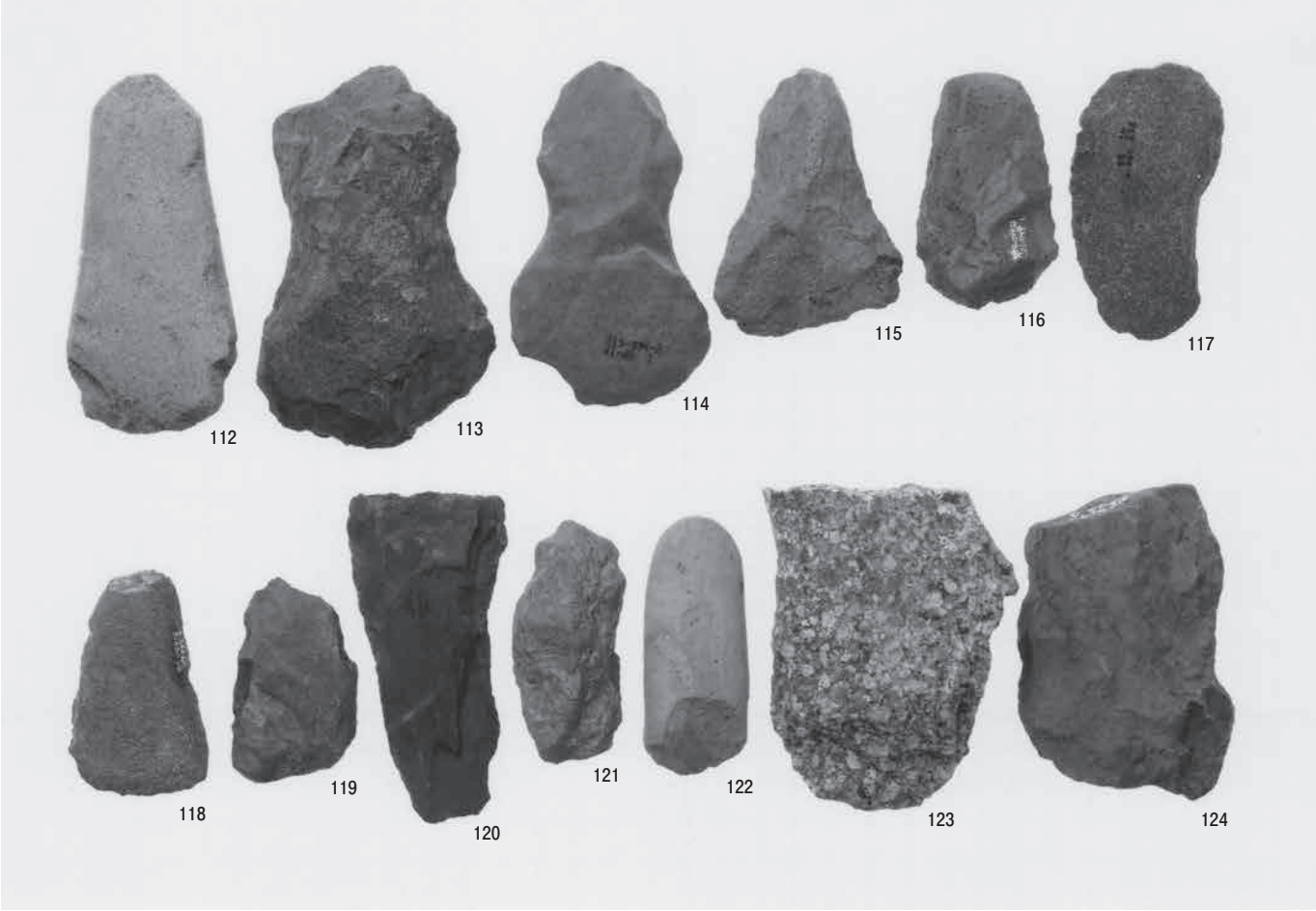
久保堰ノ台遺跡２

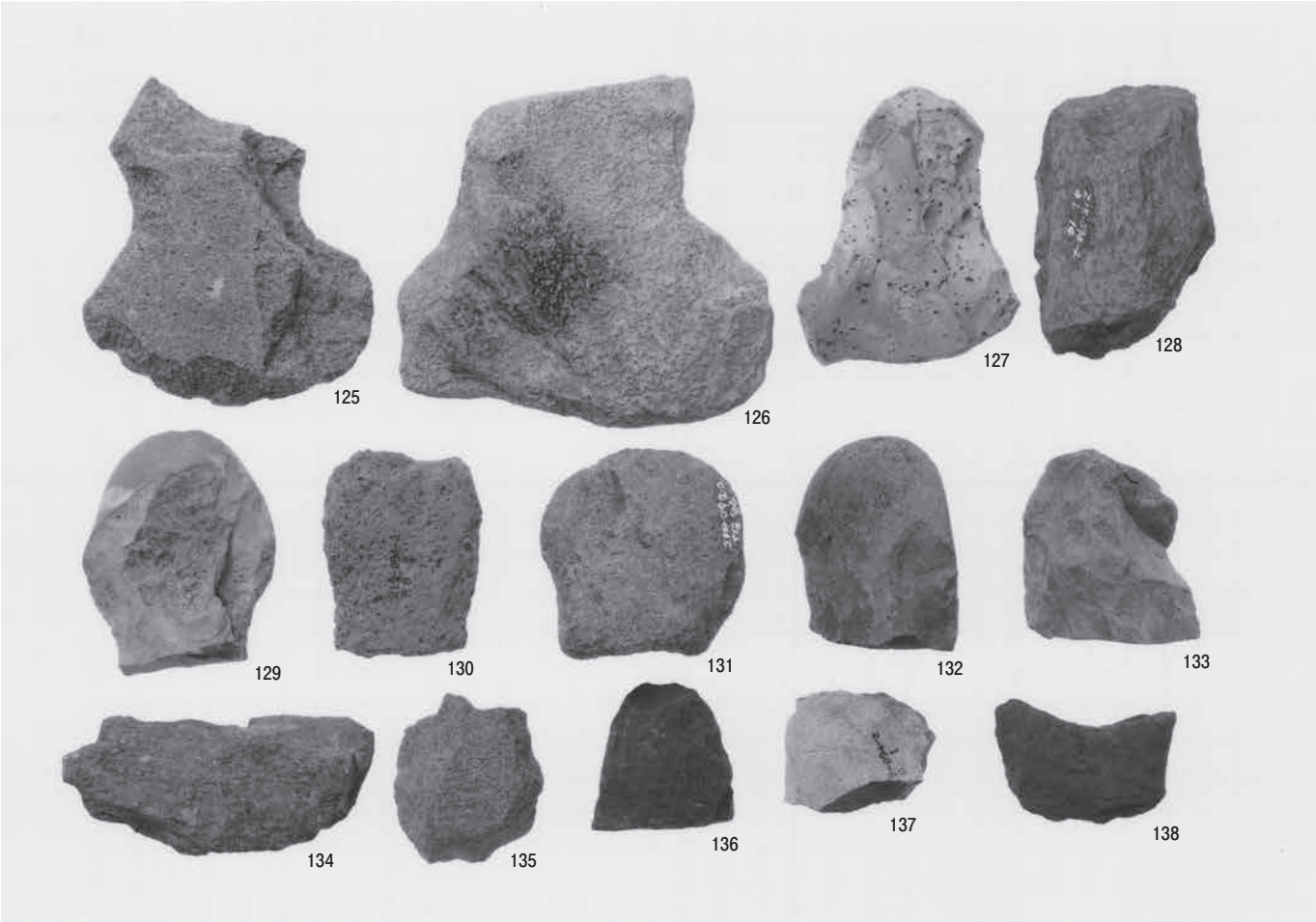


遺構外出土石器(4)－表

遺構外出土石器(4)－裏

久保堰ノ台遺跡２





遺構外出土石器(5)

久保堰ノ台遺跡２

遺構外出土石器(6)

久保堰ノ台遺跡２

遺構外出土石器(7)

久保堰ノ台遺跡２

遺構外出土石器(8)、石製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	しゅとけんちゅうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書
副書名	市原市久保堰ノ台遺跡１・２
巻次	29
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第751集
編著者名	古内　茂
編集機関	公益財団法人千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の２　TEL.043-424-4848
発行年月日	西暦2016年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
久保堰ノ台 遺跡１	千葉県市原市久保 字馬頭台48-1 ほか	12219	094-1	35度 21分 35秒	140度 ９分 15秒	20110411 ～ 20110622	4,000	圏央道建設に伴う埋蔵文化財調査
久保堰ノ台 遺跡２	千葉県市原市久保 字馬頭台48-1 ほか	12219	094-2	35度 21分 35秒	140度 ９分 16秒	20110720 ～ 20111212	9,500	圏央道建設に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久保堰ノ台 遺跡１	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡４軒、 小竪穴32基、 土坑約100基	縄文土器・石器	養老川中流域における中期集落の構成。
	包蔵地	近世	溝状遺構３条		
久保堰ノ台 遺跡２	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡16軒、 小竪穴26基、 土坑118基	縄文土器・石器・ 土製品	養老川中流域における中期・後期の集落構成と中期の石器製作跡
	包蔵地	近世	溝状遺構７条	近世陶磁器	

要約

本報告書に掲載した２遺跡は同一台地に隣接して位置しているため１遺跡として扱うことが妥当であるが、鉄道敷設に伴い台地が分断されていたため２遺跡として調査した。調査の結果、集落は縄文中期の阿玉台式期から後期の加曽利Ｂ式期まで存続しており、その主体は縄文中期中葉の加曽利ＥⅡ式と後期前葉の堀之内Ⅰ式であった。また中期の住居跡から黒曜石製の石器や剥片が多量に出土し石器製作の痕跡を確認することができた。さらに黒曜石の産地同定からその大半が伊豆諸島の神津島から持ち込まれたものであることが明らかになった。

千葉県教育振興財団調査報告第751集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書29

― 市原市久保堰ノ台遺跡１・２ ―

平成28年３月25日発行

編　　集　　公益財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　　国土交通省関東地方整備局
千葉国道事務所
千葉県千葉市稲毛区天台５丁目27番１号

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　　刷　　株式会社　正文社
千葉市中央区都町１－10－６